SEED: Athrun

白艸 亜久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＥＥＤ：Ａｔｈｒｕｎ

【Ｎコード】
Ｎ０６８８Ｒ

【作者名】
白艸　亜久

【あらすじ】
◆あらすじ◆
Ｉ ｓｕｒｖｉｖｅｄ ｔｈｏｕｓａｎｄｓ ｏｆ ｗａｒｓ ｗｉｔｈ ｍｙ ｆｒａｇｉｌｅ ｓｐｉｒｉｔ，
Ｂｕｔ ｉｆ ｙｏｕ ｓａｙ ｙｏｕ ｌｏｖｅｄ ｍｅ ｊｕｓｔ ｏｎｅ ｔｉｍｅ，
Ｉ ｃａｎ ｌｉｖｅ ｉｎ ｔｈｉｓ ｓｉｌｌｙ ｒｅａｌｉｔｙ.

●ご注意下さい●

◆主人公のアスランは女の子です。ついでに原作で結構エアーだったディアッカに「喰らえ！この愛！！」な二次です。

※※※目下多忙につき更新が滞っております。なにかございましたら活動報告コメ欄よりご連絡下さいませ※※※

序：　夢にて

別れの時を彩るように、コペルニクス空中庭園の桜並木の花びらが降り注ぐ。
生まれて初めて見るような桜吹雪だった。
「今度のお花見、行けなくなっちゃったわ」
ぽつりとアスランは言い、ややあって傍らの彼は言葉を返した。
「うん。……知ってる。母さんに聞いたんだ」
彼は俯いていた。
「そう」
アスランは自分の口から別れを切り出さずに済むことに感謝しながら、携えていたカバンの口を開く。
出発に間に合うように作りこんだ鳥ロボットは＜トリィ＞と鳴いた。
鶯を模したそれは自分の手から彼の手へと飛び移る。
「これは？」
彼の潤んだアメジストの眼差しが上がる。
「あげる。好きに名前をつけてあげて」
「ありがとう、アスラン……」
彼はそれきり沈黙する、だから自然アスランが話す側になった。
「戻ってこいだなんてお父さまは心配しすぎなんだと思う。地球とP．L．A．N．T．で戦いになんてならないわ、きっと」
「うん、そうだよね」
そんなに今にも泣きそうな顔をされたら、こちらまで泣きそうになる。
だからアスランは敢えて明るい声を上げた。
「それにそのうちキラもP．L．A．N．T．に来るんでしょ？待ってるから」
「うん」
紫色の眼差しを潤ませて彼は口許を引き締めて、ひとつ鼻をすすっ

た。

「行くから、待っててよアスラン」

＊＊＊＊＊

ふとアスランは目を開いた。

眼前の時計は起床時間5分前を指している。

夢――もう3年も前の出来事を何故今更思い出すのだろう。

起き上がれば何故か目頭が滲んでいて、アスランは指先で目元を拭う。

キラは、元気だろうか。

1：　ヘリオポリスにて

ヘリオポリス、オーブ首長国連邦の保有する工業コロニー。
虚空に浮かぶ円筒形の人工物と小惑星の合体したそのコロニーがモニターには映し出されている。
投下用カプセル内部に座す少年たちの中にアスラン・ザラはいた。
とうとう作戦が始まる、とアスランはかすかに溜息をついた。
同僚たちの会話がすぐ傍らから聞こえてくる。
「……でも、やっぱり、相手は中立国ですよ」
躊躇い混じりに一番年少のニコル・アマルフィが嘆かわしげに言う。
「じゃあ中立国だってのに地球連合のモビルスーツ作ってるのはどうなんだ？　……ほらよ」
ミゲル・アイマンから投げ渡されたドリンクパックを受け取り、ラスティ・マッケンジーは「さんきゅ」と口許を笑わせた。
「そりゃあ、やっぱ駄目っしょ」
「思い知らせてやるだけのことだ」
イザーク・ジュールはふふっと笑った。
「ん？　どうしたよアスラン。黙りこくっちゃって、もしかして怖くなった？」
含んで笑うディアッカ・エルスマンが話題を振って、うっすらと目を開けたアスランは端的に答える。
「いいえ」
「ああ、脱走兵狩りでの疲れでも出たんだろ、でもこれが終われば休暇だ、休暇。あと一息よ」
ミゲルが気を紛らわすように軽口を叩く。
そう、怖くなったわけではない。
ただ気乗りしないだけ……とうとう本格的に地球連合との戦いに参入するという状況に。
けれど選択の余地などない。兵士はただ唯々諾々と命令に従うこと

を求められる。
アスランは目を閉じる。
地球とP．L．A．N．T．で戦いにならない、と信じていた――
だが地球とP．L．A．N．T．の戦いは始まってしまった。
そして膠着状態が続いて、もう11ヶ月になる。
だから自分たちもそこへ加わるのだ、ただそれだけのこと。
『投下開始、各員衝撃体勢。天の加護のあらんことを』
アナウンスとともに赤く浮かび上がる計器、モニターが点滅する。
そして投下される浮遊感が全身を覆った。

……もし、もしこれを知っていたら、あの時私はどういう言葉を彼に投げかけたろう？

一瞬の疑念、そしてアスランは追憶を振り払うように目を開く。
轟音の只中、皆が沈黙していた。
モニター表示と周囲の殺気立った気配から目標投下地点が間近に迫ったことをアスランは知る。

やがて着地の衝撃があった。
そしてすぐにシートベルトを外し、ハッチを開けてカプセルから飛び出す同僚たちの後を追う。
作業で幾度となく気密服で虚空に出たが、時折震えるような恐ろしさを虚空は齎してくる。
気密服の中で自分の呼吸音だけが響く。
岩陰に潜む十数名の中でアスランは静かに予定時刻を待つ。
腕時計のカウントを計る。

……来る。

そして突然、覗き込んでいた排気口内部に張り巡らされた無数の赤い監視レーザーがふいと消えた。
監視装置が切れたらしい、予定通りに。

時間だ。

アスランはその淵に手を掛け、黒い排気口の闇に吸い込まれるように先頭切って入る。
するりと排気口に潜り込み後に続く同僚たちの気配を確認する。
やがて通気口を覆う網の眼下、白い巨艦の姿が見えた。
それを眺め下ろしてアスランは唇を噛む。
地球連合軍の最新型特装艦！
なんというシロモノを造っているのだ、中立を謳う国のコロニーが！
全員が追いつくのを待ってアスランは振り返る。

イザーク班ディアッカ班は右、ニコル班ラスティ班は左、私達はこのまま直進――手合図でそれぞれに手分けする。

頷いた面々、そして瞬時に皆がそれぞれの方向へと四散する。
柱、天井。
何の感慨もなく携えていた自爆装置を取り付けてセットする。
時間を告げる黄色く浮かび上がるカウンター表示が動き始めたのを確認して、またアスランは次の柱へと動く。
あの艦が投入されれば、また同胞の被害は甚大なものになってしまうだろう、ならばその前に爆破するに越したことはない。

＊＊＊＊＊

外部からの爆撃を受けて地鳴りがする。
モルゲンレーテ・ヘリオポリス工場を一望できる丘の上に降り立って、少年たちは息を潜めるようにしてかがみこんだ。
案の定、工場は騒然としている。
巨大コンテナを積載したトレーラーの群れがモルゲンレーテ正門から溢れ出てくるさまが見えた。
「はん、クルーゼ隊長の言った通りだな」
スコープを覗いていたイザーク・ジュールが淡々と言って発信機を押した。
これで場所は確定だ……港口を突破したミゲル達がじきやってくるだろう。
「つつけば慌てて巣穴から出てくるってね」
ディアッカがやれやれ、と肩をすくめる。
「ああ。ったく馬鹿なもんだな、ナチュラルなんて」
連中は地球で這い回ってればいいんだ、と馬鹿にしきった口調のイザークをちらりとアスランは見やる。
「侮りすぎると怪我をするわ」
「何ィ？」
アイスブルーの眼差しが睨み、アスランは微かに眉間を潜めた。
自分も苛々している、思わず挑発してしまった。
「喧嘩してる場合じゃないだろ、来たぞ！」
ラスティの声とともに、モルゲンレーテ工場区のあちこちで爆発が起きた。
炎上する施設、その狭間に港を突破したＭＳが攻撃を開始する様が見えた。
被弾した車両が爆発し、爆風が搬送作業中の人員を襲う。
始まりの合図を契機に、混乱と轟音の只中へと、Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．兵の一団は侵入を開始した。

立ち向かってくる工員にはそれよりも早く、逃げ惑う工員を狙う時も躊躇いなく引き金を引く。
飛散する血飛沫。
「無駄弾を使わないで、ディアッカ」
アスランは憮然として言う。
「積極的自衛。生かしておいて狙われたら損じゃん！」
走り抜けて、ディアッカは射撃ゲームのように次々に撃ち殺していく。
ひとつ溜息、アスランは腰の手榴弾のプルタブを抜き放ってトレーラーに投げ込む。
一瞬後大爆発に紛れて悲鳴が聞こえた。
「貴様ァァァッ！！」
飛び出してきた兵士を躊躇なく射ち倒し、歩み寄って踏みしめて、無造作にアスランはトリガーを引く。
断末魔の間すらなかった。
手に掛けたのは一体何人目だろう？　――全てがリアリティのない現実だ。
「運べない部品と工場施設は全て破壊だッ！！　３機か、あとの２機はまだ中か？」
無駄のない動きでトレーラーに取り付いたイザークが鋭い視線でモルゲンレーテを見遣る。
「私とラスティの班で行くわ。あなたたちはこの３機を先に持って帰って」
アスランの言葉にイザークの眼差しがちらりと動いた。
できるのか、と問うような視線を見返す。
侮らないで欲しい、できなかったことなど一度もない。
「……ＯＫ、任せる。各自搭乗したらすぐ自爆装置を解除の上ＯＳ構築にかかるぞ！！」

イザークの声を背に、ディアッカとニコルはトレーラーの荷台に駆け上り、するりと滑り込むようにコックピットへ乗り込む。

「ラスティ」
「まかせろって」
そしてアスランはラスティとともにモルゲンレーテの工場内へと飛翔した。

＊＊＊＊＊

連合製の割に座席のすわり心地は悪くない、とディアッカは思う。
すぐにＯＳを立ち上げる。
だが、計器の割りにナチュラルの作るＯＳはこれほどに乱雑で簡単なものなのかとディアッカは一瞬呆気に取られる。
「おいおい、こんなＯＳで動かせる気になってるのかよ、奴ら」
キーボードを叩きながらディアッカは悪態をつく。
「なあ、ナチュラルってやっぱ馬鹿？」
『ぶつぶつ言わずに急げ！ちッ』
急かすイザークの声も苛々している。
プログラミングの速さではクルーゼ隊でも随一のイザークの反応がいつもより遅い、予想外のＯＳの至らなさといったところか。
ノロマで弱っちい地球上の旧人類がこんなものでＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を制圧できると思っているのなら、大層な思い上がりだ。
『ほう、ハードはすごいもんじゃないか。どうだディアッカ！』
早速にイザーク機が起き上がる姿が視界に入る。
プログラミング自体は簡単だ、多少手間がかかるだけで。
ディアッカはすぐさま計器類のチェックを入れる。
内部構造はジンと大差ない、すぐに操れるだろう。

「ＯＫ、アップデート成功。ナーブリンク再構築、キャリブレート完了……動ける！」
ディアッカもレバーを押し上げる。機体が起き上がる……全ての視界が開けて、実にいい眺めだ。
『ニコル？』
『待って下さい、あともう少し！』
「お前は丁寧すぎなんだよ、ガモフに持ってくだけなんだからさぁ」
欠伸を一つ噛み殺してディアッカは待つ。
『仕方ないじゃないですか！！　この機体異常に特殊装備が多すぎて調整シークエンスが手間どって……』
やがてニコル機が起き上がった。
『あぁもう』
「で、アスランとラスティは？」
モルゲンレーテ内部に侵入したはずの２人からは何の連絡もない。
『奴らなら大丈夫だろう、伊達に赤じゃない』
通信回線を開いたイザークがモニター向こうで笑んだ。
『ともかくこの３機を先に持ち帰るぞ。クルーゼ隊長にお渡しするまで壊すなよ！』

＊＊＊＊＊

外からの爆発音、そして射撃の最中、工廠に横たわった地球軍の新型機動兵器が眼下に写りこむ。
「あれか」
柱の陰でラスティが呟く。
鋼の色の装甲、センサーと思しき角を生やした頭部、すらりとしたボディは明らかにＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．のＭＳとは異なる形状を持っていた。

「行きましょう」
アスランは低く声をかける。
降り立って催涙弾を投げつけ、銃撃戦を再開する。
しかし思わぬ激しい抵抗だ。彼らも秘密兵器を渡すまいと死に物狂いなのだろう。
素直に機体さえ渡してくれればいいものを！！
アスランは機関銃を振りかざして狙い撃ちする。
次々とナチュラルの兵士たちが貫かれて倒れていく。
だが不利だ。
運動能力、視力、判断力全てにおいてナチュラルを凌駕している筈のコーディネイター兵たちだったが、数に勝さるナチュラルの兵士による包囲銃撃戦の只中で脱落者が出てきていた。
眼前の地球連合軍兵士がどうと倒れる。
「ハマナッ！」
呼びかける女の声、アスランは振り向きざまにその声の主を撃った。
先ほどまでトレーラーの影で指示を出していた地球軍の士官だ。
此方が放った銃弾が女の肩に命中し、血が飛び散る。
あともう一撃！
続けざまに撃とうとして機関銃がぱちん、ぱちんと妙な音を立てる。
弾詰まりを起こした？　……こんな時にッ！！
アスランは眉間に皺を寄せ、機関銃を投げ捨て、ナイフを抜き放つ。
女の側には子どもが1人。
始末できるだろう、わずか一瞬で。
炎上がる只中で、女を抱き上げ振り仰ぐその少年を見てナイフ持ち振りかざす手が震える。

キラもP．L．A．N．T．に来るんでしょ？

まさか。
「キラ？」
返り血を浴びたバイザーごしにその少年を凝視する。
少年は呆然として呟いた。
「アスラン……？」
女性士官が発砲する、慌ててアスランは飛びのいた。
跳弾の火花が散る。
なんてことだろう、仕留め損なうなんて！
「アスランッ！！」
不意に背後から声が聞こえて、アスランは横に突き飛ばされた。
どう、と自分のいた位置で、赤いパイロットスーツの少年が倒れてみるみる血の海が出来る。
「ッラスティッ！！？」
アスランは表情が強張らせて、即座に身を翻す。

迂闊だった、前しか見えていなかった！

顔から血の気が引いて体が震える、だが感情に浸る時間はない。
「ッよくもラスティをッ！！」
アスランは足元に滑り込んできたラスティの銃を男に向ける。
銃弾はあやまたず的中し、崩れ落ちるように倒れた敵兵が2階の欄干から落下した。
それを見届けてアスランはラスティのもとへと走り寄る。
「ラスティッ！！」
「……行けよ、アスラン……急げ」
胸部を貫かれて、ラスティは息をするのももはや言葉を紡ぐのさえも辛そうだった。
「一緒に行くッ！」
抱きかかえようとして、彼は振り払うような仕草を見せた。
「行けってッ！！」

仕掛けられた銃撃を打ち返し、また眼前で1人倒れる。
「置いていけるわけないでしょうッ！？」
ラスティが咳き込む、吐血でバイザーごしに彼の顔が見えなくなる、体から血の気が引く。
アスランは慌ててラスティのヘルメットを脱がせて、血に塗れた彼の顔がもう真っ青であることに気づいた。
「へへ……お前と一緒で楽しかった、よ」
そして最後の力を振り絞るように彼の腕が首筋に回った。
愛してる、と声にならない声でラスティは呟いた。
じき腕が離れ、そしてそれきり彼は息をしなくなった。

視界の隅で動き出す、先ほどまで地球連合の士官のいた灰色の機体。
別れを惜しむ間も与えられない。
アスランはラスティの銃を取るとトレーラーの荷台に駆け上り、するりとコックピットに滑り込んだ。
座席につくと同時にＯＳ立ち上げを開始する。
予想はされていたが、まだ全くといっていいほどＯＳは完成されていない。
今はただ最小限動けるだけでいい、とキーボードを叩きながら目を走らせる。
急がなければならない、だが心は先ほどの別れと邂逅に大きく揺れる。

本当にラスティは死んだのか？　――あれは、本当にキラだったのか？
すかさず計器類のチェックを入れる。
内部構造は今まで搭乗していたジンとほぼ同じ、すぐに操れる。
全ての起動が完了する。

レバーを押し上げ、機体が起き上がる――全ての視界が開けて、炎上する工廠の荒涼たる様が目に入った。
眼下を見遣れば、ラスティが先ほどの姿のままでそこに横たわっている。
ラダーで引き上げてくれよ！　と起き上がった彼が叫ぶことを期待していた。
本当に死んじゃったの？　ラスティ……。

愛してる。

ばかッ！！
アスランは涙と感傷を振り捨てて、炎が降り注ぐ中を離脱する。
背後ではさらなる爆発を起こした工場が大炎上して、黒煙を上げていた。
モニターを見れば、奪い損ねた最後の一機が爆煙の中から飛び出してくるところだった。
キラ・ヤマト。
あの桜花びら只中での別れに見た幼馴染の、今にも泣き出しそうな顔がアスランの脳裏をよぎる。
月にいるはずだと思っていた、こんなところでまさか地球連合軍の新型兵器開発に関わっていようなどと思ってもいなかった。
いや、今はそれどころではない！
襲来するジンから通信が入る。
ミゲルだった。
『よくやった、アスランッ！！　ラスティはまだか！？』
告げるのが辛い……アスランは首を振る、知らず涙声になった。
「ラスティは討たれたわ！！　向こうには地球軍の士官が乗ってるッ！！」

『な……ラスティが……？』
ミゲルの表情は一変険しいものとなった。
『お前はその機体を持って撤収しろッ！！　ヤツは俺が仕留めるッ！！』

＊＊＊＊＊

ローラシア級艦艇ガモフ内格納庫では慌しいほどにアナウンスが流れる。
『プログラム班は待機。インターフェイスオンライン』
『データパスアクティブ』
『ウイルス障壁オンライン抗体注入完了……データベースコンタクトまで３００ミリ秒。パワーパックの抑制に注意しろ』
ＯＳ整備を終えて、するりとディアッカは機体から降り、無数のコードに繋がれた灰色の機体を眺めていた。
自分が持ち帰ったこの機体は接近戦向きではないらしい。
装備からして想像はついていたが、データ吸出し作業の整備士たちの言葉から遠距離砲戦仕様・後方支援ＭＳであることが確定した。
「ちぇー。ンだよ、シールドもサーベルも無しかよ」
キャットウォークの上を漂いながらドリンクをすする。
その点イザークはいい、まさに決闘（デュエル）向けの機体だ。
色も悪くないと満足げにＯＳ整備に余念がなく、未だにコックピットに搭乗している。
まあ言っても詮無い話だ、敵を遠方から射撃するということはその分危険度も低まるということ、とちろりとディアッカはバスターを眺めた。
――仕方ないから遠くからチクチクやらせてもらうか。
「大変ですッ！！　ヴェサリウスから通信が入ってッ！！」

キャットウォークに駆け込んできたニコルが顔面蒼白で叫んだ。
「ラスティが討たれましたッ！！　ミゲルは機体を失ってエマージェンシーサインが出て――」
「はあ？　ラスティが？」
ドリンクパックが宙を浮く。

ラスティ、オレンジ色の髪をした馬鹿馬鹿しいほど朗らかで気のいいヤツ。

親友の死を告げられても、いまいち実感が湧かずに、ディアッカは眉間を寄せる。
死んだ……死んだのか？　アイツが？
マジで？
納得できずに、ただ思考を切り替える。
「おい、アスランは？」
一緒に行ったはずのアスランはどうなったのだ。
「アスランは奪取に成功したようです、その後でもう一機を奪取にかかったミゲルが撃墜されて」
誰が呼んだのか“黄昏の魔弾”、その辣腕パイロットをそこまで追い詰めるほどの猛者がナチュラルにいる？
伝え聞いてもにわかには信じがたく、ディアッカは格納庫を一望できる控えルームに移動する。

慌しくアナウンスが流れ、ジンにD装備されるさまをディアッカは眺めていた。
ルームのモニター脇のキーを弾けば、通信が開く……ジンに搭乗したミゲルの顔は憤怒で染まっていた。
エマージェンシーで拾われたばかりで、取って返すようにヘリオポリスへ彼は行く。
「また行くんだ？」

からかうようにディアッカは声を掛ける。
『当然だろ、ラスティが討たれたんだぞ!?　――しかもナチュラルにコケにされて引っ込んでいられるかッ!!』
モニターの向こうでミゲルは声を荒げる。
相当屈辱だったらしいな、とディアッカは口元を歪める。
「んじゃあ、せいぜい先輩の意地を見せてくれよな、ミゲル副官サマ」
『お前って本当に可愛げのない後輩だよなッ!!』
ディアッカの軽口を交わす余裕もなく、ミゲルは言い捨てて通信を絶った。

＊＊＊＊＊

思考がとりとめもなく巡る。
悪い癖だ、とアスランは頭を振った。
コロニーの隔壁に空いた穴から虚空へと飛び出し、母艦を目指す。
他の3機は既にガモフへ入ったろう、あとはこの機体をヴェサリウスに運ぶだけだ。
だが背後のヘリオポリス、あの戦場の只中には、きっとキラがいる。
逡巡の最中、コロニーの隔壁内から一条の光が漏れ、一瞬のちに大きく弾けるさまが視界に飛び込んできた。
コロニー内部の空気が真空に流れ出る、含まれていた水蒸気が一瞬にして凍った。
それらは太陽光を受けてきらきらとガラスの破片のように輝く。
その只中を突破するＭＳの姿を認める。
隊長機が被弾?
アスランは目を見張る。
あのクルーゼ隊長まで被弾?　一体何事なの?

自分の任務と呆然の只中で、アスランは機体を引き返させた。
『アスラン！　早く戻れ！』
その矢先に通信が入る。
眼前を通り過ぎていくジンの編隊は大型のミサイルランチャーや特火重粒子砲を装備している。
「Ｄ装備！？」
要塞攻略用の重装備だ、まさかこのヘリオポリスを陥す気か？
通り過ぎるさまを見遣っている最中、オロール・グーテンベルグの声が通信回線から漏れてくる。
『何やってるんだよ！？　アスランッ！！』
「私も行くわ、この機体に傷をつけなければいいでしょう？」
Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．士官には自己判断で現場での行動を自由決定する権限が与えられている、それを行使するだけだ。
『隊長に叱られても知らないからなッ！！』
「構わないわ」
アスランは編隊の最後尾についた。

やがて侵入したコロニーには生々しく傷跡が残る。
眼下、コロニーへの損害など一切構うことなく砲撃を開始する同胞に、アスランは一瞬唖然とする。
だが隊長は、当然ヘリオポリスを陥とすつもりでＤ装備の指示を出したのだろう。
であればこのコロニーに容赦などするはずもない――と我に返る。
不意に通信スピーカーから声が漏れてきた。
『ナチュラルごときにッ！！』
ミゲル！
急いで索敵する、モニターは戦闘をしているミゲル搭乗のジンとＸ１０５ストライクとを捕捉した。
ジンのミサイルが放たれ、ストライクは回避行動に入る。
ストライクを追ったミサイルはアキシャルシャフトに命中し、爆発

を起こす。
センターシャフトと地上とを繋ぐシャフトは引きちぎれ、のたうちながら、直下の建物を瞬時にして打ち砕く。
さらに襲い掛かるミサイルの中、捉えられたストライクに2発のミサイルが向かう。
爆発が起き、爆煙が場を覆った。
『やったか!?』
アスランは急いでモニターを拡大する――見える、トリコロールの影!
「まだよ! ミゲル!」
『何!?』
立ち込めた煙の中からストライクが躍り出て、ソードを振りかざす。
「ミゲルッ!!」
その一撃は真っ二つにジンを叩き斬った。
『――――ちくしょうッ』
うめき声、そして大爆発が起きる、脱出の間もなかった。
アスランの顔から血の気が引く。

――ミゲルまで?

そのミゲルのジンを倒したトリコロールの機体めがけて降りる。
幼馴染との邂逅が蘇る、きっと彼が乗っている。
けれど、あの優しいキラが平然として人を殺す?
「キラ!? キラ・ヤマト!?」
信じかねて名を呼ぶ。
通信回線を開いたままに機体を降下させれば、応えがあった。
『アスランなんだね!? アスラン・ジブリールッ!!』
「ザラ、なのよ」
『え?』
キラについていた、たったひとつの嘘。

「私はアスラン・ザラ。ジブリールは母方の姓なの」
『ザラ……？』
周囲では戦闘が続いていた。
縦横無尽に立ち回り、何ら遠慮なく攻撃を仕掛けるＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．ＭＳに対し、コロニーの損傷を気にしつつ防戦する新造艦は押され気味だ。
新造艦の応射をジンの群れは交わし、ミサイルは次々と地表やシャフトに命中する。
飛び回るジンの１機に、白亜の巨艦の放ったミサイルが命中した。
推進剤に引火してジンは爆発し、それによって付近のまた１本のアキシャルシャフトが炎上した。
シャフトは炎のモールと化して宙で途切れ、衝撃でコロニー全体が軋みを上げる。
『オロール！　ちっくしょう、ナチュラルのヤツら！』
僚機からの通信に、アスランは目を見開いて目を転じる。
また一人倒れていく。
一層攻撃は苛烈を極め、コロニーのあちこちにミサイルが撃ち込まれる。
『アスラン！！　どうして、どうして君が、ヘリオポリスに、こんなことを――ッ！！？』
今にも泣きそうな声でキラが訴えかける。
だが聞きたいのはこちらだ。
「あなたこそ何故それに乗っているのッ！？　民間人のあなたが、連合のＭＳにッ！！」
そして何故ラスティを、ミゲルを殺した…？
『それはッ……！！』
キラの声をノイズが遮る。
轟音が場に響き渡り、過負荷に耐えていたセンターシャフトが大きく歪んだ。
崩壊をはじめたコロニー内部では空気の急激な流出による乱気流が

吹き荒れていた。
すでに崩壊していた建造物の破片やエレカが舞い上がり、爆発の炎さえ空気を失って消えていく。
対峙するストライクとイージスの足元にも凄まじい勢いで亀裂が広がっていた。
まずい、と思った矢先。
無防備に立ち尽くしていたストライクが体勢を崩した。
『ッうわぁぁぁぁッ！！』
「キラッ！！？」
イージスを寄せようとしてバーニアを噴射するが、気流に押され、近づくことも叶わない。
スロットルを全開にしても、虚空へひきずりこまれていくストライクとの距離はただ広がるばかりだ。
これ以上はムリだ、と諦めてアスランは離脱して、ふと周囲を見渡す。
――「ヘリオポリスであったもの」がバラバラに四散し、その大地は宇宙空間を漂っていた。
瓦礫や金属片に混じって、看板や建物の一部が目の前を過る。
すべてが宇宙の塵。
眼前の光景がユニウス・セブンの悲劇を彷彿とさせて、アスランは息を飲んだ。
だが救出艇は放出されている、誰も逃れることのできなかったあの惨劇に比べれば！
だが……ラスティもミゲルも目の前で討たれ、オロールも撃墜された。
彼らを巻き込んで、ひとつの大地は崩壊した。
――それをしたのは誰か？
それ以上考えることを拒否して、現実に怯えるようにアスランはヴ

エサリウス目指して機体を反転させた。

2：　ガモフにて

薄暗いコックピットのただなか、ついキーボードを打つ手がひどく早くなる。
ＭＳの内部データ吸出しに当たっていた整備員たちの「わッ！！」という驚愕の声が外部スピーカーから聞こえてきた。
間違って向こう側までいじってしまったのだろう、とアスランは慌てて手を止める。
心臓がばくばくと鳴る音の向こうで、外部スピーカーが拾った外部アナウンスが微かに聞き取れた。
『プログラム班は待機。インターフェイスオンライン』
『データパスアクティブ、接続よろし』
『ウイルス障壁オンライン抗体注入完了……』
「それにしても、まだ出てこないか」
「アスラン？　おい、外から開けるぞ？」
やがて外部操作でハッチが開かれて、覗き込んだ整備士たちが息を呑む。
「……それ……」
血塗れのパイロットスーツ、抱き上げた時についたラスティの血だ。
アスランは無言でキーボードを押し上げる。

楽しかった、よ。

私は何もしていない。
ずっと一緒にいた、一緒にいて楽しかったのは私のほうなのに。
彼がいなくなって、心の一部が欠け落ちてしまったような気さえする。

愛してる。

約束の、C．E．74．10．29．を待たずに彼は死んでしまった。
その現実が認められずにいる。
そして耳に蘇る、詰る声にふっと息を呑む。

アスラン！　どうして君がこんなことを――！？

本当にキラだった。
アスラン、と声変わりした声で彼は呼んだ。

どうしてこんなことになってしまった？

茫然としてとなりの空間を眺めやる、もう一台並ぶはずだった機体はここにはない。
『アスラン・ザラ。隊長室へ出頭のこと。繰り返す。アスラン・ザラ……』
アナウンスで呼び出しがかかっている声さえ遠い。
きっと命令違反を咎められるのだろう。
ぼんやりとした喪失感の只中、慣性のままにふわりと宙に出る。

手早く着替え、そして隊長室のドアの前に立ち、応えがあってアスランは部屋へと入る。

相変わらず無機質で人の匂いのしない場所だ。
部屋の主であるラウ・ル・クルーゼ隊長はゆったりと奥の机前に座していた。
「アスラン・ザラ、出頭いたしました」
力なくアスランは敬礼をする。
手を組んだクルーゼ隊長が滑らかな口調で言葉を紡ぐ。
「君と話をするのが遅れてしまったな。呼ばれた理由はわかっているね？」
「はい……出過ぎた真似をいたしまして弁解の余地もありません」
銀色の仮面の隊長はひとつ頷いた。
「懲罰を課すつもりはないが話を聞かせてくれたまえ」
アスランは目を伏せる。
「余りに君らしからぬ行動についてだ――仲間が討たれた、しかもその中のひとりは婚約者だ。そのショックはわかる、もちろん私とて彼らが喪われたことは実に惜しいと思っているよ。だがそれだけかね？」
上官の言葉にアスランは顔を強張らせる。
立ち上がり、傍らに立ったクルーゼ隊長はややあって言った。
「部下からの正確な報告がなければ、どんな将であろうとも策を誤るものなのだよ、アスラン」
「申し訳ありません。どうしようもなく動揺してしまい……」
物憂く溜息が漏れる中、クルーゼ隊長の強張った手が頬に触れて、思わずアスランは目を上げる。
「話したまえ、アスラン」
魅入られたように仮面ごしの青い眼差しを見返しながら、とつとつと言葉を押し出す。
「奪取し損ねた最後の機体……あれに乗っているのはコーディネイターです。月の幼年学校で私の友人であったキラ・ヤマトという名の……まさかあのような場で再会するとは思わず、どうしても確認したくて」

ほう、とクルーゼは一言もらした。
「なるほど、戦争とは皮肉なものだな。それは動揺もいたしかたない。その感じからするとおそらく仲のよい友人だったのだろう？」
それも相当親密な、と彼は言い添える。
「……はい」
アスランは俯く、頬に添えられた手が離れた。
「わかった。ならば次の出撃には君を外そう、そんな相手に銃は向けられまい」
アスランははっとして顔を上げた。
自分は兵士だ、兵士として戦いから逃げるわけにはいかないではないか。
それにキラを誰かに討たせるなど！
「隊長、私はできるなら彼を説得したいと思っております。彼もコーディネイターです、知らず連合に使われているだけで……！」
「君の気持ちはわかるがね、アスラン」
痛みを慰撫するように仮面の男はやや間を置いた。
「話を聞かない場合はどうするか、という話だ」
のろのろとアスランは目を上げた。
期待されている言葉はひとつだ、選択肢は他にない。
「その時は……私が討ちます」
「その言葉、忘れないように」
隊長に背中で釘を刺されて、ただアスランは頷いた。

重苦しい気分の只中で、隊長室を出るなりクルーに呼び止められた。
「おい、アスラン。艦橋に来いってさ」
「はい」
あちらでもお説教か、今度はアデス艦長だろうか？　と暗澹として艦橋に赴くが、出迎えたのは通信士のアビー・ウィンザーだった。
「ガモフから通信が入ってきています」と彼女が告げる。

「私に？」
インカムを受け取ってモニター前の席に座る。
「はい、アスラン・ザラです」
『アスラン』
ニコルだった。
彼は心配そうに目を瞬かせている。
『アスラン……大丈夫ですか？　その、ラスティや、ミゲルのこと……』
気遣ってくれている、ニコルは優しい。
「ええ」
ああ、私はただ泣きたかったのかもしれない、とアスランはふと気づく。
ヘリオポリスとともに失われた彼らの存在の大きさが、今になって痛みと寂しさとを伴って襲ってくる。
笑もうとして不意に涙腺が緩んで、頬を雫が伝い落ちる。
言葉がかすれる。
「……こんなはずじゃなかったのよ、ニコル」
オーブのコロニーに隠された地球軍のＭＳを奪取するだけの任務だったはずなのに。
終わったら休暇で、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．本国に戻れるはずだったのに。
休みになったら街に遊びに行こうねって……
なのに、一体何故こんなことになってしまったのだろう？
「あの人たち、あんな死に方をしていい人たちじゃなかった」
大地もろともに消えて、彼らは何も残さずに逝ってしまった。
『アスラン……』
やがて冷たい雫はぽとりぽとりと手の甲に落ちた。

＊＊＊＊＊

シュン、とドアが開く。姿を現したニコルが自身泣きはらした面持ちで言った。

「アスラン、泣いてました」

本で顔を隠してソファーに寝転がっていたディアッカが、その本をどけてちらと見る。

……この任務が終わったら親父のマクスウェル姓に戻って、アスランの正式な婚約者になる予定だったラスティ。

少しばかり鼻がツンとするのは気のせいだろう――あの大馬鹿、女を泣かせて何やってるんだか！

「アイツは甘いッ！　明日は我が身だぞッ！！　そう言ってやれッ！！　大体ラスティどももナチュラルごときに殺られるなんぞ迂闊にも程があるッ！！」

イザークはことさら冷ややかに背中で怒鳴る。

「あなたがそう言ったらいいじゃないですか、泣いてるアスランに！」

ニコルが棘を滲ませて厳しく返す。

やがて重苦しい沈黙が落ちた。

ディアッカは前髪をかきあげる。

「でもヴェサリウスの方、ラスティとかミゲルとかオロールとかが欠けたろ？　ぶっちゃけ隊長にも予想外の損失だと思うんだよね」

気分を切り替えたいとばかりに、ディアッカは敢えて淡々と言う。

「戦力バランス悪いよな……ガモフとヴェサリウスで。隊長どうすんだろ」

「いずれ人員補強されるだろう、そんなもんだ」
イザークは素っ気無く言う。
「空いた穴は埋められるってことですか」
ニコルは沈痛な表情で言う。
「兵士は歯車――これが戦場なんですね」
「甘すぎるのはお前もだな、ニコル。割り切らないとお前も死ぬだけだぞ」
イザークはふと天井を仰ぎ見る仕草をした。

……不器用なヤツ。

ラスティは士官学校からの付き合いではあったが、性格のせいで孤立しがちなイザークにもそれなりに構う気のいいヤツだった――多少色恋沙汰でいろいろありはしたが、恋敵でさえなければきっとイザークの親友になれた。
ミゲルも、初陣の脱走兵狩り以来イザークに「アスランに負けるなよ」といろいろ指導してくれたイイ上官だった。多分、コイツに親身になった初めての先輩だ。

多分イザークも溢れてきそうな涙をこらえているのだろう、とディアッカは痛ましく目を逸らした。

＊＊＊＊＊

艦橋は騒がしい、通信を断って涙を拭いてアスランが向き直った時、艦長席ではアデス艦長が深く凭れかかって、宙域を凝視していた。
「なんてことだ」

深く軍帽を被ったアデス艦長は動揺も露わに嘆息をつく。
「このような事態になろうとは」
「アデス艦長」
心配に顔を曇らせたアスランは慣性のままに歩み寄る。
「血のバレンタインを思い出すよ、アスラン・ザラ」
呆然としたかの艦長の呟きに、そして血のバレンタインという言葉にただ胸が痛む。
アスランは目を転じた。
モニターには幾つもの救難艇の表示が浮き上がっていた。
「けれど、救難艇は放出されています――おそらくほとんどの住民は無事だと思われますから」
攻撃を仕掛けた自分が言うのもひどく奇妙な話だ。
やがて隊長が奥から姿を現し、アデス艦長は隊長の姿を見るなり言った。
「いかがされます？　中立国のコロニーを陥としたとなれば、最高評議会も黙ってはおりますまい」
「連合の新型兵器を製造していたコロニーのどこが中立だ？」
一笑に付すラウ・ル・クルーゼ隊長の表情には一片の後悔も存在していなかった。
「あの新造艦の動きは掴めるな？」
「追うのですか？　しかし、こちらにはもうＭＳが」
「あるじゃないか、新しいのが４機もな」
唖然としたアデス艦長、一方ではっとしてアスランは顔を上げる。
地球軍から奪ったＭＳを投入するのか？
「データの吸出しさえ終われば構わんさ。あの艦を逃がすわけにはいかん」
現状ではあの艦も極力戦闘を避けたいはずだ。
この状況に観念して、あの新造艦がいっそ投降してくれればいい――そうしたらこれ以上戦わなくてすむものを。
アスランは重苦しい思いを抱えたまま隊長と艦長の背後からモニタ

ーを凝視する。
新造艦が辿るであろうコースを幾つも立体戦略パネルに映し出しながら、ラウ・ル・クルーゼ隊長は口を切った。
「網を張ろう」
「網、でありますか」
「ヴェサリウスは先行し、このポイントで敵艦を待つ。ガモフにはこのコースを取らせて、索敵を密にしながら着いてこさせろ」
隊長の指先が示す場所に、アデス艦長が眉を潜めた。
「アルテミス……でありますか」
アルテミスは、現在地からほど近い宙域にあるユーラシアの軍事衛星だ。
そしてユーラシアは北大西洋連邦と組んで地球連合の二大巨頭の国家である。
「しかし、月方面に離脱された場合……」
「我々の爆弾設置作業最中、ダクトから見えたあの白い艦は未だ物資搬入途中でした」
アスランは進言し、振り返った隊長と艦長の視線を受ける。
「しかもあの戦闘です。月に進路を取るほどに十分な装備を保持しているとは思えません」
「ふむ」
不意にアビーが声を上げた。
「大型の熱量感知！　戦艦のものと思われます！　緒元解析予測コース、地球スイングバイにて、月面地球軍大西洋連邦本部！」
アデス艦長が視線を走らせると、白い隊長は首を振った。
「それは囮だな。今ので私はいっそう確信した……やつらはアルテミスに向かう。ヴェサリウス発進だ。ガモフのゼルマンを呼び出せ」
そして空白の数時間。

コンディションイエローの只中、パイロットスーツ姿でアスランはいつものように艦橋に詰めていた。
「レーダーに反応なし」とアビーが声を上げる。
「どういうことでしょう？」
アスランは小首を傾ける。
「エンジンをかけずに慣性移動しているのだろう。さしずめサイレントランといったところかな」
やれやれ、とアデス艦長は帽子を被りなおす。
「しかしそういつまでも上手くはいかんよ。隊長の予測が当たっているなら、そろそろコンディションレッドだ」
「わかりました。搭乗して待機します」
パイロット控え室までの廊下で大きい揺れに思わずアスランは壁にすがる。
なるほど、艦長の予測は過たなかったらしい。
あの白亜の巨艦はエンジン始動とともにヴェサリウスめがけて主砲を仕掛けてきたのだろう。
格納庫へと入ってするりとコックピットに乗り込み、そしてシートに座ったアスランは慌しくキーボードを叩く。
『右舷転回！』
艦橋の喧騒がスピーカーから伝わってくる。
『行けるな、アスラン？』
滑らかな隊長の声に「はい」と応えを返して、アスランはキーボードを上げてバイザーをおろす。
ハッチがゆっくりと開き、その向こうに吸い込まれそうな瞬かない星空が見えた。
……あの向こうに新造艦とストライクがいる。
『カタパルト接続、進路オールグリーン、発進よろし』
管制が誘導する。
「アスラン・ザラ、イージス出る！」
カタパルトがイージスを射出する。

伸びきったバッテリーケーブルが弾けるように機体から離れ、急激にかかるGが心地よくさえある。
メタリックグレーだった機体が真紅に染まった。

虚空に出撃して間もなく、コックピットに敵機接近の警告音が鳴り響いた。
星屑の只中に見える、ビームライフルを構えたトリコロールの機体をモニターが判断する。
GAT－X105、ストライク――キラ！
オープンにしていた回線が声を拾った。
『……アスランッ！？』
高速で接近する二機はぎりぎりのところですれ違う。
「キラ！　私はあなたの敵！？　私たちが戦う理由はいったい何ッ！？」
キラが息を呑む音が聞こえた。
彼の動揺に乗じるようにアスランは言い募る。
「同じコーディネイターのあなたがどうして私たちと戦わなきゃならないの？　何故連合軍になんかいるの？」
『僕は……僕は連合軍なんかじゃないッ！　！　でもあの艦には仲間が……友達が乗ってるから……！』
その足つきにはガモフから襲来したブリッツとバスターが取り付こうとしている、それをアスランはモニターで確認する。
母艦が2機のMSに取り付かれそうな状況に気づいたらしいキラがはっとしてそちらへ転進しようとした。
させない！
「駄目よ！」
『アスランッ』
焦りの滲む声で、しかし攻撃を仕掛けることもできないというようなジレンマの苛立ちをままにキラが声を荒げた。

『君こそなんでZ．A．F．T．の軍になんかッ！！　戦争なんか嫌だって、君だって言ってたろッ！！？』
キラの叫びを一条のビームが阻んだ。
ストライクとイージスの間に割って入る機体――デュエル！
『何をモタモタやっている、アスランッ！！』
イザークの怒鳴り声が遮蔽空間に反響する。
咄嗟に離脱しようとするストライクを追って、ビームライフルを撃ちながらデュエルが迫る。
『手に負えないって言うんなら俺がもらうッ！！　お前は下がってろッ！！』
「お願い、待ってイザークッ！！」
ひたすらに逃げ回るストライクは、やがてビームライフルを掲げ、デュエルに向かって発射した。
だがデュエルはひらりとそれを交わす。
闇雲にただライフルを連射するストライクに、あっという間にデュエルが迫り、ビームサーベルを振り下ろした。
一瞬の閃光が周囲を照らす。
ストライクは辛うじてアンチビームシールドでビームサーベルを受け止めていた。
近づけまいと防戦一方のストライク、接近してカタをつけようとするデュエル――両者の腕の差は一見して明らかだった。
両機は自然足つきに接近し、足つきの迎撃を交わしていたバスターが機体を転進させた。
右肩のガンランチャーを腰だめにしてストライクを狙い、デュエルを相手に手一杯だったストライクが危ういところで辛くもその一射を避ける。

デュエル、バスターとストライクの戦闘に介入することもできず、アスランは目を薄くする。

ブリッツはゼロ射撃を行っている、アークエンジェルの溶解する機関部が見えた。

あちらは任せておけばきっと大丈夫だろう、だがストライクは！

焦りのただなか、ガモフからレーザー通信が届いた。

主砲発射準備、照準、敵戦艦。

同じメッセージを受け取ったのだろう、ブリッツがアークエンジェルから離脱する。

射線上にはストライクともつれるようなデュエル、そしてバスターがいた。

「イザーク、ディアッカ！　退いて、射線上よ！」

『うるさいッ！！』

『当りゃしねーよ』

2機とも退く様子はない。

そして敵艦主砲もその姿を見せ始めた。

その矢先、ヴェサリウスが大きく爆煙を上げて大きく傾いた。

「ヴェサリウス！？」

敵艦主砲が放つ光が宇宙空間を切り裂き、辛うじて回避するヴェサリウスの右舷をかすった。

母艦は急速にその速度を落とし、再びのレーザー通信が入る。

それはヴェサリウスの被弾を知らせ、戦闘宙域からの撤退を命じるものだった。

王手を直前に、形勢が一気に逆転した。

一方の白亜の巨艦からも、信号弾が打ち上げられる。

『帰還信号？　……させるかッ！』

デュエルが逃げようとしたストライクに追いすがる。
「イザーク、撤退してッ！！」
『せめてこの機体だけでも仕留めるッ！！』
そうでなければ完敗になってしまう、プライドの高い彼にとってそれは屈辱だろう。
ストライクの装甲から色が抜け落ち、本来の暗い鋼色に戻っていく――フェイズシフトが、落ちた！

それと認めた刹那、アスランは思わずペダルを叩き込んでいた。
灰色と化して無防備なストライクにデュエルが振りかざしたビームサーベルが振り下ろされる寸前。
――変形したイージスの鉤爪がストライクをがっちりと捕獲して宙域を駆け抜ける。
「この機体、持ち帰るッ！」
アスランはさらにアクセルを踏み込んで転回させる。
『アスランッ！　何をするッ！』
『おい、命令は撃破だぞッ！』
イザークだけでなく、ディアッカも声を荒げる、そしてブリッツを加えた3機が猛然と追いかけてくる。
「確保できれば一番いいッ！　このまま撤退するッ！！」
アスランは叫んで僚機との通信を切断する。
切り替わるように慌てふためているキラのわめき声が聞こえた。
『何するんだよッ！　離せッ！　離せってばッ！！』
「あなたは私と一緒に来るのよ、キラッ！！」
アスランは叫ぶ。
『嫌だッ！！　Z．A．F．T．になんて僕は行かないッ！！』
「お願いだから一緒に来て！！　このままじゃ私はキラを討たなくてはならなくなるッ！！　……お母さまはユニウスセブンで死んだのよ、キラまで失いたくないッ！！」
『……アスラン……』

悲鳴にも似た声にたじろいだ気配、そしてキラが呆然と呟いた。
『レノアおばさんが……ユニウスセブンで……？』
確かキラは母をとても好いていた、思わず自分がヤキモチを焼くくらいに。
スピーカー越しの彼は無言だ。
観念してくれたろうか、と思った刹那、横殴りに突っ込んでくる赤いＭＡにアスランは目を見張る。
不意だった。
ＭＡ形態を解除せねばＰＳ装甲は使えない、舌打ちでＭＳ形態に戻る。
ビームが撃ちかけられて、応戦のその隙にストライクは潜り抜けていった。
手のひらから零れ落ちるようにキラが行く。
「キラァァァッ！」

横殴りに突っ込んでくるＭＡ、イージスは瞬時に形態を解く。
その間にするりと抜け出るストライク。
言わんこっちゃない……ディアッカは思い切り眉間に皺を寄せた。
「おいアスランッ！？」
通信回線をオフにしている彼女にはこちらの声が届かない――舌打ちは滲む。
砲撃の合間を赤いＭＡは潜り抜けていく。
『僕がアスランの援護をッ！　ディアッカはイザークへッ！』
ニコルが叫ぶ。
目を転じれば、優位に打ち合いをしているデュエルの姿が目に入った。
この時ほど自分の機体が砲戦仕様であることを苦々しく思ったことはない。
「ええい、前に出るッ！！」

散弾を放ち迫る。だがストライクは逃げの一手だ。
『助けなどいるかッ！　これで落とす！』
精密射撃に長けているイザークがグレネードランチャーを放つ、虚空に白々とした爆煙が上がった。
『仕留めたか!?』
やったか!?
ディアッカは次の瞬間眉間を潜めた。
だが爆煙の中から一筋の光が走る。
ＰＳ装甲を纏ったトリコロールの機体が爆煙を潜り抜けてデュエルへと肉迫した。
あの瞬時で換装したストライク相手に苦戦するデュエルへの援護射撃、その光の速さで放たれるビームすらストライクはするりと抜け出る。

恐るべき反射力……本当にあれを動かしているのはナチュラルか？

一瞬の疑問は打ち込まれるビームの前に立ち消える。
デュエルの腕がビームをくらい爆発を起こした。
「イザークッ！」
『退きましょう！　もうこれ以上は、こっちのバッテリーが持ちませんよッ！』
忌々しさを覚えて、ディアッカは舌打ちする。
やむなく腕を失ったデュエルに肩を貸しながら、バスターは撤退した。

アスランは暗鬱な気分で控えルームに入る。
瞬間、案の定怒鳴り声が飛んできた。
「アスラン――ッ！！」
やはり待ち構えていた、とアスランはのろのろと目を上げる。

激して顔を紅潮させたイザークが飛来して襟元を掴む。
勢いで壁に激突するという時に、壁に凭れかかっていたディアッカがすっと動いてアスランの肩をキャッチした。
「おおっと。壁で頭打っちゃうって」
イザークのバカ力にぎりぎりとパイロットスーツの襟元を締め上げられて、アスランはむせる。
「お前、よくも邪魔を……ッ！！」
手加減なく締め上げて、イザークが至近距離で声を押し殺して睨む。
その怒りも最もだと思える。
自分はライバルと見なされている上に、戦功を求めるイザークの邪魔をしてしまった。
「ホントとんだ失態だね。ぜーんぶお前の命令違反のせいだわ」
背後で悠々と壁に凭れかかっているディアッカもやれやれと肩をすくめて覗き込んだ。
「つーか何？　どういうことか説明しろって、アスラン」
答えられるはずもなく、アスランは無言で陰鬱に顔を歪めた。
「……じゃないとこわーい目に遭うかもよ？」
俺もちょっと欲求不満でねーなどと乗じてディアッカが脅しをかけてくるので、さすがにアスランは泣きそうになる。
「もうバカ！」
ディアッカなら十分セクハラで理解できるし通用する、だがイザークが相手ではどうしようもない。
「いいから俺の質問に答えろッ！！　どういうつもりだッ！！？」
その刹那、シュンとドアが開いた。
最後尾で入艦した関係、控え室に入るのが遅くなったニコルだった。
光景を見るなり彼は青ざめて怒鳴った。
「ッ一体何をしてるんですッ！？　イザーク、ディアッカッ！！
女の子相手に止めて下さいッ！」
普段温和なニコルの怒鳴り声に、イザークが激怒もあからさまに怒鳴りかえす。

「黙れッ！！　何してるかなんて問いただすべきはコイツだろうがッ！！？　俺たちが４機でかかって仕留められなかったんだぞッ！！？」

「だからって今ここでアスランを責めても仕方ないでしょうッ！？」

ニコルが目を怒らせて言い募り、イザーク相手にも一歩たりとも退かない芯の強さを垣間見せる。

舌打ちのあと、アスランの至近距離でイザークが低く唸るように言った。

「次あんな真似してみろ、褥で身のほどを思い知らせてやるからな」

深淵の悪意にぞわりと肌が粟立つ、燃えあがるような憎悪で睨め付ける視線に呼吸が止まるかと思った。

そんな言葉、聞きたくもなかった。

冗談でもこんなことを言うような人じゃなかったのに……

どうして自分たちはこうなった？

乱暴に襟元を振りほどき、肩を怒らせたイザークは壁を蹴って勢いよくブリーフィングルームを出た。

ディアッカはそれを横目で見送って手を離す。

「やれやれ、お前俺がいなかったらヤバかったぜ？　締め殺されなくてもなんかされてたね、アレは」

イザークの激情の矛先はいつだってこの自分に向けられる。

それでもラスティが盾になっていてくれた、だがもう彼はいない。

「……ディアッカだってすっごいセクハラ言ったじゃない」

心臓がばくばく鳴っているのを感じながら、アスランは呆然と応じる。

「まあ、それもお前が悪いんだけどな！」

ディアッカはイザークの後を追った、多分フォローの為だろう。

私が悪いの？

それだけのことを自分はした、と言えばそこまでなのだが。

躊躇いがちにニコルがアスランに声をかける。
「アスラン……あの……人間ミスはありますし、ラスティのことがあったばかりですし……」
違う、とも言えず、ただひたすらにいたわってくれるニコルの優しさが今は辛い。
「ごめん。今は放っておいて欲しいの……」
せっかく慰めてくれようとしていたニコルはそのまま口を閉ざし、やがて悄然とルームを出て行った。
呆然としたアスランは壁に押し付けられたままの姿で浮遊していたが、やがてロッカールームに入る。
――だがヴェサリウスに制服がある、まだ帰投命令は出ていない。着替えることもできないな、とアスランは女性専用更衣室でベンチに腰掛ける。
撃墜命令に違反した、しかも故意に味方の攻撃の邪魔までしてしまった挙句にイザークに脅されてしまった。
もろもろを受けてまたお叱りを受けるに違いない……だが暗澹とする理由はそれだけではない。
「……何やってるんだろう、私」

君だって戦争は嫌だって言ってたじゃないか！

戦争は嫌だ、だから早く終わらせる為に軍に入った。
自分には力がある、だから戦う、味方を守る為に敵を討つ。
だがキラをあのままみすみす討たせるわけにはいかなかった。
……キラ。
あともう少しで連れてくることができたのに、と思えば悔いても悔やみきれない。

とりあえずつなぎに着替えたその後で、ガモフ内射撃室へと入り、
アスランはヘッドホンをせずにそのまま銃を抜く。
八つ当たりの規定射撃訓練で、動く的の中央から弾は逸れる。

君だって……

戦いたくて戦っているわけではない！
自分は戦争にならないと信じていた、その期待を裏切ったのは一体誰か？
大体、地球連合が――ナチュラルがユニウスセブンに核を打ち込んだから！
アスランは唇を噛み締める。
何故一般市民を虐殺する必要があった！？
背後でドアが開く。
「ん～？　珍しくブレてるな」
ディアッカ。
「……イザーク、どうだった？」
アスランは眉間に皺を寄せる。
ディアッカは大仰に肩をすくめた。
「どうもこうも荒れっぱなしだわ。本音のところではまぁだお前を諦めてないからな、アイツ。ちょっと歪んじゃってんのよー」
頭が痛い。

そもそも私のせいだっていうのは知っている、それでもいつかは笑って話せると期待したのに……
……そこまで、私は彼を傷つけたろうか。

「いや、寝取られって俺は結構燃えるけどねぇ。童貞にはちょっとキツかったんじゃね」
「何それ！」
「だからさ、まともにイザークの相手してやれって。ちょろっとガード緩めるだけでいいから」
「相手しろって言われても、対話できるとはとても思えないんだけど」
「んあ？　子どもじゃないんだからわかるだろ」
まさか犯されろとでも言うのか、この男は！
「まあ、同乗してる間は夜這いには気をつけろよ。うっかり肉弾戦になっちゃったらお前絶対勝ち目ないからね」
無言でちらと睨むがディアッカは皮肉げな笑みを崩さない。
知っていて挑発してくるのはさっきの腹いせかしら、とアスランは穿って顔を背ける。
「もう、そういう冗談、だいっきらいだってば！」
思わず声が荒くなる。
「本気の忠告だって。やぁれやれ、お嬢さまは相変わらず潔癖だこと」
銃のセイフティを外し、ディアッカも隣のブースで撃ち始める。
同じ高速設定で的を貫いていくのをアスランはちらと見る。
競うような沈黙の只中、パンパンパン、と射撃音が響く。
「なあ」
「何？」
これ以上何かセクハラを言うようなら撃ってやる、と物騒な思考がアスランの脳裏を過る。
「お前ろくに攻撃もせずに、ストライクのパイロット相手に何話してたんだよ」
吃驚して、手元がぶれる。
最後の一射が的から大きく外れて、銃弾が背後の壁に弾かれる鈍い音が木霊した。

振り向けば鋭い視線でディアッカはこちらを眺めていた。
「……通信、聞いてた？」
「スピーカーＯＮにしてたらたまたま拾った。ノイズひどくって向こうもお前を知ってるっぽかった、くらいしかわかんなかったけど」
胸が苦しくなる。
キラ。
再びの逡巡が自分の心を苛む。
「ストライクのパイロット……私の幼馴染なの」
空の弾倉が落ち、新しい弾倉を押し込めながらアスランは力なく言った。
「月の幼年学校の前から、ずっと一緒だったコ」
「はーん。なるほどね。まさか女？」
「男の子よ。まさかあんなものに乗るなんて……頭はいいのに、ナチュラルにいいように使われて、お人よしで馬鹿なんだから」
嘆息交じりに言葉が滲み出る。
「なるほどね。だから連れてきたかったのかよ。でも敵だぜ？　どーすんの、またＰＳ装甲落ちるまで待つ？」
キラに似た綺麗な菫色の眼差しが現実を突きつけて、心がまた揺れる。
アスランは目を逸らした。
「彼が敵になるのなら無理ね。私は兵士で＜敵は討たなければならない＞から」
かつての教官の言葉を繰り返し、自らに言い聞かせるようにアスランは呟く。
「へぇ、わかってんじゃん。できる？」
ディアッカは皮肉げに笑む。
「するしかないじゃない」
今更後には退けない、もう何人も手にかけているのだから。
撃った弾は標的の頭を破砕した。
『通達。アスラン・ザラ、艦橋へ出頭のこと。繰り返す、アスラン・

ザラは……』
「おい、呼ばれてるぜぇ？」
「またお叱りを受けるのかしら、今度は締め上げられなきゃいいけど」
銃を片付けながらアスランは多少痛みの残る首筋を撫でて、皮肉に笑んだ。

3：　P．L．A．N．T．あるいはアルテミスにて

指令に従ってアスランはガモフからヴェサリウスに移乗し、そのまま本国へと帰還の途につく。
クルーの話では、ヘリオポリス崩壊の件でP．L．A．N．T．最高評議会からクルーゼ隊長に出頭命令が下ったのだという。
――足つきは引き続きガモフが追う。
では何故自分はヴェサリウスに移されたのだろう、戦力がひとつでも欲しい時に、とアスランは怪訝に思う。
「君には証言に立ってもらう。GAT－Xシリーズの性能をな。然るゆえにヘリオポリスの陥落は当然のことだったのだと」
まあ勿論他の理由もあるが、と仮面の隊長はふふっと曖昧な笑みを浮かべた。
意味深長な言葉でこの隊長は時々自分たち部下を疑問の海に突き落とす。
隊長の謎の言葉にあんまり惑わされるな、後でわかるから、と言っていたミゲルが不意に蘇る。
……本当に、ヘリオポリスの陥落は当然だったか？
「左様ですか」
一兵卒である自分にそれ以上何が言えるだろう、とアスランは目を転じて、艦長席へと向かう。
「ようやく本国に戻れますね」
ああ、とアデス艦長は久々に笑みを見せた。
「L4での脱走兵狩り以来だからな、何ヶ月ぶりになるだろうか。……すまんな、隊長と君とは大変だろうとは思うが」
「いえ、艦長もお疲れでいらっしゃるでしょうから」
あの隊長の下で、この艦長も何かと気苦労が多いだろうことは推察がついた。
「ああ、また娘にお父さん老けたねとでも言われるだろうかな……」

モニターには、宇宙空間に浮かぶ白銀の砂時計――コーディネイターの本国、P・L・A・N・T・が映し出されている。
もっとも細まった中央を支点に、ゆっくりと回る巨大な構造物の百数基もの群れはいつ見ても圧巻である、とアスランは思う。
自己修復ガラスが日光に反射して艶消しの銀色に眩く輝いている。
技術の結晶、人の為せる業の最たるもの……と目を奪われながら、前を行くクルーゼ隊長に従って艦橋を出る。

軍事ステーションに収容されたヴェサリウスを降り、本国アプリリウス・ワンに向かうシャトルに乗り込む。
空っぽのキャビンだったが、先客が1人いた。
「これは、ザラ国防委員長閣下」
クルーゼ隊長とアスランは敬礼する。
「礼は無用だ。私はこの艇には乗っていない」
鋭く厳めしい顔立ちの壮年の男が低く言う。
「了解しました」
ふっと隊長は笑んで一歩退く。
「お久しぶりです、……お父さま」
ちらと灰色の眼差しを向けて、もの言いたげに父は長い溜息をついた。
「このじゃじゃ馬が！」
お説教を拝聴する気にもなれず、クルーゼ隊長の背後に座ろうと身をかえしたその時、ぽんぽんと父パトリック・ザラは窓際の座席を叩いた。
隣に座れというのだろう。
顔をあわせるのも数ヶ月ぶりではあるし、とアスランは許可を求めるようにクルーゼ隊長の方を見やり、肯きを得た後で移動する。
「先のＭＳ奪取ご苦労だったと言いたいところだが、それも危険な任務だったそうではないか！」

「いえ」
不条理な話だ、なぜ自分が詰られなければいけないのか、とアスランは思う。
軍は「あなた」の意向下で、自分はそれに従うだけの話だというのに。
――軍に入って以来、厳格な父のダブルスタンダードを垣間見ることがめっきり増えた。
脱走兵狩りが終わればすぐ召還するつもりだったのに、とひととおり文句を口にしたあと、再び深々とパトリックは嘆息をついた。
「マクスウェルの息子のことは残念だったが戦場でのことだ、仕方あるまい。……お前も落ち着くかと思ったが」
「……」
アスランは目を逸らす。
できるかぎり頭の隅に追いやろうとしてきた――ラスティを思い出せばただ淋しく哀しくなる。
彼は父方のマクスウェル姓に戻り次第、自分の正式な婚約者になるはずだった。
ずっと一緒にいた、このまま寄り添って穏やかに過ごせるならとその手をとった。
ただ愛してくれる人だと思った――そしてきっと愛しはじめていた。
けれどもう彼はいない。
「――やむないが次を考えねばなるまいな」
「もう縁談は結構です、お父さま。わたくしはすぐに切り替えられる人間ではありませんから」
悄然としてアスランは窓の外を眺め見る。
「ふむ」
父は追い討ちを掛けることはなかった。
ひとときのまどろみの中で、父と隊長との会話が聞こえた。

「――レポートに添付された君の意見にはむろん賛成だ。問題は、やつらがそれほど高性能のモビルスーツを開発した、というところにある。パイロットのことなど、どうでもよい！」
アスランははっとして目を覚まし、目元を拭って、顔を父の方に向ける。
「その箇所は私の方で削除しておいた。……あちらに残した機体のパイロットもコーディネイターだったなぞ、そんな報告は穏健派に無駄な反論をさせるだけだ」
父の向こう側からクルーゼ隊長が言う。
「君も自分の友人を、地球軍に寝返った者として報告するのは辛かろう？」
隊長の言葉に胸がちくりと痛んだ。
キラが地球軍についたのは彼の本意ではなかった、なのにまるでキラが咎人のようだ。
「ナチュラルが操縦してもあれほどの性能を発揮するＭＳをやつらは開発した、そういうことだぞ。わかるな、アスラン」
父パトリックが言い含めるように念を押す。
「……はい」
アスランは力なく頷く。
これが自分が選ばれた理由……そして今は最高評議会という舞台での台本の打ち合わせ中なのだ。
父の立場はわかる、だが政治向きの話は嫌いだった。
窓からＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を眺め、このままいつまでもアプリリウス・ワンに着かなければいいのに、とアスランは思った。

＊＊＊＊＊

「ん？　じきブリーフィングだぜ」

ディアッカはソファーから頭をもたげて声をかける。
「わかってる！」
イザークは素っ気無く言い残すとドアの前に立つ。
そして彼は艦橋とは全然違う方向へ向かって廊下を行き、入れ違いに控え室に入ってきたニコルが心配げに振り返る。
「ここのところ元気がありませんね、イザーク」
「思わずアスランに犯すぞって凄んじゃったのがまだ効いてんな、あれは。さすがに途方に暮れてんだろ？」
ソファーに寝転がって雑誌を眺めながらぞんざいにディアッカは言う。
「あとは、まーたクルーゼ隊長がアスランを連れてっちゃったのが不満て感じかね」
「それは、アスランは優秀ですし、隊長個人的なお気に入りだっていうのとは違うと思いますけど」
狭い環境で人の噂は娯楽のひとつだ。
ヴェサリウスで隊長の傍にいる赤服が、端整な美少女だということに人は好奇の目を向ける。
「んじゃそれともアレかな？　アスランが隊長の帰投に連れてかれたのってお見合いの為って噂」
ディアッカが悪戯めいて笑む。
「ラスティがいなくなったからって、こんな急に？」
いくらなんでもひどすぎる、とニコルは眉を顰める。
「でもアイツなら欲しいってお偉いさんも多いだろうし、実際ラスティの親父さんはそのクチだったろうしなぁ」
端整揃いの同胞の中でも一際目立つ美少女で国防委員長令嬢の彼女は、一時見合い三昧だった。
最も彼女は気に召さない相手は力でねじ伏せて勝利を収めてきたらしい、とは故ラスティからの話。
多分事実なのだろう。
配属になってすぐの彼女に言い寄った一般兵が医務室送りになった

のは未だ語り草である。
「閨閥ですか。クライン議長とザラ委員長が最近ますます不仲っていう話も聞きますし……そういう向きでザラ委員長も急がせるのかもしれませんが」
「政治ってややこしーのな。ま、すでにアイリーンがいる俺には関係ない話だけどぉ」
『パイロットはブリーフィングルームへ集合して下さい』
いつの間にか時間を過ぎていたらしい、滅多にない集合放送が流れるということはゼルマン艦長はおかんむりなのだろう。
雑談していたディアッカとニコルは慌てて控え室を出た。

ヴェサリウスは隊長とアスランを乗せてP．L．A．N．T．本国へ向かい、足つき追撃はローラシア級戦艦ガモフの任である。
ブリーフィングルームで頭を突き合わせて戦略パネル上に浮かび上がる軍事要塞のデータを眺めていた。
ゼルマン艦長、イザーク、ニコル、そしてディアッカ。
パネル上に、展開されるバリアー図……通称、アルテミスの傘がぐるりと一周した姿を見せる。
「何も通さない、だから攻撃も仕掛けてこない。……馬鹿みたいだな」
ディアッカはやれやれと大仰に肩をすくめた。
「だが現実、あれを突破する手段はない。厄介なところに逃げ込まれたな」
「だからってどーするの、出てくるまで待つ？」
からかうように言ってくつくつ笑えば、ゼルマン艦長はむっとした表情になった。
「ふざけるなよ、ディアッカ。お前は戻られた隊長に何もできませんでしたと報告したいのか？」
イザークは冷ややかに言う。

「別にいいじゃねぇーの、焦らなくても。あの聡明な隊長サンならどんなアイディア出してくれただろうね～？」
にやりとディアッカは笑ってふわりと浮き上がる。
真剣に戦略パネルを眺めていたニコルの表情に一瞬、ひらめいたというかの色が浮かび上がる。
「僕の機体なら、できるかもしれません。あれには面白い機能がついているんです」
ミラージュコロイド、それがニコルが紡いだ言葉だった。
ブリッツにつけられたミラージュコロイドとはレーダー波さえも吸収するステルス機能である。

格納庫を見下ろせる控えルーム。
アルテミスの傘を削るべく先行して出陣する黒煙纏うブリッツを眺めながら、イザークはふん、とさも下らないと言わんばかりに鼻を鳴らす。
「地球軍も卑怯なものを造る」
「そお？　あれすごい発明じゃねぇ？　」
窓に縋っていたディアッカはあっけらかんと言う。
「携帯スプレー版ミラージュコロイド、吹き付けたら透明人間になれるぜ？　うわ、マジ欲しい」
「……馬鹿か、何に使う気だ」
呆れたようにイザークは背中を向けて指先でくるくるとヘルメットを回した。
「そりゃもうあんなことやこんなことにね」
「そんなことより出撃準備だ。ニコルが傘を潰したら俺たちも出るんだからな」
イザークは控えルームを出て格納庫に向かう。
「はいよ」
ＣＩＣに接続されたモニターには、黒い霧によって輪郭を薄れさせ

つつあるブリッツがまだ辛うじて捕捉されていた。

そして1時間としないうちに出撃命令が下された。
傘の欠けたアルテミスなど、なんら問題ではない。
「足つきなんざアルテミスごと落としてやるさ」
うそぶきながらディアッカは機体を駆る。
邪魔なものは吹き飛ばす、この快感がたまらない。
メンバーで星を争うのはいつものことだが、しかし今は撃墜数を数える余裕もない。
バスターの巨大ランチャーが管制室に撃ち込まれ、凄まじい爆炎が開口部から噴き出す。
次々に誘爆の炎が上がり、港はたちまち爆散する機体で炎に包まれる。
「どこだよ、あの艦は!?」
『わからん、ニコルどこだッ!』
イザークも焦りを見せる。
ノイズ交じりにようやく通信を捉える。
『聞こえますかッ！　？　ストライクと交戦中です……うわッ！　こいつ――ッ！』
「こりゃ反対側の港から出やがる気だな」
せっかくここまで追い詰めたのに、とディアッカは苛々する。
『追うぞッ!』
通信の向こうで衝撃音、ニコルの苦戦が逐一伝わってくる、それが焦燥感を煽る。
『逃げられた!』
ふわりと無力に港に漂うブリッツを発見した時にはすでに遅かった。
足つきはアルテミスを脱出しており、その後姿を見送るに留まった。
苛立ち紛れのブリッツがトリケロスから巨大な銛にも似たランサーダートを打ち出し、発進したメビウス隊を撃ち落す。

その爆発の向こう、小惑星が内部から赤く染め上がった。

「おい、離れろ！　アルテミスが割れる！」

宙域を離脱した3機の眼前でアルテミスは炎を上げて小惑星は爆散した。

暴れまわった挙句アルテミスは大爆発を起こし、陥落した。

「……こりゃ楽しいや。ヘリオポリスの次はアルテミスを落としました、ってね」

くつくつとディアッカは笑う。

「ネビュラ勲章ものかな。当然お前が隊長に報告するんだろ、イザーク？」

モニター越しにもむっとした顔のイザーク、一方の通信モニターではゼルマン艦長が沈痛な顔を見せた。

『笑い事か。熱源だらけで肝心な足つきの追跡もままならんのだぞ。お前たちはすぐ撤収しろ』

「はいよ」

『また取り逃がしてしまいましたね』

活躍したもののニコルも口調が重い。

『それにあのストライク、戦うほどに強くなっているような気がする……』

『馬鹿なッ！』

イザークが眉間に皺を寄せ、声を荒げる。

「まあまあ。過ぎたことは仕方ないじゃん。でもさぁ……たった一隻の艦、たった一機のＭＳ相手に、どうして俺らこんなに苦労すんの？」

やれやれとディアッカは大仰に肩をすくめた。

当初誰もこれほどあの白亜の巨艦に手こずらされるとは想定してなかったはずだ。

「すげぇ強運てやつ？」

そして運も実力のうちだ。

だが俺はとことんついてないらしい。

ベッドに転がったディアッカは眉間に皺を寄せて、ひとつ嘆息をつく。

――なんで俺は士官学校以来、万事コイツと同じ部屋なんだろう。

棚から本、写真たてが落ちる音がやたら耳につく。

「ちくしょう、ちっくしょぉぉぉッ！！」

悪態をつきながら暴れているイザークの周辺はガラクタだらけになる。

物騒なので部屋にガラス製品はないが、プラスチック製の落下物の音は床にやたら響く。

イザークの腕力も尋常でないだけに壁には拳の凹みがひどく多く残る。

「おいおい……いつまでも引きずってないで、お前もとっとと寝ろよ。騒音は向こうの部屋の邪魔になるぜ」

背中を向けてディアッカはイザークに声を掛ける。

だが隣室はニコルの部屋なので別にいいか、とディアッカは思い直して付け加える。

「とにかくうるさくって俺が寝れやしないんだよ」

「黙れッ！　大体お前は悔しくないのかッ！？　みすみす逃がしたんだぞッ！！　足つきとストライクをッ！！」

背中にどすんとイザークの蹴りが入って、さすがにのそとディアッカは起き上がる。

何でこいつはこんなに執念深いんだろう。

このチャンスにアスランを出し抜くつもりが当てが外れて悔しいのだろう、しかしそれが一体何だというのだ？

「俺やっぱお前と別の部屋にしてもらうわ。艦長の隣の部屋空いてたからあっち行くぜぇ」

寝癖のついた頭をぼりぼりと掻きながらディアッカは布団を抱え込む。

「……！！」

結局は憤懣やるかたなさを誰かに知って欲しいだけらしいイザークはぎりぎりとディアッカを睨むと、フンッ！　と一声発してベッドの上に散乱したものをまとめて下に投げ出し、そのまま布団に潜り込んだ。

明日片付けが面倒臭ェな、……原因のアイツにやらせてやりたい。

そうだ、そもそもアスランがイザークをほったらかしにするから悪いのだ。

どうせもうラスティもいないことだし、アイツがイザークを乗せてくれさえすれば、こっちにこんなとばっちりがくることもないのに。

とディアッカは眠りに落ちる瞬間に思った。

＊＊＊＊＊

Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の支点に設けられた宇宙港から、底部へと伸びる全長６０キロに及ぶ長大なシャフトをエレベータで降下していた。

クルーゼ隊長はシートに座ってコンピュータ上の資料を読み、アスランは立って美しい下界を見下ろしていた。

白銀に煙る自己修復ガラスに守られた紺碧の海、島々、そして見える都市部。

アプリリウス・ワンは今日もごく平穏だ。

そしてエレベータ壁面のモニターではニュース映像が流れている。

『ユニウス・セブン追悼、一周年式典を控え、昨夜クライン最高評議会議長が声明を発表しました……』

アナウンサーの声に、自然アスランはそちらに目をやる。

画面には髭を蓄えた品のある壮年の男と、側に控える少女が写っている。
少女のふわふわと波打つ長い髪は柔らかなピンク色、透き通るような白い肌によく映えている。
ラクス・クライン、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．一の歌姫。
愛らしい姿、綺麗な歌声を持ったクライン議長の愛娘でもある。
「そういえば、去年の式典の代表は君だったな。今年はラクス・クラインか」
思い出したように隊長が顔を上げる。
母が亡くなってからもう1年になるのか、とアスランは痛みをこらえるようと瞑目する。
そして開戦からもう1年。
「彼女は今回の追悼慰霊団の代表も務めるそうだね、君もユニウス・セブンに行きたかったのではないかね？」
痛みを慰撫するように隊長は言う。
「いいえ」
端的にアスランは言って目を逸らす。
彼女はあくまでも白く、穢れない。手を血に染める道を選んだ自分とは対照的だ。
「おやおや、気分を損ねたかね。そんなつもりはなかったのだが」
含んで笑む隊長の滑らかな言葉は時折胸を刺す。
おそらく故意なのだろう。
そしてその度に、そんなつもりはなかったのだとこの隊長は楽しげに笑む。
苦手な人だ、と思えば自然寡黙にもなる。
今はこの2人きりの空間から抜け出したくてたまらない。
息詰まるような沈黙の只中で、アスランは近づいてくる地上に救いを求めて目をやる。
ようやくに長いエレベータはやがて終着点へと着き、すぐに出迎えの車へと乗り込んだ。

最高評議会議場、最高評議会の湾曲したテーブルに集う12人の議員たちは、今や遅しと待ち構えていた。
彼らと向かいあうかたちでラウ・ル・クルーゼ隊長とともにアスランは席に着かされる。
中央に座すのがシーゲル・クライン議長、そしてその右傍らに座すのは父――パトリック・ザラ国防委員長。
「ではラウ・ル・クルーゼ隊長。ことの経緯を説明してもらおうか」
重々しくシーゲル・クラインが口を切る。
「はッ……」
クルーゼ隊長が立ち上がり、進み出て滑らかな口調で経過を報告する。

「――以上の経過から、ご理解していただけるものと存じますが、我々の行動は決してヘリオポリス自体を攻撃したものではなく、あの崩壊の最大原因はむしろ地球連合軍にあったものとご報告します」
堂々と彼はそう言ってのける。
嘘だ、とアスランは目を逸らす。
あの時、D装備を命じた時点で、ヘリオポリス陥落はすでに隊長の頭の中にあったはずだ。
だが議員たちは仮面の隊長が強調した言葉に飛びついた。
「やはりオーブは地球軍に与していたのだ！　条約を無視したのはあちらだ！」
「しかしアスハ代表は……」
「ナチュラルの言葉など、あてになるものか！」
紛糾しはじめた議場に、重々しい声が、他の議員たちの論争を圧して響いた。
「しかし、ラウ・ル・クルーゼ隊長……」
父パトリック・ザラだった。

「その地球軍のＭＳ、はたしてそこまでの犠牲を払ってでも、手に入れる価値があったか？」
ラウ・ル・クルーゼは実に滑らかにそれに応じた。
「その驚異的な性能については、奪取した機体の搭乗者であり、残った一機との交戦経験もあるアスラン・ザラから証言させたいと思います」
「よかろう。アスラン・ザラからの報告を認める」
重々しくクライン議長が述べて、立ち上がったアスランは進み出て敬礼をした。
無表情な父と視線が合う。
母の友人、あの慰霊追悼式で強く抱きしめてくれたルイーズ・ライトナーが憂い顔でこちらを眺めている。
そしてラスティの父親として婚約の場に立ち会っていたジェレミー・マクスウェルも沈痛な表情で自分を見る。
そして他の議員たち――彼らから自分はどう見えているのだろう、追悼慰霊式典の遺族代表から一兵卒となった自分は？
「我々はヘリオポリスで製造されていた地球連合軍最新鋭ＭＳの奪取任務を受けたものであります」
アスランは口を切る。
まるでこの場は一種演劇の場のような、そして自分はその俳優であるような気がする。
全てが仕組まれた台本上の出来事だ。
背後のスクリーンに真紅のイージスのデータ映像が浮かび上がる。
「現在わたくしが搭乗しておりますＧＡＴ－Ｘ３０３イージスと呼称されるこの機体ですが、ＭＡ形態への変形を可能とするＭＳであり、注目すべきはその火力であります」
そして戦闘を捉えた映像が流れるに至り、議員たちからどよめきが上がった。
「７５ミリ対空自動バルカン砲塔システムイーゲルシュテルンを装備し、そして戦艦すら沈めることのできる５８０ミリ複列位相エネ

ルギー砲スキュラを装備しています。次にＧＡＴ－Ｘ１０２デュエルですが……現搭乗者はイザーク・ジュール。データ上、おそらく奪取したＭＳシリーズのベースとなった機体であります。接近戦に強く、装備は７５ミリ対空自動バルカン砲塔システムイーゲルシュテルン、１７５ミリグレネードランチャー装備５７ミリ高エネルギービームライフル、ビームサーベル」

アスランは映像に映し出される奪取した機体それぞれの特性をたゆみなく述べていく。

「……次にＧＡＴ－Ｘ１０３バスター。現搭乗者はディアッカ・エルスマン。遠距離からの攻撃に特化した砲撃支援用ＭＳであり、装備は２２０ミリ径６連装ミサイルポッド、３５０ミリガンランチャー、対装甲散弾砲、９４ミリ高エネルギー収束火線ライフル、超高インパルス長射程狙撃ライフル。ことに９４ミリ高エネルギー収束火線ライフル、超高インパルス長射程狙撃ライフルを合体させた巨大砲は戦艦特装砲にも匹敵するものであります。最後にＧＡＴ－Ｘ２０７ブリッツ、現搭乗者はニコル・アマルフィ。その装備は攻盾システムトリケロス、３連装超高速運動体貫通弾ランサーダート、５０ミリ高エネルギービームライフル、ビームサーベル、ピアサーロックグレイプニール……と近接戦に長けた機体であります。また特殊機能として隠蔽機構ミラージュコロイドを装備した偵察・近接戦用ＭＳであります」

そしてアスランは向きなおって総括に入った。

「以上、データが示す通り、ハードウェアとしての性能は我らＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の次期主力として現在配備が進んでいるシグーを上回るものと言えましょう。――隊長のご判断は的確であったとわたくしも考えております」

報告が終わり、議員たちはそれぞれに吐息をつく。
「やれやれナチュラルどもめ、いつの間にそんなものを。それともこれもオーブのモルゲンレーテの力かね？」
まったくやらかしてくれるものだ、と呆れたようにタッド・エルスマンがペンをくるくると回す。
「でもまだ試作段階なのです、たった五機の試作機など……！」
アイリーン・カナーバが声を上げる。
「しかしだね。そこまでいけば量産は目の前だよ。奪取できたのは幸運だったと思わざるを得ない……ヘリオポリスのモルゲンレーテのデータが失われたことも含めてね」
Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．のＭＳ技術開発部を率いるユーリ・アマルフィはその穏和な顔を曇らせる。
「これは奴らの意思の表れだ、奴らはまだまだ戦火を拡大する気なのだ！」
吐き捨てるようにパーネル・ジュゼックが声を荒げた。
「だからといって戦い続けてどうなります。長期戦になれば我々の方が……」
ルイーズ・ライトナーが躊躇いがちに言い、それを否定するようにヘルマン・グールドが声を上げる。
「だからこそオペレーション・ウロボロスの早急な完了を、と申し上げているのです！」
資源が枯渇し、Ｎジャマーで核エネルギーさえも使えない地球。
オペレーション・ウロボロスが完了すれば、地球に封じ込められたナチュラルはエネルギーを手に入れる術もなく倒れていくだろう。
地球上では過去１年で１０億余りが死に至ったとも聞く。
２４万余の同胞の摘み取られた未来に対しての報復は罪なき人々の緩慢な死――。
アスランは鼻白む、しかしその時鋭く糾弾する声が上がった。
「奴らとて当然覚悟はあろう、撃ってはならぬものを撃ったのだからな！」

エザリア・ジュール議員……彼によく似て、私に痛みだけをもたらしてくる人。

「議員がた、静粛に！」

クライン議長の再三の呼びかけにようやく場に静けさが戻った。

ふとそれまで沈黙を守っていたパトリック・ザラが重々しく口を切った。

「戦いたがるものなどおらぬ……」

アスランは父を凝視する。

「平和に、穏やかに、幸せに暮らしたい。我らの願いはただただそれだけだった」

議員たちが皆静かに頷く。

「だがその願いを無残に打ち砕いたのは誰か？　己の都合と欲望の為だけに我らコーディネイターを縛り利用し続け、この宇宙に追いやったのは？」

P．L．A．N．T．の歴史は屈従の歴史、アスランは記憶を辿る。

地球で迫害を受け宇宙に上がったコーディネイター達だったが、結局搾取から逃れることはできなかった。

P．L．A．N．T．理事国により武装と食糧の生産を禁じられ、エネルギーと工業製品とを地球に供給し続けた。

両者の関係が悪化したその時、P．L．A．N．T．理事国は食糧の供給を停止し、P．L．A．N．T．もまたエネルギーと工業製品の輸出を停止した。

――そしておよそ1年前、P．L．A．N．T．の貴重な食糧供給地であるユニウス市第七番目のコロニーに核は打ち込まれた。

「そして行われた虐殺行為だ。我らは忘れない、血のバレンタイン、ユニウスセブンの悲劇を、……２４万３７２１名の犠牲を！」

その内の1人は農業学者でユニウスセブンの食糧研究所にいた母だ。

議員たちの沈痛な沈黙の只中、アスランは父から目を逸らした。

思い出せば涙が出てきそうになる。

「同胞を失ってなお我々は最小限の条件で早期に戦争を終結しよう

と懸命に努力してきた。にも関わらずナチュラルはその思いさえも踏みにじる。……我々は我々を守る為に戦う。戦わねば守れない、ならば戦うしかない！」

場の空気を決定付けるかの父の高らかな言葉に思わず鳥肌が立った。

アスランは重い足を引きずるように最高評議会の場を退出して、おもむろにファーストコーディネイターが木星から持ち帰ったという翼持つ鯨の化石の前に立つ。

外宇宙から飛来した隕石とみられるこの通称『くじら石』。

広大な宇宙に人類以外の生命の存在を証明するこの化石はエヴィデンス０１として余りにも有名だ。

人類の夢であり、宇宙と地球との調整者として生まれたのが自分たちだ、と学校で教わった。

自分たちが真に目指すべきはあの広大な宇宙。にも関わらず足元を絡めとられて、前へ進むことができずにいる。

「珍しいかね？　我々は見慣れてしまったが」

「クライン議長閣下」

Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．最高評議会の長を前にアスランは敬礼する。

「そう固くなってくれるな、アスラン嬢」

悲しげにシーゲル・クラインは自分を見る。

「いえ、そういうわけには参りません」

相手は議長閣下、自分は一兵卒だ。

「彼らに我々はどう見えているだろうね、戦いの道を辿る我々を」

一人ごちるような言葉、躊躇いながらもきっぱりとアスランは応えた。

「彼らも宇宙の果てで戦っているのではないか、と……思います。生き残る為に」

しばらく傍らのアスランを見遣った後、そうか、と穏和な面立ちを曇らせて議長はまた前に向き直る。

「また大変なことになりそうだ、君の父上の言うこともわからないではないのだが。――アスラン嬢、言葉よりも銃は必要かね？」
何故この人は自分にそう問いかけるのだろう？
座して待っていても平和は訪れない。
戦争なんて嫌だと叫べば戦争がなくなるのか？
否。
戦うしかない。
「言葉も思いも通じないならば撃つしかありません。敵から故国と愛する人々を守る為に銃は必要だと考えます」
迷いないアスランの言葉に、クライン議長は何か言おうと口を開きかけた。
だが遮る声にその言葉は飲み込まれる。
「アスラン」
呼びかける滑らかな声に振り返る。
父と連れ立って議場を出てきたクルーゼ隊長の姿が視界に入る。
「あの新造艦とＭＳを追う。ラコーニとポルトの隊が私の指揮下に入る。出港は７２時間後だ」
アスランは敬礼で答える。
「はッ！　では失礼いたします、クライン議長閣下」
まだ何か話し足りなさそうな議長に敬礼をした後、アスランは隊長に従った。
すれ違うように父が議長の傍らへと歩み寄る。
残った父と議長との会話が気になったが、それは自分には関わりのないことだ、と思考から外した。

◆◆◆◆◆

「パトリック。我々に残された時間は少ないのに、むやみに戦火を

拡大してどうする？　本来我々はこんなことをしている場合ではないのだぞ」

シーゲル・クラインは低く鋭い口調で咎めて、パトリック・ザラはそれに答えた。

「時間が少ないからこそ許せぬのだ、我々の邪魔をする者たちは」

「戦いとなれば、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の未来を担うべき若い者たちが戦場へ行くことになる。君の娘御とてその一人ではないか」

シーゲルは先ほどまで傍らにいた赤い軍服纏う少女を微かに振り返る。

母をユニウス・セブンで亡くし、追悼式からすぐにマイウス機械工科カレッジを中退し、軍に籍を置いた彼女はマスコミにも取り上げられていた。

国防委員長の令嬢はＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の為に前線で戦う道を選び、選抜されたＭＳパイロットという最も華々しくも険しい道を辿る。

マスコミ、或いはＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．上層部の狙い通り、見目麗しい少女と無機質なＭＳというそぐわない対比は人々に印象を残した。

その影響もあってか士官学校への志願者も野戦任官も右肩上がり、軍としての勢力は拡大する一方だ。

だがシーゲルは自分の娘と変わらない年頃の彼女を痛々しいとさえ思う。

かつて追悼の祭壇に白玉の涙と白百合を捧げた少女は、その蒼の綺麗な髪を切り落とし、もはや何の躊躇いもなく銃を握りＭＳを駆る。

誰よりも泣いた少女が、今度は誰かを泣かせる側となる……そんな痛ましい未来があってよいのだろうか？

パトリックはややあって口を切った。

「あれの自ら選んだ道だ、母の仇を討ちたいと願う。それに我々の娘はナチュラルどもに討たれるほど愚劣ではない」

与えうる限りの最高の能力を与えてある、と誇らしげにパトリックは言う。

その言葉にシーゲルはふと、故ユーレン・ヒビキ博士を想起する。
彼はコーディネイターの能力調整において名だたる権威で、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．でもひどく人気のある生化学者だった。
ラクスにあの淡いピンク色とあの声を与えたのも彼、そしてアスラン・ザラも同じように彼によって遺伝子調整された『作品』だ。
……調整限度まで引き出された能力は、果たして彼女にとって幸せなのだろうか？
「君はコーディネイターの在り方を信じて疑わんのだな」
「何を今さら」
ふっとパトリックは笑って、背中を向ける。
「いい加減あきらめるのだな、シーゲル。我々はもはやナチュラルになど戻れはせぬのだから」
シーゲルは口を閉ざした。
かつての戦友であり、ここまでともにＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を牽引してきたパトリック・ザラと自分との修復不可能な溝はその一点に起因するのだ。

＊＊＊＊＊

久々に戻る邸、虚脱した心持ちでアスランはソファーに身を倒す。
入浴しても気分は晴れない。
付けっぱなしだったＴＶは間断なくニュースを報じていた。
アスランは聞き流しながら新聞を広げてぼんやりと眺めていた。
『たった今入った速報です。追悼式典準備のためにユニウス・セブンへ向かっていた視察船が消息を絶ったとのことです』
え？
アスランは新聞をたたんで、モニターに目を転じる。
『視察船には追悼慰霊団代表のラクス・クライン嬢が搭乗しており、

その安否が気遣われています。繰り返します……』
ラクス・クラインが行方不明？
その時緊急呼び出しのアラームの音が聞こえて、ＴＶを切り、机に投げ出していた腕時計式のモニターをつける。
「はい、アスラン・ザラ。所属ＮＯ．２８００５６」
ＣＩＣの女性兵士が告げる。
『所属ＮＯ．２８００５６、クルーゼ隊アスラン・ザラ。通達了解後復唱願います。ヴェサリウス出港時間が変更になりました。３２時間後となります』
ＣＩＣからの通達にアスランは表情を引き締める。
「ヴェサリウス出港時間変更、３２時間後。所属ＮＯ．２８００５６、クルーゼ隊アスラン・ザラ了解」
『結構です、通達終了します』
思ったより急だな、とアスランは思う。
ラクス・クラインの行方不明と何か関係があるのだろうか？
「お嬢さま」
扉を開き、廊下から居間へと姿を現した執事のイェールが盆上に一枚のカードを載せていた。
「マクスウェルさまからお使いがいらして、こちらお言伝です」
手に取ったカードには、短くＴｈａｎｋ　ｙｏｕ．とだけあった。
ラスティの遺品は父親のマクスウェル議員から、彼の愛した母親へと渡っていくだろう。
……ただ哀しい。
思い返せばまた涙が滲んで、ややあってアスランは天井を振り仰ぐ。
ラスティの遺族に直接会って彼の最期を伝えるのが然るべきなのだろう――けれど今はまだできない。
ソファーの上で膝を抱え込んで、しばらくアスランはそのカードを眺めていた。
そして立ち上がる。
玄関脇で、執事は犬相手に戯れていた。

「イェールさん、お墓参りにいってくるわ」
「行ってらっしゃいまし」
番犬のクエスタの頭を撫でて、アスランは邸を出る。

車を走らせて辿り着いたアプリリウス国営墓地、白い墓石の群れの只中にそれはあった。
レノア・ザラ、C．E．33～70と刻まれた母の墓。
白百合の花束を手向けて、アスランはその前にそのままかがみこむ。
この下に母の遺体はない、他のユニウス・セブンの犠牲者たちと同様に。
P．L．A．N．T．の為に、立派な仕事をしている母をずっと誇りに思っていた。
1年前の今日、まだ母はアプリリウスにいた。

マイウスに戻るまでの間、お庭の花壇の水やりを忘れないようにお願いね。
それからお父さまのウィスキーは本棚に隠しちゃったから。

だってお父さまったら最近飲み過ぎなんですもの。
ね、やっぱりあなたもそう思うでしょう？
ええとそれから――それから。
とにかく毎日連絡するわ。あなたも忙しいでしょうけど顔を見せて頂戴。
じゃあ行ってくるわ――何かあったら連絡してね。

慌しいキス、母の最後の言葉は「愛してるわ、可愛いアスラン」だった。
そして愛する母はユニウス・セブンの研究所に赴いたのだ、1週間後の悲劇を知ることもなく。

我々はこれ以上の犠牲を生むわけにはいかぬ、絶対にだ。
――我々は我々を守る為に戦う……

追悼慰霊式典の場での父の言葉、そしてつい昨日の父の議場での言葉が耳に鮮やかに蘇る。

戦わねば守れぬならば……。

これ以上の母のような犠牲を出さない為に、誰かの大切な相手を失わなせない為に。
目を上げれば、小高い丘の上にP．L．A．N．T．国旗とZ．A．F．T．旗とが掲揚されているのが見えた。

Past：Academy－Prologue

C．E．７０．２．１１．
地球連合はP．L．A．N．T．に宣戦布告をつきつけ、全面戦争の火蓋が切って落とされた。
３日にわたる激戦によりZ．A．F．T．軍MS部隊が地球連合艦隊を殲滅せしめるも、地球連合のMAによる一発の核弾頭がP．L．A．N．T．の一基を打ち砕いた。
瞬時にして生み出された２４万３７２１名の犠牲者――ユニウス・セブンの悲劇、ブラッディ・バレンタインと後に人は呼ぶ。
時に２月１４日のことだった。

＊＊＊＊＊

アプリリウスホールにひしめく喪服姿の人々の只中、シーゲル・クライン議長の声が反響する。
『この地球連合の理不尽なる攻撃に対し、我々は徹底抗戦をここに宣言するものである！』
そして無数のシャッター音と閃光とが彼を照らし出す。
この２月１８日。
シーゲル・クライン最高評議会議長による黒衣の宣言後、引き続きユニウス・セブン追悼慰霊式が行われた。
『我々は決してこの悲劇を忘れない……御霊よ安んじて眠りたまえ』
遺族代表として弔辞を読み上げるパトリック・ザラ国防委員長の傍らには、腕いっぱいに白百合を抱いて立つ喪服ドレスの少女がいた。
壇の上の少女は国防委員長の背後でぽろぽろと涙の雫を流し続けて、必死に遺族代表というその役割に耐え忍んでいるようだった。

悲しみは伝染する――会場はすすり泣く人々の気配で満ちていた。

彼女の白い頬を伝う涙の雫がやがて白百合の花びらに落ちる。

黒い人々の群れが見守る中、悲しみを湛えた儚げな少女はやがてその涙で濡れた白百合を祭壇に捧げ、国防委員長に従って場を降りた。

そしてつぎつぎと献花台に人々が花を供えていく。

遺族なる人々は或るいは泣き崩れ、或るいは嗚咽し、互いを励ましあいながら壇へと進んでいく。

いずれこの花々は献花台もろともに凍結され、ユニウスセブンのあった区画に永遠の慰霊碑として捧げられることが決定していた。

「ただただ残念です、パトリック。奥方のことは……言葉もありません」

国防委員長を取り巻く人々の狭間、母が声を掛ける。

イザークはその背後に控えていた。

「ああ、本当に」

この一週間でひどくやつれた面のパトリック・ザラ国防委員長は口許を覆い、眉間に皺を寄せる。

……まるで１０歳も一気に年老いたようだ、とイザークは思う。

国防委員長の奥方は農学研究者で、ユニウスセブンのラボにいた。

「何でこんなことに……やりきれんよ」

「どうぞ気を強くお持ちになって下さい、パトリック。あなたまでも泣かれればレノアも一層悲しみましょう」

ユニウス市から選出されたルイーズ・ライトナー議員は自身嗚咽しながら言う。

「けれどわたくしもただ悔しくて悲しくて……ごく平和な農業コロニーを、あれほどの人々の命を、何故ナチュラルは自爆作戦などと言えるのかと……！」

国防委員長の傍らにあった少女はレースのハンカチで顔面を押さえ、その声を荒げるライトナー議員に抱きこまれて声も上げずにただ泣いていた。

「我々はこれ以上の犠牲を生むわけにはいかぬ、絶対にだ」

不意にパトリック・ザラは口調を和らげ、少女の背に手を回す。

「臨時最高評議会がある。お前はもう邸に帰れ、アスラン」

ライトナー議員が腕を離し、ようやくに少女は振り向いた。

綺麗なエメラルドグリーンの瞳、泣き腫らして目の淵を赤く染めた眼前の彼女は緩やかに波打つ蒼い髪、透き通るような色白の肌。

身長は自分よりもやや低いといったところで、実に端整で綺麗な少女だとイザークは呆然の心持ちで眺める。

初恋だった月のお人形（ジブリール）をそっくりそのまま成長させたような……まさか本人じゃあるまいな？

だとしたら地球にいるはずだと思っていたのだが。

いや、やはり母御に捧げられたのは白百合であるし、ジブリールときたら白百合だろう。

などという渦巻く疑念は、現実に響く彼女の声の前に立ち消えた。

「……よいのですか」

か細い、柔らかい声だった。

「よい。これ以上ここにいてもつらかろう。この数日ご苦労だった」

「お母さまのことはあなたも辛いでしょうけれど、どうぞ気を落とさずに」

母エザリアの言葉に、アスランという少女はしっかりとした言葉を返した。

「お気遣いありがとうございます」

ハッと我に返り、不謹慎ではあるが、とイザークは考える。

あの少女はひどく可愛い……自分がこんなことを思うのはラクス・クラインのデビューライブ以来のことだ。

「では失礼いたします」
特務隊に護衛されて辞去するアスラン・ザラの背中を見送りながら、イザークは言う。
「国防委員長に令嬢がおられたとは知りませんでした」
最高評議会議員の子どもたちには夜会で顔を合わせる機会も多かったが、彼女だけは一度も見たことがない。
「会うのはわたくしも初めてです。あの子だけでも助かったのがパトリックには幸いだったでしょう」
見遣りながら母は言う。
母上でさえ会うのは初めて？　……どういうことだ？
「あの、母上。まさか彼女は――ジブリールと」
「何が知りたいのです？」
ふと母エザリアが冷たい視線で振り返って、イザークは言葉を呑みこむ。
それ以上訊くのも躊躇われて、とにかくもユニウス・セブンの破滅にあの少女が巻き込まれなかったことをイザークは心の片隅で感謝した。

そしてP．L．A．N．T．は〝Peoples Liberation Acting Nation of Technology〟と改称すると同時に、地球に対しオペレーション・ウロボロスなる作戦の実施に着手した。

このP．L．A．N．T．ではZodiac Alliance of Freedom Treaty、通称Z．A．F．T．が政権を独占している。

党と政府そして軍が一体化しているこのP．L．A．N．T．において、今の16歳という自分の年齢で上へ上がることを目指すならば士官学校が目下一番早い。
イザークはぼんやりと流れていく外の景色を眺めていた。
休職せざるをえなくなった大学のラボに多少なり未練がないわけではないが、Z．A．F．T．要職にある母の都合もある。
最高評議会議員の子弟が従軍することで国民感情はいささかなりやわらぐ――という話であるらしい。
もっとも母の意向に沿うことに関しては異論はなかったし、否やを唱えたところで別に問題にもされないだろう。
軍の花形であるMSパイロットコースの選抜にももちろん合格済み。
士官学校養成課程での成績優秀者は士官たる赤服に叙任され、そして順調に出世を重ねるならば隊長、白服となっていく。
――やってやろうではないか。この俺ならば出来る。

やがて停まったハイヤー、イザークは車から降り「いってらっしゃいませ」というセーレの言葉を背に門扉へと入る。
桜並木の向こうに、重厚な士官学校校舎が見えた。
そして同じように真新しい緑色の詰襟制服を纏った同年代の少年たちが校舎へと向かっていく。
周囲は全てライバルも同然、気を引き締めねばとイザークは闊歩する。
P．L．A．N．T．を守る為、愛する母の期待に応える為。そして何故かちらと過る国防委員長の令嬢の面影。
俺は負けん！
やがて校舎手前掲示板前でたむろしている少年たちを威圧するように見回す、ここにこの俺に叶うやつなどいはしないだろう！
「見た？」
「ああ、……こないだの放送で見てた。可愛いよなぁ……」

周囲の緑服の少年たちがざわめく。
何だ?
イザークは眉間を潜めるが、その矢先、不意に背後から声が掛けられた。
「あれ、イザークじゃん。お前も入ったんだ」
イザークは振り返る。
数年ぶりに見える幼馴染。
金髪褐色の肌のディアッカ・エルスマンは大層背が伸びて、すっかり大人の低い声に変わっていた。
昔は俺よりチビだったくせに、と思わずイザークは睨む。
「貴様もか」
「まぁね。ユニウス・セブン見たらさすがに遊んでるわけにも行かなくなっちゃってさぁ」
最もらしいことを言う、とイザークは鼻の上に皺を寄せる。
「センターはどうした」
「やっぱりお休み。お前もだろ?」
「まあな。……で、おい、向こうのざわざわしてるのは何だ?」
「ああ、ザラ委員長の娘さんがここにいるんだってさ。お前も追悼慰霊式典TVか何かで見たろ? あの時の白百合のコ」
イザークははっとして一瞬怯む。
「な、何ィ――ッ!?」
人垣をかきわけて進む。
士官学校新入生には女の数が圧倒的に少ない、だから緑色の詰襟の男たちの只中で、淡紅色の制服を纏う彼女は自然目立った。
見紛うことのない少女は少しばかり臆した表情できょろきょろと周りを見回していた。

＊＊＊＊＊

「おーお、すげぇ人気」
人だかりを前にラスティ・マッケンジーは肩をすくめた。
あの追悼慰霊式典生放送で、ザラ国防委員長と一緒にいた彼女を可愛いと思っていたのは、どうやら自分だけではなかったようだ。
ラスティは傍らの少女に声を掛ける。
「挨拶してお友達になれば？　ＭＳパイロットコースで女子って珍しいじゃん」
「いやよ。別にお友達をつくりに来たんじゃないのよ」
真新しい薄紅色の制服に身を包んで、長い髪を一つ結びにしたシホ・ハーネンフルスは顔をしかめて顔を背ける。
「そう言うなってば。お前それだから友達少ないの」
「うるさいわね。ラスティが行けばいいじゃない！」
だが先方はシホに気づいたらしい。人波を縫うように歩み寄ってきて、実に朗らかに名乗った。
「私はアスラン・ザラ。よろしく」
「……シホ・ハーネンフースよ」
アスラン・ザラは手を差し出す、だがシホはそれを一瞥して、するりと逃げてしまった。
おいおい、これじゃ差し出した手が虚しいじゃないか、かわいそうに。
フォローするようにラスティが進み出てその手を握り締める。
「俺が代わりにご挨拶。ラスティ・マッケンジー」
救われたような顔で彼女はまじまじとこちらを眺めて、やがてしょんぼりとアスラン・ザラは言った。
「あのコに何か嫌われちゃったみたい。私何かした？」
「あいつ幼年学校から知ってるけど、ああいう性格。気にすんなよ」
話している最中、鋭利に削ぎ落とした銀髪にアイスブルーの眼差しの少年が凄い勢いで歩み寄ってきた。
「何故お前がここにいるッ！！　アスラン・ザラッ！！」

綺麗な顔と裏腹に口調も凄い勢いで少年が言い募る。
「……え？　そんな」
アスランは圧倒されたように一歩後ずさる、銀髪の少年は胸を張って仁王立ちした。
「士官学校に入ってくるとはいい度胸だッ！　俺はイザーク・ジュール、覚えておけッ！」
一方的に通告されて、アスランは何とも微妙な顔を見せた。
ジュール、どこかで聞いた名前だなとラスティは記憶を手繰り寄せる。
確か最高評議会議員あたりにそういう名前の凄い美女がいたような気がするのだが、身内だろうか。
「俺ディアッカ・エルスマン。よろしくぅ」
イザーク・ジュールの傍らにいた褐色の肌、金髪の少年は白い歯を見せてウィンクする。
陽気な見た目でいかにも軽薄そうなヤツだ、こんなヤツまで士官学校に、とラスティは思う。
いやまぁ、自分もいい勝負ではあろうだろうが。
わいわいと興味半分で取り巻く少年たちの只中でアスランは不安げな顔を見せる。
その時高い声が響いた。
「アスラン！　よかった、探しましたよ！」
深緑色のくるくるふわふわした髪の少女めいた少年――緑服なので辛うじてそう判別できる――が駆け寄ってくる。
「ニコル」
ホッとした様子でアスランが振り返る。
「……何、知り合い？」
「そう。ニコルのお父さまにはマイウスのカレッジでお世話になってたの」
おっとりとした様子でアスランは言い、傍らの少年は周囲を見回しながらにこやかに声を上げた。

「ニコル・アマルフィです、よろしくお願いします！　……って、あれ？　イザークとディアッカもいたんですね」
「おうよ。今頃気づくなよ」
「貴様みたいな子どもまで入ってきたのか！　貴様は大人しくピアノだけ弾いておけ！」
どういう繋がりかは知らないが、実にぞんざいな金銀コンビとニコル少年は顔見知りらしい、とラスティは興味深く眺める。
ムッとした表情でニコルは口を尖らせた。
「いいじゃないですか。僕だってもうじき成人なんですから。ねえ、アスラン？」
「うーん。でもピアノはいいの？　コンサートとか……」
「ピアノはまた弾けますよ。今はとにかく戦争が終わらなくっちゃ」
朗らかにニコル・アマルフィは言う、だが周囲の面々は不意を衝かれたように一瞬黙り込んだ。
そう、ここにいる全員がその思いで志願してここに集って来たのだ。
「そうね」
一言、沈痛な表情でアスラン・ザラが答えた。
『新入生の皆さんは体育館前へ移動して下さい』
場違いなほどにのんびりとしたアナウンスが青空に鳴り響いた。

Ｐａｓｔ：　Ａｃａｄｅｍｙ－１

退屈な機械工学の授業が終わり、チャイムの音とともに教官が講義室を出て行く。
がさがさとカバンの中を漁っていたディアッカが突如振り向いた。
「これ持ってきた。お前やる？」
「なんだ？」
イザークはちらと見る。
「これ」
ディアッカは数十枚はあろうかというカードをずらりと扇状に目の前で広げた。
「ああ。……下らん」
こいつは何かと遊び道具をいろいろ持っているが、教官に見つかったら一体どうするつもりなのだ、とイザークは思う。
「んじゃ、誰かウーノやつ集まれ～」
正面に向き直ったディアッカはその手の内で滑らかにカードをシャッフルしていく。
「マジで？」
「懐かしいじゃん」
ディアッカの掛け声に数人がちらほらと集まってくる。
「なあに、それ」
ふらりと傍らを通りかかったアスランは興味深そうに問う。
「ウーノ。あれ、お前知らない？」
４・５年前爆発的に大流行したカードゲームだ、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．で知らない人間を探すほうが難しい。
イザークは片眉を上げてアスランを見遣る。
「私ずっと月にいたから、よくわからない」
月だと？
……まさかコペルニクスか？

「あれ、お前ディセンベル出身だろ？　ザラ委員長って確かディセンベル出だったと思ったけど？」
ディアッカに訊かれて、アスランはひとつ唸った。
「ディセンベル生まれなんだけど、幼稚舎の頃に月に移ったの」
「なんでまた、月なんかに」
アイザック・マウが怪訝そうに首を捻る。
「その頃アプリリウスでお父さまの暗殺未遂があったらしくて、危険だからってお母さまと一緒にコペルニクスに避難してた」
ザラ議員暗殺未遂事件は母から聞いたことがある。
そうでなくても身辺が危うい立場の人だ、委員長は妻子を避難させていたのか――通りで自分が知らないわけだ、とイザークは得心する。
あとひとつ収穫、どうやら月のお人形はやっぱりアイツだったらしい。
コペルニクスなら何度も足を運んだ、そりゃもう何度もだ！
「……だからP．L．A．N．T．には2年前に戻ってきたの」
「月ってナチュラルもいるんだろ？　かえって危なかったんじゃねーの？」
「俺、生ナチュラルって見たことないんだよね。まあ別に見たくもないけど」
「苛められたんじゃないですか？　怖くなかったですか？」
マシューやコートニーやアイザックのそれぞれの言葉に、吃驚したようにアスランは目を見開いて声を大にした。
「そんなことない！　私の知ってるナチュラルはみんな優しい人たちばっかりだった！」
アスランの声に、講義室に残っていた皆が瞬時振り返る。
「……優しい人たちばかりだったのよ」
「おいおい……もしそうなら、こんな戦争になってないし、お前はここにいないよな？」
ディアッカがちらと見上げて冷ややかに言う。

「そうね。その通りよ」
力なく俯いたアスランはひどく悲しそうで、また泣き出すのではないかと思うほどに目が潤んでいた。
――半年前の開戦、ユニウス・セブンの悲劇、そして彼女は追悼慰霊式典の遺族代表として壇上に立ち、その涙は全Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．に放送されていた。

大勢がいる広い講義室に、ディアッカがカードを切る音だけが響いた。

そのまま静かにアスランは輪から外れて、ゆっくりと教室から出て行った。
「なんか、僕まずいこと言っちゃいましたかね」
余りの空気の重さに耐えかねたのかアイザックが不安げな声を上げる。
「気にすることないわ、あなたは別に大したことを言ってない」
輪から外れて席で本を読んでいたシホがおもむろに言って、ほっとアイザックが溜息をつく。
「ってぇか俺のせいだろ。仕切りなおしていこーぜ。やるやつ来いよ」
ディアッカの声に数人が群がる。

しかしアスランは次の座学の時間も戻ってこなかった。
こんな単位に関わってくる重要な講義をほったらかして何やってるんだ、アイツは。
イザークは空席を眺めながら眉間を潜める。
昼休憩を告げるチャイムの音、そして教官が退室する。
「ったく何やってるんだか！　探しにいってくる」
講義中にもそわそわしていたラスティが慌しく机にノート類を突っ

込んで一番に立ち上がる。
「僕も行きます。待って、ラスティ」
ニコルがひらりと机を越えて後を追う。
「あの、僕も行くからッ！」
「ちょ……俺も」
負い目を感じているらしいアイザックとマシューが後を追う。
わらわらと彼らが走り抜ける風に、銀髪がふわりと靡いて、イザークは前髪を直しながら席を立つ。
「そういや、煙草吸おうと思ってさ。見つからないとこ探してたら中央校舎屋上の貯水タンクの上であのコとばったり出くわしたっけ。さてアイツらに見つけられるかねぇ？」
廊下を並んで歩きながらディアッカがなにげなく言う。
「ふん」
イザークは角を曲がり、ディアッカは足を止める。
「あれ？　食堂行くんじゃねーの？」
「便所だ」
ふーん、とディアッカはこちらをちらと見ただけで、廊下をそのまま真っ直ぐ進んでいった。
中央校舎屋上の貯水タンク……？
イザークは窓から中央校舎屋上を眺めやる。
そんなところに彼女は本当にいるのだろうか、そもそも一体何の用があってそんなところに。
人気のない渡り廊下を通って中央校舎屋上への階段を上る。

――こんな人の気配自体がないところに？
イザークは梯子を上って視線を彷徨わせ、傍らを見てぎょっとする。
すぐ横で配管を枕に仰向けで寝転がっている！
貯水タンクの上に上がり、イザークは仁王立ちする。
「おい！　大事な授業すっぽかしてこんなところで昼寝か！　もう昼休憩だぞ！」

怒鳴ればうっすらと長い睫毛の下からエメラルドグリーン色の目が見えた。
「夕べ工作してて夜更かししたせいね。シホに怒られちゃったわ、かちゃかちゃ眠れないって」
一度はじめたらとまらなくって、とアスランは上半身を起こして首を回してこちらを振り仰ぐ。
「イザークもここで煙草吸うの？」
初めて名前を呼ばれたような気がする。いや、そもそもまともに言葉を交わすのも初めてだ。
「ディアッカと一緒にするな！　誰が吸うかあんなもんッ！！　ラスティどもが心配してお前を探してたぞ！　とっとと戻れ！」
「そう。今日はこのままさぼろうかなって思ってたのに。でもやっぱりお腹すいちゃった」
ぽんぽんと上着とスカートの砂を払って立ち上がり、アスランは背伸びして腕時計を見る。
「食べた？」
「……いや」
「なら急ぎましょ。まだ昼定食あるといいんだけど」
数メートルはある貯水タンクからするりとアスランは音もなく降りる、タイトスカートだというのに身軽なヤツだ。
屋上から階段を降りる。
波のようにゆらゆらと青く波打つ髪を眺めていた、その彼女が背中で問う。
「ねえ。イザークは何で軍に入ろうと思ったの？」
「P．L．A．N．T．を守る為に決まっとろうが！　ユニウス・セブンで怒らんコーディネイターはいない！　あれは虐殺だ！」
「そう……そうよね」
「お前は？」
イザークはつっけんどんに訊く。
「同じかな。私このP．L．A．N．T．が好きだもの。――ユニ

ウス・セブンみたいに壊されたくないから、戦うの」
そう答えた彼女はあの追悼慰霊式典の時とは違う、強い眼差しで自分を見上げる。
それに見惚れて、イザークはふと気づく。
アスランと2人で話すのは初めてではないか、何で一体こんな重い話をしているのだ。
そもそも慰めるとか、いやもうちょっとマシな話題があるはずじゃないか？
煮詰まった頭を冷やそうと懸命になりながら食堂に入る、まだ定食は残っていた。

まさかアスランと一緒に昼飯を食べるなんて全然考えていなかった。
「探しにきてくれて、ありがとう」
「誤解するな、誰がお前なんぞ探すか！　……その、たまたまだ！」
きょとんとした顔のアスランは首を捻った。
「そう、偶然だったのね」
せっかく話すチャンスだというのに俺は何を言ってるんだ。
イザークは上の空で食器の中のものをつつき回す。
「あの後、私のせいで気まずくなっちゃったかな？……気にしてくれてないといいんだけどな……」
「自意識過剰もほどほどにしろ！　誰があんなの気にするか」
「そう？　ならいいんだけど」
緊張して話題を探して、妙にぎこちなくなる。
料理の味がしない。
「し……しかしお前が授業をさぼるようなヤツだったとはな！　単位に関わってくる授業だったぞ！」
「そっか。誰かにノート見せてもらおうかな。イザーク取ってる？」
「甘えるな！　俺のノートを見ようなんぞ１００年早い」
「そう。じゃあニコルにお願いしよう」

会話はキャッチボールというが上手くボールをキャッチできない…
…しかも何故だろう、自分は暴投しているような気がする。
イザークは眉間に皺を寄せた。

＊＊＊＊＊

ラスティは食堂で定食を食べているアスランを発見して声を上げる。
「いた！　アスラン！　アイツいつの間に！」
ニコルが駆け寄ってくる。
「アスラン……」
「あーちょい待って」
なにやら柱の影に潜んでいるディアッカが制止する。
「何だよ」
ラスティが怪訝な顔をして歩み寄る。
「や、イザーク観察中。お前らが入ってったらアイツ絶対離れちゃうから、もうちょっと見せて」
「イザーク？　何でです？」
ニコルも屈みこむ。
珍しい組み合わせだな、とはラスティも思う。
アスランとつるんでいるこの自分ですら、あの2人が話しているところなど見たこともない。
そもそもイザークはプライドが異様に高くて万事高飛車で、友人らしきものといえば物好きなディアッカくらいじゃないだろうか。
イザークはしかめっ面で、実に不味そうに――そこまで不味いはずもないのだが――定食をつつきまわしている。
あれでは向かいに座っているアスランもさぞやりづらいだろう、時々困ったような顔をしている。
「やっぱ俺行くぞ、見てらんない」

「待てって。見ろよイザークの耳の赤さを」
「え？」
確かに赤いが。
「どういうことだよ」
「わかるだろうが。そういうことだって」
「ああ、そっかぁ。通りでいつも視線を感じるはずですよね……まさか僕かラスティに興味あるのかとドキドキしてましたけど」
ニコルがしみじみと言った。
「で、それより僕らも食べましょうよ、定食なくなっちゃってるかも」
ぼそぼそと言っている狭間で、観察目標に動きがあった。
「ああっ！！　アスランさんっ！！　よかったこんなところに！！」
ちぇッ、とディアッカが舌打ちをした。
「ったく、空気読めよなアイザック」
アイザックがアスランの傍らに立ち、その隙にイザークはさっさとトレイを抱えて移動してしまった。
……なにやらすごく不満そうな割に安心したような、複雑な表情だな、と見送りながらラスティは思った。

＊＊＊＊＊

やれやれ今日も面倒臭い講義が終わった。
さっさとＭＳに乗りたいのに、まずは理論から入るとはこれまた頭でっかちなことだ。
日夕点呼までの貴重な自由時間に勉強する気にもなれず、とりあえずディアッカは腰を下ろす。
中央校舎屋上の貯水タンクの上はとにかく見晴らしがいい——Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の空と雲が間近に見えるようだ。

開放感のただなかで背後の配管に凭れ掛かり、煙草に火をつける。
目を閉じて深く煙を吸い込み、肺を満たす感触にふと安心感を覚え、そしてゆっくりと吐き出す。
脳細胞に染み渡る、もしかしたらもう自分はニコチン中毒なのかもしれない。
アイリーンが知ったら、きっとまた例の溜息交じりの呆れ顔で「お前というやつは」とでも言うだろうか。
ふとディアッカは目を開く。
すぐ間近に人の気配があった。
風の流れが途切れるのと同時に影が差してディアッカは見上げる。
白い足、薄紅色のタイトスカート、ゆるゆるした蒼い髪。逆光で顔はよく見えないが、誰かはすぐにわかった。
「……んだよ？」
「煙草は身体に悪いわ」
見下ろしてアスラン・ザラは言う。
「別に、気分転換」
ディアッカはヘッドホンを外す。しゃかしゃかという機械的な演奏音は外してもなお聞こえるので、ついでに電源をＯＦＦにする。
「何、文句でも言いにきた？　つーか俺謝んねーぞ。間違ったこと言ってないからな」
「そうね。別にそんなので来たわけじゃないわ」
傍らに腰を下ろして彼女は言う。
「ただ、ナチュラルにも優しい人がいるのに、みんながひとくくりにするのがちょっと嫌だっただけ」
「んなこと言われてもね。地球のブルーコスモスってのとか見てみろよ。あいつら青き清浄なる地球の為にとかって何してる？　良いコーディネイターは死んだコーディネイターだけだとかって言ってるぜ？」
「……そういう考えも嫌だわ。でも私がそう言ったところで何も解決にならないのよね」

ディアッカは携帯灰皿に灰を落として、また煙草を吹かす。
それを眺めていたアスランがおもむろに言った。
「私にも一本ちょうだい、気分転換したいわ」
「だーめ。女のコには厳禁なんだぜ」
ディアッカは大きく息を吐き出して、煙草を携帯灰皿でねじり消して投げ込みキャップをして胸ポケットへとしまいこむ。
教官に見つかったらトイレ掃除2週間ものだ。
「いい気分転換方法教えようか？　何なら手ほどきしてやってもいいけど？」
「なあに？」
「セックス」
「――そういう冗談大嫌い」
「や、わりとマジで」
無言でアスランは立ち上がる。
そしてぱっと振り返ると言った。
「次にそんなこと言ったら、そうね、……殴る！」
細腕のくせによく言うぜ、とディアッカは苦笑いする。
「女のコに叩かれるのはもう慣れっこだけどね。殴られるのは勘弁してもらおうかなあ、俺、いちおう舞台業だから顔が商売のタネだし？」
もう、と呆れ顔でアスランは腕組みする。
「5時からラスティたちとトレーニングルームで腹筋競争するの。参加者募集中。イザークも来るって言ってたし、ディアッカも来ること！」
「え？……おいおい、腹筋競争かよ」
ディアッカは苦笑いする。
「そうよ。ウィラード教官から課題が出てるじゃない、次の授業までに腕立て腹筋各１００００回って。１人でやるよりはかどるでしょ」
下らないことをするものだ、とディアッカは口元を笑わせる。

それでもまぁ多分、多少の気分転換にはなるかもしれないし、煙草よりは体にはいいだろう。
「りょーかい。んじゃ行こうかね」
ディアッカものっそりと立ち上がった。

4：　ヴェサリウスにて

雑然とした兵士たちの行き交う廊下を抜けて、高天井のドックへと辿りつく。
前を行くラウ・ル・クルーゼ隊長は書類をめくりながら大股に歩を進め、アスランは小走りぎみにそれに従う。
「隊長！」
「ん？　何かね」
「今回の出港が早まった理由を……」
問いかけている最中に、突然眼前の隊長が足を止めて、その広い背中にアスランはしたたかに顔をぶつけた。
振り返りざま、隊長は口元を笑わせた。
「おやおや。お父上がいらっしゃっているよ、アスラン」
隊長の背後から少し身を離し、アスランはヴェサリウスの方向を見遣る。
側近たちを従えた父の姿がヴェサリウスの搭乗口の前に見えた。
多忙で邸には戻れないようだが、今は時間に余裕があるらしい。
ハッチ前での隊長とともに敬礼ののち、父パトリックはおもむろに口を切った。
「アスラン。追悼慰霊団の事前調査に赴いていたラクス・クラインが行方不明だというのは知っているな」
「はい」
一瞬考え込んで、アスランは傍らのクルーゼ隊長を振り仰ぐ。
「やはりヴェサリウスが探索に出るのですか？」
それはもう、と苦笑いを湛えた隊長は肩をすくめる。
「P．L．A．N．T．の姫君をほうっておくわけにもいかんだろう？　仮にも大事な式典前だ」
「しかし民間船ですし、まだ何かあったと断じるには早いような気もしますが」

デブリベルトに漂うユニウス・セブンの残骸は確かに地球に近い。
だがだからといって地球軍がうろついて、わざわざ民間船を狙い撃ちするだろうか？
「何もなければそれでよい。だが何かあればなおよかろう」
意味深な父の言葉にアスランは目を見開く。
「そういうことだ。くれぐれも頼むぞ、クルーゼ、アスラン」
「了解いたしました」
敬礼で父の後姿を見送りながら、解せないアスランは呟く。
「ナチュラルから歌姫を助けて、式典を盛り上げろということでしょうか？」
「むしろ亡骸を号泣しながら抱いて戻れ、かな。さぞかし絵にはなろう」
アスランはぎょっとして傍らの隊長の顔を見る、相変わらずの笑みを口元にたたえた隊長が仮面の下から見返す。
時々この上官は底知れぬ冷たさを垣間見せる、それが正直恐ろしくも怖い。
「P．L．A．N．T．の怒りにさらなる油を注ぐには悪くない材料だ。慰霊の歌姫をすら撃つナチュラルに……」
陶酔を滲ませて語るクルーゼに耐えられず、遮るようにアスランは声を上げる。
「隊長！」
「まあ生きているかどうかはともかく、国防委員長は君が彼女を探し出すことにメリットがあるとお考えなのだろう」
「……仰っている意味がわかりません」
おやおや、とクルーゼ隊長は身を翻して艦内へと入り、アスランは慌ててその後を追う。
「要するに君の手柄はお父上の名誉ということだ」
「私の？　当然隊長のお手柄と評価されるものと思われますが！」
ふと足を止めた仮面の隊長は振り返り、口許を歪めた。
「陰は陰だよ。私は君たちとは違うのだからね」

そのぞっとするほど深くて暗い声に肌が粟立ち、思わずアスランは両肩を抱いて艦橋へと進む上官を見送った。

＊＊＊＊＊

何故うまくいかない？

苛々とイザークは唇の端を噛みながら銃撃する。

いつもながらに的は次々と破砕されていく。

浅い夢でさえ垣間見る、幾つもの光芒を思い起こさせる。

綺麗だと見惚れる間もなく駆けるＭＳで撃ち落し砕け散る、流れ落ちる破片……さながら流星のように。

あの足つきと白いＭＳもいずれそうしてくれる、と決意を新たにする。

この俺が陥してやる。

しかし未だに思い出すだに腹立たしい――あの時アスランが邪魔さえしなければ、あの白いＭＳは既に撃墜できていたはずなのに！

そしてあれがいなければ、あの忌々しい足つきなぞ容易く陥ちる。

隣に並んだアスランの幻と競うように的を狙う。

――本国への召還は咎めを受けるためなのだろうか、それとも皆が噂するように父親の意向に沿うためなのか。

まさか後者かと思えばまた頭に血が上る。

ラスティはいなくなった。

にも関わらずまたお前は俺を裏切る気かッ！！？

最後の一発をわずかに中央から外し、イザークは舌打ちする。
耳からヘッドホンを外し、次の弾倉を詰め替える。
俺でなく、他の男を選ぶくらいならいっそ殺してやる！！　と決めてもう４ヶ月余り経つ。
澱のように降り積もっていくのは、憎しみか、それとも――

『ＭＳパイロットはブリーフィングルームへ、繰り返します、ＭＳパイロットは……』
例にない召集に艦橋に駆け込めば、ゼルマン艦長がモニターを眺めていた。
まだディアッカとニコルは来ていないらしい。
「一体何です」
「先行していたヴェルギリウスが足つきを捕捉した」
「足つき……ッ！？　」
瞬時イザークの頭に血が上って沸騰する。
モニターにはヴェルギリウスから転送されてきた宙域図が展開されていた。
「あんなところに！」
「ああ」
ゼルマン艦長は渋い顔を見せる。
追跡の任にあるこのガモフが、かくも遠くに引き離されているという事実は艦長の自負心を痛く傷つけたらしい。
駆け込んできたニコルと、ゆったりとした足取りで入ってきたディアッカもすぐに事態を把握した。
「ラコーニ先行隊との合流までは？」
ニコルが問う。
「この調子だと６時間はかかるだろうな」
焦りを滲ませた声でゼルマン艦長が言う。

「6時間も？　はぁ、やれやれだねぇ」
頭を掻きながらディアッカは背中を向けて、イザークは見咎める。
「どこへ行く、ディアッカ」
「今のうちにちょっと昼寝の続き。だって今んところどうしようもないっしょ」
なるほど、ぼさぼさの髪をそのままに後ろに流して、ディアッカはやむなく上着を羽織った、という感じだ。
「お前は緊張感が足りんッ！」
イザークの怒鳴り声に、ディアッカはちろりと剣呑な眼差しで振り返る。
「お前はちょっと落ち着けよ。そんなんだからアスランにいつも負けるんだろ」
「……うるさいッ！」
背中で手を振ってディアッカはブリーフィングルームを後にする――全く、昔っから掴みどころのないやつだ。
「追撃戦にヴェサリウスは間に合うんでしょうか？　そろそろ本国を発った頃だと思いますけど」
ニコルが身を乗り出す。
「アスランは？」
「抜けたとは聞いていないな。イージスも搭載されていることではあるし、搭乗しているとは思うが……さて」
抜けられてたまるか、とイザークは暗い眼差しで宙域図を眺める。
あのストライクをあの女の目の前で撃墜して、屈服させてやらねば腹の虫がおさまらない！！

＊＊＊＊＊

孤独な時間はただ無益な思考を増長させる。

艦橋で艦長やクルーたちと雑談に興じる方が余程有意義だ、とアスランはいつものように艦橋へと足を向ける。
ドアが開いた瞬間、不意の慌しさが襲い掛かってきた。
隊長までいる、何だろう？
アスランは戦略立体パネルの前へと踏み出す。
「熱源３……地球軍の艦隊と推測されます」
ＣＩＣ管制官のアビー・ウィンザーが声を上げる。
「地球軍の艦隊が一体こんなところで何を？」
報告を受けてアデス艦長は怪訝な顔をした。
モニターパネルを眺めていたクルーゼ隊長がふむ、と一瞬考え込むような色を見せる。
「足つきがアルテミスから月へ逃げるとするならどうだろうね、アスラン？」
問いかけられて、パネルの前に立ったアスランは答える。
「補給か出迎えの艦隊、といったところでしょうか」
「そうだな。もしあれが足つきへの補給を任務としているなら、ここで落としておくにこしたことはない」
ふっと仮面の下でラウ・ル・クルーゼはいつもの笑みを見せる。
「我々がですか？　……しかし我々には……」
アデス艦長が顔を顰めるが、クルーゼ隊長は滑らかに言葉を紡いだ。
「かといってスルーもできまい？　我々は軍人だよ。たかが１人の少女の為に甚大な被害を蒙るなど、私も後世の歴史家に笑われたくないからな」
この実利主義の隊長から、まさかそんな言葉が出るとは……とアスランはちらと上官の横顔を眺めた。

ともかくコンディションレッド発令に伴い、アスランは艦橋から飛び出る。
慌しい着替えの後、控え室に転がり込めば他のジンのパイロットた

ちが既に艦橋と通信を繋いでいた。
『地球軍艦隊だ、熱源3……モンゴメリー級と推測されている』
モニターの向こうでクルーゼ隊長が淡々と説明する。
『搭乗後即出撃、艦隊を撃破せよ』
「了解しました」
指令を受けてそのままアスランはキャットウォークへと急ぎ、イージスへと搭乗する。
キャットウォークが撤収され、イージスはカタパルトへと移動する。
『発進よろし』
「アスラン・ザラ、イージス出る！」
ケーブルが外れ、ＰＳ装甲を発動させた機体が紅に染まる。
静寂の虚空に飛び出れば、先行したジンのマシューから通信が入った。
『アスラン！　そいつの性能見せてもらうぜ！』
「ええ」
今は戦うことだけに集中しよう、とアスランは迷いを振り捨てる。
敵艦からは三機編隊のＭＡメビウスが発進し、展開するさまが見えた。
前時代の遺物など敵ではない。
発射されるミサイルをイージスはひらりひらりと交わしながら片端から撃ち落していく。
ライフルを掲げればもはやスコープさえ必要なかった、突撃してくるＭＡを撃墜するのは余りにも容易かった。
歯がゆささえ覚えながら、アスランはそのまま機体を翻して敵艦に向かう。
かくも接近を許すとは……。
一瞬の逡巡、そして機関部にビームを3発打ち込めば、それで十分だった。
艦は機関部を切り離し、戦線から脱落していく。
次の艦へ！

イージスをＭＡ形態に変化させ、先端の鉤爪を開く。
初めて使う砲、５８０ミリ複列移相エネルギー砲スキュラ――アスランはトリガーのボタンを押す。
モニターを眩く染め上げるエネルギー砲はやすやすと眼前の艦体を貫き、その戦艦は音もなく爆散した。
戦艦をも一撃で落とす恐るべきエネルギーにアスランは眉間を潜める。
なんて力を与えたのだ、たかがＭＳに！
今更ながらに、自分が搭乗するこの機体の力に息詰まる思いがした。

一方、視界の片隅で瞬時の白炎に包まれるジンの姿が映った。
「え？」
アスランははっと我に返る。
『マシューがやられた！　ちっくしょうッ！』
四散するジンの残骸の彼方、未だ真空中に軌跡の残る射線の向こうには白く輝く艦影があった。
足つき！？　そして、キラ！
モニターがすぐさまストライクを捕捉して、アスランはＭＡ形態を解く。
ビーム砲を打ち込みながら真っ直ぐにストライクが突っ込んでくる。
迎え討つ！
ヴェサリウスから放たれたミサイル弾が敵艦に爆炎を上げて、虚空が瞬時赤く染まる。
その隙に接近してビームサーベルを抜き放つ。
掠めてすんでのところでストライクは回避し肩からミサイル弾を放った。
後退しながらひらりとそれを交わす、眼前でミサイル弾はぶつかり合い、爆発を起こした。

キラ……腕を上げている？

アスランは息を呑む。
その合間にもヴェサリウスの主砲が火を噴いた。
２本の光条が宙域を走り、残った旗艦を貫く。
凄まじい爆発が場を白く照らし、やがて熱を帯びた残骸がその場に姿を現した。
残るは無防備な足つき一隻だけ、あれさえ陥とせば！
アスランは瞬時そう判断し、ストライクから足つきへと転進すべくペダルを踏み込みバーニアを吹かす。
気付いたストライクが追いすがる。
『駄目だッ！！　そんなのさせないッ！』
音声回線から漏れてくるキラの必死な声が耳を打つ。
ビームサーベルを打ち交わしながら、速さに勝るイージスはストライクに先んじる。
『やめて――やめてよッ！　！　アスランッ！！』
「今さらあなたは何を言ってるの！？　戦いなのよ、これはッ！」
キラの癇癪にも似た声に焦れて、アスランの口調も自然荒くなった。
「敵は撃つしかないでしょう！？」
スコープを引き寄せて、ビームライフルを白亜の艦橋に向けたその時、スピーカーから突然の声が漏れてきた。
『Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．全軍に告ぐ！』
全周波放送で入る女の硬質な声は驚愕の内容を伝えた。
『こちらは地球連合所属艦アークエンジェル！　当艦は現在、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．最高評議会議長の令嬢ラクス・クラインを保護している！』
ラクス・クライン！？
トリガーにかけた指先はそのままに、アスランはイージスを滞空させてその放送に耳を傾けた。

もつれるようにイージスにとりついたストライクもまた、硬直したように中空に留まっている。
『偶発的に救命ボートを発見し人道的立場から保護したものであるが、当艦への攻撃が加えられた場合、それは貴艦らのラクス・クライン嬢への責任放棄であると判断し、当方は自由意志でこの件を処理することをお伝えする！』
攻撃すれば人質を殺すと？　――卑怯で無様な真似を！
忌々しさに眉間に皺が寄る。
隊長はどう出る？　と考えを巡らせる間もなく、イージスのサイドモニターに母艦からの帰還命令が表示された。
攻撃を仕掛けていたジンも否応なく撤退を開始した。
やむなくアスランもライフルを降ろし、ストライクを振り払うように機体を返した。

状況が変わり次第出撃となる、だがすでに事態は膠着したまま数時間が経過していた。
パイロット控え室では一様に重い空気が横たわる。
同僚を失ったこともさることながら、思わぬ人物があの足つきこと“アークエンジェル”に囚われていることが沈黙をさらに重苦しいものにする。
「みっともない真似するよなぁ、援護に来て不利になったら人質出してくるのかよ」
「ナチュラルの浅知恵さ！　どうせ逃げられないってのに」
「でもどうするんだろうな？　下手打てばラクス・クライン……」
パイロットたちの会話を聞き、生ぬるいコーヒーを飲み干しながらアスランは一つ溜息をついた。
厄介なことになった――このまま足つきが地球軍と合流し彼女の身柄があちらに渡れば外交カードとして使われるのは必至だ。
かと言ってあの冷徹な隊長がみすみすそれを見逃すとも思えない。

戦場でのこと、と彼女もろとも足つきを陥とす可能性大だ。
「このまま追撃のヴェルギリウスやガモフと合流するんだろ？」
「やっぱりそこで一気に叩くのかねぇ。となれば……」
たかが少女一人、と隊長は処するだろう。
だが、その“たかが少女一人”すら救えない――自分たちは一体何の為に戦う？
その矢先、突然スピーカーが震えるような音を立てた。
『Z．A．F．T．艦に告げる！　こちらは地球軍アークエンジェル所属ストライク！』
ノイズ交じりに漏れてくる、まだ年若い少年のたどたどしい声。
「何だ？」
「お？」
顔を上げたパイロットたちからそれぞれに怪訝な声が漏れる。
聞き間違えようもない！
アスランは腰を浮かす。
『ラクス・クライン嬢を同行、引き渡す！　ただし……ナスカ級は艦を停止。イージスのパイロットが単機で来ることが条件だ！』
「イージスのパイロット？」
「アスランか」
キラが私を呼んでいる！
『この条件が守られない場合……彼女の命は保障しない！』
「とさ。どうする？」
「行くわ！」
ぱっとアスランは立ち上がり、控えルームから飛び出してヘルメットを抱えてキャットウォークへと飛翔する。
技術チームが機体の損傷をチェックしていたが、構わずするりと滑り込んだコックピットから艦橋に通信を繋ぐ。
「発進指令を！」
『敵の真意がわからん。君をわざわざ指名というのも気になる……ラクス嬢が乗っているという確証もない』

罠だと疑う艦長からは色よい返事が返ってこない。
アスランは唇を噛む。
「クルーゼ隊長！　お願いします！」
切り替わってしばし沈黙があったが、滑らかな声が答えた。
『……よかろう、出たまえ』
「ありがとうございます！　技術チーム、出るわ！　撤収して！」
わらわらと整備士たちが奥へと引っ込み、キャットウォークが上がり、そのままケーブルがぱらぱらと外されてイージスはカタパルトへと移動する。
そして射出されて宇宙へと再び戻った。
背後ではヴェサリウスがエンジンを停止する。
星屑の海を渡る最中、モニターに熱源を捉える。
Ｘ１０５、ストライクの表示。

待っていた。
アスランはストライクの手前でスラスターを吹かせて制動を掛ける。
威嚇するようにビームライフルが向けられる。
『アスラン・ザラか？』
キラの声は緊張で強張り、ともすれば上ずりそうにも聞こえる。
「ええ」
アスランは手短に答えた。
『コックピットを開け！』
ハッチを開く。
まっすぐに向いたライフルの銃口が太陽光を受けて、眩く煌いて見えた。
私を撃つ？
アスランは凝視する。
今ビームライフルを撃たれれば自分は瞬時に蒸発してしまうだろう、だがきっとキラは撃たない。

やがてオープンになっている回線から向こう側の会話が聞こえてきた。
『ラクスさん、何か話して』
『え？』
『この距離だから、話さないとあなただってことときっとわからないよ』
『ああ、そういうことですのね。お久しぶりですわ、アスラン・ザラ』
相変わらずのたおやかな声に、ふっとアスランは笑む。
P．L．A．N．T．一の歌姫のこの涼やかな声を自分は幾度耳にしたか。
そして彼女自身には去年の追悼式で顔を合わせて以来だろう。
「確認したわ」
『では彼女を引き渡す！』
宙を滑るようにP．L．A．N．T．の歌姫はイージスへと移る。
慣性で飛び込んできた彼女をハッチの上で抱きとめて、アスランはキラを振り返った。
「あなたも来るのよ、キラ！」
これがきっと最後のチャンスだ、とアスランは思う。
「あなたは兵士じゃない！　ＭＳの訓練もろくに受けていない、軍属じゃないんでしょう！？」
『……うん……』
そしてこの逡巡、キラは戦うこと自体に迷いを覚えている――それは直感だった。
あの“アークエンジェル”に搭載されているＭＳは、おそらく１機のみ。
追撃戦の重圧の只中、腕を上げているのもきっと必死で気張っているからこそなのだろう。
痛ましさすら覚える。
「何故戦うの？　たった１人で、そんなに辛い思いまでしてあの艦

を守って何が得られるの？」
『アスラン、僕は……』
「このまま帰ったところで、あなたはきっと咎を受ける。ナチュラルである彼らには理解されないわ」
言葉に詰まるキラ、どうやら自分の言葉は彼の核心を突いたらしい。
だからアスランはことさらに言葉を柔らかくして告げる。
「こちら側にいらっしゃいキラ。まだ間に合う、だから」
彼のしばしの沈黙に、行けるものなら一緒に行ってしまいたい、という声が聞こえたような気がした。
『でも……でも！　僕がいなくなったらアークエンジェルはどうなるのさ！？　例えわかってもらえないとしても……あそこには……友達が……守りたい人たちがいるから……』
あなたは私よりもナチュラルである彼らを選ぶ、決して融和することのないであろう彼らを。
「そう。……それがあなたの結論ね」
だがやがてキラは泣きながら癇癪を起こしたように怒鳴って言い募る。
『僕はッ！　むしろ君に来て欲しいよ、こっちにッ！！　君は僕の味方のはずだろッ！？』
ラクスがこちらに視線を移したのも気付かないまま、いったい何を言い出すのか！　と動揺のままにアスランは目を剥く。
『だってそうじゃないか、僕らずっとあんなに一緒だったのにッ！！　なんで僕がひとりぼっちにならなきゃならないんだよッ！？』
聴くに堪えずに、アスランは「キラ！」と制するが、それを圧して彼の声が響いた。
『コペルニクスでの約束、忘れたなんて言わせないッ！！』
だから僕はヘリオポリスでカレッジに進んだんだ、とキラが声を大にする。

ああ……私がいつかどこかで忘れてしまったことを、キラはまだ覚えていた。
アスランは首を振る。

「今は戦争をしているのよ、そして私は兵士になってしまった」
『……だから僕と戦うの？』
昔から泣き虫で甘えん坊で、駄々をこねて結局キラはいつも自分の意見を通す。
折れるのはいつも私だった――でも今はもう譲れない。
身を斬られるような思いの只中、アスランは瞑目した。
「そうよ。連合で戦う以上、あなたは敵だわ」
『……君とは戦いたくないよ、アスラン……』
懇願にも似たキラの鼻声の響きが、麻痺したはずの心の痛みを蘇らせかけて、感情を抑圧するようにアスランは語調を強くする。
「地球軍の艦を守りたいのならば私を討ちなさい、キラ！　そうでなければ私はいずれあなたの仲間を討つことになる、私の仲間が討たれたように！」
迫れば通信回線の向こうで怯む気配があった。
『アスラン……』
慣性に任せてストライクが遠ざかっていく。
そしてやがてキラはハッチを閉じ、ストライクは銃を下ろした。
ラクスをコックピットに導き、アスランは座席についた。

沈黙と静寂のままに帰投する最中、すれ違うようにシグーが通り過ぎていった。
隊長機――アスランは視線でその姿を追う。
『アスランはラクス嬢を連れてそのまま帰投しろ！』
隊長から指令が入る。

当然だろう、これ以上の好機はない。ふと諦念が入り混じって知らず無表情になる。
「了解しました」
「アスラン・ザラ？　キラさまはあなたの大事なお友達なんでしょう？」
傍らに立つラクスの言葉が、耳障りだ。
「いえ。これでいいんです」
「いいえ、ダメです！　わたくしが許しません！」
え？
ラクス・クラインは突如としてアスランの視界を遮るように身を乗り出し、そのまま通信回線に手を伸ばした。
「ラクス！？　危ないですから……！」
予想外の行動に制止する間もなくスイッチが入る。
「ラウ・ル・クルーゼ隊長、おやめ下さい！　慰霊団代表のわたくしのいる場所を戦場にするおつもりですか！？　それはわたくしと亡き方々への侮辱です！」
ラクスは居丈高に、猛々しささえ感じさせる勢いで“命じる”。
「聞こえませんかッ！？　すぐに戦闘行動を中止なさいッ！」
しばしののち返答があった。
『……了解しました、ラクス・クライン』
隊長相手になんて真似を！
唖然としたアスランの前で、にっこりとラクスは笑んだ。
「だってわたくしは軍人ではありませんもの。言いたいことは言わせていただきますわ」
おっとりとして穏やかに笑むこの少女に、つい最前の勢いは感じられなかった。

＊＊＊＊＊

艦橋を出てきっちり3時間後にディアッカは再びドアの前に立つ。
さっき以上にぴりぴりとした雰囲気で、戦略パネルを隔ててイザークとニコルが睨み合っていた。
また何か揉めたのだろうか……ディアッカはうんざりする。
「んで？　今度はどーしたんだよ」
「ヴェサリウスが地球連合軍第八艦隊先遣隊を撃破したそうです」
ニコルは溜息混じりに言う。
「へえ、すごいじゃん？」
「すごくなんぞないッ！」
イザークはぎりぎりと歯軋りする。
アスランにまた先を越されたのが悔しいのか、とディアッカは推察する。
ニコルは言葉を続けた。
「ところがいざ足つきを落とそうという段になって、ラクス・クラインが足つきにいることがわかって……全軍攻撃中止です」
「マジで？　なんでまたそんなトコに」
確か彼女は民間船でユニウスセブン追悼慰霊団の事前調査に赴いたものの行方不明、とニュースでは言われていたはず。
「人道的観点から彼女を保護したらしいですけれど……事前調査団の船も消息不明ですし、どこまで信じられるか……」
「ナチュラルどもめ、卑怯なッ！　ラクス嬢を人質に取るなぞッ！」
デビュー当初からラクス・クラインのファンだというイザークからすれば、なるほど許されざる行為だろう。
「合流までは？」
「あと2時間を切った。足つきとの距離は縮まっている。このまま行けば敵艦隊と足つきの合流前に追いつけるだろう」
艦長席のゼルマンが答えたその時、通信士が声を上げた。
「ヴェサリウスから通信です！」
それはラクス・クラインを連れたストライクがイージスに彼女を引

き渡した、という知らせだった。
「一体どういうことだ？　これも策略か？」
イザークはいぶかしげに腕を組んでいる。

ストライクのパイロット、……私の幼馴染なの。

アスランの言葉を素早く思い返し、ははん、とディアッカは鼻で笑う。
「ま、女のコを人質にとるなんざワルモノのすることだもんなぁ……そういうことじゃね？」
ニコルとイザークは怪訝な顔でディアッカを眺めた。
話には続きがある。
襲撃を掛けようとした隊長はラクス・クラインの強い言葉に屈してそのまま足つきを行かせた、と。
“慰霊団代表のわたくしがいる場所を戦場にするおつもりですか！”
「平和を愛するラクス・クライン……その気持ちはわかるんですけれど」
せっかくのチャンスを逃した、とニコルの顔は自然暗い。
「いいや、無理やりラクス嬢にそう言わせたのに違いないッ！　ますます許しがたいな、ナチュラルどもめッ！！」
イザークはもうさっきから怒りっぱなし、その苛々が伝染してきそうで、思わずディアッカは少しばかり距離をあける。
「平和を愛するかどうかはともかく、世間知らずのお嬢様ってのはちょっと厄介だよね」
そもそもラクス嬢は曲者だ、とディアッカは思っている。
彼女は誰もが見惚れる愛らしい姿とは裏腹に、時としてひどく女王然とした態度を見せる。
アプリリウス幼稚舎で幾度彼女に苛められたか……というほろ苦い思い出はさておき、しかしあのただものでない隊長を黙らせるだけ

の気迫が彼女にある、ということが新鮮な驚きだった。
「まぁ取りあえず人質は取り戻せたんだし、後はどうするかって話」
ふわりとディアッカは浮かび上がった。
パネル上には足つきの予想行動進路が幾つも浮かび上がる。
「合流直前には追いつけるんだろ？」
「ヴェサリウスはポルト隊にラクス嬢を引き渡す為に前線を離れる。その間に足つきを落としてしまえ！」
あくまでも功績を求めるイザークの強硬論にニコルの顔色は優れない。
「でも敵艦隊の射程距離に入るまで今からの推定だと１０分程度しかありませんよ」
「１０分もあるのに見過ごすなんぞ、俺は絶対に嫌だ」
イザークは冷ややかにパネルを見る。
ヴェサリウスが戦線を離脱しているうちは、アスラン抜きで事に当たれる。
ここで一気にアイツを引き離したい！　という焦りにも似た感情が彼の言葉には滲む。
どうにもアスランが絡むとイザークの目は曇るらしい――色情ってのはホントに面倒なヤツだ。
「ま、わりと同感てやつだな。奇襲の成否は実働時間じゃないしぃ？」
いい加減寝飽きたしな、とディアッカはにやりと笑う。
まったくどうしようもない、というようにニコルは首を振った。
「無茶ですよ、ホント」
「なら臆病者はここに残っておけばいいだろうが！」
イザークの挑発に、さすがにニコルは少女めいた面にむっとした表情をかいまみせる。
「言ってくれますけどね、僕が止めなきゃどうなると思ってるんですか！」
「黙れ糞ガキッ！！」

「……そうまで言うなら一度デュエルを堕としますよ？」
ニコルが剣呑に憤然とする。
「やれるもんならやってみればいい。だがまずは足つきを始末してからだ」
「ええ、わかりました、いいでしょう？」
案外ニコルも気が短いヤツだなぁ、とディアッカは眺めていて思う。
まあ強烈なメンバー揃いだけに、お互い影響し合ってそうなってしまうのはやむをえないか？

って俺もかよ。

＊＊＊＊＊

この少女を引き渡したことでキラは今頃責められているのではないだろうか。
懸念もふと過る。
だが唯一のＭＳパイロットを足つきが処分するとも思えない。
空いている士官室へと先導しながら、アスランはひとつ微かに嘆息をついた。
「アスラン？　嘆息は幸せが逃げてしまいますわ」
背後からのさえずるような声をアスランは受け流す。
「……深呼吸です」
「あら！　その割には深刻ですのね」
どうにも調子が狂わされる。
「それよりも――拘束されたりなどしませんでしたか？」
「大丈夫ですわ、あなたのお友達のキラさまがとてもよくして下さいましたもの」
ふわふわとした柔らかな髪を漂わせて、しゃぼん玉のような少女は

ほんわりと笑む。
「そうですか、それはよかった」
先ほど決別したばかりのキラの名に、つい憂鬱になる。
だがラクスは無邪気に続けた。
「そうそう！　キラさまはあなたからいただいたという鳥のロボットをそれは大事にしてらっしゃいました。トリィと鳴く緑色の鶯で」
まだ持っていたのか、キラは――いっそ聞きたくなどなかった。
「そしてこれはわたくしのお友達のピンクちゃん。ご挨拶しましょうね」
ラクスは足元を転がっていたピンク色のボールを両手ですくいあげる。
＜ハロ、ハロ。オマエゲンキカ？＞
喋る機能を持ったピンク色の円球体を差し出されて、アスランは我を忘れてきょとんとする。
見間違うこともない、これは自分が以前マイウス工科カレッジの製作課題に作ったミニロボ。
「ハロ、“おすわり”」
アスランの指示に、ぽて、とハロは転がり落ちた。
実物だ。
一体どういう経緯でかはわからないが、ラクス・クラインに渡ったらしい。
「あら！　ピンクちゃんたらわたくし以外の方になつくなんて！」
＜テヤンデー！　！　＞
言語認識のＩＣチップは入れていたはずだが、しかしこんな妙な単語を記録させた覚えはない……。
目をピカピカ光らせてぽよんぽよんとそのハロは自分の周囲を飛び回る。
「調子よさそうじゃない、ハロ？」
＜オマエモナー！　！　＞
そして無機質な士官室を一目見るなり、ラクスは少々飽きたような

顔を見せた。
「どこに行っても閉じ込められてばかり！　出歩いては駄目ですの？」
「仕方ありません。ここは戦艦であなたは客人ですから。少しの時間我慢して下さい」
＜ミトメタクナーイ、ワカサユエノアヤマチー！＞
妙な言動は、きっと安物の中古言語チップのせいだろう。
「はいはいおしゃべりさんね。ほら、あなたも入って」
飛び跳ねるハロをぽんと押しやり、それでは、と辞して背を向けたその時、綺麗な声が追いかけてきた。
「アスラン。わたくし、あなたとお友達になりたいですわ」
＜アスラーン！＞
こんな申し出を受けるのは初めてで、アスランは足を止めて振り返る。
椅子に腰掛けたピンク色の淡い輪郭の少女はにっこりと笑んだ。

＊＊＊＊＊

立て続けにカタパルトから射出されたデュエル・バスター・ブリッツは三機で背中合わせになり、密集編隊の形で突っ込んでいく。
眼前には足つき“アークエンジェル”。
背後からのレーザー照射、そして主砲に光が収束する。
「3、2、……今だッ！」
イザークのカウントとともに3機は一気に散開する。
その開いた空間を白い光が貫いた。
射線隠蔽の作戦は見事に当たり、回避が行われた筈の足つき右舷部に爆発を齎した。
「貴様らの回避アルゴリズムは解析済みだッ！」

ビームサーベルを抜き放つストライク、それをデュエルはシールドで受け流す。
ビーム粒子が激しい火花を散らした。
確かに当初に比べて腕を上げたらしい、舌打ちしながらイザークもまたビームサーベルを抜いた。
「だがまだ甘いィッ！」
サーベルは逃れようとしたストライクの腕を貫き、その感触が伝わってくる。
視界の隅でバスターはＭＡと対峙し、後方にあるガモフの主砲はアークエンジェルを直撃した。
その輪郭をミラージュコロイドで薄れさせたブリッツが白亜の巨艦に取り付いて銃撃を開始する。
全ては圧倒的だった。
ストライクが逃げるように間合いを取る。
モニターにはブリッツが至近距離からライフルを連射し、艦の装甲は過熱して白く輝き、宇宙を赤々と照らし出すさまが見えた。
やれるッ！！
イザークの口許に会心の笑みが浮かぶ。
だが突然ストライクはその動きを変えた……まるでパイロットが交代したかのように。
渾身の一撃をあっさりとかわされ、その合間にビームサーベルで逆襲される。
瞬時に反応したが、その先端がデュエルの脇を掠めてスパークが走る。
「くッ……！！」
すかさずビームライフルを放つ、だがするりと交わしながら、ストライクは加速して離脱し足つきのブリッツへと突っ込んでいく。
抜かれたビームサーベルから逃れようとブリッツはすばやく飛びのく。
だがそれよりもストライクの反応は早く、その膝がブリッツの胴を

蹴り上げた。
死角！
そう判断してイザークはビームサーベルを振るった。
だが瞬時、モニターに写ったのは振りかざされるナイフだった。
「何ィッ！？」
背筋が凍るのと同時に、激しいスパークが走る。
内部モニターが白煙を上げて爆発して、激痛にイザークは咄嗟に顔を庇った。
『ディアッカ！　イザーク！　引き上げです！　敵艦隊が来る！』
タイムリミットの１０分が過ぎたとニコルが叫ぶ。
「ッ……痛……痛いッ……！」
鮮やかな紅が視界を覆う。
『イザーク！』
『どうした、ニコル！？』
『イザークが被弾しました……ッ！』
『おい、イザーク！？』
モニター越しにディアッカの声が聞こえる、だが目が開かない。
『急いで、ディアッカ！　デュエルを牽引します！』
屈辱と激痛とが身体の内側でせめぎあって、ぎりぎりとイザークは唇を噛んだ。

＊＊＊＊＊

戦闘でイザークが頭部に負傷をした、とモニターの向こうのニコルは重々しく告げる。
「……え？」
耳を疑って、アスランは言葉に詰まる。
イザークが？

顔色が変わったのを見てとって、彼は慌てて付け加えた。
『といっても命に別状はないらしいですけれど。バイザーの破片はあちこちに飛び散っていて、もしかしたら多少傷が残るかもしれません』
「……そう。でも、とにかく生きていてよかったわ」
暗鬱にアスランはコンソールに肘をつく。

キラが次々と仲間たちを傷つけていく。

「でもジュールさん、せっかくキレイなお顔なのに心配ですねぇ」
アビーが座席の後ろからひょっこりと身を乗り出して嘴をはさんだ。
『あ、うん、でもきっと大丈夫！　イザークは人一倍タフだし、今は整形技術もすごいから』
ニコルが笑顔でフォローする。

I'm waiting for you on this quiet night,
Come back with a smile, and I'll get your kiss,
Little time has passed since then,
It was a gentle memories...

歌。
突如の涼しげな歌声にアスランとアビーは振り返った。
艦橋の入り口に、兵士たちに守られたラクス・クラインが立って手をひらひらと振っていた。

「アスラン、P．L．A．N．T．に帰りますのでご挨拶に参りましたのよ」
インカムを外してアスランも笑みかえす。
「ええ、お気をつけて」
「追悼慰霊式典までにはお戻りになれますの？」
「どうでしょう、でもきっと難しいでしょうね」
2月14日の式典まではもう間がない、このまま足つきを追跡することを考えればまず無理だ。
「そう、それはとても残念なこと。あなたの分もお祈りしておきましょう」
「お願いします」
連絡艇ハッチに見送りで出ていたはずの隊長が待ちかねていたように顔を見せた。
「ラコーニ隊が責任を持って本国へお連れします、ラクス嬢」
「ありがとうございます。お世話をかけました、皆さま」
一礼して彼女はふわふわとした夢見がちの少女の面差しで笑んだ。
「ではアスラン、またお会いしましょう」
兵士たちに守られて去る彼女を、アスランは目礼で見送った。

To place a star falls,
Feelings to reach you
Always be on hand and hand.

遠ざかる歌声、そして隊長が歩み寄る。
「イザークの話は聞いたかね？」
「……はい」
アスランは微かに頷く。

クルーゼ隊長は重々しく言葉を続けた。
「ストライク……次に討たねば討たれるのは君自身かもしれんぞ」
ぽん、と肩に置かれたその手がひどく重く感じられた。

5：　低軌道宙域あるいはジブラルタルにて

コックピット内コンソールモニターの爆発に伴って、イザークのヘルメットが破損したらしい。
バイザーの破片は幸い眼にも入らず、頭部にもさほど飛散しなかった為命に別状はない、という話だった。
横たわるイザークの頭部と右目付近は包帯でぐるぐるに巻かれ、ところどころから銀髪が飛び出ている。
怪我以上に痛々しいというか悲惨というか不気味というか。
「ま、お前ラッキーだったってことで」
枕元の椅子に腰掛けて、ディアッカはしみじみという。
「コックピット自体がいかれちゃってたらやばかったぜ？　な！」
「それがどうしたッ！　慰めになるかッ！」
イザークはもう片方の目をくわっと見開いた。
その壮絶な姿が笑いのツボに入りそうで、さすがにそれはヤバい、とディアッカは口許を押さえて視線を逸らす。
「……アサルトシュラウドの製造状況はどうなっているッ！？」
そういえばイザークは何やらデュエルの追加装甲を設計して技術チームに押し付けていたような、とディアッカは記憶を辿る。
そして技術チームがぼやきながら不休で作業を続けている、という話を小耳にはさんだのは先ほどの話だ。
「まあ待てよ。今知ったところでお前乗れるわけじゃねーんだし？」
ドアがシュッと開いてニコルが顔を見せた。
「アスランも心配してましたよ、イザーク」
「――アイツに言ったのかッ！！」
ベッドから飛び掛らんばかりにがばりと起き上がったイザークに、ニコルは困った顔を見せる。
「僕が言わなくたって、隊長に報告しますから伝わりますよ。そんなにアスランに弱みを見せたくないんですか、あなたは？」

どうしようもない意地っ張り、とニコルは少しばかり憮然とする。
「素直に心配してもらえばいいじゃないですか、そんなんだから振られるんですよ！？」
「ッ黙れッ！！」
「安心しろよ、痛い～痛い～痛い～って大騒ぎしてたのは黙っておいてやるって！」
顔を真っ赤にして何やら喚きたてるイザークを放置してさっさとディアッカとニコルは病室を後にした。

＊＊＊＊＊

笑いながら部屋を出るディアッカの背中に向かって、イザークは手元にあった枕を力いっぱいに投げつける。
だがそれは閉まるドアにぶつかって下に落ちた。
ちっとイザークは舌打ちして布団にもぐりこむ。
屈辱――この上ない屈辱。それ以外の何があるだろうか？
この俺が、ナチュラルごときにこんな傷を負わされるなど！
顔に負った傷は熱を帯びてずきずきと痛む。
だがそれ以上に矜持に負った傷が、否応なしに体内に湧き上がる熱を増幅させる。
認めたくはない。
だが、あの一瞬自分はわずかに怯んだ。
――――それがゆえにこのザマだ！！
噛む唇の端に血の味が滲む。
連合のＭＳなど簡単に撃破できるはずだったのだ――自分はＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍でも精鋭揃いのクルーゼ隊のエースパイロット。
そして、あのアスランに後れを取ることがあってはならないのだ！
イザークはぎろりと目を剥き、視線を宙に彷徨わせる。

アスランがまたストライクを討ち漏らしたと聞いて、自分は得たりや応と膝を打った。
やはり自分にこそあのストライクを仕留めることができる――とそう信じて臨んだ戦いの顛末を、思い返すに腸が煮えくり返る。
あの女を蹴落として屈服させてやるはずが――

……あのストライクが憎い、パイロットが憎い。

なんとしても負かさねばこの恥辱は雪がれない、必ずやこの手で仕留めてくれる！
強く拳を握り締めたその時、甲高い音がスピーカーから漏れた。

＊＊＊＊＊

コンディションレッドのアラームが鳴る中を、ディアッカはパイロットスーツに着替える。
足つきは月でなく地球に降りる、と悟った隊長の対応はいつもながらに早かった。
地球に降りられてからでは自分たちは手出しが出来ない。だが今なら失点回復の余地はまだ残されている！
『全隔壁閉鎖、各隊員は至急持ち場につけ。繰り返す……』
ゼルマン艦長が言うには、ローラシア級ツィーグラにジン６機、ヴェサリウスにイージスを含めて５機。
そしてこのガモフには３機のＧＡＴ－Ｘシリーズだ。
『モビルスーツ発進は３分後、各機システムチェック開始』
この軍容で第八艦隊全てを殲滅するのか、とディアッカはアナウンスを聞きながらキャットウォークを走る。
さぞかし壮大なゲームになるだろう、血が沸く。

「まだ駄目ですよッ！」
「うるさいッ！」
パイロットスーツ姿のイザークが制止を振り切って転がり込むように格納庫に入ってきた。
デュエルにはその機体全体を覆う追加装甲“アサルトシュラウド”がすでに装着されている。
……誰か他のパイロットが搭乗するのかと思っていたのだが。
「おいおいマジで？」
ディアッカはハッチに足を掛けて肩をすくめる。
救いがたいほどの頑固者だ、好きにさせるしかないと他のクルーも諦めたのだろう。
『お前まだ――』
管制官の言葉を遮るイザークの声がオープンな通信に入ってくる。
『うるさいッ！！　さっさと誘導しろッ！！！』
もはや怒鳴る以外にコミュニケーション手段を持っていないかのようだ、前はもっと穏やかに話せるヤツだったはずだが。
どこで間違えたんだか――やっぱりきっかけは士官学校での一悶着としか思えない、とディアッカは首をコキコキと鳴らして、ひとつ嘆息をついた。

おいアスラン、お前の棚り放置プレイのせいだぞ？
だーからあの時、俺はさくっとトドメさしとけって言ったのに。

＊＊＊＊＊

数十もの戦艦、護衛艦が連なる地球軍が展開するさまは壮大だった。
足つきは守られるように敵陣奥にある。

結局は3隻の艦、１３機のＭＳでこの地球軍第八艦隊を相手する、とアスランは無表情のまま起動操作を進行する。
できないことはないだろう、相手の今までの動きを鑑みれば、機動性も攻撃力も全てが圧倒的にこちらに有利だ。
『ジンＡからＤまで発進よろし』
ＣＩＣ指示でＭＳがカタパルトへと運ばれていく最中、艦橋からの通信が入り、クルーゼ隊長が映し出される。
『アスラン。デュエル、バスター、ブリッツが先行している。目標はあくまで足つきだ、他に時間をくうなよ』
司令官の滑らかな声に、アスランは怪訝な顔を見せる。
「デュエルがですか？　搭乗者は誰です？」
『勿論、イザークだ』
頭部に怪我を負っているというのに、無茶なことをする――彼のことだ、多分「俺も出る！」と無理やり搭乗したのだろう。
アスランはひとつ嘆息をつく。
イザークにはいい加減ハラハラさせられて、見ているほうが少々しんどい。
多分彼に言わせれば「余計なお節介だ！！」といったところだろうが。
すぐにＣＩＣからの指示が入った。
『イージス、カタパルト接続。進路オールグリーン。発進よろし』
「了解。アスラン・ザラ、イージス出る！」
カタパルトから射出される。
慣れたＧの加圧の直後、全てのモニターに星空の戦場が映し出されて、コンディションモニターのフェイズシフト起動ランプが灯る。
そしてその勢いのままに、メビウス編隊の只中へと突っ込んでいく。
ビームライフルをかざせば、無音のままに1機また1機と光芒となって消えていった。

＊＊＊＊＊

広がる漆黒の闇の只中に閃光が走る……攻防は既に繰り広げられていた。

先行していたジンに負けじとディアッカはペダルを踏み込む。

いつものシミュレーションゲームのように、通りすがりざまＭＡを次々と爆発させる。

余裕、余裕。

一斉に向けられるミサイルを爆散させれば眼前一体が真っ白となった。

視界の中では僚機も圧倒的有利な戦闘を繰り広げている。

足つき目指して戦陣を突出するデュエル、堅実な攻撃を加えているブリッツ、そして目を惹くのはトリッキーな動きで敵機を翻弄し撃墜するイージス。

……負けてたまるかよ、という久々の競争心が疼く。

「喰らえ！」

合体砲の先を戦艦に向ける。

まともに直撃を受けた戦艦は大爆発を起こし真っ二つに割れる。ディアッカはひゅうと口笛を吹きながらバスターを転進させる。

機関部を撃ち落して離脱していく艦の空いた宙域を潜り抜けるイージスと並んだ。

『ディアッカ。さっきから派手に撃っているけど、ちょっと消費しすぎじゃない？』

モニターの向こうでちらと目を上げたアスランが言う。

「なんの。こっちには補助バッテリーあるからな、全然余裕だぜ」

正面から突っ込んでくるＭＡのビーム砲に、イージスとバスターは散開してその勢いでＭＡとすれ違う。

イージスのビームライフルが１射で確実にＭＡを仕留めて、小さな爆発が起きた。

そして更にイージスはＭＡ形態へと変形して駆逐艦を捉え、その砲撃を交わしながら懐にまで入り込んで、その鉤爪を開いた。
太いビームが駆逐艦後部を爆破し、艦は戦線から離脱していく。
ほんとカワイイ顔してやりやがる、とディアッカは口笛を吹いた。

そしてモニターの反対側では、ミラージュコロイドを解除して突如出現したブリッツが駆逐艦の艦橋を叩き潰していた。
ヴェサリウスから通信が入って、笑い混じりの滑らかな声が聞こえた。
『アスランとニコルはまだ甘いな。生かしておけば、またそいつはまた新たな武器を手に来るぞ！』
ヴェサリウスからの砲火に離脱中の艦艇2隻が華麗にすぎる花火を上げた。
「さすが隊長サン、残酷なこって」
ディアッカは笑う。
だが倒しても倒しても襲い掛かってくる戦艦、或いはＭＡ。
「グゥレイト！　数だけは多いったらありゃしねぇな」
ぼやきながら、手応えも確かにトリガーを引く。
眼前の戦艦前方に命中し、誘爆して戦艦は炎上した。
だが不意に気づく。戦陣が変わりはじめていないか？
ディアッカは素早く思考を巡らせ、ひとつの結論に到達する。
この大艦隊を楯に足つきは地球へ降りる！？
余裕のただ中にも、じんわりとした焦りが湧き上がる。
「させるかよ！」
後を必死で追い戦列をかいくぐる、背後からの敵は後続のイージスやブリッツに任せれば大丈夫だろう。
「ええい諦めの悪いッ！」
立ちふさがる戦艦を狙い落とし、ディアッカは毒づく。
『くそッ……ストライクは出てこんのかッ！！　傷がうずくだろう

がァァァッ！！』
イザークが怨嗟の声を上げながらぎりぎりと歯軋りする。
残存する戦艦からの一斉主砲射撃をかいくぐりながらバスターとデュエルが前進し、先陣隊列を潜り抜ける。
旗艦メネラオスと対峙するが援護するように戦艦ヘルグラードが立ちふさがった。
「くそぉ、時間がないんだ、とっとと陥ちろ！」
貫くビーム砲、爆散する戦艦。
ひゅうとディアッカは口笛を吹いた。
もう一隻！
モニターが更なる熱源を捕捉する。
『ようやくおでましだなッ！！　ストライクッ！！』
イザークが歓喜の声を上げるが、ディアッカは顔を顰める。
足つきのあの赤いＭＡが問題だ。バスターに近接武器はない、間近に寄ってこられると本当に手間がかかる。
光線をかいくぐりながら避ける、一発の被弾にディアッカは顔をゆがめた。
「くそう、マジでそろそろやばいぜ」
連合軍戦艦からの援護射撃を避ける、だが機体が思うがままには動かない。
「機体が重いッ……！」
噂に聞く地球の引力がここまでのものだとは思わなかった、思わず焦る。
そしてモニターの向こう、ガモフがメネラオス目掛けて突っ込んでいくのをディアッカは見て、形相を変える。
「おいおいおいおいッ！　無茶だぜッ！！」
ゼルマン艦長は刺し違えるつもりか！？
赤いＭＡがメネラオス支援の為にガモフの方へ転進する。
ようやくうるさいハエが消えたと思ったが、もうコックピットは灼熱の赤に染まっていて、相変わらず窮地だ。

いや、多分これからが本当の修羅場――背中に冷たい汗が伝う。
『ディアッカッ！　イザークッ！　限界よ、戻ってッ！！』
ノイズ混じりにアスランの叫びが聞こえる。
『ブリッツとイージスは戻れ！　今から追っても何もできん！』
『しかしあの2機の回収をッ……！！』
『命令だッ！！　君らだけでも戻れッ！！』
ヴェサリウスのアデス艦長とイージスのアスランとの交錯する通信が聞こえる。
大気圏突入――全てが紅く染まる。
未だデュエルとストライクは交戦中、しかしディアッカはそれどころではない。
もう戻れない、と判断した時体中から血の気が引いた。
「クソッ！」
計器が音を上げる。
緊急音。
……すんげぇ面倒なことになりやがった。動きが鈍い、重力に引かれているせいだろう。
その中でもどうにか姿勢を整えながら、汗まみれのディアッカは考える。
PS装甲でどこまで耐えられる？　仮に大気圏を突破できたところで減速は可能か？

＊＊＊＊＊

破滅、その言葉がアスランの脳裏を過ぎった。
『ゼルマン艦長ッ！！』
ニコルの悲痛な叫び声が聞こえる。
アスランは呆然として、眼下地球の大気圏内へと引きずり込まれて

いく二隻の艦を眺めていた。
……ガモフは地球連合軍第８艦隊基艦への特攻をかけた。
赤く灼熱に染まる艦は、やがて内側から弾けるように爆発を起こし、一瞬の後に炎に包まれた。
そしてまたガモフの捨て身の攻撃を受けた敵艦もまた、燃え上がりながらばらばらと四散していく。
息を詰めて、アスランはその光景を凝視していた。
そして足つきもストライクも、デュエルもバスターも大気圏の中へともはやその姿を消して、モニターですら捕捉はできない。
宙域に残る細かな残骸は地球の引力に引かれたように落下していき、イージスの装甲を打つ。
ピ、と機械的な音がコックピットに響いて、アスランは我に返る。
レーザー通信による再度の帰投命令に気づき、退却の為に機体を翻せば、見るも無惨な戦闘の後がモニターに飛び込んできた。
足つきを仕留めることこそできなかったが、この戦いはＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍の圧勝だった。
だが恐れに肌が粟立ち、アスランは微かに身を震わせる。
戦艦の残骸、ＭＡの破片がきらきらと太陽光にきらめきながら、滞空し、あるいは地球へと降り注ぐ。
このほんの２０分足らずの戦いでどれだけの人間の命が散った？

いいか、戦争なのだ。
お前たちは人殺しではない。何があってもそれを忘れるな。

ウィラード教官の言葉が耳に鮮やかに蘇る。
だがどんな言葉をもってしても、この行為の現実は免れえぬのではないか？　とアスランは愕然として虚空を振り仰いでいた。

ＰＳ装甲のメーターが危険域を示す警告音も遠く聞こえた。

＊＊＊＊＊

周囲は既に灼熱の赤一色。

デュエルのビームサーベルをストライクはシールドで受け、全力で押し返してくる。

はね飛ばされながらデュエルはライフルを撃ち、ストライクも退きながら撃ち返してくる。

大気圏突入のせいか、照準がブレる――イザークは汗を滲ませながらトリガーを握り締める。

耳障りな警告音を振り切るように、ペダルを叩き込む。

デュエルはバーニアを吹かせてストライクに肉迫する。

逃げることなく向かってくるストライク相手に、ぎりとイザークは睨む。

いい度胸だッ！！

ライフルを向ける、瞬時ストライクにライフルは払いのけられ、体勢を崩したところに凄まじい横殴りの衝撃が走った。

「くッ……！！」

回し蹴りで弾き飛ばされた、と知って頭に血が上る。

何故この俺がここまでやられねばならない、ナチュラルごときに！？

こちらの瞬時の隙を見て離脱しようとするストライクをモニターで捉える。

「逃がすかァァァッ！！」

ライフルを再び構える、その矢先視界を遮ったものがあった。

地球連合の艦艇から放出された軍用シャトルだった。

この期に及んで自分たちは助かろうというのかッ！？　ガモフは燃

え尽きたというのにッ！！
――――兵士であれば最期まで戦うのが筋ではないかッ！！
逆上したイザークはそのライフルをまっすぐにシャトルに向けた。
「この腰抜けどもがァァァッ！！」
ビームを放つのは一瞬のことだった。
庇おうとするように手を延ばすストライク、だが次の瞬間、落下していくシャトルをビームが貫いた。
ビームと大気圏の気流に押されてシャトルの外殻は大きくめくれ上がり、貫かれた衝撃で降下姿勢が崩れた一瞬。
シャトルは大気の抵抗で一度大きくバウンドして、そしてあっという間にその機体は炎に包まれた。
バラバラと崩れ落ちながらシャトルは大気圏の中に溶けこんでいく。
ふん、いいザマだ――とイザークは一瞥を投げかけた。
一方でストライクは力なく離れ、落下していく。
「ちッ……！」
この勝負はいったんおあずけだ。
そして気がつけば、コックピット内はサウナ以上の熱でもって警告音が鳴り響いていた。

＊＊＊＊＊

「イザーク！」
ディアッカは再びの通信を試みる、だが耳障りなノイズばかりが邪魔をする。
この高度の只中デュエルはストライクの追撃をもはや諦めたらしい。
ストライクは無防備に落ちていく、そのはるか向こうに足つきの形も見えた。
シールドを防御壁にようやくデュエルは突っ込む体勢に入った。

ノイズ交じりにもとにかく交信は可能だったらしい……砂嵐のモニター向こうにぼんやりイザークの姿が見えた。
「イザーク、俺らヤバくね？」
『洒落にもならんわッ！』
「ってもスペック上では単体で大気圏突入可能ってよ、知ってた？」
『本当か！！』
イザークが一条の光明を見出したような声を上げるので、つい笑みが零れる。
とんでもない状況だが、一人きりでないというのは実にありがたい――たとえ旅の道連れがイザークであったとしても、だ。
「最も俺らが最初の被験者だろうけどねぇ」
『笑い事じゃないんだぞッ！！　俺はアサルトシュラウドのバーニアで減速したとしても、お前は！』
「他に手がないんだから、合体砲で試してみるしかないっしょ」
軽口を叩いているものの、すでに呼吸するにも熱い。
宇宙空間でも耐えうるパイロットスーツ越しにもその熱は肌を打つ――サウナ以上だ。
ピピ、ピピ、と計器が警報を鳴らし続けて、大気圏を突き抜けて加速していく――

熱い、熱い、熱い。
最悪の気分、最悪の悪夢だ。

Z．A．F．T．なんぞに入るな、所詮軍など机上の計算上の駒に過ぎん。

うるせぇーよ非人間！　俺は俺の好きなようにする！

お前みたいに適当なヤツが軍に入ったところで、早死にがオチだ。

適当で何が悪い！　それで今までやってこれたじゃんか！

母さんが生きていたら何と言っていたか。

お袋のことなんか今まで一言もアンタの口から聞いたことねぇぞ！

飛んでくる拳がひどくゆっくりと見えた。

避けようとして、がばり、とディアッカは起き上がった。

あ？

ぬるい布がぽたりと手の平に落ちる。

額に残る水の感触、視界はぼんやり白い。

「……気づいたかね」

ディアッカは視線を走らせる、壮年の白衣の医者とおぼしき人物が眼前にいた。

確か自分はバスターのコックピットに座っていたはず――。

「俺は？　ここは？　アンタたちは？」

起き上がって、しかしふらふらする。

「君たちは降ってきたんだよ、ここはジブラルタル基地だ」

背後にいる軍人が厳かに言った。

「……ジブラルタル？」

ということはここは地球。

そういえば、朦朧とした意識の只中、視界いっぱいに青が広がるその瞬間まで、減速の為に巨大砲での逆噴射レバーを引き続けたような気がする。

「我々ローラン隊が地中海にて回収した。ＧＡＴ－Ｘシリーズは大気圏を突破できる機体なのだな。全くデータに吃驚だ」

はあ、とディアッカは返事とも溜息ともつかない声を漏らす。

言葉がまともに頭に入ってこない。

「イザークは？」

医者と軍人が左右によけ、隣のベッドで顔を真っ赤にしてうなされているイザークの姿が見えた。

「熱い……痛い……熱い……痛い……」

「じきに熱も下がろう」

取りあえず二人とも生きてはいたらしい。

医者と軍人が退室した後、ディアッカは重い身体を引きずるように窓際に寄る。

地球の重力がひどくわずらわしい、足元に血がたまるような気がする。

ディアクティブモードの灰色に染まり、表面が溶けたようにも見えてぼろぼろのバスターとデュエルがトレーラーのベッドに乗せられて牽引されていくのが見えた。

……最悪の気分だ。

ふらふらする上に汗が服に滲んで気持ち悪い。

備え付けの浴室でシャワーを浴びる。

最悪の気分は緩和されないが、べとつく肌からは解放された。

シャワールームを出てタオルで頭を軽く拭いてようやく一心地つく。

バスタオルで腰を覆った姿でディアッカはぎょっとして立ち止まる。

汗だくのイザークが凄みを増した面差しで壁にすがっていた。
頭部を覆う包帯までも汗が滲んで一層暑苦しい。
「ディアッカァァァ……ッ！」
地を這うような声に当惑する、俺は何かしたか？
「……報告に行くぞ、無事に着いたってな……ッ！！」
「全然無事じゃねぇだろうが！　お前まだ寝てろって！　ちょっとセンセ呼ぶから待てって！」
「ふざけるなッ！！　俺は元気だァァッ！！」
暴れるイザークを無理やりベッドに押しやり、枕攻撃をばしばし背に受けながらディアッカは内線電話を取る。
何でいつも俺はこいつの面倒を見ているんだろう……士官学校以来ずっとのような気がしないでもない。
早速駆けつけてきた医師に、結局イザークは頭の傷の再度の処置をされ、熱さましと鎮静剤を投与させられて、数時間静かになった。
大人しくなったイザークを眺めながら、寝てるだけなら綺麗な顔なんだけどなぁ、としみじみディアッカは思う。
つけたＴＶモニターは、ユニウス・セブンとＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の追悼慰霊式典会場とを同時中継していた。
今日は丁度２月１４日らしい……もう１年か。
ぼんやりとＴＶに写るラクス・クラインを眺めながら思いを馳せる。
あの時の追悼慰霊式典には遺族代表として、ザラ委員長とともにアスランが立っていた。
そしてそれから間もなく自分たちはアスランと士官学校で出会ったのだ。
競うような早さで演習を重ね技術を習得し、そしてともに任務遂行率ＮＯ．１を誇る精鋭揃いのクルーゼ隊に配属された。
ヘリオポリスでラスティ、ミゲル、オロールが欠けて、その後の追撃戦でマシューもいなくなった。
殺伐とした戦場の只中で、アスランは絶えて笑顔を見せることもなく思いつめた様子で、イザークも常に険しい顔で口を開けば罵詈雑

言と怒鳴り声、ニコルだけは何とか皆の間が円滑にいくように努力しているようだが、無駄に終わることが圧倒的に多い。
自分はというと――必要以上の馴れ合いは好みではない、だから歩み寄ろうという気にもならなかった。
それでもいざ離れてみると妙な感じがする。
今頃アイツら心配してるだろうな、とディアッカはひとつ溜息をつくと、ベッドに寝転がった。

そしてその数時間後。
ディアッカとイザークは赤服を纏い、廊下を行く。
「無理すんなよ。俺が連絡するぜ」
「うるさいッ！　俺からするッ！」
肩を怒らせたイザークがモニター前にスタンバる。
数時間前まであんなに呻いていた癖に強がってるなぁとディアッカは背後で思う。
そんなに隊長にアピールしたいのか、全く見栄っ張りにも程がある。
フェブラリウス市民的な知識を辿れば、確か性格は遺伝子のミックスバランスがものを言う。傾向こそあれど調整自体難しい――せいぜいが３０％程度のものだ。つまりはほとんどが生育環境による。
……となると、やっぱりあの過激派エザリア・ジュール女史は息子の育て方を間違えたとしか言いようがない。
だとしたらイザークも気の毒なヤツではある、さんざん抑えつけられた挙句がこれだ。

モニターの向こうにニコルが潤んだ目で映し出された。
こうやって見ると可愛い。
かーわいいニコルが泣き顔になるとどうもイジメたくなるのよ、とミゲルは言っていたが、全く同感だ。

『よかった、無事だったんですね！　みんなで心配していました！』
「減速が成功して地中海に無事着水した。今ジブラルタルだ」
先ほどの凄みは一体と思わせるほどにイザークは淡々と言う。
「帰投のことを伺いたい。クルーゼ隊長は？」
『クルーゼ隊長は本国に召還されて先ほど発たれました』
ニコルの眉間に皺が寄る。
「またかよ」
ホント薄情な隊長サンだよなぁ、とディアッカは呟くがイザークに睨まれて黙る。
『帰投の話は隊長が戻られてからになるでしょうね……』
「おいニコル、お前も大気圏突入してみろよ、あれはマジ死ねるほどいい体験だったぜぇ？」
ディアッカが茶々を入れれば、苦笑いでニコルは答えた。
『お2人みたいな度胸はありませんので、僕は遠慮しておきますね』
「臆病者」
『無謀って言葉も世の中にはありますよね、それとも迂闊かな？』
ニコルが皮肉を言って、むっとしたこちらの様子に嬉しそうにくすくす笑った。

＊＊＊＊＊

アスランはパイロット控え室からモビルスーツデッキに横たわるイージスを眺めていた。
スペック以上の能力を振り絞るように酷使し続けているイージスは、常に修復作業が欠かせない。
メンテナンスベッドにあるイージスに整備士たちが群がっている。
また何を言われるやら……技術チームからの苦情はもはや日常茶飯事だったが。

シュッとドアの開く音、「ここにいたんですね」というニコルの声にアスランは振り返る。
「式典を見てるかと思ってました。艦橋にもレクルームにも人がいっぱいですよ」
今日は2月14日だ――大勢のクルーたちがユニウス・セブンから中継されている式典を見守っている。
そして地球上の基地でも、P.L.A.N.T.でも同様に。
悲しみがまたこみ上げてきそうで、今はただ戦うことでしかその思いに報いるしかできない身には辛い。
力が欲しいと思った。
これ以上何かを失わない為の力……だからここにいる。
アスランはイージスにまた視線を戻し、ニコルは隣に立つ。
「イザークとディアッカは……」
ニコルが切り出した言葉にふっとアスランは息を呑む。
「無事降下できたようです、減速して地中海に落下したんですって。さっき連絡が来ました」
海面に叩きつけられて木っ端微塵になったのではないかと心配していた矢先である、とにかくほっとする。
これ以上仲間で誰かに死んで欲しくはなかった。
「上手くいってよかった。大気圏突破なんて、全くあの2人はやることが無茶苦茶なんだから」
くすくすと嬉しそうにニコルが笑む。
「金銀コンビは派手好きですものね。帰投は未定です。しばらくはジブラルタル基地にとどまるみたいですけれど」
「イザークの怪我はどうなの？」
「大丈夫なんでしょう、多分。あれだけの働きができたんですから」
アスランはガラスに額をつける。
「ジブラルタルか……私たちも降りることになるのかしら」
「隊長が戻られないと、何とも」
地球に降りたいという気持ちはある。

大気圏の突入斜角からすでにアークエンジェルの降下予想地点は割り出されていた。
おおよそアフリカ北部、ジブラルタルが中心基地となるZ．A．F．T．の勢力圏内である。
イザーク達同様に地球の重力に落ちていったキラの赴く先が気がかりだった。
デュエル、バスターが降下できたということは、ほぼ同じスペックを持つストライクも無事のはず。
……わからない。
自分は地球に降りて彼に止めを刺そうというのだろうか、それともこのまま宇宙に留まりキラを討たずに済むことを願うべきなのだろうか。

6：　P．L．A．N．T．あるいはバナディーヤにて

試験コックピット内モニター上でのロックオンとともに、宙域に展開する多数のドラグーンが瞬く。
ビーム砲の光条が宙で交錯して、目標は次々と撃破されてモニターから姿を消していく。
『全機撃墜』
当然だ、あの男にできて私にできぬはずがなかろう――ラウ・ル・クルーゼはうっすらと瞼を押し上げる。
『いかがかね』
全周囲型モニターの向こう、研究者たちの行き交うシミュレータルームに佇むジャン・カルロ・マニアーニ教授が訊く。
おやおやＭＳ製造の御大がおでましとは、とラウはうっすらと笑んだ。
「悪くはありませんな。ただすぐ実装となると難しくもありましょう」
『Ｇ．Ｕ．Ｎ．Ｄ．Ａ．Ｍ．ＣＯＭＰＬＥＸは人を選ぶ。Ｘシリーズもまた然りだ』
老人は満足げですらある。
まったく一流の技術者というものは、己が何を為そうとしているかもわからぬほどに愚かだ。
ラウはメットを片手にシミュレータ・コックピットを降りる。
「特化Ｘシリーズ、ロールアウトが楽しみですな」
「現行機体の汎用化が先になろう。その一助となるのがこれだ」
マニアーニの足元を右往左往している球体に、ラウは視線を移す。
どこかで見覚えのある形状のロボではある、さてどこで見たろう？
「面白いだろう、うちの学内コンペに出てきた試作品レプリカだよ」
「これがＭＳの助けになると？」
ふむ、と老教授はひとつ頷いた。

「D．S．S．DのXプロジェクトから得たアイデアだが」
D．S．S．D．こと Deep Space Survey and Development Organizationとは先年設立された深宇宙探査開発機構である。
火星よりももっと遠く、遥か外宇宙にヒトは思いを馳せる――例えば、あの＞エヴィデンス01＜宇宙クジラの群れのたもとにまで。
ヒトの飽くなき欲望はそのとどまるところを知らない。
「外宇宙探査の運用機器に自己対話型AIを搭載させてみてはどうかという話があるのだよ」
教授はその球状ロボを拾い上げた。
「ほう」
「その場合高度な知性を育てるのに時間がかかろう、だが戦闘用MSの自律AIならばどうか？」
＞テヤンデー！＜
センサーを瞬かせながら、ロボは教授の手の平の上で跳ねる。
コーディネイターは能力こそ総じて底上げされてはいるが、それぞれに遺伝子調整された適性というものがある。高度な対応力が要求されるMS戦闘には向かない人間のほうが多数であり、そしてP．L．A．N．T．にはナチュラルも少なからず在住している。
国を憂いて軍に志願する彼らの思いを無駄にしない為にも、独立型マルチAIに補助をさせてMSを稼動させてはどうか？　と彼は言う。
確かに、現状でMSのサブパイロットとして回避運動を担当させるには悪くないだろう――研究の深化によっては彼の目指す無人戦闘MSという話も夢物語ではない。
「動けるMSの数は多いに越したことはなかろう」
「ほう。いずれ総力戦になるとでも言わんばかりですな」
ラウは滑らかな笑みを湛える。
ジャン・カルロ・マニアーニは背中で答えた。
「いらぬ用心だとは思いたいところではあるが、昨今の情勢を見て

いると危ぶまれてならんよ」
ヒトは殺し合いを望み、外宇宙に踏み出すことなくいずれ潰れるだろう――それがきっと愚かな種に相応しい結末なのだ。

＊＊＊＊＊

薄暗い通信室に無数のモニターが点灯する。
そのうちのひとつにディアッカとイザークは向き合っていた。
『両名とも無事ジブラルタルに入ったと聞き安堵している』
いつもの口調で本国のクルーゼ隊長は言う。
モニターに写る男の口許は微かな笑みさえ湛えている。
この隊長の言葉には常に嘘くささが付きまとう、とディアッカの眉間には自然皺が寄る。
安堵？
馬鹿馬鹿しい……大気圏突破の丁度いい被験者だとでも思ったか、切り捨てるつもりだったかだろうに。
俺たちの代わりは幾らでもいる、とアンタは暗に言いたいんだろう？
だからディアッカは笑んで皮肉を口にする。
「死にそうにはなりましたけどね」
案の定、クルーゼはそれを聞き流した。
『先の戦闘ではご苦労だった。残念ながら足つきとストライクを仕留めることはできなかったが、君らが不本意とはいえ共に降りたのは幸いかもしれん。
足つきは今後地球駐留部隊の標的となるだろうが、君たちもしばらくの間ジブラルタルに留まり共に奴らを追ってくれ。……無論、機会があれば討ってくれて構わんよ』
慰撫するような揶揄するようなこの口調は、どうにも苛立たしさを

生じせしめる。
何故この隊長の言葉はこんなにも気分を逆撫でにするのだろう？
ディアッカはその思いをおくびにも出さずうやうやしく敬礼する。
「了解しました」
『健闘を祈る』
そして通信が切れる。
見え見えなんだよ――アンタの意図は。
今まで足つきとあのストライクを討てなかった自分たちへのお仕置きといったところか？　確かにお仕置きには十分すぎるほどの屈辱だった。
「俺らいらないから宇宙には戻ってくるなってさ。駐留軍と一緒に地べたを這いまわれって言いたいらしいぜ、うちの隊長サン」
ディアッカは大仰に肩をすくめて振り返れば、ぎろ、とイザークが睨んだ。
それ以上言うなと言いたげな視線に、自然此方も刺々しくなる。
「ああん？　んだよ」
次の瞬間、イザークはするすると頭部の包帯を解き始めた。
一瞬呆気に取られて、思わずディアッカは裏返った声で制止する。
「おい、イザークッ！　止めろッ！」
包帯が床に落ちる。
「止めろってば！」
聞かないイザークに、苛立って椅子から立ち上がったその時、全ての包帯がするりと落ちた。
その端整な顔を斜めに走る大きな傷痕に、ディアッカは声も出ずただ凝視する。
出陣できるくらいだから浅い傷なのだと思っていた――だが醜く引きつれたその傷跡は余りにも生々しい。
「機会があれば、だと？」
その怜悧な美貌を憤怒と憎しみに歪めてイザークはぎりぎりと歯噛みした。

「討ってやるさ！　次こそ必ず、この俺がなッ！！」

＊＊＊＊＊

足つきはもはやクルーゼ隊にとって管轄外である。
アスランに与えられた次なる指令は地球降下ではなく、休暇取得であった。
久々の休暇で本国に戻ることはできたものの、結局追悼慰霊式典には間に合わなかった。
居間のリビングテーブルの上にたまっている手紙類を見つけて、アスランはひとつ嘆息をついた。
「お父さまったら、全然こちらにお帰りではないのね」
「先週わずかばかりお戻りになったっきりです。お着替えと重要な書類は特務隊の方が持っていかれますが」
執事が慇懃に答える。
「そう。国防総省で寝泊りなんてそのうち倒れちゃうんじゃないかしら、お父さま」
それとも、最近の政治情勢はそれほどに逼迫しているのだろうかとアスランは懸念する。
Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を離れてから国内ニュースは全然見ていない、一体どうなっているのだろう？
まずはパソコンにたまっているメールを片っ端から読む。
中退したマイウス工科カレッジの友人たち、技官として各地にいる同期からの便りを読み流し、返信をしたためるだけで気がつけば夕方だった。
Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．内衛星通信モニターの前に座り込み、ぱらぱらとアスランはメモをめくる。
戻ったら連絡をしてこいと書いてきている友人宛だ。

「そうなのよ、うん。だから今はZ．A．F．T．の部隊で……ああ、ごめんキャッチ入った、ちょっと待って。はい、ザラです」
「お嬢さま、ご飯の支度できましたから、おいとましますね」
昔の馴染みで何かと世話を焼いてくれるナニーが顔を覗かせる。
「ありがとう、お疲れさまでした。――すみません、今は父も不在で。国防総省の方にいるかと、……ええ。失礼します。あ、ごめん。なんだかお父さま宛だったみたい。で、どこまで話したっけ？」
通話が終わってリビングに行く端から通信機がコール音を立てる。
空虚な時間を埋めるには十分すぎるほどだ。
「そう……なんだか慌しくって、ごめん。ちょっと会えそうにないの」
階段に座ってアスランは無線インカムを左耳から右耳へと持ちかえる。
「次の休暇で、もしアプリリウスに帰れたら最優先で会うから。ごめん、ホントごめん」
話が終わったのを見計らって、邸を取り仕切る執事のイェールが玄関口から見上げて声を掛けた。
「お嬢さま。ラクス・クライン嬢からの面会希望が来ておりますが、いかがいたしましょうか」
「らく……？」
思わず手にしていたインカムを取り落とし、アスランは吃驚する。
あの有名人が何故わざわざ自分に？　――と思って、そういえば宇宙で彼女に言われたことを思い出す。

わたくしあなたとお友だちになりたいですわ、アスラン。

相手が相手だ、他の友人のように街角のカフェで気軽に待ち合わせなどというわけにもいかないだろう。
「では今週中に伺うと伝えて。先方の都合のいい時間帯に合わせるわ」

「かしこまりました」

雑用で時間が潰れてそのまま夜になる。
一人きりの食事を終え、ぼんやりと入浴を済ませ、バスローブ姿でアスランは自室へと上がった。
ドアを開けてすぐの壁のボードに張った写真にアスランは目を留める。
士官学校卒業式の時の集合写真と、配属先決定直後の写真がちょうど目の高さにあった。
ラスティもミゲルもオロールもマシューもいる。
そしてイザーク、ディアッカ。
あの2人を地球に派遣したままの休暇は後味も悪い。
そしてアスランは視線を移す。
幼い日のコペルニクスでのキラとの写真。
キラ――Z．A．F．T．圏内に突入した幼馴染の面影が頭を過って、振り払うように頭を振る。
彼はもう敵だ、その身を案じてどうなるだろう。
ボードの前から離れて、ベッドに転がる。
身体のサイクルが昨日まで通り兵士のままで、切り替えが上手くいかずに落ち着かない。
自然体内時間はZ．A．F．T．日課通りになる、挙句にふかふかのベッドで寝れない……参った、とアスランは寝返りを打つ。
それぞれ休暇に入った他のヴェサリウスの乗員たちもこうなのだろうか。
子煩悩だというアデス艦長はともかく、クルーゼ隊長は休暇の姿が思い浮かばない。
あの人はいったいどういう休暇を過ごすのだ？　相変わらずマスクはつけたままなのだろうか？
そして地球に降りたあの2人はどうしているだろう。

彼らは、Ｌ４での脱走兵狩り以来休暇らしい休暇を貰っていないはずだが、元気だろうか？

＊＊＊＊＊

“足つき”がアフリカ北部に降りたという情報から、ジブラルタル基地司令部の指示でアフリカへ行くように命令された。
潮風が鼻について、かきあげる髪がぱりぱりになる。
戦艦の甲板からディアッカは湾曲した水平線を見やる。
見渡す限り一面の青。空の青と海の蒼との境界線がくっきりと明瞭だ。
これが地球、そして地球の海。
ここから人間が進化したというのがいまいち想像できない。
海の微生物から地上のヒトへ、そして宇宙のコーディネイターへ……人間は進化を続ける。
進化してどこまで行くのだろう、“コーディネイト”する為に――
＞エヴィデンス０１＜の領域まで？
「何見てるんだ」
イザークの声がする。
「雑誌見るのも射撃訓練も飽きたからさぁ、ちょっと地球ってのを体感中」
欄干に凭れかかってディアッカは天を振り仰ぐ。
眩い太陽は頭上。
Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．と違うのは、ここには太陽があるということ、時折突発的に雨が降るということ。
太陽を直視し続けると網膜に灼きつけられてしまう、と教わったことを思い出して、ディアッカは歩み寄ってくるイザークに目を転じ

る。
「地球にこんな形で来るとは思わなかったぜ。日本に行ってみたいとは思ってたけどさぁ、全然方向違うしな」
「ニッポン？」
「東アジア共和国の島」
子どもの頃から続けていた日舞もＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．に入って以来すっかりご無沙汰だ。
「そのニッポンて場所のお守りなら俺は持っている。経とやらも奇抜な文字で興味深いシロモノだ」
イザークは民俗学が趣味だといつだったか聞いた……世界各地のお守りやお札なるものを収集しているらしい、顔に似合わない妙な趣味だ。
まあ自分も人のことを言えた口ではないが。
「なあ」
「何だ」
「ナチュラルが嫌いな癖に、ナチュラルの文化には興味があるってのは凄い矛盾じゃね？」
口は災いのもとだ、とは思いながらも好奇心に負けてちらとディアッカはイザークを眺める。
「歴史は積み重ね自体に価値がある。旧人類の文化を否定するつもりはない」
なるほど、イザークなりに理由はあるらしい。
「へえ。んじゃあアフリカでも何か手に入るんじゃねぇ？」
「現地の土産屋に寄る時間があればな」
襟元を緩めたイザークも海を眺める、珍しく穏やかな横顔だ。
「Ｐ．Ｒ．Ａ．Ｎ．Ｔ．　Ｄｏｌｌａｒ使えるかね？　ってかアプリリウス銀行のカード一応持ってっけど地球アフリカ支店なんかあったかねぇ」
転戦に次ぐ転戦で休暇もなく、ろくに給料も使えていない。
貯まるのはありがたいが、金は使ってこそだとディアッカは思う。

「なければ現地の兵士が困るだろうが。多分バナディーヤではＥａｒｔｈ　Ｄｏｌｌａｒも Ｐ．Ｒ．Ａ．Ｎ．Ｔ．　Ｄｏｌｌａｒも両方通用するだろう。女遊びに無駄遣いするなよ」

ふふんとディアッカは笑って「女買うなんて無粋すぎてね」と手をひらひらとさせる。

「俺って女には金も労力も使わないね。大概向こうから寄ってくるし。んでちょぉっと甘えて口説けば後はもうね」

女なんてちょろいもんだぜ！　とディアッカがうそぶけば、呆れ果てたと言わんばかりにイザークが軽蔑の視線を投げかける。

「アイリーンだってそのクチだし……ああ、でもアスランはちょっと異色だよな」

イザークがあからさまに顔を顰めた、またいつものイザークだ。

「――お前アイツにまでちょっかい出してたのかッ！！？」

期待通りの反応に満足してディアッカは口許を緩める。

ったく楽しいヤツ、ホントどこまでアスランに一途なんだか。

「でもまあアイツまだまだオトコには興味ないって感じ？　ってかこの期に及んでエロ話にすっげぇ拒否反応見せるわけよ、気持ち悪いって。つーことで俺の経験上アイツは確実に処女」

思えばラスティも気の毒なヤツだ、とディアッカは旧友に少しばかり同情する。

さぞかし無念だったろう――というか律儀に初夜を待たずにせめて一回なりと乗っかっておけばよかったのに。

「ということで貫通は苦労しそうだよなァ？　童貞イザーク」

と振った瞬間頬と首に痛みが走った。

脳幹にまで及んだかのじんじんとした衝撃にようやく認識する、平手で頬を打たれたらしい……拳でなかったのは優しさか？

「貴様なんぞ魚のエサになってしまえッ！！」

痛てて、とディアッカは頬を押さえつつ、肩を怒らせて艦内へと去っていくイザークを見送った。

＊＊＊＊＊

マイウス市ガーネットホール前には、開演2時間前だというのに、すでに人だかりが出来ていた。

「あらあら……ここでいいわ」

アスランは車を停めさせる。

「いってらっしゃいまし」

アスランは花束を携えて、送迎の車から降りた。

内々のコンサートですからとニコルは言っていたが、マスコミ関係者と思しき人々の姿も垣間見える。

天才ピアニストとして評価高い彼の久々のコンサートだからだろう、ニコルはやっぱりすごい。

アスランは人で賑わう大ホールに入り、チケットの席を確認する。

ニコルが手配してくれた席は特等席。

座り心地のいい座席に身をうずめて、しばし時を待つ。

思えばクラシックコンサートなんて実に久々だ、とアスランはふと思う。

一体いつ以来だろう、2年ぶりくらいだろうか、あの時はお父さまもお母さまも一緒だったような気がする。

思索の最中、やがて照明が落ちて舞台上が明るく照らし出される。

礼装姿のニコルが一礼すれば、ホールから拍手が沸き起こった。

そして彼は重厚なグランドピアノの前に座して、そして実に静かに演奏会が始まる。

ホールに反響する旋律、音色、彼の奏でる旋律はどこまでも優しく、そして強い。

ニコルが大好きだというモーツァルト。

人の心を宥めるような音の強弱緩急の流れは、川のせせらぎにも似ていた。
作るものの意図を組んでそれを再構成するチカラ――これは稀有な才能だと思う、天才だと呼ばれるのもきっと当然。
ニコルには戦場の銃よりも、舞台のピアノがはるかに似合う。戦いさえなければ、士官学校に入らなければ、きっと今頃すでに相当の地位にあったはず。
アスランは目を閉じる。
そのひとつひとつの音色が、殺伐とした戦場でささくれだった心に沁みこんでくる。
どこまでも優しくて綺麗な世界だ。
もし、いつか戦いがなくなったら――そして地球に降りることができたなら。
ニコルとともに音楽の都ウィーンへ行ってみたい、彼と一緒に音楽家たちの足跡を辿るのもきっと楽しいだろう。

やがて終わる時間、スタンディングオベーションで聴衆たちは惜しみない拍手を若きピアニストに捧げ、アスランもその中に混じっていた。
アンコールが終わってもなお止まない拍手。
しかし照明が点り、演奏会は終わりを迎える。
アスランはニコルの控え室に向かう最中、人波に見知った顔を見出した。
「アマルフィ議員！」
かつてはカレッジの教授として世話になり、最も尊敬すべき機械工学の第一人者である国防委員の姿にアスランは敬礼をする。
おいおい、とユーリ・アマルフィは苦笑いをした。
「君はコンサートの客人だし、第一我々は軍服を着ていないじゃないか、アスラン？」

一瞬きょとんとし、アスランはそういえばそうだった、と恥ずかしさに顔を赤らめる。
「大変失礼いたしました、ユーリ教授」
ニコルにひどく似た傍らの女性がころころと笑う、多分ニコルの母親だろう。
「お噂はかねがね。ニコルの母のロミナ・アマルフィです」
ロミナはおっとりと笑む。
子持ちとは思えないほどに若々しく可愛らしいひとだ、とアスランは思う。
「アスラン・ザラと申します。変な噂でなければよろしいのですけれど」
「まあ。素敵なひとだと聞いていましてよ。忙しいでしょう？　ニコルの為にわざわざ来ていただいて本当に嬉しく思っております」
「招待していただいてわたくしこそ光栄です。――できましたらこれをニコルに」
アスランは彼女に花束を渡す。
「あらあら……直接渡してやっていただきたいのに」
残念そうにロミナは言った。
だがニコルはすぐそこで既にファンからの花束を両腕に抱え込み、マスコミに囲まれてフラッシュライトの只中だ。
「忙しいようですから。素敵な演奏会でしたとお伝え下さい」
彼の音色に一時癒されたことを感謝しつつ、アスランはアマルフィ夫妻の前を辞する。

◆◆◆

白いワンピースの華奢な少女は人波の中に姿を消した。
「ニコルだけでなくてあんなお嬢さんまで戦場に……本当に、早く

戦が終われればいいのに」
ロミナは胸元で手を組み合わせて切実に呟く。
「皆、そう思っているよ」
ユーリは妻の肩を抱き、憂慮を湛えた横顔で元教え子の背を見送った。
「アマルフィ議員」
呼びかけられて、ユーリはふと振り返る。
場に似つかわしくない黒い軍服を纏った特務隊員と緑色の兵士たちの姿があった。
「ユウキ隊長か。どうしたね」
「すぐにアプリリウスにおいでになって下さい。最高評議会の緊急召集です」
「またオペレーション・スピットブレイクの件でクライン派とザラ派が揉めたかね」
うんざりしたようなユーリの言葉に、ロミナは心配げな顔を見せて腕にすがる。
「あなた」
「何、大したことはない。スピットブレイクは可及的速やかに決定されるべきものなんだ。全く、反対するクラインの方が理解できんよ」
愚痴った後で、ユーリは人だかりに囲まれている我が息子を見遣る。
「あれが可決されればニコルも行くことになるだろうな」
ロミナはふっと息を呑んで、口元を覆う。
そんな妻の表情を悲しげに眺めるユーリに、レイ・ユウキ隊長が再度声を掛ける。
「アマルフィ議員。車を待たせておりますので」
「ああ。ロミナ、お前はニコルと一緒に邸に帰りなさい。残念だが私は今夜からしばらく邸に戻れそうにないよ」
頬に妻のキスを受けた後で、やれやれ……とユーリ・アマルフィは兵士たちに囲まれて歩を進めた。

＊＊＊＊＊

アプリリウス、最高評議会。
審議が開始されてすでに3時間が経過していた。
「……私はなにも、地球を占領しよう、まだまだ戦争をしようと申し上げているわけではない」
無益な言い争いにはほとほと疲れた、といわんばかりの表情でパトリック・ザラ国防委員長はひとつ嘆息をついた。
「言ってはいないと君は言う。だが結果的にはどうだね？　先ほど君が提示したＭＳ戦の映像といい、あれではいたずらに国民の危機感を煽るばかりだ。君は戦いの方向に皆を導こうとしているではないか！　――パトリックだけではない、賛同している君たちも同罪だぞ！」
シーゲル・クライン最高評議会議長も疲労の色濃い面で、周囲を見回す。
その中で、ジェレミー・マクスウェルが口を切った。
「同罪というならば、国民も同じです。……まずは世論をご覧になるがよい、クライン議長。血のバレンタインからこの方国民が何を望んでいるか。あなたはそれをご存知でない」
「民衆は容易く煽動される。世論が絶対などと誰が言える！？」
「仮にそうだとしましょう。けれど……」
銀髪の美女が朱色の唇を笑わせて言葉を繋ぐ。
「連合は何が何でもＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を屈服させたいと望んでいる。ならばこちらとしても相応の措置でもって対抗せざるを得ないではありませんか」
涼しげな声で、エザリア・ジュールもザラ擁護に回る。
「大体去年、全国民の前で徹底抗戦を宣言されたのはどなたでした

？　それが今さら弱腰に転じるなど誰が納得します？」
ジュールの言葉に、クラインは渋い顔を見せた。
「弱腰ではない、対話だよ。Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍は地球連合軍に対しても拮抗しうる力があると既に証明されている。Ｎジャマーでエネルギーの枯渇している地球連合も、今なら対話に乗ってくるだろう」
「クライン議長閣下。中立を公言していたオーブの裏切りといい、先般の人質事件といい、彼らを信じ対話を続けるべきだと言われてもこれでは無理だよ。大体国民が納得しないだろうけれどね」
タッド・エルスマンはしどけなく座り、その長い指先でペンをくるくると回す。
「ザラ国防委員長の言うとおり、我々にはいつまでも戦争しているような時間はない。というかね……これ以上研究員が減ったらうちのラボは研究どころじゃなくなるんだよ。第三世代の出生率がさらにがくんと減ってしまうんだよ、それは困るだろう？」
「だからこそ対話を、と議長は仰っているのです」
アイリーン・カナーバは蒼白のシーゲル・クラインから目を転じ、言葉を連ねる。
「戦い続けて、我々はどこまで行くのです？　お互いが滅びるまでですか？」
一瞬の静寂。
だがオーソン・ホワイトが静かに答えた。
「まずそれを問うべきは彼らに対してだ。彼らに話が通じるかい？　核を平気で打ち込み、地球に残ったコーディネイター達を虐殺する者どもに？」
「ナチュラル全てがブルーコスモスではなかろう！　そもそも戦禍が広がればその分憎しみは増すというのに、どこまで行こうというのかね、我々は！」
シーゲルの言葉は虚しく響く。
「そうさせない為にも、早期終結を目指さねばならないのだと何度

言えばわかる？　この戦争は、勝って終わらねば意味がない！」
語気を強めて言い放ち、そしてひとつ深い息をついた後、パトリック・ザラは低く言った。
「さもなくば我々Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．には過去より一層暗い未来しかないのだから」
殺気立った場を宥めるように、ルイーズ・ライトナーはやんわりと言った。
「今後の戦争の是非については次の議長選で国民の信を問えばよいこと。とにかくも、わたくし達が今ここで議論すべきは、いかにしてオペレーション・ウロボロスの完了を迎えるかということでありましょう」
暗にオペレーション・スピットブレイクの可決を促す言葉に、シーゲル・クラインの暗鬱な視線とパトリック・ザラの苛烈な視線が交錯した。

＊＊＊＊＊

ようやくに目的地バナディーヤに着いて、輸送機から機体ごと降りる。
格納庫に移動してコックピットのハッチからラダーから降りる最中、風が巻き起こって、肌に細かな砂を叩き付けた。
イザークは咄嗟に目を薄くする。
「うわ、なんだよこれ！」
バスターから降りるディアッカは手をかざして砂混じりの風を避ける。
イザークも目に砂が入った、と瞬かせながら乱れた髪を直す――全く、地球の極地たるや野蛮極まりない。
「しかも口に砂が……ちっくしょう、とんでもねぇところだな！」

歩み寄ってきて、じゃりじゃりと言わせながらディアッカはなおも愚痴る。
「そりゃぁ地球上でも過酷な環境だからな、ちょっとやそっとじゃ慣れやしないよ」
低い声にイザークとディアッカは振り返る。
長身で精悍な体躯を砂地用の迷彩服で包んだ赤い髪赤い目の男が歩み寄ってくる。
「ようこそ、レセップスへ。バルトフェルド隊副官のマーチン・ダコスタだ」
イザークは怪訝に眉間を顰める。
「アンドリュー・バルトフェルド隊長は？」
「今は取り込み中。君たちのことは隊長から一任されている」
ダコスタ・マーチンという副官は「こちらへ、まずは宿舎に案内する」と誘導した。
「俺らには会う価値もないってことかね」
ディアッカの呟きに、イザークはフンと鼻を鳴らした。
「今朝方またＸ－１０５との交戦があってね」
先導しながらダコスタは背中で言う。
「どうでした？」
「厄介な相手だな、ホントに！　陸戦型とも思えないのにあの機動力ときたら！」
さすがの“砂漠の虎”もストライクには手こずっているらしい。

宿舎はまさに立派なホテルだった、おそらく接収したものなのだろう。
この砂漠地帯では貴重であろう噴水が中庭に設置されて、そのきらきらとした水飛沫が眩い。
イザークとディアッカは導かれるままに中回廊を行く、その向こうから女が１人やってくるのが見えた。

長い黒髪がむき出しの肩を滑り落ち、その美しい黒髪は両脇に一房ずつ金のメッシュが施されていた。
衣装からして誘惑的かつ危険な雰囲気を漂わせているその女は足音もなく歩み寄ってきた、猫のように。
ディアッカはひゅうと口笛を吹くが、イザークはぎょっとした顔を見せる。
「あらあなたたちなの、宇宙から降りてきたっていうのは？」
鼻にかかった甘ったるい声でそのすらりとした長身の女は言う。
「ううん、まだまだ坊やね……」
細い指先に顎をついと上げられて、思わず顔を赤くしたイザークは一歩下がった。
「砂漠もアンディも怖いわよ、余りおいたしたら駄目よ？」
ウィンクで通り過ぎる黒髪も艶やかな女はひどく甘ったるい香水の残り香を残して去る。
「な……何だ、あの女は！」
イザークの上ずった声に通りかかりの兵士たちは苦笑いする。
「あのひとはバルトフェルド隊長の愛人」
「あい……？」
ディアッカがひどく面白そうな声を上げた。
「すっげぇ。アッチでも凄いんだ、バルトフェルド隊長。めっちゃ美人じゃーん？」
虎の愛人……なるほどコーディネイターの女の中でも美女であることは認める。
「愛人じゃない。大体隊長は独身だのに愛人も何もあるか」
ダコスタ副官がムッとした顔を見せて、「こっちだ！」とまたすたすたと先導する。
「司令官たる者が戦場に女を連れ込むなんぞ、不埒な真似を！」
憤然としてイザークは顔を背ける。
「や、いいんじゃね？　ああいうミステリアスでエキゾチックなお姉さん俺大好き。やっぱ綺麗どころがいないとやる気でないしね」

ディアッカは振り返って『虎の愛人』をまだ眺めている。
イザークは疎ましくディアッカを見る……こいつは確か俺の母上までも「ドSっぽくてぞくぞくする、超俺好み」と言いくさっていた。
「おい、お前は女なら誰でもいいのかッ!?」
「ああん？　ってかお前がストライクゾーン狭すぎなの」
素っ気無く言い放ってディアッカはすたすたと先を行く、カッとなってイザークはその背中に怒鳴る。
「何ィッ!?　どういう意味だッ!!」
「どういうも何もそのまんまだって。いちいち怒るなよ。ったく面倒くせーな……」

＊＊＊＊＊

クライン邸はアプリリウス2番街、海を望む高台に広大な敷地を持つ。
白亜のロココ様式の邸に住まう彼女は、まさに“P.L.A.N.T.の姫君”。
彼女のふわふわと漂うピンク色の髪、透き通るような白い肌は、同性の自分でも見惚れるとアスランは振り仰いで思った。
ふんわりとした笑みを湛えて彼女は階段を駆け下りる。
「いらっしゃい、来て下さって嬉しいですわ」
＜ハロ・ハロ・アスラーン＞
ピンク色のハロが跳ねる。
そして少し拗ねた様子でラクス・クラインは言った。
「父からお戻りと聞いて、お会いできる日を楽しみにしておりましたのよ」
……にも関わらず自分は全く脳裏の片隅にもなかった、というわけだ。それはラクス嬢も怒る、とアスランは少しばかり鼻白む。

「申し訳ありません、何かと取り込んでおりまして」
なんだか自分は謝ってばかりだ、とアスランは思う。
＜オマエゲンキカー＞
ピンク色のハロが跳ね回るさまを視野に捉えながら、アスランは箱を差し出す。
「これお土産です」
「あら、ラ・エイプリルのケーキですのね、嬉しい」
にっこりとラクスは笑んで箱を受け取る。
足元に寄ってきた箱型のロボットに「オカピ」と呼びかけて屈みこむ。
「お茶をお願いって伝えて頂戴な」
ハロはオカピに乗って去って行った。
ラクスの先導で長い廊下を抜け、邸の裏手にある庭の四阿へと出る。
そして2人は向かい合わせで腰を掛け、アスランが口を切る。
「追悼式典には戻れず申し訳ありませんでした」
2月14日……国を挙げての追悼式典が行われたが、結局自分は戦線から戻ることができなかった。
「いいえ。お役目ですもの、仕方ないことですわ。あなたの分も祈らせていただきました」
「ありがとうございます」
「――この頃また軍に入る方が増えてきているようですわね。わたくしのお友だちも、何人も志願して行かれて」
ラクスは悲しげな顔を見せる。
「戦争が、どんどん大きくなっていくような気がします」
「……実際そうなのかもしれません」
「憎しみが連鎖するだけなのに、人は何故戦うのでしょう？」
ラクスの淡い色の眼差しが凝視して、アスランは魅入られたように見返して応じる。
「仮にそうとわかっていても、戦いに身を投じることでしか慰められない、救われないものもありましょう」

透かし見るように、ラクスは小首を傾げた。
「それはあなた自身のことですわね、アスラン」
認めたくはないが、そうなのかもしれない――ラクスは鋭い。

雑談のさなか、不意にラクスが思い出したように言った。
「そうそう、あなたにお見せしたいものがありましたの」
そして両手でポケットをまさぐっていたラクスが何かを差し出す。
三つの折り紙の、白い花？
アスランはそれを手にとって眺める。
白百合を模して作られたそれは淡い色彩で、ひどく儚く見えた。
「ユニウス・セブンに残っていましたの。幾つとなく数十と……捧げられた御魂に失礼かとは思いましたけれど、これを誰かに伝えたくてお預かりしてきましたの。まずは誰よりも先に、あなたに見ていただきたくて」
宇宙に花などない。
どこかの誰かが追悼の気持ちを込めて折り、そしてひっそりと捧げたのだろう。
しかし誰が？
アスランは首をひねる。
地球に近すぎるデブリ帯にあるユニウス・セブンに敢えて立ち寄るようなZ．A．F．T．軍航路はない。スクラップ屋ギルドにしたところであの農業P．L．A．N．T．の廃墟に拾うものはないはず、まして彼ら商人がこんな捧げものをするとも思えない。
そしてP．L．A．N．T．民間船もラクスの追悼慰霊団が初上陸――となれば自然、地球の誰かではないか、という結論に達する。
民間人か、それとも地球連合の軍人か。ともかく亡き人々を悼むナチュラルがいる。
それが衝撃でもあり、と同時に紙に込められた人の心の温もりがふと伝わってくるような気がした。
不意にコペルニクスでの日々を思い出す。

自分はナチュラルやコーディネイターという壁を知ることもなく幼い日を過ごした。あの場所には、優しいナチュラルの人々がいたことを自分は知っている。

「持って帰ってきたことは、きっとユニウス・セブンに眠る方々もわかってくださるでしょう」

彼女の手のひらにそっとそれを返す。

「できるなら、どうかこれを歌ってください。亡き人々を悼む『向こう側の人々』がいるのだと。その気持ちがあなたを通して誰かに伝わって、そしてその誰かがまた他の人に伝えて、波紋のように広がっていって、そしていつか……」

いつか……平和に……？

ふとアスランは言葉を呑む。

身体中の水分が出てしまったと思ったくらいに泣いたのは1年前。母を失ったこと、ナチュラルを信じて裏切られたというショックは余りにも大きく、だから軍に入った。戦いは嫌だ、しかし思いも言葉も通じないなら戦うしかない、守る為に。

だが『向こう側の人々』もそう思っているのではないか？　ならばどこで収めればよい？

……ふと、クライン議長の言葉が蘇る。

――言葉よりも銃は必要かね？

きっと銃だけでは駄目なのだ、では何がいる？

「アスラン」

呼びかけに我に返ると、春の青空のような色の眼差しが自分を凝視していた。

「ああいえ、ごめんなさい……ちょっと疲れているのかも」

一体何を考えているのだろう、と苦笑いして、アスランは目を転じ

る。
穏やかできらきらと光る海が視野いっぱいに広がる――ここはまだ平和だ。
「キラさまは、今頃どうしていらっしゃるのでしょうね」
同じ方向を眺めながら、不意にラクスがひとりごちるように言った。
「さあ」
アスランは言葉を濁して黙る。
北アフリカへ突入していったであろう足つきとストライク。
ジブラルタルを中心として、あの一帯はZ．A．F．T．勢力圏であり、そして砂漠の虎と称される智将アンドリュー・バルトフェルドもあの付近にいたはず。
だがそれをこの少女に言う必要などなかった。
「アスランは、あの方が好きだったんでしょう？」
一瞬呆気に取られたアスランは動揺を圧して、ややあって重い口を切る。
「さあ、どうでしょう」
あの頃どう思っていたかなんて、もう忘れてしまった――今、キラの名はただ自分を憂鬱にさせる記号なだけで。
「わたくし、あの方が好きですわ」
ほんわりとして笑んでラクスは言う。
――それは恋愛感情という意味でだろうか？
掴みどころのない春の雲のような少女に敢えて聞くのも躊躇われて、アスランは「そうですか」とだけ答えた。
それ以上何と言えるだろう？

日が傾いた頃、辞去を申し出ると、ラクスはひどく残念そうに引き留めた。
「是非お夕食をご一緒に。父もじき戻ります、あなたにお会いしたいと申しておりましたわ」

何故クライン議長が私に？　とアスランは素早く思考を巡らせる。政治向きの話しだろうか、だが自分個人はあくまでも一兵卒だ、父への仲介者であってはならない。

アスランはそんな考えは顔に出さず、申し訳なさそうな表情を作る。

「ごめんなさい、こちらにいるうちにやっておかなければいけないこともいろいろありまして」

「そうですか。ではあまりお引止めしてはいけませんわね……」

名残惜しそうにラクスは玄関口まで見送ってくれた。

「あなたの新曲を楽しみにしています、ラクス」

アスランの言葉に、はい、とラクスはおっとりと笑んだ。

＊＊＊＊＊

砂漠の虎の接収した宿舎は居心地も悪くない、供される料理も悪くない。

だが待機、待機、待機。

「また待機かッ！！」

ガン、とイザークはテーブルをブーツの踵で蹴る。

君らは地上戦未体験だし、その機体は砲戦仕様だからねえ、と結局自分たちを使う気のなさそうなバルトフェルドに、イザークは不貞腐れていた。

「うおッ」

ソファーに寝そべって写真雑誌を読んでいたディアッカが声を上げる。

「何だ」

苛々とイザークは言う。

バナディーヤとジブラルタルとは定期輸送便があるのでＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．で発行される雑誌の新刊もすぐ手に入る。

ディアッカはちょくちょく他の兵士から雑誌を拝借してくる、つくづく立ち回りの上手いもとい要領のいいヤツだ。
「ニコル・アマルフィのシークレットピアノ独奏会に１５０名集まるだってよ。あいつ休暇で本国に戻ってたんだ」
「はぁ？　ニコルの？」
同僚の名にイザークが覗き込む。
若きピアニスト久々のコンサート、と題目が掲げられている。
確かにニコルは幼い頃から天才ピアニストとして名を馳せていてあちこちで引っ張りだこではあった、イザークも何度かそのピアノは聴いた。
「あーアスランも聴きに行きやがったんだな」
「アスランだと？」
もう１ヶ月も顔を合わせていない、と半ば焦れすら覚えながらイザークは忌々しく思う。
結局俺の全ての思考があの女に繋がってしまう！
「どれだ！」
「ほれ」
蒼い髪を後ろで纏めて花飾りで結い、白い清楚なワンピース姿にショール、淡い色彩の花束を抱えている彼女の立ち姿が写真には収められていた。
「アマルフィ議員公認か？！　ってなぁ……そうきたかよ」
なるほど彼女が会話している男女はアマルフィ議員夫妻である。
「馬鹿馬鹿しい、どう見ても招待のお礼の挨拶だろうが」
雑誌を奪い取ってごろりとイザークはソファーに転がる。
アスランの軍服以外の姿を見るのは久々と言ってもいい、そして綺麗な横顔には笑顔さえ垣間見える。
以前はこんな顔で俺を見てたこともあったはずなのに、あの性悪が！！
「ニコルたちは優雅に本国でピアノコンサート。俺らは地球で砂塗れ。……ったく俺らはいつ帰れるのよ？」

ディアッカの愚痴に、イザークは飛び起きて一喝する。
「足つきを仕留めてからに決まってるだろうがッ！」
そう、全てはそれに尽きる。
あの足つきを仕留めさえすれば全て上手くいくはず、と言おうとしたその時、召集を告げる甲高いサイレンが鳴った。

「バルトフェルド隊長ッ！！」
イザークの激した声が格納庫の高い天井に跳ね返る。
鮮やかなオレンジ色に黒の縞模様のパイロットスーツを纏ったバルトフェルドは振り返る。
ご丁寧にそのヘルメットには虎の顔まで書き込まれている。
どこまでもふざけた男だ！！　そもそも砂漠に虎なぞいるものか！！
「納得いきませんッ！！　どうして我々の配置がレセップス艦上なんですッ！？」
バルトフェルドは肩をすくめた。
「おやおや！　クルーゼ隊では上官命令に兵士がそうやって異議を唱えてもいいのかね」
切り返しにイザークはぐっと詰まる。
「いえ……しかし……ッ！　！　ヤツらとの戦闘経験では俺たちの方がッ……！！」
「一体何の経験なのよ、お馬鹿さん。あなたたちが仕留められなかったから今があるんでしょ」
バルトフェルドの脇に立つピンク色のパイロットスーツの女、アイシャの辛辣な言葉にイザークは歯を剥く。
「何ィッ！？」
「こらアイシャ」
「あら失礼」
たしなめられても、いささかも悪びれた様子もなく彼女は笑んでい

る。
「ま、ともかく君たちの機体では高速戦闘を行うバクゥのスピードにはついてこれまい？　下手に損傷されても困る」
あまり手間はかけさせないでくれたまえな、とバルトフェルドは素っ気無い。
どこまでも邪魔者扱いか！　とイザークが眦を吊り上げた直後。
「もうよせよ、イザーク、命令なんだから。――失礼しました」
とディアッカが溜息混じりに肩を掴んで止め、イザークは引きずられるようにその場を離れる。
「ディアッカッ！」
「お前そんなんじゃ命令不服従の失点つくぜぇ？　そんなんヤでしょ？」
呆れたようにディアッカが言い、イザークはぎりぎりと唇を噛み締める。
「混戦になったら目立たないから、そこでちゃちゃっとやっちゃえばいいっしょ」
ディアッカの耳打ちに、イザークは不服ながらとりあえずそれ以上の言葉を飲み込んだ。

艦首砲と超高インパルス長距離射撃砲とが放つ光によって、激しい爆発が白亜の巨艦の後部で起きる。
『おー、やったぁ』
無邪気に嬉しそうなディアッカの声が聞こえる。
――正面からくると見せかけて、戦闘開始前から身を隠していた一隻とで足つきを挟撃する。
バルトフェルドの作戦は間違ってはいなかった。
だが。
レセップス艦上から足つきへの一斉射撃に加わりながらも、視線は遥か前方バクゥと対峙しているストライクへと向かう。

イザークは臍を噛む。
忌々しいストライクッ！！　アイツを仕留めるのはこの俺だというのにッ！！
被弾した足つきは大きく傾き、タルパティア工場跡地へと突っ込んだ。
吹き寄せる砂に埋もれかけていた建物を、白亜の艦の巨体が轟音を上げてなぎ倒し、そしてめり込むようにして止まる。
そしてその翼を、建物の骨組みががっちりと捕らえて離さない。
これならば砲撃をよけるどころか、主砲の射線を取ることもできまい。
レセップスの艦首砲が放たれ、足つきは撃たれるがままになる。
「もうコイツは落ちる！　ストライクだ！」
業を煮やしたイザークは言い放つとペダルを踏み込みレバーを操ってレセップス艦上から身を翻す。
『お？　おい待てって！　おいおい！』
ディアッカの制止を振り切り、デュエルは飛び降りて、着地して思わぬ機体の重さと足場のなさにつんのめる。
「うわぁぁぁッ！！　何だッ！？」
細かな砂がさらさらと流れ落ちる、砂丘の上から砂に流されて一気に麓近くまで滑り落ちる。
「うわァァァッ！！」
イザークは驚愕の声を上げる。
『あ～おいおい』
足つきから放たれたツートンカラーの戦闘機2機がレセップス甲板に攻撃を仕掛けてきた。
ミサイルは着弾し、レセップス主砲が被弾する。
爆発から逃れようと飛び退ったバスターが、レセップス艦上デュエル側に立って頭部モニターをこちらに向ける。
『お前、デュエルの足砂にとられちゃって……出れるの？』
「何をォォォッ！？」

ジャンプしながらバーニアを吹かせる、だが重力下で思うように離脱できずに、砂丘の中腹でデュエルは再び跳躍を試みる。
『一体何をやってる！　お前たちの持ち場は艦上だぞッ！』
被弾に焦っているのだろう、騒がしい艦橋のマーチン・ダコスタから通信が入る。
「黙れッ！！　こっちはそれどころじゃないんだッ！！」
イザークは顔を真っ赤にして怒鳴り返す。
この屈辱感！
そして激戦を目前にしながら、機体が思うままに動かないこの焦燥感！
ストライクはバクゥ相手にあれほど柔軟に戦いこなしているではないかッ！！
「ッストライクゥゥゥッ！！」
『いや、ストライク関係ないから。お前、落ち着いてちょっと運動プログラム変えてみろよ』
笑い混じりのディアッカの言葉に頭に血が上る。
「くっそォォォッ！！」
それでも仕方なくキーボードを叩き込み、接地圧と摩擦係数に変更を与えてみる。
機体が転がり落ちそうになる、まだ足りんか！
イザークがようやく体勢を立て直したその時、凄まじい爆発音と光が前方で弾けて、そして白亜の艦は捕らえられていた翼を何とか開放し、再び前進を開始した。
『あー……やっちまった』
ディアッカの嘆息が聞こえると同時に、大きく転回した白亜の艦の艦首砲が此方へと照準を付ける。
『やっべ！』
レセップス甲板上にいたバスターも砂地へと飛び込み、そして太い熱線はレセップス後部主砲を貫いた。
そばに配置されていたザウートが爆発に巻き込まれ、誘爆を起こし

て炎に包まれる。
レセップスは黒煙を上げ、砂の海で座礁したようにその動きを止めた。
『うはッ……何だよこれ！』
バスターは砂に飲み込まれて流れていきながら、通信機の向こうでディアッカも慌ててキーボードを打ち込みはじめる音が聞こえた。
『係数いくらだよ！　イザーク！』
「教えるか。俺を笑った罰だ、このクソ馬鹿」
2機がようやくに砂丘の頂点へと戻ったその時、バルトフェルドの操るオレンジ色のラゴゥがはるか砂上で爆発するのが見えた。
『あーあ。バルトフェルド隊長生きてるかな？』
ディアッカは時々ひどく冷めたことを言う、よっぽど他人事なのだろう。
あの司令官に多少矜持を傷つけられたことを思い出して、イザークもつっけんどんに答える。
「まあ、脱出していなければアウトだな」
仮に戦死していたとしたら――あの酔狂な男のことだ、墓前にはコーヒー豆を供えてやればよいだろう。

Past：Academy－2

「アスランッ！」
「なに？」
いつもの反応でアスランは振り返る、仁王立ちのイザークが立ちはだかる。
今度は何だろう？
廊下のただなか、傍らのラスティは笑いをかみ殺して眺める。
「チェスだ！　チェスで決闘を申し込むッ！」
びしっと指を突きつけて、イザークは声を大にする。
「昨日やったばかりじゃない？」
「リベンジだッ！！　マティウスカップ優勝経験者の俺が素人に負けるなんぞあってはならんのだッ！！　今日も放課後に寮のレクルームだ！　逃げるなよッ！！」
イザークの凄い勢いに飲まれたように、アスランは「……わかった」とだけ答える。
ラスティは苦笑いした。
「お前ってすっげぇイザークに気に入られてんのな」
「違うわ、イジメられてるのよ」
この前のお休みの日に乗馬で対決したばかりなのよ、と一つアスランは溜息をついた。
「馬は個体差とコンディションがあるからって結局うやむやにされちゃった」
「銃は？」
確か狙撃訓練でも一悶着あったはずだが、とラスティは記憶を辿る。
「銃に何か仕込んであるだろうって、銃を持っていかれちゃったからお流れ。そうよ、アレもう返してもらわなくちゃ」
……最近ことあるごとにイザークはアスランに絡む。
座学でもＭＳシミュレーションでも２人は常に競っている――最も

アスランは意に介していないらしい――わけで、ライバル認定されたせいだ。
本当の本当は素直に話をしたいのだろうが、ヤツの気性とプライドがそれを許さないらしい。
不器用なヤツ……だがそれが少しばかり面白くもある、好奇心満々で観察しているディアッカの気持ちもわからないではない。
もっとも、好きなコ相手にここまで自分をアピールをできるという点では感嘆に値する、とラスティは思う。

――かくてその放課後、寮のレクリエーションルームでチェス盤を挟むイザークとアスランの姿が目撃された。
「うーむ」
「うーん」
ラスティはレクルームに顔を出す。
「まだやってんの？　……おい、そろそろ日夕点呼だよ？」
「はぁい」
「わかってるッ！！」
邪魔をするなッ！！　と睨むイザークは、フーッと毛を逆立てて威嚇する猫みたいだとラスティは思う。
やれやれ、アイツもあの気性さえなければ見た目は綺麗なんだが。
ラスティはレクルームからまた廊下に戻る、その直後声が聞こえた。
「ええいッ！！」
騒々しい音にラスティはまた身を返す、一体何が起きた？
レクリエーションルームから憤然としてどかどかと去るイザーク、口を尖らせながらもひとりテーブルに散乱した駒を片付けるアスランがいた。
どうやらイザークは負けた腹いせに盤をひっくり返したらしい、まるで子どもだ。
「なあ、お前多少手ェ抜いてやったら？」

「抜いたらバレちゃうわ、イザーク強いし……かえって怒りそう」
そらそうだ、とラスティは肩をすくめた。
確かにイザークなら怒るだろう。
「けどイザークはいつも苛々してるよなぁ。がぶがぶ牛乳飲んでるくせにまだまだカルシウム足りないね、あれは」
「めきめき背が伸びてるみたいだから、きっとそっちに使っちゃってるんだと思うわ」
アスランはぼやきながら飛び散った駒を拾い集める。
「私より２０ｃｍは高くなってやる！　って言うの。私だって少しずつでも伸びたいなぁってカルシウム錠とか牛乳とか飲んでるのに、その横で自分はまた伸びたって威張るのよ」
……女のコ相手にそんなところで競争してどうするんだよ、イザーク。
ラスティは少しばかり遠い目になる。
ヤツが素直になるまでの道のりはめちゃくちゃ遠そうだ。
少しばかりふてくされた彼女は片付けを終えて、箱をしまった。

＊＊＊＊＊

その週の日曜日。
アプリリウス市ど真ん中の中央通りを、薄い青紫色のふわふわしたドレス姿の少女が走っていた。
彼女は裾をたくし上げて往来の人々の振り返る中を駆け抜ける。
凄まじく目立つなぁ、とバイクで信号待ちのラスティは眺めていた。
一体どこのお姫さまだか、さてさて顔やいかに、と期待しながら見守っていたラスティは、横断歩道を走る少女の横顔に吃驚する。
結い上げた蒼い髪にも今更気付く、間違いない。
「アスランッ！　？　」

メットを脱いでラスティが叫ぶ。
「ラスティッ！　！　？　」
アスランが振り返る。
もともと綺麗だが、美々しく化粧までして髪を結い上げた姿はまるでお嬢さま、もとい正真正銘のお嬢さまだ。
「ッおいおい、どうしたんだよ！　？　」
「ちょっと乗せてッ！　！　」
駆け寄ってきて、慌しく脱いだヒール靴を手に、裾をたくし上げたアスランはバイクの後ろに乗りこむ。
信号は青。
後ろから何やら人の大騒ぎが聞こえるが「振り切っちゃって！　」というアスランの声のままにバイクをフルスロットルで発進させる。

◆◆◆◆◆

信号待ちのエレカの内側、対向車線をぼんやりと眺めていたイザークはあらぬものを見かける。
オレンジ色のつんつん頭、……ラスティ・マッケンジーがヘルメットを被り直している。
やれやれ、休日まで見たくないツラだ、とイザークは顔を背ける。
アプリリウスエリアに家はない筈だから、あいつは寮にいたのだろう。
庶民にはまあせいぜいバイクくらいがお似合いだなどととりとめもなく思考は巡るが、何かひっかかる。
「……？　」
背後にえらい盛装の女を乗せていなかったか？
何だあれは、とイザークはもう一度見る、その瞬間バイクは対向車線を走り抜ける。

ラスティにしがみついて、蒼い髪の乱れ毛を一筋なびかせながら肩剥き出しのドレス姿の彼女は脇を通り過ぎた。
「アスランッ！　？」
呆気にとられている間に、凄まじい速さでバイクは走り抜けていった。
何でアスランがラスティと！　？　いや士官学校でつるんでいるのは知っているが、休日まで！　？
目を剥いて見送る、
だが後続の警笛に我に返って舌打ちした。

＊＊＊＊＊

相手が完璧なるドレス姿では街のオープンカフェでちょっとお茶、というにもひどく目立つ。
行き交う人々がやたら視線を投げかけてくる中でもアスランは平然としているが、恥ずかしさの只中ラスティはコーヒーカップを傾ける。
もっとマシな格好をしてくるんだった。……いや違う、アスランがドレスなんか着ているのが悪い。
「んで？　どういうこと？」
「えーとねえ。ちょっとお見合いを」
ああなるほど。
「で、なんで逃げるわけ？」
「……それで相手を投げ飛ばしちゃって……」
ぽっと頬を赤らめてアスランは語尾を濁す。
ブっとラスティはコーヒーを噴き出す。
「あ、だって向こうが悪いのよ！　いきなり……その……キスしてこようとするからッ！！」

そういえばアスランはエロ関係の話が嫌いな潔癖症だ。
「や、でも投げ飛ばすってお前さぁ、白兵戦の実技演習が来週あるからって、見合い相手で試すの？」
これは士官学校で話したら凄い話題になるだろう、とラスティは確信しながら口元を拭う。
「だから違うんだってば！！　悪いのはあっち！！」
アスランが中腰になって声を大にする。
「いやぁ……そう言われてもねえ」

「よお。やっぱあのオレンジのバイク、ラスティのだったか」
突然耳に飛び込んできた聞き慣れた声にラスティは目を向ける。
行き交う人波の中に、金髪褐色の肌の少年が立ち止まっていた。
デパートの紙袋片手に、私服姿でまさに通り過ぎようとしていたディアッカだった。
「んで？　何してんのよ、アスランお姫さまは」
「ラスティとデートよ」
あっさりと言ってアスランはティーカップを傾け、ラスティは目を彷徨わせる。
「つーか気合いれすぎじゃね？　俺も混ぜろよ」
答えを待たずにどっかりと椅子に座って、ディアッカはメニューを見る。
そしてコーヒーを注文した後彼は不穏な笑みを浮かべた。
「アプリリウスホテル前で特務隊がうろうろしてたっぽいけど、何か関係ある？」
「特務隊なんて、お父さまったら職権濫用ね」
呆れ加減にアスランは首を振る。
「今更だけど、婚姻統制って無茶苦茶な制度ね。遺伝子の相性だけで決めるなんてとんでもないって感じ。さっき会わされた人なんて私より１５歳も年上で、好きになるならない以前の問題だわ。これで７回目かしら……もうお見合いしたくないのよ、何かいい案ない

？」
「あー。ならいい方法教えてやるよ」
ディアッカはにやにや笑って机に肘をつく。
「好きな人がいるんです！　って俺の名前を挙げてみる」
アスランはもとよりラスティも思わずきょとんとする。
「ディアッカの名前を言ったらどうなるの？」
「遺伝子調査の前に親同士でやりとりが始まるさ。俺の親父って、お前の親父さんと全然仲よくないからもう揉める揉める」
「で？」
「そりゃもう解決に時間かかるだろ？　１０年かかっても揉めてると思うね」
ラスティはひとつ溜息をつく。
「何だそりゃあ……お前全然真面目にアドバイスする気ないだろ」
いやいやここからが肝心、とディアッカは手を組む。
「でももし、まーるくおさまって適合ＯＫだったらそん時はそん時。そのうち無難に破棄する方向に持ってくさ、安心してろよ」
「ホントに？」
「ホントに」
「へえ――それいいかも」
お人好しのアスランは信じきって生真面目に考え込んでいる。
一方で意図を見透かしたラスティは、ディアッカの襟首を掴んで低く囁いた。
「お前婚約中にやることやっちゃう気だろ。イザークに言うぞ？　馬上射撃の練習台にされるぞ？　いいんだな？」
「……や、それめっちゃ困るわ」
がしゃん、という金属音が不意に耳に届いた。
耳に馴染みすぎたセイフティを外す音に、咄嗟の反応で３人は椅子を蹴倒して立ち上がった。

危うく机を蹴り上げる寸前でラスティは踏みとどまる。
「貴様ら一体何の話をしているッ！！」
まさに話題の少年がそこで思いっきり銃口を向けていた。
「ほらみろ！　お前があんなこと言うから！」
ラスティはディアッカを見ながらイザークを指差す。
さすがのディアッカも焦りの色を滲ませて、妙に早口になる。
「ちょ、待てイザーク。銃を向けずに話を……」
イザークの銃のトリガーがかちりと音を立てた。
かしゃん、と空の音が響いて、……ふう、と場の緊張がようやくに解ける。
「馬鹿か。いくら俺でも街中で発砲はせん。もっとそこ寄れ」
ずかずかとイザークも席に座り込み、円卓はひどく手狭になる。
「バイクで相乗りなんぞふしだらにもほどがある！！」
「いやいやあの場合他に方法がないって」
「ふしだらって何よ、失礼ね」
「コイツ羨ましいだけなんだって、女のコ助手席に乗せたことないもんなぁ童貞」
「ッ黙れこの汚れがッ！！」
妙な面子でわいわいと雑談をするうちにいつの間にか夕刻を迎え、邸が同じ方向の俺が連れて帰る！！　というイザークの勢いに負けてアスランはエレカに乗り込んだ。
「帰りたくないなぁ。……じゃ、また明日」
助手席からひらひらとアスランは手を振った。
「また明日、か……」
傍らのディアッカが肩をすくめた。
「俺ら来年の今頃は何してるのかねぇ？」
自分たちの前には戦争が待っている、先が見えない。
……ずっとこんな穏やかな日が続けばいいのに、と名残惜しくラス

ティは思った。
「んで、ラスティ」
ぽん、とディアッカが肩に腕を乗せてもたれかかった。
「何だよ、垂れ目」
「暇ならちょっと付き合えよ、女のコひっかけよーぜ」
コイツはーとラスティはちらと横目で眺める。
ディアッカは不穏ににやりと笑った。
「お前と俺ならだいじょーぶ、がっぽがっぽいけると思うんだ」
「いいけど俺複数プレイはしないぞ」
「そりゃあね。俺だって野郎の裸体に興味はないし残り体液つくのはヤダしねえ。さあさ行こうぜー」
妙なヤツに好かれたもんだ、俺ってば。

＊＊＊＊＊

「帰りたくないな」
助手席で心底嫌そうにアスランは呟く。
ぐらりと揺れて、イザークは頭を振って、どこかに拉致監禁してしまいたい不埒な願望を振り払う。
それでもなお揺れる心とは裏腹に、口は勝手に言い放つ。
「そもそも逃げ出すからだろうが。しっかり断れ！」
そうだ、しっかり断ってもらわねば困る！
こちらを向いたアスランは口を尖らせる。
「逃げたくて逃げたんじゃないわ。お父さまには嫌ってもう言ったの。お相手にもお断りしますって伝えて。でも無理やり今日お見合いになっちゃって、もう嫌になっちゃった。……もう、こうなったらディアッカに教えて貰った方法使おうかなぁ」
「何？」

あの馬鹿は一体何を吹き込んだのだ。
「好きな人がいるってディアッカを指名するの。そのうち上手く破棄してくれるって言ってた」
思わずハンドルがぶれる。
「ば……馬鹿かッ！！　そんなの真面目に受け取るなッ！！」
あのエロ男一体婚約中に何する気だ！！？
そもそも一旦締結された婚約を破棄すると言ったところで、親議員たちの都合が絡んでくるのに、簡単に出来るわけがない！！
大体「アスランってかーわいいよなぁ」と常々言っているディアッカだ、本気で破棄するつもりがあるかどうかわかったもんじゃない！！

「ラスティもそう言ってたんだけどね」
「当然だッ！！」

夕焼けの海を眼下に橋を渡って島に入る。
高級住宅地の連なる中にもアプリリウス３番街で一際広大な敷地を誇るザラ邸の門扉が見えた。
ふとイザークは威風堂々たるザラ委員長を想起する……俺は何と言ってザラ国防委員長の前に立つのだ？
敬礼して、お嬢さまを連行してきました、か？
実に重厚な門扉の前の監視カメラが動いて、アスランが立ち上がった。
「私。イェールさん、開けて」
『お嬢さまッ！？』
カメラはイザークの方にも焦点を合わせる、イザークはしぶしぶ名乗る。
「マティウスのイザーク・ジュールだ。偶然街で士官学校の同期を拾ったから連れてきた」
しばらく背後で何やら会話する気配があって、『お通り下さい』と

いう声とともに門扉が開いた。
等間隔で植えられた木立、真っ直ぐな私道の向こうに、噴水のロータリー広場と重厚なゴシック建築の邸が見えた。
長い私道を走り抜けてロータリー広場を回り玄関前に付ける。
「……やっぱり……」
アスランが吐息とともに一言漏らした。

パトリック・ザラ国防委員長！！

執事と番犬を背後に、しどけない浴衣姿に腕組みして仁王立ちしているのは紛れもなくあのザラ委員長だ。
緊迫感溢れるその只中でイザークはぎこちなくアスラン側のドアを開いて降ろす。
「ただ今帰りました、お父さま」
実に優雅にアスランはドレスの裾を引く。
「士官学校同期生のイザーク・ジュールであります」
この人にこれほど間近で対するのは初めてだ。
時折士官学校の講師としてやってきて講釈を垂れる隊長や艦長クラスとは次元が違うオーラだ――Z．A．F．T．創始者である委員長相手に、緊張気味にイザークは敬礼する。
「エザリアの息子か」
刹那投げかけられる鋭い視線に、値踏みされているような気分にさえなる。
これは……逃亡の手助けをしたと思われていると直感が告げて、すっと血の気が引く。
やがてザラ委員長は目を転じた。
「何が言いたいかわかっておろうな、アスラン」
「あの方が悪いんですもの。わたくし、結婚前に無理やりふしだらなことをしようとするような方のお顔なんて、二度と見たくもありません！」

ツンと顔を背けて怒ったようにアスランは居丈高に言い、ザラ委員長は不意に困った表情を見せる。
「あやつはそんな真似をしおったか？」
「それはもう。ご本人が何と仰ってるかは存じませんけれど、わたくし必死で……男の方って力が強いんですもの。お陰で腕と手が痛くて痣になってしまいました」
悄然として腕を押さえるアスランの背後。
そ、そんな真似を！　！　とイザークは唖然としながらも、みるみるパトリック・ザラの顔が紅潮していくさまを視界の隅で捉える。
「逃げているところを士官学校の同期の方に助けていただいたんです。捕まっていたらわたくし今頃……結婚前なのに……」
「イェールッ！！　ヤツにすぐ繋げッ！！　馬鹿な真似をしくさりおってッ！！」
怒気も露わにザラ委員長は叫び、執事が奥に引っ込む。
「手数をかけたな、イザーク・ジュール」
「……いえ」
ねぎらいの言葉、そしてザラ委員長は何やら執事に怒鳴りながら足音荒く邸に入っていく。

俺が助けたと思われたか？
バイクに乗せて助けたのはラスティだと思うが……ヤツの手柄を横取りしてしまったか、俺は？

少々後ろめたい。
「ありがとう、イザーク。いてくれて助かったわ」
ふわふわとした裾をたくし上げて、アスランは段を上がりながら振り返って笑んだ。
「おい、痣は大丈夫なのか！？」
手すりにすがってイザークは振り仰ぐ。
「これホントは匍匐前進でついた痣なの。握られてちょっと痛かっ

た程度なんだけど、オーバーに言い過ぎたかしら」
悪戯めいて彼女は笑い、腕を押さえる。
「気をつけて帰ってね」
笑顔に見惚れていたが、我に返ってイザークは仏頂面に戻る。
「当然だ、俺が事故るか」

まあいいか、ここまでアスランを乗せてきたのは俺だ。
ザラ委員長にご挨拶もできたことであるし、ラスティのヤツには、……何か機会があればささやかに報いるとしよう、とイザークは運転席へと戻った。

Ｐａｓｔ：　Ａｃａｄｅｍｙ－３

アスラン・ザラ。
確かに見ていて綺麗というか、百歩譲って可愛いというのは認めてもいい。
ざっくばらんで表裏がない性格なのもわかる、そのせいでやたら同期の男子たちにも人気がある。
教官たちも頭のいい彼女を大層ご贔屓だ。
ことにレイ・ユウキ教官は熱心にアスラン・ザラの指導に当たっていて、自習中だというのに彼女は今も教官室に呼ばれている。
それにあの渋くて素敵な国防委員長閣下が父親――正直全部が腹立たしいというか、ぶっちゃけムカつく。
シホ・ハーネンフースは眉間に皺をつくって頬杖をつく。
このもやもやは多分ヤキモチ。そんなのは自分がよく知っている。
ちら、とシホは目を上げた。
銀色の彼は頬杖をついてぱらぱらと教科書を面白くもなさそうに眺めている。
大学付属研究所にいたイザーク・ジュールには今更勉強するようなことでもないのだろう。
せっかくの自習時間だというのに、教室中をうろうろとふらついていたディアッカ・エルスマンがその傍らで声を上げた。
「イザーク、えらい渋い趣味だな……ちょい見せてみ」
シホはじっとその光景を眺める。
「これフジヤマの万年筆だろ？　職人技の銀箔入り漆塗り２４Ｋって、お前文具マニア？　こんなのにいくら使ったんだよ」
イザーク・ジュールは素っ気無く答えて手を差し出す。
「返せ。ザラ委員長からいただいたヤツだ」
え、えええええ!?と周囲からどよめきが起きる。
「あの!?」

「つーかアスランの親父さんッ！？」
「何で？」
「まあ、いろいろあるんだ」
国防委員長から拝領という割には勝ち誇った様子も見せない……普段ふんぞりかえっている彼らしくないな、とシホは思う。
「ん？　何？」
教官室から戻ってきたアスラン・ザラが顔を出す。
「お前の親父さんに貰ったんだって」
いつもすっと場に馴染める彼女の特性は本当に羨ましい、とシホはそれを眺めていた。
ああ、使ってるんだ？　と知っていたようにアスランがにっこりと笑う。
「使いやすいでしょ、それ」
「まあな。紙にひっかからんし筆圧に耐える」
もしかしておそろい！？
何故だかムッとしてシホはノートを閉じる。
そのままアスラン・ザラは壇上に上がって教壇前に立ち、わざとらしく咳払いして、演劇がかった口調で切り出した。
「――さて皆さん。我らがユウキ教官から極秘情報を仕入れてまいりました。とってもこっそり教えてくださった航空物理学テストのポイントです。他の教科に追われててマズイよって人、仕方ないからヤマ張って賭けに挑む予定の人、もうどうしようもなく追い詰められちゃってる人こちらへどうぞ。ただし先着１０名さま限りです」
「１０名さま！　俺一番！」
「聞く！　聞く！」
「参考にさせてよ！」
「ちょ……待って！　俺も俺も」
ばたばたと紙とペン片手に男子たちが立ち上がる。
教壇に寄りかかったアスランは面白そうにころころと笑った。
あっという間の半円形の人だかり……やっぱりアスラン・ザラはず

るい、と紛れ込みながらもしみじみシホは思う。
人見知りする自分は彼女と同じようなことはできない。
「イザークは？」
アスラン・ザラが声をかける。
唯一席から動いていないのは彼1人だ、と気づいてシホは振り返る。
「俺を誰だと思ってる！　航空宇宙工学を修めてるんだぞ！」
イザーク・ジュールが大いばりで言い放つ。
「あらそうでした、大変失礼いたしました。じゃあP1からいきます……」

＊＊＊＊＊

レクリエーションルームで書き込んだノートを読んでいたシホは顔を上げる。
ラスティが泥まみれの運動着でずかずかと自動ドリンク販売機の前に立った。
「どうしたのよ泥まみれで。試験期間中だってのに。試験勉強は？」
「気分転換も必要よ。下の販売機全部売り切れになっちゃって、咽喉渇いたからさあ」
「下の販売機が全部？　何やってるの」
「バスケ。幼年学校以来マジ久々にやるねー。マシューとかディアッカとかがダンクしまくりで、アイツらは縛りつけないと駄目だわ。パワーゲームになっちまうよ」
どっかりとソファーに座って缶ジュースを実に旨そうにラスティは飲み干す。
「みんな余裕ね、MS工学テストも近いっていうのに」
それでギリギリになって慌てるのだから男子は馬鹿だ。

自分たちは選抜されてのパイロットコースだ、技官コースではない、とラスティは言い放つ。
「なのにＭＳ工学のテストなんてなぁ。動きゃいいのよＭＳは」
「それじゃいざという時困るでしょ。動力系が壊れた時とか緊急修理の知識がないと困るわよ」
シホは素っ気無く言いながらノートをめくる。
「でもさー。ぶっちゃけ俺ほとんど寝てたの」
「ふうん、すごい自信ね」
「お前もすっごい皮肉だね。も、補習覚悟で挑むつもり。でも落第したらどうしよう～」
「もう一週間しかないわよ。落第したら次の同級生から『先輩』って呼ばれるわよ、オロールみたいに」
ラスティはちらと視線を動かした。
「……お前その口の悪さどうにかならない？　昔っから思ってたけど」
「あら、私は女子としてはごく普通よ」
「アスランの優しさの３分の１でもあればねー。実はそこそこいけてるのにねー」
ラスティのしみじみとした口調に、シホはムッとする。
「あのコと比べないでよ、大体アスラン・ザラは他人に甘すぎなのよ」
アスラン・ザラのポイント説明で航空物理学の試験はなんとＰクラスの全員がパス、当然のようにイザーク・ジュールも独力でクリアしている。
自分も結局耳を傾けて重点的に勉強してみたが、……あれではテストの意味がない、と思う。
「あーはいはい。お前ってアスランをライバルだと思ってるもんね。あ、ならお前もやる？」
「何を」
「バスケ。アスランも今やってるぜ？　アイツに挑んでみればいい

じゃん。っても今はニコルとコートニーとマーレとアンリと組んですんげぇ神速チームになっちゃってるけど」
どうも複数チームを作って遊んでいるらしい。
呆れ顔でシホはまたノートに目を落す。
「いやよ。子どもじゃあるまいし」
……彼女の思考回路は全然わからない。
子どもじゃあるまいし、いい年頃の女子が男子を意識しないというのも不思議だ。

＊＊＊＊＊

更衣室に入ってシホは水音を聞く。
珍しいことにシャワーの時間が重なったようだ、このフロアには自分ともう1人しかいないから多分彼女。
「ああ！　ちょうどいいところに！」
アスラン・ザラが喜びの声を上げた。
更衣室の籠の中に着替え類を投げ込んで、シホはちらとだけ見る。
「なに？」
「シャンプー切れちゃったの！　シホ貸して！」
「容器の中、水で薄めた？」
彼女のようなお嬢様が庶民の知恵を持っているかどうか。
「薄めた。薄めすぎてもう泡立たないの」
「なら、売店に売ってるわよ」
鏡に向ってクレンジングを始めたシホは素っ気無く言う。
「……売店もう閉まってると思う……」
鏡で見るシャワールームのアスランの頭は中途半端に泡立っていて、彼女は妙に悲しげだ。
「もう。バスケなんかやってるからよ！」

シャンプーをぽいと投げて渡せば、小気味いい音で彼女はキャッチした。
「ありがとう。……へえ、ストレートヘア用なんだ。私癖っ毛だからなぁ、少しは真っ直ぐになるかしら」
「無理でしょ。だってあなた根元っから立ってるじゃない」
聞こえているのか聞こえていないのか、がしがし頭を洗っていたアスランはシャワーで洗い流して、生き返ったような顔をしている。
シホが毛穴パックしている最中、シャワールームから出てきた彼女はシャンプーの容器をすぐ傍らに置いた。
「さんきゅ、助かったわ」
胸結構大きいじゃない、とシホはさりげなくチェックする。
あの大きさでバスケで走り回ったら相当揺れて痛いと思うのだが。
……男子たちはまさか胸が揺れるのを見て喜んでたんじゃないだろうか、とまたシホはムッとする。
「疲れちゃったからさっさと寝るわ。明日は早起きしなくちゃいけないの」
無造作にパンツをはいてTシャツを着て短パンに足を通し、アスランは隣の洗面台でおざなりにドライヤーをかける。
「何それ」
「呼び出されてるの。多分明日は一日いないと思う。ホント面倒くさいったら」
肌の手入れもロクにせず、アスランは欠伸をしながら洗面所を出て行った。
シホが部屋に戻った時には照明つけっぱなしで彼女は既に熟睡中だった。
まるで子どもだわ、とシホは思いながら、照明を落した。

＊＊＊＊＊

朝起きたら机の上にディスクが一枚あった。
ラスティに渡して、というアスランの走り書きのメモ付き。
気づかなかった……彼女は本当に早朝にこの部屋を出たらしい、とシホは思う。
いつも通り教室に入って、妙に注目を集める。
「あれ？　アスランはどうしたんです？」
代弁するかのように、ニコルが小首を傾ける。
「さあ。今日は一日いないかもって昨夜言ってたから、士官学校には今いないんじゃない？」
シホは手にしていたディスクをそのままラスティに渡す。
ラスティは満面の笑顔を見せた。
「これよこれ！　シホ！　ＭＳ工学、俺はこれさえあれば超完璧！」
ディスクを片手にラスティは不敵に笑む。
「ま～人徳の為せるわざだよな～ってか友情の証？」
「アスラン・ザラにコピーしてもらったの？　中見てから感激したら？」
そりゃそうだわ、とラスティはいそいそとディスクをノートパソコンに挿入する。
「何？」
同期たちがわらわらと寄ってくる、シホも中身を見ようとラスティの傍らに立つ。
「じゃーん」
ずらずらと奇妙な配線構図が並んでいる。
「これＭＳ？　外部構造じゃん？」
わけわかんねぇ、と背後で誰かが漏らす。
「これ技官用じゃねーの？　なんか間違えてない？」
覗き込んでいたディアッカが言う。
「ええ！？」
愕然としているラスティからシホは無言でマウスを奪い取り、画面

をスクロールする。
「ふうん、そっか。……ねえ、ラスティ。機械工学専門の人のを丸写ししてあなた理解できる？　私にはできないけど」
「……そういや、アスランって前はマイウス工科カレッジにいたんだったっけ……」
一転ラスティは失意にうちひしがれた表情になる。
「ま、がんばれ」
ぽん、と幾つもの手に背を叩かれてラスティは前にぐったりと伏せる。
「意味ね～よ、アスラン……」
「人に頼ろうとするからよ、馬鹿ね」
シホは冷やかに言い放つ。

＊＊＊＊＊

次の休憩時間、まだ失意の只中のラスティの机に、ぽん、とノートのコピーが投げ出された。
「くれてやる」
「ええッ！？　イザーク！？」
コピーをぱらぱらとめくりながら、うぉぉぉと声を上げつつも、ラスティは怪訝な顔でイザーク・ジュールを見上げる。
「でも……なんかおかしいなぁ。お前何か俺を罠にかけようとしてる？　わざと違うノートで留年させるつもりとか」
イザークはムッとした横顔を見せる。
「誰がお前なんぞ罠にかけるか。いらないならやらん。返せ」
「いや、ありがたく貰うって！！　ホント！！　ありがとうイザークさまッ！！」
「ふん。ありがたくあがめたてまつれ、この馬鹿」

実に尊大な口調だが、しかし意外にもイザーク・ジュールは優しいところがあるらしい、とシホはしみじみと眺めていた。

なんとはなしに締まりのない午前中の座学、そして迎えた昼休憩、食堂のＴＶがニュースを流す。
シホはアイザックとともに定食を食べながら、ＴＶの中に見慣れた顔を見出した。
『パトリック・ザラ国防委員長のＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍基地ヤキン・ドゥーエへの表敬訪問が行われました』
アプリリウス・ワン宇宙港からシャトルに乗り込むパトリック・ザラ国防委員長の背後に付き従う少女がいる。
蒼くて長い髪はひとつに結い上げて、首元まで覆う黒い喪服のドレスを身に纏い、薄化粧の横顔で通り過ぎる。
……アスラン・ザラ。
「あんなところにいたのね」
「やっぱアスランさん可愛い～昨日はかっこよかったけど～」
アイザックは頬を赤らめて眺めている、やれやれ。
「何であのコがあんなところにいるのかしら」
「クライン議長がラクス・クラインを常に同行してるようなものじゃないのかな？」
なるほど、奥方を亡くしたザラ委員長のファーストレディは娘のアスラン・ザラなのだろう。
しかしこうやって見ていると、シャンプーがないと嘆いて、朝早く起きなきゃと愚痴って、ベッドにぐったりと寝転がっていた彼女と同一人物とは思えない。
もしかしたら、彼女は彼女なりに大変なのかもしれない。
少しだけ――ほんの少しだけ気の毒かも、とシホは思って、パンとともにその言葉を飲み下した。

＊＊＊＊＊

人工太陽の照度が落ち始めた頃、寮の部屋にふらりとアスラン・ザラは戻ってきた。

「……思ったより早かったじゃない」

「そうなの、ただいま。これシホにこっそりお土産。一緒に食べましょ」

彼女の持つ有名ケーキ店ラ・エイプリルの箱を眺めて、疎ましくシホは彼女に視線を移す。

今自分が懸命に腹筋しているのが見えていないのだろうか？　それともまさかあてつけ？

「今、ダイエット中だから、いらない」

ええええ、とひどく不満そうなアスラン・ザラは口を尖らせた。

「私ケーキを一気に２つも食べられないわ、お夕ご飯前なのに」

息を切らせたシホは敷いたマットの上にばったりと上半身を倒して天井を仰ぎ見る。

なんだかこのコと話していると妙に力が抜ける。

「じゃあラスティにあげたら？　ディスクの件ですごく落ち込んでたわよ」

え？　何で？　と彼女は怪訝そうに首を捻る。

わざとではなかったらしい。……全然わかってない、とシホは内心呆れる。

「馬鹿ね。あんな専門的なの、ラスティに理解できるわけないでしょ」

「あ～。そうか、そうよね。どうしよう、ラスティに悪いことしちゃったかな」

アスランの心配顔を下から見上げて、再び腹筋を再開しながらシホは付け加える。

「でも、イザーク・ジュールのノートのコピーもらって、どうにかなりそうって喜んでたけど！」

「なら大丈夫じゃない。もう、ひやひやしたわ。ラスティには明日謝っておこう」

やや気分を取り直した様子で、彼女はケーキの箱を丸テーブルの上に置いて広げた。

……なんだかクリーミーで甘い匂いがする。

食事前の空いた腹にはひどく魅惑的で、視線は知らずテーブルの上に釘付けになる。

「ねえ、ケーキ食べない？　寝る3時間前までなら太らないって言うし、大体シホ細いんだから体重気にすることないじゃない」

再びシホは腹筋を止めて、マットの上でごろりと腹ばいになった。

「ちょっと、そういう誘惑をするのって卑怯よ」

振り返って、にやりとアスラン・ザラは不穏に笑った。

「やだ、その笑い。誰かさんの真似？」

「その誰かさんていうのがディアッカのことなら正解よ。フォークとお皿を食堂から借りてくるわ。待ってて」

返事を待たずにアスランは部屋を出て行き、シホは全身の力を抜く。

前言撤回――千歩いや一万歩譲って彼女なりに大変だとしても、アスラン・ザラは極めてマイペースなのだ。

Past：Academy－3（後書き）

次からは本編に戻ります。

7：　ジブラルタル、無人島あるいはカーペンタリアにて

久々のアプリリウス宇宙港、アスランは平面エスカレーターの手すりを握り、前を行く赤服の少年に声を掛ける。
「ニコル」
ブーツの踵でリズムを取っていたニコルが頬を赤らめて振り返った。
「あ、アスラン！」
くすくすと笑ってアスランは追いつく。
「先日はありがとうございました。すみません、なんだかバタバタして挨拶もできなくって」
「いいのよ、ホント素敵な演奏会だったわ」
「本当はもっとしっかりしたのをやりたいんですけれどね」
微かにニコルの顔が曇る。
「しばらく鍵盤に触れていないと指も動かしづらくて、なかなか思うようにならなくて」
「ご謙遜。素敵な演奏だったわ、思わず眠くなりそうなくらい」
アスランの言葉にニコルは声を上げて笑う。
「アスラン、バイオリンやってたんでしょう？　いつか一緒に弾いてみたいですよ」
「とてもそんな腕じゃないわ。それよりもニコルの次の演奏会また呼んでね」
ぜひ！　とニコルは嬉しそうに笑む。
平面エスカレーターでの通り過ぎざま、待合室内のモニターにラクス・クラインが写っているのが遠目に見えた。
「ラクス・クラインだ」
ニコルは憧れの視線をモニターに投げかけて、歩む足を止める。
『……向こう側の人々の中には、憂う人もいましょう、優しい人たちもいましょう。引き裂かれてなお諦めさえしなければ、互いを知ろうとする努力を忘れなければ、わたくしたちの思いは、いつかき

っと繋がります』

穏やかに言葉を紡ぐラクスは、あの白百合を模した折り紙をその手に掲げている。

新曲を発表するのだろうか、とアスランは目を細める。

彼女の清冽な歌声を、自分は戦場で聞くことになるのだろう――果たして彼女はどんな歌を歌ってくれるのだろうか。それが楽しみでもあり、なんとはなしに切なくもあった。

2人はそのまま宇宙港から軍事ステーションへの特別輸送機に乗り、停留中のヴェサリウスへと向かう。

ヴェサリウスの艦橋はいつもと同じ慌しさで、兵士としての感覚を鮮やかに蘇らせる。

「のんびりできたかね」

艦長席のアデス艦長は紙コップを傾ける。ふんわりとコーヒーの匂いがした。

「はい」

「隊長は？」

「もうじきおいでになるだろうさ――ほら」

相変わらず無機質な印象を与える隊長が艦橋に入ってくる、一同は敬礼で司令官を出迎えた。

「全員揃っているな」

ラウ・ル・クルーゼはぐるりと周囲を見回した。

「通達通り、我が隊は宇宙駐留部隊と地上降下部隊との二手に分かれる。名簿は見たな？」

アスランはニコルと目配せする。

自分たちＭＳパイロットは地上に降りるのだと既に聞かされていた。

「地上にいる2名の隊員と合流の上、オペレーション・スピットブレイクの手配に取り掛かる。忙しくなるぞ。各員の尽力に期待する」

そして敬礼でミーティングは終わった。

すぐさまクルーは降下準備にとりかかり、アスランとニコルはそれぞれにロッカーへと向かう。
はじめての地球、これから行くまだ見ぬ世界。
アスランはパイロットスーツに着替えながら、妙な緊張感を覚える。
月やP．L．A．N．T．から望む地球は、ただ青くて綺麗なガラス球のように見える。しかし現実あの星では無数の戦いが繰り広げられている。
人の生と死とがせめぎあう場所へ、自分たちは赴く。

＊＊＊＊＊

いつものようにこみあげてくる吐き気、そして寒気に見舞われる。
時間に気づいて大股に司令室へと入り、ドアが閉まるなりラウ・ル・クルーゼは胸元のポケットから小さなケースを取り出す。
ケースには青と白のツートンカラーのカプセルが詰まっていて、そこからせわしく手の平へと叩き出す。
……ギルバートの言うように、発作の間隔が狭まってきているらしい。
ラウは2カプセルばかり無造作に口に放り投げて、机に置いていたコップの水の残りを飲み干した。
対外的には先天的なテロメアの欠損、ということになっている。
全てのコーディネイターが成功作ばかりではない――ことに昨今遺伝子発現の不具合などざらにあったから、P．L．A．N．T．でコーディネイターとして生きていくのにさしたる不都合はなかった。

アレが効かなくなってしまったようだね。
これは前のものより強いが。

あの唯一とも言える自分の秘密の共有者は、旅立つ自分にこのケースを差し出した。
老化抑制ナノマシンを含んだ治験段階の薬だ。

あまり急激に量を増やすと、副作用で苦しいだろう。
多くとも1日2回、それ以上は目下控えたまえ。

多分、次に宇宙に戻ってくるまでの数はあるだろう、とカプセルの入ったケースを眺めながらラウは思う。
そして深呼吸しながら、じっと自分の手の甲をかざして眺める。
以前より、皺が増えた――生まれ出でて26年という割には年老いた手だ。
仮面の次は手袋をせねばならないか、と彼の口元には皮肉な笑みが浮かぶ。
だがまだ大丈夫だ、まだ持つ。
その時が訪れるまで、まだ自分はこの忌々しくわずらわしい体をなんとしても維持しなければならない。

スピットブレイクはお前に任せる。

パトリック・ザラの重々しくそして密やかな言葉が耳に蘇り、ラウはくつくつと喉下で低く笑う。
長い道のりだった、黄道連盟の特殊部隊の一隊員であった頃から思えば。

ようやくに自分はZ．A．F．T．軍を牛耳るあの男の信任を勝ち得ることができた。
それもあの子のおかげだな、と実に愛しくも憎い部下なる少女を想起する。
自分が願ったところで得ることもできなかったものを、全て持ちあわせている最高級のコーディネイター。
側においてこの手で慈しむように技術を仕込み、肝要なる局面では手柄をとらせ、傷のつかないように大事に大事に育ててきた。
そうでなくともレイと同じ程度に飲み込みが早かったから、教えること自体に不都合はなく兵士としてよい具合に熟れてきた。
そしてまだ伸びしろがある。
まさか戦闘員となるべくして調整されたわけでもないだろうに――

アレを頼む、いずれは私の後を継ぐのだから。

パトリック・ザラのごとき冷徹で謀略に長けた政治家といえども、血を分けた子どもには自然脇が甘くなるらしい。
全く、それを知った時の驚きと失笑といったら！
ラウは息をひとつ深く吸い込む。
発作が落ち着いてきたのを知り、ようやくにラウは通信を艦橋へと繋ぐ。
「リムジンの発進準備はどうだ」
『完了までもう間もなくです』
「わかった。行く」

スピットブレイク……

馬鹿馬鹿しい――愚かなる者たちよ、皆戦乱に踊れ。踊り狂って互

いを食らいつくし、知らず破滅へと進み行け。
その荒廃のただ中に私は道を開こう――
その為にならば、＜私＞は道化にだとてなってみせる！
ラウ・ル・クルーゼはブリーフィングケースを携えると、司令室を後にした。

＊＊＊＊＊

降下用ポッド内に搭載されたイージスのコックピットで、アスランは起動準備にかかっていた。
イージスのコンディションはいつもながらオールグリーン、技術チームの尽力の賜物だろう。
『ジブラルタル・サービス、晴れ。気温１２、湿度４５』
音声通信回線から、ＣＩＣ管制官が降下予定地ジブラルタルの気象情報を間断なく伝えてくる。
『……お前ら地球は始めてだろ？　雲を突き抜けるときにすごく揺れるぞ！　びびるなよ！』
管制官の声は笑っていた。
「脅しはほどほどにして下さい。隊長の艦は？」
アスランはコックピットの各部スイッチを入れる手を休めずに問う。
『リムジンは先行した。次はお前らの番だ！　降下用ポッド落下開始まであと２０秒。なぁに、すぐ着くさ。怖けりゃ目を閉じてたらすぐだぜ！』
『やだなあ、そんなことしませんよ。ねえ、アスラン』
モニター向こうのニコルは不貞腐れた口調で呟く。
「うーん。……多分、ね」
モニターの回線がもうひとつ開いて、アスランは目を上げる。賑やかな艦橋の空気を背後にした穏やかな面差しの艦長だった。

『用心していってこい。あの2人にもよろしくな』
「ありがとうございます、アデス艦長」
そのささやかな気遣いが嬉しくて、笑顔でアスランは敬礼する。
『お土産はなんでもいいですからね、アスラン！』
朗らかな管制の少女の声もその背後から聞こえてくるので、アスランはふふっと意地悪な笑みを浮かべた。
「じゃあ地球の石でも持って帰ってくるわね、アビー」
『え～……せめて食べ物にして下さいよぅ……』
「はいはい。まあ楽しみにしてて」
モニター回線が途切れて、カウントの声だけが響く。
『カウント5、4、3、……大気圏突入カプセル、パージ！』
そして「天の加護のあらんことを」といういつもの言葉とともに、突き上げるような浮遊感が全身を覆い、視野は青く染まる。
船外カメラに接続したモニターいっぱいに、迫る地球の映像が映し出されていた。
『わぁ！　凄い！』
音声回線ごしにニコルの歓声が聞こえる。
眩い海の青と緑なす大地の対比に圧倒されながら、言葉もなくアスランはただ見惚れていた。

＊＊＊＊＊

そろそろ時間だ、とディアッカはブリーフィングルーム正面の時計に目をやる。
そしてディアッカは椅子の上で足を組み替えて、傍らのイザークに再度の説得を試みる。
「なあ――もうさ、足つきは他の隊にお任せでいいじゃん？　俺らはスピットブレイクってことで」

予想していたが、イザークは凄まじい勢いで食いつく。
「何をほざいとるかッ！！　絶対に俺は進言するからなッ！！　スピットブレイクはその後だッ！！」
「つーかさ、しつこい男はマジ嫌われるよ？」
「足つきに嫌われたところで何があるかッ！！」
「や、一般的にさぁ……」
どう丸め込んだものかとディアッカは溜息をつく。
イザークの屈辱はわかる、自分も不甲斐なさを感じて少々苛々している部分はある。
だが先の砂漠戦の件は状況が悪すぎた。
地球の重力たるや想像を絶するもので、まして砂漠という凄まじい環境は、ひどく戦争に不向きだった――の一言に尽きると思うのだが。
その時ドアが開いて、久しぶりの隊長の姿を見出して、ディアッカはのっそり立ち上がり敬礼する。
「隊長！」
イザークも喜声を上げて立ち上がり、敬礼する。
「おや、イザーク、ディアッカ。先の砂漠での件は大変だったな」
相変わらずの滑らかな声が応じる。
「いえ！」
「しかしさすがのバルトフェルド隊長も足つきにまんまとしてやられたものだね、これで私ひとりのふがいなさと言われることも減るかな」
苦笑いのラウ・ル・クルーゼ隊長に駆け寄り、イザークは言い募る。
「是非追わせて下さいッ！　足つきは、最初に討てなかった、この俺たちの手で！」
……勝手に俺たちにするなよ、とは隊長の手前言えないディアッカである。
「落ち着きたまえ、イザーク。感情的になりすぎだ」
隊長が宥めるように言う。

勘弁してくれ、もう足つきはいいや、とディアッカは投げやりに椅子に座る。
あの白い艦にまつわるZ・A・F・T・の噂……必ず逃げ延びる、というジンクスはもはや確固たるもので、これ以上関わっていたら身が持たないような気がする。
再びドアが開き、アスランとニコルが入室してきた。
後から入ってきた2人は、イザークの勢いに吃驚したように足をとめて、なおも喰らいついているイザークと隊長を交互に見て、そしてこちらに目を向ける。
「ディアッカ、元気そうね」
アスランに呼びかけられて、実に久々に見る面にとりあえず「いよう、おひさし」と声をかけておく。
ニコルも座っているディアッカの方に視線をやるが、一方でまた視線を移したアスランの目は壇上に詰め寄っているイザークに釘付けになる。
怜悧な美貌を横切る大きな傷跡にアスランが声を上げた。
「……イザーク、その傷ッ!?」
「そんな目で見るなッ!!」
イザークは顔を顰める。
「でも、落下の熱で悪化したんじゃないの!?　大丈夫!?」
本気で心配しているアスランはどこまでもお人好しだ――あんな傷痕、消そうと思えばすぐにでも消せるのに。
心配されてイザークはばつが悪そうに顔を背けた、恥ずかしいのだろう。
「傷はいいようだが、ストライクを討つまでは痕を消すつもりはないそうでね」
隊長が代弁して、アスランは大きく溜息をついた。
「そんな妙なプライドで……鏡で見るたびにつらくなるだけでしょ？」
「うるさいッ!!　女に理解できるかッ!!」

顔を真っ赤にしたイザークが怒鳴る。一方で少し考え込んで、アスランは馬鹿正直に言った。
「……全然理解できないわ。ごめん」
そのやりとりの妙な懐かしさにディアッカはくつくつ笑う。そのディアッカをイザークが突然振り返った。
「お前も悔しいだろう、ディアッカッ！　砂漠であんな目に遭ってッ！」
撃破作戦に加わったものの、部隊は壊滅、隊長は瀕死、しかも足つきとストライクにはまんまと逃げられる……たしかに惨敗だった。しかも自分たちは砂への対応に苦慮してストライクと戦うにすら至らなかった。
「まあ悔しいっちゃ悔しいけどォ」
別にどうでもいいし、と言いかけてイザークはますます勢いを増す。
「お願いします隊長ッ！」
ディアッカはひとつ唸る。
……誰も知らないだろうが、砂漠戦の敗因はこの自分にある。
砂漠で何やら翼をひっかけて動けなかったあの足つきを、バスターの一撃によって自由にしてしまった、という引け目は実のところディアッカの気分をかなり重くしていた。
「確かに足つきがデータを持ってアラスカに入るのは阻止せねばならん。だがそれはカーペンタリアのモラシム隊の任務になっている」
「我々の仕事ですッ！　！　あいつらは最後まで我々の手でッ！！」
ディアッカは深々と嘆息をついて声を上げた。
「おいイザーク、そこらへんにしとけって。上官に食いつくなってバルトフェルド隊長にも言われてたろ？」
むっとした様子でイザークが振り返る、その刹那ふふっと隊長が非常に嫌な笑みを浮かべたのを眺めて、ディアッカは顔を歪めて背ける。
揶揄するような、小馬鹿にするような、一番嫌いな笑い方だ。
そしてその笑みを見るたびいつも思う――この隊長は全幅の信頼を

寄せるに足る指揮官だろうか？

必ず足つきとストライクを仕留めること、を条件にラウ・ル・クルーゼは別働隊を提案した。

結局４人で『ザラ隊』を結成して足つき追撃戦開始、ということになった。

隊長に任命されたアスランの強張った顔を思い出して、あの仮面はとことん悪趣味だな、とディアッカは思う――ストライクのパイロットのことを隊長は知っているだろうに。

……最悪。

ミーティング終了を見るなりディアッカはさっさとブリーフィングルームを後にする。

全てにおいて気分が悪い。

「クルーゼ隊長はなんだってアスランなんかを！　ザラ隊長だと？　気に食わんッ！」

何故かついてきたイザークは背後で憤慨している。

もういい加減にしてほしい、と思うディアッカは自然口調が皮肉に傾く。

「まぁまぁ、いいじゃないの。アスランっていざ戦闘に入ると結構つまんないドジかましてくれたりするし」

「なにが言いたいんだディアッカ」

ぴたりとイザークの足が止まる。

「つまり何か起こっても全部アイツの責任ってわけ。俺らのミスはアイツのミス。そういうこと」

好き放題できるぜぇ？　とディアッカはウィンクする。

「お前アスランに勝ちたいんだろ、このチャンス上手く生かせば？」

「……お前……ッ！　！　なんて奴だッ！」

顔を怒りに紅潮させたイザークはくるりと踵を返して元来た廊下をどかどかと戻る。

全く、我儘にも程がある。
自分はアスランのことを悪く言ってもいいが、他人に言われるのは許せないらしい。
しかしようやく静かになった、とディアッカは頭の後ろで手を組んでそのまま廊下をだらだらと歩く。
この無気力感は一体何なのだろう、戦いへの高揚感もモチベーションも湧かない、そもそも面白さというものを感じない。
ディアッカはぼやく。
「やる気ねぇ……」
偶然に後ろにいたニコルが聞きつけて歩み寄る。
「どうしたんですかディアッカ」
並んで歩いて、大気圏落下での後遺症ですか、とニコルが満更冗談でもないような顔で問う。
「ああ？　お前に心配されるようになったら終わりだっつーの」
ニコルの額を指先で弾けば、「痛ッ！」と彼は涙目になった。
「で、ザラ隊はいつ出発よ」
「明朝０８：００出発ですって、カーペンタリアには昼頃に着く予定です」
ニコルが追いすがる。
「……はぁ」
「どうしちゃったんですか、ホントに」
「お前もイザークと毎日一緒だったら多少わかるかもよ。お前俺と代わらね？」
今になって盾がわりに使っていたラスティの存在のありがたみがしみじみとわかる。
「ええ？　喧嘩でもしたんですか、あんなに仲良いのに」
仲が良い！？
思わずディアッカの足が止まる。
それは観察対象として実に面白く拝見させていただいてはいるが、そんな友情を感じたことなどついぞない！

頭痛が起きそうな予感の中、ディアッカは首をコキコキと左右に振って鳴らした。
「ニコル……お前マジで殴るぞ？」
ひゃあと叫んでニコルは笑いながら廊下を走り去っていった。
その姿を見遣りながら、幾分か気分が紛れたことに気づく。
歩み寄れない、近づけない、それはもしかしたら失うこと傷つくことに怯えているから？
そんな思考がふと過り――馬鹿馬鹿しい、とディアッカはふと苦笑いした。

まさか、この俺がそんなわけないだろ？

＊＊＊＊＊

アスランは窓際に頬杖をつく。
ジブラルタルからカーペンタリアへ。
他の3人は既に別の輸送機で発っているのだが、しかし自分とイージスのこの輸送機だけが航法機材のトラブルで出立が遅れていた。
定時を大幅に遅れている……これでは到着もかなり遅れるだろう。
「すまんな、退屈かね」
コックピットからパイロットたちが声を掛けてくる。
「いいえ、仕方ないですもの」
ついでだから一眠りしよう、とアスランは後部座席で転寝を始める。
それからどれくらい経ったか。
「さあ行くぞ！」
その声とともにやがてゆっくりと機体が動き、転回を始めた感覚があってうっすらと目を開く。

基地の風景が動き始め、やがて眼下に小さくなっていく。
自分は、何をしに、どこに行くのだったろう？
寝ぼけた頭で、アスランは窓から外の風景を眺めていた。

――そうだな、ではアスランに隊長を任せようか。

不意に蘇るクルーゼ隊長の声に、はっと我に返る。
”足つき”アークエンジェル追討の為に自分は赴くのだ。

討たねば、次に討たれるのは君自身かもしれんぞ。

咽喉元を締め付けるような言葉が次々と蘇る。
ストライクは、キラはミゲルをはじめとして多くの同胞を殺し、イザークを傷つけた。
一矢報いたいというイザークたちの気持ちも理解できる。
それだけではなく、このまま見逃せばキラはもっと多くのZ．A．F．T．兵士を傷つけ、殺すだろう。自分はそれを止めねばならない。
窓に頭を凭せかけ、アスランは憂鬱に“その時”を思い描く。
できるのだろうか、自分に？

君とは戦いたくないよ、アスラン……

未だ幼さを残す少年の声が蘇る。

キラ。
戦いの悪夢にまどろみながら、不意の声に再び目覚める。
「おい、あれ！」
「ああ……でもこんなところで、誰が」
輸送機のコックピットで交わされる会話に、不審に思ったアスランは身を乗り出す。
「どうしました？」
「前方海上に戦闘らしき反応があるんだ」
「え？」
アスランは驚いて前方を透かし見たが、日を浴びて輝く雲海に阻まれて何も見えない。
このあたりは中立国家に近接してはいるがＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の制空圏内のはずで、およそ戦闘の行われるような場所ではない。
「参ったな、巻き込まれたら厄介だ……グゥル積んでないんだよ。ＭＳおっこっちまう」
「困りましたね」
ＭＳ支援空中機動飛翔体のグゥルがなくては、イージスは大気圏内を移動できない。
その時、雲海を割るようにして目の前に飛び出してきたものがあった。
パイロットが息を呑み、とっさに機体を捻る。
現れたのは小型の戦闘機だった。
流線型のボディは白と青のツートンカラー――少なくともＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍機ではない。
「連合軍機か！」
「くそ！　なんでこんなところに！」
コパイロットが歯噛みして、トリガーを引く。機銃が雲を散らし、敵機は翼を傾けて雲の中に逃れた。
「君は早くＭＳのコックピットへ！　いざとなったら機体はパージする！」

「しかしあなた方は！？」
いったん雲の中に隠れた地球軍機が再び飛び出し、機銃を撃ちかけてくる。
「その後脱出するさ！　さっさと行け！」
叱咤されるように命じられて、アスランは頷いた。
「はい……！」
確かに今自分にできることはない。
さっと身を翻してコックピットを出て、貨物室へのハッチへと身をくぐらせる。
そしてイージスのコックピットに乗り込んだその時、機体を振動が突き上げた。
被弾したのだろう。
素早くＯＳを立ち上げている間に、輸送機コックピットのやりとりがスピーカーから聞こえてきた。
『くそ！　油断した！』
がくんと機体の落下が感じられた。
『駄目だ、持たん！　高度を下げてパージする！』
イージスが起動すると同時に、激しく揺れる輸送機のハッチが開く。
「どうかご無事で！！」
アスランは叫ぶ。
『君もな！！』
アスランは残していく彼らの幸運を祈った後、イージスを宙に躍らせた。

＊＊＊＊＊

午後半ばにはカーペンタリアに到着予定だったアスランの輸送機は未だ到着していない。

……予定では自分達よりほんの1時間遅れで到着するはずだったのだが。
すでに空は染め上げたように赤い――日が暮れる。
「一体何をしてるんだッ！！　あの馬鹿ッ！！」
待ちくたびれた挙句にイザークが癇癪を起こして喚く。
「アスランのせいじゃないと思いますよ、……多分」
ニコルは心配げに窓から夕焼けを眺める。
「機材トラブルって解決したんだろ？　どっか着陸場所間違えちゃったんじゃねーの？」
雑誌を眺めているディアッカはぺらりと頁をめくる。
「んなわけがあるかッ！！」
イザークが怒鳴ったその矢先、ドアがシュンと開いた。
「アスラン！？」
「お前ッ！！」
ニコルとイザークが勢いよく振り返ったそこには、予想に反して緑色の制服の兵士がいた。
「お久しぶりです～皆さん！」
予想外の人物に2人は一瞬黙り込み、ディアッカが顔を上げて、ちらとその兵士を見やる。
「ん？　アイザックじゃん。お前ここ配属になってたの？」
「はい。ボク今アイゼンハワー隊なんですよ！　いやあ久しぶりですね！」
士官学校同期のアイザック・マウが満面の笑顔で敬礼する。
ちっと苦々しくイザークはソファーに腰を降ろし、ニコルは深々と溜息をついた。
「そうそう。再会を喜んでる場合じゃないんですって。聞きました？　なんかアスランさんの輸送機、インド洋上で墜落しちゃったらしいですよ」
突然の報せに3人が絶句する。
「はぁ！？　つ……墜落ゥッ！？」

イザークが素っ頓狂な声を上げる。
「やー……機材トラブルといい墜落といい幸先いいねぇ……こりゃあまた」
ディアッカは苦笑いでしみじみと言う。
「笑い事じゃないですよ、大変ですよ！」
声を震わせてニコルが中腰になる、イザークは「詳しい状況を司令部に訊いてくる」と席を立ち、アイザックを引きずるように部屋を出て行った。
ニコルはうろうろと部屋を歩き回る。
「おい、落ち着けよ。気が散る」
「ごめんなさい」
雑誌に目を落としていたディアッカに一度は注意されて、ニコルは座るが、また立つ。
「アスラン今頃どうしてるんだろう……まさか墜落で木っ端微塵になっちゃってるんじゃ……」
むう、とディアッカは雑誌を眺めながら考え込んでいたが、ふと声を発した。
「なあ」
「何です」
ニコルは上の空で答える。
「いや、このコ乳輪でかいなぁって。ほらどう思うよ？」
その肉々しいカラーの頁を見せてくるディアッカに対し、頬を赤らめたニコルは肩を落とした。
「……もう、そんな本ばっかり読まないで下さいよ」
「こういうのは本とは言わねーよ、単なるエロ本。売店で買ってきたばっかのぴっかぴっか。後でお前も見る？　汚すなよ？」
声変わり前のニコルがひゅっと息を吸い込む音がして、裏声で彼は声を荒げる。
「こんな状況でなんでそんな破廉恥なことを言うんですかッ！」
「いや、和ませてやろうっていう俺のささやかな思いやりなんだけ

ど」
袋閉じグラビアを開けようと指を掛けていたディアッカから、ニコルは本を奪い取って机に投げつける。
「もうやめて下さいよ、こんな時に！」
「あーあ。……なあお前さ、ストライクのパイロットのこと知ってる？」
「ストライク……？」
背中を向けようとしていたニコルが、突然の話題に振り返る。
「アスランが言ってたんだけど、アイツの月での幼馴染だってさ。しかもコーディネイター」
はっとした様子でニコルは息を飲み、向かいのソファーに腰を下ろした。
そして身を乗り出して囁くように問いかける。
「それ、いつ知ったんです」
「アスランがストライク捕獲で失敗した後。ガモフで一緒に射撃した時だったから……いつだ？」
もう2ヶ月くらい前になるだろうか。
「あの動きといい、それなら納得できます。ああ、……それでアスラン……」
今までのことを思い返しているのか、ニコルの面は青ざめていた。
「これって隊長は知ってるんでしょうか？」
「知ってるんじゃねえの？　アスラン嘘へたくそだし、まあアイツのことだから当然報告するだろうし」
「――そうですよ、大体ザラ隊だって何かおかしいと思ったんです。友人同士を対決させるなんて悪趣味すぎる！」
憤慨の色を浮かべたニコルが厳しい口調でまくしたてる。
「でよ、アイツがストライクと戦うのやっぱまずいと思うわけ。なんせあの性格だろ？　俺的にはイザークにまるっとお任せすべきじゃねーの、って思うんだけど」
「そうですね。この話イザークにします？」

「そこそこ。ただでさえストライクゥゥゥ！　なヤツだろ。相手がアスランの元カレなら躊躇なくやってくれそうな気がするんだけどねえ」

「え、あ、元カレ……ですか」

「幼なじみって本人言ってたけどよ、ありゃ間違いないね。恋する乙女な顔だった」

それはまずいかも、とニコルがほんのり頬を赤らめて考え込む。

「……そんなこと言ったらイザーク、またすごく荒れるんじゃないかな、と思うんですけど……」

その超絶重い愛で、イザークがアスランをドン引きさせてからもう半年ほどになるだろうか。

挙句逃げられた上に自分よりラスティが選ばれたこともあって、すっかりイザークは屈折してしまった。

ということで可愛さ余って憎さ百倍もとい千倍状態が継続中――どこまでも粘着質なヤツだ。

「もうこの際すっきりアスランに嫌われて区切ったほうが双方の為なんじゃね？」

「うーん……でもまた大変なことになりそうで、そっちが僕は心配です」

その時ドアが開いて、ディアッカとニコルは咄嗟に口をつぐむ。

その後のアスランの消息を司令部に訊きにいっていたイザークだった。

「イザーク！　アスランは……」

「ザラ隊の諸君！　栄えある我が隊初任務の内容を通達する！」

ニコルの言葉を遮って、芝居っけたっぷりにイザークが言う。

「それはこれ以上ないというほどに重要な……」

振り返ったディアッカが身を乗り出す。

「隊長どのの捜索である！」

一瞬後、イザークとディアッカは爆笑する。

腹を抱えこんで笑うイザーク、「まーじーでー」と雑誌を丸めて机

をばしばし叩きながら大笑いしているディアッカを見比べながら、ニコルは声を荒げる。
「笑い事じゃないですよッ！　アスランが輸送機ごと行方不明なのにッ！　事故なのか戦闘に巻き込まれたのかもわからないじゃないですかッ！　今頃波間に漂ってるかもしれないんですよッ！！？」
「イージスに乗っててそりゃないだろ、沈んでるかもしんないけどさ」
涙を拭いながらディアッカは言う。
「大気圏から落ちたってわけじゃなし連合の勢力圏じゃなし、そこまで心配することないじゃん」
「乗ってればそうですけど！　乗る間もなく墜落してたらどうするんですか！　捜索はどうなるんです、僕たちだけですか！？」
じりじりとしたニコルが問う。
「ああ。人手が足りなくて自分たちの隊長は自分たちで探せとのたまいやがった。司令部は役に立たんな」
未だ笑いを残したイザークは大仰に肩をすくめる。
「とはいってももう日が暮れる、捜索は明日だな。今日は宿舎でお休み、明日には母艦の整備も終わってるってことだからそれからだな」
ニコルは固い表情で問う。
「イザーク……心配じゃないんですか？　アスラン、今1人なんですよ？　もしかしたら投げ出されてるかもしれないんですよ？」
「はん、心配？　アイツのどこをどう心配しろって？」
高飛車なイザークの言葉に、ニコルは表情を硬くして、やがて微妙に怒りを湛えた微笑みできっぱりと言った。
「見損ないました。やっぱりイザークなんかすっきり嫌われてしまえばいいんです！」
はぁ？　とイザークは怪訝な顔を見せるが、一方でエロ本を丸めてディアッカはにやりと笑った。
「そうそう。アイツもしかしたらどっかでイイ男に拾われてるかも

だしね」
一晩は長いぜぇ、とエロ本を丸めてディアッカは笑む。
「想像してみろって。どっかに上陸したとして、イージスから降りて、波だかスコールだかで濡れたパイロットスーツのアスラン。暖を取るために焚き火する。濡れたパイロットスーツ脱ぐじゃん。危ないから武器も火気から遠ざけるよな。……まっしろーい肌に薄い下着一枚で無防備なちょー美少女。そんなの見つけてみろよ。俺だったらもうね、天からのプレゼントだと思ってありがたーくいただく」
「おい馬鹿！」
妄想もいい加減にしろ、とイザークは少しばかり気色ばむ。
「アスランってちょーかわいいからねえ」
「そうですよ、そっちの危険もありますよね？」
「――わかった、探索に出ればいいんだろうがッ！！」
イザークは顔を赤らめて怒鳴る。
「いいや。今日は宿舎でお休み、捜索は明日。明日には母艦の整備も終わってるからって今さっき誰かさんが言ってたじゃん？」
煽るだけ煽って、ディアッカが不穏な笑みを湛えてソファーを立つ。
「さぁて、のんびりお休みするかな」
部屋でじっくり読むとするか、とディアッカは雑誌を小脇に抱えて立ち上がった。
「ええ、そうしましょう！」
そして怒りを微かに滲ませたニコルも部屋を後にする。
「――お前らァァッ！！　待てエェッ！！」
シュンと閉じるドアは、無情にその声を遮った。

＊＊＊＊＊

「やれやれ」
なんとか着地できたはいいけれどホント小さい島だわ、とアスランは呟く。
――まさに絶海の孤島。
電波状況からしても、いつ助けが来るかわからない。
とりあえずの食糧はあるが、しかし長くなるようなら、この島の中で水と食糧を調達せねばならないだろう。
だが上空から見た限りでは泉も川もなさそうだった。
「参ったなぁ」
ぼやきながらも救助信号をさまざまなチャンネルで試みるが、全てホワイトノイズだ。
呪わしいのはNジャマー、しっかりこの辺りにも落ちているらしい。
アスランはとりあえずハッチを開き、コックピットから降りる。
非常用のパックを携えて砂浜をとぼとぼと歩きながら、ふと、視界の崖の上に煌くものが見えた。
まさか……銃口？
刹那、銃弾の音が響き渡った。
アスランは寸前で身を沈めて銃撃を交わす、背後の岩棚に銃弾が突き刺さる。
2発、3発と連射される中を岩棚を掴んでするりと飛び上がり、茂みに姿を隠す。
こんなところに兵士がいる？
崖から、1人の少年が滑り降りる。
自分とさほど年齢は変わらないだろう、とアスランは茂みから眺めていた。
周囲に気を配りながら、自分が落としたパックに彼は歩み寄っていく。
そして彼がこちらに背中を向けたその時、アスランはするりと岩棚から降りた。
プロの割にはひどく無防備だ。

容易く、すぐ背後まで近寄ったその時、ようやく気づいたのか金髪のその少年が振り返って、吃驚したように目を見開いた。
「うわァァァッ！！」
目の前で銃が発射されるが、それを交わすのは容易く、腕を蹴り上げて銃をまず引き剥がす。
「うわッ！」
その軽い身体を砂浜に叩きつけ、ぐいと襟元を押さえ込んでアスランは抜いたナイフを振りかざす。
すぐに始末できる、と醒めた頭で考える一瞬。
「キャァァァァァッ！！」
その相手の咽喉から迸った高い悲鳴、締め上げる腕の感触に気づいてすんででアスランは振り下ろしたナイフを止める。
「女の子？」
アスランは戸惑う。
がくがくと震えながら、その金髪の少年もとい少女は涙を浮かべた金色の目で自分を見た。
そして彼女は震えながら怒鳴った。
「女じゃなけりゃなんだってんだよッ！！」

アスランはぐるりと狭い島を回り、そしてまたイージスのふもとへと戻り、縛り上げた少女の前に立つ。
「あなたホントに兵士なの？　あんな悲鳴聞いたことないわ」
アスランは肩をすくめて奪った銃を確認して荷物の中にしまう。
武器は多いに越したことはない。
「ドッグタグもないようだし。それともその赤いペンダントでわかるの？」
「……」
縛り上げられて転がっている金色の少女は無言で、自分をただ睨みつける。

「私たちの輸送機を落としたの、あなたね。向こうの浜に機体があったわ」
たずねると、彼女は噛み付かんばかりの勢いで言い返す。
「私を落としたのは、そっちだろうが！」
「所属部隊はどこ？　何故あんなところを単機で飛んでいたの？」
「私は兵士なんかじゃないッ！！　所属部隊なんかないし、あんなところ、来たくて来たわけじゃ……うわッ！！」
起き上がろうとした少女がバランスを崩してごろんとまた倒れこむ。
仰向けになったままじたばたしている少女を見遣り、アスランは苦笑いしながら、また歩き出す。
「――お前、あのときヘリオポリスを襲ったやつらの1人だな？　あれは奪ったGだろ？」
不意にたずねられ、アスランはぎくりとして少女を振り返る。
少女は鋭い金色の眼差しで、まっすぐに自分を見つめていた。
「私もあのときあそこにいた。お前たちがぶっ壊したあのヘリオポリスにな！」
全てはあそこから始まった。
アスランは思いを馳せながらイージスに向かって再び歩き出した。
……ヘリオポリス、あのコロニーを破壊するつもりなどなかったと彼女に言ったところで、弁解にもならないだろう。
アスランはラダーに取り付いて、イージスのコックピットへと再び上がる。
もう一度、と通信を試みる。
全方位に向けて救助信号を送る――駄目だ、どの通信回線も繋がらない。
Nジャマーにも強弱があるらしい、今はただノイズしか入らない。
アスランははあ、と嘆息をついてパイロット席に凭れかかる。
「しょっぱなからこれじゃ、先が思いやられるわ」
今頃イザークは激怒しているか嘲笑しているに違いない。ニコルは心配していてくれるだろう、ディアッカはよくわからない。

ひどく憂鬱な気分のただなか、気付けばハッチに打ち付ける雫の音が次第に大きくなってくる。
低い遠雷の轟きが伝わってきた。
管理されているP．L．A．N．T．とは全然違う、地球の天候は移ろいやすい。
いつの間にか広がった暗雲から大粒の雫が零れ落ち、ノイズ音さえかき消すほどの勢いで雨が叩きつける。
スコール？
ハッチから身を乗り出して、眼下放置していた少女が水溜りに転げ落ちたのを見つけた。
「あらあら」
何だか微笑ましいくらいだ。
イージスの腕を伸ばし、その盾を雨傘代わりに突き出す。
そしてアスランはラダーで降りて水溜りの中で暴れている彼女の前に屈みこんで訊ねた。
「ねえ、何してるの？」
「何のんきにッ！！　見ればわかるだろッ！？　溺れてるんだッ！！　助けろよッ！！」
少女は必死だが、実に偉そうに命令する。
アスランは素直に笑う。
「やだ、泳いでるのかと思っちゃったわ。ナチュラルの女のコって面白い遊び方するのねって」
「馬鹿かッ！！　のんびり見てないで早く助けろってばッ！！」
水溜りから引っ張り上げて、彼女の両脚のゴムをナイフで絶つ。
「あーもう、死ぬかと思った！」
そして彼女は駆け出す。
天を仰いでスコールに打たれて、生き返ったような顔をしている彼女を見ていた。
「何してるの？」
ますます謎だ、とアスランは首を傾げる。

「ちょうどいいから洗うのさ！！　あー！　気持ちいいッ！」
生命を育む慈雨を喜ぶ――大地に生きる原始的な喜びというのはこういうものなのだろうか。
ふとコペルニクスの家の花壇で、せっせと土いじりにいそしんで水撒きをしていた母を思い出す。
『緑の手の持ち主』の母が手がけた植物は全て予想以上に大きく立派に育って、自分や回りの大人たちを驚かせたものだ。
戻れない過去に郷愁さえ覚えながら、アスランは金色の少女を眺めていた。
そしてやがてスコールのシャワーから戻ってきた彼女の両手を拘束していたゴムを絶つ。
「なんでだよ？」
濡れそぼった少女が問う。
「だって武器も持っていない女の子を縛ったって仕方ないでしょ」
ナイフを収めながらアスランは言い、足元の荷物を拾い上げる。
「でも隙を見て私がお前の銃を奪えば、形勢は逆転だぞ！　そうなったら、お前、馬鹿みたいじゃないか！」
彼女の言葉にアスランは吹き出して笑って、涙目で岸壁を見やる。
ちょうどあの岸壁の狭間に洞窟が見える、あそこで時間を待とう。
「何だよ！　何で笑うんだよ！」
背後で金色の少女が喚きながらついてくる。
「懲りないなぁと思って。銃を奪おうなんて真似はやめてね。そんなことされたら殺すしかなくなるわ」
はっとして彼女は押し黙った。
脅してしまったろうか、だが本当のことだ。
アスランは洞窟に入り、携帯していたライトで照らし出す。
奥行きはありそうだが、とりあえず雨宿りできればそれでいい。
さっそくかき集めた枯れ木を組んで、火を付ければ、ほのかな明か

りが点った。
背後でくしゃみの音が聞こえて、アスランはふと気づく。
濡れそぼったままでは余りにかわいそうだ。
パックから出した毛布を渡せば、少女はすぐさま服を脱いでくるまった。
ぱち、と焚き火の火が音を立てる。
「はい」
差し出したカップと袋入りの固形食糧のパックを、少女はまじまじと眺めた。
「電波状態がひどいから。今夜はここで夜明かしになる可能性が高いわ」
アスランは受け取らない少女の前にカップと袋入りの固形食糧の素を置いて、焚き火の反対側へと回った。
「Z．A．F．T．の食べ物なんかいるもんか！」
我に返ったような彼女は実に苦々しげに言い放つ。
「あら。Z．A．F．T．の食べ物でも食べ物には違いないでしょ」
ぐう、と実に素直な彼女の腹の虫は鳴り、アスランはくすくす笑う。
その金色の少女は顔を赤らめて、不承不承そのカップを手に取る。
アスランは壁面に凭れかかって洞窟の外を眺める。
激しい雨は止む気配がない、その合間には一向に変化のないノイズが聞こえる……この分ではイージスで全方位に向けて放射しているZ．A．F．T．救難信号にも応答がなさそうだ。
スープを飲みながら、アスランはつくづく困ったものだと内心嘆く。
「お前、なんなんだ？」
「なんなんだって、何？」
突然の言葉に目を上げる。
「お前、何かお嬢さまな匂いがする。そんなヤツがなんでZ．A．F．T．の軍人なんかやってるんだよ、しかも女が！」
そんなことをナチュラルの少女に訊かれるとは思わなかった。
「――あなたが知ったところでどうしようもないわ」

ムッとした顔で金色の少女は目を湯気立つスープに落とした。
途切れた会話。
乾いた大地に打ち付ける雨の音と、焚き火にくべた木が弾ける音だけがする。
アスランは焚き火の前に座る。
「……ああ、そうだよな。私はナチュラルだし、戦争してる相手にそんなこと訊いても仕方ないよなッ！」
「戦争のきっかけはナチュラルが作ったのよ」
忘れてもらっては困る。
「それは……ユニウス・セブンのことは行き過ぎだったかもしれない」
瞬時少女の顔に翳が過るが、すぐさま声を大きくした。
「でもお前たちの放ったＮジャマーの影響で大勢が死んでる！　今この時だって！」
数億の人間の前に敷かれている緩慢な死へのレール、だが一兵卒でしかない自分に何ができるだろう？
痛みを圧し殺して、アスランは淡々として返す。
「地球は私たちに核を打ち込んだのよ。核で報復されるくらいの覚悟は当然あったはずでしょう」
最高評議会の場で、強く言い放ったのは、確かイザークの母。
金色の少女は顔を紅潮させて、声を荒げた。
「だからＮジャマーくらいで勘弁してやってるって言いたいのかッ！？　お前みたいに地球に攻め込んできてる癖にッ！？」
頭を固い岩盤にもたせ掛けて、再びアスランは洞窟の外を眺めやる。
「私の母はユニウス・セブンで死んだの。あの農業コロニーで、他の２４万７３２０名の人たちと一緒に、核で」
ふっと少女は怯むように息を呑んだ。だが、やがて自分を励ますように声を張った。
「でも……でもお前たちの攻撃で私の友人たちだって沢山死んだんだ！」

炎越しの対峙。
ややあって、アスランは焚き火にまた枯れ木の枝を投げ込んだ。
「やめましょう、この話は不毛だわ。あなたと2人で言い争ったところで解決しないもの」
ふん、と金髪の少女は顔を背けて、毛布をずるずるとひきずりながら洞穴の外まで歩みいき、イージスを振り仰いだ。
MSのシルエットが雨の夜に浮かび上がる。
「お前が、アレのパイロットか」
金髪の少女が問う。
「そうよ」
アスランは火を眺めながら、その暖かさにまったりと身を委ねる。
ぼんやりした頭で、そういえば彼女はどこかキラに似た面差しだな、とふと妙な懐かしさが胸を過る。
「おい、寝ちゃうのかよ！」
少女の声にはっと目を見開く。
「寝ないわ。でも、降下してすぐ移動で」
移動中にも寝たが、それでもとてつもなく瞼が重く、アスランは岩盤に頭を凭せ掛ける。
もともと自分は10時間睡眠だったことを思えば、やはり寝不足なのだろう――などと思う。
ややあって、ぱち、と炎が弾ける音を上げた。

すぐ間近に人の気配。

ふと目を開いた瞬間、飛び退る人影が視界に入って、我に返る。
アスランは投げかけられる毛布をなぎ払う、腰の銃を盗られた、と判断してナイフを抜いてパチンと刃を出す。
飛びすさり、銃を手にした少女が叫ぶ。

「お前を撃つ気はない！　でもッ…！！　アレはまた地球を攻撃するだろッ！？」

アスランは身構えて少女を凝視する。

「それは、アレを作ったオーブが悪いってことは知ってる！　でも…でもあれは地球の人を沢山殺すんだろッ！？」

「ならばまず私を殺しなさい」

鋭い視線で刃を構えたままアスランは低く言う。

「トリガーを引いているのはこの私よ。パイロットとして、アレに手をかけさせるわけにはいかない。どうしてもやるというのなら、私はあなたを殺す」

対峙する彼女の震えから、言葉にならない逡巡が伝わってくる。

仲間を守りたいという気持ちは同じなのだ、きっと。

アスランは思う。

だが立場が違う、守りたいものが違う――自分が殺すであろうものを、彼女は守りたい。そして自分は彼女らの仲間に殺されるであろう同胞を、守りたい。

どうしようもない溝がそこにはあった。

そのままアスランは黄金色の少女の決断を待つ。

銃口を向けないまま、そして突然少女は「ちくしょうッ！」と絶叫すると銃を力いっぱい投げ出した。

余りに予想外の行動に吃驚して、直後アスランは飛び掛る。

空洞に木霊する銃声。

少女を庇うようにうずくまって、その刹那痛みが脇腹に走った。

「なんてことするのッ！？　銃を投げるなんてめちゃくちゃな真似ッ！」

「す、すまん……」

悄然として少女が胸の下から言い、アスランは痛みに眉間に皺を寄せながら身を離す。

脇腹が妙にちりちりと痛む、と自然手は腰に伸びる。

少女の金色の眼差しはそちらへと向いた。

「お前、今ので怪我を……私を庇って……」
痛むはずだ、パイロットスーツの脇腹が裂けて腰のくびれ辺りに一本の赤い線が走っている。
……場所がわずかでも上下にズレていたら重傷だったろう。
「こんなの、かすり傷だわ」
確か救急道具があったはず、とアスランは立ち上がってパックに歩み寄る。
「私に手当てさせろッ！」
少女が追いすがる。
「いい。自分でできる」
「私、借りっぱなしじゃないかッ！　自分の借りくらい返させろッ！」
とことん理解不能な少女だ、とアスランは思った。

甲高い音が耳について、ふと目覚める。
鳥の音？
違う、外部スピーカーでオンにしていた音声だ、無線の受信音。どうやら復活したらしい。
気付けば焚き火は消え、空は雲が切れて曙光が差し始めていた。
『アス……応答……イージ……』
ノイズの合間に声が聞こえる。
慌ててアスランは起き上がり、イージスのラダーに足を掛け、上がる間も焦れる。
ハッチを開いてコックピットに飛び込む。
「こちらイージス！」
『アスランかッ！？』
ヘリの轟音にも負けず劣らず強い声……イザークだ。
『――この馬鹿がッ！！　何しとるかっッ！！』
開口一番の罵声にアスランは少しばかり気色ばむ。

「……手間かけてゴメン」
『まったくだッ！！　場所を割り出すからそのままにしとけッ！！』
「うん、頼むわ」
ようやく救助が来る、……ただしこれは相当詰られそうだ、と思えば全身を脱力感が襲った。
「どうした？」
イージスの足元から声がする。
あの少女が毛布にくるまって見上げていた…暁色の綺麗な金色の眼差しだ、とアスランは見惚れた。
「無線が復活したのよ。反対側からも何か来るわ。あなたの救援じゃない？　服を着て、あっちに行ったら？」
「あッ」
下着姿であることに気づいたのか少女は頬を赤らめて洞穴に戻っていった。
その合間に、イージスを森へと潜めさせる。――万が一にもこんなところで戦闘にはなりたくない。
ラダーを降りたところで、服を着てまた姿を現した金髪の少女は言った。
「お前って不思議なヤツだな」
「あなたに言われたくないわ」
「私の名前はカガリ。お前は？」
そういえばお互いの名前さえ知らなかった、と今更に気づく。
「アスラン」
「アスラン。わかった」
最も名乗りあっても二度と会うこともないだろうけれど、とふと苦笑いが兆す。
それでも何か名残惜しさを覚えて、アスランは去り行く少女の背中に問いかける。
「カガリ！　あなたは連合の人じゃないのよね！？」
「ちーがーうー！」

振り返ってそう叫び、そして大きく手を振ると金髪のナチュラルの少女は走り去っていった。

＊＊＊＊＊

ようやくにカーペンタリアに到着できた。
思えば丸1日かかってしまった。やれやれ、と脱力ぎみにアスランはラダーに取り付く。
イージスから降りれば赤服の2人が待ち構えていた。
ニコルとディアッカ。
「はーい無事ザラ隊長探索任務完了～全く幸先いいねぇ」
ディアッカが茶化して笑う、ディアッカにこんな表情を向けられるのは久々な気もする。
「……でも無事ってわけでもない？」
相変わらず目ざとい。パイロットスーツ腰部の裂けた部分から白い包帯がのぞいているのを見咎めたらしい。
「おいおい、まさかナチュラルのオトコに犯されたとか……」
「何言ってるのよ」
カガリが処置してくれた部分を押さえてアスランは苦笑いする。
「ちょっと暴発した銃が掠めただけ」
「何だそりゃ？」
「大丈夫なんですか？」
ニコルが心配げに問う。
「大丈夫、後はちょっと睡眠不足かな」
笑んだニコルが手を取る、彼の手はとてもあたたかい。
「さ、着替えて。出発まで時間もありますし、コーヒーでも飲みましょうか、アスラン」
「そうね、――ああ、でもクストーの艦長や基地司令にご挨拶をし

ないと」
「後で大丈夫だろ。とりあえずイザークが済ませてたぜ」
さすがイザークはそつがない、疲れている今はただありがたいと思う。
「イザークは？」
「多分司令部じゃないんですか？　足つきの動向が気になるとかって言ってましたから」
「そう」
彼がここにこないのは、多分自分の顔など見たくもないといったところだろう……憂鬱でもあり、ありがたくもある。
ふと思う――あの輸送機のパイロットたちは無事脱出できたろうか。
カガリは無事仲間に拾われたろうか。
そして自分はこれから先、足つきを捕捉して、戦って。
でもその前に一眠りしたい、とアスランは欠伸をかみ殺す。
輸送機のシートや洞窟の固い岩盤での睡眠では、安眠とまではいかなかった。

＊＊＊＊＊

人気のない第３レクリエーションルームの片隅、奥のソファーで誰かが寝ているらしい。
脱がれた白いブーツ、ちらと赤い制服の背中が見える。
イザークは一瞥くれて自動販売機に向き直る。
一体どこの隊か知らないが、赤服がこんなところで惰眠を貪りやがって！！　と苦々しく思いながら自動販売機の前でイザークはコーヒーの紙コップを傾ける。
薄い、マズい。
これならまだあのバルトフェルドのコーヒーの方がマシだ、とイザ

ークは思う。
もっとも妙な味のものを何度も試飲させられて、その都度ぶち切れそうになったものだが。
いっそこれをあの赤服にぶちまけてやろうか、と瞬時思ってふとそちらを眺めやる。
こちらに背を向けてうずくまるように眠っているのは制服越しのボディラインから女、しかも窓から差し込む日光に青い髪。
イザークは思わず紙コップを取り落としそうになる。
「アスランッ！！？」
無事到着したとは聞いていたが――相変わらず何て無防備な！　寝るにしたって宿舎があるだろうに！
怒鳴りつけて起こしてやるッ！！　とその一念で早足で近づいて、イザークは覗き込む。
間近で見るそのあどけない寝顔の無防備さに毒気を抜かれて、はたと思う。
さてどうしたものか。
昨日からのドタバタで疲れてはいるのだろう。
せっかく寝ているのに起こすのも何だか悪い気がしないでもない、と妙な仏心も湧く。
自分の左手の紙コップを眺める、まさかこれをぶちまけるなどという真似はできるはずもなく、眼前のテーブルにそっと置く。
起きるか？
だがアスランは起きそうにもない、熟睡だ。
おそるおそる伸ばした右手で彼女の頬に乱れかかる蒼い髪をすくってその耳にかけ、その白くてなめらかな頬に触れる。
実に久々――この柔らかくて絹のような繊細な肌触りに、自分のざらつく指先が傷をつけそうな感覚は相変わらずだ。
ゆっくりと静かに彼女のすぐ傍らに腰を掛けて、しばらく間。

士官学校の頃ならば多分、そこまで身構えることなく触れることができたはずなのだ。
それが近づいては離れを繰り返し、結局今はこの状態――
寝顔を眺めながら、追悼慰霊式典以来のむずむずした感情に駆られる。

婚約者のラスティももういない、敢えて自分が身を退く理由などどこにもない。
……そもそもこんなところで寝る、兵士として無防備すぎるコイツが悪いのだ！

艦長や司令への挨拶等々この俺に面倒をかけた罰だ、と嗜虐的な感情さえ抱いてソファーに片膝をついて背凭れを掴む。
かがみこめばやがて唇は彼女の頬に触れた。
シャワーを浴びたのだろう、まだ湿り気の残る髪、間近の生え際からはシャンプーの微かな匂い、安らかな寝息もすぐそこに聞こえる。
狂おしい逡巡に顔を少し離したその瞬間、ふと蒼い睫毛が微かに動いたような気がした。
はっとして上半身を起こして、イザークは息を押し殺す。
気づかれた？
そのまま様子見をしていたが、アスランはそのままぴくりとも動かず、寝息も相変わらずだ。
遠慮なく次を挑む、今度は彼女の頤をこちらにむけた。
「……犯されないだけマシだと思え！」
2度目のキスはほのかにコーヒーの味がした。

8：　オーブ近海にて

ボズゴロフ級潜水母艦クストー艦橋。
足つきの進路予想図が立体パネルに浮き上がり、既にしてパイロットスーツに着替えたＭＳパイロットたちがわらわらと集まる。
今回はザラ隊に貸与されたモンロー隊ディン部隊との共同戦線だ。
戦闘域突入まであと１０分。
展開される立体パネルは全面海、足場はない。
「ディンならともかく大気圏飛翔能力がないＧＡＴ－Ｘシリーズで戦うにはやや不利か」
モンロー艦長がぼやく。
「そうですね」
グゥルの機動性にはいささか不安がある、と地上戦がはじめてのアスランも表情を曇らせる。
しかし今さら言っても仕方のないことだ。
「そのあたりは先方もご存知でしょうから、足元を真っ先に狙ってくると思うわ。回避に気をつけて。グゥルがやられて海中に落下したらすぐに直下の母艦に戻って再出撃。……もし間に合うなら代替グゥルの射出をお願いできますか、モンロー艦長？」
「よかろう」
鷹揚に艦長は答え、アスランはディアッカに目を転じる。
「私としては、ディアッカには足つきへの後方超遠距離射撃に専念して欲しいわ」
「……って言われてもよ、あのＭＡやら戦闘機やらが俺の回りでちょろちょろやかましいのなんの」
不満げにディアッカが言い、ニコルも考え込むように腕を組む。
「向こうも陥とされまいと必死ですよ。バスターの巨大砲に艦橋を貫かれたら一発ですからね。まずバスターの注意を逸らしたいってところでしょう」

ディアッカは言い募る。
「なあ、アレまず仕留めてくんねえ？　そしたら足つきはやってやるから」
「わかったわ、ディン部隊と一緒に援護する。……でも問題はストライクだわ」
ストライク、その言葉を口にすると自然アスランの表情は暗くなる。
「射出時点でミラージュコロイドを展開して接近してみます」
ニコルが言い、さりげなく付け加える。
「できればデュエルにストライクの気を惹いてもらって、その隙に、と思うんですけど」
「――イザーク？」
怪訝にアスランは目を上げる、そういえばイザークがミーティングでこんなに黙り込んでいるなんて初めてだ。
視線がぶつかるなり、イザークは不意に鼻の上に皺を寄せた。
「ああ」
つんと顔を背けて、イザークは口を切る。
「いいだろう、やってやる」
「撃破……というよりむしろ、注意を逸らす方向に持っていって欲しいのだけれど」
「ああ」
短い返事に真意がつかめず、困り果てたアスランは「ホントにいい？」と念を押す。
いつもストライクゥゥゥッ！　と言っているイザークらしくない。
苛立ったようにことさら眉間に皺を寄せ、ちらとこちらを見てイザークはつっけんどんに言った。
「構わんと言っている！」
「ならいいけれど。じゃあ今回はバスターメインでいきましょう。ディン部隊は私と一緒にバスターの援護、デュエルとブリッツはストライクにバスターへの応射の隙を与えないように動いて」
「レーダーに反応あり！　熱源１！」

通信士が声を張り上げ、映像回線が開く。白亜の巨艦がモニターに映し出された。
「足つき！」
来た、と皆が浮き足立ち、アスランは締めくくる。
「では以上よ。お互い気をつけていきましょう」
「はい！」
「はいよ」
それぞれに応えが返り、パイロットたちが艦橋から足早に出て行く。
「おいイザーク、どうしたよ？　らしくねーじゃん」
やはり不審に思ったらしいディアッカが訝しげに声を掛けて、ちらとアスランは振り返る。
「別に何でもない！」
……以前からだが、イザークの考えていることはよくわからない。
少なくとも彼が自分に対して苛々しているらしいのは確かで、それを思ってアスランは嘆息をついた。
憂鬱な理由はそれだけではない。
理性と感情がせめぎあって、息苦しい。
……キラ。
また戦わねばならない、今度こそ決着をつけなければ。
パイロットヘルメットを小脇に抱えてキャットウォークを先に歩いていたディアッカが、突然振り返った。
「お前に無理なら俺がやってやるって」
自分の苦悩を見透かしたようにディアッカが低く言う。
「要は撃破すればいいんだぜ、撃破。別にパイロット鹵獲してぶっ殺せなんて言われてないんだし？」
アスランは瞬時心の痛みを忘れ、ハッとして彼の顔を眺める。
それは確かに、だが自分たちは兵士――敵に手心を加えることがあってもよいのだろうか？
敵を生かしておけばそいつは再度武器を携えて我らの前にたちはだかるぞ――と言ったのは、あのクルーゼ隊長。

「深く考えるなよ。それに戦場ではなんでもアリ。混乱してるから何があってもわかんねーって」
「うん……」
「ま、見てろよ」
彼は余裕のウィンクを見せるとバスターへと歩み行き、アスランは重い足取りをイージスの前で止めた。

＊＊＊＊＊

イージスはディンとともにまず戦闘機を襲撃する。
こちらの出方を予想だにしていなかったのか、ツートンカラーの戦闘機は射線をかいくぐるのに精一杯で、バスターへと寄り付けない。
その間にもバスターは超高インパルス長射程狙撃ライフルを放つ。
足つきは回避しながらも被弾し、上部甲板のストライクが応射する。
その隙にデュエルが迫る。
ビームサーベルをシールドで避けながら、ストライクはライフルのビームを放つ。
『ストライクゥゥゥッ！！』
グゥルを捨てて足つきへと肉迫したデュエルにストライクが撃ちかかる。
その合間にもアスランはライフルで戦闘機の両翼を貫いた。
いかに火力ある戦闘機でも飛べねば意味はない――戦線を離脱して、その戦闘機は足つきの被弾して大きく破損したハッチへと落下していく。
デュエルとの戦闘の合間にそれと気づいたのか、さらに上部甲板へと離脱しながらストライクがディンを狙い撃ちする。
翼をもがれたディンが撃ち落されていく。
『させるかァァッ！！』

デュエルのビームサーベルがストライクのライフルを鋭く断ち、爆発が起きる。
ストライクはバーニアを噴射して間合いを取り、ビームサーベルを抜いてデュエルに撃ちかかろうと跳躍した。
その時、突如背後から出現したブリッツから繰り出される攻盾トリケロスにストライクは被弾して小さな爆発を上げる。
圧倒している。
あちらは大丈夫だろう、とアスランはモニターに視線を走らせる。
足つきからバスターめがけて放たれるミサイル弾を残る2機のディンとともに片端から撃ち落し、その合間にイージスをＭＡモードへと切り替える。
鉤爪をひらいてスキュラ砲を撃てば、回避する足つきの後部ミサイル収容部が爆発し、更なる誘爆を招いて炎が上がった。

＊＊＊＊＊

回避によって外れた超高インパルス長距離射撃砲の一射が足つきに近い海面を撃ち、熱せられた大量の水が一気に蒸発する。
邪魔な水蒸気にちっとディアッカは舌打ちして、エネルギー充填をじりじりと待つ。
今までの鬱憤晴らし程度には当たっているが、まだ決定的な打撃を与えられずにいる。
そして甲板上ではストライクとデュエルが戦闘を繰り広げ、そこにブリッツが加わった。
今回はやれるだろう、スコープを覗き込みながら久々に血が沸き立つ。
その矢先、クストーから通信が入った。
『領海上にオーブ艦隊展開』

『領海に寄り過ぎてるわ、ディアッカ！　反対側に回り込んで！』
アスランが警告して、イージスがＭＡ形態からＭＳ形態へと戻って滞空していたグゥルに再び乗り移る。
『オーブ艦艇より入電』
クストーからの通信とともにモニターの映像が切り替わり、ディアッカは視線を走らせる。
オーブ軍の高位将官と思われる男がマイクを片手に映し出されていた。
『地球連合軍戦艦及びＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍ＭＳ部隊に告げる！　ただちに転針されたし！　中立国である我が国は、事前協議なき武装した艦船及び航空機、ＭＳなどの領海、領空への侵犯を一切認めない！　ただちに転針されたし！』
――中立国のオーブは領海侵犯を行えば地球連合、Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．関わらず自国の権利を侵したものとして攻撃してくるだろう。
「ご心配なくッ！　領海には入れさせねぇよッ！」
ここで逃がすものか、と内心悪態をつきながらディアッカはグゥルを操りながら照準を合わせ、トリガーを引く。
目標は過たず狙った部位を貫いて、白亜の巨艦に大爆発が起きた。
機関部の爆発がさらなる爆発を招き、炎に包まれた足つきが制動まならずにオーブ艦隊めがけて突っ込んでいく。
ディアッカは会心の笑みをたたえる。
そして満身創痍の足つきを母艦クストーのミサイル弾が狙い、派手な水柱と火柱とが上がった。
もうあれでは戦艦としては稼働できまい、だが。
『やったッ！』
『沈むぞッ！』
ニコルとイザークの喜声が通信回線から聞こえ、そして展開しているオーブ艦隊から通告が発せられたのはその一瞬後。
『警告に従わない貴艦らに対し、これより我が国は自衛権を行使するものとするッ！』

それを合図として砲撃が始まり、アークエンジェルとＧＡＴ－Ｘシリーズの周囲に無数の砲弾が撃ち込まれる。
オーブ艦隊の攻撃をかいくぐって、デュエルとブリッツが離脱を開始した。
オーブの領海に墜ちる――あの国の管轄下に入れば自分たちには手が出せなくなる、ならばせめてトドメのもう一発！
熱源の多さに、モニター頼りの射撃も不可能だ、そしてもうバッテリーも残り少ない。
これがラストチャンスだ！
甲板上から必死に応射してくるストライクを交わしながら、ディアッカは再度ブレる照準を合わせる。
おそらくアスランも同じことを考えたのだろう、領海線ギリギリのラインで猛然と追撃をかけ、グゥルから飛翔したイージスがビームサーベルを抜いてストライクに襲い掛かる。
トリガーに指をかけてスコープの照準が合う直前、アスランの声が聞こえた。
『撃ってディアッカッ！』
だが射線上で、イージスとストライクがもつれるようにビームサーベルで切り結んでいる。
「アスランッ！　射線上だぞッ！」
『かまわないッ！　アレを撃ってッ！』
とことん腹の据わったヤツだ――正直、オンナのコにしておくには惜しい。
ピ、と機械音が聞こえた瞬間、眼差しを薄くしてディアッカは再度トリガーにかけた指先に力を込める。
光が疾った。
射線を寸前まで隠したイージスはすんでで離脱し、ビームは隠れていたストライクの半身もろともに足つきのエンジン部を貫いた。

ひゅう、とディアッカは口笛を吹く。
仕留めた！
「我ながらグゥレイトォ」
撃ちかけられる砲弾を巧みに避けながらイージスは空いた宙域を通過し、領海線間近を離脱する。
激しく黒煙を噴出しながら満身創痍の『足つき』――アークエンジェルはオーブ艦隊の中へと突っ込んでいき、そのまま水柱を上げて水中へとその姿を消した。

＊＊＊＊＊

ビームを受けて大破しアークエンジェルの甲板上に倒れ込んだあのストライクを思い返せば、胸の奥がちくりちくりと痛む。
あの状況で水没、キラは無事だろうか？
アスランは懸念するとともに、とどめをささずに済んだことを少なからず天に感謝する。
あの白いＭＳさえなければ――きっともう彼は戦場に立つことはない、自分の敵にはなりえないだろう、それだけが救いだ。
待つように滞空していたバスターのディアッカから通信が入る。
『やれやれ――やっと沈んだな、　あのアークエンジェルとやら』
ようやくに鬱憤が晴れてディアッカの表情はすがすがしい。
『指令通り足つきは陥ちた、ストライクも大破。上出来じゃん？』
「そうね」
高い水柱を上げて水中へと沈没していった白い艦影は、もはや視認することはできない。
どうみてもアレは＜沈んだ＞。
ストライクもあの損傷では、ＭＳとしての機能はすでに破綻しているはず。

「……でも残骸を確認することはできないわ」
『大丈夫っしょ、あそこまでやったら。こりゃザラ隊は即解散だね』
「どうかしら」
本当にこれで終わりか？
あの白い巨艦は、オーブがヘリオポリスで建造したものだ。
疑念を否定できないままに、アスランはバスターとディンともに母艦目指してグゥルを引き返させる。

ラダーに取り付いてイージスのハッチから降りたその時、待ち構えていたパイロットとスタッフたちに殺到されて、アスランはもみくちゃにされる。
クストーの格納庫はお祭り騒ぎと化した。
「やったッ――やったぞッ！」
「あの白い艦をついに堕としたぞッ！」
「アンタすげぇよッ！！」
「仇は討ったぞッ！！」
「マジ勲章もんだなッ！！」
割れるような拍手と、喜びに満ちた声、声、声の嵐。
無心に歓喜し、あるいは素直に感動し、あるいは率直に賞賛する人々――アスランを囲む皆が高々と手を掲げ、人差し指で天をさして「Ｗｅ　ｄｉｄ　ｉｔ！」を連呼する。
「私じゃなくて、あれはディアッカの……」というアスランの声はコールにかき消されて周囲に届かない。
昂揚の熱気でむせかえる、そして密着する男たちの狂喜乱舞に酔いそうだ。
「貴様らァッ！！女相手になにやっとるかッ、いい加減離れろッ！！」
怒髪天のイザークが割って入ってアスランの腕を掴んで男たちを引きはがす、輪の外で眺めていたディアッカが同調した。

「そうそう、ちょっと落ち着いてさ。まずは我らが隊長さんから一言もらおーぜ」
「どうぞ、アスラン」
ニコルに促されて、髪を整えたアスランはコホン、と咳払いをして周囲を見回す。
疑念は晴れないが、出陣した全員が生還することができた、とりあえずそれにほっと力を抜く。
「後はオーブの発表と基地からの指令を待ちましょう。皆お疲れさまでした、今は休んで下さい」
そして散会し、アスランは着替え室へと入った。
『政府は軍の出動を命じ、緊急首長会議を招集しました』
控えルームのＴＶはオーブ国内放送を流していて、アスランはパイロットスーツの胸元を緩めて目をモニターに転じる。
『またカーペンタリアのＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍本部、及びアラスカの地球連合軍本部へ強く抗議し……』
オーブ国軍、モルゲンレーテ本社に潜入している諜報員たちからの情報が寄せられたのはその深夜のことである。
総合して勘案するに――
戦闘後オーブ国軍によりサルベージ作業が極めて迅速に行われ、水没した白い戦艦と大破した白いＭＳがそれぞれに、夜の闇にまぎれてオノゴロ湾の隠れモルゲンレーテドッグに運び込まれたという。
それからやや遅れてオーブの公式発表が齎され、ブリーフィングルームにイザークの怒鳴り声が響いた。
「あの国はやっぱり連合側だッ！！　何が中立国だッ！！」
顔を赤くして怒っているイザークはテーブルに紙を叩き付けた。
「足つきは撃沈、死亡者多数――でもこっそり全部サルベージ済み、と。あの国はそれをどうするのかって話。もしかしてリサイクルしちゃうのかね？」

ソファーにゆったりと座ったディアッカも半ば呆れ加減で、手元の文書をぺしっと叩いて微かに皮肉を混ぜる。
難しい顔で、アスランは腕を組む。
戦艦の残骸と生存者を連合に引き渡すだけならば一切隠す必要はないはずだ、そしてそれをモルゲンレーテに取り込む必要性も。
――ヘリオポリスでの連合ＭＳ建造の件をオーブは巧みな対外交渉で乗り切り、地球連合に通じているとした一部閣僚を切捨て、そして代表首長引責辞任を発表していた。
だが今回は話が違う、国家ぐるみの隠蔽工作だ。いかに中立条約保持国のオーブといえどももはや弁解の余地はないだろう――おそらくすでに外交筋で、本国とオーブとのやりとりが始まっているはず。
ソファーに向かい合ったアスランは考え込む。
「でも私たちに与えられた任務は足つきとストライクの撃墜、それはもう果たしたと言えるんじゃないかしら」
「これからどうなると思います、アスラン？」
心配げにニコルが見遣る。
まだカーペンタリア基地から自分たちへの指令はない、現状待機のままだ。
「もしかしたら何らかの新しい任務が下されるのかもしれないわ」
「てことはザラ隊続行か」
こりゃスピットブレイクに間に合わないかもね、とディアッカがぼやく。
「このまま基地に帰投できるとも思えんな、手をこまねいて指示を待つ気か？――俺ならモルゲンレーテへの奇襲攻撃をかけるぞ」
俺たちは自由行動が許可されているんだぞ、とイザークが鋭い視線を投げかける、それを受けてついとアスランは目を上げた。
「ここで何かの作戦行動に出るには、この件は大きすぎるわ。オーブは裏がわからない独立国家だし、万一の場合は本国を巻き込んでしまうもの。とにかく直接シュナイバー司令に訊ねてみましょう。発令所に行ってくるわ、次に動きがあるまではフリーね」

言い置いてアスランはオーブ公式発表の紙を手に立ち上がってブリーフィングルームを出た。

＊＊＊＊＊

アスランはか細い背中を向けて部屋を出た、そしてドアが閉まる。
「……全くッ！」
イザークは湧き上がる苛々に耐えかねて、前髪をくしゃりとかきあげる。
「どう考えたって不義をはたらいてるのはオーブだ、ここで思い切って強く出たとしても司令も本国も追認するに決まってるだろうが！」
「慎重派なんですよ、アスランは。それにできるだけ戦いは避けたいでしょうし――ほら、さっきも皆の無事を確認してたでしょう？　アスランは優しいから」
ニコルが躊躇いがちに言って、ディアッカも擁護に回る。
「それもアイツのいいところっちゃいいところなんだけどね」
「ならなおさらアスランは指揮官には向いてないッ！　全く何がザラ隊だッ！！　クルーゼ隊長は人選を誤ったなッ！！」
吐き捨てるようにイザークは言って席を立つ。
「おい、どこ行くんだよ？」
「発令所だッ！！　基地司令に訊ねるだけじゃなくて国防総省にごり押ししてやれ、と言うのを忘れたッ！！」
「とか言って～憧れの仮面隊長さんに通信して指示を仰ぎたいんじゃね？　そういや撃破のおほめの言葉いただいたの？」
茶化すディアッカをイザークは睨む、コイツは俺をなんだと思ってるんだ？
ディアッカは「おお～怖ッ！」と大仰に肩をすくめて笑った。

「誰が隊長の犬だッ！　俺は猫は好きだが犬は好かんッ！！」
語気荒く言い放ち、ミーティングルームを出てずんずんとイザークは廊下を闊歩する。
そしてアスラン。
カーペンタリア基地でのことといい、さっきの格納庫でのことといい、万事自分が手助けしてやらなければ頼りないにも程がある！
ドアが開くなり発令所に入れば、いきなり前面にどんとぶつかるものがあって、ひどく柔らかい感触が伝わってきた。
見下ろせばアスランだった。
「……った……」
したたかに鼻を打ったらしい、一歩下がったアスランは顔を押さえて俯いた。
思わずイザークは身じろぎする、未だ残るこの柔らかさはもしかして胸……？
そのまま、ともに発令所から出て、手前でドアが閉まる。
「ど……どうなった！」
すぐ間近でアスランは顔を上げた、ほんのり鼻が赤い。
正直、可愛い。
というか昨日の寝込みの襲撃を思い出して少々焦る。
「ん？　ああ、すぐ本国に連絡して下さるそうよ。でも結果が出るのに今日明日はかかりそうね」
「……そうか、ならいい」
「なぁに、心配して来たの？　私そんなに頼りないって思ってる？」
少しばかりムッとした様子でアスランは腕組みして振り仰ぐ、イザークは声を荒げる。
「カーペンタリアでのことといい、いちいち俺に手間を掛けさせているのはお前だろうがッ！！」
ふっとアスランが眼差しを薄くした。
物憂げなエメラルドグリーンに、瞬時鼓動が跳ねる。
「ねえイザーク。いつか訊こうと思ってたけど、相変わらず私のこ

とが憎くて仕方ない？」
突然の問いかけにイザークは絶句する。
一方でアスランはひとつ嘆息をついて「万事怒鳴られてばかりで気が滅入るわ」と目を逸らす。
「そのうちまた普通に話せるかと思って待ってたけど――士官学校卒業して以来ずっとでしょ。いろいろあったし、それは私の自業自得とはいっても、やっぱりあなたに目の敵にされるのはいい加減辛いの」
重苦しい沈黙がのしかかる、沸騰して煮詰まった頭では言葉が何も出てこない。
だがなおも真摯に問われる。
「ねえ、イザーク――私のことそんなに憎い？　とことん痛めつけたいくらいに？」

コイツは頭は良くてもとんでもなく大馬鹿だ、はき違えてそのままきている。
不意に湧いて出た焦りとともに、イザークの脳裏を思考は巡る。
憎い？
まさか……むしろ蹴落として屈服させて跪かせて俺を乞わせたい、というか。
痛めつけたい？
まあ確かに、さっさと組み敷いて泣いて謝らせるほどに嬲ってやりたい、というか。

よくよく落ち着いて考えてみれば……こんなに側で待ってるんだから、いい加減俺の手をとれ！！　と言いたいあたりが素直な気持ちというか。

返事を待たずに――いや結構待ったのかもしれないが――アスランが身を返すので思わず手が出て、イザークはその腕を掴む。

「ちょっと待て！　か……勝手に決め付けるなッ！　嫌いとか誰もそんなことは言っとらんだろうがッ！」
「じゃあ何？」
彼女は不安げに回答を迫る、背筋を冷たい汗が伝う。
「あ、あれだ――えー……“人材は叱って育てろ”だッ！！　厳しくッ！！　そういうもんだろうッ！？」
俺は一体何を言ってるんだッ！！？
相変わらず俺はまともなコミュニケーションが取れない！！　とイザークは羞恥に悶絶する。
必死に探した適当な理由に、アスランはきょとんとした顔を見せた。
「嫌いじゃない？」
「じゃないッ！！」
むしろ――むしろ今でも、と言葉を押しだそうとしている最中、彼女はふっと笑顔を久々に“この自分に”向けた。
「誉めて育ててほしいわ、人ってそういうものでしょ」
「……努力する」
呆然としているイザークは次の言葉が出てこずに、そっと手を離し、そのまま廊下を行くアスランを見送った。

＊＊＊＊＊

P．L．A．N．T．とオーブの外交筋では相当なやりとりがあったらしいが、結局オーブの返答は地球連合軍の艦は沈没した、の一辺倒だった。
そしてカーペンタリアのタカオ・シュナイバー司令から自分たちに下されたのは、破壊工作命令。
サルベージされモルゲンレーテ工廠に隠された戦艦とＭＳを修復不可能なレベルにまで破壊せよ、との極秘任務だった。

潜入を控えて浮上する母艦上にアスランは這い出た。
まだ夜明けを迎えずに空は暗い。
「待て！」
最後尾から出てきたイザークが制止するのでアスラン、ニコル、ディアッカがそれぞれに振り返る。
「これを身につけておけ！」
人数分あるからなとイザークが配るものを受け取る。
「……何ですか、これ？」
紐に小さな布袋と鈴がついて、何やら見知らぬ言語が書かれているものをニコルは興味深く眺め回す。
「お守りだ！　神仏の加護により願い事が叶うというありがたいものなのだ！」
東アジア共和国発祥のものだとイザークが高らかに言う。
「祈願成就って日本語で書いてあるな……これいつ用意したんだよお前？」
日本舞踊が趣味だというディアッカには読めるらしい。
「俺はいつでも持ってるぞ、荷物の中に常備してある」
それを皆に配ってくれたのか。
イザークの意外な気遣いに、アスランは薄紅色の小さなそれを手のひらで転がして笑む。
「可愛い。ありがとう」
一瞬怯んだような顔を見せたイザークは居丈高に声を上げた。
「可愛くなんぞあるかッ！　俺は任務達成を願ってだなッ……！」
彼が怒鳴るのにはいろいろなバリエーションがあるのは知っている、今のは多分照れ隠しなのだろうとアスランは思いながら聞き流す。
ありがたくお守りを頂戴したがダイバースーツにはポケットがない。
「ってか今もらってもポケットねーじゃん」
「ドッグタグにでも通せ」
なるほどドッグタグと一緒にしておけば大丈夫だろう。
アスランはキャップを脱いでダイバースーツの胸元までを広げて、

そのお守りの紐をドッグタグのチェーンに絡める。
ブラジャーもあるし胸の谷間に挟んでおけば落ちないだろう。
チャックをまた上に上げて、これでよし、と思った瞬間、唖然としたような3人の顔に気づく。
「なあに？　ぼんやりして。行くわよ」
アスランは髪をまとめてキャップに押し込み、ゴーグルを引き下ろす。
「……いえ」
「あ、うん」
「いや……」
歯切れの悪い3人を疑問に思いながら、先頭切ってアスランは海へとダイブした。
慌てるように落下音が続く――目指すはオーブ、オノゴロ島。

9：　オノゴロ島にて

夜と朝のはざま――
空はうっすらと茜色に染まろうとしていた。
未だ暗さの残る只中に紛れてザラ隊はそれぞれに上陸する。
やれやれ結構泳いだものだ、とディアッカはゴーグルを外してキャップを脱ぐ――汗で髪が蒸れて困る、すっかり天然パーマ復活でチリチリ頭だ。
一方で、釣り人を装った連絡員が歩み寄って、アスランと握手する。
「クルーゼ隊のアスラン・ザラです」
「ようこそ、歓迎するよ――と言いたいところだが」
連絡員は腕時計を確かめる。
「急ごう、ｌｅｖｅｌ５工廠の勤務交代がそろそろだ」
「わかりました」
用意された工場員の服を前に彼女は威勢よくダイバースーツを脱ぎ放つ。
露わになったタンクトップブラにボクサーパンツ、やっぱりお胸がたゆんたゆん……ひゅ～とディアッカが口笛を吹いた。
「いいねぇ～でももっと色気のある下着とかどーよ。ひらひらのゴージャスでセクシーなやつプレゼントしようか？」
「任務中はそんなものつけてられないわ、着替えの邪魔だしこれが動きやすいんだもの」
アスランは極めて素っ気無い。
「見るなディアッカッ！！　大体さっきのことといい、アスランお前は女という自覚を持てッ！！　どこか岩陰で着替えろッ！！」
イザークが顔を真っ赤にして、それでもその視線はアスランの胸元やら腰やらに彷徨っている。
やっぱコイツ絶対童貞だわ、などと考えながらもディアッカはその言葉に納得する。

……確かに潔癖な割に、アスランには女の自覚に欠ける部分がある。
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう、急がなきゃ」
うんざりとした様子で制服の袖を通しボタンを留めながらアスランは投げやりに返答した。
「でもアスラン……やっぱり、そういうのは……あの」
頬を赤らめて帽子で目元を隠したニコルが言う。
「わかりました。帰りは注意する」
さらに工作員とアスランが会話する背後で、ディアッカは着替え終わって帽子を無造作にかぶる。
まったくダサダサなスタイルだ――まだZ．A．F．T．の作業つなぎのほうが洗練されているというか。
「結構似合うじゃありませんか、ディアッカ」
時々ニコルは生意気を言う。
これが似合うなんてのはひどく心外だ、ディアッカは「ああん？」と眉間を寄せる。
「お前はガキの就業体験みたいだぜ、チビ」
やはりムッとしたような顔で、しかしニコルは胸を張った。
「チビチビって、僕これでも平均身長はあるんですからね、2年後にはディアッカより大きくなってますよ！」
「大きく出たものだな、そりゃ楽しみだ」
イザークが笑って歩き出す。
「2年後は俺も伸びてるから結局お前の負けなんだよ、バーカ」
ニコルの帽子のつばを思い切り下げて、前につんのめった彼を放置したままディアッカも歩き出した。

迎えのエレカに乗り込んだ4人にＩＤカードが配られた。
「これでｌｅｖｅｌ４区域までは通行できる。そこから先は自分たちでどうにか頼むよ」
今後も潜入捜査を続ける手前、我々も身辺を考えるとこれが限度で

ね、と運転手を務めるオーブ国軍軍服姿の諜報員が肩をすくめた。
「状況はどうでしょう？」
アスランが問う。
「やっこさんたち相当厳重に匿われているのか、あれ以来こっちには全然情報が入ってこないんだ。ただ交通省経由で聞くところによるとｌｅｖｅｌ５に資材が続々搬入されてるって話」
Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の諜報員は相当多方面に食い込んでいるらしい、オーブは重要機関にコーディネイターが多く登用されている国だからやりやすくはあるだろう――だがそれをもってしても裏が読めないという底知れぬ怖さは否定できない。
「了解しました」
後部座席左端にしどけなく座して髪を海風に嬲られながら、イザークは港に停泊している船の群れを眺めやる。
「港湾も複雑だ……これなら隠れ水路があってもおかしくないな」
とことんイヤな国だ、と彼は唾棄する。
「システムの撹乱は？」
助手席の傍らに身を乗り出してディアッカは問う。
「もう開始しています。カーペンタリア・ラグナロクセカンドに無事接続できましたから、きっと大丈夫」
同時にニコルは手元の小型端末Ｓｃｉｅｎｔｉａでモルゲンレーテ内部の見取り図を確認していたが、やがて後部座席を振り返って立体投影を映し出す。
「ＭＳ格納庫は軍港北Ａゲート工場地下４階のここ――そしてドッグはこのＭゲート接岸部分。距離的にかなりありますね」
ちょうど対角線上だ。
「んでｌｅｖｅｌ５コンピュータルームはこの工場地下２階か。俺データをぶっこ抜きたいから３手に分かれようぜ」
割とハッキングには自信がある――しかもカーペンタリア・ラグナロクセカンドの支援があるときたら、多分ラクができるだろう。なんといってもあれはＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．基幹部を司る本国の最強

システム・ラグナロクマザーを移植したものだ。
「いいわ、任せる」
アスランが頷き、イザークが口を切る。
「足つきは俺が行こう」
「へえ、憎ったらしいストライクゥゥじゃなくていいのかよ？」
ディアッカの挟んだ嘴に、イザークはちらと視線を動かした。
「動けんＭＳなんぞただの鉄くずだ、興味はない。もっともストライクのパイロットがそこにいるってんなら話は別だがな」
１００回殺しても殺したりない相手だ、とイザークの物騒極まりない言葉にアスランの表情が曇り、瞬時ディアッカとニコルは目配せする。
元カレ――多分――を１００回も殺されてはたまらないとでも思ったのか、彼女が言う。
「私がストライクを処理するわ」
「僕はイザークと一緒に行きます、陽動するにも人手はいりますし、相手はなんて言っても巨体ですからね」
「じゃあ決まり」
アスランがしめて、ミーティングは完了した。
段取りの合間にもエレカは無人電子ゲートをくぐり抜け、モルゲンレーテ区域に進入していく。
「成功を祈る」という言葉とともに送り届けられて降り立ったモルゲンレーテｌｅｖｅｌ５工廠ゲート前、監視カメラの死角ポイントで４人は足を止めて、それぞれにラバー手袋をはめる。
再びＳｃｉｅｎｔｉａを手にニコルが言う。
「じゃあシステムを落としますよ、制限時間６００秒、脱出はゲートＩで」
極短期決戦だ。

＊＊＊＊＊

Ｓｃｉｅｎｔｉａの示した経路をなぞるように、入り組んだ通路を右に左に駆け抜ける。
たどり着いたコンピュータ制御室の前には作業員とおぼしき男たちがひとり、ふたり。
ディアッカは壁際に身を寄せて、胸元から上着の内側に手を入れて耳を澄ませる。
「突然停電なんてな……前も漏電で停まったろ、いいかげん発電モーター老朽化してんのかね？」
「設備予算がキツキツだからさ。補助電源が持つうちにさっさとセーフモードに切り替えちゃおうぜ」
「いちいち手動ってのがまた不便だねぇ」
会話から察するに、まだシステムへの干渉は露呈していないらしい。
「南ー無」
悪いね、おっさんたち――と内心で呟いて、銃を手にしたディアッカは角から半身を乗り出しトリガーを引き絞る。
消音銃で立て続けに撃ち抜いて、倒れ込んだ作業員を踏み分け、作動していない監視カメラの前を駆け抜け、ドアに張り付く。
指紋認証ロック解除の最中、人の気配にディアッカは死体を角に投げ込むと、再び身を隠した。
通りかかったのはオレンジのジャケットにジーンズというラフスタイルの女。どこかアイリーンに似ていなくもない印象だ。
女がドアの前で立ち止まってロック操作を開始したのを確認し、音もなく忍びよる――こんなに接近しているのに、本当に素人女ときたら全方位に無防備だ。
力任せに胸元に引き込んで、ディアッカはふふっと笑んで耳元で囁いた。
「綺麗なおねーさん、一緒に入れてよ」
甘い口説き文句とは裏腹に、首筋に冷たいナイフの切っ先を突きつ

けられて、女は息を呑む。
「……一体どこから」
「そりゃ欲しいものの為ならどこからでも。ってことでとりま指貸して」
「イヤって言ったら？」
「その白魚みたいな指、切り落とすとか俺の趣味じゃないんだよね」
本気と悟ったのか渋々彼女が小指を差し込み、ドアロックが開いた。
ＩＤカードによるとどうやらこの女はエリカ・シモンズという名の主任研究員であるらしい、捕獲したのがアドミニストレータとはこれはまた手間が省ける。
カードをスリットに通して、ディアッカはそのＩＤをキーボードに叩き込む。
「パスワードは？」
「教えるわけないでしょ」
縛られて床に転がった女はふて腐れたように言う。
「ま、そりゃそーだろうねぇ」
軽口の合間にディアッカは手元の小型端末Ｓｃｉｅｎｔｉａにケーブルを繋ぎ、コンピュータに強制介入させる。
ラグナロクセカンドの総当たりでたちどころにパスワードは割れた――ここまでミッションスタートから２４０秒。
すぐにＯＳが立ち上がり、ディアッカはコマンド画面を開いて打ち込みを開始する。
あなたがどこの人間か大体推測はつくわ、とその女研究者は言った。
「……坊や、後悔するわよ。うちはサハクの管轄なんだから」
「はいはいオーブ五大氏族のサハクさんね。んで？」
ディアッカはモニターから目を離さずに続きを促す。
「１００倍返しを覚悟なさい、アスハのようには甘くないわよ」
ちらと見れば床に転がったその年齢不詳な美女は口元を笑わせる、状況が状況なのにタフで上から目線な女だ。だがそういう強気な年上タイプは嫌いじゃない、――むしろ大好物だ。

その思考をおくびにも出さず、ディアッカは相変わらずの軽口を叩く。

「ふーん。てか俺、後悔なんて絶対しねぇタイプなのよね」

「そういう人が挫折すると怖いわよ」

「あ、ちょっと待って」

高速スクロールで流れていくデータを視線の隅で捉えたディアッカは一点に目を留める。

これは超重要――カーペンタリア・ラグナロクセカンドにストライクから吸い上げたであろう戦闘データとＯＳデータをぶち込む。ついでにこっそり小型端末にとったコピーは、きっと暇つぶしの読み物程度にはなるだろう。

もちろんここの用済みデータはすべて消去、ついでにバックアップシステムにも侵入して消去、しかも無意味な数字の羅列上書き３０００回をプレゼント。

上首尾！　と口元を笑わせたディアッカはケーブルを引き抜き、撤収を開始する。

カウントダウン残り１００秒。

「さ、帰るかな」

「で私をどうする気？　あなたの顔見ちゃってるわよ」

とことん強気な女だ。

「女は殺さない主義なのよ俺、刃向かわない限りはね。ってことでさんきゅ、エリカおねーさん」

また会おうぜ、とディアッカはウィンクを残して悠々と退室した。

＊＊＊＊＊

残り１００秒。

工場域は勤務交代直後であるから未だ人の気配が少ない――だがに

わかに慌ただしさを増している。
目の前に張り出した監視台から見下ろす先にはまごうことなき足つき＜アークエンジェル＞。
因縁の敵ながら白亜の巨艦の威容たるや見事であったが、今となっては原型をわずかにとどめた醜悪なほどの残骸だ。
全体に及ぶ生々しい被弾の痕、抉れて剥きだしとなった機関部、無残に奪われた白い翼――
「ｆａｌｌｅｎ　ａｎｇｅｌか」
ふん、とイザークはスコープのシャッターを切ってその全体を捉える。
先の戦闘は、汚名返上とともに溜飲を下げるには十分だった。だがやはり気になったのは、水中に消え視認できなかった足つきの損害率。
我が目で確認すべくここまで来たが、この状況ならば今さら爆破するまでもないと思える――しかしここはこの艦を生み出したモルゲンレーテの総本社だ。万が一があっては困る。
「Ｓａｔａｎに化ける前に始末しておかんとな――どうだ、ニコル」
耳にねじこんだイヤホンから、ノイズ混じりにもニコルが応じた。
『いけます、こちらもすべて設置完了です』
「ＯＫ」
応じてイザークは握っていた起爆スイッチを押した。
突き上げるような震動は空気をも揺るがし、連続する爆発音とともにドッグが揺れた。
爆炎が白い巨艦を朱色に照らしだし、黒煙のただ中崩れ落ちゆく轟音はあたかも大天使の断末魔がごときであった。

＊＊＊＊＊

メンテナンスベッドに安置されているのはディアクティブの灰色に染まった、頭部と半身の欠けたＭＳ――だがその全てはケーブルに接続され、一部は無残さを隠すようにシートで覆われ保護されている。

その巨大なシルエットを見上げ、嘆息をついてアスランは作業を開始する。

キラの匂いの残るコックピット、そのコンソールに外部キーボードを手早く繋いで打ち込みを開始する。

手元のＳｃｉｅｎｔｉａの小さいモニターを埋めるコマンドにアスランは視線を走らせていく。

すべてのシークエンスをクリアし、Ｅｎｔｅｒでストライクをとりまく安全システムを全解除する。

あとは物理的破壊だけ――ふと安堵の吐息をついたその矢先「トリィ、トリィ」と鳴く声に、弾かれるようにアスランは顔を上げた。

緑色の軌跡が一直線に降りてくる。

見間違えることもない……指先でそれを迎え入れてアスランは息を呑んだ。

この色、この形、この鳴き声。

その紅い目に備え付けたセンサーが自分を判断したのだろう。

そしてキャットウォークを細身な少年が「トリィ！？」と叫びながら走ってくる。

「どこ行ったんだろう――トリィ！　トリィってば！」

あの声。

そういえば、ヴェサリウスでラクスが言っていた。

　キラさまはあなたからいただいたという緑色の鳥ロボットを、それは大切にしていらっしゃいました。

ただ切なくやるせない。

目を上げるのも辛いのに、鶯を模した鳥ロボットはこの指先から離

れる様子もない。
＜トリィ＞
呼び声に顔を向け、自分の姿を認めた彼が愕然として目を見開いて立ちすくんだ。
「アスラン……」
立ち上がったアスランはハッチからキャットウォークへと降りる。生身でこれほど近くで会うのは、いつ以来だろう？――ヘリオポリスでの再会の時には、血に塗れたバイザー越しでこんなにもはっきりと顔を見ることはできなかった。宇宙での再会もまた然り。
自分は多少背も伸びた、そしてそれ以上にキラは背が伸びていた。変わってしまった自分たち――だが相変わらず透き通る菫色の眼差しが自分をさかさまに写している。
「……なんで、君がここに」
踏み出した彼に、アスランは上着内側のホルスターから銃を抜く。
「動かないで！」
向けられた銃口を見て、不意にキラの眼差しが潤んだ。
それを凝視したままアスランも途方に暮れる――一体自分たちはどうしてこうなってしまったのだろう？　抱きしめることもできるほどに距離のはずなのに。
だからアスランは声を大にする。
「キラこそ！　もう戦いから解放されていいのに、なぜこんな格納庫に――そんなモルゲンレーテの作業着を着て！」
不意に彼の頬が紅潮して、激したようにキラが応じる。
「だって……だって！　知りすぎてる僕が今さら艦を下りられるわけないじゃないかッ！！」
「でも連合の艦はもう＜墜ちた＞のよ！？」
その言葉に、やがて悄然としてキラは頭を振った。
「まだ終わらないよ」
その一言でアスランはすべてを了解する、一体それはどういうことなのか――という思索を巡らせるまでもなかった。

冷たい汗が握ったグリップを滑らせる。
キラはひとりごちるように繰り返す。
「まだ終わらないんだ……まだ僕は君と戦わなきゃならないの？」
それは自分自身に向けた問いであったろうか、しかしアスランが言葉を引き取る。
「あなたが連合でＭＳに乗る限りは、私の敵だわ」
「でも――でも、もうやめようよ、アスラン！　君と戦ったって、きっと何にもならない！」
君を憎みたくないんだッ！　と彼は震える声を大にする。
「……帰ろうよ、あの頃に……」
彼の頬をひどく綺麗なしずくが伝った。
刹那、鋭く刺すような心の痛みにアスランは目を伏せる。
いっそ知りたくなかった、キラもまた過去を大事に抱えていて、決別したはずのこの自分と戦うことに未だ逡巡と躊躇とを覚えているなど。
だからアスランは起爆スイッチを投げた。
キラが咄嗟にキャッチする。
「じゃあこれを壊して、あなたの手でッ！」
ヘリオポリスから始まった悪夢の残骸――自らの剣を！
「アスラン……」
「今さらおりられないのは私も同じなのよ、キラ！」
銃を向けたまま、アスランは静かに見据える。
一瞬怯みを見せたキラの頬が再び紅潮した。
「――くそッ！　これでいいんだろッ！？」
やけくそにも似た彼の絶叫、カチリという音が聞こえたような気がした刹那、耳をつんざく轟音とともに足元から突き上げるような激震が走った。
手をかざし、瓦礫と金属破片混じりの爆風を避けてアスランは目を凝らす。
人型機動兵器であったもののシルエットはもはやそこにない――破

壊は成功した。
たちこめる黒煙のただ中、耳障りなアラート音が工廠内に響き渡る。
「……こんな……僕たちはいったい……」
嗚咽しながら崩れ落ちたキラ、見かねたアスランは銃を下ろして歩み寄ろうと踏み出した。
「キラ、……」
呼びかけに、茫然自失であった彼が顔を上げた。
刹那。
「キラに手を出すなッ！！」
雷のごとき鋭い制止の声とともに銃声が木霊して、銃弾がなぞるように火花を上げて床に痕跡を残す、アスランは飛び退った。
「お前――アスランッ！？」
銃を構えて走り寄る黄金色の少女が硬直したように足を止めた。
オーブ国軍の軍服こそ纏っているが、あの無人島で出会った少女カガリだ。
彼女は何故ここに？
「クソッ！！　さてはストライクのパイロットを殺す気でッ！？」
だが心の乱れを映したように射線はめちゃくちゃで、彼女の弾は全然かすりもしない。
すかさず応射すれば銃が弾け飛んで、短い悲鳴とともにカガリが手元を押さえてうずくまった。
一瞥を投げかけアスランは撤収を開始した。
「ま――待てッ！！　――Z．A．F．T．兵が侵入してるぞッ！！　早くッ！！」
カガリの絶叫をたぐりよせるように、響く軍靴の群れの硬質な音が迫ってくる。
「アスランッ！！」
背に追いすがるキラの悲痛な声を振り切り、アスランは駆ける。
「もう行きなさい、トリィ」
――“向こう側”にいる彼のそばへ。

思いを受けてロボット鳥は指先を離れ、キラのもとへと飛翔した。

＊＊＊＊＊

マシンガンの掃射音が聞こえて、跳弾の火花が降りかかる。
銃を手にアスランは開放されたままのゲートを駆け抜ける。
騒然とした背後でドアが閉まる――システムが回復したらしい、間一髪だ。
「アスラン！　来いッ！」
道路の対岸からイザークの鋭い声がかかる、用意されたスポーツタイプのエレカで3人が自分を待っていた。
「ごめん！」
アスランはそのままエレカの後部座席に滑り込む。
「おっしゃ、しがみついとけよー！」
妙に楽しげなディアッカの言葉とともに、即座にアクセル全開でエレカは正門を後に猛然と発進した。
手元の小型端末のＧＰＳを利用して追っ手の数を確認していた助手席のニコルが叫ぶ。
「射程距離に来ますッ！」
慌ただしく三脚を組んで後ろに向けて機関銃をセッティングしながら、イザークが眉間に皺を寄せた。
「アスランッ!?」
銃撃音とともに頭上を弾丸が通り抜けていき、虚脱した心持ちでシートに埋もれていたアスランは、ようやくに我に返って周囲の騒然に気付く。
猛追されている、今は逃げ切らなくては！
握りしめていた銃の残り弾数を確認して、アスランはイザーク援護に回る。

先頭を疾駆していた幾台かのエンジン部が炎上して視界から消える、だが回避した大多数が追い縋る。

「避けた！？」

反応の早さからしてナチュラルとは思えない――モルゲンレーテの警備兵はコーディネイター系の傭兵団が充てられている、という噂は本当であったらしい。

対して追っ手先頭車両ではランチャーを担いだ警備兵が立ち上がり、こちらにむけて構えた。

「ディアッカッ！！　右ですッ！！」

射線を読んだニコルの叫びに、ディアッカが「任せとけッ！」とハンドルを切る。

急激な右折にアスランはイザークを巻き込んでもつれるようにフロアに倒れ込み、すぐ脇の地面が轟音とともにアスファルトの破片と砂柱を巻き上げた。

アスランはパラパラと顔にふりかかる破片をうるさく払いのけ、それとともに銀髪がさらさらと触れた。

組み敷かれているのに気付く。

イザークは身軽に見えて案外重い――至近距離の銀色の睫毛に彩られたアイスブルーの眼差しを久々に眺めて、相変わらず宝石のように綺麗だと思う。

前もこんなことがあった、と記憶が蘇りかけて我に返る。

今は状況が状況だ。

「……イザーク、どいて」

囁きにハッと息を呑んだイザークが「ッすまんッ！！」と慌てふためいて飛び起きる。

「ったく連中、街中だってのにやってくれるねーえ！」

ディアッカの声にアスランが頭をもたげれば、周囲の風景は海岸沿いからすでに賑やかな市街地へと変わっていた。

対向車線にはみ出して追い越しを繰り返し、クラクションの嵐のただなかを疾走する。

ディアッカの運転の荒さには定評がある――ラスティ曰く超絶無謀危険運転――にも関わらず後続は追い縋る。
「ったくしつこい連中だ！」
気を取り直したようにイザークは再び機関銃を手に起き上がる。
「お前のお守り祈願成就のありがたーい御利益っていついただけるのよ、イザーク！　今わりとピンチじゃね！？」
熾烈なカーチェイスの最中にも関わらずハンドル握るディアッカが大声で軽口を叩く。
「人事を尽くして天命を待つ！　神仏の加護はその後だ、クソ馬鹿ッ！！」
そして身を乗り出して照準器を覗いたイザークが機関銃で弾幕を張る、追っ手のフロントガラスが割れ、あるいはエンジンルームが炎上し、スピンしたエレカが幾台も道を塞いで猛追を阻んだ。
「――赤服（プロ）をなめるなよッ！　並みのコーディネイターとは訳が違うんだッ！！」
悲鳴と怒号のただなか車の群れと街並みが遠ざかっていくのを眺めて、「Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ！」とディアッカが満面の笑みで振り返って親指を立てた。
だがＳｃｉｅｎｔｉａを手にニコルが次なる警告を発する――
「まだです、軍用ヘリが来ます！」
「本気だね、こりゃ。まくのも一苦労だな」
周囲は再び海岸沿い、およそ影になるような建物も回避しうる抜け道もない。
頭上から狙われれば、格好の的となるだろう。
国軍出動前に無事オノゴロの南端まで辿り着けるかね、とディアッカのひとりごちるようなぼやきに、身を乗り出したアスランが指示を飛ばす。
「このまま直進してエレカごと海に突っ込んで！」
「マジで！？　回収ポイントまで泳げって！？」
どんだけ距離があると思ってんだよ、とディアッカが目を剥く。

「もちろん！　Ｎ１９－２４－３　のＷ１５５－７－２５よ、みんな！！」
否やを唱えられる猶予もなく、意見の一致を見たのは一瞬後。
「やむを得ん！」
「わかりました！」
「しゃーないね、んじゃ助走つけて行くぜ――各員耐衝撃姿勢ッ！！」
エンジン回転数が急激に増して車速はスピードメーターを振り切り、ガードレールを突き破ってエレカは青い海めがけて崖を一直線に飛翔した。

＊＊＊＊＊

夕闇に紛れた小さな漁船はエンジン音を立てて波を掻き分けて進む。任務を果たしたザラ隊は、海上で釣り人に扮した連絡員に回収され、オーブのオノゴロ島は遠ざかっていく。
「また派手にやってくれたもんだね！」と舵を握る連絡員は豪快に笑う。
「――ＴＶはどこの局も市街地のカーチェイスのことばっかりさ！　とにかくテロって方向に誘導したいらしいね、連中！」
情報統制はごく当然のことと思われた、不都合な真実を国民に知らせる必要などない。
「やれやれ疲れた――今度こそ任務完了、これでやっと休めるかね」としじどけなく甲板に寝転がったディアッカが希望的観測を述べる。
「数日はな。だが肝心のスピットブレイクがあるだろうが」
海水に濡れてパサパサの髪をかきあげながらイザークが言う。
「……まだよ」
漁船の縁に座り込んで遠ざかっていくオノゴロ島を眺めていたアス

ランが背中で言った。
「まだ終わらないわ」
「え？」
きょとんとしたニコル、そしてイザークは怪訝に問う。
「おい、どういうことだ？」
ブルワークに身を預けて、渡したお守りをころころと手の平で転がしながらアスランは無言を通す、袋に縫い付けられた鈴がちりんちりんと音を立てる。
「はっきり言え！　どういうことだッ！？」
ちらと振り返って物憂げな表情のアスランは、ややあって言った。
「確かに私たちは任務を全うした。でも連合の新造艦とＭＳがあそこに隠されてるわ――領海外で待ちましょう。カーペンタリアに報告して、補給を要請する」
イザークは呆気に取られる。
何か見つけたのか？
「確証はなんだ！？」
声を荒げるイザークは視野の片隅に、ニコルとディアッカが素早く目配せするさまを捉える。
「お前ら何か気づいたかッ！？」
しかし考えても全く心当たりがない。
「もしかしたら……」とニコルがようやくに重い口を切る。
「ストライクのところで……」
ひどく青ざめた面持ちでアスランはニコルを振り返る、そして不意にニコルは口をつぐんだ。
その合間にも漁船はポイントへとつき、連絡員と一言二言交わすなりアスランはそのまま真っ先に海へと潜る。
「おいッ！！　質問に答えてないぞ、アスランッ！」
イザークの声を水飛沫が遮る。
「まぁま気にすんなよ。ザラ隊長が断言してくれたんだから、それでいいじゃん」

ディアッカの言葉を置き去りに、イザークも慌てて飛び込む。
暗闇迫る海の中、真っ直ぐに母艦の待つ方向へと泳ぐアスランの姿が視界に入る。
その残る空気の泡を追いながら、決意を新たにする――ちッくしょう！絶対にお前に追いついて、つかまえてやる！

Ｐａｓｔ：　Ａｃａｄｅｍｙ－４

廊下を曲がれば、受け持ちのＰクラスからひときわやかましさが伝わってくる。
いつものことながら、我が可愛い生徒たちときたら元気いっぱいだ。
レイ・ユウキが教室のドアを開ければ、何やら人だかりと、そのただなかで本の投げあいをしている少年２人の姿が見えた。
「ふっざけんなよッ！　くそディアッカァァァッ！！」
「俺が何したってんだよ！　この馬鹿コートニーッ！！」
「ひとの女に手ェ出しといてその態度は何なんだよォォォッ！！」
「あの女が言い寄ってきただけだってーのッ！！　そんな大事なら首輪でもつけとけよなッ！！」
……最近の子どもたちときたら実にマセている、本当に困ったものだ。
呆れ顔のユウキはひとつ咳払いをしながら教壇に上がる。
ようやくに気づいたようにぱらぱらと生徒たちは席に戻り始めた。
「あー……。こらいつまでだらだらしてる！　はい着席！　コートニー、ディアッカは後でそこら辺の本を拾っておくこと」
「……はい」
「りょーかい」
まったく子どもたちはどこまでも学校気分だから困る、一応ここは軍の施設だというのに。……それとも自分が甘いせいなのだろうか。
ともかくレイ・ユウキは出席簿をぱらりとめくってぐるりと講義室を見回す。
「欠席者は……マーレ・ストロードか。どうした？　知ってるか、アンリ」
マーレと同室で、最前列に座っているアンリ・ユージェニーが大仰に肩をすくめた。
「えーと。何か具合が悪いって言ってました」

「そうか」
それは心配だ、今日はＭＳ工学テストがあるというのに、とユウキは難しい顔を作る。
「今週のテスト週間が終わったらＭＳ実習だ、お前たち気を引き締めるんだぞ！」
いまいち気が引き締まっていない応えが生徒たちから返ってきて、がっくりとユウキは肩を落とす。
ただでさえウィラードやシュミットから「今期のＰクラスはダレている」と言われているというのに――全くこの生徒たちのうち一体幾人が来年の今頃も生きているのか心配になってくる。
「おい日直！　日誌を取りに来い！」
「はい」
蒼い髪の少女が席を立って教壇へとやってきて、ユウキは片眉をついと上げる。
「……アスラン。こっそり教えた航空物理学のポイント、さては漏らしたな？」
アスラン・ザラはにっこりと笑むと、実に朗らかに「皆に教えました」と答えた。

……通りで全員パスしたはずだ。

毎期必ず数名の落伍者が出るというのに、今期に限ってあまりの満点連発に自分は腰を抜かした。
「いや……なんというかね。君は理解しているし今更言うまでもないだろうが、ということで教えたんだが……」
「ユウキ教官の優しさをひとりじめするのは申し訳なくって。ここは全員平等にと思ったのですけれど、ダメでした？」
「……いや」

可愛い。

敢えて言おう、可愛いものは可愛い、綺麗なものは綺麗であると！
そして可愛く綺麗なものを愛でるのは当然のことなのだ！

という理論を展開して、同僚のギャバン・ラコーニに「お前は単なるロリコンだ」と一刀両断されたのは今朝の話。
……仮にロリコンであったとしても、それは他人様に迷惑をかけることのない趣味の範疇ではないか。
「では朝会はこれで終わり！　今日も一日頑張れよ！」

＊＊＊＊＊

さて、気がかりなのは欠席したマーレ・ストロードだ。
ユウキは付属寮へと足を向ける。
昨日まではちゃんと出席していたのに、急に具合が悪いとは。
そもそも自分たちコーディネイターは頑強な身体を持っている、それでもダウンするとはまさか悪い病気ではあるまいか？
寮の廊下を歩いていたユウキはひとつのドアの前で立ち止まり、ノックした。
「マーレ？　具合が悪いのか」
返事がない、とりあえず中に入る――カーテンを閉め切って、実に真っ暗な部屋だ。
ごそりと部屋の片隅で何かが蠢いて、ユウキはどきっとする。
その手で照明のスイッチを入れた。
「教官……」
部屋の片隅にうずくまっていたマーレ・ストロードは、青白く痩せこけた顔で振り返った。
……ナイフと手首。

「ばッ……馬鹿な真似をするなァァッ！　！」
咄嗟に猛然と突っ込んでマーレを突き飛ばし、ユウキはそのナイフを奪い取る。
「早まるなッ！　何があったかは知らん、知らんが命を粗末にしてはいかんッ！！」
「俺……勉強全然手につかなくて、もう……もうダメです……落第して次の同期に『先輩』とか言われるの耐えられない……」
床に倒れこんだマーレはしくしくとむせび泣く。
「シホに振られて合わす顔ないし、アンリにバレたからきっと今頃俺はクラスの笑い者なんだ……」
一体どれが原因かはわからないが、とにかく凄まじいマイナス思考だ。
しかめっ面でユウキは怒鳴りつける。
「テストのひとつやふたつ補習でどうにか出来るッ！　女に振られたくらいでメソメソするんじゃないッ！！　そんなことなら俺は何度死んでるかわからんぞッ！！？」
そうだ、死にたくなるような出来事なんて大人には腐るほどあるのだ。
「ユウキ教官……」
「今からならまだテストにも間に合うッ！　さっさと行けッ！！」
蹴り飛ばすようにマーレ・ストロードを部屋から押し出して、ユウキは肩で息をしながら汗を拭った。
とりあえずこの物騒なナイフは没収。
マーレは放課後にでも保健室常駐のカウンセラーのところにでも行かせることにしよう。

＊＊＊＊＊

昼休憩、教官室のＴＶはニュースの後で歌謡コンサートと最新ヒットチャートを放送していた。
やっぱりラクス・クラインの曲はいい。
実に惜しいのがもう何度も見慣れた映像だということだ。
あの歌姫は滅多にＴＶ番組の場に姿を現さないので、どうしてもライブの画像の使いまわしになる。
「失礼します」
銀髪を鋭利に削ぎ落とした少年が教官室に入ってきて、ユウキは弁当を食する手を止める。
眼前で敬礼をして、イザーク・ジュールは淡々と言った。
「本を返していただきに来ました」
「ああ、ラコーニから預かっている。……全くテスト中に本を読むんじゃない。これがテスト内容に関わりがあるものだったら大事だったぞ」
眼前の本立てからユウキはその分厚い本を指先で引き出す。
イザーク・ジュールはふふん、とひとつ鼻で笑った。
「そうでないものを選びました。テスト中に本を読んだのは時間が余ったからです」
なるほど、大学付属研究所にいたイザーク・ジュールにはＭＳ工学のテストなど今更、といったところなのだろう。
「で、この本は一体何だね」
「ご覧の通り『リグ・ヴェーダとサンスクリットに関する民間伝承の現実』です！」
……つくづく題名からして謎だ。
「そしてこれはかの偉人トシオ・ヤナギーダが最後に著したものでサイン入り初版豪華装丁本なのです！」
胸を張ってイザークは言う。
しかしかの偉人と言われても、一体何がどう偉大なのかさっぱりわからない。

とにかく彼にとっては偉大な人物なのだろうとは推測だ。
「まぁなんだ。最近本を読まない若者が多いというが、君は立派なものだね」
ぱらぱらと重い本をめくって、ひらりと机上に落ちる紙切れをユウキは手にする。
「ん？　何かね、これは」
奇妙な文字が鮮やかな筆さばきでずらずらと書き込まれた、細長い紙だ。
「私が作ったサンスクリット文字のお札です。息災延命先祖菩提仏敵滅殺家内安全祈願成就！」
……これは余り深く突っ込まないほうがよさそうだ、と直感的にユウキは思いながら、そそくさとイザークにその本とオフダなるものを返す。
イザーク・ジュールの切れ長の青い目がきらり、と光った。
「これを読みましたか？」
「……いや、そのヤナギーダというのに私はあまり造詣がなくて」
「お望みならいつでも貸して差し上げますが？　密教のくだりなど濃密で実に興味深い名作です」
食い下がるイザークに、多少の怯みを覚えながらユウキは言葉を探す。
「うん、そのお気持ちはありがたいがね。私も仕事が忙しくてなかなか難しいと思うのだよ」
「そうですか。では失礼します」
ひどく残念そうなイザーク・ジュールは分厚い本を小脇に抱え、また敬礼して背中を向けた。
頭が良すぎる人間というのは、往々にして凡人には理解しがたい。というか思考回路がどこか妙で、会話がうまくなりたたないような。

＊＊＊＊＊

穏やかな午後の陽気と吹き抜ける風の清涼さは、微妙に疲れた心に沁み込む。

マーレも無事カウンセラーに預けた。今日の仕事はもう終わりだ。

そんなことを考えながら渡り廊下を歩いている最中、眼前を走り抜けるオレンジ色の風にユウキは視線を走らせた。

……ラスティ・マッケンジー！

そのままラスティのバイクは加速を続け、校庭の朝礼台の階段を駆け上がるとそのまま空中に高く飛翔していた。

曲芸のごときアクロバティックかつ大胆さに、見守っていた生徒たちからやんやの歓声が上がった。

「すっげぇ！　ラスティ！　！」

「もう一回やって見せろよ！！」

鈍い音を立てて横滑りに止まったバイクに少年たちが群がり、褒め称えられてラスティは実に誇らしそうに親指を立てた。

ぶちりとユウキの怒りの緒が切れる。

「こらァァァッ！！　馬鹿者ォォォッ！！　構内をバイクで爆走するなァァァッ！！」

ユウキは携えていた冊子を丸めて声を大にしながら駆け寄り、「何をやっとるか！」と少年たちをそれぞれに冊子ではたく。

しかしラスティは白い歯を見せた満面の笑みで、ハンドルに身を凭せ掛けて言う。

「ユウキ教官も見てくれました？　俺の超高等テク！」

「ッ見たぞこの大馬鹿者ッ！！」

オレンジ色のツンツン頭を平手ではたいて、ユウキはラスティをバイクから引きずり下ろす。

「反省文だッ！！　お前は一緒に教官室に来いッ！！」

「えええええッ！？　ちょっとだけだったじゃありませんか～ッ！
ちょこっと走っただけです～ッ！！」
「言い訳になるかッ！！　構内は車両禁止だッ！！　それからお前、
その耳のピアス全部外せ！！」
「髪に隠れてるからいいじゃないですかー！！」
「軍人の卵がチャラチャラするな！！お前はホストかッ！！？」
「……えー、チガウデアリマス」
「なんだその棒読みはッ！！！」
怪しいとは思っていたがやっぱりバイトでしてるのかッ！！　これ
は締め上げて吐かせねば！！！
ラスティ・マッケンジーの襟首を掴んで教官室へと戻る最中、ユウ
キは自分を呼ぶ声を聞いた。
「ユウキ教官！」
背後から追いかけるように廊下を駆けてきた深緑色の少年に、また
何かあったか、とユウキはうんざりする。
「こら。廊下を走るんじゃないぞ、ニコル」
ニコル・アマルフィはその少女めいた愛らしい面立ちを曇らせた。
「すみません！　でも今それどころじゃなくて！　ディアッカとコ
ートニーが中庭で喧嘩を始めて……！」
朝の件の続きか、とユウキは思い出す。
「ああ放っておけ。喧嘩は悪いことじゃない、それで手加減のコツ
や要領を学ぶものだ」
「ただの喧嘩ならいいんですけど、ナイフを持ち出してしまったん
です！　止めてくださいッ！」
「な……」
思わずくらりと立ちくらみがした。
受け持ちの生徒がそんな私闘を繰り広げているだけでも問題なのに、
万が一があれば自分は管理責任を問われるハメになる。
「どこだ！」
「中庭の噴水前です！」

ユウキはラスティを放り投げ、ニコルとともに廊下を走る。
慌しく中庭に駆け出してみれば、既に人だかりができていた。
「もうやめなさいってば！」
「いいじゃん、やらせておこうよ」
「コートニー負けるな！　～いけッ！」
「ディアッカッ！！　脇が甘いッ！！」
人垣の向こうに、組み合って砂埃を上げながら、互いに切りつけあって傷まみれになっている少年2人の姿が見えた。
ユウキは上着を脱ぎ、肩のホルダーに携帯していた銃を抜いて、セイフティをがしゃりと外す。
「きょ、教官！？」
裏返った声のニコルに「耳を塞いでおけ」と告げて、ユウキは空に向かって威嚇射撃を3発放った。
それだけでナイフで取っ組み合いをしていた2人と周囲の野次馬たちが静かになった。
「いいか……お前たち、いい加減にしろ」
いくらこのレイ・ユウキが寛容な人間だといっても、物事には限度というものがあるのだ。

＊＊＊＊＊

医務室に押し込めた2人を前に、ユウキはしかめっ面で説教をする。
「私闘は校則違反、軍紀違反だぞ！」
「私闘じゃないです、単なるナイフ戦の練習です」
ぶすっとした表情でコートニー・ヒエロニムスは言い、ディアッカ・エルスマンもにやりと笑った。
「そうそう練習だって、センセ。だから全然俺ら違反なんかしてません」

全くコイツらときたら、屁理屈をこねる技術はすでにして一人前だ。
「全く！……何が原因かは訊かん。だがすぐ暴力に訴えるのはどうかと思うぞ。まず話し合え、全てはそれからだ！」
「話すより一発ぶちかますほうが早いに決まってるじゃないですか」
「お前まだ言ってんのかよ」
「うるさい、もとはてめーが原因だろうが！」
「俺じゃねーよ、女に言えよ！」
「こら！　そこの傷も見せなさい！」
校医たちに手荒く消毒されながら、切り傷まみれのコートニーとディアッカは未だにぶちぶちと口論している。
「……うだうだ言うようなら、学部長に申し上げて2人ともテスト期間中謹慎処分にしてもらうぞ。落第して留年したいか？」
ユウキの脅しに、ええッ！？　と少年2人は表情を歪める。
よしよし、いい反応だ。
「誓約書を書け！　金輪際、刃傷沙汰にはしないと書いてサインだ！」
差し出した紙とペンに、しぶしぶ彼らは机に向かって書き始めた。

そして誓約書を回収し、やれやれ全く――――――とユウキは嘆息混じりに医務室を出る。
その背後を慌ててディアッカ・エルスマンがついてきた。
「なあ、身元引受人に連絡はしないでくれるよな、センセ」
お？　とユウキは振り返ってにんまりと笑む。
「お望みなら、してやってもいいぞ」
「冗談、勘弁してよ。親父にまた偉そうに文句言われるの超困る」
絆創膏と包帯まみれのディアッカ・エルスマンの顔をちらと見て、ユウキは眉間に皺を作った。
「ディアッカ。このままいくとお前は将来女で身を持ち崩しかねんぞ。気をつけろよ」

人生の先輩としてアドバイスしたつもりが、ディアッカはあっさりと一笑に付して流した。
「だいじょーぶ、うちの嫁さんがしっかり手綱を締めてくれますって」
本当にああ言えばこう言う、生意気なガキもとい生徒だ。
まあ最高評議会議員のご子息であるからには、婚約者のひとりやふたりいてもおかしくないのだろう。
「気の毒にお前の嫁は苦労が耐えんだろうな。……で、やっぱりいいところのお嬢さんか？」
まさかアスラン・ザラではあるまいな、とユウキはちらりと視線を動かす。
「アイリーン・カナーバ。センセイも知ってるっしょ？　俺アイリーンと婚約ほやほやなの」
ディアッカはひどく余裕綽々とした表情で、少しばかり自慢げに答えた。
「アイリーン……カナーバ？」
予想外の名前にユウキは絶句する。
記憶している限り、アイリーン・カナーバといえば一番年若い最高評議会議員で、総合情報学の博士で、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．外交官だ。
それでも確かこのディアッカとは年が１０は離れている筈だが……
ともかくユウキはＴＶで見た彼女の顔を素早く思い浮かべる。
極めて美人だ。
「ふむ。なあディアッカ」
「何だよ？　センセ」
「お前は一度コートニーに殺られたほうがいいかもしれんな。人生出直せ」
「……はぁ？　ちょ、センセイッ！　それ教官が生徒に言うことかよ！」
ディアッカの声を背に、すたすたと誓約書を片手にレイ・ユウキは

廊下を行く。
総じて生徒は可愛い、だが可愛い以上に憎たらしいヤツも存在するのだ。これは人間である以上当然のことではないか。

＊＊＊＊＊

ラスティ・マッケンジーにはまんまと逃げられたが、明日の朝捕まえればいいだけの話。
ようやく教官室に戻り、やっと一息がつけると思いつつレイ・ユウキはマグカップにポットの湯を注いだ。
たちのぼるインスタントコーヒーの匂いが何故か涙腺を刺激する。
疲れた……今日は日誌チェックだけして、さっさと帰宅することにしよう。
「弾薬庫の鍵知らないか？」
デュプレがさかんに訊いて回っているのをちらとユウキは見遣る。
「ユウキ、お前は？」
「さて、全然だが」
「参ったなぁ……どこやったんだろう？」
「ちゃんと管理しておかないからだぞ。学部長に知られれば始末書減給ものだ」
ユウキはそのまま席に戻り椅子に身を沈めて、隣の席のラコーニに声を掛けた。
「で、どうだい、我がクラスの生徒たちの成績は？」
テスト用紙の束を傍らに採点作業をしていたラコーニが頭をもたげた。
「まぁぼちぼちかね。やっぱりザラとジュールが満点てところだな。ああ……そういえば今日も大忙しだったみたいだが、ユウキ」
「……うん何だ。まぁ教師というのは辛いよ、子どもたちに振り回

されて」
全く可愛い生徒たちときたら、どいつもこいつも好き放題。
これは自分の至らなさか、それとも今期めぐり合わせが悪かったせいか？
とにかく早く部隊に戻りたいものだ、次の異動に期待しよう……と思いながらユウキはマグカップを傾ける。
「あら綺麗な花火」
向かいの席のヤードバーズが弾んだ声を上げた。
「花火？」
ユウキとラコーニは窓の向こうを見遣る。
すでに日が傾いて暗闇迫る空に、なかなかな花火が上がっていた。
「たーまやー……風情があるね。もう夏だものなぁ」
ラコーニがのんびり言っているのを傍らに、ユウキはふと嫌な予感がした。
この士官学校の周囲で花火大会があるような話は聞いていない。
そもそも……あれは付属寮の方向ではないだろうか……いや、まさかいくらなんでも、とユウキはちらと思う。
「弾薬庫の鍵がなァァいッ！　なんでだァァッ！」
デュプレの声が聞こえる。
まさか……まさか我がＰクラスの生徒が関わっているわけはないだろう？
と思いながらも不安から花火に目が釘付けになっている最中、眼前の内線電話が鳴った。

◆◆◆◆◆

最後の座学テスト、軍事法学の試験前日を迎えて、放課後わらわらと皆が早々に立ち上がる。
いつになく閑散とした教室の只中、アスランとラスティは向かいあってそれぞれに持ち合った菓子を広げた。
「……で、昨日結局どうなったの？」
「一言で言うなら修羅場だね、修羅場。ユウキ教官がマシンガン持って追ってきてさぁ。俺らマジ殺されると思ったね」
「そう。でもあんな大きな花火上げておいて、よく反省文で済んだものね」
「うん、デュプレ教官とユウキ教官も連座責任ってことで。ってか寮母さんを味方につけたのが大きかったね。学部長も寮母さんには頭上がんないみたい」
全く貴重な放課後に俺たちは何してるんだか、とラスティは思うが、この無駄話がまた楽しい。
ひとしきりの雑談に、斜め後ろの席で端末を広げていたシホが目を上げた。
「もう2人とも教室にお菓子持込みなんかして、見つかったら怒られるわよ」
アスランは振り返りざまチョコレートを口に放りこんだ。
「だってお腹空いちゃったんだもの。シホも食べる？　脳の疲労回復に糖分は必須よ」
差し出されたチョコレートの箱を前に、シホは渋い顔を作った。
「いらないわ、太っちゃうから」
「多少いいじゃん。女のコはぷくぷくしてるくらいが可愛いと俺思うよ」
ラスティはポテトチップスをばりばりと噛み砕きながらノートの頁をめくる。
「別にラスティの好みなんか知らないってば」

シホは端末の電源を落として、パタン、と閉じた。
その端末の天板に控えめにカラーリングされた文様にアスランは目を留める。
「素敵ね。それ鳳仙花？」
少しばかりムッとした表情を向け、そのまま何も言わずに端末を抱えてシホは席を立った。
「あら？」
アスランは意味もわからずに彼女を見送り、途方に暮れている。
……シホも多少は打ち解けたかと思ったが相変わらず競争心の激しいヤツ、とラスティは頬杖をついた。
ＭＳシミュレーションの最終テスト中シホが組んだ戦陣と狙撃を見て、イザークが何気なく言った。
「まるで鳳仙花だな」――ということで、どうやらシホはパーソナルマークを鳳仙花に決めたらしい。
かいつまんで説明すれば、チョコレートをまた口に放り込んだアスランがしみじみと言った。
「シホってイザークのこと好きなのね、そっかぁ……だからマーレのこと振っちゃったんだ」
「あんまりマーレのこと言ってやるなよ。アイツ、もうどん底まで落ち込んじゃって、テストもさんざんだったみたいだし」
ポテトチップスを貪りつつラスティは思いを馳せる。
結構繊細なマーレだ、思い切って告白したもののシホにフラれたのが相当ショックだったのだろう。
そして同室のアンリにそうと知られたのが運のつき、マーレの失恋話は翌日にはクラス中の皆が知るところとなってしまった。
「うーん……シホ、イザークに気持ち伝えないのかしら」
「告ったりはしないと思う、シホのあの性格じゃね」
負けず嫌いの彼女のことだ、報われないと知っていて敢えての挑戦はしないだろう。
もっともアスランの出方次第で、今後シホの恋が叶うかどうかは決

まるとも言えるのだが、とラスティは思う。
「アスラン、ラスティ。僕も混ぜて下さいよ」
ニコルが売店で購入したらしい煎餅の袋を携えて顔をのぞかせた。
「あらニコル」
「どーぞ」
ニコルは椅子に座るとにっこりと笑った。
「レクルームで面白い話聞きましたよ。恋の舞踏家ディアッカ・エロスマン、アイリーン・カナーバ議員と婚約！　って」
「え…えええッ!?　カナーバ議員ッ!?　」
煎餅に手を伸ばしたアスランが驚愕の顔で固まり、ラスティは興味深々で身を乗り出す。
「へえ、アイリーン・カナーバかぁ。美人っちゃ美人だけど、ディアッカってよっぽど年上好みなのかね」
「でも彼女ってまだ２０代後半ですよ」
「ったって俺らより１０は上だろ?うーん……いまいち謎だよなぁ。女の方も一体何考えてディアッカなんかを……そりゃアイツ一応芸能人だけど、ってかこれも親の政略絡み?」
「どうでしょう。むしろエルスマン議員がカナーバ議員を追い回してるって話は以前聞きましたけど」
ラスティは思わず苦笑いする。
「血は争えないね、父子で争奪戦か。それでカナーバ議員は若い方を選んだと。まあモテる女ってのはホント厄介だよなぁ、アスラン?」
煎餅を頬ばっていたアスランはきょとんとした。
「ん?　なんで私に話題を振るの?　私何かした?」
「そりゃあもう。お前がフッた後の野郎どもを誰がフォローしてると思ってんのよ。奴らみんな俺に文句言ってくるから超迷惑」
アスランはたちどころに渋い顔になって「なんでラスティに」とぼやく。
「お前が断る時のセリフのせいだってば。もうちょっと口実考えて

くれよ、『ラスティと遊んでるほうが楽しいから』って、なあ俺に一体何の関係があるよ？　それで誤解されてるから技官コースの女子も全然寄ってこないし、あ～……思い出したらなんかムカついてきた」

一転アスランは実に面白そうにころころと笑った。

「ラスティに好きな人がいるっていうんなら考えるわ。でも別にラスティもお付き合いしたい人なんていないでしょ？　はい、飴あげるから機嫌直して」

「飴ごときで俺が釣れるかよ」

ともあれアスランからもらった飴玉を口に含んで、ばりぼりとラスティは噛み砕く。

それは学校で親密なお付き合いをさせていただいているし、アスランは実にイイヤツだと思う。

だが仮に男視点から見て可愛いなぁ綺麗だなぁとは思っても、あくまでアスランは観賞用だ。

そもそも、――ラスティは思う――あの鋭利冷徹厳格で有名なザラ国防委員長が、娘の相手に庶民をなどと許すはずがないではないか。

自分には特務隊や保安局相手に立ち向かう勇気はないし、秘密裏に射殺などという事態は最も勘弁願いたいところだ。

くすくす笑って話を聞いていたニコルがチョコレートを手に取る。

「でも2人ともいいコンビじゃないですか。案外上手くいくかもしれませんよ」

「ニコルまでこんなこと言うようじゃ、俺ら卒業まで誤解されっぱなしだね。最悪」

「こら。……なんだかさりげなくとっても失礼なこと言ってるでしょ、ラスティ」

アスランの白い指先に額を弾かれて、「いてッ！」とラスティは顔を顰めた。

Past：Academy－5

講義室の窓から見える桜並木は深緑色。
桜、桜、桜。
コペルニクスの桜もきっと今頃おなじ色――キラは元気かしら、あの通学路を今も通っているのかな。
ぼんやりとアスランは眺めて腕に頭をうずめる。
キラといる時いつだって私は泣くに泣けなかった、私まで泣いたらキラがいっそう泣いてしまうから。

あなたは強い子ね。

お母さま、私は本当に強いのでしょうか？
……なんだか無理して笑うのにも疲れてしまって、今すぐにでも泣きたくて仕方がないくらいなのに。
「大丈夫ですか、アスラン！？　顔真っ赤ですよ！」
ニコルが心配そうに覗き込む。
「なんでかしら」
アスランは眉間に皺を寄せる。
生理前に熱っぽいのはいつものこと、けれどこんなに熱いのは本当に久々。

でも銃撃戦のテストがある、多少の熱で休むわけにはいかない。
「ちょっと……身体全体赤いわよ？　熱、測った？」
着替えながらシホがのぞきこむ。
普段全然無関心であんまり口もきいてくれないのに、たまにシホは

ちょっとだけ優しい。
「これが終わったら医務室行って体温計借りることにするわ」
「もう。新種のインフルエンザとかだったら私困るんだけど」
……ただ自分にうつることを心配してるだけみたいなので、ちょっと意地悪を言ってみる。
「それならもうとっくにシホにも感染しちゃってるわ。今頃潜伏期間ね。同じ部屋のよしみだし、わかちあいましょうよ」
シホはものすごく嫌そうな顔をした。
そんなに嫌がらなくてもいいのに、やっぱり私のことあんまり好きじゃないんだろうな。

妙に身体がふらついてきた……なんだかさっきよりも状態悪い？
アスランは教官に名前を呼ばれて立ち上がる。
「おいおい、大丈夫か」
「無理だろ？」
みんなが口々に言うけれど、そんなに私は真っ赤？
「……大丈夫よ、撃つには撃てる、と思う」
「馬鹿者ッ！　そんな根性で試験に臨むなッ！」
イザークはそんなことを言う、でもこのテストの単位を落すわけにはいかないでしょ？
アスランは重い身体をひきずるようにブースに入る。
弾倉の弾丸を確認して再度装填、スライドを引いて初弾が薬室に入る音を確認、撃鉄……よし。
何だか腕を掲げて構える銃まで重い、指先に力が入らない。

「おいおい、セイフティ外し忘れるのってありかよ？」
呆れたようなディアッカの声。

うっかりしていた、とアスランは焦りながら銃を下げて、左手で力

いっぱいセイフティを解除する。
額に汗が滲むのは焦りのせい、それとも熱のせい？
「はじめ！」
ヤードバーズ教官の合図と同時にトリガーにかける指先に力を込める、すぐさま反動が手首と手の平に跳ね返ってきた。
力のこもらない手では抑えるのが精一杯。
それでも高速移動する的に吸い込まれるように銃弾が消えていく、ここまでは順調、眼力も追いついている。
ん？
……まずい、鼻がむずむずする。
……あー。

くしゅん、とアスランは小さくくしゃみをして、その一発が的を外した。
その影響で二発目も的の中央から外れる。
ああ～…と見ていた全員から溜息が漏れた。

これで銃撃戦一位はイザークに決定。
少し悔しいけれど、それよりこの熱は一体何？　まさか悪い風邪？
もしかしてホントにＳ２インフルエンザ？
銃を置いてブースから離れようとした瞬間、ふらりと前後左右を見失った。
「おっと！」というラスティの声が間近で聞こえて、肩を掴まれた。
「お前マジ熱いって。医務室決定。歩ける？」
普段笑い顔が基本のラスティにしては珍しく真面目な顔。
心配してくれているのだろう、ラスティはいつだって優しい。
「歩けるわ……多分。肩をかしてくれさえしたら」
ラスティは背中を向けて腰をかがめた。
「そんな調子じゃ無理っぽいね。おんぶおんぶ。ほら、お嬢様どーぞ」

「うん」
素直にアスランはラスティの背中に抱きつく。
膝を抱えて、よっこらしょ、とラスティは立ち上がった。
「アスランおっもーい。甘いもの食べすぎ」
冗談にしてもヒドい、ヒドすぎる。
「嘘、嘘、嘘！　私ふつうくらいなんだから！」
背中を叩きながら足をばたばたさせれば、「ちょッ！！待て！！」
とラスティがよろめいた。
「ごめんごめん。嘘だってば。……んでは教官、アスラン・ザラがこんな凶暴状態なので医務室に連れて行ってきます」
ラスティはもっともらしくヤードバーズ教官に敬礼する。
「連れられて行ってまいります」
ラスティの肩越しにアスランも力なく敬礼して、力尽きてがっくりとラスティの肩に頭を持たせかける。
「もうダメ、ぐらぐらする」
「ああもう、医務室まで頑張れって。落ちるなよ」
そのまま広い背中に揺られて、アスランはぼんやりと周りを眺める。
おんぶされるなんて、小さい頃お父さまにしてもらって以来じゃないかしら。
そういえば最近お父さまの顔を見てない、今度会ったらおんぶしてもらおう。
……そんなこと言ったらお父さま、ビックリしちゃうかな。

校医は口の中を覗いて言った。
「喉も鼻も赤くなってないし腫れてないわね。睡眠不足に心当たりは？」
「多少あります。ここしばらく2時間睡眠でしたから」
「……一体何してたの、テスト勉強？」
「いえ、工作です。ＭＳのミニチュアを作ってました」

「今日からしばらくそれ禁止。で、生理前？」
「はい」
「疲労感は？」
「前からぼちぼちと」
「うん、それ全部原因ね。多分自律神経が疲れちゃったんでしょう。いくら私たちが頑強っていってもただでさえ女の子の微妙なバランスの時期だし、無理せずに今はとにかく寝ること」
はい、と頷きかけてアスランは思い出す。
「でも午後から爆弾処理テストがあります」
「再テストを受けるなり補習を受けるなりなさい、デュプレ教官には私から連絡しておくから。無理して出て、処理を間違って爆発したら洒落にならないでしょう」
それは全くその通り。

校医にベッドに押し込まれて、氷枕の上でアスランは寝転がる。

あなたは白百合と青い薔薇とどちらが好き？

私は両方好き。
どちらもあなたによく似ているから。

いつかあなたがどちらかを選んだ時――

やがてどやどやと騒々しい声が聞こえた。
浅い眠りから醒めてアスランは瞼を押し上げる。

腕時計を見る、どうやらもう午後のテストが終わったらしい。
ベッド周辺のカーテンが開いて、クラスメイトたちが顔を覗かせた。
「どう？　アスラン」
「ほっぺた真っ赤だね」
「あ、起きてるんじゃん。どうよアスラン。インフルエンザじゃなくてよかったね」
「ユウキ教官心配してましたよ」
その言葉のひとつひとつにアスランは頷く。
とにかく今は寝かせて欲しいのだけれども、みんなで心配してくれるのはとっても嬉しい。
「なんだかもうぐったり。意識不明になりそうな感じ」
「そんなこと言ってたらセンセ猛ダッシュでここに来るぜ？」
熱血なユウキ教官のことだから、駆けつけてきて「大丈夫かッ！俺がついているぞッ！！」と手でも握ってくれるに違いない。
……それはとてもとても困ってしまう。
「じゃあアスラン・ザラはぐっすり眠ってました、ってことでよろしくお伝え下さいな」
「りょーかい」
集団がまたぞろぞろと去っていき、アスランは布団を引き上げて寝返りを打つ。

いつかあなたが大人になったらその時に――

伝えなくてはならないことが、たくさんあるの。

でもその前に、あなたはいなくなってしまいました。

意識が沈みかけた時に荒々しくカーテンが開いた。
今度はいったい誰?
うっすらとアスランは目を開く。
「おい！　起きてるのか！」
また賑やかな人がきた。
アスランはひとつ嘆息をついて、ごろりとそちらにまた寝返りを打つ。
「なぁにイザーク」
「飲め！」
イザークは枕元にスポーツドリンクのパックをぽんと置いて、傍らの椅子にどかんと座った。
「ありがとう、いただくわ」
イザークの気遣いのドリンクパックを手繰り寄せて、アスランは寝転がったまま飲む。
細胞に沁み込んでくる、寝汗をかいたせいかとても喉が渇いていたらしい。
「寝込むなんぞダレている証拠だッ！　そんなザマでよく銃撃戦に臨んだものだなッ！」
「イザークって負けたくない癖に、実際に勝つと文句を言うのね」
こんなにむつかしい性格の人を私は他に知らない。
一方でムッとイザークはしかめっ面になった。
「フェアでないからムカついているだけだ！　日を改めてもらうとか手はあったろうが！」
「うん。でも私負けちゃったもの。それでいいじゃない」
「よくないッ！　そんな適当なことでどうするッ！?」
どうしてイザークはいつもこうなんだろう、何かと構うくせに怒鳴る。
私のことが好きなのか嫌いなのかさっぱりわからない。
アスランはごろりと背を向けて布団を頭から被る。
「ああもう。イザークの怒鳴り声聞いてたら、ますます疲れちゃっ

た！」

沈黙。

続く沈黙。

イザークどうしちゃったんだろう。

布団の暗闇の中でごそごそと向きを変えて、ちらとすきまから覗けばイザークが困ったような顔で黙り込んでいるのが見えた。

思わずアスランは笑って布団から顔だけ出す。

「でもねイザーク。私思うのだけれど――」

「何だ」

「文句を言われるだけいいのかもって。もし私がごくごく普通の成績だったら、きっとイザークの視界には入ってなかったんじゃないかな」

最初は成績なんて単純な結果で余り意味がないと思っていた、競争なんて興味はなかった。

でもいつしかイザークと競うことが楽しくて、何かと構われることが嬉しくて、そんな風に感じている自分もまた意外で新鮮だったり。

「イザークにお相手してもらえないのって多分すごくつまらないから、これはこれでいいのかもね。こうやってお見舞いにもきてくれたし」

「お前一体何を言ってるんだ」

イザークが妙な顔をしたのを眺めて、アスランはふふっと笑った。

「うん、何言ってるのかな私。全然考えがまとまらないわ。多分熱のせいね」

「ったく！」とイザークが腰を浮かせるので、アスランはちらりと目を動かす。

「だーめ。私がまた眠れるまでそこにいてよ」

「はぁ？　何で俺が」

「大声を出した罰。じゃないと泣くわ、ずぅっと泣くわ。イザークのせいなんだから」
目頭に力を込めて目を潤ませれば、彼は慌ててまた椅子に座り直した。
「とっとと寝て熱を下げろ！　お前言動が変だぞ！」
イザークの裏返った声を聞きながらアスランは仰向けに戻って天井を眺めて、ぬるい水枕の感触のただなかで目を閉じる。

あなたは強い子だからだいじょうぶね。

いいえ。
お母さま、私は全然強くないです。
追悼慰霊式典でもう泣かないと決めたのに、夢にいつもあなたが出てくるから、目覚める時は淋しくて涙が出ます。
強がって笑って、そして時々疲れます。

今もホントのホントはすごく泣きたくて——隣に誰かがいないと、涙が零れてしまいそうです。

Ｐａｓｔ：　Ａｃａｄｅｍｙ－６

６月第４土曜日、アプリリウス５番街ジュール邸。
「はいッ！？」
あまりの驚愕にイザークは硬直して筆持つ手を止める、梵字を刻んでいた筆から墨が和紙に大きく滲んだ。
「……あのラクス・クラインと、ですかッ！？」
「そう、あのラクス・クラインです。あなたも好きでしょう？」
ドア枠に凭れかかり、怜悧な面に微かな笑みを湛えて母エザリアは言う。
ラクス・クラインといえばＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．が誇る歌姫で議長の愛娘。
それは確かに過去幾度となく顔を合わせている、しかも彼女がデビューして以来のファンとして好感さえ抱いている相手だ。
だがそんな、今さら！！
泡を食ってイザークは立ち上がる。
今さら自分とラクス嬢とで遺伝子の適合性があるからと縁談が持ち上がるなど！

「先方も今日の午後ならと仰っていたことであるし、ご挨拶に伺ってお話をしていらっしゃい」
いつものように言いたいだけ言うと、紫色の軍服を装った母は腕時計をちらと見て「わたくしはこれから会合ですから」と言い置いて部屋を出て行った。

それは確かにラクス・クラインの、あのふわふわとした柔らかなピンク色の髪も、彼女のおっとりとした気性も、この上なく綺麗な歌声も、実に好ましいとは思う。

だが結婚して一生添い遂げるとなると話は別だ！

「あの、母上……ッ！！」

イザークは部屋を出て追い縋る、すでにらせん階段を半ばまで降りていた母は振り仰いで目を細めた。

「この機会にシーゲルにもしっかりご挨拶をしておくのですよ。幾度もお会いしているからといっても粗相のないように、イザーク」

議長閣下の名前にイザークは押し黙る。

現在の情勢下で全評議会が揺れていて、大きくクライン議長派とザラ国防委員長派とに分裂しようとしていると聞く。

その中でもザラ委員長側に立って苦労の絶えない母としては、これを機にクライン議長との橋渡し役を自分に期待しているのだろう。

……親議員の都合を無視できないではないか。

悄然としてイザークは部屋に戻り、硯に筆を置く。

脳裏をちらつく蒼い少女の面影が腰を重くする。だがやむなくイザークは母の意向を受けてクライン邸を訪れることに決めた。

＊＊＊＊＊＊

クライン邸はアプリリウス2番街、海を望む高台にある。

エントランスに通されて取次ぎを待つ間、イザークはエントランス前のガラス窓に映った自分の背広姿を横目で確認し、襟元のシルバーのネクタイを直す。

グレーのスーツに青地白ストライプのシャツ、色合わせは完璧、そして乱れはない。

ラクス嬢の前で少しでも失礼があってはならない！

改めて気を引き締めていると、頭上から涼しげな声が聞こえた。

「おいでをお待ちしていましたのよ、イザーク・ジュール」

白いワンピース姿のラクス・クラインが階段から降りてくる。
咳払いして、緊張ぎみにイザークは言葉を選ぶ。
「お久しぶりです、ラクス嬢」
ＴＶで見るよりも実物はもっと愛くるしい。
桜色のふっくらした頬といい、ふわふわとしたピンク色の雲のような髪の質感といい、実に見事だ。
イザークは生ラクス・クラインを眼前に少しばかり頬を赤らめる。
なにせデビューの時からのファン、ファンクラブの会員番号は一桁だ。
彼女は眼前に立っておっとりと笑み、「ありがとうございます」と手土産のピンクの薔薇の花束を受け取った。
「イザークは大層背が伸びたんですのね？」
「……ええ。まあ」
ディアッカにはまだ負けているが、士官学校に入って以来一気に１５ｃｍは伸びた。これも日頃の努力の賜物だ。
ラクス・クラインに導かれて中庭へと出て、大理石造りの四阿へと入る。
向かい合って座しながら、さて何を話せばいいのか、とイザークは少々怯む。
沈黙の只中をやがてメイドが訪れて、見るも甘そうなケーキを目の前に置き、紅茶をティーカップに注ぐと立ち去っていった。
甘いものは苦手だ。
しかし出されたものを食べないのは失礼に値する、とイザークは内心嘆息をつく。

やがてゆったりとラクス・クラインは口を切った。
「本当に相変わらず綺麗な銀のおぐしでいらっしゃること」
「……いえ」
「ではわたくしたちの子どもはきっとパールピンクの髪になるのでしょうね。素敵ですわ」

ラクス・クラインは楽しげに笑う。一方で突然の話にイザークはブっと紅茶を吹き出す。
「あらあら、どうかしまして？」
「いえ、その……失礼しました、思わず」
イザークはハンカチで口元を覆う。失礼をしたという羞恥心よりも、話題の突拍子のなさに理性が右往左往してどうしようもない。
ティーカップに角砂糖を3つ落とし、スプーンでからからと回しながらラクス・クラインはおっとりと訊いた。
「それで今いらっしゃる士官学校の方はいかがでして？」
まともな話題にイザークはホッとする。
「今試験の真っ最中です。来月からはＭＳ実技が始まるので宇宙に出ることになるでしょう」
「まあ、ロボットに……」
ふとラクスの表情が曇り、そして突然晴れやかになる。
「わたくしも一度乗ってみたいですわ。わたくしにも操縦できますかしら？」
これがラクス嬢でなかったなら「無茶を言うな馬鹿」とはたいているところだ、とイザークは眉間に皺を作りかける。
「いえ、あくまでもあれは兵器ですし事前に訓練が必要ですから。とにかくラクス嬢のような方には不似合いです」
「あら」
ラクスはつまらなさそうに口を尖らせた。
「でもアスラン・ザラさまはお乗りになるのでしょう？　あの方、わたくしと体格もなにもそう変わらないと思いますけれど？」
何故アスランの話がここで出てくるのだ、とイザークは目を彷徨わせる。
「アイツは……いえ彼女は特別です！」
そう、未だかつてあんな女は見たことがない。
最初は可憐で愛らしいとばかり思っていたのにと一瞬思考が現実を離れる。

常にＮｏ．１だったこの自分から「Ｎｏ．１」をかっさらった、しかもいくら自分が挑んでもアスランは例の「ふふっ」と楽しそうに笑っているのがまた腹立たしい。
アイツの悔しそうなふくれっ面を見たのは、努力の割に身長が全然伸びていないことを指摘したあの時だけだ。
思い出してイザークはふと和む。
「イザーク」
「……はい？」
イザークが我に返って表情を改めると、眼前で小首を傾けながらほんわりとラクスが笑んでいた。
「指輪のサイズはいくつになりまして？　交換するにもやはり訊いておかないとなりませんから」
「指輪」
悟ってイザークは焦って声を大にする。
「計ったことがありません！　いえ、とにかくまだそのような話は先になるかとッ！！　今日はただご挨拶に伺っただけですのでッ！！」
「あら、そうですの？」
ラクス嬢は極めて残念そうな表情を見せた。
マズい。
どこから襲撃されるのかわからないという点では対ゲリラ演習のような緊張感すら覚える。
今はとにかく話の風向きを変えねばならない！
「その……クライン議長閣下はご在宅ではないのですか？　ご挨拶申し上げておきたいのですが」
「残念ですけれど、今日父はマルキオさまの伝道所のほうに伺っていますのよ。でも大丈夫、夕刻の食事時には戻りますわ」
にこにことラクス嬢は満面の笑みをたたえる。
……俺は夕刻までここにいなければならないのか、しかもラクス嬢と２人きりで。場が持つのか？

途方に暮れて暗澹とする気持ちを戒めながら、イザークはケーキのかけらを口に運び、押し込めるように飲み下す。
途切れがちの会話の中でようやくに茶を終えた後、ラクスに連れられてイザークはその庭園を散策する。
数知れぬ花が咲き乱れる庭園、薔薇のアーチをくぐりぬければ眼前にアプリリウス海が飛び込んでくる。
頭上を小鳥がさえずりながら飛んでいく。
現実と乖離しそうなほどののどかさ、庭を吹き渡る風の清涼さ、世俗と切り離されてここはどこまでも平和だ。
途切れた会話の沈黙に、ふとラクス・クラインが口を切った。

I'm waiting for you on this quiet night,
Come back with a smile, and I'll get your kiss & arms,
Little time has passed since then,
It was a gentle memories...

ラクス・クラインの歌声はどこまでも澄んで、どこまでも涼しげで、そして切なささえ齎してくる。
彼女の歌を聞きながら、イザークは高台から眼下広がる穏やかなアプリリウス海に目を転じる。
多分ここからの風景は何年経っても変わらないだろう、だが自分を取り巻く世界は急激に変化しようとしていた。
戦争の空気は切迫感を齎し、そしてユニウスセブンの悲劇を契機に

P．L．A．N．T．の中でも世論は好戦へと傾き、全ては雪崩れ込むように戦争へと動き出していた。
そして戦況を聞くにつれ自分の中でも焦燥感が募る。
守られているだけではダメなのだ、急がねばならない。

Our first love is too vain,
I'm afraid the relation breaks at the drop of a hat,
Only the important one is put on hand and hand,
It is possible to strengthen with you...

世界は変わる、だがラクス嬢はきっとこのままでいいのだ。
美しく優しい世界を歌い上げ、綺麗で穢れることのない夢を人々に示し、そして聞く者に癒しを与える。
自分にはそぐわない人だ、とイザークは微かに嘆息をついた。
だが、俺と同じ道を選んだアイツは――今頃アスランは何をしているのだろう、あの島の中の3番街の邸の中で過ごしているのだろうか？
イザークは煌く波の向こうの島を見遣る。
士官学校の休暇がいつしかこんなにもつまらなくなったのは、多分アイツのせいだ。

I will send my song to you in somewhere,

From this place a star falls,
I'm waiting for you on this quiet night...

意を決してイザークは足を止めて、突き動かされるように呼びかける。
「ラクス嬢！」
「はい？」
歌を止めて、微笑んだピンク色の歌姫が振り返る。
言わねばならない――例え泣かれようと、詰られようと、土下座してでも！
親議員たちの都合も考えた、だがやはり自分には到底無理な役割だ。
冷徹なる母上の視線も言葉も――実に怖くはあるが――この際敢えて受けようではないか、自分はもう子どもではないのだから！
イザークは意を決して口を切る。
「縁談の件は、なかったことにしていただきたい」
きょとんとして彼女は自分を振り仰ぐ。
「その、私には……！」
胸元を握り締めてイザークは声を大にする、だがその先の言葉が出てこずに、何故か頬が赤くなる。

風が吹き抜けるしばしの間。

ふと綺麗な声が耳に届いた。
「イザークには、想う方がいらっしゃるのですね」
予想に反して、ラクス・クラインは淡々と言葉を紡いだ。
先に言われて思わず力が抜ける。
「……はい……」

「なんとなくそんな気がしておりました」
心の底まで見透かすような淡い水色の眼差しが自分を見つめる。
「想われる方がうらやましいこと」
「いえ……」
思わずイザークは目を逸らす、そして彼女はほんわりと笑んだ。
「でも言って下さってよかった。意にそぐわないお付き合いでは辛いですもの。父にはわたくしから伝えておきますわ。わたくしたちはお付き合いには向かないようです、と」
「申し訳ない……」
ほろ苦さからイザークは目を背ける。
ラクス・クラインは本当に愛らしいと思う、だがそれ以上の感情が湧かないのだ。
「いいえ。好きな方に想いが通じるとよろしいですわね」
夢見がちな少女の面差しで、ピンク色の歌姫は微笑みながら歌うように言葉を紡ぐ。
「いつかわたくしにもそのような方がおいでになって下さるとよいのですけれど」
「それは、お約束できます」
「あら？」
「あなたには、私などよりよほどよいお相手がおられます、きっと」
それは慰めではない、率直な思いだ。
「ありがとうございます、イザーク・ジュール」
微笑んで振り仰ぐラクス・クラインは、まるで穢されることなき天の雲のようだ――とイザークは思った。

＊＊＊＊＊

――6月第5金曜日、テスト週間最終日。

「おいすげーぞ！」
講義室に入ってくるなりディアッカは声を張り上げながら、教壇の前に立った。
「超スクープ！！　ラクス・クライン婚約か！？　しかもなんと相手は俺らの知ってるヤツ！」
「何？　相手は？」
ディアッカによって持ち込まれた写真週刊誌に教室中の面々が群がる。
わらわらと寄って来る同期たちの狭間、ラスティとアスランも顔を覗かせる。
「じゃーん、我らがイザーク・ジュール！！　ほれ、この写真の銀髪おかっぱってイザークじゃん？」
雑誌を掲げて、ディアッカが指差す。
どうやら超望遠カメラで激写されたらしい、豪邸のエントランスに佇むイザークとラクス・クラインがそこには写っていた。
「ッェえええええッ！？　マジでェェェッ！？」
教室は混沌の渦と化し、そのどよめきのただなかでラスティは周囲を見る。
シホは顔色を変えて動揺している、まあこれは想定の範囲内。
一方でアスランは吃驚した顔でディアッカの前に進み、まじまじと雑誌を眺めている。
「あーあ、やってらんないね。ディアッカに続いてイザークもかよ。これだからいいところのお坊ちゃまってのは！」
アンリが大声でぼやく。
確かによりによって相手はあのラクス・クライン……羨ましいやらねたましいやら、とラスティは渋い顔になる。
「でもラスティ。ここ数日ご本人は相変わらずでしたよ？　普通はもっとテンション上がりませんか？」
ニコルが袖を引っ張って耳打ちして、ラスティはひとつ唸る。
「あー…。そういやそうだよな」

それにイザークは確か片想い真っ最中だったはず。
ヤツに、すぐ乗り換えられるような器用さはない。

講義室のドアが開き、この上ない仏頂面で部屋に入ってくる銀髪の少年を皆が一斉に振り返る。
「……？　何だ貴様ら見るな」
いつもながら朝のイザークは普段以上に不機嫌だ。
「婚約おめでとう、イザーク。隠してたのね」
だがそのイザークを上回る不機嫌っぷりのアスランと、きょとんとしたイザークの表情を見比べ、予想外の事態にラスティは「お？」と声を上げる。
「は？　こんやく？　おめ…？」
「これ！」
アスランがディアッカから受け取った雑誌をイザークの前に差し出して指差す。
一瞬の沈黙。
「お……おめでたくなんぞないッ！！　どこの馬鹿だ、こんな下世話な雑誌を持ち込みやがったのはァァァッ！！？」
憤然としたイザークの手でびりびりに記事が裂かれて、教壇に頬杖をついたディアッカが嘆息をついた。
「おいおい、それ今日出たばっかなのにぃ」
腕組みのアスランに対して、びしっと指をつきつけて顔を真っ赤にしたイザークが怒鳴る。
「婚約なんてしていないッ！！　俺は命じられて訪問しただけだッ！！　誤解するなァッ！！」
蒼い眉間に皺が寄った。
「訪問しておいて誤解？　スクープされるくらいなのに？　お・め・で・と・う！」
「黙れ黙れ黙れェェェッ！！　違うと言ったら違うッ！！！」
アスランが全然らしくない、イザークも調子が狂った様子で躍起に

なっている。
「素直に喜んだらいいじゃない！！　おめでとうって言われて怒鳴るってなにッ！！？」
「だから俺の話のどこを聞いたらそういうことになるんだお前はァァッ！！！」
ぎゃあぎゃあと怒鳴り合う様子を眺めていたラスティはひとつ嘆息をついて傍らのニコルを見た。
「なあニコル。これはアレかねえ……ひょっとして痴話喧嘩？」
ニコルは判じかねている様子で首を傾げる。
「どうでしょう。万が一そうでもアスランにその自覚があるかどうか」
そしてラスティは歩み寄って、アスランの肩をぽんと叩く。
「はいはい、どうしたよアスラン。もしかして悔しいとか？」
ムッとした彼女が振り返る。
「違うわ。お祝いを言っただけなのにイザークが怒鳴るから、ちょっとムッとしただけ！」
ちょっとどころではないらしいアスランはツン、と顔を背けた。

そして本日はテスト週間最後を飾る、士官学校名物「恐怖の」ナイフ戦総合試験。
喉元にナイフが突きつけられてラスティは目を剥く。
危ねぇッ！
不意にバランスを崩して、ラスティは背中から倒れこんだ。
「そこまで！」
採点の教官の制止がかかって、ようやくにラスティはむっくりと起き上がって、落ちていた帽子を拾い上げて再び頭に乗せる。
「これが戦場なら首を掻き切られているぞ！」
「……はい」
とりあえず首に傷はついていない、と喉仏あたりを撫でながらラス

ティはようやくにほっと安堵の溜息をつく。
全くイヤサカ教官は手加減がない、殺されるかと思った。
点数がすぐさま掲示された。
「あーあ……俺7位か、結構自信あったのに」
砂まみれになった迷彩カーゴパンツと白Tシャツをはたきながら、審査を終えてリラックスムード漂う集団の中へとラスティは戻って座りこむ。
傍らのイザークがじろりと見た。
「そもそも貴様は反応が遅い、迂闊すぎる！なんだあのザマは！」
目下総合評価1位のイザークは大いばりで、ラスティは口許を曲げて手をひらひらとさせる。
「はいはいイザークさまのおっしゃる通りです。まぁ俺とりあえず10位以内だからいいや。赤服圏内だし」
「貴様のそういう甘ったれた根性が気に食わん！」
「はーいはいはい。お前はライバルのアスランだけに構ってろよ。ほらほら、ディアッカの次アスランだから」
ナイフ戦なのだから、当然体力的に女子には辛いはずなのだ。
皆の予想通り一次審査でシホは早々に脱落したが、この最終審査の場に未だにアスランは残っている。
しかも目下敏捷性と反応力での評価は一番、やっぱりアスランて凄い珍種だとラスティは呆れ半分感嘆半分に思う。
少なくとも絶対普通の女のコじゃない。
「つーか俺らアスランに負けるかもね」
総合4位の評価を得て最終審査を終えたディアッカが笑いながら腰を下ろす。
そして皆の注目を浴びながら、円陣の中央に登場したアスランは、蒼い髪を結い上げて深く被った軍帽に適当につっこみ、細腰のせいで限界までベルトを締めていた。
そしてまだまだ大きい軍規定白Tシャツにゆったりした迷彩カーゴパンツで、ズボン裾をブーツにつっこんでいる。

ついでに見ると、白Tごしに目を凝らせばわずかに透けて見えそうなスポーツブラ。
本日はブラウンか、とラスティは思う。
「スポブラか……」
「惜しいな」
ったくどいつもこいつも考えることは一緒だ。
見た目は軍服コスプレかどこかのアイドル宣伝要員かってくらいエロいんだけどなあ、とラスティは思う。
だからこそおっかない、もし俺が敵なら見惚れてる間に喉元をひと掻きされる自信がある。
そんな周囲の思いはおそらく知らず、やがてアスランは手に握っていた柄から、ぱちん、とナイフの刃をはじき出した。

甲高い金属音が音律を刻むように校庭に木霊する。
イザークは腕組みに目を細めて沈黙を守る、ラスティもまたアスランと一回りどころか二回りほども身体の大きいイヤサカ教官とのナイフ戦を見守る。
連続する教官とアスランとの熾烈な激突に、最初沸いていた歓声も失せる。
白刃がキラリと光る一瞬の交錯、教官の握っていたナイフは柄から弾け飛んだ。
もうその時点で勝敗はついたも同然だった、だがそのまま懐に滑り込んだアスランの足払いで教官の身体が宙に浮いた。
彼女は碧の眼差しを大きく見開いたまま瞬きさえしない。
もつれるように教官とアスランとが倒れこむその瞬間、アスランは左手で教官の襟元を締め上げて、その左膝と伸ばした右脚とで踏みとどまり、体勢を整えていた。
その間にも大きく振りかざされるナイフが眩く光る。

周囲の空気がふっと冷え込んだ。

……まさかアイツ本気で教官を殺るんじゃ……！？
背筋を冷たい汗が流れ、思わずラスティは身を乗り出す。
その刹那、採点していた教官たちの「そこまで！」という鋭い制止がかかった。
ナイフを振り下ろそうとしていたアスランはその動きを止め、唇を薄く開いて大きく息を吸い込む。
そしてナイフの刃をくるりと内側へと向けて収めると、アスランは
「失礼しました」とイヤサカ教官に告げて立ち上がった。
緊張が解けたようにざわりざわざわと他の生徒たちがさざめき、ディアッカは口笛を吹いた。
あそこまであの鬼教官を追い詰めるとは！
ラスティは感嘆と驚愕のただなか、戻ってきたアスランを見上げる。
……いつものアスランだ。
「もう、疲れちゃったわー」
うん、いつものアスランだ。
「ねえお前って何？　秘密組織の暗殺者？　それとも何かのスパイ？」
「やぁだ、変なこと言わないで」
結い上げた髪をばさりと解いたアスランはさも心外そうに言う。
「お腹空いた」
「はいはい、後で食べような」
「甘いケーキがいいわ、ラ・エイプリルの」
うん、いつものアスランだ。
「後で付き合うってば」
そして出てきた試験官たちの総合評価は当然のようにアスランがトップ――ナイフ戦で女子がトップなんて士官学校史上初の快挙だ。
「本当に可愛げのない！！　そんなのでは嫁の貰い手がなくなるぞ！！」
結局評価2位に下がってしまったイザークはしかめっ面でアスラン

に絡む。
そのイザークの前にかがみこんで、アスランはゆっくりと言った。
「別にいいわ。私に守ってもらいたいお婿さんを募集するから」
眺めていたラスティは唸る。
やっぱりらしくない……言葉がそもそもあてつけにしか聞こえない。
もしかしてさっきのナイフ戦の異様な気迫もそのせいか？
「強い女も悪くないけどね。ってかお前の親父さんそのうちむっきむきのマッチョ連れてくるぜ？」
軽口を叩くディアッカに対し、ふふっとアスランは悪戯めいて笑んだ。
「やぁだ、気持ち悪い。それならラスティをお婿さんに貰うわ」
不意にアスランに腕を掴まれて、やわらかい感触にラスティはきょとんとする。
「へえ、ら……はァァァァッ！？　俺ッ！！？」
刹那ラスティは咄嗟に隣に座すイザークから逃げようと中腰になる、しかし突然運動服の襟元を背後から掴まれて、大きく反動で尻もちをついた。
陰が顔面に差す。
「ああ？　貴様この俺から逃げようなんぞいい度胸じゃないか」
地を這うような声を出すイザークが自分を見下ろして、その口許を歪めていた。
「ちょ……ちょっと待てッ！！　イザーク早まるなァッ！！　変なこと言うなよアスランッ！！」
「あら、ダメ？　ラスティとなら楽しくやっていけそうと思ったのに」
アスランは冗談だかイザークへのあてつけだかのつもりなのだろう、だが状況を考えて欲しい。
今イザークはナイフを右手に持っている！
「ああもう。ほらラスティをイジメないで下さいよ、イザーク。大体あなたにはラクス・クラインがいるでしょう？」

ニコルが救いの手を差し伸べて、イザークの呪縛から逃れたラスティはニコルに抱きつく。
「お前だけだよ、理解してくれるのはァァッ！」
「よしよしラスティ、大丈夫ですからね」
イザークはしかめっ面で声を大にする。
「だから何度言えばわかるッ！　ラクス嬢との婚約どうこうはないッ！！」
なおも言っているイザークに対しディアッカが思いついたように――いや、狙い澄まされたタイミングでというべきか――軽い調子で言った。
「なあアスラン、コイツどう？　イザークお婿に」
グッジョブ、ディアッカ！！
ラスティは振り返り、手に汗を握ってこの会話の行方を見守る。
そして周囲の注目のただなかでアスランはあっさりと言った。
「うん、可愛げのない私は絶対イザークのお気に召さないと思うわ」
「……ってよ。どうよイザーク」
フォローに回らざるを得なくなったディアッカの心配り虚しく、強張った顔でイザークは絶句している。
もういっそ、この大勢の同期と教官たちの面前で告白してしまえば潔いのに、さすがに何も言えないらしい。
気の毒というか、哀れというか。
ラスティは襟元を正しながら、痛ましさに目を逸らした。

金曜の夜は寮から自宅へ帰る生徒が圧倒的に多い、ましてテスト週間がようやく終わった記念すべき週末だ。
ということで寮には人影がほとんどないので、不気味なほど夜の廊下は静か。
深夜トイレに起きた帰り、ぬっと廊下に現れた姿にラスティは怯んで飛びすさる。

で……出た！？
「あー……ラスティ」
ディアッカがぼさぼさの金髪の前髪をそのままに、廊下の角に立っていた。
「うわ、マジでびびった。どしたんだよこの時間に。ってかお前今週家に帰らなかったの？」
「今週親父がうちにいるから帰らなかったんだけど、マジ帰ればよかったと今後悔してる。……寝れねぇよ」
「なんで」
「頼むからお前のベッド貸して。俺の方好きに使っていいから」
ディアッカに拝み倒されて、わけもわからないまま寝ぼけ眼でラスティは部屋に赴いて呆然とする。
壮絶に荒れた部屋だ。何だ？　このがらくたの類は？
慎重に踏み分けて、ラスティはとりあえずディアッカのベッドに潜り込む。
ふうと意識が沈みかけた時、突然の罵声に目が覚めた。
「お前が好きだと言ってるのにどうしてわからん、この馬鹿がァァァッ！！」
寝言にしても壮絶だ、ぎりぎりという歯軋りまで聞こえてくる。
「ちっくしょぉぉぉぉッ！！」
ぬっと起き出したラスティはがらくたを踏み分けて部屋を横断し、ベッドに転がっているイザークを揺さぶる。
「おい。起きろよお坊ちゃま」
寝起き最悪なイザークがくわっと目を見開いて唸る……怖い、怖すぎる。
「何だ貴様はッ！」
「寝れないよ。お前寝言で絶叫するから」
「俺が絶叫するかッ！！　大体貴様が何でここにいるッ！！？」
よくディアッカはコイツと同室でやってきたものだ、とラスティはしみじみ思いながら傍らに腰を下ろす。

「あのさぁ。悪いことは言わないから告れ。とにかくぶっちゃけろよ」
「何をだ！」
「さっき言ってた通りに。お前が好きだと言ってるのにどうしてわからん、この馬鹿がァァッ！！　ってアスランに」
ちらと振り返れば、イザークの顔は動揺で引きつっていた。
「お……俺がそんなことを言うかッ！！」
「いや現に言ってるから。俺聞いたし、大体お前隠してたってバレバレだってば。でもぶっちゃけて言わないと超鈍感なアイツは永遠に理解しないよ？　察してくれるの期待しても絶対無駄だから。なあ、俺ら卒業したらバラバラになるかもしれないし、第一戦場出たらどうなるかわかんないよ？　言っておけばよかったって後悔するかもよ？」
ラスティは沈黙のイザークに説得を続ける。
「協力してくれってんなら俺協力するし、ニコルやディアッカも喜んで加わってくるだろうし」
「……貴様らの協力なんぞいるかッ！」
がばりと布団を頭まで引き上げて、イザークはごろりと反対側に寝返りを打った。
「んならもうちょっと素直になれって。そんでもって挑戦な。案外アスランてお前に気があるんじゃないかと俺思うよ」
ラスティはがらくたの合間をぬうようにベッドへと戻る、一方でがばりと布団をはねのけてイザークが上半身を起こした。
「な……何ッ！？　ちょっと待てッ！！　どういうことだッ！！」
「どういうことって言われてもね。まあ本人が超鈍感だから判断が難しいところだけど。なんとなーく俺はそう思う」
やがてイザークが黙り込んだタイミングを見計らって、ラスティは布団にもぐりこんだ。
静かだ。
やれやれ、これで眠れる。

＊＊＊＊＊

いまいちアスランとラスティの関係が解せない、とイザークは首を捻る。
ウマが合うらしいあの2人は普段何かにつけて一緒に行動しているが、男女に友情というものが本当に存在するのか。
そもそもアスランは「ラスティをお婿さんにもらう」と言っていたではないか。
だが一方で当のラスティは自分に「とにかく告白しろ、協力する」などとと言う。
実はあの2人はグルで、自分をハメて笑い者にしようとしているのではないかとさえ思えてくるのは睡眠不足のせいか。

案外アスランてお前に気があるんじゃないかと俺思うよ。

ラスティの言葉のせいで昨晩から眠れていない上に、思考は混乱する。
さらに思い返すなら、熱を出して倒れた時にアスランは言っていたではないか。

私がまた眠れるまでそこにいてよ。
じゃないと泣くわ、ずぅっと泣くわ。イザークのせいなんだから。

何だ？
俺に構ってほしいのか？　もしかして俺に気があるのか？
だがこれで勘違いだったら自分は一体何なのだ、しかし他でもない

俺に「そこにいて」だぞ？
と思考がぐるぐる回り続けて疲労したのはつい最近の話だ。

もし私がごくごく普通の成績だったら、イザークの視界には入ってなかったんじゃないかな。

そんなことはないと思う。
そもそも士官学校に入った最初の動機に、多少――かなり――アイツが関わっていたのは否定しがたい事実だ。
イザークは広大な敷地の周囲を廻らされた柵に沿って歩きながら、ひとつ嘆息をつく。
やがて犬の吠える声が聞こえてイザークは柵の内側に目を向けた。
そういえばここの邸には番犬がいたはず。
自分めがけてまっしぐらに駆けてくる黒い影にイザークは顔を顰めて、歩調を早める。
瀟洒な細工の鉄柵の向こう側で、黒い猟犬は側をついてきてなおも激しく吠え立てる。
また大層嫌われたものだ、と辟易したその時、遠くから声が聞こえた。

「クエスタ、戻ってらっしゃい！　クエスタったら！」
聞き慣れた柔らかい響きの声にイザークは足を止める。
柵の向こう、木立の合間から黒いエンパイアワンピースの裾をたくしあげて走ってくる少女の姿が見えた。
「いらっしゃい！　通りがかりの人に吠えちゃダメ！」
犬はその細身の身体を翻して元来た道を戻る。
そしてかがみこんで犬の頭を撫でて黙らせて、此方に目を向けるなり吃驚したようにアスランは立ち上がった。
「イザーク？」
イザークは顔を背けて、それでも視線だけはそちらに向ける。
私服のアスランは久々に見る、しかも長くて蒼いゆるゆる髪をひと

つにまとめて前に流している姿は新鮮だ。
「クエスタ！　ほら、ボール！」
アスランは綺麗なフォームで緑色のボールを投げ、黒い猟犬は弾丸のように飛び出ていった。
そして柵の前に歩み寄ってきたアスランは此方を振り仰いで、少しばかり口許を吊り上げた。
「なぁにイザーク？　クライン邸は2番街よ」
その言葉にイザークはムッとする。
「そんなことはわかってる！　別にクライン邸に行くわけじゃない、ちょっと散歩していて通りかかっただけだ！」
「そう。5番街からここまで結構な距離があると思うけれど……ウォーキングなんて渋い趣味ね」
もっとマシな言い訳を考えるんだった、とイザークは渋い顔になる。
ややあって、ふふっとアスランは笑った。
「でも丁度よかったわ。私ちょっとイザークに言い過ぎたかなって反省してたところだから」
むう、とイザークは一言唸る。

案外アスランてお前に気があるんじゃないかと俺思うよ。

いまいち確信が持てない、かといってどうやって探ればいいのかもわからない、まして迂闊に気持ちを打ち明けるなどという真似は到底できない。
女を容易く口説けるディアッカの軽さが、これほど痛切に羨ましいと思ったのは初めてだ。
その合間にも犬はボールをくわえて尻尾を振り切れんばかりに振りながら駆け戻ってくる。
かがんで犬を撫でながら、アスランは顔を上げた。
「おやつの時間だし、お茶でも飲んでいく？　でもラクス・クラインに悪いかしら」

頭から湯気が出そうになる――いけないと思いながらも、ついまた声が荒くなる。
「あァァァッ！　だからラクス嬢は関係ない、と何度言えばわかるんだッ！」
ふぅん、とアスランは小首を傾けた。
「わかったわ。じゃあ内側から開けるから正面玄関から入って。車ごと」
気づかれていたか、とイザークははるか後方の路上に停めていたエレカを横目で眺めた。

アスランは士官学校のレクルーム前で「何か飲んでいかない？」という時と何ら変わりない気軽な様子だった。
だが一般的に茶に招かれる行為は社交的な意味合いを多分に含む。ましてP・L・A・N・T・でも屈指の名門であるザラ家だ。
こんなことなら、せめて何か手土産を持ってくればよかった、とさすがにイザークは思う。
しかも自分はこんなジーンズにポロシャツなんぞとラフすぎる私服であるし、と微かに躊躇いながらイザークはエレカをエントランス前につける。
アスランとともに執事が控えていた。
「イェールさん、あちらは前連れてきてもらったイザーク。お茶にお誘いしたの」
柔和な面立ちの執事の案外鋭い眼差しが注がれるが、イザークは無表情を通す。
別にやましいことはなにもない。
「ごゆっくりどうぞ、ジュールさま」
執事はうやうやしく頭を下げ、番犬を伴って去っていった。
エントランスから居間への長い廊下の道すがら、イザークは眼前を行くアスランに問いかける。

「ザラ委員長は？」
「確か国防委員会。イザークのお母さまもでしょ？　なんだかまた最近大変みたいね」
「ああ」
Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍上層部は休暇どころではなくなっている、なにせ多方面での戦闘を強いられている状況下だ。
最近でも、月面グリマルディ戦線、地球欧州地域の覇権を巡るカサブランカ沖戦、そしてアフリカのスエズ攻防戦、Ｌ４領域新星攻防戦と実に忙しい。
「士官学校もあと半分、明後日からはＭＳ搭乗。どんどん戦争が近づいてくる感じね」
「ＭＳか……お前には負けんぞ」
座学総合点と銃撃戦でこそ競り勝ったものの、ナイフ戦・白兵戦・爆弾処理・ＭＳシミュレーション戦……と負けがたてこんでいる。これ以上負けてなるものか、とイザークは眉間に皺を作る。
アスランは笑んで振り返った。
「あら。私だって全力で頑張るわ」
――戦場で戦う、それが自分たちがともに選んだ道だ。
広々として庭を一望できる居間に通されて、イザークは多少の居心地の悪さを覚えながらソファーに腰を下ろす。
「ねえ、イザークって甘いもの苦手だったわよね」
「まあな」
「うーん。じゃあスコーンとサンドウィッチとジンジャークッキーってどう？」
「悪くない」
「じゃあそうしよう」
居間のテーブルにテーブルクロス、レースを広げることから始まってアスランはくるくると立ち回り、あっという間にお茶会の準備が整えられた。
呆れ加減にイザークは頬杖をつく。

「そんな雑用、メイドにやらせればいいだろうに」
「お父さまの方針で我が家にはいないの。時々花壇の手入れとお掃除に、昔馴染みのお手伝いさんが来てくれるくらいよ」
令嬢の割にアスランが何かと手馴れているのは、ザラ委員長の教育方針だったらしい。
とぽとぽとティーポットからティーカップに紅茶を注いで、アスランはかたんとテーブルの上に置く。
「どうぞ」
悪くないティーセットだ、とイザークは思う。
過剰な装飾を施さない白磁、それでいて華やかな乱れ花透かし文様。多分特注品だろう。
クライン家にしてもザラ家にしても、やはり趣味にそれぞれの品のよさが滲み出る。
アスランもようやくに腰を下ろして一息をつく。
湯気立つ紅茶と静寂。
2人きり、という状況にたじろぎさえおぼえながら、クッキーを噛み砕いてイザークは言葉を探す。
「ラスティは……」
「ん？」
「ここに来たことがあるのか？」
「ないわ」
あっさりと言ってアスランはティーカップを傾け、悪戯めいて笑むと「呼んでも絶対来ないと思うけれど」と付け加えた。
「私の周りでここに来た人は、イザークがはじめてよ」
はじめて――安堵と優越感に浸りながらイザークは紅茶を飲む。
「んー。せっかくだし後でチェスでもやる？」
「そんな気分じゃない」
盤上の試合に集中できるとは思えない、それにこんな状況で負けるのは絶対に嫌だ。
「乗馬は？」

「面倒くさい」
馬に乗る気分でもない。
アスランはひとつ呆れたような溜息をついた。
「イザークほどわかりやすいヤツはいない、ってディアッカは言ってたけれど。私には全然だわ」
あの馬鹿また何余計なことを、とイザークは内心悪態をつきながら紅茶を口に含む。
「……あんまり素の部分を見せてもらってないからかしら」
イザークはふっと息もろともに紅茶を呑み下す。
目を上げれば真摯な碧の眼差しが見つめていて、思わずイザークはたじろぐ。
「ばッ馬鹿を言うなッ！　あのエロ馬鹿が俺の何を知ってるっていうんだッ！！」
「仲いいじゃない、いつも一緒だし」
「いつも一緒ッ！？　大体それを言うならお前とラスティなんてッ！！」
友人というにも距離が近すぎるではないか、前なんてラスティに背負われて医務室に運ばれていったくせに！
アスランは悪戯めいて笑った。
「超親友。ラスティの言葉を借りるとそうなるかな」
「男と女に友情なんかあるか！」
「あら、私はあると思うけれど？」
視線が交錯する。
――先に目を逸らしたら負けだ、とイザークは躍起になる。
ああ全くッ！　なんで俺はこんなにいちいちドキドキしなければならんのだッ！？　睡眠不足のせいか、それともよもや心臓病かッ！？
ふとアスランは笑んで、目を伏せた。
「まぁいっか、いろんな考えの人がいるし。おかわりいかが？」
「もらう！」
紅茶のおかわりをとぽとぽと注ぎながらアスランはふふっと笑う。

「前イザークが言ってたクニオ・ヤナギーダの本何冊か読んでみたわ。民俗学って奥が深いのね」
得意分野の話題に、イザークはむ！と眉を上げる。
「それはもう凄いものだぞ。宇宙航空学を専攻してさえいなければ、俺は絶対その道に進んでいた！」
「うちにもその関係の本が何冊かあったような気がするわ。ちょっと待ってて、持ってくる」
アスランは席を立つ。
彼女の後ろ姿を見送りソファーの背凭れに身をうずめて手を組み、イザークはひとつ息をつく。
絶対今日の俺は何かおかしい。いや、今日だけではないような気がする。
一体いつからだ？

ふとイザークは掛けられていた毛布の内側でふと頭をもたげる。
夕焼けが庭を望む一面のガラス窓から差し込んでくる。
「起きた？」
本を読んでいたアスランが目を上げる、彼女も朱色に染まっていた。
確かアスランにクニオ・ヤナギーダの講釈をしていたはずなのに、いつの間に俺は眠ってしまったのだろう。
「ここの１０頁を読め！　って言っておいて、気づいたらイザーク寝てるんだもの」
「俺はどれくらい寝ていた？」
「２時間くらいかしら。ぐっすり眠れたみたいね」
迂闊だった、と慌ててイザークはソファーから起き上がる。多分昨晩ほとんど寝れなかったせいだ。
「すまん。礼を失した」
「いいえお構いなく。可愛い寝顔をじっくり拝見させていただきました」

イザークは羞恥に顔を赤らめて憮然とする。
「からかうのもほどほどにしろ」
「あら、本気でそう思ったのに」
ぱたんとアスランは本を閉じた。
「お夕ご飯食べていく？」
さすがにそこまで厚かましくはなれない、とイザークは鼻白んで「いや、帰る」と毛布を手早く畳む。
「そう」
エントランス前まで見送りについてきて、エレカの前で立ち止まるとアスランはにっこりと笑った。
「また月曜日、士官学校で」
それを眺めてイザークはふと淋しさを覚える。
……正直名残惜しい、帰りたくない、一緒にいたい。
だがそうと言葉にすることもできずに「ああ」とだけイザークは答えてしばし沈黙する。
「その……なんだ」
「何？」
間近のアスランはのけぞらんばかりに自分を振り仰ぐ。
イザークは切なさと愛しさに呆然とする。
なんでコイツはこんなに距離感がないんだ？　俺に危機感とか持たないのか？
うっかりかがみこめばキスだって出来てしまうくらいの距離なのに――そう、かがみこみさえすれば。
不意の衝動にアスランの頭に両手を掛ける、艶やかな髪が指の狭間から零れ落ちる。
前髪の分け目にのぞく白い額にキス、ふわふわとした前髪が顔に触れてシャンプーのほのかな香りがした。
この沈黙に、自分の高鳴る鼓動が聞こえていないか心配になる。
顔を離し、手を離してイザークはしばし見守る。
やがてきょとんとした顔でアスランは額に手を伸ばし、真顔で訊い

た。
「……これって何？　お茶のお礼？」
「馬鹿ッ！！　自分で考えろッ！！」
予想外の反応に瞬時沸騰したイザークは肩を怒らせてエレカに乗り込んで、エンジンをかける。
まあ本人が超鈍感だから……。
額にキス程度ではダメなのかッ！？　好きだ、お前が欲しいと絶叫しろとでもッ！？
「イザーク」
運転手席側に駆け込むようにアスランが回りこんできた。
「何だッ！！」
イザークは見上げる、アスランがエレカのドアに手を掛けて身を乗り出す。
熱を帯びて真っ赤になった頬にひんやりとした柔らかいものが触れて、柔らかい髪がさらりと頬をくすぐった。
「お返し。気をつけて帰ってね」
耳元の声にキスだと気づいたのは一瞬後。
やがてアスランは離れて一歩下がった。
無言のままイザークは、ぎこちない動作でサイドブレーキを下ろしギアチェンジをかけアクセルを踏み込んでエレカをスタートさせる。
ザラ邸内の私道を走る中、ルームミラーで小さくなっていく彼女の姿を見て、深呼吸――頭の中は混乱を極めて全身が熱い。
こ……これは、一体どう解釈すればいいのだ？
社交辞令か？　そうだ、母上だって俺の頬にキスくらいするではないか。
いやしかし意味合いが違うような気がする、そもそも母上以外にキスされるなど初めてのことだ。
好意か？　やっぱり俺に気があるのか？　だとしたらやはり「好き

だ」と言うべきだったか？
だが「お返し」って何だ、アイツは素であいうことをするのか？
「あァァァッ！！」
イザークは煮え切らなさと切なさと疑念と歓喜と期待との入り乱れた思考に苛々して、前髪をくしゃりとかきあげて絶叫する。
「――ちっくしょォォォッ！！」
その声は公道の対向車線を行く車の音にかき消される。
確実なのはひとつ――今夜も俺は絶対眠れない、アイツのせいだッ！！

10：P.L.A.N.T.あるいはオーブ近海にて（前書き）

We used to be so close to each other,
Now my words don't reach you.

10 ‥ P.L.A.N.T.あるいはオーブ近海にて

P.L.A.N.T.本国の基幹部を司るシステム、ラグナロクマザー。
P.L.A.N.T.コロニー内の人工太陽運行、温度調整や隔壁ガラス自動修復を行う自律機関であり、各コロニー間の航行を統括するセンターであり、そして日夜増大する情報の処理を一手に引き受けているスーパーコンピュータでもある。
アプリリウスワン最高評議会ビルにオペレーションセンターが置かれ、厳重なる管理下、完璧を期して敷かれた防御システムに守られている。

――だがどのような機関にも必ず穴は存在する。

私の＜抜け道＞を何者かが通ったらしい、とパネル前でシーゲル・クラインは表情を強ばらせる。
凍結されて久しいラグナロクアポクリファ最深部に入れるのは、今となっては自分とあとひとりだけだ。
だが創設者ゆえにマスターキーを保持する彼は、こんな踏み荒らすような真似はしない。
手当たり次第に＜ドアを開けて＞いる、一体誰が……？
追跡の最中でデータを次々とモニター上に展開し、やがて見えた禁断の火の刻印にシーゲルは手を止めた。
――何故、これがここにある？
焦れるように情報を手繰り寄せていくなかで、不吉な予感は的中した。

‥‥the subsequent progress of the Neutron Jammer Canceller P

ｒｏｊｅｃｔ　ｐｕｔ　ｉｎｔｏ　ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ．．．

ニュートロンジャマーキャンセラー！

そして侵入者はこれを覗き見した、という事実に背筋を冷たい汗が伝う。

だがそれ以上に行われている研究の重大さに目眩がした、すでに実用化手前まで来ている。

「あの男はまたも……恐ろしいことを！！」

Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．は、多大なる犠牲の上に閉じたはずの＜扉＞をこじ開けようとしている――罪、これは紛れなく罪だ。

だがそう詰ったところで、彼は必要悪と一笑に付すに違いない。

長年の戦友の哄笑が聞こえるようで、シーゲルは黒革の椅子の背凭れに身をうずめる。

おもむろに彼は傍らのパネルを叩き、通信回線を開いた。

『はい』

秘書官が応じる。

「クラインだ。オーソン・ホワイトを」

『少々お待ち下さいませ』

ややあって、議場で見慣れた神経質な面立ちの男の顔が映し出された。

「Ｎジャマーキャンセラーの研究は即時凍結だよ、ホワイト！」

一体どこから漏れたのだ、といわんばかりにオーソン・ホワイトは瞬時表情を凍らせた。

『凍結……でありますか。しかしザラ国防委員長からは急げと矢のごとき催促で、すでに搭載機の開発も進んでいると聞いています』

不快をあらわすようにシーゲルは指先でデスクをとんとんと叩く。

「パトリックには私から伝える。ともかく議長命令ということで理解してもらえんかね」

『しかし議長……委員長は……』

指揮系統を乱されたとパトリックは怒るだろう、だが譲れない一線

というものが自分にもある。
「とにかく凍結だ！」
『……了解しました』
同じ内容をアマルフィにも伝えた後、秘書官が『ザラ国防委員長がおいでになりました』と回線越しに告げた。
「会談中であったろうに早速におでましか。通したまえ、私も彼に用がある！」
ドアが開いて、上背の高い精悍な身体を紫色の軍服に包んだ男が入室してきた。
「言わずとも用件はご存知であろうな、シーゲル！」
パトリックは歩み寄りながら声を大にし、迎えうつようにシーゲルは椅子から立ち上がる。
そして机越しの対峙でパトリックは低く押し殺した声で言った。
「私の管轄に余計な手出しは困る」
「軍の厳格な命令系統は心得ておるがね、あの情報を見ては見過ごすわけにはいかなかった。――何故また核を持ち出そうとする？」
だがパトリックの返答は極めて簡単だった。
「切れるカードは当然多いほうが良い、それ以外の理由などない」
「だからとNジャマーキャンセラーを配備して、今度は我々が核を撃つのかね、地球に！！」
……ああ、それは思い至らなかった、とパトリックは口許を吊り上げた。
「ともかくその程度の発想であるならば邪魔をしないでもらいたい。軍のことについてあなたは明るくないのだから」
今更にシーゲルは苦々しく思う――あなたは1人清い顔をしておればそれでよいのだ、何も知らず何も見ずを通すがいい、とかつて自分に言ったのはこの男。
そして自分は光の道を歩み、パトリックは陰で汚れ役を一手に引き受けてきた。
「それは君に全てを任せてきた。だからと専横を見過ごすわけには

いかん」
パトリックは鼻で笑う。
「専横？　かように言われるいわれはないな、私はただP・L・A・N・T・の未来の為だけに尽くしてきただけであるのに。その結果付随するものがあろうとも、それは私の関知するところではない。そもそも我々は総意で動いているのだと忘れたか、シーゲル」
シーゲルは眼前の灰色の男を凝視する。
「総意などと便利な言葉で言い逃れができると思うな。この世界には決して許されざる罪の領域というものが厳然としてある。そして君も私も迅うにそこに踏み込んでいる！」
民を導く者に甘受せねばならない罰があるとするならば、それは目を閉じ耳を塞いできたこの自分とパトリックこそが背負うべきものだ。
「罪どうこうというあなたお得意の教義に興味はない。あの詐欺師（マルキオ）の甘言にほだされるのをやめて、いい加減目を覚ましてはどうか」
「君とて、あの血のバレンタイン以来人が変わったように戦争戦争と――憎んだとて、死した者は蘇りはせんのだぞ！！」
底冷えのする鋭い眼差しが睨め付けて、シーゲルはその後の言葉を飲み込む。
冷徹の仮面が外れて、その下の昏い激情が垣間見える――この男の同胞解放と国家独立にかける情熱のすきまを満たすのは、むきだしのどす黒い憎悪だ。
隠しきれない苦悶の滲む声が低く言葉を紡ぐ。
「あなたに何がわかると？　……我々の望んだ未来は永遠に来ない、この絶望がわかるか」
「パトリック……」
シーゲルは彼の妻と旧知の仲だった、彼女が地球にいてレノア・ジブリール（ジブリール）であった頃から。
たおやかで慈愛深い女性だった――その名、白百合のガブリエルそのままに。

そしてパトリックが不器用なりに愛し慈しんでいたことも、若き日からの付き合いであるがゆえに知っている。
かけがえのない伴侶を奪われた怨嗟の念は、ただひたすらに心を蝕む。
「妻も腹の子も一瞬で虚空の塵と消えた。……二度とこの手には戻らぬ」
言葉は時に銃にも勝る――だが過去の呪縛に囚われて闇にまどう魂に、言葉は通らない。
無力さに沈黙せざるを得なくなったシーゲルに対し、やがていつもの鋭角な表情でパトリックは言い放つ。
「私はNジャマーキャンセラーの開発を続行させる、搭載機の実用化も同様に！」
もう用は済んだとばかりに彼は背中を向け、我に立ち戻ったシーゲルはそれに向かって声を張り上げる。
「わかった、もはや止めはせん、止められはせんだろうからな！――だが覚悟したまえ、いずれ我々の行き着く先は永遠の煉獄に他ならんぞ！」
微かにパトリックは振り返り、宗教的観念の一切を放棄した現実主義者の彼にしては珍しく応じた。
「ならばそれも一興。どうせ地獄への道のりならば、より多くのものを巻き込んで参ろうではないか」
彼は救いをすら望まない。
「――恐ろしいことを言う！」
嘲笑を横顔にたたえて、Z．A．F．T．軍のトップは執務室を後にした。
シーゲルは再び椅子に身を沈みこませ、目元を押さえる。
愛する者を永遠に奪われた絶望は、目を曇らせ憎悪となり連鎖する。
――神よ、断ち切れぬままに繰り返すのは我々ヒトの業なのでしょうか……？

＊＊＊＊＊

独立不羈を謳う国家・オーブ首長連合国。
P．L．A．N．T．への貴重な食糧供給ルートのひとつであり、コロニー建造に一役買ったオーブに対してはP．L．A．N．T．も一目置き、影ながらの協力関係ゆえにニュートロンジャマーの投下を＜控えた＞。
だがその優位性に胡座をかいたオーブによる再三の裏切りに外交交渉は打ち切られ、本国はついにオーブを敵性国家と認定した。
カーペンタリア・ラグナロクセカンドに送ったデータが引き金となったらしい、と聞いてアスランの気分は発令所の暗闇とあいまってさらに暗澹とする。
わかってはいたが――自分たちの作戦行動がさらなる戦いを呼ぶ。
『オペレーション・クラックダウンの為にこちらから艦隊を派遣した。スピットブレイクの前哨戦になろう』
対オーブの作戦名を口にしたカーペンタリア基地司令は、「もっとも割ける戦力はそう多くはないがな」とモニター向こうで肩をすくめた。
『だが数での不利は開戦当初から承知の上だ。然るに君たちの活躍に期待する』
「はッ」
コンソール前でアスランは敬礼する。
次なる任務はオペレーション・クラックダウン、どうもディアッカの望むように休暇とはいかないようだ。
「……しかし、司令」
アスランは敬礼を解いたあとでゆるゆると口を切った。
『何かね』
一兵卒相手にも気安く応じてくれるのは、親の七光りゆえだろう―

―タカオ・シュナイバー司令は古くからの父の側近で、いわゆる“ザラ派”の有力者だとも聞く。
立場のあまりの差異に気後れは否めないが、何より確実な情報を与えてくれる相手ではある。
「オーブは、コーディネイターの多く住む国です。彼らの蒙る不利益を考えると……」
アスランの懸念に、司令はしばし黙考していたが、やがて「他言は無用だ」と前置きして言葉を続けた。
『つまるところ誘い水だ。オーブも昨今政情不安定で内側に火種を抱えている、本国とてこれ以上戦線を拡大したいと本気で考えているわけではない』
「と仰いますと？」
『本国は強硬姿勢で臨まなければ、これ以上条件のいいエモノを出してこないと踏んだのだろう。だが万が一戦いともなればマスドライバーを潰すよいチャンスではある。戦いに際して在オーブの同胞をP．L．A．N．T．に引き上げるのも、委員長の提唱する“種の棲み分け”という観点ではやぶさかでない話だ』
どちらに転んでも――と司令は言うが、垣間見えた政治のキナ臭さにアスランは眉間を潜める。
所詮戦争は政治の一側面、だが政治家たちの胸算用で使われて消費される駒はたまったものではない。
『ともかく君たちは艦隊の到着まで現状待機、その間オーブから離脱する連合艦船があればその処理を任せる』
「了解しました」
しかしいまいち腑に落ちないのはオーブの態度だ。
この期に及んでなおあの国は連合との軍事協定調印を拒否しているという。
中立国としての体面を維持したいだけなのか、P．L．A．N．T．との交渉を諦めていないのか、それともこの曖昧な態度すら欺瞞なのか――もっともこれは兵士でしかない自分のあずかり知るところ

ではない話ではあるけれども。

＊＊＊＊＊

オペレーション・スピットブレイクが発動すれば、もはや交渉の余地はない。

門戸が閉ざされる前に、なんとか地球とP．L．A．N．T．双方の矛先をおさめることはできないか――とシーゲルは苦慮している。オルバーニ地球連合事務総長は「地球連合安全保障理事会の場にP．L．A．N．T．最高評議会議長を引っ張り出したい」と強く望んでいる。

もちろん自分としても、直にあの理事会の場で演説をしあるいは列強各国首脳と話し合うことができないものかと考えている。

だが最高評議会の猛反対を圧して地球に降り立つことは躊躇われた。

そして何よりあのラグナロクアポクリファへの侵入が誰の手で行われたものか、秘密裡に調べて網を張らねばならない――知らなかったとはいえ、Nジャマーキャンセラーの情報を＜覗き見＞されてしまったのは、アポクリファに抜け道を作った自分の落ち度だ。

そしてNジャマーキャンセラーが仮に地球に漏れるようなことになれば、多大なる血で贖ってようやくに得たほぼ対等のパワーバランスは、再び一転してしまう。

「その使節はラクスに任せればよろしいのです」

サンルームガラス越しの日差しのただなか、盲目の導師は穏やかに笑んでティーカップに口をつけた。

「ラクスのS．E．E．D．は他者を魅了する――きっと人々は彼女の言葉に耳を傾けるでしょう」

そのラクスはマルキオの足元に座り込んで、無心に球状ロボと戯れている。

偉大なる宗教家マルキオ導師。
パトリックは詐欺師などと吐き捨てたが、優越主義に凝り固まった彼はその教えを理解しようとしないだけなのだ。
ナチュラルやコーディネイターという差異に依らずヒトは進化できる、そのＳｕｐｅｒｉｏｒ　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎａｒｙ　Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｄｉｓｔｅｎｄ－ｆａｃｔｏｒによって。
そしてＳ．Ｅ．Ｅ．Ｄ．の導きがあれば、自分たちは種の壁を超えてわかりあうことができる――そのはずなのだ。
だがそう唱えたところで、周囲は「議長閣下はまた面妖な新興宗教に毒されたもの」と見る。
それがシーゲルにはやるせない。
現状、我々は同胞ですら互いを理解しあうことができない、まして種を超えて理解しあうなど本当にできるのだろうか？
シーゲルは湧いた疑念を否定しきれずに、沈鬱に口をつぐむ。
それを父親の躊躇あるいは逡巡と察したのか、顔を上げた娘がそっと言い添えた。
「お父さま、わたくしが地球に降りることで人々の気持ちを静めることができるのでしたら、喜んで」
ラクスはＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．に属していない。
軍人でも政治家でもない民間人が講和の使者として立つことに、おそらくまた評議会は紛糾するだろう。
だが民間人であればこそ、神経を尖らせている連合を刺激せずに済むはずなのだ。
またスカンジナビア王家が出自ゆえに、クラインという名は地上にもひどく通りがよい。そして連合強硬派とて中立国であるスカンジナビア王国を敢えて敵に回してまで、民間人の小娘一人に労力を割こうとはすまい。
――そしてもちろん政治家としての計算もある。
Ｎジャマーキャンセラーの存在を逆手にとって、深刻なエネルギー不足にあえぐ地球に対し、提供を講和の条件にするのもひとつの手

ではあるまいか？
ややあってシーゲルは決断した。
「すまん、ラクス」
不肖の親と自認してはいるが、我が娘を矢面に立たせざるを得ないことがひどく心苦しい。
「いいえ。……黙っていては伝えられない、声高に叫ばなければ誰の耳にも届かない。ですからわたくしは歌うのです。それと同じことですわ」
わたくしにはそれしかできませんもの、と目を伏せた娘は少し悲しそうに言った。

＊＊＊＊＊

久々に彼の名を思い出す。
ユーレン・ヒビキ。
全くナチュラルにしておくのがもったいないほどに頭が良く、そして愚直で狂気を感じさせるほどに一途な男だった。

もっともっと高みへ――より優れた、最高のコーディネイターを――

その思いは生命論理をも踏み越えて、やがて彼はその研究ゆえに志半ばにして殺された。
報せを受け取った時、惜しい男を亡くしたという痛恨の思いとともに、ようやく消えてくれたと安堵したのもまた事実。
しどけなく黒革の椅子に座したタッド・エルスマンはカプセルを指先で弄びながらひとつ溜息をつく。
そしてあの男が影で手を染めていた研究の噂は、遠くフェブラリウ

スにまですら聞こえてきていた。
ヒビキの死とともにその研究も闇に葬られた、はずだった。
「……全く、今さらお前の負の財産を請け負う方はたまらんよ」
不条理さに愚痴も零したくなる、自分はユーレン・ヒビキの情熱など理解したくもないというのに。
だがこれも何かの因果なのだろうか、指向性がひどく近似した我々の？
その時ドアが叩かれた。
「ギルバート・デュランダルです」
「入りたまえ」
ドアがシュンと開いて、長い黒髪を一まとめにした白衣の男が入室してきた。
「お呼びとききましたが、エルスマン博士」
「ああ。ぜひとも君に見せたくてね、ギルバート」
テーブルの上にばらばらと広げた青と白とのカプセルをすくいあげてギルバートにそれを示し、タッドはウィンクした。
「君の調合通りに作ってみて驚いたよ。これもG．A．R．M．R&

デュランダルはおもむろに口を切った。
「私に関しては罷免も処罰も結構です、釈明はしません」
彼は直立不動のまま、涼しげな眼差しで見返して淡々と言う。
「しかしクローン技術の結果生まれた子どもたちは今後どうなります？　このまま老化し死んでいくのをただ見守れと？」
ヒトとしての境界線を踏み越えてしまった人間にとって、唯一気がかりなのはそのデータ結果だ。
貴重な青年時代を擲ってまで没頭した挙げ句に、結果を見ることなく途中で奪われるのは筆舌に耐えがたい苦痛だろう――とその一点でタッドは深く同情する。
「それもまた研究のひとつの結果だ、……と言いたいところだがね、私も見てみたくはあるよ」
ひとつ深い息をついて、タッドは指先でカプセルを弄んだ。
「だから――取引といこうじゃないか」
「取引？」
「君が持っているG・A・R・M・　R&Dの情報をこちらに寄越したまえ。子どもたちはこちらで安全に管理させてもらおう」
黒い眼差しがちらりと光を湛えて、タッドはそれを眺める。
「お望みはキラ・ヒビキのデータですか？」
そんな名前だったろうか、――無理な調整の挙句に、遺伝子地図を大幅に改変した結果できあがった“出来損ないの完成体”は。
「はん、別にヒビキの遺志を汲んでやろうとは思わんさ。そんなものは君が好きにやりたまえ。私が欲しいのは第2世代受精卵培養の研究データだ。全く第3世代の出生率をいかに上昇させるかに悩まされて夜も眠れんよ」
少し間があって、ようやくにデュランダルは頷いた。
「わかりました。仰せの通りに、……エルスマン博士」
彼は胸元を探り、鍵を投げた。
「私のデスクの物理キーです」

交渉成立。
「ならば可及的速やかにP．L．A．N．T．を出たまえ、ギルバート。じき情報局が君を捕らえにくる」
一顧だにせずギルバートは退室し、見送ったタッド・エルスマンは肩をすくめて、黒椅子をくるりと回して背を向けた。
結局我々のようななりわいのものに、倫理や道徳など関わりない。

アンタみたいな非人間に説教される筋合いはないッ！
俺は俺の好きなようにするッ！

幾度となく自分に反発して、挙句Z．A．F．T．軍に入ってます遠ざかってしまった息子――それはそれでいい、アイツはきっとこの自分のようにはならないだろう。

＊＊＊＊＊

Z．A．F．T．は自治権を勝ち取る為の外交の延長線上としての条件闘争を行ってきた。
だがそもそも、その考えこそがぬるかったと言わざるを得ない。
結果この１３ヶ月にも及ぶ長期戦に陥ってしまった。
にも関わらずこの期に及んでシーゲルは講和条約をなどと声高に叫ぶ――
だが五分五分の現状で地球側がP．L．A．N．T．の自治権を認めようはずがない、奴らはこのP．L．A．N．T．の資源に依存し続けてきたものを。
既得権益を自ら放棄する統治者がいったいどこの世界にいようか？
もっと優位に事を進めねば話にもならぬ、にも関わらず現実に即しないあの男はそれをすら理解しない。

パトリック・ザラは、黒革の椅子にどかんと身を投げる。
照明の落ちた執務室に一際モニターだけが明るく浮かび上がり、無数のデータを次々とスクロールしていく。
……頭痛が止まない、この忌々しい痛みは一体いつからだ？
パトリックは目頭を押さえる。
思えば彼女を失ってからずっとのような気がする。

パトリック。あなたの夢はなんでしょう？

「我々の願いは平和に、穏やかに、幸せに暮らしたい、ただそれだけだった」
そしてその為にも、このコーディネイターの母なるP．L．A．N．T．を築く礎となるのは自分の義務だ、と信じてきた。
汚されることなき我らの約束の楽園――追われることなき安住の大地。
「……幸せに、愛する者とともに……だがお前はもういない」
もはや浅いまどろみのはざまにも、彼女は姿を現さない。
私の夢、願いを打ち砕いたのは何者だ？　この私を抱く白い腕を奪い去ったのは？
ありうべからざる不意の虚無感、我ながら愚かしいと思わざるを得ないこの感傷に、微かにパトリックは口許を歪める。

行き着く先は永遠の煉獄にほかならんぞ！

死後など知らぬ。
だが地獄があるとするならば、それはあの世ではなくこの世にある

べきものだ――
闇に沈む執務室に、入り口から光が差し込んだ。
「これでは目が悪くなってしまいます、照明をつけなくては」
その涼しげに響く女の声にパトリックは視線を向ける。
細身の身体を紫の軍服で包んだ銀髪の女が立っていた。
「いつも眉間に皺ばかり寄せて、ますます険しいお顔になってしまって」
「険しくもなる、頭痛の種が増える一方だ」
歩み寄ってきたエザリア・ジュールは黒革の椅子の手すりに腰掛け、労るようにパトリックの頭を抱きこむ。
「火星との貿易協定の附則文面はあれでよかったのですか」
「よい。批准はお前に任せる」
「G．E．N．E．S．I．S．の打ち上げは――」
「好きにしろ」
ひとつエザリアはため息をついた。
「……シーゲルが娘を地球に降ろすと言っています、ワシントンD．C．に」
あの男はいったいどこまで私に楯突こうというのか、P．L．A．N．T．最高評議会議長の地位に据えてやった他でもないこの私に！
沸騰しそうなほどの憤怒を圧して、パトリックは低く言う。
「降りたいなら降りさせてやれ。ただしZ．A．F．T．からの随行は一切認めん」
それはあくまでシーゲル・クライン個人の使節だ、あとは好きにすればよい。
――さあ、どうしてくれようか？
「わかりました」
頭をかき抱く細い腕がするりと抜けて、ふと寒さが頬に兆した。
「エザリア」
「はい」
「お前は、私を裏切るな」

怜悧な眼差しでしばしこちらを見つめたあと、やがて女は朱色の唇をつり上げて艶然と笑った。
「いらぬ心配を。どこまでもおともいたしますとも、パトリック」
誘うように薄く開いた唇に唇を重ねる。
色が違う、匂いが違う、肌ざわりが違う。
それでも私は失われたものの代わりを求めた。それの何が悪い？

＊＊＊＊＊

「オペレーション・クラックダウンに次世代ＭＳのテスト機が何体か投入されるらしい」
「へえ？　そりゃ楽しみだな」
潜水艦内の狭い食堂では、技術チームの雑談も自然と耳に入る。
「ユーリ教授も大変ね。毎月新型をロールアウトするってちょっとハードスケジュールだわ」
アスランはパンをちぎって頬張る。
「父さんは別に兵器が好きなわけじゃないんです。ただ、巨大構造物と人型ロボットは男の夢！　って人だから。一度始めたら止まらないというか、他に目がいかなくて」
向かいに座っているニコルは頬杖をついて、皿の上に残ったピーマンをフォークでつつき回す。
「きっとまたラボに缶詰めで、邸に母さんがひとりぼっちなんです。心配だな……」
アスランはふと思い出す――
マイウス工科カレッジのアマルフィ研究室は熱血スパルタ指導で鳴らしたものだ。
ユーリ・アマルフィ教授が熱心に研究指導に励んでいる中を、教えを乞う側の研究生が早々に切り上げるというわけにもいかず、結局

学内コンペ前には数週間教授・研究生とも泊まりこみの缶詰めというのが日常茶飯事だった。
当時は他の研究室メンバー同様多少辟易することもあったが、今となっては振り返ると懐かしい過去ではある。
「――P．L．A．N．T．の為に、ってMS開発に賭ける気持ちはわからないでもないんですけど。でもやっぱりあれは戦争の兵器ですから」
「そうね」
兵士にとってMSは消耗品あるいは＜剣＞でしかない。
だがMS開発に一度は携わった人間として、戦場で無残に破壊されるMSの不遇な扱いに忸怩たる思いを禁じ得ないのもまた事実だ。
やはりMSは本来の宇宙開発作業用途に使われるべきなのだ、例えばあのD．S．S．D．の深宇宙探査計画のような。
煤けた作業つなぎの整備士が食堂に顔をのぞかせた。
「おい、本国から降下したての新型MSがうちに来るみたいだぞ」
それを耳にするなり、慌ただしくアスランはパンを飲み下すと「格納庫に行ってくるわ」と席を立った。

＊＊＊＊＊

オペレーション・クラックダウンを前に、北回帰線近辺で作戦行動をしていたZ．A．F．T．各隊が続々とオーブ近海に集結をはじめていた。
だが肝心のカーペンタリア艦隊の到着が遅れている。
「てか割とのんびりしてねぇ？　もうオーブに宣戦布告しちゃったんだろ？　大丈夫なわけ？」
発令所に場所を占めて、ディアッカはコンソール前のオペレーターに絡む。

「そりゃあ最後通牒突きつけたばっかりで即攻撃なんてのはダメだろ、戦時国際法的に。とりあえずオーブに時間をやらなきゃ」
「へえ、ただの慣習法なのに紳士的なこって」
まだまだ上には体裁を気にする余裕があるらしい――とディアッカはしどけなく椅子の背もたれに身を任せる。
最もそれがかなぐり捨てられるような状況になってほしい、とも思わないが。
その時隣の管制オペレーターがインカム片手にモンロー艦長を振り返った。
着艦許可を求めているＭＳが一機あるという。
「新型です。搭乗機体信号、所属及び認識番号を確認しました」
「入れてやれ、格納庫にはまだスペースがあったろう」
さしたる興味もなく艦長は許可を出すが、新型という言葉にディアッカは反応する。
娯楽の少ない艦内のことである、そして日夜自分の精神力を摩耗させるイザークはお昼寝中、ときたら見に行かない手はない。
技術チームが入り乱れて慌ただしい格納庫、着艦したての黒いＭＳを眼前にディアッカは振り仰ぐ。
新型という割にはさほど目新しい装備もない。ボディはゲイツを転用したのだろうか？
眺めている最中、脱いだヘルメットを小脇に抱えて、自分と同年代くらいの赤服の男がラダーで降りてくるのが視界に入った。
あの茶髪といい生意気げな灰色の目といい可愛げのない顔つきといい、どこかで見覚えのある――
「ってコートニーかよ！」
あからさまにディアッカは顔を顰める。
そういえば統合設計局のテストパイロットになったと聞いていたが、まさかその機体で地球に降りてくるとは。

コートニー・ヒエロニムス、士官学校での同期。
ディアッカ自身は彼に好悪の情をもっていないが、恋人を寝取られたという恨みは先方の骨髄に染みているらしい。何かと敵視されがちなので、ある意味イザークよりタチが悪い。
その顰めっ面を見て取ったのか、コートニーはこの上なく不穏な笑みを浮かべてラダーから降りた。
「よお、色男生きてたか。お前てっきり大気圏で燃え尽きたとばっかり思ってたわ」
全くイヤなことを思い出させる。
今考えても、時速２６６６６ｋｍの世界は壮絶だった。マッハ２０越えのスピードたるや死んでも二度と体験したくない。
生きて地球に降り立てたのは僥倖の一言に尽きるが、ディアッカはそれを口にはしない。
「はン、お前と違ってヤワじゃないんでね」
「ゴキブリなみにしぶといヤツ！」
おお、あんなぬめぬめした宇宙害虫に俺をなぞらえるとはいい根性だ。
また殴り合いをしたいのか、コイツは――とディアッカがコキコキと首を鳴らしたその時、「久しぶりじゃない、コートニー。元気そうね」とアスランが顔を出した。
新型機の到着に元来のＭＳオタクの好奇心が疼いたのだろう、見物に来たといったところか。
一転嬉しそうにコートニーは笑顔を見せた。
「おかげさまで。アーモリーにも噂は届いてるよ、ザラ隊任務連続達成らしいじゃん？」
「メンバーに恵まれてるおかげね。で、あれは？」
うずうずとして彼女がＭＳを見上げて、ディアッカもその視線の先を追う。
コートニーの乗機の外観はＧＡＴ－Ｘシリーズによく似ている、頭部のＶ字状のアンテナといいツインアイといい特徴的だ。

「ヴェルヌ局が開発したっていうＸ０００Ａ、データ収集用だからこのオペレーションが終わったらバラされるんだけどね」
「もったいない話だわ」
ひどく残念そうに彼女は言う。
「中見せてもらえない？」
「残念。ちょっとばかし訳ありだから見せらんないんだよね」
そしてコートニーは「人目もあるし立ち話もアレだから。レクルーム行こう」と言うと、パイロット控え室へと足を向けた。
癪ではあるが含みのある言葉に少々気を惹かれて、ディアッカはアスランとともに格納庫を後にする。

＊＊＊＊＊

潮風が寝癖のついた髪を嬲って、耳元を通り過ぎていく。
イザークは、補給を受けるために浮上したクストーの上部甲板に座り込んで、静かな海を眺めていた。
透明度の高い海の深い青が陽光に煌く。
知らないはずなのに懐かしいほどの地球の青、地球の海。
こんな戦いの最中でさえなければもっと感動できたろうか――例えば空の色の移り変わりに、あるいは流れる雲の変幻自在さに。
思索のさなかにも補給艦が仕事を終えて離れていく、生まれたさざなみがクストーに打ちつけて水飛沫が上がる。
……自分たちコーディネイターは、さらに上へさらに遠くへ遙か外宇宙へ――という情熱によって造られたナチュラルの夢の結実、ヒトの叡知の結晶。
にも関わらず生まれ落ちるや否や迫害され、やがて地球を追われるように宇宙へと上がらざるをえなくなった。
まるで鬼子のごとき扱いではないか！　という義憤は、ナチュラル

への憎悪とコーディネイターの優越性のことさらな強調とを増幅させる。
あの古い大地は旧人類（ナチュラル）にくれてやればよいのだ、自分たちにはP・L・A・N・T・があるのだから、と自分は常々主張してきた。
だがこの星に降りて大地に足をつけてからこの方、否定しがたい疑念はつきまとう。
結局我々ヒトは、地球の重力という枷からは――遺伝子に刻み込まれている母なるものへの胎内回帰願望からは、逃れられないのではなかろうか？

ともすれば陥りがちな思考の迷い道からイザークを現実に引き戻したのは、ニコルの声と駆ける足音だった。
「イザーク、見てください！　イルカの群れですよ！」
興奮で上気した顔のニコルが身を乗り出して、うわぁ、と声を上げる。
「僕、生イルカ見るの初めてなんです！」
イザークは目を向ける、青い海の波のはざまに滑らかな灰色の肌もつ生き物の群れが見えた。
確かにP・L・A・N・T・にはイルカはいない、自分も実物は初めてだ。
「すごい、跳ねた！　ほら赤ちゃん連れもいますよ！　――うわぁ、かわいいなぁ！！」
「騒ぐな、ガキか」と呆れて、イザークはニコルがまだ15歳であることを思い出す。
すべてに対してニコルは素直に受け止めて無心に感動する、その芸術家に相応しい豊かな感性はある意味羨ましくもある。
群れを名残惜しそうに見送って、ニコルが振り返った。
「イザーク」
「何だ」
「……僕のこと、恨んでます？」

窺うようにのぞきこんで、やがてニコルが傍らに座り込んだ。
「なんで貴様を恨んだりなんだりする必要があるんだ」
海と空との境目を眺める、ニコルも同じ方向を見遣って躊躇いがちに言った。
「ちょっと後悔してるんです。僕のせいでアスランと距離が出来て、その間にアスランはラスティと……」
「今さらな話だ」
イザークは立てた膝に頬杖をつく。
それはラスティもニコルも邪魔くさいヤツだとは思ったことも多々あった、だがそれと彼女とのすれ違いとは別次元の話だ。
それに自分はラスティが憎かったわけではない。
2人の婚約だとて、親議員たちの思惑が多分に影響しただけの話だ——とはおそらく今だから言えることだろう。
頭で理解していても御しがたい激情の波には、我ながら時折ほとほと疲れさせられる。
「僕はアスランが心配なんです。いつも1人で背負い込んじゃうから、いつか壊れちゃうんじゃないかなって。よっぽどしっかりした人が一緒にいないと、きっと……」
ニコルの心配は杞憂に思えた。
「余計な気遣いだろう。アイツはタフだ」
「どうでしょうね」
それならいいんですけど、と呟くニコルの言葉は、頭上を通過するMS大型輸送機（ヴァルファウ）の轟音に紛れて、ひどくか細く聞こえた。

11：ワシントンD．C．あるいはオーブ近海にて（前書き）

the words.

11：ワシントンD．C．あるいはオーブ近海にて

C．E．71．3．27．――

オーブ領海線上において、Z．A．F．T．とオーブ国軍とで戦いの火蓋が切って落とされた。

両陣営の対峙する海上にひとつ、ふたつと光が生まれ、やがて光芒の渦となる。

実弾による中距離砲と迎撃ミサイル、あるいは高速で接近する大型の対艦ミサイルが真っ向からぶつかり合い、起爆し粉砕されて派手な花火が上がった。

かいくぐった弾もＣＩＷＳが稼働して片っ端から打ち落としていき、その震動が艦体を揺らし荒波を巻き起こす。

その艦隊砲撃戦の最中、Z．A．F．T．ＭＳ部隊は全機待機のまま時を待つ――旗艦空母パンゲア甲板上、ザラ隊もまたその中にいた。

『待機は好かん！』

とどうやらバナディーヤでの“待機待機また待機”を根にもっているらしいイザークはご機嫌斜めの様子だ。

ディアッカは軽く応じる。

「ギリギリまで出さないつもりなんしょ、そりゃ。だってオーブにＮジャマーはないんだし、精密誘導兵器とか使われたらめっちゃ厄介じゃん」

少なくとも機動力に劣るバスターには圧倒的不利だ。

雑談のさなかにも、頭上の空を割って戦闘機が隊をなして飛来していく。

しょせんは旧時代の遺物とばかりに歯牙にもかけていなかったが、スピードはＭＳの比でなく音速、そしてその攻撃力も侮りがたい。

あのウィラード教官の「地球には地球の戦い方がある、ＭＳは万能

ではない」という言葉が実感として迫る。
『カウントダウン入ります。１０、９……』
旗艦パンゲアブリッジのオペレーターの声が響く。
カウントゼロで、彗星のごとき一陣の光がオーブ・オノゴロ島に墜ちた。
『来たわね』
アスランが言う。
「来たな」
ディアッカが応じる。
オーブにＮジャマーが投下される、というコートニーの話は本当だったらしい。
宇宙駐留部隊の手で静止軌道からＮジャマーが投下された、ということは直上のアメノミハシラがすでにして制圧されたのか、あるいは戦闘中なのか。そうならばどちらにせよ宇宙からのオーブ増援はほぼないものと見込まれた。
すかさず指令が発せられた。
『ＭＳ部隊発進！』
指揮艦パンゲアを中央に、計三隻のＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．海上空母の甲板から次々とＭＳが発進し、後を追うように戦闘ヘリ（アジャイル）の編隊が飛翔していく。
『お先に、ディアッカ！』
先んじるニコルの声が聞こえる。
「おう、せいぜい頑張ってこいよ」
イージスとブリッツは制空戦闘に、デュエルは上陸ポイント確保に先行した。
今回、重装備であるバスターには＜地上目標の破壊＞という役回りが与えられている――そうであるからにはしっかり海あるいは空を制してもらわないと困る、と頭の後ろで手を組んでディアッカはのんびり構えている。
島の周囲に日差しの下でもなお眩い光が無数に起きては消え、それ

を眺めているのにも飽きた頃、管制から指示が入った。
『D装備ジン部隊、バスター発進どうぞ！』
「よっしゃ、出番だな！　ディアッカ・エルスマン行くぜ！」
ゲーム、スタート――
バスターのツインアイに光が灯り、その全身がディアクティブの鉄鋼色からカーキ色に染まる。
傍らでは要塞陥落用装備のジンの編隊が続々と空へと上がる。ようやくにグゥルが稼働して軽い浮遊感が全身を覆い、ディアッカも後を追った。

地球上の勢力図のバランスをとる為に、強い中立国の存在が必要だった。
だがそれはもはやオーブでなくともよい、とP．L．A．N．T．本国は判断した。
然るにNジャマーで＜南海の獅子＞の牙を折ってしまえ――というのが今回の作戦の要諦であるらしい。
確かにそれでオーブは戦力が一気に削がれるだろうし、その国内はひどく混乱するだろう。あるいはさらなる政情不安定を誘発するかもしれない。
核が使えなくなろうとも火山国オーブには地熱発電所がある――という話をするあたり、特段Z．A．F．T．上層部はオーブを占領したいというわけでもないらしい。
背景にはいろいろありそうだが、それは一切考えない。
「そんなん俺の知ったこっちゃないしね」
ディアッカはひとりごちながら、森のただなかに埋もれるトーチカ目がけてスコープ越しにトリガーを引き絞る。
目標撃破。
――とその時、頭上で護衛のディンが爆発して、パラパラと残骸が降り注いだ。

「あぁん？」
ディアッカは振り仰ぐ、途端視界の隅で光の驟雨とともにオレンジフレームのＭＳが飛び出てきた。
それも１体ではなく隊を為している。
「おいおい、オーブもＭＳ配備が進んでたのかよ！」
不意打ちにディアッカは舌打ちして、超高インパルス長射程狙撃ライフルを分割し両腕に抱え込む。
「ったくモルゲンレーテをビルごと吹っ飛ばしときゃよかったんだッ！！」
悪態をつきながら左の９４ｍｍ高エネルギー収束火線ライフル、右の３５０ｍｍガンランチャーとも同時に撃ち放つ。
乱れ撃ちの射線を読み切れずに被弾したＭＳが僚機を巻き込んで爆散し、その炎がさらなる誘爆を招く。
木々が爆発で薙がれて、たちどころに周囲は焼け野が原と化した。
額に汗が滲む。
反動でレバーがブレて、狙いが微妙に逸れる――
両撃ちは見た目派手でこそあるものの連射が利かず実に非効率的、バッテリーばかりを消費する。
「くっそ！」
やがて組んだ対装甲散弾砲の強引な弾幕の中で、彼我１０対１はみるみる５対１になり、３対１となり、やがて１対１となった。
ついと素早く視線を走らせる。
量産機の中でもひときわ動きが俊敏だったその１機。
……まさかストライクの？
それは直感だった、だからソードを片手に迫りくるそのＭＳに、ディアッカは声を大にする。
「お前、ストライクのパイロットだなッ！？」
『そうだッ！！』
怒りと敵意に凝り固まった鋭い応えが、すかさず跳ね返ってきた。
思わず焦る――よりによってアスランの元カレにここで遭遇すると

は！
この量産機にＰＳ装甲は装備されてないらしい、どうやらラミネート装甲だ。
であればとミサイルポッドで迎え撃つ、爆発は起きたが牽制というにも非力すぎた。
『君のせいで――ッ！！』
たやすくくぐり抜けて爆煙のただなかで疾駆する影、頭上から振りかざされるソードの軌跡に、チッとディアッカは舌打ちしてライフルで受け止める。
せっかくの９４ミリ高エネルギービーム収束火線ライフルがズタボロになる――と嘆く間もなく、剣戟の火花が散った。
今までストライクと直接に刃を交えたことはない、だからディアッカは今さらに舌を巻く。
コイツ、マジで反応が早い！
『――アークエンジェルはッ！！』
バスターが近接戦向きでないことを心から恨みながら、合体砲で力任せに薙ぎ払う。鈍い感触が伝わってくるがさすがにホームランとはいかない。
体勢をすぐに立て直してオレンジのＭＳが再び迫る。
『ＰＳ装甲は、関節をカバーしてないんだッ！！』
同シリーズのパイロットだっただけに弱点もよく知っている！
防御に掲げた合体砲もろともにバスターの右腕が引きちぎられて吹っ飛ぶ衝撃、ディアッカはシートベルトの限界までつんのめる。
コイツ――いちいち反応が早すぎる、警告音が鳴りっぱなしで耳障りだ！
腕が使えなければ巨大砲など抱えることもできない。
だがまだいける！
対峙するＭＳが眼前でビームサーベルを抜く、咄嗟にバスターも足下に落ちていたサーベルの柄を蹴り上げて掴み、即ＯＮに入れる。
間に合えッ！！

振り上げた刹那、光の刃が触れ合って双方の磁場が干渉し、モニターが白々と照らし出された。
拮抗に息詰まり、ディアッカは目を薄くする。
実体の刃をもたないビームサーベルでのつばぜりあいは正直しんどい――刃の動線を読み違えればアウト、ビーム刃の相互干渉を予想外の向きに外されてもアウト。
考えれば背筋が冷える。
全くこんな真似、アスランやイザークときたら好き好んでよくやるもんだ！
「ったく心理戦なんてガラじゃないぜッ！！　俺はずっこんばっこんの砲撃のが好きだってぇのッ！！」
毒づきながらより有利なポジションを探る最中、不意にＭＳが飛び退る。
『……くそッ！』
ストライクのパイロットの悔しげな呻き声が聞こえて、やがて量産機ＭＳは撤退を開始した。
「撤退？」
それを見送って、ディアッカは怪訝に刃を収める。
どう考えても向こうが優位だったのに、いきなりどうした？
――我に返れば、スピーカーからジョン・ウィラード作戦司令の声が漏れ聞こえていた。
『……本作戦に携わる全Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍に通達――本作戦はすでに我々の手を離れた。それに伴い本時刻１５：００をもってオペレーション・クラックダウン終了とする』
同時に打ち上がった全軍撤退の花火を振り仰いで、撤退か――とディアッカはほろ苦く笑む。
どうやら命拾いしたのはオーブというよりも、むしろ俺らしい。

＊＊＊＊＊

引き上げた部隊が続々と到着して騒然とする甲板上、アスランはひとつのメンテナンスベッドの前で嘆息をついた。
佇立するバスターは右腕を付け根から失い、ライフルも破損、胸部には被弾――とこれまでになく損害を蒙っている。
「参った参った」
ラダーにとりついたディアッカが苦笑いで降りてきた。
「んで、これってどうよ？」
派手な破損状態を眺めて「難しいわね」とアスランは顔を曇らせる。クストーではまず十分な修復は期待できないだろう、この空母パンゲアでもどうか――そもそもＧＡＴ－Ｘシリーズのパーツは総じて地球製で、Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．のＭＳの部品とは規格を異にする。すべての要素を鑑みて、やはり完璧を期するならばカーペンタリア基地の専門チームに任せるのがベストだ。
「しばらくジンに搭乗するしかないわね、ディアッカ」
「こりゃエリカおねーさんの祟りだな」
前髪を後ろに撫でつけながらディアッカがぼやく。
エリカなる人が誰かは知らないが、どうせ地球上のどこかで出会った女性なのだろう、とアスランは聞き流す。
呪われるくらいならよっぽどのことをしたに違いない、とことんひどい男だ。
「つーかお前の元カレ……」
と言いかけて、……まぁいっか、とディアッカは口元を笑わせて歩き出す。
「何？　モトカレ？」
聞き慣れない単語に怪訝にアスランは首を捻る。
ディアッカが使う俗語（スラング）というのはバリエーションが多すぎて時に理解しがたい。
「いいやこっちの話。余計な口は災いのもと不幸のもとって言うし

な。――んでお前らの方どうだったよ？」
「何とか。気付いたら撤退だったわ」
「なんかうまーく交渉の糸口に使われちゃったっぽいな、俺ら」
いつもながらディアッカは目端が鋭い。
シュナイバー司令のオフレコ発言を思い返し、アスランは「そう？」とだけ答えておく。
技術スタッフに渡されたコーヒー缶片手に、２人は甲板へと足を向けた。
「――んでお前どうすんのよ、本国帰っちゃう？」
たく羨ましいぜ、と風に吹かれながらディアッカはぼやく。
「俺なんかまとまった休みすらなし、着任以来本国に帰ってねぇってのに！」
「それはホントにお疲れ様。でも異動の件はどうかしら」
プルタブを押し開けて、目を落としたアスランはひとつため息をついて口をつける。
Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．統合設計局で建造中の特化Ｘシリーズ、そのテストパイロットに自分の名前が挙がっていて、しかもほぼ本決まりであるらしい――とコートニーは言っていた。
「最前線のエースパイロットが、よりによって今離脱するなんてぇのもちょっとどうかとは思うけどな。よっぽど親父さん、お前が心配なのかねぇ？」
「さあ。心配というより信頼されてないだけかも」
コーヒーが心持ちほろ苦く感じられる。
いくらユーリ教授の強い希望といったところで、後方への異動はどうせ父の意向に決まっている。脱走兵狩りが終わったら即召還と言っていた当初の計画が今日までずれこんだだけで。
Ｌ４戦からヘリオポリス潜入と、それ以来なし崩し的に転戦に次ぐ転戦でそろそろかとは思っていたが――
だが、即離脱を命じられても心残りが多すぎて、とてもではないが素直に「はい」と言える気がしない。

今の仲間たちを前線に置き去りにして――しかもキラがオーブに匿われているというこんな状態で。
「……もちろん命令なら従うわ。でも親子関係に委員長と兵士って立場をもちこまれて、しかもそれを最大限に使われるっていうのはなんだかイヤなの」
茫洋としてアスランは欄干に頬杖をついて顎を乗せる。
「私たち、ちゃんと話してないような気がする。血のバレンタインがあって以来ずっと」
思えば、父と自分を繋いでいたのはいつだって母だった。
思いにふけるその傍らで、ディアッカは欄干に身を凭せ掛けて雲の流れる空を振り仰いだ。
「話せるうちに話しておいたほうがいいぜ。俺んとこみたくとんでもなくこじれると手もつけらんないから」
彼の言葉を反芻しながら、海風の吹き抜けるしばしの沈黙のあと。
「ねえ」
「何」
「聞き上手よね、ディアッカ」
「まあな」
「モテる理由、ちょっとわかったような気がする」
「今さらかよ。遅いっつぅの」
大仰に肩をすくめるディアッカを眺めながら、久々にふふっとアスランは笑んだ。

＊＊＊＊＊

ワシントンD．C．の空は春霞ながらも快晴。
立ち並ぶポールに万国旗がたなびく地球連合本部ビル前、エントランス前のターミナルにハイヤーが横付けとなって一人の少女が降り

立った。
ワシントン・ダレス国際宇宙港からこの地球連合本部ビルまで、厳重に厳重を期した強固な警備でようやくにここに迎えることができた――とチャールズ・オルバーニは少々安堵する。
少女の桜色の頬、ふわふわとした淡いピンク色の髪が青空に映える。その白いワンピースドレスの立ち姿といい、実に見事な造形だ。
「お父上は元気ですかな、ラクス・クライン」
迎えに出たオルバーニは、彼女の手を握る。
「はい、とても。お会いできないことが残念と申しておりました」
ほんわりとして笑むラクス・クラインは年齢相応のあどけなさではあったが、しかしこの苛烈なフラッシュライトの嵐にも一歩も引くところがない。
「お互い全く気苦労の多いことで――」
と言葉半ばで視線を巡らせていたオルバーニは気付く。
ラクス・クラインの随行は誰一人Z．A．F．T．の軍服を着ていない――護衛とてスーツで装ってこそいるがおそらく傭兵であろう、およそ公式の使者とも思えぬ。
あの武断派のパトリック・ザラの意図が透けて見えて、しかしオルバーニは表情に出さない。
次の議長選挙で、クラインの再選はまずないと彼は考えている。
穏健派を切り捨ててP．L．A．N．T．国民は更なる戦いを望み、そしてP．L．A．N．T．最高評議会はオペレーション・スピットブレイクを可決し、その実行はもはや目前だ。
「……我々は遅かったのだろうかね、ラクス嬢」
「いいえ、きっと間に合いますわ」
涼しげな声で彼女は微笑む。
――およそ根拠などあろうはずもないのだが、人を安堵させる響きだ。
地球連合本部ビルエントランスの長い階段を上がる最中、オルバーニの傍らを歩んでいたラクスがふと足を止めた。

ここには今報道陣も多くいる、彼女の歌と言葉はマスコミに取り上げられるだろう。
オルバーニは振り返る。
果たしてP．L．A．N．T．が愛する歌姫の言葉は、戦を求める地上の人々に通じるのだろうか？

＊＊＊＊＊

急いでクストーに帰還せねばならない――人手が足りないのは先刻承知だが、俺たちばかり使い回される！
理不尽さすら抱えながら、艦内通路を格納庫へと向かうイザークはいっそう足を早める。
通りがかったレクリエーションルームのＴＶモニター前に、兵士たちの人だかりが出来ていた。
「ラクス・クライン？」
「……あれは、地球の連合ビルか」
ざわめきと、その人垣ごしに映し出される久々の歌姫の姿に、イザークは目を留めて立ち止まる。
地球のＴＶ放送は、見慣れない白亜のビルのエントランス前に佇むラクス・クラインを映し出していた。
多くのナチュラルの報道陣と聴衆が詰めかけている中、彼女はただひとり立つ――
モニター内外のざわめきの中、ラクス・クラインが聴衆を、ＴＶのこちらを静かに見据えた。
そして音律を刻んで、清冽なアカペラの歌声が響く。

Ｓｕｃｈ　ａ　ｃｏｌｄ　ｎｉｇｈｔ

I know you are sleeping alone

I've dream't of you
You are gone for the war
But in my dreams you smiled at me like a child
I miss you

I'm sure we'll get togeth
er some day
I'm sure we'll live in th
e peaceful world
I want to live like my mum

彼女のドレスのポケットから飛び出て、ぽよんぽよんと跳ねていた
ピンク色の球体がセンサーの色を変えた。
それとともに伴奏が流れ始める――

Our songs are prayer
We'll never stop it
Because I believe we'll l
ive in the peaceful world
For that day, I'll do thi
ngs for you

I'm sure we'll get togeth
er some day

I'm sure we'll live in the peaceful world
I want to live like my mum
…When you go back to my place, I'll hug you…

余韻を含んで静まる聴衆を前に、彼女は穏やかに語りかけた。
『わたくしたちは何が欲しかったのでしょう？　戦いでしょうか、愛する人の犠牲でしょうか？　……まだ間に合います。武器を捨て、話し合いましょう。互いに知ろうとしなければ、わかりあうこともできません。……地球、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．、ともに歩む未来は必ずあるはずです』
ゆったりとした彼女の声は、優しくじんわりと心に染みこんでくる。
「ラクス・クライン、地球に降りてきてたのね」
いつの間にか傍らにアスランが立っていて、我に返ったイザークは「ああ」と眉根を寄せる。
――クライン議長派はまだ講和を諦めていないらしい。
「だが、ラクス嬢がわざわざ出てくる必要などなかっただろうに」
いかに議長令嬢といえども、彼女はごく普通の民間人だ。
癒やしを与える歌姫という立ち位置であるのに、政治の表舞台に引っ張り出すなどいったい上は何を考えているのか、とイザークは鼻白む。
「でも何かしたいって気持ちはよくわかるわ。守られているだけじゃ、自分が辛いのよ」
アスランは格納庫に足を向ける、イザークもそれに歩調を合わせた。
「しかし人には適性というものがある！　ラクス嬢は守られるべき人で、お前とは全然ちが――」
「ふーん、そう。私とは違うわよね。……そうよね、イザークはラ

クス・クラインのことよぉーく知ってるものね」
ちくりちくりと無数の棘を感じる。
「……」
イザークは傍らを歩むアスランを見おろす。

やはり妬かれてるのか？
だとしたらやはり今のうちに手を打っておくべきか？
今までの経緯から、絶対コイツの口から俺を乞わせてやる！！と決めてはいたものの、タイミングを逃したことで痛恨の痛手を負ったのはほんの半年前の話だ。

そして逃走劇のどさくさに彼女に馬乗りになって、再びの衝動に呆然としたのはつい先日。
あの時耳元で名を呼ばれて、肌が粟立った――
もう遺伝子レベルでそそのかされてるんじゃないか？　という抗いがたいレベルでぞわぞわした。
その感覚が不意によみがえって、全力で背を押す。

ああもう――この際だ、行ってしまえ！！！

ダン！　と荒々しい音を立てて壁に手をつく。
進路を阻まれて、壁際のアスランが足を止めた。
「……おい」
「何？」
少しばかり剣呑な眼差しで、眉根を寄せた彼女がこちらを見上げる。
焦がれてやまないエメラルドに見惚れて、心臓の高鳴りを知られまいとキッと睨むように見据える。
「俺はッ……」

「おいアスランッ！」
遮って背後から呼ぶ声に、アスランは振り返る。
「今すぐ急いで艦橋に来い！　艦内放送聞こえなかったか？　――あー疲れた」
管制オペレーターのチェン・ジェン・イーが息を切らせて壁にすがる。
「ゴメン、レクルームで歌を聴いてたから全然聞こえなかったの。すぐ行くわ」
アスランは踵を返す。
出鼻をくじかれて絶句していたイザークは拳で壁を殴り、「ッちっくしょうッ！！――待てッ！！」と肩を怒らせて後を追った。

発令所デッキの端、全面ガラスの前に佇んで海を眺めていたジョン・ウィラード作戦司令が視線を向けた。
アスランとイザークは並んで敬礼する。
士官学校の元教官はやれやれ――といったやや疲れ気味の表情を見せた。
「私は元々オーブの出身でな、こんな戦時でもなければ実家（さと）に顔を出せたんだが」
「教官がオーブ出身でいらっしゃったとは知りませんでした」
アスランは小首を傾ける。
「もっともう父も母もおらんがな。のどかでよい釣りスポットがあるところなんだよ、朝まずめ夕まずめの海は見惚れるほど綺麗で……」
ウィラードは「いらん話だな」と頭を掻いた。
「ところでアスラン・ザラ」
「はい」
「先方が調印に、赤の“アスラン”を随伴に連れてこいという要求を出してきた」

「はぁ？」
イザークは素っ頓狂な声を上げる。
今Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の赤服を纏っている１００人足らずの中に“アスラン”といえばひとりだけだ。
「直々のご指名ですか」
「そうだな」
本人は泰然としているが、その分イザークは憤然とする。
「そんな要求に唯々諾々と応じることなどありません！　大体なんでアスランの名前を知っていて、いったい何の意図があるのか――」
だがアスランは「行きます」と簡潔に答えた。
そうか、とウィラードは頷いて「シュナイバー司令がもうじき到着だ、行きたまえ」と促す。
アスランは再度敬礼で辞去しようとするので、とっさにイザークは肩を掴む。
「待て、アスラン！」
「きっと何かお話したいことがあるんでしょう、行ってくるわ」
いったい何を話すというのか、そもそもオーブ相手にのんびりと和やかに対話などできるわけがないではないか。
「……敢えて詰られたいのか、お前は？」
アスランは少し憂鬱げな眼差しを投げかけた後、横顔を見せた。
「後はお願いね、イザーク」
「ったく、とことん世話を焼かせる！」
「ありがとう」
ぽん、と背中を叩かれてイザークはむっつりと彼女を見送った。

＊＊＊＊＊

せめてキスのひとつくらい寄越せ、バカが。

歌の余韻が残る静寂の中を、ぱちぱち、と拍手をしながら歩み寄ってくる影があった。
「ああ、イイ声。何よりキレイな言葉」
金髪碧眼のその30代半ばほどの男は、パリッとした仕立てのよいスーツでその細身を包み、細面でおよそ政治家とも思えない居ずまいだ。
彼は、やがて「理想ってのはホント美しいねェ」と目を細めて首を振る。
「ムルタ・アズラエル……」
警戒対象の不意の出現に、オルバーニは表情を強張らせる。
若いながらも彼は軍需産業連合理事で、しかも大西洋連邦に多大なる影響力をもつ。それゆえに今回ごり押しでオブザーバー参加したのだろうが、よりによってこんな時に現れるとは！
この男だけは極力ラクス・クラインから遠ざけたかった、接触を許したところで平穏無事で済むはずもないのは火を見るより明らかだった。
せめても、この衆目の前で下手な手出しはしない、と思いたいが――。
一見柔和な優男であるアズラエルは、寸部の敵意すらないかのように少女に向けてにっこりと微笑んだ。
「戦いなんて誰もがイヤだ、平和に生きたい。そりゃ当然な話なんですよ？　――だけどね簡単に言えば、戦いなんて人と人との差異から生まれいずるもの。つまり人の多様性から生まれる摩擦なわけで、ヒトがヒトである限り戦いはなくなりませんって」
「そうでしょうか？」
ほんわりと笑んでラクス・クラインは小首を傾ける。
「そうそう。それに今回のことは、地球の国々が大枚はたいて出資して苦労して造ったP・L・A・N・T・なのに、そこで働くコー

ディネイターたちが勝手に独立したいとかなんとかゴネだしたことが発端なわけで……」
言い含めるように語った後、これはお嬢ちゃんには難しいかな？とムルタ・アズラエルは小馬鹿にした口調でやがて口元を笑わせた。
「世界は複雑に絡み合ってるんですよ、君が思うよりよっぽど。だからこんな大人の話し合いに嘴を突っ込まずに、あの砂時計コロニーでおとなしくアイドルでもやってらっしゃい。ね？」
あからさまな侮りともいうべき手ひどい洗礼に、それでもその桃色の少女はおっとりとした微笑みのまま動じない。
「あら、わたくし大人の論理は存知ませんわ。でも子どもは子どもで世界を憂いておりますのよ。だって大人の都合でわたくしたちの明日がなくなったら困りますでしょう？」
そして彼女は歩み寄り、優雅に手の甲を差し出した。
「――初めまして、ムルタ・アズラエル。わたくしはラクス・クライン、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．最高評議会議長シーゲル・クラインの娘ですわ」
無知とは恐ろしい、とオルバーニは内心目を剥く。
よりにもよって相手は死の商人、コーディネイター排斥を掲げるブルーコスモスの首魁であるのに！
――それともあるいは知っていて剛胆に挑んでいるのか？
判じかねて息を詰めて見守るさなか――
ムルタ・アズラエルはその白い手の甲を眺めていたが、肩をすくめると貴族然としてその手をとってかがみこみ、「ようこそ、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．のお姫さま」とうやうやしく接吻をした。

＊＊＊＊＊

遊覧飛行船の客室モニターは理事会のＴＶ生中継を映し出していて、

その前に群がる観客たちは物珍しげに、あるいは食い入るように見つめている。
その輪のはるか後方、窓際のシートにひとり座して、黒サングラスで目元を隠した金髪の男は眼下の大都市の街並みを眺めていた。
『……わたくしたちは同じヒトです。このからだも、流れる赤い血も、この心も、なんら違うところはありません』
ＴＶモニターのただなか。
歌うようにコーディネイターである少女は言葉を紡ぎ出す。
『同じ星を母とし、同じ時代に生き、けれどもただ立場が違うというそれだけで、何故戦わなくてはならないのでしょう？　わたくしたちのこの手は、互いを撃つためにあるのでしょうか……？』
問いかけて、物怖じしない歌姫は朗々と「否」と述べる。
『西暦時代、今と同じように世界を分かつ戦乱の頃、両陣営を繋いだ偉大なる大統領はこのようにおっしゃいました、
《友よ。肌の色、思想の違い、例え地の果てにいようと、あなたの側にいようと、それは我々の互いへの理解に何ら障害となるものではない。
友よ。我々は等しくこの空の下、大地の上に生を受けた命である――そして我々に等しく死は訪れる。
友よ。同じ死への道のりならば、ともに手を取り合い行こうではないか。それが神の御心である》と』
高らかに謳い、そして彼女は祈りを込めて締めくくった。
『わたくしたちの手は……わたくしたちの手は、互いを抱きしめる為にあると信じます』
摩天楼の中にもひときわ目立つ地球連合ビルを眼下に眺めて、漏れ聞こえてくる声に耳を澄ませていたラウ・ル・クルーゼはやがて忍び笑いを滲ませる。
糾弾会の予定がいつの間にか歌姫の独壇場となってしまったようだ――中継画面を見ずともわかる、おそらく今頃連合の政治家たちは口を半開きにして、呆けた顔を晒していることだろう。

「しかし困ったお嬢さんだ。そのアメリカ大統領の、黒い疑惑と手を染めた悪業の数々を知らんとも思えんが」
欺瞞は政治家たちがよく使う手だが、彼女自身はそれを意識しているのか否か。
どちらにせよラクス・クラインには素質があるのだろう。
「……まったく言葉とは恐ろしいものだよ。綺麗な響きに容易く愚民は洗脳される、使いようによってはとんでもない武器だ。そうは思わんかね？」
『俺はそんなことに興味ない』
まだ稚さすら残す声がイヤホンの向こうで突っぱねる。
「おやおや！　彼女もユーレン・ヒビキが造った作品だよ、君と同様に。もっとも彼女もまた失敗作ではあるのだろうがね」
『……』
対話相手の痛みをなぞるようにラウ・ル・クルーゼは呟き、やがて愉悦の笑みを漏らす。
「時代の潮流を堰き止めるなどあってはならんよ。ヒトはヒトのあるがままに流れていけばよい、ヒトの望みそのままに」
ラクス・クライン、光しか知らぬ子ども――君が謳い称えるほどには、世界は優しくもなければ美しくもない。
それを今まさに君は思い知るだろう。
「さあ行きたまえ、カナード。我々と月の望む扉が開く」
『了解』
イヤホンの向こうから応えがあって、じき現れたＣＡＴ１－Ｘ１／３と刻印された白いＭＳが眩い幻のように空域を通過していった。

＊＊＊＊＊

オーブ・ヤラファス島の南東部に位置する首都オロファト、その中

心にオーブ行政府がある。
風を巻き上げて、庁舎前へリポートにヘリが着陸した。
P．L．A．N．T．本国から全権委任されたカーペンタリア基地司令タカオ・シュナイバーの到着に、先んじていたZ．A．F．T．兵士が敬礼で迎える。
「さあ行こうか」
オーブ側の先導のままに、先頭を行く司令に付き添ったヨアヒム・ラドル副艦長が警戒の色も濃く言う。
「いかに連合との調印を拒否しているとはいえ、サハクと言えばもともと親地球連合、まさにあのモルゲンレーテがその証左……」
再びいつ陣営の旗色を翻すかと危ぶむ部下を前に、「何、それは構わんさ」と司令は鷹揚に応じる。
「当面のところ中庸をわきまえていてくれさえすれば、交渉相手として何ら問題ない」
その会話をすぐ背後で聞きながら、ふとアスランは視線に気付く。
司令の護衛に随行する他の赤服たちの中で、燃えるような眼差しでこちらを睨む隻眼の女がいた。
あからさまな敵意だ、とアスランは戸惑う――見知らぬ女性で心当たりが全然ないが、自分はいったい何をしたろう？
やがて並んだその赤毛の女は怒気もあからさまに口を切った。
「アンタか、グゥド・ヴェイアを狩ったのはッ！　同胞だってのに、よくもやってくれたもんだねッ！」
どうやらL４での脱走兵狩りのことを言われているらしい、とアスランは記憶をたぐり寄せる。
討ったであろう兵士たちの中にその人がいたなど今まで知らなかった――グゥド・ヴェイア、開戦当初のZ．A．F．T．前線を牽引した＜赤い英雄＞。
それがあの赤いMSのパイロットだったとするなら、まさにラウ・ル・クルーゼ隊長に比肩する戦巧者だった。
だが仕留めたのはこの自分ではなく隊長だった、と言ってもきっと

弁解にしか聞こえないだろう。
「ヴェイアは強くて優しい男だった、戦場でアタシたちを何度も救ったもんさ……」
女の顔によぎる郷愁にも似た懐かしむ色はやがて憤りへと染め変わった。
「それをアンタはッ！！」
多分、この場でなければ彼女は自分を殴っているだろう、あるいはナイフで刺していたかもしれない。
その殺気漲る気迫に、アスランは目を逸らす。
無言がさらに神経を逆なでしたのか、激した彼女は声を大にした。
「何とか言ったらどうなんだいッ！？」
「ヒルダ」
咎めるような同僚の窘めに、ヒルダと呼ばれた彼女は声のトーンを落として吐き捨てた。
「許しがたいね、アスラン・ザラ！！」
ごく自然な話だ。
私が討った存在に心を寄せる人は、当然私を憎む。
そんなことわかりきった繰り返しなのに、最初から承知していたことであるのに。
……なんでこんなにも心が痛いのだろう？
歩む大回廊はやがて眩い高天井の広間へと繋がり、オーブの政治家と士官たちが今や遅しと待ち構えていた。

オーブ暫定政権で臨時代行職についたのはコトー・サハク、五大氏族の首長のひとり。
サハクは連合側とも囁かれるが、現当主は中庸をわきまえた人物であると一般に伝え聞く。
もっともアスハとは袂をわかって久しいだけに、今回の役職を引き受けるにはうってつけの人物だったのだろう――クーデター劇もあ

るいは予定調和、という可能性を差し引いての話だが。
双方トップが握手する、そしてその彼らの肩越しにアスランは知る顔を見いだす。
控えるオーブ士官たちの最前列に、かつて見えた金髪の少女がいた。
強い意志のこもったまっすぐな眼差しで彼女は自分を見つめていて、アスランは柔和に見返す。
お互い軍服を着て立場を決めてしまっている。これがあの時感じた自分たちの溝の正体だ。

粛々と会談は進み、双方の調印を得て一時停戦合意に至った。
敬礼で居並ぶ中、会談の最中終始物言いたげだったカガリはアスランの前で足を止めた。
「お前を呼んだのは私だ。カガリ・ユラ・アスハ。ウズミの娘だ」
目を離さずに彼女は名乗った。
アスハ。
あの時階級章を確認しなかったが、准将であるのは最大首長家の娘であるからこそなのだろう――確かに、カガリは連合軍の軍人ではなかった。
そしてカガリはとつとつと言う。
「お前たちにとってはストライクは敵だろう。だけどあれのパイロットは……本当にイイやつなんだ」
心の動きを探ろうとする金色の視線を前に、アスランは目を伏せる。
「アイツは泣き虫で甘ったれで、ぼんやりしてて……どこか危なっかしいヤツなんだ。守りたいものがあるからあんなものに乗って戦っていただけで……」
――それを敢えて敵のZ．A．F．T．パイロットに教えてどうしようというのか。相手も人だ、と知らしめて戦いの決意を揺るがせ

たいとでも？
だとしたら、カガリの作戦は見事だ。
「だから……」
言葉を探しているカガリを遮って、感情を押し殺した無表情の下でアスランはことさらつっけんどんに突き放す。
「敵であり立ちはだかる以上は、撃つだけです。それが私の義務ですから」
「アスラン！」
焦れたような色を見せたカガリの背後で、しばらくぽかんと口を開けて眺めていたつんつん頭の下士官が割って入った。
「Ｍ１のパイロットとしては興味があったんですけど――こんなコがＭＳ乗ってるわけ？　ホントに？」
まじまじとのぞき込んで不躾な男だ。
気を抜けば手を伸ばしてきそうな勢いに、思わずアスランは一歩退く。
「というかさすがコーディネイター、遺伝子いじっただけでこんな別嬪さんも造れるんだ、へえ」
「やめろ、ナダガ」
カガリが彼の肩に手をかけて制止する。
「いやいや素直に感心しただけですよ、キレイだなって。でもこんなかわいい顔してＧ強奪とか爆破工作とか……しかも殺しをしちゃったりとか？」
無意識の悪意が肌を打つ。
アスランが口を開く前に、「ナダガ！」と耐えかねたカガリが声を張り上げる。
その時、津波にも似た騒ぎが廊下から漏れ聞こえてきた。
何事かと人々が視線を向けた矢先。
高天井に「ワシントンＤ．Ｃ．の地球連合安保理ビルで――ッ！！」という兵士の絶叫が反響した。

＊＊＊＊＊

ベッドの上でイザークが喚く。

「待機はいい加減飽きたッ！」

辟易するような一週間の待機の後、さしたる出番もなく短時間でオペレーション・クラックダウンは終了してしまった。

ということで体力が余っているのだろう、楽をしていたコイツが心底羨ましい。

やっぱりストライクのパイロットの話をさっさとして、早々に始末してもらえばよかった――とは今さらだが。

ただ問題は、ストライクの話題になる度にテンションがどん底に落ちるアスラン。

状況が状況だけに彼女に遠慮していたが、次にストライク男が出てきた時には絶対にイザークを焚きつけてやる、とディアッカは決意を新たにしている。

「……今浮上してんだろ。上行って海でも眺めてくれば？　なんなら泳いでもいいんじゃね？」

俺はもうこりごりだけどね、とソファーに身を預けて雑誌を読みながらディアッカは机の上の足を組み替える。

「アホかッ！！」

罵声とともに八つ当たりの枕が飛んでくるので、ディアッカは上半身をふいっとそらす。

枕は見事に壁にぶちあたり落下した。

イライラしているのは待機のせいではないだろう。

「ならアスランと一緒に行けばよかったじゃん、俺も行くッ！！っていつもの勢いでゴネてさ」

イザークはとにかくわかりやすいヤツだ、敵陣に乗り込んでいったアスランが気がかりで仕方ないのだろう。

図星を突かれたらしいイザークはぎろりと睨んだ。
よっぽど欲求不満が溜まっているのか、コイツは最近ますます殺気の放出が甚だしい。
「俺が行ってどうする！　バスターは中破であのザマだ、ブリッツとジンと残りのディンじゃ万が一の備えにもならんだろうがッ！」
結局バスターはカーペンタリアへの後送が決まった。
パンゲアで応急手当こそ受けてクストーに持ち帰ったものの、戦力として数えるには非常に厳しいと言わざるを得ない。
「はいはい、俺のせいね。そいつぁ悪うございましたね、イザーク殿下」
聞き流しながらディアッカがぺらりと頁をめくったその瞬間、コンディションイエローを知らせる甲高いアラームが鳴り響き、２人は顔を上げた。

＊＊＊＊＊

カーペンタリア艦隊から外れたオーブ領海北で待機していたボズゴロフ級潜水母艦クストー。
その発令所で、モニターが熱源を捉えた。
通信士が声を張り上げる。
「レーダーに反応あり！　熱源４、オーブ海軍イージス艦。熱源１、照合データがありません！」
「未認定の艦か」
モンロー艦長があごひげを撫でながら目を細め、その傍らでニコルは複雑な表情を見せる。
「普通こんな夕方遅くに演習なんかしませんよね……」
「熱源１、離脱します！」
どよめいたクルーたちが慌しさを増す中、ディアッカとともに発令

所に入ってきたイザークは通信士に問う。
「映像回線は？」
「開きます！」
オーブ艦隊にエスコートされた白亜の巨艦がその姿を現した――＜アークエンジェル級＞なのだろう、あの足つきと寸部違わぬ形状をしている。
来た、とクルーとパイロットたちは一気に浮き足立つ。
「しかし会談の合間に離脱とはちょこざいな真似を！」
腕組みのイザークは舌打ちする。
停戦条件のひとつに連合艦の引き渡しが含まれていたはず、オーブも素直に渡すつもりはなかったのだろう――だがそれもとっくに織り込み済みだ。
「んでどうすんのよ？」
ディアッカがのんびりと聞く。
「当然アレも沈めるぞ、連合艦の離脱があれば自由処理、と言い渡されてるんだからな」
南下中の連合艦隊に合流などさせてたまるか！　とイザークの表情は険しい。
「でもアスラン、まだヤラファス島ですよ」
ニコルが顔を曇らせる。
「アイツなら後続部隊と一緒にじき追いつくだろう。パンゲアに打電して俺たちは戦闘準備だ！」
「よかろう」
イザークをザラ隊副官と認めるがゆえに、モンロー艦長は重々しく頷く。
コンディションイエローからコンディションレッドへと切り替わったことを知らせるアラームが鳴り響いた。
『各機パイロットは搭乗準備、繰り返す……』

Monologue：Kira－1（前書き）

I spend all my time searching up and down & looking for any other way.

Ｍｏｎｏｌｏｇｕｅ：　Ｋｉｒａ－１

惑星の夜――
君の燃えさかるような紅に見惚れていた。
熱いからだの奥に引き込んで、白い腕でやわらかな胸に抱き込んで、
でも結局君は僕のことを拒絶する。
こんなの恋じゃない、ましてや愛なんかじゃない。
大事なものを無くしたから、ひとりぼっちは辛いから。
ただの傷の舐め合いだってことはよくわかってる。
薔薇のような君の帯びる棘がちくりちくりと心を刺す、でも離れられないんだ。

僕は、君に似たひとを知ってる。
君が紅く灼きつくす炎なら、彼女は蒼く張りつめた氷。
――ただ愛されるばかりで、愛するなんてことを全然しない傲慢さがよく似てる。
どこまでも優しくて、でもどこまでも冷たい。
僕は昔からそんな彼女が怖くて、でもどうしようもなく好きで、結局少しの距離を開けたまま、いつの間にか僕らは別々になった。
きっと愛してた、そして今でもまだ。
でももうたぶん取り返しがつかない。
有刺鉄線の向こうの彼女は指先さえ伸ばしてくれない、ただ無機質な銃口を向けるだけで。

過去の思い出に立ちすくんで、今の辛さに泣きわめいて、未来の希望に抱きすがって、
こんな僕を、バカで優柔不断で弱い男！って君はあざ笑う。

でも僕はそれだけで救われるんだ。

Monologue：Kira－1（後書き）

T.M.R.－e“月虹”

12：北太平洋上あるいはワシントンD．C．にて（前書き）

Don't leave me.

12：　北太平洋上あるいはワシントンD．C．にて

所信表明演説を終え、万雷の拍手のただ中で壇を降りようと身を翻した矢先――
前触れもなく突き上げるような衝撃が足元を揺るがして、ラクス・クラインは階段半ばでバランスを崩した。
転落しかけたところを、控えていた警備の連合兵たちが抱き支えた。
「大丈夫ですか」
「ええ、ありがとうございます」
挫いた足を裾に隠し、そのままうずくまったラクスは強いて笑む。
そうでなくとも激しい揺れに立ち上がることはままならず、議場は騒然と化した。
「……地震か？」
「いや、まさか。ここらは地盤が堅いし、そもそもあんな唐突な揺れから始まるものか」
兵士たちは怪訝そうに様子を見ている。
その合間にも強弱入り乱れた震動は続き、時折ひときわ強い衝撃に柱と壁がねじれてたわむ。
地震を想定していない石造りの議場の丸天井は、すでにして不吉な音をたてはじめていた。
「落ち着いて避難して下さい――順番を守って」
警備兵たちが誘導を始めた矢先、長時間の震動に耐えかねて大シャンデリアが落下した。
薄明かりのただ中を、眩い光を残したガラスが砕け散る――だがその音は空気をつんざく轟音に掻き消された。
議場のあちこちから悲鳴が上がり、武装兵の突入で混乱はさらに加速する。
「急ぎ退避して下さいッ！！　外で交戦中ですッ！！」
音割れするハンドスピーカーの反響に、思わずラクスは胸元で手を

組んだ。
その時傍らにふと人影が差した。

阿鼻叫喚の議場のただ中で、泰然としてオブザーバー席に座していたムルタ・アズラエルは、駆けつけた連合士官に写真を見せられて、心底のあきれ顔で鼻の上に皺を寄せた。
「……おいたが過ぎるねェ、ジブリール。この僕までまとめて始末する気かい？」
「理事、急いで退避を。このままでは時間の問題です」
連合士官にちらと視線を送り、大仰に彼は嘆息をついた。
「こりゃあ宇宙なんかより先にお仕置きがいるな、ヤツらは今ＪＯＳＨ－Ａ？」
「おそらく」
「やれやれ、ホント面倒かけさせる！」
ひとしきりぼやいた後、ようやくにムルタ・アズラエルは席を立った。
「じゃあ皆さんお先に失礼しますよ――せいぜい頑張って生き延びて下さい」
その声は混乱に掻き消されるが、彼は意に介さず議場を横断する。
「軍の出動はまだ？　いかにいっても首都なんだからさぁ」
と言いかけて、出動を命ずるべき人物が天井の崩落のただなかに消えたのをムルタは見る。
「あぁ、こりゃダメダメだ……」
嘆息混じりのその青い視線は、砂煙の向こうでうずくまっていたラクスの上で止まった。
「理事！」
急かす士官をよそ目に歩み寄って、ムルタは笑んで見おろす。
「――さあラクス・クライン、ちょうどｂｅｔｔｉｎｇ　ｉｎｔｅｒｖａｌだ。我々のゲームにノる、ノらない？」

怪訝にラクスは振り仰ぐ。
「アズラエル！」
震動の中を駆け寄り遮って立ちはだかるチャールズ・オルバーニに一瞥を投げかけて、ムルタはふところから銃を抜いた。
「僕ぁあなたには聞いてないんだな、事務総長どの」
ぐいと黒光りの銃口を額に押しつけられて、オルバーニは怯む。
その合間にも、真意を問うて視線が交錯する。
「君、“明日”が欲しいんでしょ？　ノるなら僕と一緒においで、ここで死なせるには正直惜しい」
差し出された手を、咄嗟にラクスは握った。

混乱して我先にとエントランスへと向かう人々の流れに逆らう。
ガラス張りの大廊下を奥へと進む連合軍士官たちのただなか、強く腕を掴まれ、大股に行く男に半ば引きずられるように従いながらラクスは問う。
「わたくしをどうなさるおつもりですの？」
「君はどうしてほしい？」
質問に質問を返されてラクスは言葉に窮する。
「ま、とりあえずジブリールとブルーノに鎖をつけるのが先だね」
とムルタ・アズラエルはひとりごちるようにぼやく。
その合間にも爆風にガラスがのきなみ砕け散る、外の煤臭い空気が砂煙とともに流れ込んできた。
「ったく、これじゃせっかくのガリアーノのスーツが汚れるじゃないか！」
ヤツのツケでもう一度仕立てさせてやる！　とアズラエルは瞬時背中に怒りを漲らせ、傍らの連合将校にぞんざいに指示を出した。
「三バカを使え、連中こういう時にしか役に立たないんだから――で、ラクス・クライン。あの青いほうのＭＳはいったい何？　どう見てもＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．のじゃないね」

彼の視線はビルの外に向いている。
ビルに背をむけ防戦一方の青いフレームのＭＳと、襲来し押しの一手の白いＭＳがせめぎあう。
最後の防衛線をごく眼前に、ラクスの表情は悲痛に曇る。
「わたくしの護衛について下さった方ですわ」
「はぁん、またどっかのロストナンバーか……やれやれ」
鼻で笑って、再びムルタ・アズラエルは背を向けた。
引きずられるように避難通路に入る直前、ラクスは振り返る。
地球連合安保理ビルを覆う全面ガラスの向こう、業火の中に降り立つ悪魔にも似たＭＳの群れが見えた。

＊＊＊＊＊

『ラクス・クライン心配だわー』
通信回線の向こうでハイネ・ヴェステンフルスが幾度目かの嘆きを漏らす。
『俺っちデビュー時からのファンなのよね……』
「ファンじゃなくても心配だと思うわ、この場合」
コックピットのただなか、イージスの各部スイッチをＯＮに入れる手を休めずにアスランは応じる。
「一体何があったのかしら」
ヴェステンフルス隊旗艦アルビオンのデッキ経由で接続する地上のＴＶ波は、どこも大西洋連邦首都ワシントンＤ．Ｃ．の一角がまさに焦土と化したさまを流し続けており、どのチャンネルも黒煙を巻き上げて崩れ落ちゆくビルを中継していた。
アナウンサーは巻き込まれた人々の救助作業が開始された――と告げるばかりで、肝心の一体何が起きたのかは不明だ。
司令のもとにはもう情報が集まっているのだろうが、ザラ隊戦闘開

始という一報を受け取りたたらを踏んでとって返した自分たちには、報道以上の現状がわからない。
だが確かに言えることはひとつ――映像を見る限り、あれは天災の範疇外だ。
『さすがにウチの攻撃じゃないよなぁ？　ワシントンD．C．に切り込めるくらいならとっくに戦争終わってるだろうし、連合もここぞと声高に非難声明出すだろうし、それにウチの議長閣下のお嬢さんをやっちゃうとか……ないよな？』
ハイネの言葉の最後あたりは上層部への疑念を色濃く含んでいて、アスランは首を振る。
「多分ね」
単純に、違う、と断言できないひっかかりはある。

なにもなければそれでよい、だがなにかあればなおよかろう。

父の目に映るラクス・クラインは多数あるカードの中の一枚なのだろう。
まさか手を下すような真似はしないと思いたいが、少なくとも今回のことも政治利用するに違いない――とは予感でなくもはや確信だ。
『射程距離に入ります。会敵まで距離２５００』
「了解」
『艦上から援護するぜ』
「期待してるわ」
ハイネもコートニーと同様で試験機を拝領している。
火器運用試験型ゲイツ改、Z．A．F．T．のMSとしては初のPS装甲の機体だ。ただし本来の用途が次世代MS用各種火器の評価試験用でバッテリーパックの消費がはなはだしいので、艦上から固定砲台としての援護が主眼となる。
そしてデータがとにかく欲しいという統合設計局派遣組の要望を反

映して、今回イージスにも急遽装備が追加された。
パンゲアがゲイツ改用に搭載していた予備のＭＡ－４Ｂフォルティス・レール砲とＭＡ－Ｍ０１ラケルタ・ビームサーベル。
『――装備してるだけでバッテリーの消費が進むから、戦闘行動中スキュラは使わないで。使われるとＰＳ装甲の保証ができないわ』
あなた無茶するから多分即落ちちゃう、と派遣チームエネルギー管理担当のシホ・ハーネンフースが渋い顔で言う。
『この機会にしっかりデータ取ってもらわないと。だから戦闘不能とか困るのよね』
久々だというのに彼女はぞんざい極まりない。
だがパイロットでもある彼女が、自身でデータ採取に乗り出さずこちらに任せてくれるあたり、信頼されているのだろう――とアスランは勝手に思っている。
「できるだけ気をつけるわ」
『やだ、確約してよ！　せっかくとりつけた貴重な機材なんだから！』
『会敵まで距離２０００』
夕闇の空と海のはざまに光芒が起きていた。
『スキュラ砲は使わないのよ！』
「了解。――アスラン・ザラ、イージス出る！」
起動音が震動となって伝わってくる――そして全身にかかるＧ。
カタパルトを射出された紅の機体が黄昏色を帯びて、夕闇迫る空へと躍り出た。
そしてグゥルを得て加速する。

＊＊＊＊＊

深い夕闇迫るただ中で足つきは煙幕を張り、２機の戦闘機がその煙

幕をかいくぐって上空へと出る。
撃ちかけられる無数のミサイル弾を撃ち落し爆発のあいだを縫うように、最大戦速でＭＳ部隊は接近を続ける。
だが艦上にいるはずのＭＳの位置が掴めない、射線が読めない、とイザークが透かし見た瞬間、すっと空気が引く気配がした。
「来るぞッ！！　散開ッ！」
突如二条の光線が走り、間一髪でデュエルとジンが回避する、しかし1機のディンが直撃をくらって爆発した。
チッとイザークは舌打ちする。
だが煙幕でこちらが見えないのはむこうも同様のはず、となれば。
「あの戦闘機が目だ！」
デュエルのシヴァ砲が炎を上げ、たてつづけに戦闘機を撃った。
煙幕の中に墜ちていく熱源に、ジンがランチャーを振りかざす。
『よっしゃ、いくぜ！』
戦闘機の潜り込んだ付近へと照準を合わせて打ち込んだ光芒――爆発と衝撃波が空気を震わせて瞬時煙幕が晴れ、足つき右舷部が見えた。
今度は艦橋、とディアッカが笑みを湛えた声で言う。
『さくさく決めるぜ！』
刹那。
巨砲を担いだ紅いストライクが飛翔して煙幕から飛び出てきた。
「――ッストライク！？」
イザークは顔を強張らせる、まさか同じ機体が搭載されているとは！
デュエルの射撃を交わし、ストライクルージュが向ける砲口はやがて光を放った。
ディン部隊が立て続けに的となり、援護を失ったジンのグゥルが貫かれ、瞬間放たれた光条は艦橋を掠めて走り抜けた。
ジンはなす術もなく遥か下の闇の海へと落下していく。
同じく重力に引かれて降下するルージュをデュエルとブリッツが猛然と追う。

撃ちかけられたビームを交わしたものの、しかし追撃の2機めがけて艦の主砲とミサイルが降り注ぐ。
やむなく後退するニコルのその傍らを、ミサイルを交わしながらデュエルは突進する。
『イザーク！』
「早々に勝負をつけるッ！！」
本来有視界戦闘にも無理がある時間帯だ、急がねばならない。
ＣＩＷＳの迎撃を交わしてデュエルは足つきへと取り付く。
追って着艦したストライクルージュの砲をビームサーベルで叩き斬る、逃れるようにストライクは空中へと再び飛翔した。
「ちょこまかと！」
どうやらあのパイロットは相変わらず搭乗しているらしい、この反応の早さが忌々しい！
取り付いたデュエルを振り落とそうとするトリッキーな操作で白亜の巨艦は大きく傾く。
「――貴様らのせいでッ！！」
いったい何人の同胞が死んだと思ってるんだッ！！
シヴァ砲を放つ中でバレルロールで大きく足つきは回転し、デュエルもまた落下する。
上手くグゥルに着地したものの、足つきの主砲がそのデュエルを狙って光を含んだ。
……まずい。
瞬時イザークはサイドモニターに視線を走らせて息を詰める。
――回避にも場所が悪すぎる、後方の直線上射程距離内にクストーがいる。
一瞬の躊躇の後で「クソッ！！」と叫び、デュエルのマニュピレータはシールドをつかむ。
どこまで盾になれるかわからんがやるしかないだろうッ！！
覚悟を決めてバーニア全開でスタートしたその瞬間。
空からの一撃が足つきの主砲を横殴りに貫く――一瞬後光は大きく

膨らんで、爆発と轟音が同心円状に拡散した。
『無茶よ！』
夜の空気を揺るがす焔のむこう、砲を向けたイージスと後続の艦が見えた。
かろうじて上に逸れたもののグゥルを余波で吹き飛ばされて、不本意ながらデュエルは落下する。
しかし安堵に知らず眉間は緩む。
「仕方なかろうがッ！！　お前が遅いからだッ！！」
『ごめん！』
置き土産とばかりにデュエルはライフルを空に向ける。
スコープを引き出してイザークは戦闘機を捉え、トリガーを引き絞った。
ビームを受けてその戦闘機は光を含んで爆発し、音を立てて四散した。
その黒煙の向こうでイージスとブリッツがストライクルージュに切り込んでいくのを見届けて、デュエルは水飛沫に沈んだ。

＊＊＊＊＊

あの眼下の白亜の巨艦はアルビオンに任せよう、問題は紅いストライク！
「アレを艦から引きはがすわよ、ニコル！」
声を張り上げたアスランに、すぐさまニコルの応えが返ってきた。
『――行きましょうッ！』
ブリッツに挑みかかったストライクルージュに向けてイージスが射撃で牽制する。
咄嗟にシールドで防いだストライクに、ブリッツが左手からグレイプニールを発射し、ストライクはそれをサーベルで切り捨てた。

間髪入れずブリッツが右手のトリケロスを構え発射する。
発射の直後、援護の戦闘機がブリッツの右腕を狙ってミサイルを放った。
その爆発に乗じて肉迫したストライクのビームサーベルが一閃し、ブリッツの右腕を弾き飛ばす。
『うわァァァッ！』
「ニコルッ！」
落下するブリッツを踏み台に、ストライクルージュはそのままさらに飛翔し、ビームサーベルを抜いて迫る。
キラ！
アスランは眉間に皺を寄せる――腰部にマウントされたラケルタ・ビームサーベルを抜いて2つの柄を連結した双頭刃形態（アンビデクストラス・ハルバード）に転化させて迎えうつ。
最大出力で干渉するビームの刃は空気すらも激しく灼いて、視界いっぱいに白い闇が広がる。
その向こうにストライクルージュのツインアイが陰って見えた。
機体をぶつけあうような二度三度の切り返し、より優位なポジションを探りながら膠着するかにみえた矢先。
『まだまだぁ！』
不意の声とともにオレンジ色の影がよぎる――
鍔迫り合いの最中に突進してきたゲイツ改の蹴りを横っ腹に受けて、ストライクルージュははじき飛んだ。
夜目にも鮮やかなオレンジのゲイツ改は大型リフターに着地する。
『転送データみてブリッジでシホが大騒ぎだ！　お前ちょっとセーブしろよ！』
「そっちこそバッテリーは！？」
ゲイツ改は甲板でケーブルに接続しての運用だったはず――
『どっこいついてるけど頑張っても5分が限度だな！　こいつぁ予備のパックどっかにつけやがれって上申できるね！』
突然ゲイツの踏みしめるリフターが白煙を上げた。

一瞬の油断だった。
落下しながらストライクの放つ光の驟雨、間一髪で逃れたイージスの足元のグゥルも火を噴く。
咄嗟にイージスは空中へと飛び出す。
眼下ではアルビオンが足つきに猛撃を仕掛けて、海上は花火の残像とともに白く煙っている。
そして――ここは足つきのちょうど死角。
シホにきつく言い渡されたことが脳裏をちらと過ぎりもする、だがここはイレギュラーに終始する戦場。
アスランは躊躇しなかった。
イージスはＭＡ形態へと転化し、四つ指のクローが開いて太い光が空域を貫く。
狙いはストライクをかすめ白い艦へと向かう――だが敵も迅速だった。
急速に艦体が傾けられたが為にスキュラのビームは機関部を掠めた程度にすぎず、足つきは左舷部から炎と煙を上げて大きく右に傾き、なお前進を続ける。
操桿士は相当な手慣れなのだろう。
落下しながらアスランは微かな感嘆をすら覚える。
目を転じれば眼下に小さな島の影が見える、あそこへ――とスラスターを調整しているその最中、熱源が引っかかり、敵機急速接近の警報が鳴り響いた。
『アスラァァァンッ！！』
怒りに逆上したキラの絶叫が耳を打つ。
キラッ！？
クローズドに固定しているはずの音声回線は彼の絶叫を拾う。
換装したストライクルージュが主翼と４枚のバーニアを広げて追い縋り、ビームサーベルを抜いた。
逆制動をかけながらライフルを向けたが、ストライクの光刃に薙がれた。

警告音を圧倒するのはキラの絶叫。
――粛々と処理しようとしていた自分の、おさえつけていた感情がひどく揺れる。
『うわァァァァァッ！！』
鮮やかにライフルは斬り落とされて闇のただなか爆発する――単なる鉄塊と化したライフルを投げ捨て、腕部にマウントされたビームサーベルをＯＮにして次波を受け止める。
その合間にも背後に陸が迫っていた。
『アスラァァァン――――ッ！！』
怨嗟と憎悪の泣き声でキラが自分の名を絶叫して、しゃにむに打ちかかってくる。
『君は……君はッ！！　一体どこまで僕から奪えば気が済むんだよ――――ッ！！？』
鋭い糾弾にアスランは息を呑む。
『ヘリオポリスを壊してッ――アークエンジェルを沈めてッ――僕の友だちを殺してッ――そして僕にも死ねっていうッ！！！』
重ねる罪を引きずり出されて、心臓が冷たい手で鷲掴みされるかの戦慄を覚えた。
全部どうしようもない事実だ。
そして同時に先ほどの光景がよみがえる――隻眼の女の詰りも、あのオーブの士官に向けられた悪意も。
冷たい汗がヘルメットの内側を伝う。
『うわァァァァッ！！』
気迫みなぎるストライクのソードが弧を描いて振り下ろされ、咄嗟にシールドを掲げる。
直後背面から落下した凄まじい衝撃が強固なはずのコックピット内部にまで伝わってきて、前のめりになったアスランは顔を歪めて振り仰ぐ。
全周囲モニターの隅に次なる一波が映る。
ストライクの凄まじい肉迫にひたすら防御一方の最中、ＰＳ警告音

だけが耳につく。
だが息をつく間がない。
ストライクの蹴りが側部から襲い掛かってきて、イージスはたまらずに吹っ飛び、シールドが投げ出される。
ＰＳ装甲が落ちる――落ちた！
はっとして赤いモニターに視線を走らせたその時、躊躇いなく眼前でストライクがソードを大きく振りかざす姿が見えた。
断罪の刃の陰を目前に、確実に捉えられた、と瞬時すっと体中から血の気が引く。
ペダルを踏み込むこともトリガーを引くことも忘れて、諦めと自棄の半ばでアスランはただその永遠にも思える時を待つ。
私はここまでキラを追い詰めた。
討てばいい、――それで終わる。
懊悩と逡巡の決着点が見えたような気がした刹那。
『アスランッ――――――！！』
甲高い叫びが耳朶を打った。
「ニコルッ！？」
背筋が凍り付く。
「――――やめて、来ないでッ！！」
ミラージュコロイドを脱ぎ捨てるように突如現れた黒いブリッツがストライクの胸元に飛び込みスピアを繰り出す。
回避したストライクの左肩を貫通して爆発を起こしたが、しかし反射的にストライクは振りかざしていたソードをそちら側に向けた。
『邪魔するなァァァッ！！』
全てが緩やかに見える。
声を上げることさえできず、逃げて、と言うにも間がなかった。
か細い月光を帯びて振りかざされたソードは腹部を薙いだ。
通信は途絶え、切り裂かれたブリッツは閃光を伴って爆発を起こした。
「……ニコル？」

闇を凌駕して白く覆う視界の只中、すぐ間近で四散する機体の陰が見えた。
何が起きたの？……嘘でしょう？
降り注ぐ部品と残骸の雨がイージスの灰色の装甲に打ち付ける。
黒煙に火を残して、無残に人型であったものが崩れ落ちた。
言葉にもならず、アスランは目を見開いたまま視線を転じた。
呆然としたかに眼前に立ち尽くしている紅いＭＳ。
海から上がってきたジンとデュエルがレーダー内に入ったのも気づかなかった。
「よくもニコルを……」
見開いた目から涙が伝う。
「よくも――――ッ！！」
立ちすくんで無防備なストライクルージュに、落ちていたブリッツのスピアを手に取り立ち向かおうとした時、制止するように眼前にジンが立ちはだかった。
『撤退しろ、アスランッ！！』
「どいてディアッカッ！！――――アイツを殺せないッ！！」
追撃を振り切って上空を最大戦速で飛翔する足つきが援護射撃を開始する。
降り注ぐミサイルとバルカン、一発でも当たればディアクティブモードのこの機体は滅茶苦茶になってしまうとしても。
目の前が真っ白で、振り切れた自分を止められない。
『ＰＳ装甲落ちて何ができるってんだよッ！！』
「まだ動けるッ！　まだ戦えるわッ！！」
『馬鹿ッ！！　何ほざいてるんだッ！！』
ミサイルをシヴァ砲で迎撃するイザークの怒鳴り声が聞こえる。
ジンに押し切られて、イージスは崖っぷちからそのまま海へと投げ出された。
『俺らで時間を稼ぐからアスランを艦に連れて行け、イザークッ！！』

通信から声が漏れてくる。
ともに闇の海中に入ったデュエルに無理やり牽引されて、レバーを幾度引いてももはや浮かび上がることもできない。
『暴れるなッ！！』
イザークの声、無力さに前のめりのままアスランはただ泣いた。

＊＊＊＊＊

ようやくに白亜の巨艦から逃れ、クストーに辿り着く。
結構打撃を与えたはずだが、こちらが蒙った損害も甚大だ、とディアッカは嘆息をつく。
――ラスティ、ミゲル、オロール、マシュー、そしてとうとうニコルまで？
いまいち信じられないのは、現実に頭が追いついていないせいか。
死んだ？　……アイツが死んだのか？　さっきまでそこにいたんだぞ？
モニター越しに、ディアッカは灰色のイージス前のキャットウォークに整備士たちが集まっているのに気づく。
「何だよ、アレ」
ハッチからキャットウォークに降り立ったディアッカはそちらを眺めて足を止める。
微かに眉間に皺を寄せて佇んでいたイザークが振り返る。
「内部からロックをかけてアスランが出てこん……あのザマだ」
整備士たちは外部スピーカーに懸命に何か話しかけている。
「今からではもう無理だ、追撃にも引き離されてるから」
「次の機会がある、な」
やがて整備士たちは外部操作し、その壁の向こうから姿を現した白衣の医師がハッチから乗り込む。

「おい！　何してんだよ！」
ただならぬ空気にディアッカは人垣を割って入り、声を大にする。
腕組みのハイネ・ヴェステンフルスがちらとも見ずに答えた。
「鎮静剤。クストーの艦長さんと話してちょっと寝てもらおうぜってことになったのよ」
「目の前で自分を庇って仲間がやられたんじゃ、さすがにキツイだろ……」
年若いパイロットを失ったことにショックを受けたのか、整備士たちの口調も重い。
抱きかかえられてコックピットから姿を現したアスランはぐったりと意識のない様子で、そのまま格納庫から運び出された。
しばらく見守っていたハイネが「んじゃ、俺はアルビオン帰ってカーペンタリアに指示仰ぐから。お前らも現状待機な」と踵を返し、ディアッカとイザークは無言のままロッカールームに足を向けた。

＊＊＊＊＊

のろのろとした着替えの動作、ロッカールームに横たわる重苦しい沈黙。
ブリッツがその腹部を紅いストライクのソードに薙がれた、その光景が脳裏に焼きついて離れない。
爆散したブリッツの中心部にコックピットはあった、とイザークの思考はそこまで及び、顔からさらに血の気が引く。
あどけない面差しのニコルを思い返す。
アイツの最後が、まさかあんなに無惨なものになろうとは、誰が想像した？
不意に、傍らで上着に袖を通していたディアッカが深々と息をついた。

「なんか、信じられねぇな」
途端、必死にこらえていたものが堰を切ったように溢れ出て、思わずイザークは声の限りに叫んだ。
「ッちっくしょうッ！！」
やりきれなさをぶつけて殴りつけるロッカー、拳の痛みさえ鈍い。
やがてイザークは両手の拳をそのままに、ロッカーに額を押し付けて唇を噛み締める。
「なんでニコルがこんなところで死ななきゃならなかったッ！？こんなところでッ！！」
ニコルはまだ１５歳だった、背も小さくて、声変わりさえしていなかった。
ピアノに秀でていて、いずれはＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．一のピアニストにもなれたはずだったのに――なのにアイツは、こんな岩山のごとき島の連なる不毛な風景、荒涼たる地球の果てで、あのストライクに一撃で殺された。
「ここで吠えたって仕方ないだろ。お前も落ち着けよ」
暗澹とした表情で、それでも冷静なディアッカはベンチに座る。
「くそッ……くっそォォッ！！」
年下だと侮って、臆病者と嘲笑って、ろくに相手もせずにここまできた。もっと優しくしてやることだってできたはずなのに――と後悔さえ過ぎる。
目いっぱいに溢れた涙はやがてイザークの頬を伝った。
その時、突然シュンという音を立ててドアが開いた。
「……私を責めればいいでしょう、私を庇って死んだと……」
その声に吃驚して、イザークはロッカーを殴る拳を止めて振り返る。
ベンチに腰掛けて身を傾けていたディアッカも目を剥く。
「アスラン！？」
眼差しに溢れる涙を慌ててイザークは拭う。
パイロットスーツのままのアスランが足取りもおぼつかなく入ってくる。

「おい、アスランッ！？お前……ッ！」
薬を打たれてまだ１０分と経っていない。
儚いほどの淡い輪郭で、どこかぼんやりとした面差しのアスランが問う。
「ニコルのロッカー、……どれ？　遺品、整理しなきゃ……」
イザークとディアッカの視線が一つのロッカーに向く。
歩み寄ったアスランが指先を伸ばして開けば、紅の制服がハンガーにかけられていた。
いまだ残る温もりを求めるように彼女は制服を引き出す。
その裾に絡むようにばさりと落ちた紙の群れに、３人の視線は落ちる――手書きの楽譜だった。
「ニコル……殺されるのは私だったのに……なんで……？」
楽譜の只中でアスランはふうっと泣き崩れる。
「もっと早く仕留めるべきだった……私の甘さがあなたを殺したッ！！」
彼女は制服に顔を寄せてむせび泣く。
「……絶対許さない……ッ！！絶対……ッ！！」
アスランは自分よりもっと深くニコルの死に打撃を受けている、イザークは呆然とした心持ちでそれを眺めていた。
やがて嘆息混じりに立ち上がったディアッカは、楽譜を一枚一枚拾いながら屈みこむ。
「お前まだ寝てろって。隊長がそんなんでどうするよ」
ロッカーに楽譜をおさめ、赤い制服を抱き込んでうずくまるように嗚咽するアスランを立たせて、ディアッカは振り返る。
「ちょっとセンセのとこ連れて行って来る、これじゃまだ追加がいりそうだ」
「ああ」
涙をこらえるように眉間を顰めたイザークは軽く頷いて、投げ渡されたニコルの赤服を受け取った。
まだ、あたたかい。

＊＊＊＊＊

嗚咽しながらも大人しくベッドに横たわったアスランの細腕に注射針が刺さる。

「なあ、絶望すんなよ」

ディアッカの突然の呼びかけに、虚ろに潤んだエメラルドグリーンの目が動いた。

「もしかしたらニコル生きてるかもしんねぇだろ」

「……いったい何を」

「や、確かにブリッツはあんなことになっちゃったけど、俺たち確定的なものを見たわけじゃないんだから」

――例えばストライクを見ればいい、機体に修復不能なほどの損害を負ってなおパイロットは生きている。

「艦長と一緒にカーペンタリアのお偉いさんに捜索隊かけあってみるからさ……だから、な？」

慰めの要素が濃いのは否定しない。

だがどれほどか細い希望のよすがであっても、今は繋ぐべきだとディアッカは思う。

「――例えば見つかんなくても、お前だけは信じてやんなきゃ」

「そうね」とアスランは全く信じていない様子で呟き、やがてその閉じた瞼の端から涙が零れ落ちた。

痛々しさにディアッカは視線を逸らす。

「ちょっと強いが、これなら大丈夫だろう」

処置を終えた医師の言葉に頷いて、ディアッカは再びロッカールームへと足を向けた。

覗いたニコルのロッカーは空、たぶんイザークが纏めたのだろう。

その足でディアッカは物品搬入室へと顔を出す。

テーブルの上には、ニコル・アマルフィと走り書きされたダンボールがひとつ、乗っていた。
「これ、もらってっていい？」
「好きにしろ」
奥で同じような箱を整理していた兵士が微かに振り向いて、陰鬱な声で答えた。
遺品として本国に送り返すにはまだ早い――ダンボールを抱えて狭い廊下を歩きながらディアッカは思う――例えばこれが仲間の死からの逃避、と周りの目には映ろうとも。
ニコルはイジめてもイジっても必死でついてくる可愛いヤツだった。こんなことならもっとアイツの話を聞いてやるんだった、まともに相手をしてやればよかった。
……その忸怩たる思いが、この自分をしてニコルの生存に執着させる。

13：北太平洋上にて（前書き）

In those days,
You never said you were in love,
I never held you in my arms.

13：　北太平洋上にて

滑走路を吹き抜ける夕方の風に、薄青のワンピースドレスの裾が翻る。
事務官とおぼしき人に慇懃に先導されてタラップを上がりながら、ラクス・クラインは初めての飛行機へと踏み込む。
とりまく人々は皆ナチュラル――
奇異なるものを眺めるような視線のただなかで、まるでひとりぼっちの迷い子のような、と彼女は少々途方に暮れる。
ナチュラルに触れる機会は過去一度あったきり、それもＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の庭とも言うべき宇宙でのわずかな日数のこと。
――あの時はコーディネイターである少年が身を挺して守ってくれた。
ラクスの心はふと過去へと飛ぶ。
彼の自己犠牲と優しさは、今も心の奥深くをあたたかくする。そして彼を思い出すとき、哀しくもなる。
彼はナチュラルとコーディネイターのはざまで悩み、愛する者と戦う現実に苦しみながらも武器をとるひとだった。
そして同時に彼に対峙する側の存在もラクスは知っている。
心の痛みを圧して戦い、頑なな決意で自らを追い詰めるひとだった。
すれ違いを繰り返し手をとりあうこともできずに、結局は戦わざるをえないというのなら、それはとてもとても哀しいこと――とラクスは思う。
そして彼らの今を案じながら、導かれたキャビン中腹ＶＩＰ専用室。
「やっぱり大統領専用機（ＶＣ－２５Ｃ－３２Ａ）のほうがしつらえはいいんだよね、まあこれしょせんバックアップ機だし？」
とムルタ・アズラエルは批評しながらもゆったりとシートに身を埋めていた。
「座りたまえよ、ラクス・クライン」

促されてラクスもその向かいのソファーに腰を下ろす。
その合間にも上から下までとっくりと眺めて、難しい顔でムルタは口を切った。
「んーちょっとサイズが大きかったかァ。でもさっきの白いドレスってオートクチュールでしょ？　プリッチアーモの」
「そうですけれどもともとは母の品ですもの。わたくしにぴったりというわけではありませんわ、先ほどもちょっと補正しておりましたし」
応じてラクスは小首を傾ける。
「へえ――君、普段どこの着てるの？　まさかP．L．A．N．T．のえげつない工業製品じゃないよね？」
窺うように彼は見る。
あまり推察は得意ではないが、趣味を推し量られている？とラクスはぼんやりと思う。
最初の出会いからして今までにない人とは思っていたが、よほどお洒落好きなのだろう。
「メリージ・ダ・カラヴァッジョですわ。アプリリウスに支店がありますのよ」
「あぁ、そりゃコーディネイターらしからぬよい趣味だ。僕もカラヴァッジョは好きでね、夏のミラノコレクションの時は必ず本店に寄る」
破顔したムルタは手元のインターホンをコールする。
『はい』
「カラヴァッジョN．Y．に誰か採寸に寄越せって連絡してくれたまえね――それから三バカ用に残してたソキウスがまだ何体かあったろう、あれＪＯＳＨ－Ａにすぐ運べってのをセレスティンに」
『承りました』
さて、とムルタは手を組んだ。
「わりといい演説だったけど背伸びしすぎかなァ。君はお父上の後を継いで政治家にでもなりたいの？」

透かし見るような青い眼差しを、ただラクスは見返す。
沈黙を是と受け取ったのか、ムルタは大仰に肩をすくめた。
「あァそうならやめといたほうがいい！　さっきも言ったけど人には適性ってものがあるから。優しい人たちにちやほやされてるくらいで満足しておかないと、周りも巻き込んで不幸になるよ。――それともお姫さまはぬるま湯がイヤになっちゃったわけ？」
なぜこの人は、とラクスは途方に暮れる。
先ほどからこの自分の領域に荒々しく無遠慮に踏み込んでくるのか。
だが核心を突かれたも同然だった。
愛する父に守られ、大人たちにかしずかれ、誰もがこの自分を肯定しほめたたえる。
なにもかもを許されてきた――どこまでもあたたかくて優しい、淡い色彩の世界。
いつかは愛すべき人がそこに加わり、自分もまた母のように穏やかに生きていくのだと、ずっとそう信じていた。
しかし宇宙での孤独のあとに未知なる人々と出会ったあの時、垣間見た外の世界は灼熱の極彩色だった。
そして思った、自分もまた踏み出さねばならない、と――。
「君ってわかりやすいねェ、ラクス・クライン？　ますます政治屋向きじゃないなァ」
その時、客室のドアを叩く音に彼はあからさまに不機嫌となり、体を捻った。
「何？」
シュンという音を立てて開くドア、入ってくる女性は彼の秘書だろう。
「理事、ヘブンズベースからプリンシパリティの回収について了承をと言ってきていますが」
「わざわざそっちからか……ってももうあの級の艦の運用性は十分証明されたも同然だし、ドミニオンもじき就航だしなァ」
「どうなさいます？」

でも戦ってでも回収しようとなると、やっぱりとんでもない出費になるんだよねェ、と彼は渋る。
「んん……アークエンジェルのブラックボックスの中も確かめずにみすみす沈めるのも惜しいか。せいぜいオーブご自慢の技術の粋とやらを見せてもらおうじゃない？」
アークエンジェル？
その一語をラクスは聞き咎める。
「あの艦がどうなさったんですの？」
「へぇ知ってるんだ。アレ沈められちゃったんだよね、君んとこの軍に」
おもちゃが壊れた、と言うのと同じくらいの軽さでムルタは応えながら書類にサインする。
「納品直前に製造元が襲撃されちゃったでしょ？　損害賠償請求して代替艦を造らせてたんだけど、それもついでに見つかっちゃうって一体誰がリークしたんだか……オーブの情報管理も言うわりに杜撰だね」
モルゲンレーテはビジネスパートナー失格、と彼は烙印を押して、秘書に書類を渡した。
ラクスの面からは知らず血の気が引く。
「あなたは……その艦にどれだけの人が乗っていたのか、お考えにならないのですか」
瞬時厳しく咎める固い声に、しかしムルタは「はァん」と鼻で笑って聞き流した。
「いちいちそんなの考えるようじゃ、やっぱり政治屋やろうなんて到底ムリムリだね」
いなされて、――彼らはまだ戦っていた、とラクスは沈痛に目を伏せる。
あの無音の宇宙で、手を差し伸べてくれた優しい少年と。
白百合を模した献花に、瞬時戦いを忘れた兵士である少女と。
「わたくしは政治家になりたいわけではありません。ただ、哀しい

ものを見たくないだけですわ」
本来戦うべきでなかったひとたち――自分は彼らの相克にこの世界のゆがみを見た、と思った。
いったい彼らの戦いはどこで終わるのだろう……？

＊＊＊＊＊

連鎖するとわかっていて何故繰り返すのでしょう？

撃つことでしか慰められない魂もある、と応じたのは自分。
――あなたは本当にそれで救われるのか、と問うたのは彼女。
……救いなんていらない、そんなものは知らない。
アスランはようやくに目を開く。
どれくらい眠っていたのか、と白い天井を眺めながらぼんやりと思う。
そして手元にあったナースコールのボタンを押す。
『はい』
「今の状況を教えて、どうなってるの？」
ややあって看護師が答える。
『追撃中、だそうです』
「ありがとう」
目覚めた激情に突き動かされるように上半身を起こし、自分に繋がっている点滴の針を引き抜く。
終わらせる――仕留める、今度こそ。
くつろげていたパイロットスーツを着直して、ベッドを降りる。
廊下に出た瞬間、人影とぶつかりそうになった。
「おい、大丈夫かよ」

肩にかかる強張った褐色の手、声のトーンはバス。……ディアッカだ。
「大丈夫よ。今足つきはどこ？」
「さっきＮ３０゛７５゛１２゛のＷ１５５゛０６゛２４゛あたりってとこだったかな。連合艦隊が南下中で合流前に追いつけってんで猛追中」
「そう」
逃がしはしない。

まだ時計の針は夜明け前――
緊張満ちるクストーの発令所、暗いブリーフィングルームに赤い光で計器類が浮かび上がる。
モンロー艦長とイザークが振り返った。
アスランは物言いたげな艦長を見返して平坦に言う。
「ご心配をおかけしました」
「いや」
そしてイザークの視線を黙殺したままに、アスランはパネルに目を落とす。
モンローが呟いた。
「連合の制空圏内に入るまでに間に合えばよいがね」
「アルビオンは？」
「急遽召還された」
カーペンタリアも大騒ぎだ、とモンローの眉間には深い皺が寄る。
「連合ビルの襲撃で連合穏健派が一網打尽だ、ラクス・クラインも行方がわからん。いったい誰がしでかしたのかはしらんが……また情勢が動くだろう」
そんなことは知らない。
何ら感慨なくアスランはパネルに目を落とす。
今はただ戦う、それだけだ。

そしてまんじりともしない中、不意にオペレーターが鋭い声を上げた。
「レーダーに艦影！」
立体パネルで海図を見ていたアスランたちははじかれたように振り向いた。
レーダーパネルに動く光点が写る。
「捕捉しました、足つきです。射程距離内まであと６００秒！」
勢いづくクルーたちの只中で、艦長がおもむろに言った。
「岩礁地帯だな、足場には困らんだろう……日の出もそう遠くない。仕掛けるには有利か」
腕組みのディアッカが言う。
「やっぱ俺はバスターで出させてもらうぜ」
バスターの内部駆動系に異常はなかった。遠距離射撃に限定するならばおそらく使用に耐えられるだろう。
「いいわ。回避だけは徹底して」
アスランは簡潔に応じて、その硬質な声で指示を出した。
「戦闘準備に入りましょう。パイロットは控え室に全員集まるようにアナウンスを」

＊＊＊＊＊

出撃を控えたパイロットルームの空気はこれまで以上に張りつめていた。
ディンチームもストライクにより幾人ものパイロットを欠き、その仇討ち戦への意気は高い。
そして艦内で可愛がられていたニコルの死は、彼らの憎しみを一層増幅させる。

パイロットスーツに着替えてイザークもまた時を待つ。
――だが気がかりなのはアスランだ。アイツは、大丈夫なのか？
取り乱して泣き崩れて、先ほどはなんとか立ち戻ったようにも見えたが、ひどい違和感が否めなかった。
気力で辛うじて自らを保っているような印象すらある。
憂慮するその時、ドアが微かな音を立てて開く、そして皆が目を転じる。
控えルームに姿を現したアスランは、感情をぬぐい去ったように無表情で、一切の柔らかさを脱ぎ捨てていた。
たちどころに彼女が場を支配する――
アスランはパイロット全員を見回し低い声で平坦に告げる。
「バスターは後方から足つきを。デュエルとディン部隊はバスターを援護しつつ迎撃に専念して。ストライクは私が仕留めます」
仕留める、とアスランは言った。
「本気で殺りにいくんだな」
壁に身を凭せかけたディアッカが呟く。
弟のように可愛がっていたニコルを失って、誰よりも辛いだろう。
その仇討ちの心意気は汲んでやりたい、あの忌々しいストライクをアスランが討ちたいというのならば、今回裏方に回ることも仕方ない。
だが。
「お前ひとりでストライクをか」
懸念するイザークに、アスランは極めて無機質に答えた。
「そうよ、余計な手出しはいらないわ」
否やを許さず彼女は身を翻した。
「じゃあもういい？　行きましょう」
ヘルメットを小脇に抱えたアスランは殺気をすら漂わせて、そのまま真っ先に格納庫へと進む。
――戦いを渇望して身を投じる、あれがアイツか？
イザークは鼻白む。

戦いに臨む時はいつもいつも憂鬱そうで、勝利したとしても喜んだ姿など見せたこともなかったのに――こんなアスランを、自分は見たことがない！

僕はアスランが心配なんです。……いつか壊れちゃうんじゃないかなって。

よりによってそのニコルが引き金になるとは！

「――おい待てッ！！」

「やめとけって。今のアイツに余計なこと言うなよ、イザーク」

ディアッカが難しい顔でこちらを見て首を振る。

「アスランみたいなタイプがぶっ壊れるとホント怖いんだぜ？　痛い目見たくなけりゃここは素直に言うこと聞くべき」

いさめられてイザークは顔を顰め「黙れ！」と一蹴して後を追う。

どう考えても、あんなのは尋常ではない！

後に従うパイロットたちをかきわけて、アスランに追い縋る。

「おいッ！！」

力任せに肩を掴む。

「お前そんな状態で――」

出撃するのはやめろ、と言いかけてしかし言葉は続かなかった。

振り返りざまにアスランが手を伸ばし、この襟元を掴んで引き寄せる。

ごく間近でエメラルドの眼差しが振り仰いで、彼女が微笑むのは一瞬――その艶然として壮絶で、そして触れれば壊れそうな笑みにイザークは息を呑む。

直後。

両頬を彼女の両手で包み込まれて、そして唇にやわらかさが兆した。

「……ッ！！」

むせかえるような白百合の香り――すべての言葉を封殺して、やがて糸をひいて舌と唇が離れる。
イザークが口元を押さえて呆然とする傍らを、指先で紅い唇を拭いたアスランが通り過ぎた。
「行きましょう。続きは後よ」
沈黙のパイロットたちが行く中に取り残されてひとり、……氷だ、とイザークは思った。

＊＊＊＊＊

涙はもう出ない。
――ここで終わらせる。
コックピットの中で艦が浮上するのを待つこの時間さえも惜しい。
早くストライクと、キラと戦いたい。
ここまで痛切に戦いを望んだことははじめてだ、痛烈に誰かを欲したことも。
アスランはうっすらと瞼を押し上げる。
世界がすべて色褪せて見える。
やがて頭上のハッチが開き、垂直カタパルトがせり上がっていく。
アスランは目を上げて、音声回線から流れてくる管制官のカウントダウンの声を聞きながら射出の時を待つ。
『――カタパルトオールグリーン。射出ＯＫ、発進よろし。……ご武運を』
コントロールを移譲されて、アスランは振り仰ぐ。
待ち焦がれたその時。
「アスラン・ザラ、イージス出るッ！」
全力でイージスをスタートさせる。
地球の重力を振り切って紅く染まる機体が暗闇へと飛翔し、間をお

かずして射出されたグゥルを踏みしめる。
並ぶデュエル、バスター、そしてディンが射出される。
月光に浮かび上がる白い艦のぼんやりとした輪郭が、モニターに映し出された。
『おっぱじめるぜ！』
ディアッカの声とともに、バスターの超高インパルス長距離射撃砲が光を放ち、戦端は開かれた。
アークエンジェルは牽制するようにミサイル群を撃ちかける。
それらはことごとくバスターの砲撃によって宙で爆散した。
そしてそれを擁護するデュエルとディン部隊が前面に出る。
撃ち掛けられるミサイルの砲撃をかいくぐりながら、イージスは海面すれすれへと急降下する。
ミサイルはその機動を追って互いに競り合い、海面で爆発を起こした。
どこ――？
追い求めるようにアスランは視線を巡らせる。
ピ、と機械音が熱源を捕捉したことを告げる。
ストライクが足つきの後部甲板へと降り立ち砲を構えるのを見咎めて、知らず笑みが浮かぶ。
――見つけた、キラ！
イージスは足つきへと接近し、ストライクめがけてライフルを放つ。
ストライクはビームをシールドで受け、甲板を蹴って背に負った砲を向ける。
射線上から回避しながらシールドを投げる、ストライクの抱える砲と足つきとをつなぐケーブルが乱れ千切れて、宙に躍った。
収束した光は力を失い、それでも空域を駆け抜ける。
イージスの携えていたライフルはビームを真っ向から受け、武器をひとつ奪われたことにアスランは舌打ちする。
ビームライフルは眼前で爆発した。
時同じくして、バスターの放ったビームが足つきの砲台を潰し、艦

橋背後のミサイル管が大きく誘発されて爆発を起こした。
遮る爆煙の中をストライクが切り裂くようにビームライフルを撃ちかける。
足つきの必死の回避、さらにバスターの放つ光条は足つきの左舷を貫いて周辺を大きくえぐった。
足つきは左舷から煙を噴き出し、大きく傾きながら急速に高度を落としていく。
爆煙のただなか、グゥルの上へと戻り、アスランは索敵を開始する。
足場はもうそう多くない――いた！
バーニアを吹かせて煙の中から飛び出してくるストライクの動きを捉える。
それ目掛けてイージスは再びグゥルから飛び降り、腕にマウントされたビームサーベルをＯＮにして打ちかかる。
激突に揺れる甲板上、ストライクの真横に突如グゥルから飛び降りたデュエルが現れて、大きくストライクを蹴りつけた。
こちらにだけ集中していたストライクはたまらず横へと吹っ飛ばされる。
『ッストライクッ！！』
聞きなれた声に、アスランは瞬時我に立ち戻る。
「イザークッ！？」
『お前にだけやらせるわけにはいかんだろうッ！！』
気づけばディン部隊も足つき周辺へと集まってきていた。
アスランは顔を歪める。
ストライクはバーニアを吹かせて体勢を直し、落下しながらライフルを抜いて連射する。
艦橋付近にいたディンを1機、また1機と貫いていく。
『往生際の悪いッ！！　いくぞッ！！』
「やめて、下がってッ！！」
『アスランッ！！』
焦れたような声に名を呼ばれて、アスランは頭を振る。

いつもいつも振り返ればイザークがいた、今もそう。
守って支えようとする手をいつも感じていた。
「ラスティは私のせいで死んだわ――ニコルもよ」
やがて激してアスランは声を張り上げる。
「――――あなたまで死なせるわけにはいかないのよッ！！」
イージスはストライクへと猛然と突っ込む、ストライクがビームサーベルで受ける。
確かに腕を上げた。だがまだ甘いッ！！
ポジション争いに競り勝ってイージスがビームサーベルを凪いだ刹那、ストライクの右腕が関節から大きく視野の外へと弾き跳んだ。
激しいスパークとともにそのまま体勢を崩したストライクは足つきへの着艦コースから大きく逸れる。
キラ、キラ、キラ。
私はあなたの大事なものを奪いつくした、――でもあなたも同じのはず。
――これ以上あなたが私の大事な誰かを殺す前に、私が決着をつけるッ！！
イージスのバーニアをフルスロットルに胸元にすべりこんで回し蹴り、脚部のクローに仕込まれたビームサーベルが発現して閃く。
辛うじて回避しながらも小爆発を起こしたストライクは、体勢を整えることもできぬままに凄まじい勢いでさらに弾け飛ばされる。
ここで、決めるッ！！
岩礁が迫る。
衝撃から立ち直れず無防備に落下していくストライクに、ビームサーベルを大きく振りかざして迫る。
先の戦闘とは逆転した立場に、知らず笑みが零れる。
眼下には腹部、そこにコックピットがある。
さあ、その命を寄越せ――――キラッ！！
すんでストライクがシールドを掲げた。
遮られたビームサーベルが灼熱の閃光を放ち、眼前のモニターとア

スランの青ざめた顔とを白々と照らし上げる。
――未だ夜明けは来ない。

＊＊＊＊＊

時間をさかのぼるように、昼と夜との境目を越えた。
虹色だった雲海はすでに夜の闇に沈んで、傾く月が空に真円を描いている。
地球上から見た満月はこんなにも力強く闇を照らし出す、と窓に額を寄せたラクスは思う。
――宇宙での月は、何ら感傷を寄せ付けないただの衛星なのに。
背後でドアが開いて人工的な光が差した。
「じきオーロラ圏に入るよ。見たことある？」
瓶2本とワイングラスふたつを手に特別ルームに戻ってきたムルタが言う。
「いいえ、ありませんわ」
ラクスはおっとりと返事する。
「あァ、そりゃあ楽しみだ」と彼は頷いて、テーブルにおいたワイングラスふたつにそれぞれの瓶から深紅の液体を注いだ。
「お嬢ちゃんはぶどうジュースね」
「あら、わたくしもう成人していますのよ？　ワインくらいいただけますわ」
「まだまだ。16歳なんて子どももいいところでしょ」
侮られる一辺倒であるのが非常に口惜しい。
「――ワシントンD．C．は大騒ぎだよ。おおよその安否情報も抑えてるから、なにがなんだかわかんない状況だし――P．L．A．N．T．でも皆さんご心配だ」
聞くなりラクスはその華のかんばせを曇らせる。

状況が状況だったとはいえ、何も言い置かずにあの地球連合ビルから出てしまった。
そして＜蛇の尾＞の人はどうしたろう？　あんな多数のＭＳ相手で、とにかく無事であればよいのだけれども。
「本国はどうかわかりませんけれども……父はきっと心を痛めていると思いますわ」
「シーゲル・クラインか。彼、ホントなんでＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．議長なんかになっちゃったのかねェ？」
ムルタ・アズラエルは首を捻って、ネクタイを緩めると胸元をくつろげてソファーに再び座った。
「コーディネイターのわりに夢見がちというか、まあそこがスカンジナビア王家の人らしいっちゃらしいんだろうけど――人なんて道徳や理性で動くもんじゃないでしょ？　機会があればぜひとも今のＮ．Ｙ．証券取引所にお招きしたいところだね、きっとそれがよーくおわかりになる」
「まぁひどい」
敬愛する唯一無二の父をけなされて、ラクスはその頬を膨らませた。
「父はナチュラルの人々とへだてなく仲良くしたいのですわ。それを夢見がちだなんて！」
必死の反駁にムルタは目を細めて、グラスに口をつける。
「じゃあどうしてこうなっちゃったと思う？　なんで君のお父上たちはＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を僕らの工場（プラント）のままにしておけなかったんだろうねェ？」
彼はどうも酒のつまみに問答を楽しんでいるらしい。
難しいこと――と頭をひねってラクスは思考を巡らせる。
「きっと認めてほしかったんですわ、コーディネイターという新しい種を。そして皆のよりしろになる大地が欲しかった……」
その思いはごく自然ではないか、とラクスは思う。
「工場（プラント）を引き渡せばコーディネイター的には満足？　地球に余計な手出しはしてこないかな？」

「わたくしたち、宇宙に閉じ込められたいわけではありませんのよ。いつかはまたこの地球で、ナチュラルに溶けこんでいければ、と」
確か父はそう言っていたはず。
言葉を受けてムルタは視線を窓の外に転じる。
「捨てたくせに戻りたいなんてムシのいい。君のお父上が言ってるのはただの中年の郷愁というかね、ないものねだりさ」
沈黙のあと。
「ではあなたは、どうお考えですの？」
ラクスはまっすぐに見返す。
「先ほども申しましたけれど、わたくしは大人の論理を存知ませんし、わたくしの場所から見えるものとてごく限られているんですわ。ですから、この戦いについて＜大人＞のあなたはどうお考えか伺いたく存じます」
水を向けられて少し意外そうな顔をしていたが、にやりと彼は笑んで茶化す。
「おやおやァ、“知ろうとしなければわかりあうこともできません”てやつ？　でも僕に語らせると長いよ、今酒が入ってるしね」
「お付き合いいたしますわ。でもできるだけわかりやすくお願いいたします」
ハハッと彼は笑った。
「難しいこと言うなぁ、お姫さまにわかりやすく、ね」
しばしの間の後でムルタはアームレストに頬杖をついて口を切った。
「……ブーム到来直前の２０年代、遺伝子調整なんてとんでもなく高価だった――クラシック・フェラーリを１０台買うくらいにはね。それを自分の子どもに施して成功させるだけの財力があるって時点で相当なものだよ。そういう理由で、おおよその初期第一世代ってのは僕らと同じ階級で血縁だったりする。それが君のお父上だったり、今のＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．最高評議会議員たちだったり……」
そして初期第一世代は、その親から引き継いだ財力をごっそりＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．に持っていってしまった、と彼は遠い目で言う。

「――残されたほうは大変だ。父祖から受け継いできた社会的財産を平等に共有するっていう、超保守社会の共通認識が根底からひっくり返されたようなものでね。そして大概コーディネートなんかを行おうとする連中は先進的な思考の持ち主だ。となるとますます保守派の反発はすごいわけで、そして僕らの社会では保守派が圧倒的多数」

窮屈な箱庭だよ、とムルタはぼやく。

箱庭。

ラクスは我が身に引き寄せて思う。

それはまさに自分が生きてきた小さな世界そのもの――地球もP・L・A・N・T・も同じなのだろうか。

「そして箱庭を引っかき回した挙句、その財力とコネクションで、君のお父上たちは自分らの理想郷の独立を唱えだした。富めるものが富めるものの為に構築した世界だ――もうそれが存在する時点で許せないっていう特権階級（ロゴス）連中の気持ちは、僕ぁよくわかるね。いわばきょうだいなのになぜ自分たちだけで独占しようとする？　って思うでしょ。格差が広がっていけば、きょうだいだからこそ憎しみもさらに増す」

この戦争の根本は、種とかどうとかいう話じゃないと僕は思うね、とムルタは結論づける。

「ヒトはどこまでいってもヒトなのさ――ま、そのいざこざをメシのタネにしてる僕なんかが言えたことじゃないし、キレイなコトバが好きな君にはやっぱり難しいかもしれないけどね、お嬢ちゃん？」

＊＊＊＊＊

あともう一発であの艦は落ちるだろう、そして今、自分の邪魔をするものはない。

エネルギー充填を再度待つその最中、ディアッカはモニターを拡大してイージスがストライクを大きく跳ね飛ばすのを見た。
そして2機はもつれるように堕ちていく。

ストライクは私が仕留めます。

その言葉通りに、アスランはきっちり落とし前をつけるつもりだ。
――だが、ストライクのパイロットが幼なじみだと告げた時の、辛そうな横顔が脳裏を過ぎる。
本当にできるのか。できたとしてアイツは大丈夫なのか？
ほんの一瞬の思考の最中、ピピ、と不快な機械音が耳を打った。
ディアッカが目を転じたその時、モニターが写し出す白い光にふっと空気が引く。
大きく傾いた白亜の巨艦が転回して、その艦首砲がこちらを向いていた。
光が収束する。
――迂闊だった！
回避はもう間に合わない。充填率は未だ７０％、だがこちらももう退けない。
撃たれる前に撃つッ！！
即座にトリガーを引くが、緊急補助用マニュピレータであったことが誤算だった。
コンマ数秒の差で掠める光、凄まじい衝撃がコックピットを揺るがした。
「ッうわァァァッ――――――！！！」
轟音に警報音さえも聞こえない、サイドのコンディションモニターに映し出されるバスターの左半分が真っ赤に染まる。
艦首砲で貫かれた反動でグゥルから投げ出され、近くの小島へとまっしぐらに落ちていく。
体勢を整える間もなく機体は大地を擦って木々をなぎ倒し、そして

岩肌にぶつかってようやくに止まる。
ディアッカはシートベルトの限界まで前のめりになる。
鳴り止まない警報音。
全身の骨が折れそうなほどの激痛の只中でモニターに視線を走らせ、レバーと周囲の機器に手を伸ばす。
「くそっ……接合パルス低下、ハイドロ停止、……動かねぇッ！！」
動力系をやられたのだろう、反応がない。
ＰＳ装甲も落ちている、だがなおもレーザー照射されている。
モニターは不時着の足つきがその艦首砲を再び此方に照準を合わせようとしていると警告する。
その照準の中心はこのコックピット付近、ディアッカの顔から血の気が引く。
「く……」
陽電子砲の直撃を喰らえば、自分はこのバスターもろともに蒸発するだろう。
額から冷たい汗が伝い落ちる。
かつてない緊迫感と焦燥感が自分に決断を迫る、――ここで死ぬか、それとも？
そして躊躇わず、ディアッカは道を選んだ。

＊＊＊＊＊

狂乱する意識の奔流のただなかで、全てが鮮明だった。
自分の呼吸音、モニターに映し出される敵機の傷の数、一瞬後の次なる相手の動きまでも、あるいは思考さえも見えた。
醸成された憎悪、躊躇いなき殺意。
出力限度を超えた光刃がストライクの左腕を溶かし切断し、シールドとともに宙を舞う。

だがその攻撃の隙を狙ったストライクの蹴りは確かにイージスを捉えていた。
凄まじい衝撃が襲い、前のめりになったアスランは微かに呻く。
そして大きく弾けるスパークとともにコックピットのコンソールが火を吹く。
刹那こちらのモニターが一つ失われて灰色に染まる、先ほどの攻撃で頭部が飛んだらしい――だがそれがどうした？
アスランは頭をもたげて口許を笑わせて、虚空の一点を凝視する。
このコックピットを覆う強固な装甲の向こうに、ごく間近にストライクがいる――そしてストライクのコックピット内部が見える。
キラは憎しみに満ちた眼差しでこの自分を睨みつけ、そして獣のごとく吼えていた。
『アスラァァァァ――――ンッ！！』
目の前に彼がいる。
キラ、キラ、キラ。
まさに願ってやまない存在を見出して、アスランは極上の笑みを向ける。
他が見えない。
その機体ごとぶつかりあう衝撃が空気をすら揺るがす。
お前の命を寄越せ――――その命をもって死者に贖え！！
ニコルたちに――――（――――トールたちに）ッ！！
極限の精神状態で入り乱れる思考に、判じる余裕はなかった。
爆発が連鎖し、黒煙が場を呑む。
「キラァァァァッ！！」
『アスラァァァァンッ！！』
死ね、この場で死ね――――ッ！！（――――殺す、この手で殺すッ！！）
目が眩むほどの殺戮と破壊の衝動のただなか、やがて視野で砕け散る閃光があった。

奇妙な光景だった。
光の欠片すら届かないどす黒い思念のただなか――
アスランは振り仰ぐ。
キラは自分の上に馬乗りで覗き込んでいた。
すべてを拒絶した2人だけの世界、あるいは永遠の地獄。
互いを凝視しながら、やがてキラの冷たい指先が頬に触れる。
包み込むような両手はやがて下へと向かい、
そして首筋に慈しむようにそろそろと指を這わせ、
力を強くこめて、乱れた髪の下で彼は言った。

愛してたんだ――昔からずっと、今でもまだ。

闇にも鮮やかなしずくがひとつ、ふたつ。
やがてそれはアスランの頬に落ちた。
手を伸ばしてキラの頬に触れる。
縋りつくように肩に頭をもたせかけた彼、
だからキラの背に両腕を回し、
締め上げるように力をこめて抱き寄せる。

大好きよ、キラ。

――でも私はあなたを愛せない。

互いの絶叫が重なるただなか、やがてストライクの顔面に突き立てるサーベルの感触を得て、イージスはそのわずかな間に懐に滑り込

みＭＡ形態に転じる。
殺れるッ！！
その鋭い鉤爪でストライクの機体を全力で掴みゼロ射撃を挑んだその時、警告音が耳についた。
トリガースイッチを幾度押しても、もはやスキュラは反応しない。
「ッ……こんな時にッ！！」
唾棄して噛み締めた唇の端に血の味がする。
いや、まだ手はある。
アスランは右手で素早くシート傍らからコントロールパネル引き出し、暗証番号を滑らかに打ち込む。
「あなたは、私が連れて逝く――――ッ！！」
Ｅｎｔｅｒに指をかけて弾いたその刹那。
ストライクがソードの切っ先を内側に向けて躊躇いなく振り下ろしているのがわずかに見えた――それはこのコックピット直上、そしてこの直線上に彼もいる。
自らの機体ごと貫くべくせまりくる光刃を感じながら、キラの意図を汲んでアスランはふと笑む。

知ってる。僕らは互いを救えない。

だから一緒に逝こう、と彼が言う。

――きっとふたりなら寂しくないから。

コンマ数秒にも満たないタイムラグの後。
視界をまばゆいほどの白い闇が覆った。

私は
（僕は）
私たちは……
（……僕たちは）
いったい何をしているの――？
（――どうしてこんなところに来ちゃったんだろう）

鏡写しの思考が砕け散る。
やがて首にかかる指が緩み、抱きしめた腕の力が抜けた。

Interval: Athrun

あなたが触れる
Your cold fingers touched my cheek.

凍てつく月の下に私たち2人――
The freezing moon comes out to shine our face.

壊れそうな心を抱えて、いくつもの戦いをくぐりぬけてきたけれど
I survived thousands of wars with my fragile spirit,

ほんの一瞬でもあなたが愛してくれたというのなら
But if you say you loved me just one time,

それだけでいい
I can live in this silly reality.

私は多くの命を奪い
These shots of my gun are killing many people,

目の前でたくさんの人が消えていった

So many lives disappeared in my face.

兵士たちの身体を灼く炎は――
Flame settled over soldiers,

恐ろしい悪夢のよう
it's like nightmare.

罪を重ねる私なのに
I've committed many black deeds,

あなたはいつだって優しかった
but you're always being kind with a lovely smile to me.

平和を求める声が天に届かない、
I wonder why our voices eager for peace couldn't reach our God.

この激動の時代に私たちは生きてる
We are in the tempestuos period.

あなたに抱かれて私は目覚める

I'll awake in your arms.

終わりのない悲しみの向こうに、光が見える
I'll find a beam of hope over
the endless sorrow.

心の痛みを感じながら、私はもう一度立ち上がる
I'll stand up once again feeli
ng pain in me.

だから――どうか導いて
My sweet heart,
My angel,
Lead me to the peaceful sky.

灼かれる光が、空で輝く
Exploding combat planes are sp
arkling in the sky.

偉い人たちの決めた戦いで、たくさんの命が消えていく
Many of our fellows desappeare
d under the war
in the name of "the meaningful
war".

間違っていても止められない、
I'm in the war
like nightmare

この終わらない悪夢のただなかで
ｎｏ　ｏｎｅ　ｃａｎ　ｓｔｏｐ　ｉｔ.

Past：　Academy－7

『カタパルト接続完了』
ＣＩＣの技官候補生による硬いアナウンスの声が聞こえてくる。
『……進路オールクリア。射出ＯＫ』
そのアナウンスが終わるやいなや、イザークはレバーを押し上げる。
「イザーク・ジュール、出るぞ！」
掛け声とともに一気にペダルを踏み込めば、体の前面に凄まじいＧがかかった。
強くレバーを握り締めて、イザークは息を詰める。
ハッチに切り取られた四角い星空はやがて大きくなり、そして虚空にＭＳが飛翔する浮遊感が襲ってきた。
……ようやくＧから解放された。
安堵するのも一瞬、周囲には同じように射出された他の班のプロトジン群がいる。すでに彼らは作業を始めていた。
そうだ、もうカウントが始まっている、とイザークは眉間に皺を寄せる。
「おい、Ｆ班！　全員来たか！」
無線通信回線からそれぞれに応えが返る。
『ああ』
『参った……』
『やっぱ違うよなぁ、射出でビビッた』
「トロトロするな！さっさとやるぞ！」
檄を飛ばした後、イザークは同じく射出されていたケーブルをモニターで捕捉し、ＭＳの腕を伸ばしてそれを掴む。
ＭＳ間相互通信ケーブル接続次第、規定進路で宙図が示す集合地点へ急げという指示がサイドモニターに表示されている。
無音の只中、ヘルメットの中の呼吸音はひときわ大きく聞こえる。
シミュレーションこそ幾度も重ねていたものの、こうやって実際コ

ックピットにいると妙な孤独感が襲ってくる。
そして班で繋いでいるＭＳ間通信回線からもそれぞれの張り詰めた緊張感が伝わってくる。
ええい、とイザークは頭を振り、ペダルをさらに踏み込む。
妙な感傷だ！　まず慣れなくてはならない、これからＭＳパイロットとして長い時間をコックピットで過ごすのだから！
『うわぁぁぁッ！』
『早いってイザーク！』
「これくらいで怖気づくなッ！」
『いや、飛ばしすぎ！　ケーブルが切れるッ！　頼むからやめて！！』
悲鳴にも似た懇願にイザークは舌打ちして踏み込む力を弱める。
並行したＭＳ班を同じ速度で滑空させながらイザークはモニターにざっと視線を走らせた。
僚機コードを示す赤い点が索敵モニターには無数に点滅している――他の班よりも早いという確信があった、だが問題はアスラン率いるＪ班。
この光点のどれがアイツだ？　……今日こそ勝つ！
モニターが示す地点がみるみる近づいてくる。
ここか。
制動をかけて、滞空する。
「Ｆ班Ａポイント到着しました！」
『Ｆ班到着……各機停止の上待て。タイム０：１５：２５。１着だな』
やった！
クリューガー教官の言葉にイザークは笑みを浮かべる。
滞空して他の班を待つ合間、眺めるモニターに、すぐ背後に急速接近する光点群が見えた。
『Ｊ班Ａポイント到着しました』
アスランの声だ。

報告が終わるのを待って、イザークは無線通信回線を繋ぐ。
「どうだ、シミュレーションとは違うだろう！」
モニターの向こうでヘルメット越しのアスランが笑む。
『そうね、残念。今回は負けちゃったわ』
そう言いながらも、アスランはちっとも残念そうでないのが少しばかり腹立たしくもある。
『ねえ、見た？　Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．がとっても綺麗なのよ』
「……Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．？」
そういえばこんなにも宇宙空間が身近なのは初めてだ、と気づいて、イザークはスラスターを吹かせて機体を傾ける。
青みを帯びた銀色に輝く涙滴状のコロニーが整然と並び、緩やかに回転を続ける――太陽の光を受けて煌きながら、虚空にぽっかりと浮かぶ、夢のように儚い砂時計。
その周囲を飛び回る光の軌跡は、シャトルやＭＳ群だろう。
圧巻の光景に言葉を忘れ、イザークは見惚れた。
やがてこれが自分たちが守るものだと思えば胸が熱くなる。
『ね？　綺麗でしょ？』
アスランの声に我に返る、モニターが繋がっていたことを忘れていた。
慌ててイザークは仏頂面を作り、「まぁな」と返事した。

＊＊＊＊＊

課題をこなしながら辿りついた軍事ステーションのパイロット控えルームはほぼ満員状態。
Ｐクラスの面々があちこちで輪を作ってミーティングを行っているその只中で、ニコルは視線を感じてふと振り返る。
視線の向こう側にはふっと顔を背けたイザークがいた。

以前から感じていたけれども、最近彼はますますこちらを見てる…
…僕がアスランと同じ班のせいだから、だろうけれども。
ニコルはまたミーティングの内容に気を戻す。
パイロットスーツを纏うメンバーの只中、班長のアスランが手に持つミニパネルに、点在する赤い点が浮かび上がる。
「私たちJ班が受け持つNジャマーの分布図はこれね、ノルマは各自3つ。作動確認作業完了後Dポイント集合のこと」
「了解」
「もし正常に作動しなかったら?」
「その時は連絡して。班長から教官に報告を上げることになっているから」
解散して再び格納庫へと入る最中にもまたニコルは視線を感じて、眼前を行くアスランの背中を見る。
「アスランはなんで気づかないんでしょう?」
ぼそりとニコルは呟く。
「……いやぁ、見られてることはさすがに気づいてると思うよ、いくら超鈍感アスランでも」
隣を行くマクシミリアンがぼりぼりと後頭部を掻きながら言う。
「もう意味とか考える前に慣れちゃってるんじゃないかな」
果たしてそれがいいことなのかどうなのか、とニコルは難しい顔で腕を組んだ。

本日二度目の搭乗。
どうにか慣れてきたかな、とニコルは索敵を密にしながらほっと息をつく。
モニターには僚機が数多く映し出される、その中に赤い光点が混じって見える。
ニコルは虚空に浮かぶNジャマーをまた発見して、機体をそのすぐ側に寄せた。

レバーでＭＳの手を巧みに動かしてカプセルを開き、その内部に点滅する光を発見する。
機体胸部のケーブルの先端をカプセル内接続ポイントに挿入し、ニコルはコックピットに持ち込んだ端末を操作して、そのＮジャマーが作動していることを確認する。
ニュートロンジャマー、核分裂を失効させる唯一の手立て。
そして地球上でのエイプリール・フール・クライシスを引き起こした元凶。
核によるエネルギー供給がままならなくなった地球では億単位で死者が出ているとさえ言われる。
２４万３７２１人の命と、数億人の命――それを思うときニコルは複雑な心境になる。
けれど父親たち最高評議会のギリギリの状況下での選択を、「間違っている」なんてとても言うことはできない。
核爆弾が、地球とＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．とを行き交うよりはマシだった筈なのだ、……きっと。
１００億と２０００万の命は救われた、少なくともそう思わなければやりきれない。
そして再びカプセルを閉じると、ニコルのプロトジンは次の目標に向かって飛翔する。
『軍事ステーションの飯ってマズかったよなぁ』
『やっぱ寮母さんのがいちばんさ』
ＯＮにしている無線回線は、ノイズ混じりにも同期たちの雑談を拾う。
みんな言葉を交わすことで緊張を解そうとしているんだろうな、とニコルは思う。
そうでなければ、この無音の世界の孤独感に押しつぶされそうになる。
『３つ全部クリアだ！　どうだアスランッ！！』
『同着ね』

勝ち誇っているイザークに対してアスランはいつもの調子。
再びNジャマーに機体を寄せながら、あの2人ってどうなんだろう、とニコルは首を捻る。
ライバル心こそ燃やしているものの、イザークはアスランが好きで好きで仕方ないんだろう、これは同期のほぼ全員が認める事実。
一方でアスランはイザークを嫌っていないらしいというのだけは確か――もっとも彼女はさほど他人に頓着しない性格なので、人を嫌うということがなさそうだけれども。
もしかしたらのもしかしたら、両想いなのかもしれない……ただアスランは、やっぱり自分の気持ちにも鈍感で、実際のところは本人にもわかっていないんじゃないかな。
ニコルは作業を終了して、イザークとの通信を遮るようにアスランに向けて通信回線を繋ぐ。
「アスラン、終わりました！」
『了解、お疲れ様』
アスランがモニターの向こうでにっこりと笑んで、ニコルはほっと息をつく。
やっぱりアスランは誰か特定の人のものになっちゃダメだと思う――とにかくアスランが誰かを振った、という話を聞いて「よかった」としか思えない自分は、きっと性格が悪い。
だからイザークがあんなに見つめていても、例えば実はアスランがイザークのことを好きでも、僕は知らんぷりを通す。

あっという間のMS実習初日を終えて、アプリリウス・ワン・アーモリー軍港へと戻る。
収容されたプロトジンは次々と格納庫へと運ばれ、技官候補生たちが奥から整備の為にわらわらと現れて、機体に群がる。
ニコルは足を止めて、整備が開始されるさまを眺めていた。
「俺もうダメ、マジ疲れたー。もう眠くて眠くてたまんないね！」

ラスティが背伸びしながらあくびをする、その背中をマシューが押す。
「んじゃさっさ寮帰って飯食って寝ようぜ。明日からもっとキツくなるってさ」
それぞれに解放感と疲労感を漂わせてロッカールームに向かう同期たちの合間、ニコルは端末を忘れたことに気づいて、慌てて搭乗していた機体へと戻る。
すでにMSに取り付いていた技官候補生の整備チームをかきわけて、ニコルはキャットウォークを踏み切ってふわりと舞い上がり、ハッチに掴まった。
「すみません、端末をコックピットに忘れちゃって！」
「はいはい、これね」
コックピットにいた技官候補生が端末を投げる。
宙を慣性で漂ってくる端末を両手でキャッチして、ニコルは再びキャットウォークへと身を翻した。
ゆっくりと降りている最中、視界のはるか前方に並んで歩く蒼と銀の色が見えた。
アスランとイザーク？
ニコルは透かし見る。
もう人気のないロッカールーム入り口前で、2人は足を止めながらも何か話している。
……あの2人が2人きりになっているところなんて滅多に見ない、いつもディアッカやラスティや僕とかが必ずいるから。
ふと胸騒ぎが兆す。
ニコルは積み上げられていたコンテナにそそくさと身を隠し、覗き見る。
イザークが距離を詰めて、その手を伸ばしてアスランの頭を抱え込んで、額に顔を近づけた。
「え！？」
吃驚して、一瞬ニコルは首をひっこめる。

心臓がバクバク鳴っている。
そわそわして、ニコルはまた覗き見る。
そして愕然と見守る中、アスランもイザークも別々のロッカールームへと消えていった。

まだ消灯前だというのに、寮はいつになく静か――多分Ｐクラスの面々が早々に寝付いてしまったせいだろう。
ニコルは明々としたレクリエーションルームに１人、ソファーに深々としずみこんでいるディアッカを見つける。
ディアッカは何か知っているだろうか、いつもイザークと一緒だし。
「ディアッカ、ちょっと」
「んだよ？」
寝そべってパンを食べながらＴＶを見ていたディアッカの隣に座って、おそるおそるニコルは口を切る。
「あの……イザークのことなんですけど」
「んあ？　アイツがどうしたよ」
「……アスランと……えーっと……キスしてるのかなぁって……ところを僕見てしまって」
一瞬ぽかんとしたような顔を見せたディアッカは、たちどころに爆笑しながら起き上がった。
「ってかマジでッ！？　イザークがッ！？　アスランとッ！？」
その大声に、思わずニコルは中腰になる。
「あ！　いえ、もしかしたら見間違いかもしれませんけど！」
でも、イザークの両手はアスランの耳元にかかっていたし、絶対に唇がアスランの額に触れていたと思う。
「いや、マジなら凄いぜ。あの不器用の権化が一体どうやって口説いたんだろ？」
笑い涙を拭ってディアッカはまたパンを頬張る。
「そういや、こないだ寝言で『お前が好きだァァァッ！！』って

絶叫してたっけイザーク。この土日に何か進展したのかね」
いかにも楽しそうなディアッカの傍らで、口許を曲げてニコルは鼻白む。
そんなことを聞いたら、ますます気持ちがざわつく。
「まだアイツ起きてるかな、ちょい訊いてこよう。お前も知りたいだろ？」
「……それはまぁ、気にはなりますけど」
ディアッカが小走りにレクリエーションルームを出て行き、ニコルは取り残されてソファーに倒れ込む。
ショック。
なんで僕こんなにショックなんだろう。
恋愛にまるっきり興味なさそうなアスランが、まさか誰かとそんな関係になるかもなんて、全然想像もしていなかったから。
しかもなんでよりによって、あんな怒りんぼの見栄っ張り……？
大体――ニコルはムッとしながら思う――イザークより僕の方が先にアスランとは知り合ってたのに！

アスラン・ザラよ。よろしく。

アスランに最初に出会ったのは2年前。
父さんの研究室に遊びに行って、ゼミ生だった彼女に出会った。
ザラ委員長のお嬢さんが父さんと組んでZ．A．F．T．技術部内コンペに出品しまくってるって話は聞いてたけど――正直ビックリした。
予想を裏切って、母さん並みにかわいい人だった。
その彼女がカレッジを中退して士官学校に入ると聞いた時は凄くビックリしたし、アスランが戦うくらいなら僕だって戦わなきゃ、と思った。
……それでずっと一緒だったのに、こんなのってない。
ニコルはまたひとつ嘆息をつく。

やかましいＴＶをリモコンで切って、まんじりともせずにディアッカの帰りを待つその合間、レクリエーションルームに人影が差した。
軍規定Ｔシャツに短パン、蒼い髪をひとつに束ねているラフな姿のアスランだった。
「あ……まだ起きてたんですね、アスラン」
慌ててニコルは起き上がる。
「ううん、寝てたんだけど喉渇いちゃったから。ここのフロアしか桃ジュース置いてないのよね」
自動販売機の前にアスランは立つ、その後姿を眺めながらニコルはおずおずと切り出した。
「アスラン」
缶ジュースを拾い上げて、「なぁに？」とアスランが振り返った。
「その……イザークとは……」
「ん？」
「最近、仲、いいなぁって……思うんですけど」
「そお？」
単刀直入に訊けないのがもどかしい。
「彼、表情豊かよね。後は時々可愛いかも」
アスランはプルタブを勢いよく開けて、ジュースを一気飲みする。
あのイザークが可愛い！？　いつもふんぞり返って怒鳴り散らしているあのイザークが！？
ニコルは眩暈する。
「えっと、その……好きか嫌いかといえば……」
きょとんとしてアスランは小首を傾け、しばし沈黙した後で言った。
「好き？」
好き！？
ニコルは思わずソファーに身を倒す。
まさかまさかまさか、そんな言葉をアスランから聞くことになろうとは！
これをイザークが聞いていたら、狂喜乱舞しているか鼻血を出して

卒倒しているところだ！

「反応が面白いわよね――ん？　どうしたのニコル？」

アスランが歩み寄って覗き込む。

「……ダメです、アスラン……」

ニコルはがばりと起き上がり、潤んだ目に力をこめてアスランを凝視する。

「ダメですッ！！　いけませんッ！！　イザークとじゃ、絶対アスランが不幸になっちゃいますッ！！」

「え？　え？」

うろたえているアスランを置き去りにして、ニコルはレクリエーションルームを飛び出た。

＊＊＊＊＊

イザークは今日一日の出来事を思い返しながら、ぼんやりと本の頁をめくる。

８月８日誕生日なんでしょ？お祝いしなくちゃね。

しみじみとイザークは思い返す。

指摘されて思い出したが、気付けば自分も１７歳になる。

――アスランは確か１０月終わりあたりだったから、およそ２ヶ月は２歳違いだ。

妙な優越感。

ついでに再びの額へのキスを思い返せば、また体が熱を帯びてくる。

少なくとも俺が近づくことをアイツは拒否していない、いっそ告白なんぞしなくとも遺伝子適合ＯＫなら、もう後は万事なし崩し的に――。

その時ドアがシュンと開き、部屋に帰ってくるなりディアッカが声を張り上げた。
「お前アスランとちゅーしたって!?」
仰向けで眺めていた本がばさりと顔面に落ちて、イザークはしたたかに打った鼻を押さえながら、がばりと起き上がる。
「はぁッ!?」
「見たってヤツがいたから!　おいマジで!?」
「お前には関係ないだろうがッ!!　こっちにくるなッ!!」
イザークはみるみる染まる顔の赤らみを感じながら、ずかずかとベッド上に上がりこむディアッカを蹴落とそうと足を繰り出す。
だが避けるディアッカの動きは早かった。
「関係ないことがあるかよ!　さんざん人に迷惑かけておいて!　ってかなんだよその反応は!　素直に白状しろよ!」
ディアッカの眼差しは期待に満ちてきらきらと輝いてさえ見える。
「やっかましいッ!!　あんなの挨拶の範疇だッ!!」
「んあ?　もしかしてほっぺ?」
「額だッ!!」
「んだよーデコちゅーか……」
一瞬肩すかしを食らったようなディアッカだったが、思いついた様に言葉を続ける。
「いや待てよ、ってことはあの潔癖症が嫌がってないってことだなッ!?　押せイザークッ!!　押せば落ちるぞ、あのアスランがッ!!」
「あァァァッ!!　お前にアドバイスされる筋合いはないッ!!　それから俺のベッドに上がりこむなッ!!」
イザークは枕をつかみディアッカに投げつける、ディアッカは満面の笑顔でそれを受け止めて顔をのぞかせた。
「夜這いかけろ夜這いッ!　今夜ッ!」
「できるかッ!!　相部屋だろうがッ!!」
「や、その方が燃えるだろッ!?　なんならもう複数プ――」

「下劣なッ！！　貴様と一緒にするなァァッ！！」
「――大声で妙な相談をしないで下さいッ！！　外まで丸聞こえですッ！！」
いきなりの乱入者に、もつれこんでいたイザークとディアッカはドアの方に顔を向ける。
顔を真っ赤にして、涙ぐんでいるニコルが立ちはだかっていた。
「いいですかイザーク！　このまま一気に雪崩れ込もうったって僕が許しませんからねッ！！　アスランはイザークだけには渡しませんッ！！」
びしっと指をつきつけられての宣戦布告に、イザークは呆気にとられる。
「……はぁ？」
ニコルは憤然としてそのまま部屋を後にし、にやにや笑ったディアッカは大仰に肩をすくめた。
「はぁん、思わぬ伏兵登場だなぁ？　イザーク」
「伏兵も何もあるか」
ニコルなんて問題外だ、とイザークは鼻で笑ってディアッカをベッドから蹴落とした。

＊＊＊＊＊

だが伏兵は予想外に手強かった。
パイロット控え室での一休憩中、イザークはアスランに歩み寄る。
「アスラン、次の休みは――」
「ん？」
端末を眺めていたアスランが顔を上げる、そこへ割って入るようにニコルはアスランの腕に腕を絡めて抱きついた。

「残念です。今度の休みは僕のうちに招待する予定で！」
「あら？」
「僕の新曲を聴いてもらいたいし――父さんも会いたがってましたよ！」
「あら。ユーリ教授にはご挨拶しておかなくちゃね」
アマルフィ教授を尊敬してやまないというアスランは即答だ。
「2人でじっくり話したいこともあるでしょうし――ね？」
「そうね、制作中途中で抜けちゃった汎用パワードスーツの話伺いたいわ」
まんまと誘導されるアスランに対しあたかも天使のような微笑みだったニコルが、一転不穏な笑みでちらりとこちらを見た。
「いやあ身内が使えるって、結構なアドバンテージですよね……？」
じろりとイザークは緑のふわふわ頭を睨む。
このクソガキ、実は二重人格か！

寮での日夕点呼前。
レクルームでぼんやりと缶ジュースを手にソファーに埋もれているアスランを見つけた。
「どうした」
「作業ですっかり疲れちゃった――途中でエンジントラブル起こすんだもの」
目をしぱしぱさせながらアスランが「古いプロトタイプはダメね」とぼやく。
「もう眠いんだけど、部屋は今シホが掃除機かけてるのよね……」
私邪魔って追い出されちゃった、とアスランはぼやいて天井を仰ぎ見る。
いつも以上に無防備だ。
イザークが缶コーヒー片手に隣に腰を下ろしたその時、突然箱を抱えたニコルがレクルームに顔をのぞかせた。

「アスラーンッ！！　新商品です！　ジャン・カルロ・マニアーニ博士監修ザウート１／６０ゴールデンモデル！！」
「えッ！？」
聞くなりアスランの目の色が変わった。
「それって初版限定版よね！？」
「一緒に組み立てましょうッ！！」
「やるやる！！　やるわ！！」
先ほどまでの無気力が嘘のように、アスランはソファーを蹴り立った。
こういう手はあなたには使えませんよね？　と言わんばかりに一瞥投げかけて、ニコルはアスランとともにレクルームを出ていった。
――かわいい顔して実は策略家か、アイツは！？

平日で唯一外出許可が下りる水曜日の放課後。
イザークが口を開く前にニコルの声が飛んできた。
「ラ・エイプリルでケーキバイキングですよ！　早く行かなくちゃ！！」
「行く行く！！――行く？」
くるりとアスランが首を捻る、イザークは渋い顔になる。
「誘ったら悪いですよ……イザークは甘いものキライですもんね」
ニコルはしてやったりとばかりに満面の笑みだ。
その背中を見送ってやがてイザークは拳で壁を殴りつける、白壁には凹みが残った。
「餌付けしやがって――あのクソガキッ！！」
「やっぱお前邪魔されてんの？　ニコルに？」
眺めていたディアッカが半笑いで歩み寄ってきた。
「ッ――うるさいッ！　あんな真似がいつまでも続くか！」

＊＊＊＊＊

「とまぁ、僕がやってるのは対症療法なわけで、やはり病根は根絶しなければなりません」と重々しくニコルは口を切った。
「ということで、やっぱりラスティはアスランと付き合うべきです」
「……はい？」
ポテトチップスをかじりながらマンガを読んでいたラスティは目を上げる。
ベッドの上、すぐ傍らに正座したニコルはひどく真面目な顔で言った。
「ラスティならいけると思うんです。僕考えたんですけど、最終的にイザークに対抗するにはラスティしかいません」
一体何を言ってるんだろう、ニコルは。
しばらく考えあぐねた後、ラスティはマンガを抱えてごろりと背中を向ける。
「寝言は寝て言おうぜ、なぁニコル。お前のお部屋は隣だよ」
「僕は本気です！　こっち向いて下さいってば、ラスティ！」
ニコルは珍しく食い下がって、体を揺さぶる。
「悪いけど、今いいところだから」
「前アスランに、お前のせいで技官コースの女の子が寄ってこない～とかって言ってましたよね？　僕知ってるんですよ。ラスティ、実は今まで何人も技官コースの女の子と付き合ってて、そのたびに振ってるってこと。えーと、ユイさんとかハーネスさんとか……今の彼女はえーっと」
耳打ちに、しぶしぶラスティは起き上がる。
「それどこで聞いてきたんだよ」
ニコルはにっこりと笑った。
「ですから、アスランと付き合いましょう。そしたら丸くおさまります」

「いや、それ俺じゃなくてアスランに言えば？　ってか、そんな考え抱いた時点で俺イザークに殴られるどころじゃ済まないんだけど。嬲り殺されるよきっと」
イザークに告白を勧めて、応援するとまで言った手前もある。
約束は約束だ。
「何言ってるんですか、繁殖競争はどこだって厳しいんですよ！　第一もったいないでしょう？アスランレベルの美人てP・L・A・N・T・見回してもなかなかいませんよ」
ずいとニコルが迫る。
「僕思うんです。友情から始まる愛があってもいいんじゃないかなって」
「んじゃあ俺とは違う意見だね。友情はあくまでも友情どまり。そんでもって俺とアスランは超親友でそれ以上でもそれ以下でもないの」
またラスティはごろりとベッドに寝転がった。
「そんなこと言ってて、知りませんよ？　そのうち気づいても、後悔後を絶たず先に立たずですよ？」
「お前は単にアスランをイザークから遠ざけたいだけなんじゃん」
ぺらりとラスティは頁をめくる。
「その通りです。イザークにはアスランを預けられません」
きっぱりとニコルは言った。
「ん～お前が言うほど、イザークってどうしようもないヤツじゃないと思うよ。プライドがめっちゃ高くてむっちゃ気性が激しくて、すんごい偉そうなだけで」
「そこが問題なんだってなんでわからないんですか！」
アスランを姉同然に思っているニコルにとっては心配でしょうがないのだろう。
「とにかく俺には無理だから。他のヤツにあたって」
しばらくニコルはふくれっ面でいたようだが、やがて諦めたのか部屋を出て行った。

やれやれ――と改めて数ページ読み進める前に再びドアが開いた。
すぐ近くに歩み寄る気配に、ラスティは声を大にする。
「だーかーらー！　他にあたってって言ってるじゃん！」
「何を？」
一瞬の間。
ガバリとラスティは跳ね起きる。
腕組みでその話題の張本人アスランが立っていた――またTシャツに短パンなんてそんなとんでもない格好で！
「女子が男子フロアに降りてくるなよ、しかも深夜に！　夜這いかよ！！」
同室のグラスコーが当直の警備勤務で不在だったのが何よりだ。
「喉が渇いたからジュース買いに降りてきたのよ。ついでにちょっと寄ってみただけ」
はい、とアスランに渡されたのは一枚のディスク。
「頼まれてた環太平洋Xゲームの再放送、録画しておいたのを今日渡せなかったでしょ」
「あ……さんきゅ」
Nジャマーの関係か、自宅では最近地上波を受信できたりできなかったりと不安定だ。
アプリリウスワンには富裕層が独自に設置している巨大共同鉄塔があるので、観れない時は再放送分の録画をアスランにありがたく頼っている。
起きてたならいいでしょ、とアスランは傍らに腰掛けた。
「ちょっと相談があるのよね、ラスティ」
そしてそのままベッドに乗り込むと、「ラブソングはあんまり好きじゃない」とぼやいて、ラジカセをいじってアスランは勝手に曲を探しはじめた。
「人生惚れたはれたが全てじゃないでしょ」

「そりゃそうだろうけど、これそういう曲しか入ってないよ。……んで、何？」
「またお父さまがお見合いを持ってきたのよ、さっき連絡が来て」
「そりゃあ……粘るね、国防委員長閣下」
伝え聞くだに１０回を越えてからはラスティも数えるのをやめている。
どうもザラさんちは父娘で意地を張りあってるような――とは外野からの意見だが。
「で、今度のお相手がちょっと厄介で……どう断ったらいいのかしら、と」
「へえ」
アスランが躊躇するなんて珍しい。
「んで具体的にはどういうお相手？」
返事せずに腹ばいになっているアスランはぱらぱらとマンガをめくる。
「ほら逃げない。マジメな話してるんだから」
取り上げると、アスランは突っ伏して枕に顔を埋めるとひとつ重苦しいため息をついた。
「……イザークなのよね」
沈黙がおりる。
返答に困る。
えーっと、俺はどうすればいいんだろう。
「気が滅入っちゃうわ、このままだとなんだか未知なる世界に引きずり込まれそうな気がするの……」
「――どっちにしても、ボールはお前にあるよ、多分」
「でも今のままの関係ってわけにはいかないでしょ」
なんて身勝手な、とラスティは少々鼻白む。
進むのもイヤ、壊すのもイヤ、じゃあんまりにもわがままですぎる。
イザークは生殺しだ。
「……正直恋とか愛とかあんまり興味ないのよね……」

大概オンナの子ってのは恋愛に人生賭けてるようなものだが、どうもアスランはそこの根本からして違うらしい。
というか――

いかにコーディネイターの社会的成人年齢が15歳とはいえ
自分たちはまだ思春期まっただなか。
大人への過渡期のアンバランスの中で爆発しそうなほどの鬱屈と戦いつつ、
必死に綱渡りしている状態だ。
ゆらゆら振り子が揺れるように、異性への憧れ衝動あるいは性への罪悪感で
右往左往していっぱいいっぱいなのは多分みんな一緒。
その中でも、実は繊細なアスランはひときわ揺れ動く傾向が強くて、
それが怖くて抑圧してしまって、
だから大人への境界線を踏み越える一歩手前で足踏みしてしまっている。

という前提をまるっと含んだ上で――要するに、子どものころの感覚を引きずったままのアスランは、未だに男女の性差というものを許容できずにいる。最近それを理解した。
だからラスティは一言で要約する。
「なあ、俺たちいつまでも子どものまんまじゃいられないよ？」
「そお？」
途方に暮れたように彼女が覗き込むので、ラスティは思わず視線を横にズラす。
……超天然魔性の眼力に騙されるなよ、俺。
いったいどれだけの野郎たちが犠牲になってきたか。死屍累々の上のまた一体になるのだけは心底避けたい。

「……すっかり忘れてるみたいだけど、俺も男なんだよね」
こんな夜這いされてベッドで隣に寝転がられて、それでこんな風に恋愛相談の相手してる俺は一体なんなんだろう。
ディアッカだったらもうとっくに乗っかってるところだ、ヤツなら「女にしてやるぜ」とかベタな台詞で口説くんだろう――まあその方がこんこんと対話するよりよっぽど手っ取り早いのかもしれないが。
などと思いを巡らせている最中、相部屋のグラスコーが帰ってきた。ベッドの上にTシャツ短パン姿で寝転がっているアスランを見て口を半開きにしている、とんでもなく気まずい。
「お前警備勤務じゃなかったのかよ」
ラスティは渋い顔で言う。
「さくっとアンリに交代したんだけど……え……もしかしてすごいお取り込み中だった？」
「全然」というラスティの言葉を、ごろりと腹ばいになって不機嫌なアスランの声がおしつぶした。
「うん、すっごく」
結局「ごめん！」と叫ぶなりグラスコーは転がるように出ていってしまった。
「……アスラン、そんなこと言ってると俺もう知らないよ」
「死なばもろともでしょ」
アスランも半ば自棄のようだ。
「いやいや。勝手に俺を巻き添えにしないでくれる？」
発情期到来中の野郎連中相手に、都合のいい主張はまず通らない。とにかく明日からどう釈明しようかなんて考えあぐねている間に、
「もうなんでみんなそうスケベなの！」とぼやいた後でマンガ片手にアスランは飛び起きた。
「これ借りてくわ」
「いいけど、……それ結構エロが含まれてるけど、……いいわけ？」
「よくわかんないけど、参考になるかもしれないでしょ」

いったい何の参考にする気なんだ！

Ｐａｓｔ：　Ａｃａｄｅｍｙ－７（後書き）

全部終わったらＰａｓｔだけで別の小説にします（多分

Past：Academy－8（前書き）

You kill me.

Past：Academy－8

7月18日。
パシッという音が耳元で炸裂した。
これも当然の結果といえば結果、と眉間に皺を寄せる。
打たれた頬を押さえながら、ラスティは走り去るレインの後姿を見送る。
「おーお。見事な平手打ち。大したもんだね」
上から掛かる声にラスティは目を上げる。
貯水槽の上で寝転がって覗き込んでいる金髪褐色の肌の少年は、白い歯を見せて笑った。
「……見るなよ」
気恥ずかしさに少し俯く。
「勝手にここで別れ話はじめたの、お前だろ」
ラスティは貯水槽の梯子を上ってその傍らに立つ、ディアッカは煙草を指に挟んで煙を吐き出しながら笑った。
「あーあ。凄いほっぺ真っ赤だな」
「ゴメン、ディアッカ。せっかく紹介してもらったけど、俺ってやっぱダメだったみたい」
「そりゃまぁ仕方ないっしょ。お前も吸う？」
寝そべったディアッカが煙草のケースを差し出し、座り込んでラスティも煙草を1本つまむ。
ディアッカの煙草から火を移してもらい、そのままくわえこんで口の端でぶらぶらと揺さぶってラスティは空を振り仰ぐ。
「なんかもう疲れたわ。しばらくもうこのままでいいや」
「んー、まあほとぼりが冷めるまでは彼女作るのも難しいかねえ」
ディアッカがにやにや笑う。
「んで、実際のとこはどうなのよ。ホント、ヤッちゃった？」
どうせ何言ったって聞く耳なんかもたないくせに――とラスティは

諦め加減に煙の流れる方向を目で追う。
どうもアスランが部屋を出ていくところをグラスコー以外にも目撃されていたらしい。
おかげでここ数日すっかり噂の種だ。
今まで慰めてきた連中からは一転して恨みがましい視線で見られるわ、今までの彼女連中には殴られるわ、ユウキ教官には恫喝されるわで、もう気分的に瀕死だ。
――そしてなにより不気味なのはイザークの沈黙。さすがに誰もまだヤツには言えていないのか？
「もういっそアイツと付き合えばいいじゃん、お前。本気で遺伝子適合検査とか受けてみれば？」
ディアッカは実に簡単に言ってくれる。
「それってありえないし」
なんだかんだでアスランとイザークとはお似合いだ、万事あの２人はそれなりに釣り合いが取れていると思う。
だがアスランがイヤだというのなら、もうイザークをムリに推すこともできない。
まごうかたなき板挟み――なんで俺はこんなややこしいことになっちゃったんだろう？
「そうかねえ。案外お前とアスランてイイと俺は思うけど」
「ニコルみたいなこと言うなよ。俺は庶民、アイツはお嬢様。お前たちと違って俺はお嬢様とお付き合いできる身分じゃないのよ」
「んなこと言っても、お前の親父ってマクスウェル議員じゃん、クィンティリスの」
ディアッカの指摘に、ラスティは前屈みになって煙を吐き出す。
「……なんで知ってんの？」
頭の後ろで手を組んだディアッカはにやりと笑った。
「そりゃあね、この世界は狭いんだぜ？」
とことん耳年増なヤツ。
「でも今の俺はもう１０年もマッケンジーやってるし、やっぱ庶民

なわけ――なのに今頃になってオヤジが会いたいって言ってきたんだよね……」

ラスティは憂鬱に髪をかきあげる。

おぼろげに記憶している限りあまりよい父親ではなかった、たまに邸に帰ってきたところで母親と激しく口論していた姿しか見た覚えがない。

「音信不通もいいとこだったのに今さらだろ？　――なんだかイヤな予感がするんだ」

「そっか」

珍しいことにディアッカはそれ以上何も言わなかった。

＊＊＊＊＊

休み明けの7月21日。

回を追うごとにMS模擬戦は厳しさを増して、教官の罵声もますます凄みを帯びてきた。

今となっては初日がいかに楽だったかということを思い知らされる。

プロトジンの電源を落として薄暗いコックピットの中、ハッチを開けば格納庫の薄明かりが差し込んでくる。

ラスティはヘルメットを脱いで、ようやくに頬の汗を拭った。

そのままハッチを踏み切り、反対にコックピットへ向かっていく技官候補生たちに声を掛ける。

「ちょい被弾したせいで右腕の制動が遅くなっちゃったから、修理と調整よろしく」

「了解！」

「マッケンジーさん、これ！」

すれ違いざまにドリンクパックを投げ渡されて、ラスティは「さんきゅ」と笑顔でそれを受け取る。

技官コースの女のコたちはきゃあきゃあと相変わらず賑やかでハイテンション、その有り余る元気をこのドン底に沈んでる俺に分けて欲しい――ま、周囲の雑音にさえ耳を貸さなければ、相変わらずの平常運転なわけではあるけども。

「お疲れさま！」

キャットウォーク上にはアスランがいて、降りざまラスティはハイタッチする。

「お疲れ！　結果オーライだけど、もうちょいスコア伸ばせたんじゃん？」

「冗談。マクシミリアンに徹底的にマークされちゃって振り切るのが精一杯だったんだから。時間切れで助かったわ」

アスランと組んだのが幸い、暗礁地帯ペア狙撃戦は1位通過だ。

ラスティはドリンクパックの口をぱちんと開けて、ごくごくと飲み下す。

「いいなぁ。私も喉渇いちゃった」

アスランが言う。

「いる？」

「いいの？　ありがとう」

アスランは受け取って、パックを口にくわえようとした瞬間、脇から伸びた手に奪われた。

「イザーク！　それ私が貰ったのに！」

「馬鹿、お前はあっちでもこっちでも餌付けされっぱなしだ！」

イザークは眉間に皺を作ってそれを持った右手を上に掲げる、当然にアスランには手が届かないので彼女は足先に力をこめてふわりと上昇する。

ふん、とひとつ鼻で笑ってイザークは手を下ろした。

「これは没収だ」

「ひどい！」

イザークとアスランはもつれるようにキャットウォーク上をふわふわと漂いながらロッカールームへと進む。

結局イザークはドリンクパックを片手に男子用ロッカールームへと引き上げ、アスランは憤然とそのまま女子用ロッカールームへと入っていった。

「あーあ残念」

2人の戯れにも似たやりとりを眺めていたラスティは、甘ったるい声に振り返る。

「間接キス阻止されちゃったなぁ？　ラスティ」

ディアッカがにやにやと笑っていた。

「あー……そういうことか。イザークのヤツそうならそうと言ってくれりゃいいのに」

「言えないからイザークなんだろ」

ロッカールームはむさくるしい男たちの熱気で蒸す。

ラスティはパイロットスーツの襟元を外して、上半身をはだけて、汗で濡れたTシャツを脱ぎ放った。

「――ったく早くどうだかなってくれっての！　どんだけ俺が迷惑蒙ってると思ってるんだよ！」

「微妙なんだって。イザークには渡しません！　とか言ってからこっちニコルがやたら邪魔してるし、お前とアスランてちょっと変だし」

隣のディアッカは垂れた前髪を後ろへと流して、替えのTシャツに頭を通す。

「変？　俺らのどこが？」

「お前はアスランを甘やかしすぎ――アスランはお前に懐きすぎ。ちょっと突き放してみろよ」

それができたらとっくにそうしてるよ、とラスティは鼻白む。

アスランに泣かれたり嫌われたりするのは絶対にイヤだ。

「ま、それができないからお前はめちゃくちゃ誤解されるし、女の子に殴られるし、イザークに目の敵にされるんだけどねえ……」

耳に痛い。

優柔不断の自業自得を指摘されて、ラスティは替えのTシャツの袖

に腕を通しながら、「ごもっともです」とうなだれた。

「これは貴様のだろうが。いちいちアスランに渡すな！」
投げつけられたドリンクパックをラスティはキャッチする。
相変わらずイザークは仏頂面で、突き刺さりそうな視線をしている。
「言っておくけど……俺、別にアスラン餌付けしてるわけじゃないからな」
アスランと2人で菓子類を大量に消費していることだけは認めるとしても、だ。
「ものの例えだ」
そのまま、また廊下を戻ろうとしたイザークをラスティは呼び止める。
「で、お前の方はどうなんだよ」
「どう？」
銀髪ごしの青い目がぎろりと睨む。
相変わらず刺々しいが、例えばホストなんかをやらせてもすぐナンバーワンを張れそうなそのキレイな顔を眺めていて、力が抜ける。
――どっちにしろ俺はコイツと同じ土俵にはあがれない。
「いや、アスランとの関係は……」
「どうもこうも相変わらずだ」
簡潔に言ってイザークは話を終わらせる。
相変わらず？
ラスティは怪訝に首を捻る。
……もしかして見合いの話はまだアイツにはおりてないのか？

ＭＳ運用について教官からの講評が終わって、久々の講義室での放課後を迎え、アスランが背伸びしながらやってきた。
「お腹すいちゃった～食堂におやつ食べに行きましょ」

「はいよ」
ラスティは書類をひとまとめにしてファイルに収める。
「ニコルー？」
アスランの声に、教室の隅の方にいたニコルは大声で応えた。
「僕はプログラミングの課題がありますから、先に行っていて下さい！」
相変わらずニコルも勉強熱心だ。
「コロニー戦のグループ分けも終わったし、数日はゆっくりできそうね」
「できないんじゃない？　イザークと一緒だからいろいろ大変そうじゃん」
――そしてますます俺は板挟み。
「で、結局どうしたんだよ、お見合いの話は？」
「それがね――お父さまからいったん保留って言われて、いったい何がなんだか」
イザークは話自体を聞いていなさそうだったし、何か揉めてるんだろうか――とは推測だ。
アスランと並んで食堂への廊下を歩き出したその時、背後から怒鳴り声が飛んできた。
「アスランッ！！」
いつものようにイザークで、いつものように身構えたアスランが応じる。
「なぁに？」
「コロニー戦のシミュレーションをやるぞッ！」
ええええ、とアスランはイヤそうな顔をして、ささっと後ろに回りこんだ。
「おいアスラン、俺を楯にするなよ」
ラスティは少しばかり頬を染める。
背中にそのぷにぷにが当たってるんだけど、とは口が裂けても言えない。

「今日はもういいわ。それよりこれからおやつ食べるの、私たち。……なんならイザークも来る？」
ちら、とイザークの切れ長の青い眼差しがこちらを窺う。
ラスティは肩をすくめた。
わかってるって、邪魔はしないってば。
「こりゃおやつはお預けだね、イザークはもうやる気まんまんっぽいよ。ほらアスラン」
ラスティは背後に隠れているアスランを引っ張り出してイザークの前に押しやる。
「――やだ、ラスティが裏切った！」
アスランを受け取ってイザークはにやりと笑う。
「お前の相手なら存分にこの俺がしてやる！　これから一緒にシミュレーション室だ！　赤服連中相手の対策を練らなきゃならんのだからな、来い！」
首根っこを掴まれて、不服顔のアスランはひきずられるように元来た廊下を戻るハメになった。
「ラスティひどいぃぃぃ～」
……俺もそれなりに辛いんだけどね。

＊＊＊＊＊

7月22日。
寮1F売店は相変わらず大盛況。
引き上げついでに雑誌と夜食用のパンを取る、後で降りてくるような気力は1nmすら残っていない。
――もう朝からぶっ通しのMS演習でくたくた、チーム内で元気溌剌なのはイザークとシホくらいなんじゃないだろうか。
「あいつらちょっと張り切りすぎだよな……」

冷蔵庫ドアを開けてかがんだラスティの愚痴りに、頭上越しにコーヒー牛乳の瓶を取ったコートニーが応じる。
「そりゃまあ、配属先にも影響してくるって噂だしね。頑張りどころなんじゃない？」
シホはともかくイザークはいったいどこに回されたいんだろう、もはや生きる伝説状態となったあの全戦不敗仮面隊長のところか？
コートニーが言葉を続ける。
「クルーゼ隊って今ほとんど特殊任務ばっからしいじゃん。入ってからがめちゃめちゃ厳しいっていうけど――頑張ればラスティもいけるんじゃないの？」
「勘弁してくれよ、配属されてまでイザークと一緒になりたくないよ俺」
「当然か、恋敵だもんな」
……お前もか、コートニー。
オールラウンドな誤解のせいで、もう自分すら洗脳されそうな勢いだ。
とりあえず売店カウンターで精算している最中、ぐいっと袖を引っ張られてラスティは振り返る。
捕まえた！　と薄紅の制服姿でアスランは胸を張っていた。
「なぁに、技官コースの女の子とお付き合いしてたの？　私そんなことちっとも聞いてないんだけど！」
「……誰に聞いたんだよ、それ」
雑誌を小脇に抱えて、しかも今さら、とラスティはひとつ嘆息を漏らして廊下を行く。
背後からついてくるアスランは声を大にして言い募る。
「教えてくれないなんて、ないがしろにされた感じがするわ」
「なあ、俺は彼女も作っちゃダメなわけ？」
「誰もそんなこと言ってないでしょ。私にも紹介するべきじゃない？　って言ってるだけで」
また無茶を言う。

紹介なんかするまでもないじゃないか、というかそんなことしたら向こうがドン引きだ、相手はアスランだぞ？
不機嫌なアスランがなおも背後で文句を言っているので、ラスティはポケットを探る。
包み紙が指先に触れた。
「はいアスラン、お口あーん」
「あーん」
指先でチョコレートの粒を弾いて投げ込めば、ようやくにアスランは黙った。
「……ビターね」
「そりゃもう。カカオ９９％だし」
いちおう否定はしたものの、イザーク曰く餌付けというのは真理をついている。
「今は俺彼女いないし、お前が聞いたのは全部終わった話」
アスランはひとつ唸る。
「今は違うの？」
「うん」
「ふーん……ならいいわ」
ヤキモチに見えるけど、結局は「遊べるおもちゃが減るのがイヤだ」的な理由のくせに。
ズルいヤツ。

＊＊＊＊＊

7月23日。
赤服選抜組を向こうに回したコロニー内遊撃戦が月末に迫っていて、日々の演習もそれを想定した内容に切り替えられていた。
引き上げたアーモリー軍港内パイロット控えルーム、グループのミ

ーティングでアスランが真っ先に声を上げた。
「私はラスティと組むわ！」
指名を受けたラスティは不意を衝かれて目を白黒させる。
「俺？……アスラン、イザークと組むんじゃなかったの？」
今回赤服組に、地球の＜海の雄＞モラシム隊の超有名人と、宇宙の＜全戦不敗＞クルーゼ隊の凄腕緑服が特別参加――ということで、アスラン・イザークの最強コンビには教官たちも期待を寄せているというのに。
「いいでしょ、デブリ戦でも成績上々だったし、いけると思うの」
「えええ！？」
「いきなりすぎるって！」
「わがままを言うなッ！！　今まで俺とシミュレーションしてきたろうがッ！！」
苛々した様子のイザークも顔を顰めて雷を落とす。
怒鳴られてムッとしたらしいアスランは腕を組んだ。
「イザークはディアッカと組むの、それで攻守バランスが取れるわ。それにイザークと私じゃ近接攻撃一辺倒になっちゃうでしょ」
「そういう問題じゃない！　何としてもヤツらには負けられんのだぞッ！！　それをお前はッ！！」
「ちょっとチーム内のペアを変更するだけなのに」
「俺は絶対にイヤだからなッ！！　スコアが落ちるッ！！」
「おいおい、さりげに俺をバカにしてねぇか？　イザーク」
アスランとイザークを中心に揉めるグループ内で、ラスティはひとつ嘆息をついた。
放置しておいたら収拾がつかなくなる。
「はいはいみんな、ちょいクールダウン」
ぱんぱん、と手を叩いたのを合図に、ようやくにメンバーが黙った。
「俺はマクシミリアンと組むよ。アスランはイザーク。でディアッカはアンリでシホはラルフ。な？　最初の予定通り！」
「えー……」

「当然だ！」
「それで決まり！　異議申し立ては却下よ！」
呆れ果てていたシホが〆て、どうにかこうにか場が収まった。
ロッカールームで、相変わらず隣に陣取っているディアッカがくつくつと苦笑いした。
「とうとうゴネだしたよ……予想外」
「俺もだよ」
パイロットスーツを脱いで、ラスティは制服に袖を通す。
ディアッカがちらと横目で見て言う。
「イザークが間を詰めてきてるせいかねえ、アスラン腰が引けてる気ィするよ。その分お前に逃げるんだろうね」
「お前ってホント高みの見物なのな。楯に使われてる俺の身にもなってくれよ」
「んなこと言って、ホントは嬉しいんだろ？　いい加減正直になれよ」
正直複雑――そりゃあアスランに懐かれているのは嬉しい。だけど懐かれているのと恋愛感情とはまた別モノなんだ。
ラスティは制服着たディアッカの胸元のポケットの上をトントンと叩く。
ディアッカは相変わらずニコチン中毒だ。
「――なぁ、これ教官にチクっていい？　トイレ掃除2週間は固いね」
「はいはい、余計なことを言い過ぎました」
ディアッカは大仰に肩をすくめた。

演習続きでも日直は回ってくる。
ラスティはぺらぺらと日誌をめくりながら廊下を行く。
またユウキ教官に粘着質なお説教くらうんだろうな――などと考えながら教官室に向かって歩いている最中、突然学部長室のドアを開

け放って出てきた影が進路を妨げた。
冷ややかで挑みかかるようなアイスブルーの視線に、ラスティは息を呑んで足を止める。
黒いスーツに身を包んだ背の高い銀髪の女。
もはや壮絶の一言が似合う美女だが、周囲の空気がぴりぴりと音を立てる――すさまじい威圧感！
どけ！　という無言の圧力を前に、思わず飛び退るように道を譲る。
女の朱色の口紅がひどく鮮やかで、眺めているうちにやがてそのかたちのよい唇の両端がつり上がった。
「……ジェレミーによく似ていること」
通り過ぎざまに女が呟いた父親のファーストネームに、ラスティは凍り付き、振り返ることも出来ないままに立ちすくむ。
――あれはきっとイザークの母親だ、ＴＶで見たことがある。
親父と同じ最高評議会議員で国防委員。
Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．上層部は死ぬほど忙しいって話なのに、なんでこんなところにいるんだ？　息子に会いに来たのか？
でもあんな殺気バリバリで？
再びドアが開く音がした。
「ラスティ」
もはや聞き馴染んだ声だ。
「アスラン、演習早退していったいジュール議員と何を――」
と言いかけて振り返れば、出てきたアスランは左頬を押さえている。
ドキッと心臓が跳ねた。
「ちょっと、見せろよ」
「なんでもないわ」
「んなわけないだろ」
渋る手をどけさせると、アスランの白い頬がひどく紅く染まっていた。
「――お前、これまさか拳？」
かなり本気で殴られたらしい、見るだに痛々しい。

「平手よ。……お気に障ったみたい」
見合い話を断った挙句にイザークの母親に怒りの鉄槌でも食らったのだろうか。
詳しくは言わず、やがて肩口に頭を凭せかけて「なんだか疲れちゃった」とアスランは力なく言った。
途方に暮れる。
もう何十回目かのループ――俺はいったいどうしたらいいんだろう？

ホントは嬉しいだろ？正直になれよ。

嬉しくないなんて言ったらそれは嘘だ、アスランは可愛いと思うし、つきまとわれるのも全然イヤじゃない。
ためらいがちに背中に腕を回そうとして、やはり肩を掴んで引きはがす。
やっぱりこんなのはおかしいんだ。
「悪いけど……あんまりフォローしてやれないよ、俺」
「え？」
アスランはきょとんとしている。
ちっとも悪気はないんだろう、いつだってそうだ。
でも、みんなで仲良くしたいなんてのは結局わがままで、そのあたりアスランは全然気づかないし考えもしない。
――好きな子には好きって言ってもらって、抱きしめてもらって、自分を受け入れてもらいたいだろう、イザークのその気持ちはよーくわかる、俺だってそうだ。
でもコイツはその基本的なところを『理解しようと』しない！
今言うのはひどいのかもしれない、でも――俺だっていい加減いっぱいいっぱいだ。
視線をあわせずにラスティは言う。
「振り回される身にもなれって。お前はわがままますぎるの。ちっとはよく考えろよ、イザークのこととか俺のこととか――なんでこん

なややこしいことになってんのかとか。いい加減わかんなきゃおかしいだろ」
我ながらビックリする。
どんだけ溜め込んでたんだ俺？
極力殺いだ言葉の棘が抑えられなくなる前に、とラスティはそのまま背中を向けた。

そういえば目の縁が紅かった。
……もしかしたらアスランは泣いていたのかもしれない。

＊＊＊＊＊

同日夕方。
レクリエーションルーム隅のソファー上に、寝転がってうずくまっているアスランの背中を発見してニコルは歩み寄る。
「アスラン？　どうしたんです？」
日夕点呼にいない！　とシホさんが探していた、と言いかけて、アスランのかぼそい声に言葉を飲み込む。
「……ラスティに嫌われちゃった」
すごい鼻声だ。
そういえば、さっき廊下ですれちがったラスティも何となく刺々しい感じだった、喧嘩したのだろうかとニコルは気を揉む。
最近また2人がますます仲良くて、計画通り！　と思っていたのに。
「何があったんです？」
「……」
アスランは何も言わないが、どうもラスティが一歩引いてしまったらしい、とニコルは察する。

あれだけハッパをかけたのに彼のほうがまだ迷っていたのか。これは困った。

「何があったにせよ、ラスティがアスランを嫌うなんてことはありませんよ、絶対」

ぐすん、とアスランはひとつ鼻をすすった。

「ちょっとほとぼりが冷めるのを待てばいいと思いますよ。そのうちまた普通に話せるようになりますって」

隣に座ってアスランの背中を撫でるしばし。

「アスランッ!!　見つけたぞッ!!」

また面倒な時にやかましい人が来た、とニコルは顔を顰める。

削ぎ落とした銀髪をゆらゆらと揺らめかせて、イザークが大股に入ってくる。

「イザーク。アスランは今ちょっと取り込んでますから」

「はん、寝転がってるだけじゃないか！　シミュレーションの途中で逃げ出しやがってッ!!」

「来ないで」

「え？」

「――あなたの顔見ると、きっとさっきのこと思い出しちゃうもの」

ぼそりと背中でアスランは言う。

解せないニコルとイザークは瞬時顔を見合わせる。

「何を抜かしとるか！　アスランッ!」

「イザーク!」

ニコルの制止を振り切って、アスランの肩に手を掛けたイザークは覗き込むなり、吃驚したように手を引いた。

「おい……どうした？」

「ですから、取り込み中なんです。今はそっとしておいてあげて下さい」

ニコルは首を振った。

＊＊＊＊＊

7月30日。
自由演習後のパイロット控えルームに甲高い声が反響した。
「ちょっと、どうしたのよラスティ！　こんなスコアになるなんてッ！　最近全然らしくないじゃないッ！！」
怒りに頬を赤らめたシホはラスティの腕を掴む。
「はーいはいはい、俺のどんぞこの成績のせいでチームの足引っ張っちゃってゴメンな」
ラスティは腕を振り払い、投げやりに言って背中を向けて、ロッカールームへと姿を消した。
「え……？　ホントにどうしたのよ、ラスティ！？」
シホは怪訝に見送る。
「らしくないね」
ラルフが首を捻るかたわら、ヘルメットを棚に置いて襟元を緩めたマクシミリアンが言った。
「アスランと喧嘩でもしたんだろ？　見た感じ、最近2人とも目も合わせてないし一言も口聞いてない」
「あー……」
「そうか……」
納得の声があちこちから上がる中、シホは顔に手を押し当てて、苛立った声を上げる。
「もう！　困るのよ、そんな私情を持ち込まれたら！　コロニー戦は明日なのにッ！！」
格納庫からイザークとともに引き上げてきたアスランに向かって、シホは足音荒く歩み寄っていく。
「ラスティの不調あなたのせいよ！　さっさと仲直りしなさいよッ！」
さっと青ざめて表情が暗くなったアスランは沈黙する。

その沈黙の重さにシホはたじろいで声を低くした。
「ねえ……あなたまで、どうしたのよ。先週からずっと変よ」
「ごめん」
アスランは悄然としてロッカールームへと向かった。
「アイツも絶不調だ、全く！　照準も乱雑で的はとりこぼしだらけッ！　今までならありえんミスばっかりだッ！！」
イライラ絶頂のイザークの言葉に、アンリが大仰に肩をすくめた。
「あーあ、こりゃ深刻だね。明日うちのチームは大丈夫なのかねぇ……？」

＊＊＊＊＊

7月31日。
――L5オロール型軍事教練用コロニー“アリアディウス”。
演習時間開始を告げる甲高いサイレンの音が鳴り響くとともにいくつもの花火が上がった。
イザークは前線の切り込み隊長的役割を担い、そしてペアのアスランもあわせるように攻撃的な戦法を取っている。
最大戦速で突っ込んでいき、相手が勢いに呑まれている間にその砲を放ち、見る間に数機を戦闘不能に追い込んでいく。
『C1C2Y5～9確認』
各ブロックに設置されたカメラで、教官たちは判定しているらしい。
ラスティもまたプロトジンの機関銃でジンの胸部を撃ち込み、対EMP装置を破壊する。
コロニー内に張り巡らされた弱電磁パルスの影響で、電源が落ちたジンは倒れ込んだ。
「ひとつ！」
『C53Y21確認』

その傍らを走り抜ける、廃墟のビルの向こうに動く影があって曳光弾が撃ち込まれた。
「負けられるかよ！」
レバーを手前いっぱいまで引いて機体を倒す、頭上を抜けていく弾の下でライフルの照星とモニターの照準とが一致して、ラスティはトリガーを押す。
ビルに隠れようとしたジンの胸部で爆発が確認できた。
「ふたつ！」
『Ｃ５３Ｙ５１確認』
『Ｆ班！　Ｓ１８にジン２発見！　至急支援願う！』
『Ｃ１７Ｙ３及びＹ４３Ｃ１７確認』
『Ａ班Ｓ３５でシアン機、ホセイ機脱落――』
『Ｓ１１にて交戦中、うわぁぁぁッ！』
『Ｙ１４Ｃ３２及びＣ３６確認』
音声回線ＯＮの中ではあちこちの状況が飛び込んでくる。情報が雪崩れ込んでくるが戦況の把握には絶対に欠かせない。
錯綜する中でも真に必要な情報を選び出す耳を持て、とは常々ウィラード教官が口を酸っぱくしている言葉だ。
すぐ背後で、機体が倒れ込み砂埃が上がった。
マクシミリアンがやられたらしい。
『Ｂ班マクシミリアン機脱落』
「ちっくしょう！　――みっつ！」
続けざまの射線を避けて、縦ロールでプロトジンを撃破しながらラスティはイザークの声を聞く。
『Ｂ班残存兵と周辺各機はＳ１１に集まれッ！！　ラインを張るぞッ！！』
確かに個別撃破よりは共同戦線が有効だろう、そしてここは今Ｓ１３区だ。
「Ｃ５３了解ッ！」
ビルを楯に狙撃しながら、倒れた瓦礫を越えて飛翔する。

Ｓ１２区を抜けると、そこは既にして混戦状態で、倒れた僚機と敵機とが無数に倒れ込んでいた。
『Ｄ班！　Ｓ２２で交戦中！』
『Ｓ１０区にも援護頼む！』
上空のジンからマシンガンを打ち込まれて、咄嗟に応射しながらラスティはビルの陰に隠れる。
だがそこも既にして戦場だった。
すぐ傍らで狙撃された僚機が大きくつんのめるように倒れ、その巻き添えを食らってラスティのプロトジンも吹き飛ばされる。
「しくじったッ！！」
コックピットに機体が倒れ込む衝撃が走って、反動でシートのベルトが身体に喰いこむ。
直撃が来るか！？
だがその時、モニター全面に、庇うようにして眼前に立つプロトジンの背中が映り込んだ。
『ラスティ！！』
ジンの楯を奪って射線を遮ったアスランのプロトジンは、精密射撃で過つことなく敵機の対ＥＭＰ装置を破壊した。
「アスラン……？」
吃驚してラスティは目を見開く。
『早く起きてッ！　背後からも回りこまれてるッ！』
我に立ち戻る。
「……おうッ！」
落ちていた重斬刀を素早く手に取り、ラスティはスロットルを一気に押し込んでペダルを踏み込み、低姿勢のままバーニア全開で猛然と眼前のジンに突っ込んだ。
足元にタックルを喰らってジンは倒れ込む。
「機体の性能差なんてッ――――」
技術と根性で乗り越えるッ！！
馬乗りになって振りかざす重斬刀の切っ先でジンの対ＥＭＰ装置の

爆発が起こり、対峙していたモノアイから光が消えた。
安堵する一瞬、視界に鮮やかな色が飛び込んできた。
ラスティは視線を走らせる――黄昏色の機体に、髑髏のパーソナルマークが肩に見える。
――とうとう来た、クルーゼ隊名物、ミゲル・“黄昏の魔弾”・アイマン!!
『行くぜぇぇぇッ!!』
この場合どう見ても狙いは俺!!
焦ってラスティは迎え撃つ、勢いに砂煙をあげて後方へと押し切られる。
凄まじいGに、思わずマニュピレータから刀の柄が弾け飛んだ。
身を沈めて機体をここぞと迫りくる重斬刀の動線上から外し、先ほどのように突っ込む。
だが、体当たりでつんのめったはずの黄昏色のジンの反応は早かった。
『一撃必殺――――ッ!!』
こちらに立て直す余裕はなく、ラスティの背筋は冷える。
やばい、これは本気で殺しに来てる!! 絶対教練中の事故で処理される!!
『させるかァァッ!!』
鋭い声とともに眩い一閃が、頭上で一波を遮った。
イザーク。
その圧巻の勢いにラスティは感嘆する。
いついかなる時よりも生き生きとしている、攻撃的なアイツにはきっとこういう場所の水があうのだろう。
『くっそぉぉ!!』
眼前で2機のMSがぶつかりあうように切り結ぶ。
『悪くないッ!! お前全力でスカウトしてやんよッ!!』
『――だが断るッ!! 誰が貴様なんぞとッ!!』
『なんだその態度はッ!!? 先輩だぞ俺はッ!!!』

汎用電波を使って激しく口論しつつ、つばぜりあいを繰り返すイザーク機とミゲル機。
それを飛び越えて、今度は眩いオレンジ色のＭＳが頭上から躍り出てきた。
振り仰いでラスティは目眩する、立て続けすぎる――
「大ボスのご登場かよッ！！」
超有名人ハイネ・ヴェステンフルス！！
『おーらおらおらッひよっこどもッ！！　全力で来いやぁ――ッ！！』
笑いを含んだ声がスピーカーから漏れてくる、絶対コイツ楽しんでる！！
振り下ろされた重斬刀を返す刃で受けて、剣戟が散る。
『甘い甘いッ！！　いっそまとめてかかってこいッ！！』
「んじゃあお言葉に甘えて！！　――アスランッ！！」
ちょうど一機仕留めおおせたアスランが即座に応えを返してきた。
『行くわよッ！！』
力押しだ！！
アスラン機がライフルで撃ち放ち、それをハイネ機が刃で受ける。
気を惹いている合間に機体を胸元に滑り込まそうとしたが、切っ先がすかさず翻った。
――いったいどんなプログラムしてるんだ！？　運動反射が早すぎるッ！！
『ほらほらダンシングターイムッ！！』
そして重斬刃の動線を防ぐので精一杯、すっかり翻弄されている――向こうのペースだ。
気を取られている合間に胸部に凄まじい蹴りが入った。
間一髪両腕で防御する。
「……ッ！！」
首の皮一枚で対ＥＭＰ装置の破壊は辛うじて免れたが、砂煙を上げて吹っ飛ばされてビルに叩きつけられる――

『さあさあ気合いを見せろよッ！！！』
眼前で肉薄の砂煙が上がった。
そして今度はアスラン機が圧倒されている。
実力の差は歴然で、実戦の場数を積んでいる向こうが断然上。どうあっても単機じゃ対抗できない。
間をとろうにもじりじりと詰められて、切っ先が迫る。
『ラスティッ！！　ホントもう限界だからッ！！』
助けて――というアスランの悲鳴にも似た声色に、ラスティの口許に笑みが過ぎる。

……参った。
全面降伏だ。

「お前っていっつも俺には弱音ばっか、アスラン」
それをいちいち受け止めちゃう俺も俺なんだけど。
トリガーとレバーを繰る、マニュピレータは背に負うマシンガンを引き寄せた。
「――見てろって」
仰向けのプロトジンの上半身を起こす、マシンガンを腹部に構える。
スコープを引き出して照準が合う一瞬。
「しっかりフォローしてやるからッ！！」
ラスティはマシンガンのトリガーを引き、アスラン機の中腹部越しに、その射線で露呈した相手の胸部対ＥＭＰ装置を潰した。

＊＊＊＊＊

ヘルメットを脱ぎ放って、波打つ蒼い髪が無重力に翻る。
なんでコイツはいちいちキレイなんだろうなぁ、とラスティは諦め

の境地で眺める。
アスランはキャットウォークの上で待っていて、ラスティはその笑顔を見返しながら降りる。
そして手を伸ばす――ハイタッチを交わせば、小気味いい音が高天井に反響した。
「上々じゃない！」
「まぁね」
ラスティも歯を見せて笑う。
コロニー戦は、現役赤服組を抑えてPクラス勝利で締めくくられた。
そして班別成績では我らがB班がダントツ。
実際の戦場はこんなもんじゃないぞー！！　とハイネ・ヴェステンフルスはプレッシャーをかけてきたが、まあとりあえず今回はなんとかクリアだ。
キャットウォークに降り立つ。
「いろいろゴメンな」
「お互いさまでしょ」
まあそういうことにしておくか。
「アスランッ！！！」
勝利の沸き立つ周囲を圧して響くのは、いつものイザークの声だ。
「イザークが呼んでるよ」
アスランは頭をゆるやかに左右に振って、反対側の出口へと足を向けた。
だからラスティも並ぶ。
「見合い話断ったから気まずい？」
やがて彼女は予想外のことを口にした。
「ジュール議員に釘を刺されたの」
「何を」
「金輪際イザークに関わるなって――縁談は適合結果を見てお父さまが勝手に言い出したことだから、って」
不意を衝かれて、ラスティは言葉を失う。

てっきりアスランが振ったのだとばかり思っていた。
「議員は軍のＮｏ．２だし、ずっとお父さまと一緒にいた女性なのよ。私が下手なことしたらお父さまに跳ね返っちゃうわ」
アスランの横顔も声も硬い。
「でも。お約束はできません、今後もＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．でお付き合いしていく以上は、って答えたら」
「殴られた？」
避けることは当然できたはずなのに、それすら父親の為に我慢しちゃうのか、コイツは。
どうしようもなく不器用なヤツ。
「……どっちにしても私の距離の取り方がマズかったのよ。ラスティに言われて気付いたわ」
「おいッ！！　アスランッ！？」
怪訝そうなイザークの声が聞こえるが、アスランはもう振り返らない。
広がる距離の合間、代わりにラスティが足を止めて一瞥を投げかける。
ヤツは、あのエザリア・ジュール議員によく似ている。
きっとアスランはアイツに何も伝えないだろう。

ごめん、イザーク。
でも、多分お前じゃダメなんだ。

騎士ってガラじゃないけど、俺ももう退けない。
クィンティリスの親父に、今度会いに行く。

Past：Academy－8（後書き）

T.M.Revolution 魔弾（Madan）～der Freischutz～ UNDER：COVER

Past: Academy－9（前書き）

In the rhythm of the passion,

Ｐａｓｔ：　Ａｃａｄｅｍｙ－９

頭の芯がズキズキと痛む。
というのも昨日８月８日がちょうど金曜日だったせいで、Ｐクラスの同期連中が『お誕生日会』なるものを催したせいだ。
ハイヤーの後部座席左側でイザークは目元を押さえる。
誕生日会なんぞ幼稚舎以来だった。
ガキかッ！！　と言いながらも結局どんちゃん騒ぎで夜通し呑み明かして、朝方潰れた挙句に二日酔い――正直今も自室で寝ておきたい。
「ほら、イザーク。曲がっていますよ」
襟元のネクタイに手をかけた母の綺麗な眉間にかすかな皺が寄る。
「母上」
「しっかりなさい、まあおぐしまで乱れて。ここ最近本当にあなたらしくないこと」
「……好きにさせて下さい」
麝香にも似た香水の匂いですでにくらくらしているのに、この上お小言をいただくとなるとますます頭痛が悪化しそうだ。
「大勢の人間がいるのですから、乱れた姿を晒してはダメですよ」
「心得ています」
いくら予定であったとしても体調的にイレギュラーだ。
この人の都合優先とはいえ、なんだってこんな二日酔いで夜会なんかに俺は引っ張り出されるのか。
醜態を晒す前に早々に邸に帰ろう、と強く決意してイザークはハイヤーを降りた。

アプリリウスワン、行政府区にある迎賓館はまたひどく賑やかだった。

母エザリアに従って大階段を上る最中、待ち構えていた国防省幹部と軍需企業マティウス・アーセナリー関係者とマティウス市議員団に囲まれてすでにして黒一色。
人の壁に慣れてはいたが、それでもやはり息苦しい。
幼い頃は同世代に会うことが楽しみで夜会を待ち望んでいたこともあったが、それも最近は忙しさを口実に遠ざかっていた。
利権に群がる連中とそれに絡む思惑と社交辞令と――
着飾った人々の眩さ華やかさの影で、とかく打算尽くめで生臭すぎて肌に合わない。
――だがそんなことは露とも斟酌もせず、ホールでは社交界デビュー（デビュタント）の白い少女たちの群れが、黒い少年たちを向こうにしてくるくると軽やかに踊る。
シャンデリアの光を弾く白に、初々しいほどのヴィエンナワルツ。
雄弁に熱情を語る旋律が聞こえる、メインピアノを弾いているのはきっとニコルだろう。
時々生意気ではあるが、アイツのピアノときたらいつだって“天球の音楽”だ。

やがて顔見知りを見つけてイザークは壁際へと向かう。
「おい、ディアッカッ！」
「よーお。べろんべろんだったから来ないかと思ってたわ」
ディアッカは礼服の上着を脱ぎ放った袖まくりで、あまつさえ胸元をくつろげてソファーの一角に陣取っていた。
「こんな場で着崩すなッ！　最低限の礼儀は守れッ！」
「固いこと言いっこなしよ？　つーかよっぽど俺紋付き袴で来ようかと思ったんだぜ、目立ちすぎるからやめたけど」
ディアッカはのほほんとしてグラスを傾ける。
こんな傍若無人が許されているのは、同胞の将来の根幹を担う大博士の一人息子だから、の一点に尽きる。
「ったく！」

「お前も呑めば？　安酒じゃ口にあわないとかなんとかブーブー言ってたじゃん」
すでにしてディアッカの前のテーブルには空のグラスがいくつか並んでいる。
あれだけ呑んでたのにまだ呑むのか。朝の解散のあともはしごするぜ！　とどこぞに消えたのに、コイツはうわばみか？
イザークはどかんとその対角線上に身を投げて声を張る。
「甘いのは好かん、白を寄越せ！」
迎賓館のスタッフはよく心得たもので、すぐさまグラスが運ばれてきた。
ホスピタリティに関してはアプリリウスホテルの連中とよい勝負だ、と思いながら瓶のラベルを確かめる。
ユーラシア仏サンテミリオン特別級Ａ、まあ許す。
「――礼服が嫌いっていうのになんでわざわざ来たんだ」
「や、ちょっと興味深いものが見れそうだったからさ。野次馬ってやつ？」
ディアッカが目を転じるので、イザークはその視線を追って振り返る。

ワルツの区切りを告げる拍手のただなか――
引き上げる男たちの中にオレンジ髪を後ろに流したラスティがいた。
礼服なんかおよそ似つかわしくない、とイザークは見咎める。
「なんで貴様がここにいる？」
「ホント場違いだよな」
ラスティが諦め加減に言って、くしゃりと垂れた前髪をかきあげながらディアッカの隣に腰を下ろす。
「付け焼き刃じゃ、上手くリードもできないよ」
「その分女の子たちにしっかりカバーしてもらってたじゃん、割に見れたぜ？」
んでも腰はもっと大胆に前に出そうな、とディアッカが忍び笑いし

ながら、ラスティの肩に凭れかかる。
「けどお前らって毎週末にこんなのよくやるね。俺がマンガ読んでポテチかじって寝っ転がってる合間に」
フン、とイザークはホールに目をやる。
楽しげなポルカが始まっていて、ホールの眩いただなかを黒い少年たちと白い少女たちとがステップを踏みながら入り乱れる。
「自堕落なヤツめ。人脈を繋げていくのには有効な手段ではある」
「やれやれ、人脈ね。俺、たぶんそういう感覚は一生理解できないよ」
じゃあなんでここにいるのか、と問おうとした矢先。
壁際で談笑する大きな輪の中にいた男のひとりがラスティを呼んだ。
「ラスティ、来なさい。委員長に紹介する」
あれは、……マクスウェル議員。
クィンティリスを統括する最高評議会議員で、文官系ザラ派の有力者だ。
「俺のオヤジなんだよね」
素っ気なく告げるとラスティは立ち上がって足を向ける。
息を呑む。
「アイツがマクスウェル議員の息子だと？」
「両親が離婚して母方に引き取られたんだってさ、俺んとこと逆」
「そんな話聞いてないぞ！」
「わざわざ言うことじゃないんじゃね？」
不穏な胸騒ぎ、そしてイザークは視線で求める姿を探す。
あの輪のただなか、壮年の上背の高い軍人然たる男が中心にいる――相変わらず厳しい表情のパトリック・ザラ国防委員長。
あの人がここにいるということは、アイツもこの付近にいるのか？
最近バタバタしてロクに話せてない、夕べもいなかった。
イザークは視線を巡らせて、振り返る。
「アスラン」
歩み寄ってくるのは白薔薇の花束を片手に携えたアスランだ。

装飾のない淡紅色のドレスだが、それだけに白くきらびやかな少女たちの中でひどく目立つ。
まず晒すことのないむきだしの白い肩、薄化粧の華のかんばせ。
――黙ってたたずんでいれば、ただ可憐の一言につきる。

「ごゆっくりどーぞ」
ディアッカはグラス片手にウィンクで席を立ち、イザークは横目で睨む。
余計な気を回しやがって、とは思うが、それがありがたくあるのもまた事実だ。
「まさかデビュタントか？」
アスランはふふっとやわらかく笑んだ。
「ううん。それはもうとっくにコペルニクスで済ませたわ」
また綺麗になったろうか、と見惚れる最中にもふと違和感を覚えて、一瞬後に気付く。
「お前、髪は？」
髪を結い上げているわけでもなく、ただ細い首筋が露わだ。
「ヘルメット被るたびに髪をまとめるの大変だったから、思い切ってばっさりといっちゃった」
おかげですごく身軽、とアスランは笑む。
「シャンプーも楽だしドライヤーも時間かからないし、これぞまさに省力化ね。　もっと早くしておけばよかったわ」
「――もったいないことを！」
あの波打つ蒼い髪が好きだった。
「お父さまと同じこと言うのね」
でも私もう長い髪は飽きちゃったの、とアスランはどこか儚げですらある。
「あとイザーク、これをあなたに。一日遅れだけどお誕生日おめでとう」
埋もれるほどの白い薔薇の群れを差し出されて、イザークは両手で

受け止める。
「お母さまが作った株から育ったの。うちの庭師のエストさんご自慢の品だわ――やっぱりイザークには白が似合うと思って」
頭の芯の痛みをやわらげるような自然な香りが鼻腔をくすぐる。
そして母御の形見であるなら、きっと大事な花だろう。
「……ありがたく頂戴する」
「どういたしまして」
軽快なるポルカが終わり、再びの拍手。
また次が始まる、とイザークは薔薇を通りがかったクロークスタッフに預けて立ち上がる。
「来い、どの程度踊れるのか見てやる！」
居丈高に手を差しのばせば、「いつもながら偉そうね」と彼女が受けた。
「お手柔らかにお願いいたします」
どこまでもつつましやかでたおやかだ。

柔らかくＮｕｔｕｒａｌ　Ｓｐｉｎ　Ｔｕｒｎを踏む――
「夕べいなかっただろうが！」
「企画まではしたのよ。あとはシホにお願いしたんだけど」
重ねた腕がしなやかに伸びる、華麗なるＲｅｖｅｒｓｅ　ｔｕｒｎ　ｔｏ　ｒｉｇｈｔ、続くＣｈａｓｓｅ　ｆｒｏｍ　ＰＰ。
「……それは聞いた」
「ワルツの特訓に付き合ってたのよ。なのになかなかラスティが腰をあげないから時間かかっちゃって」
……通りでラスティもいなかったはずだ、あのクソ馬鹿！
流暢なステップは続く。
Ｅｘｔｒａ　Ｗａｌｋ，Ｑｕｉｃｋ　Ｏｐｅｎ　Ｒｅｖｅｒｓｅ，Ｈｏｖｅｒ　Ｃｏｒｔｅ，Ｂａｃｋ　Ｗｈｉｓｋ，Ｃｈａｓｓｅ　ｆｒｏｍ　ＰＰ，Ｎａｔｕｒａｌ　Ｓｐｉｎ　Ｔｕｒｎ，

Ｔｕｒｎｉｎｇ　Ｌｏｃｋ　ｔｏ　Ｌ，
とにかく柔らかい、気持ちいい。
望むようにそこにいるから、リードとフォローがうまく利く。
息があう、考えが繋がるのはまったく毎日の教練と同じだ。
「ちょっと近すぎない？」
「問題ない！」
Ｌｅｆｔ　Ｗｈｉｓｋ，　Ｃｏｎｔｒａ　Ｃｈｅｃｋ，　Ｗｅａｖｅ，　Ｏｕｔｓｉｄｅ　Ｓｐｉｎ，　Ｎａｔｕｒａｌ　Ｓｐｉｎ　Ｔｕｒｎ，　Ｒｅｖｅｒｓｅ　Ｐｉｖｏｔ．．．
ノーシークエンス（打ち合わせなし）であったことを差し引いても、一連のアマルガメーションの流れはほぼ完璧。
まさか舞踏会慣れしているわけでもあるまいに――とそれがいつもながらに少々忌々しくもあり、同じく感服の念もあり。
自分の銀髪がさらさらとアスランの頬にかかる。
間近に見るエメラルドの眼差しを覗き込んでいたが、やがてアスランが目を逸らして「あら？」と呟くので、顔を上げて視線を巡らせる。
ふと気付けば周囲から人が去ってホール中央に2人きり。
もっぱら見物されていたらしい――俺たちは見世物か！！
そしてＥｎｄｉｎｇ、一礼が終わって万雷の拍手。
曲は終わらずポルカの前奏が始まる、興に乗ったニコルがどうも即興で曲を起こしているらしい。
それを受けて大勢が再びホール中央へと戻ってきた。
そのただなかでイザークはアスランの左腕を掴む。
「おい、場所を変えるぞ！」
最近顔をつきあわせることもなかった、その分話したいことがヤマほどある。
「……ゴメン」
絹の長手袋は摩擦もなくするりと抜けた。
イザークは振り返る。

談笑に近づいては離れ、あるいは時折ペアが立ち交じり入れ替わりながら輪は回っていく。
そのなかに佇んだアスランはひどく真面目な顔で言った。
「よく言われるんだけど――私ってまだまだお子さまなんですって。私は今はそれでいいと思ってる。そんなに急いで大人になんかなりたくないし、あなたの速さには多分ついていけない」
……一体なにを言っている？
「どういう意味だ？」
解せない――と怪訝に見返す中、やがてアスランはにっこりと笑んだ。
「つまり……イザークとはずぅっといいお友達でいたいなぁ、ってこと！」
短い曲の終わりを告げる拍手とともにアスランは裾を翻して場を退く。
「なんだか疲れちゃったわ」
ずっといいお友達。
取り残されて、ふと顔を上げる。

もしかして、俺はフラれたのか？

＊＊＊＊＊

「オトモダチね、残酷なヤツ！」
壁にもたれて眺めていた腕組みのディアッカは低く咎める。
「唇の動きを読むなんて、とことん失礼だと思うわ」
いつもやってるの？　とアスランは横目で睨む。
腕を解いて、ディアッカは袖を直しはじめた。

「んでいつから気付いてたわけ？　最近クールダウン狙ってたよな？」
少しの間。
さあ、とアスランは素知らぬ顔で小首を傾ける。
「何を言ってるのかよくわからないわ」
「今さらごまかすなって。で、いつよ？」
「うーん……じゃあ、さっき」
まあそういうことにしておくか、と襟元を正しながらディアッカはちらりとイザークを遠目に見る。
難しい顔でこちらを見ている。
「確かにバレバレだよなぁ？　こっぱずかしいヤツ」
いかに平静を装っていても、あんな抱き込んでキスを迫るような踊り方をしてたら相手にも傍目にも丸わかり――あれをビデオに残しておけば後日悶絶するイザークが見れたろうに、とそれが残念ではある。
身繕いを終えたディアッカは上着を羽織ると、アスランの腕を掴んで引っ張ってホール中央へと進んだ。
「ほらほら、さんざん迷惑かけてんだから付き合えよな！」
そしてひどく憂鬱げなアスランとディアッカが滑らかにポジションに入る。
Ｎａｔｕｒａｌ　Ｔｕｒｎ，　Ｒｅｖｅｒｓｅ　Ｔｕｒｎ，　Ｎａｔｕｒａｌ　Ｓｐｉｎ　Ｔｕｒｎ，
「オトモダチじゃなくて、しっかりトドメ刺してやれよ。もう二度とお前の顔なんか見たくない！！　ってレベルで。ある意味慈悲だし自己防衛だぜ」
それはイザークへのささやかな同情と、アスランの詰めの甘さへの苛立ちと。
「……私、嘘は苦手なのよ」
「そりゃよく知ってるけどもな」
Ｈｅｓｉｔａｔｉｏｎ　Ｃｈａｎｇｅ，　Ｏｕｔｓｉｄｅ　Ｃｈａ

ｎｇｅ，　Ｂａｃｋ　Ｗｈｉｓｋ，
会話に重きを置きながらも、互いのステップに乱れはない。
ドレスの裾が華やかに翻る。
「そのうち笑って話せればいいなって思ってるんだけど」
「甘い甘い、甘すぎるね」
ディアッカは鼻で笑う。
そのまま流し目を向ければ外野から黄色い声が聞こえた。すっかり飽きて舞踏会なんてご無沙汰だったが、たまにはこういうのも悪くない。
「お前マジで白ロシア系の怖さと超絶重い愛を侮るなよ？　そのうち殺されるよ」
Ｃｌｏｓｅｄ　Ｔｅｌｅｍａｒｋの合間に顔を寄せた耳元の囁きに、心持ちアスランの眉間が寄る。
……コイツやっぱりイザークに気持ちがあるんじゃないんだろうか、それでなんでオトモダチなのか理解に苦しむ。
グランマ経由でイグドラシル・マトリクスを覗いた限り、２人は遺伝子適性不適合ではなさそうだったが。
「――とにかく俺はラスティと違うからな、これ以上関知しねぇぞ」
血迷って中立の立場を崩すつもりは毛頭ない。
「うん……」
Ｒｅｖｅｒｓｅ　Ｃｏｒｔｅ、Ｃｌｏｓｅｄ　Ｉｍｐｅｔｕｓときて、アスランが突然足元のバランスを崩した。
「おいどうした？」
引っ張り上げてフォローする、優雅を演じてアスランが立ち直りや遅ればせながらＴｕｒｎｉｎｇ　Ｌｏｃｋ　ｔｏ　Ｒｉｇｈｔに入る、ダンスは続行だ。
「ゴメン！」
「おいおい、いきなり力入ってるぞ」
心持ち青ざめている、いったいどうした？　とディアッカは振り返って、アスランが突然精彩を欠いた理由をその視線の先に見いだす。

側近連中に囲まれたただなか、ソファー背もたれに腕をかけたエザリア・ジュールがこちらを見ている。
目があうなり先方は口元を笑わせた。
ディアッカは思わず向き直る。
我が守備範囲は相当広いと自負しているが、正直あのイザークママだけはおっかない。
この上なくセクシーでゴージャスで切れ者な国防副委員長、アプリリウス第一世代でも抜きんでて別格の女――そしてあのイザークの首根っこを押さえつけている張本人でもある。
やがてその鋭い視線からアスランを遮るようにくるりと回って、肩越しにディアッカは重い口を切る。
「もしかしてお前、エザリア女史に何かプレッシャーかけられた？」
やがてアスランがもらした嘆息を、ディアッカは是と受け取って眉根を下げる。
「なんか面倒なことになってんだな」
アスランは立場的に彼女の不興を買うわけにはいかないだろう、なにしろ父親の愛人とも言われる相手だ。
そしてイザークは母親に逆らえないに決まってる――ヤツが昔っからとことん支配されているのは幼なじみのこの自分がよーく知っている。
「だからラスティが腹くくったわけね、今ようやく理解したわ」
ディアッカは肩をすくめる。
身を退く気まんまんだったはずのラスティの変節は、きっと『イザークはダメだ、アスランを守れない』と踏んだからなのだろう。
いくら好きなコの為とはいえその大層な荷物を引き受けようとは、アイツもこれまた大層な決意をしたものではある。

＊＊＊＊＊

ディアッカは舞台慣れしているから余裕綽々、とにかく立ち回りが派手で見ていていっそすがすがしい。
軽薄で人格的にいかがわしいヤツではあるが腕前だけは確かだ。
2人して一体何をさかんに話しているのかしらないが――とイザークは難しい顔でアスランの背を眺める。
で、俺はフラれたのか？
未だに釈然としない。
終わったら捕まえて問い詰めてやる！　と目を離せずにただ見守る。
「イザーク、あなたもこちらへおいでなさい」
国防委員長の側へと移動してきた優雅な母の鈴のような声に、やむなくイザークは後に続く。
一角には議員たちの取り巻き連中がすでにして壁を作っていて、ソファーに埋もれているジェレミー・マクスウェルの背後にはなんとも気まずそうな表情のラスティが控えていた。
「まったく男性ばかりで華がないこと！　一体何をお話しておられます？」
この上なく優雅に深紅のドレスの裾をさばいて母エザリアが切り込む。
「お前にはないしょだとも」
アームレストに頬杖をついていたパトリック・ザラが口元を笑わせて、エザリアはその傍らにゆったりと腰を下ろす。
ソファーで鷹揚に座して剣呑に談笑する支配者たちの傍らで、イザークもまた慇懃に後ろ手を組んで控える。
「どうせいつものよからぬ相談でありましょうね。ならばわたくしも加えていただかなくては」
間に割って入られたジェレミー・マクスウェルが喉元でくつくつと笑った。
「おやおや、やきもちかね。最近いろいろ気を揉んでいるようだが」
「ふふ」

挑発的にすらりとした長く白い脚が組み替えられて、思わずイザークは目を逸らす。
「――ますます艶やかであることだね、エザリア。そこら辺の青くさい小娘ではとても君にかなうまいよ」
「お褒めいただいて光栄ですわ」とエザリアは含んで笑んでゆったりと扇を広げた。
「とはいえ若さは特権ですもの、まことうらやましい限り」
ふと会話が途切れ、人垣が割れた。
イザークは顔を向ける。
衆目を一身に集めて、ディアッカのエスコートで導かれてきたアスランが優雅に裾を引いた。
「まだ甘いな、途中でしくじったろう」
父の一言に、アスランは少しばかり小首を傾けた。
「ご覧になってらしたとは思いませんでした」
「まあ精進しろ、今後ますます機会が増える」
アスランはそのまま待ち構えていたラスティの手を取った。
「お待たせ」とアスランがごく自然に笑んで、ラスティがやれやれ――とほのかに安堵したような表情を見せた。
そのまま2人は連れだって談笑の輪から外れて部屋を出て行った。
ふと緊張を孕んで静まる空気にイザークは視線を走らせる。
子どもたちの姿を、パトリック・ザラとジェレミー・マクスウェルが寸分の笑みもなく見送っていた。
値踏みするような気配すらある。
――なんだ?
不穏さにイザークは眉間を顰める。
2人の後を追おうと足を向けた時遮る声があった。
「イザーク」
涼しげに呼ぶ声にイザークはたたらを踏んで足を止める。
「母上?」
扇をひらめかせながら母が「こちらへ」と傍らを通り抜けた。

「いったい何を……」
?きだしの白い背を追う、やがて輪から外れて扇をパチン、と畳むと母が口を切った。
「もうお諦めなさい。このアプリリウスには良家の子女などいくらでもいるのですから――敢えてあの娘にする必要もない」
振り返りざま、ひどく冷ややかに母は言った。
「パトリックとジェレミーとで迅うに合意ができている。あとは姻前財産分与を詰めるだけ。わかるでしょう?」
血の気が引く。
姻前……
婚約、だと?
突然突きつけられた現実にくらくらする、理解しようにも頭が受け付けない。
「あなたには相応しいお嬢さんを用意してあります。選んでそちらを好きにすればよい」
促すような母の視線の先には、美々しく着飾った同年代の白い少女たちの群れがいた。
冷たい汗が額に滲む。
気持ち悪い――俺は女をあてがわれる趣味はないッ!!
「必要ありませんッ!」
「いいえ、必要でしょう?」
反駁をするりと流し、すべての感傷と甘さを拒絶する怜悧な面差しで母が振り返る。
射すくめられたようにイザークは呆然としてそれを見る。
この母が時折漂わせるこの底冷えのする空気が、昔から恐ろしかった。
「衝動をコントロールなさい。ただしC・N・G・P・の結果が出るまでは、子どもは作らないように」
戦慄すら覚える……この人は、いったいどこまで俺を管理したいんだ?

イザークは踵を返す。
「先に帰ります」
「イザーク」
母の声が背に追ってくる。
「失礼しますッ！！」
白い薔薇の花束をひったくるように受け取って場を足早に去る。
――冷や水をかぶせられたような気分だ。
あまりにも穏やかすぎる日常を繰り返す士官学校に毒されて、すっかり忘れていた。
P．L．A．N．T．を構築した初期第1世代最高評議会議員、その子弟である時点ですでに自分たちは鎖に縛られて、利権や思惑の沼に沈められている――どこまでいったところで檻の中だ。
現実はひたひたと背に迫ってくる。
転がるようにハイヤーに乗り込んで怒鳴る。
「アーモリーへ連れていけッ！！」
邸には絶対帰らない！

＊＊＊＊＊

8月11日。
パイロット控えルームの壁がドンッという音をたてて、その衝撃に揺らいだ。
力任せに壁に叩きつけられたラスティが伝って座り込む。
同期たちの野太い悲鳴が上がる中、眼前に立ったイザークは「見損なったぞ」と冷ややかに言い渡す。
「貴様がそういうヤツだったとは知らなかったッ！！」
「――弁解はしない」
ラスティは切れた唇の端から伝う血を拭いながら顔を上げた。

「殴りたいなら殴れよ、それで気が済むなら！」
「いい覚悟だッ！！」
イザークは再びラスティのパイロットスーツの襟元を掴んで引き上げる。
コイツだけが悪いわけではないことは重々承知している、檻の中にいる自分たちに自由はそう多くない。
それでも行き場なく渦巻く感情はただやるせなく、だから膝を思いっきり腹に叩き込む。
鈍い音が体ごしに震動となって伝わり、自分の骨にすら響く。
前のめりになって、この肩口に頭を垂れたラスティは苦しげに息を吐いた。
「――やめろってッ！！」
「もういいだろッ！！？」
間にアンリとコートニーが入って距離が生まれる。
背後からは引き剥がそうとマシューとオロールが全力で腕をとらえにくる。
「……なんで俺がッ……！！」
自分の存在は母の意思だ。このかたちも色もあるいは基礎能力さえあの人の望むがままに作られた。
そして与えられ定められたままに生きてきた、半ば諦めながら。
その中で痛切に欲しいと思った――だがそれすら得られない！！
「俺が――――なんで貴様なんかにッ！！」
吠えて振り切り、一直線にラスティへと向かって引き上げてギリギリと襟首を締め上げる。
その合間にもラスティは哀れむような眼差しを向けた、それがまた神経を逆撫でする。
なんで貴様に同情されねばならないッ！！？　この俺がッ！！？
「……ッ」
やがて苦しげにラスティが咽せて、口の端から血がこぼれる。
「イザークッ！！」

「ほんとやめろってッ！！　殺す気かよ！！」
マクシミリアンとラルフが加わり、また強引に羽交い締めにされて引きずり離された矢先。
アイザックの「アスランさん早くお願いしますッ！！」という悲鳴が聞こえた。
「ちょっと、どうしたの！！？」という声とともに、パイロットスーツを上半身はだけたＴシャツ姿のアスランが飛び込んで来た。
「ラスティ！？」
心配げにその側に膝をついた、その姿がまたひどく癪に障る。
「血……」
「なんでもないってば、構うなよ！」
座り込んだラスティは口元をぬぐった。
「……イザーク」
凍り付いたようなエメラルドの眼差しがこちらを振り仰ぐ。
その強張った表情を見返して、自分が今一番殴りたいのが誰かをようやく理解する。
イザークはそのままヘルメットを小脇に抱えると、格納庫へと足を向けた。

アスラン――さんざん俺の気持ちをもてあそんだ挙句、結局ラスティを選びやがってッ！！！

＊＊＊＊＊

軍事ステーション管制室Ｂ。
大スクリーン小スクリーンともにさまざまな現時点のＬ５宙域図が映し出されて、刻々とその映像は切り替わっていく。

技官候補生オペレーターたちの背後、救護室から戻ってきたラスティをディアッカはちらと見やる。
「生きてるんじゃん」
「そりゃあね。手加減はされてたし」
じゃなきゃ今頃内臓破裂で悶えてるよ、とコンソールに凭れたラスティは口元の絆創膏をはがしてぼやく。
「多少痛いくらいで済んだことを感謝しとけよな、おかげでＣＩＣ体験できるんだし？」
「無駄口を叩くな。エルスマン、マッケンジー」
並んでウィラード教官がディアッカとラスティの背を叩いた。
「ここからの眺めをよく見ておけ。技術部はどう言っているかしらんがＭＳは決して万能ではない。あのコックピットからでは見えないものも多々あろう」
ディアッカとラスティはスクリーンを振り仰ぐ。
オニール型コロニー“アリアディウス”をバックに、宙域をＭＳが編隊を組んで飛翔する。
Ｐクラス複数班に分かれての強襲戦だ。
プロトジンを使い潰す気でかかれ、と手にしたマイクでウィラードは生徒たちにハッパをかける。
「その使い古しを片っ端からジンに換えてやればいい」
新兵教練用のプロトジンはすでに生産中止されている、士官学校ではこの教育期間中にもすでにして順次ジンに置き換えられようとしていた。
その言葉に呼応したように、本気の模擬戦が幕を切って落とされた。
「――ただし脱出経路だけは確保しておくのを忘れるな、教練で死んだら末代までの恥だぞ」
聞いていたディアッカとラスティは苦笑いする。
「俺たちがセンセに何度殺されそうになったと思ってるんですか」
「怖さを叩きこんでやったつもりだ。パイロットなんぞ弱腰であるくらいでちょうどよい――どうも昨今生き急ぐ無鉄砲者が多すぎて

困る」
ウィラード教官はマイクの電源を切ると後ろ手にスクリーンを眺めていたが、腕時計をちらと見ると「任せる」と言って踵を返した。
「……ってセンセどこ行くんですか」
ディアッカが振り返る。
「部隊に戻る準備があわただしくて多少寝不足でな、目覚ましだ」
厳しい割に結構適当な教官は、胸ポケットを探りながらＣＩＣを出ていった。
「ウィラード教官も戦線復帰かよ」
見送ってラスティが言う。
「よっぽど人手が足りないんじゃん？　なんかユウキセンセも今期限りで前線に戻るってさ」
「……まじで？　俺絶対ユウキ教官のとこには回されたくないわ」
そりゃそうだろう、この上なくアスランを愛でていた教官のことだ、戦場でラスティがどんな目にあうか想像に難くない。
「あら？」
突然技官候補生のアビー・ウィンザーがすっとんきょうな声を上げたので、ディアッカとラスティはそちらを見る。
「なんだか変……」
「何が」
「あれって指揮官機ですよね？」
熱源センサーには、自軍の隊列を崩した赤い光点が一直線に敵陣へと切り込んでいくさまが描かれている。
「猪突猛進なヤツ」
「よっぽど体力あまってんだろ、ウィラード教官がちょうど席外したところでよかったんじゃね？」
スクリーンには宙域を疾駆して次々に撃破するジンが映し出されている。
とにかく激しい。
「……あれ、どこの班だっけ」

ラスティの問いにアビーが朗らかに答える。
「A班です」
わずかな沈黙。
「もしかしてあれは……」
イヤな予感的中――イザークだ。
ディアッカはアビーの背後から手を伸ばして、音声回線を広げる。
『指揮機が前に出るなよッ!!　戦術無視かよッ!!』
マクシミリアンの悲鳴にも似た声が管制室に響いた。
『うるさいッ!!　腰抜けは下がってろッ!!』
聞き慣れた怒鳴り声――イザークときたらまた大層な荒れっぷりだ。
「こりゃあ、ウィラード教官に言って搭乗はやめさせたほうがよかったかねえ?」
「悠長なこと言ってる場合じゃないだろ」
と言いかけて、ラスティが息を呑む。
「なあ、あのもう一方の赤い光点はもしかして――」
「もちろん、もしかしなくてもアスランだな」
防衛に徹そうとする陣列をかき乱して、イザークがアスランに迫る――
悟るなりラスティが顔面蒼白になって、アビーからひったくるようにインカムを掴んで怒鳴る。
「イザークッ!!　俺はともかくアスランにまで手を出すなッ!!」
その言葉半ばで通信がぶち切れた、おそらくクローズドに切り替えたのだろう。
「むちゃくちゃだッ!!」
ヘルメットを掴んでラスティが身を翻す。
「待て待て、Gかかったら傷に響くってんでお前ここにいるんだから。ってかお前が首突っ込んだら余計厄介なことになるよ?」
のんびりとしたディアッカが羽交い絞めにして押し止める。
「そんな悠長な!」
「拳で語りたいってイザークが言ってるんなら、当然アスランは受

けてたつべきだろ？　カタつけさせてやらなきゃ、お前も多少なりイザークに罪悪感感じてるんならな」

＊＊＊＊＊

弾切れ！
イザークは舌打ちする。
突撃機銃に、右腰部アーマーにマウントしているマガジンを引き抜いて装着する。
その合間に、アスランのジンがスラスターを繰って上空へと逃れた。
「逃げるなァァァァッ！！」
沸騰する、視界が白く染まりそうなほどの怒りが突き動かす。
そうやってお前は――――いつもいつもいつもッ！！
追い縋ったプロトジンを叩ききる、機体を満たす導入液が飛散して、焼け焦げた切断面が漏れ出したわずかな空気のもとで火花を孕む。
それを踏み台に、さらに飛翔する。
「戦え――――ッ！！」
――――いい加減俺に向き合えッ！！

＊＊＊＊＊

軍事ステーション管制室Ｂの一角で見守る人垣から悲鳴が上がった。
「突っ込む気かよ！」
逃げる一手のアスランとしてはバッテリー切れを狙ってなのだろうが、未だに振り切れずにいる。
回避できないままに２機はアーモリー軍港に突っ込む針路だ。

「さすがにコロニー内ならイザークも我に返るんじゃないかな、きっと」
「どうだろう……」
「侵入前に港で止めてもらえるだろ？」
「いや、その前に撃墜されなきゃいいけどね」
出陣前で格納庫にいたはずの同期たちが引き上げてきて、固唾を呑んでスクリーンを見守る。
「学校のほうにまだ誰かいたっけ」
「確かニコルたちがまだ残ってたろ、整備が終わってないって言ってたし」
「港で止められなければ向こうで止めてくれるんじゃん？」
「誰がイザークを止められるんだよ、アイツ操縦しながらモーション調整してくるから太刀打ちできないよ」
雑多な声の入り乱れる中で、暴れるラスティを羽交い締めでおさえつけたままにディアッカが振り返る。
「なあ、ウィラード教官まだ見つかんない？　多分どっかの喫煙室だと思うんだけど」
「もう一度見てきます！」
アイザックが走る。
暴走イザークをとめられるといったらあの人くらいだが、一服してくる――と管制室を外してもう１０分にはなる。

＊＊＊＊＊

隔壁を抜け気密区画をすら疾駆して、四角く切り取られていた風景がやがて広がる。
突き抜けて、２機はアーモリーの空高くへと躍り出た。
隔壁に近いこの辺りは無重力区域だ。

背後から撃ちかけられた弾が機体をかすめる。
うるさい連中だッ！！
バーニアに逆制動をかけて姿勢制御しながら、イザークはトリガーを引き絞る。
ジンが両手に構えた機銃から同時に弾が撃ち放たれて、抜けてきた気密区画で派手な花火があがった。
「――おいディアッカッ！！　こいつらをまとめて退かせろッ！！　邪魔するなら片っ端から墜とすぞッ！！」
軍事ステーションでＣＩＣにいるはずの相手に言い放つ。
『落ち着いて下さいッ！！』
『お前こんなことしでかして――ッ！！』
ステーションからの声と士官学校内管制室からの声が交錯する。その向こうでディアッカがのんびりと嘆いていた。
『おいおい、ＭＳぶったぎっちゃって……いくら使い潰せって言われたにしろ、これどうすんのよ？お前』
「こんな使い古し、時価がどれほどのものかッ！！」
イザークは怒鳴る。
「――そもそも俺のブラックカードに上限なんぞないッ！！！」
追い縋るプロトジンを回し蹴りにして踏み台にして飛翔する、また一機、炎が堕ちた。
「アスランッ！！」
目指すのはただ一人。
『いくらなんでもやりすぎですッ！！　いくらアーモリーとはいえ、アプリリウスワンでカタストロフになったら新聞沙汰どころじゃすみませんよッ！！？』
「黙れクソガキッ！！」
邪魔な通信を全て絶つ、繋がっているのは眼前のアスランだけだ。
もう自分たちの間に遮るものはない。
「――来いアスランッ！！！　お前が逃げれば逃げるだけ被害は広がるぞッ！！」

もはや恫喝の域であることは認める。
ミサイル砲をシルバーにくすぶる隔壁に向ける。
『イザーク！！』
ようやくにアスランが声を発する。
「俺だけを見ろ――――ッ！！」
躊躇いを見せていたが、ようやくに対峙するジンの動きが変わった。
反転して向かってくる。
マシンガンを投げて背に負う重斬刀を抜いた、逆手持ちの重剣が翻って剣戟が散る。
「全力でかかってこいッ！！　手を抜くなッ！！」
その合間にも音声回線向こうのアスランは息苦しげに『無茶言わないでッ！！』と応じる。
「うるさいッ！！！」
いっそ殺すか殺されるかだッ！！

＊＊＊＊＊

アーモリー軍港からの出発を急遽とりやめて飛来したプロトジンが続々と校庭に降り立つ。
本気だ――とうとうイザークがぶち切れた。
通信を絶たれ、ハッチから飛び降りてニコルは愕然として空を振り仰ぐ。
隔壁空域でジンが撃ち合っている。
イザークのジンから放たれたミサイルが隔壁をかすめたのを視認して、背筋が冷える。
幸いアスランの迎撃の一発に撃ち砕かれて、眩い花火と消えた。
介入すれば全機撃破する、とイザークは言った。
多分彼ならやるだろう――だからイザークをもっともよく知るディ

アッカは「お前らみんな撤収ね」と言ったわけであるし。
とにかく演習の範疇でごまかせるうちに、軍が乗り出す前にカタがつけばいい！！　とやきもきしている最中。
「何が起きたッ！？」
上空での異変に、Ｐクラス担当教官のレイ・ユウキたちが駆けつけてきた。
「演習……」
張りついた満面の笑みでニコルが声を張り上げる。
「もちろん演習ですよ！！」
無言の緊張が場に走る。
「あぁそうか。いやぁ鬼気迫ってるなあ……さすがアスランとイザーク」
現実を直視するのに耐えられなくなったのか、可能性を排除してユウキ教官はのんびりと構えている。
「いや、まさか！」
「嘘でしょ、ホントに？」
イヤサカ教官とヤードバーズ教官とは蒼白で絶句する。
やっぱりさすがにムリがある――とニコルが焦ったその時。
「それよりもうじきバッテリーが落ちるわ」と傍らで振り仰いでいたシホが表情を曇らせた。
「あの分じゃもう１分も持たない」
言うや否や自由落下が始まった。

＊＊＊＊＊

つかみかかって力押しで肉薄している最中、警告音が一直線のパターンを描こうとしていた。
サイドのコンディションモニターはすでに赤一色、バッテリーが切

れる！
眼下に士官学校を認めた矢先、わずかにバッテリー残が勝るであろうアスランのジンが離脱を図ろうとしていたのを見咎める。
「――――逃がすかッ！！」
瞬時そのバーニアを掴み、力任せに引き寄せる。
重みに耐えきれず巻き添えになってアスラン機も墜ちる。
バッテリー表示が０を示し、やがてモノアイから光が消えた。
制御は利かず、絡み取ったまま自由落下――隔壁無重力域から地表近くの重力圏へと遷り加速する。
モニターが落ちた暗闇のコックピットにいくつもの衝撃が伝わる、多少の緩衝材代わりとばかりにコースに選んだ士官学校講堂を突き抜けたのだろう。
最後にひときわ強い衝撃があった。
おそらく地表。
電源もそのままに即ハッチを開いて、流れ込む砂煙のただ中でマシンガンを手に取ろうとしてイザークは舌打ちをする。
銃とナイフだけで十分だ！！
派手に砕け散った瓦礫のただなかに飛び降りる。

崩落したての講堂。
「もうやめて！」
瓦礫のただなかで銃を構えたアスランが声を張り上げた。
「なんであなたに銃を向けなきゃならないの！？」
「逃げを打つなッ！！　お前のそういうところが許しがたいと言ってるッ！！！」
躊躇わず銃を撃ち放つ、過たずに彼女の銃をはじき飛ばす。
衝撃による手首の痛みと痺れが襲ったのだろう、手首を押さえたアスランが顔を顰めるのは一瞬。
彼女はナイフを引き抜いて跳躍する。

「上等だッ！！」
銃を投げ捨てる――こんなものでは感触が伝わらない！
ぱちんとナイフを引き出す。
刃と刃とが煌めく。
砂煙のただ中に繰り返しの音律が響く、ヴィエンナワルツより激情でより素顔で、より艶めかしい。
あんな定型で装い立てられた中ではなにも伝わらないッ！！
力で押せばしなやかに流される。
逆に切り込まれればこちらはより真っ向から攻め立てる。
「こんなもんじゃないだろうがッ！！」
もっともっと本気になって肉薄してこいッ！！　――――そして俺にトドメを刺せッ！！
にらみあいの間にもアスランも薄く唇を開いて、細い肩で荒く息をしている。
「なんて体力バカ……！」
詰られて胸がざわつく。
「当然だ――身のほどを知れ！　お前は女なんだッ！！」
とはいえ、この華奢な女の身でよくついてきたものだとは思う、心底尊敬の念を禁じ得ない。
だがアスランは珍しく怒りを露わに見せた。
「そう言われるの、ホント嫌いなの、知ってるでしょう！？」
胸元に飛び込んでくる影、
一瞬の決着は唐突にきた。
挑みかかるアスランに喉ぼとけを狙われて、同じくこの切っ先は彼女の頬へ。
わずかにこちらが速さで勝る。
瞬時背が凍る。
やるならやりなさい！！　と言わんばかりの強い意志をこめた眼差しが自分を睨む。
「ッ……！！」

不意の寸止めの反動で手首と腕が悲鳴を上げる。
痛みをこらえながら呼吸をひとつ、ふたつ。
躊躇と膠着のただなかで、アスランを間近に眺めていて、ようやくに狂乱を忘れる。
――わかりきっていた、とまじまじと彼女を見おろす。

……俺にはコイツを殺せない。

表情の変化を見てとったのか、ようやくにアスランが口を切った。
「もう、なんだってこんな――」
と言いかけて集中が切れたのか、彼女が頭を振る、汗が散った。
つきせぬ欲情が沸くのは瞬時。
その合間に間を詰めて細腕をねじ上げる、
ナイフが落ちた。
勢いにまかせて弓ぞりになる体をかき抱いて、ねじ伏せて押し付ける。
至近距離のエメラルドの眼差しが潤んで、唇が唇に触れる直前に指先が押しとどめた。
さらにその細い手首を掴んで力まかせに握る。

離したくない、離れたくない、心底欲しい。
それでもダメだというのなら――せめて一度くらい許せ。

唇をねじこめば、血と汗と砂埃の味がした。
「……ッ！」
全力で抑え込んで無我夢中で貪る最中、やがて兆した痛みにイザー

クはとっさに顔を離す。
「――――噛むなッ！！」
ぷはッとアスランは濡れた唇で息を大きく吸い込んだ。
やがて咳き込んで身をよじるので、押しつぶしていた体に少しのスペースを空ける。
ひとしきり悶えたあとで、涙目で彼女は詰る。
「もうバカ！　酸素吸いあげないで！！　死んじゃうわ！！」
ファーストキスだった。
なのに甘さも何もない――ほろ苦く切ないばかりだ。
そのぽろぽろと涙する紅潮した面差しをしばらく眺めていたが、やがてフンッ！！　とイザークは顔を背けて手を離し、起き上がってその傍らに腰を下ろす。
「息苦しそうだったから人工呼吸してやっただけだ！！」
つかの間の静寂。
ようやくに呼吸を整えて、ほとほとあきれ果てた、と言わんばかりの静かな声が呟いた。
「……ホントどうしようもない人ね」
アスランは頭を振って、ようやくにのろのろと上半身を起こす。
そして目元を拭うと、うるさそうに髪にまとわりついた土くれを払った。
「……好きって言ってくれればそれでよかったのに、一度でいいから」
「――――」
囁きにも似た声色に鼓動が跳ねて息が詰まる。
今お前はなんて言った？
沈黙のあと、ぎこちなく首をそちらに回す。
アスランは砂埃に塗れてなお可憐だ。
「冗談よ」
と泣きはらした後のこの上なく愛らしい笑顔を見せる。

嘘だ。

「イザークずっと怒ってるんだもの、驚かそうかと思って」

それも嘘だ。

……あれは絶対にお前の本音の欠片だった。

遮る騒然、一瞬イザークは意識を現状に引き戻される。

瓦礫を乗り越えて駆け寄ってくる同期たちの先に立って、足音荒く迫り来る最恐の教官のつんざく怒鳴り声が聞こえた。

「コンの大バカがァァァァ――――ッ!!」

ウィラード教官の激烈な雷がこれから落ちるのは確実だった。

その怒りも当然。

見渡せば校庭がコロニー演習場並みの荒涼たる風景になってしまっている――少なくとも講堂は全壊だ。

辛うじて演壇だけが残っているが、それも使い物にはならないだろう。

アスランは乱れ髪を手櫛で直しながら見回した後、やがて憂鬱に嘆息をついて「半分負担するから」と言った。

「さすがにカードの利用上限なくてもキツイでしょ?」

呆然としているイザークは心ここにあらずで応じる。

「いらん。MSはマティウスでなんとかできる」

マティウス・アーセナリー経由で無理矢理マイウスの技術局に押し付けてしまったっていい、その為に毎期莫大な投資を行っているのだから当然の権利だ。

講堂のひとつやふたつ一括で賠償はできる、それくらいの残高は自

分個人の当座預金にある。

「いや、――――そんなことよりもッ！！」

焦れた言葉に耳も傾けず、あさっての方向を向いたアスランは、不意に笑顔を作るとひらひらと手を振った。

「ラスティ」

「おい大丈夫かよ！！」

軍事ステーションから急遽戻ったのだろう、顔面蒼白のラスティが駆け寄る。

「あんまり大丈夫じゃないわ、もうくたくただしボロボロ」

アスランはラスティに引っ張り上げられてようやくに立ち上がる。

「殺されるんじゃないかと冷や冷やした、割とマジで！！」

そのまま抱き込んだラスティは強張った顔でちらりとこちらを見おろす。

「まさか。結構いい勝負だったのよ。――ね？　イザーク」

「……ッ！！」

水を向けられてただギロリと睨む、頭が爆発しそうだ。

こちらの胸中を察することもせずに――あるいは黙殺して、ふふっと笑みを残したアスランがラスティに肩を抱かれて行く。

「楽しかったわ」

――お前はどれだけ俺を傷つければ満足なんだッ！？

入れ違うように同期たちが集まってくる。

「おい大丈夫かよ」

「いくらなんでも無茶しすぎだろうよ、イザーク！」

囲まれながらもひとり取り残されて、爆発しそうなほどに鬱積する

苛立たしさにイザークは思わず前髪をくしゃりとかきあげる。
人垣の向こう、アスランは振り返りもしない。

どこまでもキレイに本音を隠しやがって――――あの嘘つき女がッ!!!!

Past：Academy－9（後書き）

T.M.Revolution－AQUALOVERS
T.M.Revolution－AQUALOVERS ~deep Into The Night~「UNDER：COVER」

Past：Academy—Epilogue Bridge（前書き）

The curtain of our stage goes up.

Ｐａｓｔ：　Ａｃａｄｅｍｙ－Ｅｐｉｌｏｇｕｅ　Ｂｒｉｄｇｅ

９月末日をもって、半年の教育期間は早々と修了の時を迎えた。

静謐なる講堂。

Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．士官の赤を象徴する紅い詰め襟の礼服を纏う上位成績優秀者１０人が最前列に並ぶ。

第一種軍装で控える教官たちに見守られながら、国防省と評議会からの貴賓を迎えて式は厳粛に整然と進行する――

イザークもまた壇上での任官を終えて卒業証書を携え、最前列の席に戻った。

青と碧の視線が一瞬交わる。

イザークは仏頂面のまま、先んじて着席したアスランを見返す。

首席アスラン・ザラ、次席イザーク・ジュール。

……ほんの１ポイント差など誤差の範囲内だ。

あのもつれこむような肉弾戦での圧倒的体力差を考えれば、むしろ俺が当然上――

キスもとい人工呼吸に免じてこの場は譲ってやる！！

式辞と訓辞の合間、やがてアスランが呟いた。

「国防省で全額肩代わりするって話、断ったのね」

正面を見据えたままイザークが応じる。

「当然だ」

親の庇護の翼の下から出る為にここにいるのに、また依存しては意味がない。

正当なる権利を最大限公使して、直せそうなＭＳはことごとくマイ

ウスに押し付けた。
直接弁済を求められたのは、修復不可能な１１機のプロトジン、そして爆風で吹き飛んだ校舎窓ガラス５０枚と全損の講堂ひとつ。
その他整備と撤去にまつわるもろもろを含め、要求された請求書には言われるがままにサインした。
おかげで士官学校に配備される教練用ＭＳはことごとく製造工場直送のジンに置き換わり、講堂は急造ながらも立派に仕上がって総じて設備は最新鋭――あの学部長（ジジイ）、いつか絶対ぶち殺す。
「やっぱり半分負担するわ」
「いらんと言ったろうが」
「頑固者」
アスランがささやかに嘆いた。
「最初から最後まで変わらなかったわね」
「お前こそ全っ然素直じゃないだろうがッ！」
知らず声が大きくなる、「イザーク」と彼女が顔を顰めた。
「……そのうち絶対お前の仮面をひっぱがしてやる」
「何を言ってるのかさっぱりだわ」
そしてアスランは答辞のために席を立った。
その背を睨む――
すっとぼけた顔しやがって、この性悪女がッ！！

式の終わりをもって一斉に投げ出される帽子と歓声。

無事の修了と任官を言祝ぎ、写真撮影の繰り返される騒然のただなか、すでにして各部隊の迎えが新人を各配属先に連行すべく講堂入り口に待ち構えていた。
「よお――迎えにきたぜ、イザーク坊ちゃんよぉ」
ひらひらと満面の笑みでミゲル・アイマンが手を振った。

“黄昏の魔弾”の出現にイザークの顔は引きつる。
ということは、俺はクルーゼ隊かッ！！？
ミゲルの背後にはマシューとオロールもいる、どうやら今回クルーゼ隊に配属される赤服は自分ひとりだけであるらしい。
「俺はウィラード隊のつもりだったんだが！」
ウィラード教官が部隊に復帰するというので内々に希望を出していたし、教官もそのつもりで手配すると確約してくれていたはず――
やはりあの大立ち回りがマズかったのか。
「バーカ。ほら、全力でスカウトするって言ったろぉ？　副官の俺っちがあちこち根回しして結構頑張ったのよ」
まったく余計なことを！　という苦虫を噛みつぶしたような顔を見て、腕組みでミゲルがにやりと笑う。
「見てろ、その坊ちゃん根性たたき直してやっからッ！！」
「――クッ！！」
こちらは赤服とはいえ平で新米。緑服とはいえ役付き相手に四の五の言ってただで済むと思うほどには浅はかでもなかった。
イザークは不服を表情だけに、素直にミゲルに従って賑やかな講堂を出る。
深緑色の木立を渡って、新しい風が吹き込んでいた。
風は瞬時で耳元を通り過ぎて、思い出深き校舎のほうへと散っていった。

思い出を振り切るようにイザークは前に向き直る。
そして自分たちは次のステージへ――

＊＊＊＊＊

２ヶ月前の新星攻防戦で多数の隊員を欠いたクルーゼ隊だったが、今回Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．上層部による特殊任務特化と実験モデルの任を受けて、人員を増強することとなった。
元来エリート部隊であるがゆえにその要求は非常にハイレベルで、優秀かつソフトウェア開発調整能力に素養のある、というのが第一条件だ。

つまるところＭＳの発展途上ＯＳを随時更新しつつ、実戦で精密なＭＳ運動反射連動プログラムを組み上げていけ、という話であるらしい。
そのデータを吸い上げて他部隊のＭＳや量産型にフィードバックしていきたい――とはまったくもってＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．技術部側の都合だ。

Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．はＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の小集団であるから一点特化型のコーディネイターが構成員のほとんどを占めているのは当然のことで、一般兵扱いの緑服エンジニアたちは戦闘に向くわけでもなく、能力全般に秀でていると認められ選抜された赤服ですらそんな特殊技能まで備えているのはごくごく一部。
ということで、各地に散ったはずの適性ある上位成績優秀者が急遽かき集められたのはごく自然の流れだった。

軍事ステーションＧゲートは、目下ヴェサリウスが陣取っていた。
技術チームが機材の搬入にせわしく行き交っている中、「来た？」と緑服のオロールがハッチに顔をのぞかせる。
「お、来た来た」
タラップで待ち構えていた同じく緑服のマシューが笑う。
重い足をひきずるように姿を現したのは赤服纏うディアッカだった。
「お前ら……最悪」

失意の彼は暗澹として開口一番愚痴った。
「ボアズで楽させてもらうはずだったんだぜ？　クルーゼ隊時間外めっちゃ多いって話なのに、そもそも休暇だってちゃんと取れるのかよ。オールラウンド転戦なんかやってられるかよ」
嘆きがとめどなくあふれ出る。
「グラディス隊長はエロいしぴっちぴちのかわいい子たちもちょー沢山いたのに。せっかく歓迎会でメアド集めてこれからハーレムって時に……Ｎジャマーで衛星ケータイも使えないのに俺に一体どうしろってんだよ……」
「甘いッ！！　貴様ちょっとは女断ちして生き方を改めろッ！！」
ヴェサリウスから出迎えに出てきたイザークの怒鳴り声に、ディアッカは珍しく鼻白んだ。
「おいおい、俺はまだお前に悩まされるのかよ？　どんだけ祟る気なんだよイザーク」
「ッどういう意味だッ！！」
そしてその背後から、スーツケース片手にやはり赤服のニコルが小走りに駆け込んできた。
「遅くなりました！」
そのふわふわの緑頭を、ギロリ、とイザークは睨む。
「やだなぁイザーク、目がこぼれ落ちそうですよ？」
「うるさいッ！　このピアノ小僧ッ！！」
「ええ、クリューガー隊でアプリリウス音楽隊との兼務だったから、すごく楽しみにしてたんですけどね……」
少し哀しそうに、だがニコルはまた不穏に笑む。
「でもまあ、せっかく身につけた技能ですしね！　またつるめますね、イザーク！」
「いらんッ！！　このクソガキがッ！！」
怒鳴りつけたあとでイザークは目を転じる。
「そりゃユウキ教官から逃げられたのはありがたいけどさ。でも一難去ってまた一難だって」とラスティはディアッカの肩に凭れて赤

い袖を濡らしていた。
「誰が好き好んでクルーゼ隊になんかなりたがるんだよ……俺は凡人だよ？　エリートはエリートだけで高みを目指せばいいじゃん」
「まあ、お前もそのエリートの端くれって認められちゃったわけだけどね」
自分より不幸な相手を見つけて嬉しいのか、ディアッカが一転にやにやと笑う。
イザークはディアッカをおしのけてラスティに食ってかかる。
「――俺は絶対に投了なんぞせんからな！」
「ホントお前って粘るね。あれだけ殴ってまだ足りない？」
ラスティも諦め加減だ。
「当然だッ！！　――この俺がッ！！　貴様ごときに負けるわけがないッ！！」
「おいイザーク！！　ぎゃあぎゃあ騒ぐな！！」とミゲルがしかめっ面で奥から出てきてイザークの襟首を背後から掴む。
「クッ……掴むなッ！」
副官相手にはイザークの勢いも多少殺がれる。
「さあ無駄口叩いてないで、来いよひよっこども！　着任のご挨拶だ！！」
ミゲルに引き連れられて赤服一行はヴェサリウス艦橋へと向かった。
「……んで、彼女は？」
「もう来てるはずだけど」
「また一緒でよかったな、ラスティ」
オロールとマシューが両サイドからラスティに絡んで、ラスティは眉根を下げる。
「そりゃあな。離れてたら目が届かなくて不安だろ、もともと危なっかしいヤツだし」
聞くに堪えずイザークは思わず横の壁を殴る。
「惚気とは――すっかり婚約者面かッ！！」
ギョッとしたようにヴェサリウス内のクルーたちが振り返った。

「いいか……作戦行動中に軍律に反するような不埒な真似をしてみろ」
即銃殺刑に処してやるッ！！　とイザークは乱れかかる銀髪ごしに睨む。
一方で慣らされているラスティは何ら動じる様子もなく受け流した。
「誰が勤務中に野郎だらけの艦内でえっちなんかするもんか。がっついた童貞じゃあるまいし」
最後の一言は俺へのあてつけかッ！！？
イザークは肩を怒らせて先へと進む。
「――安心しろよ、結婚前に傷物にするなって釘刺されてるんだ」
ラスティの言葉が耳に飛びこんでくるが、そんなことはどうでもいいッ！！

赤い裾を翻してイザークは大股に闊歩する。
艦橋にはすでに真新しい赤服で身を包んだアスランがいた。
エメラルドグリーンの眼差しがゆっくりとこちらを見て、目も離せないままに怒鳴る。
「まさか部隊でまでお前と一緒とはなッ！！」
「……さすがに私も思ってなかったわ」
アスランはアプリリウス守備隊に回されるはずだったのが、プロパガンダを打ちたい上層部の意向と優秀な成績が仇なして一転最前線のエリート部隊への配属だ。
ラウ・ル・クルーゼ隊長は国防委員長の信任も厚いから、後継者教育の一環でもあるのだろう。
睨めつければ、アスランの表情がふと陰って目を伏せる。
まったく憂う姿は慎ましやかな処女そのままだ。
その傍らに立つ。
見てろ、俺の執念を舐めるなよ。
絶対お前を蹴落として屈服させてやる。意地でも泣かせて跪かせて、

俺を乞わせてやる。
もし偽ったままで、その唇で俺以外の誰かと誓いのキスをして、その柔肌で他の男を受け入れるというのなら――

その時にこそ、ウェディングドレスの白を血の紅に染めかえてやるッ！！！

心持ち殺伐とした雰囲気の新人勢揃いでの敬礼に対し、金髪も艶やかな白皙長身のラウ・ル・クルーゼ隊長がゆったりと答礼して各人を見回した。
「ようこそ赤の新人諸君、といってもイザークはもう馴染んでいるだろうが」
長い訓示は好きではないのでね、と彼は言って胸元のポケットから軍人手帳を引き出した。
「いつものように詠唱といこうか」
手帳を開き、ゆったりとして隊長は読み上げる。

天よ。
声なき虚空の果て、恐ろしき炎逆巻くところにても
我が任務を全うする力を与えたまえ。
天よ。
運命に怯える力なきもの、恐怖におののきたるすべての同胞を救い出し
故国を守るだけの力を与えたまえ。

そして――

天よ。

我が命をその御手によって召し上げられたる時には、
祝福とともに我が愛する故国とそこに生きる人々を護りたまえ。

ぱたん、と手帳を閉じた後、ラウ・ル・クルーゼは仮面の向こうで目を上げた。
「日々たゆまず努力したまえ。それによってこそ君たちは生き残ることができるのだから」
アスラン、イザーク、ラスティ、ディアッカ、ニコルが一糸乱れず敬礼で応じる。
ラウは頷いた。
「改めて――ようこそ同胞諸君、明日をも知れぬ激烈なる戦場へ。君たちの連携と尽力に期待する」

C．E．７１．１．２５、ヘリオポリス襲撃まであと１１０日。

Ｍｏｎｏｌｏｇｕｅ：　Ａｔｈｒｕｎ－１

額と額、鼻先と鼻先とが触れあって、彼がひとつ嘆息をもらした。
「いったいいつお子さまから一歩踏み出してくれるんだろうね」
呆れたのか困り切った顔。
最近この人はよくこういう表情をする、それはいつだって私のせい。
「……せめてキスくらいはいいんじゃないかな、と思うんだけど」
ダメ？　と直球で訊かれても答えられない。
「それとも何か他にある？」
――別に何もない。
「もしかしてアイツのこと引きずってる？」

違う、と言うかわりに、少し顔をずらして唇を薄く開いて、答えた。

＊＊＊＊＊

面白い人だと思った。

たぶん彼から見た世界は私から見たそれとは別のもので、
私が赤いと思っているものは、彼からすれば青、というくらいに違っていた。

そして彼はとても激しくてよく揺れうごいて、
より高熱の炎は白いというけれど、それをそのまま抜き取ったような人だった。

あまりにも不思議で綺麗で、ふらふらと歩み寄っていた。
嫌いではなかった、むしろ好きだった。
でも時々彼が滲ませるなまぐささだけが嫌だった。

だから。
もう寝たのか、とあの女性に訊かれて、途方に暮れた。

そういう関係を疑われるほどに近づきすぎていた。
気付かされた途端何もかもがイヤになった。
この女性も、関係している父も、彼自身すら。

まったくどこまでも母親うりふたつであること！

父も母もお互いを愛していたし、同じくらい尊敬しあっていた。
すきまに入り込んだのはこのひとだ。
何より愛する母を侮辱されたのは許しがたかったし、彼によく似た面差しでそんなことを言われたのはとても辛かった。

「金輪際近づかないように」
「……お約束はできません、今後もZ．A．F．T．でお付き合いしていく以上は」

我ながらとても怒っていたから、たぶん睨んでいた――

挑発した。

小娘が生意気を言う！
という声が聞こえたときには、もう頬がひどく熱を帯びてじんじんしていた。
耳元まで痛くて、悔しくて涙が出そうになった。

多分、私は泣いていた。
理不尽だと思った。
それは最初縁談を言い渡された時、まっさきに感じたものと一緒。

父も自分も、なんでそろいもそろって、あの母子（ふたり）に支配されなくてはならない？

そして私は父と同じになんか、なりたくなかった。

彼は悪くない。
でも全部の思いをいちいちかたちにして伝えていくのは本当に大変だから、
いつものように全部放り出した。

私はいつだって一番楽な方法を選んできた。
何も見ない、何も聞かない、何も感じない、だから私は何も知らない。

彼が怒るのはそういう私の卑怯さを見抜いているから。
そしてやっぱり彼はひどく怒った。

言葉を切り捨てた私に、彼が力で挑んでくるのは当然だった。
こじあけられるのは絶対イヤだった。
なのに無理やりねじふせられて、もう全てが本当にどうでもよくなった。

そして自然と距離は開いた。

縋るものが欲しかったから、側にいる人の手を取った。
穏やかに見守ってくれて、一緒にいて楽しくて、きっと愛してくれるだろうし、たぶん愛せる。

そして、
父へのささやかな反抗と、父を奪ったひとへの復讐と、彼女によく似た彼への八つ当たりと。
だから言った。

「このお話をお受けします」

C．E．７４．１０．２８．のおわりをもって私はその人の妻になる、と定められた。

＊＊＊＊＊

「友情から始まる愛ってなかなか難しいよな」
わかっていて私を選んだ人が言う。
「まあ俺のあとの人生、全部お前にあげるって決めちゃったし。今さらなんだけどね」
この人のキスは柔らかい、「人工呼吸」なんかとは大違い。
今まで付き合ってきた女の子たちとたくさんしてきたから？　と思えばやはり面白くない。
自覚はしている、私は結構独占欲が強い。
やがて少し彼が顔を離した。
「……何それ、どこで覚えた？」
貸してくれたマンガに載ってた、と言ったらあんなのの真似しなくていいから、とまたひとつ嘆いて彼はまた顔を近づけた。

最後のキスをのこして、彼は私の前からいなくなった。
それはきっと逃げ続けてきた私への当然の報いだった。

そしてそれきり、私の心は本当に何も感じなくなった。

14：J．O．S．H．－A．，アカツキ島あるいはカーペンタリアにて

白い天井を眺めながら、目を覚したことに気付く。

誰かに呼ばれたような――

いったい僕は何をしてたんだろう？

頭を微かに動かす。

古い木造の窓際、レースのカーテンを揺らしながらさわさわと流れ込んでくる風の匂いは潮風混じりに土臭くて、あぁここは地球なんだなと彼はぼんやりと思う。

やがてぱたぱたと足音がした。

頭をそちらに向ける。

「起きたんだ？」

短い前髪に外はねの栗色の髪をした少女が顔を覗き込んだ。

「もう、ロウったらあちこちで拾いものしてくるんだから、ヤになっちゃう！　でも今回はグッジョブだよね！」

朗らかなソプラノに時々弾けるスタッカート。

アクティビティな服装に相応しく活動的にくるくると立ち回る少女を眺めながら、固いベッドマットから起き上がろうとして全身が痛む。

「……ッ」

まるで骨がバラバラになってしまったようだ、と息を短く吐いて吸いを繰り返し、前屈みになってしばし痛みを逃す。

筋肉痛、火傷、骨折、内臓痛、――本当に満身創痍。

ことに違和感を覚える右手に目をやって、途方に暮れる。

手が動きづらい筈だ、義手――これじゃあピアノが、弾けない。

「ねえ、セーフティシャッターって超すごいよね！」

カーテンを開け放って、光の向こうで少女が朗らかに言った。

「……なんですか、それ」
ヘッドレストにようやく凭せかけたものの、芯まで痛む頭では、いまいち言葉がしみこんでこない。
「えぇ～？　パイロットなのに知らないんだー？　大西洋連邦ご謹製！！　コックピットを守ってくれるありがたーい隠れシステム！！　それなかったらあなたとっくに死んじゃってたってロウが言ってたよ」
とりあえずその珍妙な機能のおかげで命拾いしたらしい――ということだけは理解できた。

……で、いったい僕は何をしてたんだっけ？

彼はふわふわの緑色の髪がおりる額に手を押し当てる。
「あとね、あのＭＳの腕の爪みたいなの、すごくロウが誉めてた！　もうヨダレ垂らしそうな勢いでコレ絶対欲しいッ！！　って！」
腕の爪って……グレイブニールのこと？
その言葉をきっかけとして、ああ、僕はたしか――と茫洋とした中でも記憶をなんとかたぐり寄せる。

あの時、紅いＭＳに突っ込んで――

気を失う直前、胸を引き裂くような悲痛な声が、聞こえたような気がする。
置いていかれるのが大嫌いな彼女を、遺して逝かざるをえない。
それがただただ痛恨の極みだった。
きっとラスティもこんな気分だったのだろう、と今さらにずきずきと胸が締め上げられる。
この痛みは心臓なのかそれとも心なのか。
そして涙すら滲む沈鬱のただなか、嘆息まじりにニコルは傍らに視線を送ってギョっとする。

白い人形……
隣のベッドにミイラがいる！？
「……えーっと……生きておられます？」
躊躇いながらの声かけに、返事はすぐあった。
「生きてるよ」
それでも包帯がこれでもかとばかりにぐるぐる巻きだ――この人は、皮膚呼吸できてるんだろうか。
「あの……あなたはどちらさまでしょうか」
まず当然自分が名乗るべきなのだろうが、それにしても隣人が怪しすぎる。
「俺？　トール・ケーニヒ」
声からしてまだ少年。
包帯の切れ目からのぞく白い歯が印象的だった。

＊＊＊＊＊

旋回滞空すること1時間。
「アンカレッジからまだ着陸許可が出ない？――そんなバカな。アーヴィングは？」
「今就任宣誓式中です」
ムルタ・アズラエルは顔を顰めた。
「使えないなァ。ったくどいつもこいつもタイミングの悪い！」
あたかも乱気流に飲まれたように乱高下する中。
慌ただしく航空機コックピットへと乗り込むムルタの背後についてラクスは目を凝らす。
計器類の居並ぶ狭い空間の向こう、スクランブルを組んで飛来する戦闘機の姿が見えた。
「ああ、こりゃまたユーラシアの皆さんの盛大な歓迎っぷりだこと」

「このままでは燃料も底をついてしまいます、……引き返しますか？」

「そりゃ時間のムダってやつだよ、ちょっと貸して」

ぼやいてムルタは小型マイクをとると告げた。

「管制、このままＪ．Ｏ．Ｓ．Ｈ．－Ａ．司令部につないでよ。アズラエルからだって言えば多分すぐ受けるから」

すぐに反応があって、コックピットに荒い音声が入った。

『――ムルタ……生きていたとは悪運の強い』

ひどく悔しげで地を這うような声色に対し、ムルタは愉快そうにハハッと笑った。

「そりゃあね。で、どう？　ブルーノ。　ぼくの城を占領して満足かい？」

『お前の機械仕掛けの城になぞ興味あるものか！』

「はァん。ジブリールもそこにいるんだろ？　僕ぁ彼と話したいな、君じゃ役不足」

しばし間。

『大人しく姿をくらませておけば命拾いしたものを――何を今さら――』

入れ替わった男の哄笑がノイズを生む。

『ここに来て臆して命乞いか、アズラエル！　助かりたいならば相応の対価が必要だぞ！』

へえ、とムルタ・アズラエルは意外そうに腕を組む。

「命は助けてくれるわけ？」

『盟主株とピラーズのマスターコードをともに寄越すならな！！』

「ああ、そりゃあムリムリだなァ。ご期待に添えなくて悪いねェ、ガブリエル（ロード・ジブリール）卿」

即却下して、交渉決裂――とムルタは笑む。

「躍起になって探したんだろうけど見つからなかったんだね、だか

ら僕に聞きたいってことだろ？　でも君って頭もないけど運もないよね、ジブリール。だからいつまで経っても2番手なんだな」

『何トチ狂ったことを！』

「そこ、ちょうど仕込み終わったばっかりなんだよねェ、――グリマルディで試したヤツ」

ちょうど先月デトロイトからの搬入が終わってさ、とムルタはニヤニヤ笑う。

いったい何を言っているのだろう、とラクスは怪訝に見る。

通信相手は沈黙している、その沈黙はひどく重いように思われた。

「で、ちょうど僕はそこの起爆装置を持ってるんだなァ、これが。マクウィリアムズに渡そうと思ってたんだけどね」

ムルタのその声色には、獲物をいたぶって楽しむ残忍さも含まれていた。

『フェイクだッ！！』

「そう言うんなら試してみようか？　半径３０ｋｍはちょーっとスゴイことになるだろうね」

『……ッアズラエルッ！！　貴様正気かッ！！？』

「切った張ったは世の常さ。さあ決めたまえな、セドリック・ジブリール」

ムルタはゆったりと決断を迫る。

「全員巻き添えに僕を殺して君も死ぬ？　別にいいけどそこまでの覚悟が君にあるかなァ」

『……ッ！！』

「うん、君が決められないなら、司令部（そこ）でこれ聞いてるユーラシアの将校諸君に訊こう。君たち、ドロッドロになって死にたい？　言っておくけど、僕ぁジブリールよりはよっぽどマトモだし優しいよ」

『下種がッ！！――――貴様のどこがッ――――！！』

言葉半ばで通信が途絶えた。

「さ、戻ろうか。シートベルトしてなくちゃ」

悠々とムルタは身を翻してコックピットを出る、首を捻ったラクス

も後を追う。
「いったい何がどうなってるんですの？」
「見ての通り。独裁者を気取っていいのはよっぽどの覚悟があるヤツだけだね」
「……あなたは、どうですの？」
問われてムルタは肩をすくめた。
「残念なことに僕ぁ政治家じゃないんだよねェ、これが」

やがて飛行機は降下をはじめた。

＊＊＊＊＊

淡い暁の光が差しはじめた海辺――
デュエルとディンが次々と岩礁に降り立って、それぞれのパイロットたちがハッチを開きラダーを引き出す間も惜しいとばかりに飛び降りる。
「――――アスランッ！！！」
岩場と鉄塊色の残骸とを波が洗う、イザークの顔面から血の気が引く。
人型であったものが無残な鉄くれとなって散乱している。
「どこだッ！！？」
もはや鼓動が跳ねすぎて心臓が潰されそうなほどに痛む。
「いたッ！！」
声が上がった。
イージスの爆散した中心から外れたところに焼けただれたコックピットがまだ、原型を半ばほどにとどめていた。
パイロットを守るべくして強固に造られているのではあるだろう。
だが覚悟はしていた、――自分はとんでもないものを見るかもしれ

ない、今までそうであったように。
「アスランッ！！」
駆け寄り残骸に飛びつく。
空気すら歪むほどの熱でどろどろに溶けたシート、肉を焼く臭いが鼻につく。
彼女は溶けたパイロットスーツのままで、焦げたフロアに倒れ込んでいた。
人のかたちをとどめていないというような最悪の事態だけは免れた、だが。
同僚たちとともにコックピットであったものの合間から引き出して、その体を抱き込むはざまにも、パイロットスーツ越しの尋常でない熱が伝わってきた。
ひび割れたヘルメットが落ちる、蒼い髪とともに口元から大量の血がこぼれおちた。
パイロットたちがわずかに怯む気配を見せる。
爆傷で内臓もやられたのか――頸動脈に反応がない。呼吸も途絶えている。
だが呼吸が止まってまだ3分と経っていないはず！！
「カウンターショック寄越せ、早くッ！！」
平地に引っ張り出してパラメディック担当に涙目で怒鳴る、そのまま急ぎ口に手を突っ込んで血を掻き出す。
そして人工呼吸、息は通る。
平地に寝かせて皮膚に溶けたパイロットスーツを裂けば、見計らった同僚の手によって胸元に除細動器が挿入された。
「いけるぞ！！」
「１５０――２００Ｊスタートだッ！！」
――――頼む！！
我が人生でこれほど痛切に祈ったのは初めてだ。

そして弾ける。
ほんの一瞬後、計器が音を立て始めた。
――心音だけは辛うじて繋いだ、やがてか細い呼吸が戻る。
息を詰めていた周囲からは吐息が漏れ、イザークの顎先から汗と血とがしたたり落ちる。
だがこれもそう長くは持ちはしない。
浮上してクストーから駆けつけた医療班が挿管を開始するはざま。
「カーペンタリアは遠すぎるッ！！」
懸命に打開策を探りながら、アスランの傍らでイザークは顔をあげる。
「オーブ……オーブだッ！！」
同じく膝をついていたパイロットと乗務員たちとからどよめきがあがる。
「オーブ！？」
「オーブにモンローからすぐ打電させろッ！！　それからカーペンタリアにもだッ！！」
「でも――」
躊躇を全力で斥ける。
「構わんッ！！　咎は後でいくらでも俺が受けるッ！！」
指示を出して医療班がアスランを担ぎ上げる、その時、悲鳴が上がった。
「――――こっちにもいるぞ！！　まだ生きてる！！」
場にいる全員が弾かれるように顔を向けた。
イザークの顔面からも血の気が引く。
ストライクのパイロット！？
だが。
「まさか、この状況でナチュラルが生きてられるはずが――」
誰かが漏らしたその呟きは全員の思いだった。
「――コーディネイターか？」

場が水を打ったかに静まりかえる。
同胞を撃ち続けてきたのは、同胞だった。
衝撃のただなか、やがて引きずり出されたのは体躯からしてまだ少年、自分たちとほぼ同じくらいか年下くらいだろう。
「どうする？」
指示を仰ぐ視線がイザークの一身に集まる。
イザークは息を詰めて凝視する。
因縁の相手だ、幾度も銃火を交えて、ニコルを殺しついにはアスランをこんな状態に追いこんだ。
この顔に残る傷とてその男がつけたものだ。
憎い憎いストライクのパイロット――放置しておけばじき死は訪れるだろう。
もちろん今ここでとどめをさしてもいい、たとえ＜同胞＞であったとしても誰も咎めはすまい。
それほどに怨嗟の念は自分たちの間に根強く張っていた。
だが。
「……ッ！！」
イザークは顔面の傷を思わず覆う。
同じ土俵でありながら幾度ＭＳで対峙してもこの自分には討てなかった、というその一点だけが心に影を落とす。
心底憎む敵ではあるが、その力量だけは評価に値する。
そして訊きたかった――何故同胞を撃ち続けたのか、ニコルを殺しアスランを撃ったのかと。
滞るような時間のあと。
「――――ええいッ！！――――――ソイツも連れていけッ！！」
仮に命を拾ったならば、その時点で殺してやることだってできる！！　とイザークは判断を一時預けた。

＊＊＊＊＊

プリンシパリティ（アークエンジェル？）からの救助要請、ともにＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．からの助力要請。

キラ・ヤマトと――アスラン・“ザラ”……？

双方からの連絡を受け取って、国防省司令部オペレーションルームただなかでカガリは立ち尽くす。

「カガリ、まだ残務処理が」

背後から教育係の気遣わしげな声が聞こえて、我に返る。

昨日の戦いの後始末はまだ始まったばかりだ。

「それはキサカに任せる！　急げ――双方受け入れるぞッ！！」

「ならん！！」

鋭い一言が頭上から飛んだ。

「おじさまッ！！」

たたらを踏んでカガリは顔を上げる。

前代表がオペレーションルーム２Ｆの側廊に立って欄干ごしに見下ろしていた。

「キラ・ヤマトは――オーブ国籍を持っている、であるから許そう。だがもうひとりはザラというのなら」

ホムラは首を振る。

「今連合を刺激するわけにはいかぬ」

「でもッ！！」

「ウズミの志を踏みにじる気か、よりにもよって娘のお前が！！」

厳しく問いただす声に一瞬怯み、カガリは肩を震わせた。

Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．との講和の影で、連合に身を差し出した父。

だが全ての責任を一身に引き受けてなお、彼が強く望んだものを自分は知っている。

己と敵なる他者のみの世界ではただ滅びるのみ。
繋ぐものがなくては世界は分断されたままに終わる――
そしてわが国は、国体を保とうとするならば、
どこまでもその役割を負わねばならぬ。
それこそがこの小国を保ち
民を飢えさせぬための唯一無二のすべであると心得よ。

何で贖ったとしても国と民を守りそして世界を繋げ、と父は言い、そのためだけに自分はここに残った。
だが。
「――教えてくれ、人ひとりの意志さえ翻させることもできずに、どうやって世界を繋げることなんてできるんだ……？」
カガリは涙に潤んだ目を上げる。
「確かにアイツは私の言葉なんか聞こうともしなかった、でも……でも、もしかしたらわかりあえるかもしれない。なのに見殺しにしろなんて……」
こぼれ落ちる涙とともに張り上げた声が司令部に響き渡る。
「目の前のたったひとりさえ救えずに、それで国が救えるなんて私には思えないッ！！　可能性を切り捨てるなんて、それはきっとお父さまの理念にそぐうものではないッ！！」
ホムラは答えず、波打ったような静寂のただなか、キサカが背後から助け船を出した。
「講和条約を結んだばかりです。ましてあのＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．のザラの娘というのであらばいかようにも使えましょう。今は、どうか人命救助を優先に」
ややあって、ホムラは「よかろう」と応じた。

＊＊＊＊＊

オーブから受け入れる、と返答があった。
不意にＣＩＣを満たした安堵の息とともに、憂鬱にモンローが呟いた。
「外交カードにされるぞ、この議長選の前に」
パトリック・ザラはまず確実にＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．議長に選出されるだろう――彼の愛娘だ、とオーブ側も把握したはず。
「そんなことはとっくに承知しているッ！　だから咎は俺がいくらでも受ける、と言っている！！」
焦れながらイザークはギリ、と爪を噛む。
そもそもいくら和睦を結んだとはいえ昨日の敵だ。腸が煮えくりかえるほどに腹立たしいが、しかし背に腹はかえられない。
今なら土下座だとてしてくれる！！
カーペンタリアから指示が入った、とオペレーターが声を上げた。
「至急援護隊を寄越す、とのことです！」
可及的速やかに移送せよ――という一文にイザークはわずかに愁眉を開く。
司令部はアスランを見捨てない、彼女を救いたいのは自分たちだけではない。
しかし不安は募る。
オーブはコーディネイターの多い国でもある、対応は心得ているだろうし受け入れ態勢等についてはさほど心配していないだが。
「またエラー……アスラン・ザラのデータがどうしてもひっかかります」
オペレータが嘆く。
「ラグナロクセカンドにも同じものがあるはずだろうッ！！　すぐ転送させろッ！！」
本国に住まう自分たちは婚姻統制の関係でとっくに遺伝子採取され

ているし、そうでなくてもそもそもZ．A．F．T．に忠誠を誓った時点で、全てのZ．A．F．T．軍人は遺伝子データを軍に提供済みだ。

「ダメです、アクセスできません」

「なんでだッ!?」

焦れたイザークはオペレーターをおしのけてキーボードを叩く、だがいくら挑んでも拒否――

アスランの遺伝子情報に厳重なプロテクトがかけられている。

「前はこんなのなかったぞ?」

不審に我を忘れて辿る、

管轄レジストリはフェブラリウス・イグドラシル・マトリクス。

P．L．A．N．T．本国のｌｅｖｅｌ４＋生化学実験ラボの名に、

眉間が寄る。

「どういうことだ?」

お前なら知っているだろうディアッカ、と言いかけていつも傍らにいた相手がいないことに気づき、イザークは唇を強く噛む。

ディアッカは機体とともに行方不明だ。

あの足つきに鹵獲されたのかもしれない、状況を考えればその可能性が大だった。

次々と自分の側から戦友たちが消えていく。

――心が軋んで壊れそうだ。

もし。

アスランまでいなくなったら、俺はどうすればいい?

不意の戦慄に喉元で血が凍り付く。

だがオーブからの誘導指示を受けて、イザークはその不吉な可能性を振り捨てた。

「送れるだけのありったけのデータを向こうに送れ！　それでいいッ！！」

＊＊＊＊＊

ただ騒然。

拘束され引きずり出された男たちが冷えた床に座す中、ムルタ・アズラエルはふと足を止めてかがみこんで笑んだ。

「こりゃあまたイイ格好だね、ガブリエル（ロード・ジブリール）卿」

短くプラチナブロンドの髪を刈り込んだ男が顔をあげる、暗い光を宿したエメラルドの眼差しが爛々と輝く。

「下種がッ！！」

ペッと唾を吐きかけられて、瞬時底冷えのする眼差しでムルタが見返す。

そして平手打ちの鋭く甲高い音が場に響いた。

勢いで倒れ込む男を冷ややかに見下ろして、手の甲で頬を拭ったムルタは立ち上がる。

「フランス遺領なんかで爺さん連中相手にくだまいてるからさ。ちょっとはこのお嬢ちゃんでも見習って踏みだしたまえよ」

ジブリールと呼ばれた男から注がれる排除する眼差しに、息苦しささえ覚えてラクスは思わず一歩下がる。

「汚らわしいものを連れ込みおって――貴様、その地位にあって題目にすら反する気かッ！！！」

ジブリールのがんじがらめの鎖をすら引きちぎらんばかりの勢いをいなして、ムルタは口元を笑わせた。

「そんなの決めた老人どもの御前で言ってやりたまえな。僕ぁ得になるんならＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．のザラとだって組むよ？」

ハッと息を呑んでラクスはムルタの背中を見る。

同時にジブリールはひゅっと息を吸い込んで、顔面を歪めた。
「確信したぞ――貴様の存在こそがこの星に害悪だとなッ！！　この守銭奴がッ！！！」
「はァん。プライドと名誉だけじゃニンゲン喰ってけないんだよねェ、残念だけど」
「ッ必ず貴様に引導を渡してやるッ！！」
「陳腐な台詞は聞き飽きたよ、ジブリール――連れていきたまえ」
兵士たちに連行されていく男たちを見送って、ラクスは胸元で手を組む。
「どうしてあの方はあれほどの敵意をお持ちなのでしょう……？」
コーディネイターによほどひどいことをされたのだろうか？　とすら思ってしまう。
「万国共通、男のシットを甘くみるなってことかな。ああいう連中は、坊主憎けりゃ袈裟破るどころか仏像まで張り倒すもんさ」
多少勉強になった？　とムルタは笑んで目を転じ、傍らを連れていかれようとしている男に声をかけた。
「ロゴスの席を譲ってやったのに、それでも不満ってどこまで欲の皮つっぱってるんだい、ブルーノ」
無言で男がその傍らを通り過ぎる
よく似た面差しだが、きょうだいだろうか？　とラクスは見送った。
やれやれ……とムルタは背中を向け、我に返ったラクスはその後に続く。
「ムルタ・アズラエル。あなたはザラ委員長とでも組むと仰いましたわ」
「君って知りたがりだね」
秘書に差し出された濡れタオルで顔を拭きながら、面倒臭そうにムルタは応じる。
「それはもう。だってお互い戦っておりますでしょう？」
「僕は商人だし、商人は隙間さえあればどこにだって入り込むもんだよ。それが例えばＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．でも火星でもね」

「それだけが理由ですの？」
「――それに世界はつながってるって言ったでしょ。もともとザラはウチの人間なんだし。アプリリウス第一区建造着手の時以来、彼が言うからウチとフラガとでかなり負担し続けたんだし。僕ら経由で各国からそりゃもう莫大なカネが注がれたもんさ、一大国際事業ってカタチでね。君、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．一基築くのにどれくらいかかると思う？」
ラクスは左右に頭を振る。
この世には自分の知らないことがあまりにも多すぎる、それが母なる大地のことであってさえ。
「地球上の国家の年間予算全部ひっくるめたって到底及ばないんだ」
だからやっぱりどうあってもＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．と貴重な労働力はできるだけ無傷のままでおいておきたいよね、とムルタは言いながら渡されたサンプルの口をへしおり、ぐびぐびと飲み干した。
「向こうだって２０００万人の命がかかってるしそれは一緒なんだけど、政治家連中のプライドってのは厄介でね」
双方メンツを潰さないような落としどころを模索し続けてるのが現状、――とムルタは言う。
「ま、妥協が許せない連中もいる。例えばジブリールみたいな白黒はっきりつけろって過激派ね。彼らは波及する経済損失とか全然頭にないから簡単にＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．をぶち壊せなんて言えるわけだけど、僕ぁとてもとてもそんなこと言えないなァ」
ラクスは思い至ってふと顔を曇らせる。
「もしかしてユニウスセブンのことはあなたのご意思ではなかった？」
ユニウスセブンの悲劇は、コーディネイター殲滅を狙うブルーコスモスの陰謀、ともっぱら耳にしていた。
悪魔の所業と皆は言う。しかし眼前のブルーコスモス盟主はごくごく普通の青年に見えた、多少こだわりが強くとても饒舌でかなり横暴な。

一瞬間があった。
「……あれはいろんな意味でホントの悲劇。こっちだって想像つかなかったよ、どっかの猪突猛進バカの思い上がりなんて」
ヒトってホントに難しいんだよねえ、とムルタはぼやいて顔をあらぬ方向に向ける。
「あれ、君たちもう着いちゃった？」
「おっさんッ！」
パイロットスーツ姿の少年たちが足音も高く歩み寄ってきていた。
「で、どうだった？　あの青と白のおもちゃは」
「もうボッコボコ！！　白いヤツはめちゃくちゃだって！！　青いのは逃げやがったけど！！」
「おい、やることやったんだから早く寄越せよな」
「……クスリ」
もしかしてワシントンD．C．で去り際に見たMSのパイロットたちだろうか――とラクスは思う。
自分と年代は変わらないとおぼしき彼らは、無邪気に楽しそうに戦いを語る。
そしてそれをムルタは目を細めて眺めて、やがて3人を押しやった。
「はいはい、ご褒美いただいてから君たちはソキウスで遊んでおきなさいね。やれやれ、こんなことならうっかりロンドに3体も回すんじゃなかったなァ、もう」

＊＊＊＊＊

廊下に転がってうめく人々、肉と血と泥の匂い。
むせかえるような熱にまみれた緊急措置室のただなかでは緊迫した空気だけが漂う。
頬を伝う汗をぬぐわれて、ミハイル・コーストはメスを進める。

「Ｏ－、１０単位追加――」
「ついでに外科からモルヒネをとってこいッ！」
交錯する雑多な声のただなか、呼応するように機械音がたどたどしく響く。
「バイタル安定――」
「部長！！　三度熱傷の患者2名が搬送されてきます！！　ともに内臓破裂の恐れあり！」
電話の受話器を手にスタッフが声を張り上げる。
ちらとも見ずに彼は怒鳴り返す。
「これ以上受け入れなどできるかッ！！　余所に回させろッ！！」
ただでさえ昨日の戦いで運び込まれてくる負傷者が多い中だ。
どこもきっと同じような状況のはず――自分たちは確実に助けられる命から助けねばならない。
人手と機材が圧倒的に足りない現状では、重度熱傷内臓破裂であればトリアージ的に限りなく黒だ。
「国防省からの要請です、ともにコーディネイターで――今いちばん収容ポイントに近いところにいるミハイル先生にと！！」
指名されたミハイルは国防省、の一点で弾かれたように顔をあげる。
「その電話を寄越せ！」
看護師に受話器を支えられながら、ミハイルは怒りを抑えた声で低く告げる。
「いいかよく聞け――こっちは１００ガロン以上の輸血、１３人のドクター各人１６０回以上のチェストチューブ挿入、挿管なら３００回以上だ」
傍らを走り抜けるストレッチャーの群れの音が声を遮断する。
「――もう４５０回のレントゲンをオーダーしてる、７０人のナースと合わせて４０００枚以上のラテックス手袋を消費して５００着以上のスクラブを着用したんだ――わかってる？　なら早く人と物資をこっちに回せッ！！　それで患者を受け入れてやるッ！！」
電話を突き返した矢先、助手に押しのけられた。

「縫合は代わります、準備を」
「すまん」
手袋を投げつけるように棄てた後、目頭を押さえてミハイルは場を離れる。
コーディネイターはそもそも体の成り立ちからしてナチュラルと違う、とはいえやはり重篤は重篤だ。
しかも専門診療を担当している医師ときたら今ここには自分ひとりだけ――思えば頭と胃が痛い。
「久しぶりだね、ミハイル」
負傷者がごろごろ転がっているすきまを縫うように歩む廊下のただなかで、場違いなほどに穏やかな声で呼ばれてふと足を止める。
「人手が足りないと聞いたが、私にも手伝えるなら」
汗が目に入って染みる、徹夜明けの目には廊下のか細い照明すら眩しい。
マスク越しだが、その柔和な黒い眼差しには見覚えがあった。
記憶はたちどころに蘇って、知己と一致する。
「ギルバート？　……君、確か今はフェブラリウスにいたんじゃなかったか」
「いやちょっとした縁があってね、降りてきたんだよ」
相変わらず温和な声だ、誰もこれがさんざん生命を弄り回し操ってきた人間のそれだとは思わないだろう――もっともそれは自分も同様かもしれないが。
「君、国際医師免許もってたか」
「メンデル時代にとらされたよ」
「なら助かる。いくら私でもコーディネイター2人同時には相手できん」
ギルバートはミハイルに並ぶ。
「しかしまるで野戦病院だね。患者の収容、軍の施設だけじゃ足りないのか」
ミハイルはひとつ頷いて視線を巡らせた。

待合室では足らず、廊下にまで負傷兵が溢れている。
短時間にして苛烈だった昨日の戦闘がいったいどこまで爪痕を残すのか、今はまだわからない。
「たまらないね。Ｎジャマーのせいで電気供給はストップ、クーラーすら利かない……ここの病院の予備電源の残りはあとわずか。間に合わなければたちどころに１００人の呼吸は止まる」
我が故郷ながらＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．は毎回しでかしてくれるね、とミハイルは力なくぼやく。
「あの国は戦い、戦いの繰り返しだ。相手がナチュラルならいくら殺してもいいとでも思ってるのかね？　しかも人手がないからと捕虜はとらない、降伏は認めない」
どれだけの人間を殺すのか、という相手不在の糾弾に、ギルバートは肩をすくめた。
「さあ。我々には知るよしもないね」
「挙句憎しみを煽って、さらに同胞を戦いに巻き込んでいくのにな。医者にあるまじきだが――お偉方も一度戦場で家族を失ってみればいい、わかることもたくさんあるだろう！」
「部長！　これが搬送予定患者の所見申し送りとデータ一式です！」
背後からスタッフが怒鳴って、ミハイルとギルバートは振り返る。
「コーディネイター２人ってそれかい？」
「わざわざオノゴロから連絡があってね」
送られてきたデータのファイルを受け取り、ぺらぺらとページをめくっている間にミハイルは眉間を顰める。
「見覚えがあるな」
ギルバートが覗き込む――やがて彼は一瞬真顔になった。
「これはこれは……懐かしいね、ミハイル？」
嬉しさの響きを含んだギルバートの声色を聞きながら、やがて暗鬱としたミハイルは首を振った。
「まさか地球でこんなものを診るハメになるとは……いったいいつ

まで祟るのかね、ウチの会社の亡霊は」
ギルバートは肩をすくめた。
「まあ言ってもせんないことだよ、嘆きたもうな。できる限り協力するから」
「いったいいつ我々はヒビキの悪夢から解放される?」
呪わしげに呟く元同僚の肩を叩いて、「残念ながらそれが我々の青春そのものだからね」と言い添えてギルバート・デュランダルは口元を笑わせた。

14：J.O.S.H.－A.，アカツキ島あるいはカーペンタリアにて

Childhood's End.

14：J．O．S．H．－A．，アカツキ島あるいはカーペンタリアにて

「――私は諦めるって言葉が世界で一番だいっきらいなんだ！！」
カガリは怒鳴りながら足早に廊下を歩む。
「だからって民間人の治療費を国費から出させる気かい？　冷凍カプセルにナノマシンなんてものまで引っ張り出して、いったいどれだけの大層な人体実験をやろうってんだか！」
背後から財務官のユウナ・セイランが詰るので、カガリは振り返ってグイと押しのける、優男で非力な幼なじみはよろめいた。
「私が負担する！！　私名義のものを売却するなら文句ないだろう！？――邸でも専用機でも！　だからもう行政府（オロファト）に帰ってコトーに顛末を報告してこい！！」
側近のキサカとアマギとに連れられて、ユウナは不承不承退いた。
「ガブリエル（ロード・ジブリール）卿たちが何言ってきても知らないよ、僕は……」
捨てゼリフがひどく気に障った。
意見するなら私の目を見て言えばいい――それすらできないくせにッ！！
あの軟弱男の横っ面を殴りたい衝動をこらえながら、肩を怒らせてカガリは再び緊急措置室へと向かう。

角を曲がったその眼前で、医療用カプセルが次々と手術室へと運ばれていき、ドアが眼前で閉まった。
その前に佇んでいた、Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の緑色の兵士たちを背後に従えた赤い士官が軍帽の下から剣呑な眼差しを上げた――
カガリはその銀髪に彩られた端正な顔を大きく横切る傷跡にしばし息を呑むと同時に、まじまじとそのごく若い兵士を眺める。
ナチュラルの旧弊たる軍隊制度に反発するＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．には、名目上階級がない。だが戦時国際法あるいは国際軍事同盟階級符号的にＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．赤服はＯＦ－１相当として遇するよう求めら

れているのが実情だ。
ということは――あの2人を運んできたZ．A．F．T．実働部隊では一番コイツが偉いのか？　と一瞬カガリは鼻白んで立ち止まる。上背こそがあるがまだ少年臭さの抜けきらない印象で、おそらく自分と同年代だ。
確かにコーディネーターは成人年齢が早いとはいうけれども、こんなヤツらが前線で部隊を率いて戦っている……
「受け入れに感謝する」
感謝のかけらすら感じさせないぶっきらぼうさで、鋭利に銀髪を削ぎ落としたその士官はZ．A．F．T．式の敬礼を見せた。
「Z．A．F．T．ザラ隊副官のイザーク・ジュールだ」
「……オーブ国軍陸軍准将のカガリ・ユラ・アスハだ」
同じくオーブ式敬礼で答えた後、互いに見つめ合う。
病院の手術室を前に、妙な緊張感を孕んで空気が張り詰める。
多分考えていることは同じだった。

――――昨日自分たちの前に敵として立ちはだかっていたのは、こいつらか。

「……やっぱりお前たちの仲間なんだな、アスラン」
思わず言葉が漏れた。
軍服なんか似合わないヤツだ、本当に兵士か？　と思っていたのに。
「何故アイツを知っている？」
赤服の士官が立場もわきまえず尊大な口調で、ひどく冷ややかな眼差しでもって自分を睨む。
その隠そうともしない敵意にカガリは一瞬憤慨し、やがて当然かと思いなおす。
昨日の今頃は、まだ交戦していた相手だ。
「私はアークエンジェルに乗っていた。搭乗していた戦闘機を撃たれて、島に不時着した。……その時アスランに会った」

相手はただ自分を凝視する、話を聞こうという気持ちはあるらしい。
「私と話したって何も解決しないってあの時アイツは言ってたけど……絶対その考え方を変えてやろうってずっと思ってた」
「お前か、合議にアスランを指名したのは」
士官が苦々しげに言う。
そうだ、とカガリは頷く。
やや間。
「アイツ、敵は撃つだけだと言いやがった」
「当然だろう、俺たちは軍人だからな」
ツンとした横顔で応えられて、コイツもか！　とカガリは激する。
世界で一番だいっきらいなことは「諦める」――
そして二番目にきらいなものは、自分を規定する言葉に身をゆだねて、そのままありとあらゆる思考を停止する人間だ。
例えば、「軍人」のひとことで全てを処するコイツみたいな！！
「でも最初から軍人ってわけじゃないだろう!?　そもそも銃をもたない道も選べたはずだ!!」
喧嘩腰に対し、ギロリ、と向けられた青い眼差しが薄くなった。
売られた喧嘩は根こそぎ買う、という空気だった。
「選べただと?……否応もなく俺たちに銃をもたせたのはナチュラル(お前たち)だぞ」
沸騰しそうな怒りが空気ごしに伝わってくる。
自分もかなりの短気だが、コイツも相当な癇癪もちらしい――コーディネイターは理性的のはずじゃないのか？　とカガリがわずかにたじろいだ直後。
「すべては虐殺から始まった！　俺たちには黙って耐えろとでも言うのか!?　目の前で大地を撃たれて同胞を殺されてもッ!?」
圧巻の怒鳴り声だ。
まるで手負いの牙剥く獅子に挑まれているような気すらする、一瞬

怯むがそれ以上の勢いでカガリは反駁する。
「だからって繰り返すのかッ！？　殺されたから殺すのかッ！？　そんなバカなッ！！」
「討たなきゃ殺されるなら殺るしかないだろうがッ！！　他の選択肢などないッ！！」
互いに激情のままにヒートアップしていく。
向こうにはＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の兵士たちが、こちらにはオーブの兵士たちが居並んでいるというのに。
そして負傷した兵士たちを前に体裁も何もなく、立場を忘れて自分たちはこんなにも感情に突き動かされる。
「そんなのおかしいだろッ！？　撃たれたから撃っての繰り返しじゃ、がんじがらめの憎しみで動けなくなって、きっと私たちはどこにも行けなくなるッ！！」
カガリは顔を歪めて言葉を詰まらせる。
「みんな間違ってるんだ、みんな――私たちも、お前たちも、この世界もッ！！！」
ありったけの気持ちを込めて言葉をぶつければ、焦れたように少年が怒鳴った。
「だからってどうしようがあるッ！！？」
「――そんなこと私が知りたい、いったいどうすればいいんだよッ！！？」
我ながら悲鳴のような響きだった、言い争っていた相手は苦々しげに口を閉ざす。
この答えは誰も持ち合わせていない。
だから当然誰も返事などしない。
涙目で睨み合いながら、互いに肩で息をしつつ沈黙が落ちた。
こんなことを他人と言い争うなんて思ってもいなかった、ましてコーディネイターと。
だがコイツは目を逸らさない――真っ向から私に対峙して言葉を受け止めて確かに打ち返してくる。

それができる人間なんて今までそうはいなかった、それはそもそも敬意に値するのではないだろうか、とカガリは思う。
「……お前たちは、理性的で優秀な脳みそじゃないのか、コーディネイターなんだろ」
カガリは口元をひん曲げる。
ぶっきらぼうにZ．A．F．T．士官は応じた。
「だからナチュラルは想像力の欠如した馬鹿だと言ってるんだ。俺たちだって怒るし泣く！　痛いもんは痛い、悔しいもんは悔しい。そして守りたいものは当然守りたい！！」

＊＊＊＊＊

後ろ手に縛られて足つき内の狭い廊下を行きながら、ディアッカは自分を眺める野次馬の群れにしかめっ面を作る。
そんなにコーディネイターが珍しいのか、こいつらは？
「ったく、いつまで放っておく気だったんだよ。怪我人だぞ俺は！」
悪態をつけば銃口に背中を押された。
「うるさい、さっさと行け！」
そのぞんざいな言葉に、瞬間頭に血が上る。
こんな奴らに命令されるほど俺は落ちぶれたか？
「おい……あんまり俺を怒らせるなよ、時々全部どうでもよくなるんだからな」
振り返って睨めつけながら低く言えば、銃口を突きつけた兵士の１人が一瞬の怯みを見せ、もう１人が慌てたように銃を構えた。
「黙らなければ撃つぞッ！　……さっさと行けッ！」
「はいはい」
蜂の巣にされるのはごめんだ、とディアッカは肩をすくめ、また歩を進める。

ナチュラルごときに撃墜させられて、挙句に艦砲をつきつけられて降伏させられて、見世物の猿のように扱われて。
機密情報漏洩防止と腹いせを兼ねて、バスターのコンソールを非常用の斧でたたき割ったはよいものの、それで気分が晴れるわけでもなく、なお怒りの感情はやるせなく胸中に渦巻く。
ディアッカは廊下を行き、ちらほらといる野次馬の中に、軍服の少女2人の姿を見つけた。
――およそ兵士にも見えない、多分自分よりも年下のナチュラルの少女たち。
「へえ、この艦ってこんな女のコも乗ってんだ」
単純な興味からふらりと足を向けて、ディアッカは覗き込む。
ひとりは燃えるような紅い髪、コーディネイターと言われても特段違和感のない美貌で自分を睨み据える――まったく気の強い女はいい、こんな時ですら心の慰めになる。
もうひとりは泣きはらした顔が印象的な、外はね髪の鼻ぺちゃ少女。
「ん？　なぁに泣いてんの？」
覗き込もうとして、怯えたように彼女は息を呑みこんで後ずさり、匿うようにその前にいた少年兵が肩で彼女を視界から遮った。
「ったく泣きたいのはこっちだぜ……」と嘆いたディアッカの、その言葉に反応したのか少年兵が殴りかかろうと拳を振り上げる。
苛々してムカムカする、今なら始終噴火していたイザークの気持ちが少々理解できる。
ノロマなナチュラルめ、殴れるものなら殴ってみろ――拳が入る前に蹴り上げてやる！
だがその少年兵の拳は「捕虜への暴行は禁止されている！」という制止の声の前にとどめられた。
背中を向けて肩越しに振り返って、ディアッカはふふん、と鼻で笑った。
視野の隅に捉えた、怯えて呆然とこちらを眺めていた鼻ぺちゃ少女の表情はひどく固かった。

ちょっとちっぱいは好みじゃないけど、まあ可愛いじゃん？

そのまま押し込められた白い部屋で、ディアッカはぽつんとある椅子に座す。

「名前、認識番号、所属を言え」

「ディアッカ・エルスマン。認識番号８３５７５２。所属部隊ザラ隊……つーかまぁ、本来はクルーゼ隊」

「クルーゼ隊？」

「そ」

つっけんどんに答えながら、軍になんぞ入るな、と言った父の顔がディアッカの脳裏に蘇る。

それ見たことか！　とあの親父ならせせら笑うだろう。

ひとつ憂鬱に嘆息をつく。

果たして地球連合軍は通常の捕虜交換に応じるだろうか？

……だがいくら記憶を辿っても、この大戦中に捕虜交換が行われた例を聞いた覚えがない。

しかも「青き清浄なる世界の為に！」と言いながらコーディネイターの民間人を躊躇いなく殺すヤツらだ、命の保障などないも同然だろう。

まあその時はその時――少なくとも、砲口が向けられたあの時点で殺されるより可能性があるだけマシか、とディアッカは考え直す。

尋問していた兵士が立ち、入れ替わるようにまた次の男が入ってきた。

うんざりだ、とディアッカは顔を背ける。

「おい、お前がバスターのパイロットだって？」

金髪碧眼の男がどかんと前に座っていきなり口を切った。

ディアッカはちらりと横目で眺める。制服からしてどうやら地球連合軍の士官らしい。

「ああ」

もの珍しげにじろじろと眺められてディアッカはしかめっ面になる。
「やれやれ……お前たちのせいで、全く俺はホント何度死にそうになったか！　こないだは海を漂うハメになったんだぞ」
そんな嘆息交じりの愚痴を聞かされても対応に困る。
「俺は宇宙ではゼロに、地上に降りてからはスカイグラスパーに乗ってたんだ」とその男は飄々と言う。
「ゼロ？　スカイグラスパー？」
「ゼロは赤いＭＡ。スカイグラスパーは青と白の戦闘機。バスターに乗ってたんだから見覚えあるはずだろ？」
男のにんまりとした人の悪い笑みを眼前に、ディアッカは苦々しく思う。
――こいつか、さんざんてこずらせてくれたのは！！
憎々しく思う感情は自然視線に出るらしい、ことさらに余裕を見せてその男は脚を組んだ。
「お前クルーゼ隊って言ったよな。ラウ・ル・クルーゼってどんなヤツだ？」
事情聴取かよ、とディアッカはうんざりする。
「つかみどころのないちょー立派な隊長サンさ」
元は色男なんだろうけれども、怪しげな仮面をしていてかなり不気味。
調整ミスでテロメアに不具合があって顔にそれが発現しているらしい――ということまではさすがに言わなくてもいいだろう。
「なあ。例えば部下を人質にした場合、クルーゼは取引に応じるかな？」
妙な交渉カードに使われるのは真っ平だ。
「あぁ、そりゃ考えるだけ無駄だぜ？」
素っ気無くディアッカは言った。
「うちの隊長サンはたぶん、部下の命なんてこれっぽっちも考えちゃないからさ」
でなければ何かと秤にかけている時だけだ。

＊＊＊＊＊

ドアが開く、弾かれるようにカガリは顔をそちらに向けた。
Z．A．F．T．の銀色の士官も体を向ける。
「どうなった!?」
「応急措置だけは済ませました。時間がないので結論から言います。この場所ではこれ以上手の打ちようがない」
ほのかに青ざめた医師が言う。
「……そんなに深刻なのか?」
「容態もですが、一番の問題は彼らは塩基配列が通常のフェブラリウス・パターンと違うということ」
「どういうことだ?」
怪訝なカガリに、重い口を切って助手が答えた。
「データで推測はついていたんですが、やはりあのふたりは極めて特殊な調整を受けていて――それも何重にも加えられているんです。改変されすぎていて臓器側を適合させようにも、彼らのもとの遺伝子地図がないとどこをどう弄ればいいのかすらわからなくて……」
「なんだそれはッ!!?」
銀髪の少年が遮り声を荒げて詰め寄る。
「辿る方法(テ)はあります」
黒髪で上背の高い男が穏やかに付け加えた。
「万能細胞を培養してその経過を見ます、あとは解析にかけて――」
「そんなことをしている時間はないだろうッ!!」
「――もしくはアスラン・ザラの場合、同型の万能胚がイグドラシル・マトリクスにまだ保存されていればショートカットできるでしょう。そのあたりはエルスマン博士がよくご存じのはず」
銀色の士官の眉間が顰められた。

彼は微かに首を後ろに向けて背後の兵士たちと小声で話し合ったあと、

「何故本国の“母胎”と管理者の名を知っている？」とひどく不審そうに訊いた。

「お前は、いったい誰だ？」

◆◆◆

問いながらも、「隊長が到着したぞ！！」という先触れの声に弾かれたようにＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の兵士たちは一斉に背後に向いた。

カーペンタリアからの回収部隊が到着したのだろう、と認めてギルバート・デュランダルはオーブ陸軍准将なる少女に言葉を続ける。

「アスラン・ザラはこのままお渡しになったほうがよろしいでしょう。冷凍カプセルで免疫抑制ナノマシンを含ませておけば、おそらくオーストラリアへの搬送に耐えます」

ギルバートの柔和な眼差しを見返しながら、金色の少女は泣き濡れた頬を拭って、つかみかからんばかりの勢いでくってかかる。

「オーブ（ここ）じゃダメなのか！？　一刻を争うんだろうッ！？」

「――向こうは、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の誇る生化学の第一人者が降りてこられます。最善を尽くす準備はあるはず」

断言できる根拠はあった。

タッド・エルスマンが渡した全データを見ていれば、まさか唯一手元に残ったＥ－０１被験体をみすみす見殺しにすることはないだろう。

そして彼はやはりヒビキの情熱を解しうる同類の人だ。

「そして長いことここには置いておけますまい？」

不意を衝かれたように、金色の少女は黙り込んだ。

政治的にオーブがひどく難しい立場にあることは知っている。

聞きつけた連合が、早晩Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．国防委員長の娘を差し出せ！　と迫ってくるのは火を見るより明らかだった。

「救いたいとお思いであるなら、このままＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．にお渡ししたほうがよろしいでしょう」
促しに、少女は素直に頷いた。
「わかった。……じゃあお前はオロファト中央病院でキラにあたってくれ」
これで私はＫｉｒａに専念できる――。
ともすれば笑みがこぼれそうになる、久々に躍動する情熱を体の内側に感じる。
なんという僥倖か。
憧れてやまず追い求め続けてきたユーレン・ヒビキの最高傑作に、生で触れることができるなど！

◆◆◆

兵士たちを従えて、ゆるゆるとした金髪を肩に流した白服の青年が歩み来て、Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．の一団は敬礼で迎える。
カーペンタリアからの回収部隊を率いてきたラウ・ル・クルーゼ隊長は、ふっと笑みを見せた。
「北米での工作にかまけていて対応が遅れた。君には負担をかけたな、イザーク」
クルーゼ隊長のその滑らかな口調はひどく久しぶりに思えた。
「いえ」
悄然とイザークは首を振る。
自分には労をねぎらわれる価値すらない――ただ非力さだけが口惜しい。
「……ラウ、これがデータ一式と所見申し送り書だ」
あの黒髪の医者がファイルを携えて歩み寄ってきた。
「ああ、アスランを診てくれたのは君だったか、ギルバート」
この隊長の知己か？
瞬時両者を見比べる、確かに知り合いではあるのだろう。

隊長は遺伝子発現の失敗から長らくテロメアの治療を受けていると聞いていた、あるいはその関係者なのか――ならばフェブラリウスの人間なのだろう、とイザークは得心する。
それならば腑に落ちる。

◆◆◆

ギルバートは歩み寄ってファイルを広げながら傍らで囁く。
「スマンね、場所を変えてもらって……まさかこうなるとは思っていなくて」
「いや、タイミングは悪くなかった」
ラウが低く応じる。
「あとこれを君に」
彼は差し出したケースをそっと受け取って胸ポケットにおさめた。
「助かる、もう数が少なくなっていた。どうも地上での活動が長引いてね……だが君がこちらにいるなら安心だな」
「ああ。あと心配したもうな、レイは連れてきているよ」
ふっとラウ・ル・クルーゼが口元をほころばせた。
ギルバートはページをめくる。
「それでラウ、Ｋ－２５１が近くにいると言っていたろう？」
「確かにいたが、あいにくもう自律体としては使い物にはならんよ」
「――その生体パーツが欲しい。手足と、内臓と。多少損傷していても構わない、新しければ新しいほどいい」
一瞬の間。
その銀色の仮面の下でちらりと視線が動いた。
「……まさか本体がいるのか、ここに？」
その反応にギルバート・デュランダルは笑みを漏らす。
「しかも君のすぐ側にね」
慌ただしく冷凍カプセルが運ばれていく、冷静沈着を装ったままにラウはそれを見送った。

しかし眼光は昏く鋭い。
「ストライクのパイロット……＜キラ・ヤマト＞か」
「君は彼の今の名を知っていた？」
ギルバートは目を細めて、ファイルを閉じ、ラウに手渡した。
「アスラン・ザラから報告を受けていた。月の幼年学校で一緒だった、と」
そして不意に彼は口元を歪めてファイルを受け取って背を向ける。
「これはなんとも幸運というか悲劇というか――それとも彼らは互いのＥ－０１因子に呼ばれているのかな？」
めぐりあわせの奇異に、仮面の下の彼は笑んでいるようであった。

◆◆◆

しばし業務連絡申し送りその他のやりとりを経たあとで、ラウ・ル・クルーゼは身を翻した。
「カーペンタリアですでに準備ができている、急ごう」
そして冷凍カプセルとともに足早に動き出す――
銀髪のお前！　と呼ばれて、ひとりイザークは振り返った。
「まだ何か言い足りないのか！！　それから俺はお前などという名前ではない！！」
怒鳴って応じる。
そして、何かを必死に伝えようとしているその金色の少女の言葉を待った。
「絶対に死なせないでくれ――私は、まだアイツに伝えてない。撃つしかないなんて哀しいこと言うなよって……」
彼女は潤みながらも強い眼差しで言う。
それを見返しながら、やはりいい目だ、とイザークは思う。
ナチュラルにも気骨のある人間はいるらしい。
「道は必ずある、溝なんか越えてやる、その方法を絶対みつけてやる……」

オーブ国軍の少女が声の限りに叫ぶ。
「――――お前たちと撃ちあうだけの未来なんて、絶対にイヤだからなッ！！！」
その言葉に呼び止められたかに、Z．A．F．T．の皆すらも振り返った。
「了解した」
ただそれだけを返して、イザークは一団に付き従うべく背中をむける。
ナチュラルに想いを託された、と思った。
そして自分たちは確かに受け取った――命と希望ともに。

＊＊＊＊＊

カーペンタリア基地へリポート。
待ち構えていた医療スタッフたちが取り囲んで、冷凍カプセルを降ろしストレッチャーに載せ替える合間。
ペールブルーの手術着で人垣の最前列にいる人物に目をとめてイザークは目を見張る。
「――エルスマン博士ッ！！？」
議長選挙はもう2日後だというのに、まさか最高評議会議員が降りてきているとは思わなかった。
「お疲れだったね。あとはまかせたまえ、最善は尽くす」
一条の光明とともにイザークはカプセルを見送る。
だが愁眉は晴れない。
「どうか頼みます」
「そりゃあ当然。我々としてもね、これ以上パトリックに壊れてもらうわけにはいかないんだよ」
そりゃ悪いこともいろいろしたんだろうけど、私なんかには彼を咎

める権利などないしね、と生化学の第一人者は皮肉に唇を歪める。
「彼もギリギリのところにいるからね……娘まで失って、トチ狂って殲滅戦に踏み込まれても困るだろう？」
せっかく我々が精魂込めて次世代を増やしても、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．に未来がなければ意味がないよ、とタッド・エルスマンは言って背中を向けた。
人事を尽くして天命を待つ――イザークは沈鬱にうなだれる。
せめてもあのお守りの加護があればいい。
傍らに立ったコートニーが言う。
「イザーク、ちゃんと伝えたのかよ？」
「何を」
「好きだって」

――言わなきゃ後悔するかもよ。

ラスティ……今はじめて、お前の言葉を理解した。
不意に涙腺が緩んだ。
反対側に立っていたハイネが、ポン、と背を叩いた。
「俺、たくさんの連中に仲間の死は割り切れってハッパかけてきたけどさ。……助かるといいな、アスラン」
頬を手の甲でひとぬぐいする。
「当然だ」
イザークは言葉に力をこめる。
死なれてたまるか――俺だけ置いて逝かれてたまるか！！
「どれだけ俺たちに心配と迷惑をかけたか、徹夜でみっちり説教してやらなきゃならんのだからなッ！！！」
だから絶対戻ってこいッ！！！

＊＊＊＊＊

見慣れた筆跡で綴られた申し送りにひととおり目を通して、歩みながらタッドは苦笑いする。
文字が跳ねて、喜びが滲み出ている。全くあの冷静沈着な男にしては珍しい限りだ。
まあ昂揚する気持ちはわからないでもない、長年追い求めていた恋人とようやくにベッドを共にできる時にも匹敵する興奮と感慨だろう。
「しかしマトリクスでＥ－０１万能胚をまだ保存していたのが幸いだったな」
助手たちを従えて、やれやれ――とタッドは首をコキコキならす。
「ユーレン・ヒビキの最後の作品（ラストナンバー）……ラストひとつの万能胚」
タッド・エルスマンはラテックス手袋をはめる。
「さあ我らと彼女に、天と羽根クジラの加護がありますように！」
そして眩い手術室のドアが開け放たれた。

＊＊＊＊＊

広い背中に背中を凭せかけて、星の光を全て吸い込むような漆黒の空を振り仰ぐ。
やがて膝を抱えて、どこまでも広がる足元の白い花畑を眺めていた。

ホント、なにやってるんだか。

でも、頑張ったつもりなのよ？

まだいけるんじゃん？

ううん。もうなんか疲れちゃった。

やれやれ、とまた呆れたようなため息が聞こえた。

ややあって言う。

ねえ、……ごめんね。

俺別に後悔とかしてないよ？

言ったじゃん、俺のあとの人生お前に全部あげるって。

ばか。

泣かれるのホント困るんだけど。

やがて彼は立ち上がると腕を掴んで引っ張り上げた。

最後のエスコートな。

眼前の臙脂色の軍服の背中が滲む。

なんでそんな意地悪言うの？

行かなきゃ。

向こうでお前呼ばれてるよ。

＊＊＊＊＊

何故今呼び立てられる！！？

イザークは転がり込むように司令所へと踏み込んで怒鳴る。

「おい、どこだッ！！」

雑多な人々の行き交うコンソールの群れのただなか、オペレーターの一人が立ち上がって手を振った。

「こちらです！」

舌打ちしながら駆け寄り、インカムを掴む。

ひたすらに気は急く。

「母上ッ！？」

『元気そうでなによりです』

本国にいる紫服纏う母が、相変わらず悠然としてモニターの向こうで目を細めていた。

だが今悠長に話すつもりはなかった。

「一体何なんですッ！？　エルスマン博士が今アスランのオペに入っていて――」

『そうですか。……そんなことよりもお話があります』

そんなこと？

その一語にイザークは青ざめる。

母と自分との決定的な温度差をまざまざと肌で感じる――不意によみがえる。

この人は、あの時「もう諦めろ」と釘を刺した。
そして結局、自分はその言葉に逆らえなかった。

あの時俺は、ラスティではなくアスランでもなく――誰よりも己自身を殴りたかった。

『クルーゼはスピットブレイクの作戦司令となるにあたり、特務隊に昇進します。従ってクルーゼ隊は解散することとなるでしょう』
どこまでも優雅で高貴な母は涼やかな声で告げる。
「……」
『ですからあなたはもう宇宙に帰っていらっしゃい、ボアズ守備部隊に席を用意します』
イザークは切れ長の眦を紅く染めてつり上げる。
「こんな状況で離脱しろとッ！？　無茶を――できるわけがないッ！！！」
なにもかもを置き去りにして、ここを去れとッ！！？
『イザーク』
駄々をこねないの、と言わんばかりに眉間を顰めた母をただ睨みつける。
初めてこの人にこれほどの憤怒を覚える。
「やめて下さいッ！！　俺はもう子どもじゃない、あなたの人形じゃないッ！！！」
『いったい何を――』
「――――あなたは委員長のことだけ考えておけばいいッ！！！」
通信回線を無理矢理絶って、インカムを叩きつける。
そしてコンソールに上半身を預ける。
握りしめた拳が白く染まる。
「……ッ」

だが自分は軍人だ、どれだけ不服だとしても従わざるをえない。

不意に背後から宥めるような静かな声がした。

「軍人はただひたすら黙って上の言うことに従うものだぞ、イザーク・ジュール」

息を呑む。

「……ウィラード教官」

聞かれていた、大声だったから聞こえていたのかもしれない……気恥ずかしさで顔が上げられない、振り返ることができない。

「しかしッ！！」

「それがイヤなら軍服を脱げ。現状を変えたいと思うなら政治家を目指すことだ、それしか他に方法はない」

この人はいつだって自分に現実を突きつけてくる。

ただ事実だから反論のしようがない。

「この戦いが終わったら」

イザークは拳に食い込んで白く染まった指を一本一本広げる。

「……そうします」

「我々は与えられた任務をただ唯々諾々と果たす。だが次に守るべきは自分の命だ。……とにかく生き延びて、政治家となって逝った連中の荷物を背負え。お前にならできるだろう」

教官の言葉は、相も変わらず強く響いてくる。

この人もまた、逝った戦友たち亡き教え子たちを悼んでいるひとりなのだろう。

厳しくはあったが誰よりも情が深くて、だからこそ自分たちはその教えに耳を傾けた。

「――ウィラード教官、次こそ絶対あなたの隊に入れて下さい」

絞り出すような声に、ポン、と背中に大きな手が触れた。

「残念だがそれはできん。……お前は次の異動で隊長になるだろうから。それから私はもう教官でもなければ作戦司令でもないよ」

今感じているその悔しさを忘れるな、と永遠の教官は言った。

＊＊＊＊＊

背中を押すいくつもの手を感じた。

そうそう――ほら、お帰りはあっちあっち。

最後までお楽しみってやつ？

も、ちょっと気張ろうぜ、できるよな。

聞き覚えのある声ばかりが通り過ぎる。

連中にヨロシク――

見守ってるから！

たくさんの声、声、声。

時間の流れの中で、どこかに置き去りにしてきてしまった大事な戦友たち。

ほら行けって。

とん、と背中を軽く押されて。
とぼとぼと一歩二歩進んで――
でも私、やっぱりそっちがいいな、と足をとめて振り返ろうとして、
やわらかいものに頭を抱かれた。

振り返らないで。

わたしがあなたをもう一度送り出しましょう――わたし
のかわいい子。

頬がやわらかい頬に触れる、懐かしい感触。
ほんのりと優しい薔薇の香りがした。
思わず目を閉じる。

ずっと探していた、……あなたはここにいた。

命を慈しんで、命の巡りを大事に守って、
宇宙で大地を育てながら、地球の自然をこよなく愛していた、私の
最愛のひと。

＊＊＊＊＊

不意に鼻をつくような消毒液の匂いがした。
待合室前の長椅子に凭れていたイザークはふと浅い眠りから目を覚ます。
「やれやれ……」
傍らに座ったタッド・エルスマンは手術着のまま、煙草に火をつけた。
手術は終わったのだろうか。
「思ったより状態がよかった。脳に深刻なダメージが及ばなかったことは本当に僥倖。君の迅速な措置のおかげだな」
「いえ」
イザークは首を振る。
どこかで嗅いだ匂いだ。
しばらくして、あのクソ馬鹿ディアッカが士官学校でよく吸っていた銘柄か、とようやく思い出す。
「あとは天のみぞ知る、――そして彼女の意志と向こう側のひとたちの気持ち次第かな」
「……向こう側？」
「そりゃもう。天国さ」
エルスマンはウィンクした。
第一線の学者たちというものは、法則の向こうに神を見いだす敬虔なるロマンチストだ。
だがこの博士の場合、天国などと口走っても皮肉か下手な冗談にしか聞こえない――それはディアッカに似た横顔のせいだろうか。
肌の色髪の色こそ違うが、たぶん歳を重ねたアイツが髪を伸ばしたらこんな印象になるだろう、とイザークは懐かしくすら思う。
エルスマンは言葉を繋ぐ。
「ただ仮に助かったとしても元通りとはいかんよ。少なくとも免疫

抑制ナノマシンは一生手放せないだろう。　あるいは古いＥ－０１胚との不適合によって全身副作用が出るかもしれない。こればかりはなんとも言えないな、今後を見守るしかない」
イザークは視線を落とす。
たとえそうでも、生きていてくれさえすれば、それだけでいい――

「エルスマン博士。ディアッカのことは……」
バスターの消息は未だ不明、周辺海域にも機体は見当たらない。
「心配はしてないよ」
だから君が気を病むことはない、とポン、と肩を叩かれてイザークは横を見る。
タッド・エルスマンは紫煙の流れる先を見送っていた。
「アイツにはどんなことをしても生き延びろ、というのを幼稚舎の頃から叩き込んである。どうせどこかで生きてるだろうし、それだけの術と強さは持ちあわせているはずだ」
「……信頼ですか」
疎遠になって久しいとは聞いていたが、言葉の端からは息子に寄せる全幅の信頼が確かに感じられた。
自分たち母子にはない、羨ましい絆だ。
「アイツにはさぞかし恨まれているだろうと思うよ。でも親ってのはね……いつだって黙って子どもが立ち上がるのを待つしかないもんだ。そして巣立ちの時がきたらただ見送る、それでいいんだと私は思っているよ」
その言葉を、ディアッカに聞かせてやりたい――

俺って放置っ子で愛されてないからさー。
だからついつい愛を求めちゃうのよね。

イザークは内心で、金髪褐色の悪友に悪態をつく。
とことん斜に構えやがって――お前はいったいどこを見てたんだ、クソ馬鹿。

＊＊＊＊＊

やわらかい声が告げる。

あなたの色は、この世界の色。

深い深い蒼の虚空のただなか、眼下に緑の星が見えた。
ありとあらゆる星の光を斥けて、ただ眩い地球光だけが全てを圧倒する。
――宇宙から降り注ぐ星の光はすべて重力に引かれて、地球へと向かう。
万物の命の躍動と圧倒的な存在感。

――行きなさい、そして生きなさい。

そして

わたしたちの命と希望とをコーディネイトするの、

それがあなた。

押しだそうとする力、引きつけようとする力。
今、その微妙な境界線の真上に自分はいた。
そこを踏みこえるのを待つように、ただ深々とした静寂だけが降り積もる。

ふと訊ねる。
ねえ、聞こえる？

――聞こえるよ。

どこかにいる魂のかたわれが答えて、問い返してきた。

君は戻りたい？

少し考える。
どうしよう？

辛かったよね、苦しかったよね――それでも戻る？

しばし考えあぐねて、
私、あんまり深く考えるの好きじゃないんだった、と気付いて、

かぼそい糸をたぐりよせてひっぱる――その先に彼はいる。

いや？

ううん。君と一緒に。

だって僕ら、半分（ハーフソウル）この魂だもの。

鏡映しでさかさまの自分たち、あなたはもうひとりの私。

君も僕も呼ばれてる。

でもまた離れちゃうね。

ううん、またいつかどこかで、きっと必ず繋がれる。

そして踏み越える。

見計らったようにぬくもりが離れた。

浮遊感が伝わってきた――それは、あの地球降下の時によく似ていた。

行きなさい、こどもたち。

Ｍｙ　ｓｗｅｅｔ　Ｆａｌｌｅｎ　Ａｎｇｅｌｓ，

そしてあの人に伝えて――

Ｐｌｅａｓｅ　ｔｅｌｌ　ａｌｌ　ｏｆ　ｔｈｅｍ　ｉｎ　ａｌｌ　ｂａｔｔｌｅｆｉｅｌｄｓ

今でもあなたを愛していると。

Ｗｅ’ｒｅ　ｗａｉｔｉｎｇ　ｆｏｒ　ｙｏｕ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｆｉｅｌｄ　ｏｆ　ｈｏｐｅ.

私たちの上に降り積もるのは想いと言葉。

どんなに離れても……私たちは、またきっと出会える。

＊＊＊＊＊

Ｃ．Ｅ．７１．４．２．――東部オーストラリア標準時００：００。カーペンタリア司令部大モニターが切り替わり、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．本国での最高評議会議長選挙の結果を知らしめる速報が映し出された。

パトリック・ザラ選出。

忙しく動き回っていたオペレーターたちがしばし手をとめて、場がざわめく。

「まぁ当然の結果だろうな」
「ますます忙しくなるぞ」
声、声、声。
広大な司令部エリアを一望に見渡せる2階の欄干から、イザークはぼんやりとそれを眺めていた。
オペレーション・スピットブレイクは可決され、全評議会において承認されるだろう。
「……俺らも出撃なんだろうなぁ、イザーク」
傍らに立つコートニー・ヒエロニムスが欄干にもたれて、湯気立つマグカップのコーヒーに口をつける。
「あれからアスランの様子はどうなんだよ？」
「まだ目覚めん」
イザークは欄干に頬杖をついて、ひとつ嘆息する。
見守られながら無菌室に眠る彼女は、いまだ微動だにしない。
コートニーはまたＣＩＣに目を向けて、少し声を低めた。
「アスランまであんなことになるなんて、誰も思わなかったろ？
……それだけ強かったってことだよな、あのストライクってヤツ。
ラスティやニコル達がアイツのせいで死んだって聞いた時、俺マジでショックだった」
それはきっとコートニーだけではないだろう。
各地に散った同期たちは、多分それぞれにその報せを聞いて驚いたに違いないのだ。
ラスティ、ミゲル、オロール、マシュー、ニコル。
ヤツらは皆優れたＭＳパイロットだった、とイザークは今更に思い返して胸の痛みを覚える。
そしてそのストライクのパイロットは、やはり生と死のギリギリのところにいると、あのオーブの少女が一報を寄越してきていた。
今となってはただひたすらに憎しみを向けることもできない——何故俺たちは、同胞同士で撃ち合わねばならなかった？

「……ディアッカはきっとどっかで生きてるさ。もしかしたらそこらの女に匿われてヒモでもやってるんじゃない？」
ディアッカとは不仲であったはずのコートニーのさりげない慰めに、ふっとイザークは口許を笑わせた。
「ああ、あの馬鹿のことだからありえるな」
もし鹵獲されていたとして捕虜交換となれば、真っ先に自分に連絡が来るだろう。
今日ここを発ったエルスマン博士は本国に帰り際「あまり君も背負いすぎるな」と気遣ってはくれたが、そういうわけにはいかない。
そして背中を向けた時、コートニーの言葉が追ってきた。
「なあイザーク。お前ちょっと変わったな」
――そうかもしれない。刻々と自分を取り巻く状況が変わって、否が応にも自分も変わらざるを得なくなっていく。
そして俺が変わったというのなら、きっと一番の理由はアイツだ。

イザークは賑やかな司令部を後にする。

人気のない廊下から窓の外を眺めやれば、夜間にも関わらず輸送機の離着陸が盛んに行われている。おそらくこれからますます増えるだろう。
このカーペンタリアはオペレーション・スピットブレイクの中枢基地となる。
オペレーション・スピットブレイク、地球連合軍が擁する最後の宇宙港パナマのマスドライバー“ボルタ・パナマ”の占拠作戦。
成功すれば連合の宇宙と地上の戦力を分断し、ナチュラルの軍隊を地上に封じ込めることが可能になるだろう。
そしてこの作戦実行の為の立案で中心となっているのはクルーゼ隊長だとも聞く。
だがクルーゼ隊に暫定復帰した自分はといえば、帰投してからとい

うもの手持ち無沙汰――司令からは「クルーゼの指示に従え」と命じられ、そしてクルーゼ隊長からは待機命令以外の指令が何もない。おそらく休暇もままならなかった自分に、骨休みをしろというありがたい気遣いなのだろう。

だが今はかえってそれが辛い。

余計な雑念ばかりが思考を邪魔する、そのせいで規定訓練にも身が入らない。

さりとて宿舎で寝ている気分でもない。

通りがかったレクリエーションルームのＴＶ前には、深夜にかかろうというのに人だかりができていた。

最高評議会ビル前広場で皆の拍手と歓声を一身に浴びてそれに応えるパトリック・ザラ議長、そしてその背後に母エザリアの姿を見出し、イザークは足を止める。

母上、とちくりと胸が痛む。

もうお諦めなさい。

一度はそう命じられた、だが自分はもう引き返せない、引き返すつもりもない。

そしてそのまま医療棟へと足を向ける。

＊＊＊＊＊

収束する意識。

ふと瞼を押し上げる。

ぼんやりとした視界で幾度かの瞬きのあと。
目の端から涙がこぼれ落ちるのを感じた。
熱い。

まだ自分は生きていていいらしい、と思いながらアスランは首を少し傾けた。

ここは、どこだろう？

まだ焦点が定まらない。
それでも闇に滲む茜色の光の中でうっすらと、傍らの椅子に腰掛けて、かすかにうつむいている人の姿が見えた。
輪郭は定かではなかったが、その白い頬を伝うのは、綺麗な涙だと思った。
さらにひとまばたき、ふたまばたき。
そしてようやく側にいるのが誰かを知る。

……今はじめてあなたの姿がクリアに見える。

あなたはただ、あなたのままでずっとそこにいたのに。
——私には全然見えていなかった。

15：P.L.A.N.T.，J.O.S.H.－A.あるいはアカツキ島

the Pillars？

15：P.L.A.N.T.，J.O.S.H.－A.あるいはアカツキ島

アスランはまたひとまばたきする。
傍らに座す人の、宵明けのオレンジに照らされた眩い髪と、その姿の輪郭にしばらく見惚れていた。
「ここは、……どこ？」
久しく使っていなかったらしい声帯では、声がかすれてしまう。
それでもハッとしたようにイザークが顔を上げた。
「――カーペンタリアだ」
「そう」
アスランは微かに頷く。
懐かしい地名だ、オーストラリアの、Z.A.F.T.軍中枢基地。
記憶すらぼんやりして明瞭ではないが、いつのまにか運ばれたらしい――
考えるにも、今はただ目を開けていることさえ辛い。
さらにひとまばたき、ふたまばたきする。

すべてがおぼろげ、これは夢の続き？

そう思えば、夕方にひとり目覚めた時にも似た寂寞感が過ぎる。
「夢を、見てた」
呟きに彼が答えた。
「夢？」
「懐かしいひとたちの」
ともすれば意識が沈みそうになる。
アスランは投げ出していた左手をわずかに動かして、鈍いながらも自由が利くことを確かめながら、ゆっくりと手を動かした。
「イザーク。手をかして」
やがて差し出された大きな手をようやくに握れば、その熱が伝わっ

てきた。
そのあたたかさに寂しさがかき消えて、アスランはふと笑みを形作る。

私はここにいる。

微かに体を傾け、その手を顔に寄せる。
「……ごめんね。なんだか、遠回りしちゃった」
この言葉が聞こえていればいい。
「聴かせて、あなたのこと。……どんなことでもいいから、ありったけ」
そして自分もまた話さなければならない、いくら大変でも思いは言葉にして伝えていかなければならない。
それしか他にわかりあう方法はない。
眠さに負けて、瞼を閉じる。
「いくらでも」
聞こえていたらしい、すぐ近くで声がした。

……よかった。

安堵して気が抜ける。
頬に触れるぬくもりを感じた途端、眠りの波にさらわれる感覚に見舞われた。

＊＊＊＊＊

娘が意識を取り戻した、という一報は、議長就任会見の直後にもたらされた。

ひとつ頷いたパトリック・ザラは目元を押さえて踵を返し、白い議長服の裾を翻すとフラッシュライトの瞬く人垣を外れた。
「パトリック」
傍らにいたエザリア・ジュールはその姿を目で追う。
「後は頼む、最高評議会招集まで少し寝る」
「……コンシーラーで塗り直すのを忘れぬよう」
目の下の隈が隠し切れていない。
「わかっている」
灰色の髪をざわりと掻き上げて彼が通り過ぎる。
「議長閣下」
追い縋る秘書官たちに対し、パトリックは「来るな」とうるさそうに背で手を振ると、ひとり国防省の方角へと消えた。
ここ数日眠れもしなかったろうに人前で憔悴した姿を見せないのはさすがだ、その気力の摩耗は相当なものがあろう、とエザリアはただ見送る。

だがそれも統べる者の当然の義務――民衆は揺るぎなき強者をこそ愛する、例えそれが創られた虚像であったとしてもだ。

「今夜の夜会はさぞかし華やかになりましょうね」
何も知らない取り巻きの議員たちが口々に賑やかす。
「これでスピットブレイクで一気にケリをつけて、戦も早々に始末がつこうというもの」
「ああまことめでたい限り！」
それらに一瞥を投げかけて、
「あとの全てのオペレーションは私に回せ、こちらで処理する」とエザリアは指示を出して書類を手にとる。
「行くぞ」
事務官たちを従えて場を後にする。

……親として子を憂う気持ちは当然に共感できる、ただあの娘は少々厄介にすぎた。
あまりにもその母親に似すぎていて、ただひたすらに彼の傷を抉るばかりだ――たとえ側にいたとしても、遠く地球上にいたとしても。

側近たちが指示を仰いでいつものように壁を作る。
「エザリアさま」
火星からの鉱物の搬入の報告を受けて、エザリアは歩きながら書類に承認のサインをする。
「オーソンの指示に従って量産に入れ、そう時間はない」
「関連してＸ００９の件はいかがいたしますか？　中断していたデータ移植は……」
「続行させろ、あとはアマルフィに一任する」
これもまた端的にエザリアは命じる。
「乗り手が目覚めたのであれば、遠からず配備に回すことになろう」
ただそこに存在するだけで戦略兵器には意義がある。
だがやはり採算度外視オンリーワン生産の最高級機としての性能は見たくもある――
実際ＭＳとしての利用価値は未知数とはいえ、マティウスで用意させたＸ００９の装備も全てあの娘に特化されている。
それがムダにならなかった、という点では僥倖の一言に尽きるであろう。

＞アスラン・ザラ＜。
全ては予想外の方向への開眼だった。
かつてパトリックは同胞の未来を己が子に賭け、当時最高の叡知を以て進められていた次世代培養実験のプロトタイプに自分と妻との受精卵を差し出した。
だがそれも実験を一手に取り仕切っていたユーレン・ヒビキの非業の死によって途絶え、それを受け継げるだけの知識と技量もつタッ

ド・エルスマンはパトリックの次世代路線に猛反対していたがために、そのまま研究の凍結が続いていた。
だがあの偏屈者は再びＥ－０１の封印を解いた――あるいはあの娘の上に何らかの可能性を見いだしたのかも知れない。
帰ってくるなりあの男は例の人を食ったような口調で言った。

子どもたちをそうそう縛ってやりなさんな。
我々にもそういう時代があったじゃないか、
それで今ここにいるんだから。

知った口を――まったくあの男ときたら本当に昔から変わらない！
自分にひどくよく似た性質（タチ）である息子の反抗を思い出して、髪をかきあげながらエザリアは形のよい眉を潜める。
理由など明白だった、結局あの娘から離れられないといったところか。
あの娘がＥ－０１被験体で危うい均衡の上にあることは迅うに知っていたし、あの母親によく似た面立ちが癪に障ったし、なにより自分ともどもあの男の血筋に縛られることもなかろう、と息子に逃げ道を用意してやったつもりだった。
それでも結局囚われるのはなんたる因果か？
計らずも自分たちは螺旋を繰り返す、忌々しいほどに。
情報局から提示された＞クライン派反戦集会＜の報告に目を通して、思わず嘆きがエザリアの口をついて出る。
「まったくどれもこれも思い通りにならぬわ！」

あなたは委員長のことだけ考えておけばいいッ！！！

自分は母である前に女であったつもりなどついぞない、だがその隠しきれない匂いをあの繊細で敏感な我が子は嗅ぎつけていた。かといって男を振り切ることもできなかった。地球にいる頃から共闘してきた、夫を切り捨ててもなお選んだ唯一無二の戦友でもある。そして自分は、彼の揺るぎなさに望むP．L．A．N．T．の未来への道しるべを見出していた。

我々はただ前に進まねばならぬというのに、彼の足を絡め取るものがなお厳然として存在する。

……お前はパトリックを支えきれなかったではないか、レノア・ジブリール。

だからこの私がその役割を引き受けてやろう、と言っているのに。

お前はいつまでそこにいるつもりだ？

＊＊＊＊＊

Amazing grace! how sweet the sound.
That sav'd a wretch like me!
I once was lost, but now am found,

Ｗａｓ　ｂｌｉｎｄ，　ｂｕｔ　ｎｏｗ　Ｉ　ｓｅｅ．

理事室内大スクリーンに分割された画面に、次々と各地のニュースが飛び込んでくる。
今はどこも昨晩のＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．最高評議会選挙の結果とその後のパトリック・ザラの勝利宣言とを流し続けていた。
「まあ他にいないよね」
大スクリーン前、黒檀の重厚なデスクで頬杖をついて顎を支えながら、ムルタ・アズラエルはにんまりと笑んだ。
「てことは来るかな、彼ら」
「フラガが言ってることがフェイクでないなら、期待してもいいだろうが」
机に腰を掛けて同じくスクリーンを眺めていたラリー・マクウィリアムズが腕を組む。
「ならさ、もうそろそろ終わりにしてくれたまえな、マクウィリアムズ閣下」
連合の若き将官は呆れはてたように見おろした。
「うまい汁はもう吸い尽くしたって？」
「というかね、僕もいい加減バカンスに行きたいんだよね……ウチ的に稼ぎ時は嬉しいんだけど、ここ１年ずっとじゃ戦時経済でもう世界の屋台骨がガタガタでしょ。　人間どっかで休まなくちゃ潰れちゃうんだけど、このまんまじゃ後始末が厄介なことになるってね」
サンプルを再び飲みながら、「さすがに胃が限界だな」とムルタはそのラベルを眺める。
γ－グリフェプタン・マイルドプラス。
「ならもっと早く首を突っ込めばよかったろうに。なんで放置してた？」
「様子見してたんだよ。彼らが何か企んでるなら、まあそれを見てみるのも乙かなって」

「どういうことだ？」
怪訝なマクウィリアムズに対して大仰に肩をすくめ、ムルタは含んで笑って指を組んだ。
「でもまあ、もういいかげん終戦してもらわなきゃ。君らだけに任せておくとそのまんまエラいことになるでしょ？　僕ぁ老人がたに付き合ってるほど暇じゃないんだ、連中チェスやらせても時間のかかることかかること」
「ならせっかくのバカンスの合間に、月にまします我らが猊下（パパ）のところに顔を出してやるんだね。ｔｈｅ　Ｐｉｌｌａｒｓはもう君んとこくらいしかまともに残ってないんだから」
「はン、彼はジブリールのがよっぽどお気に入りだよ」
ラリー・マクウィリアムズは先般のユーラシア勢の狼藉を思い出したのか、ひどく不快げに鼻の上に皺を寄せた。
「セドリックはジブリールったって所詮傍系さ、だから本土にも帰れずロゴスにも軽んじられてあんなに躍起になる」
やれやれ――とムルタは黒革の椅子に埋もれた。
「僕ぁその血統主義の綿々たるしがらみってやつがホント嫌いでさァ……宇宙に上がった連中がたまに羨ましくなる、って昔ウチのオヤジも言ってたけど全く同感だね」
例えば彼みたいにね、とそのままムルタはＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．最高評議会議長の勝利宣言の光景を眺める。
「ったくウチのオヤジによーく似てるよ、ああイヤだイヤだ」

Ｔｈｅ　Ｌｏｒｄ　ｈａｓ　ｐｒｏｍｉｓ，ｄ　ｇｏｏｄ　ｔｏ　ｍｅ，
Ｈｉｓ　ｗｏｒｄ　ｍｙ　ｈｏｐｅ　ｓｅｃｕｒｅｓ；
Ｈｅ　ｗｉｌｌ　ｍｙ　ｓｈｉｅｌｄ　ａｎｄ　ｐｏｒｔｉｏｎ　ｂｅ，
Ａｓ　ｌｏｎｇ　ａｓ　ｌｉｆｅ　ｅｎｄｕｒｅｓ．

「で、あれはどうするんだ？　またえらくゴージャスな小鳥が向こうで囀っているようだが」
途方に暮れたようなマクウィリアムズの精悍な横顔を、ムルタは悪戯めいて笑んだ。
「君んとこに差し上げてもいいな、ただアルザッヘル基地建設の入札でうちの新興系に便宜図ってくれるならね」
「それはいけるだろう、君の物量攻勢に逆らえる清廉潔白なるお偉方が今時いるとは思えんし――ただそれだけの価値があるかね、あの小娘に？」
「使いようさ。例えば囚われのお姫さまを、そこの兵士たちが総力挙げて助けにくるなんて構図、結構ドラマチックでしょ。――うん、こりゃあオペラに出来るよ？　上演するならウィーンのオペラ座だな」
「悪趣味な。一つ目鬼のところはどうする？」
「そりゃあ、……このＡｍａｚｉｎｇ　ｇｒａｃｅでも流しとけばいいんじゃないかな」
「おいおいイヤな演出家だな！」
まあ相応しいかもしれんが、とマクウィリアムズは腕組みを解いて脚を組み替えた。
「せめてロマンチストといってくれたまえな」
ムルタはスクリーン電源を切ると席を立った。
「どこへ行く？　プリンシパリティ見物に行くんじゃなかったのか」
ドアに手をかけた彼は肩越しに振り返って碧い目を細める――
「ガリアーノの担当者が来てるんだ、やっぱり一流の役者ってのはきちんと装わなきゃダメダメでしょ？」
「この伊達男め」
「トップの見た目ってやつはそれこそチカラなんだよ、ラリー」
付き合いきれないな、とロゴスの同期は首を振った。

ラクスは口すざむ――

The earth shall soon dissolve like snow,
The sun forbear to shine;
But God, who call'd me here below,
Will be forever mine.

◆◆◆◆

ちょうど歌が終わった頃、ムルタ・アズラエルが姿を見せた。
「で、どう？　ガリアーノのほうは」
「不思議な装いですわね」
とりまく担当者たちの手で、白いキモノドレスの上に“陣羽織”なるものを着せ付けられながら、おっとりとラクスは笑む。
「わたくし、ワンピースドレスしか着たことがありませんのよ」
「ガラバッジョはもちろんイイ。だがこれからのブームは絶対ガリアーノだよ！」
腕組みで仁王立ちのムルタが断じた。
「西暦から長年培ってきたジャポニズムがたまらなくいいんだ、あそこは」
そう言って彼はまたご満悦顔でとっくりと上から下を眺め回した。
「悪くないね。そもそも着物って結構調整が利くから体型を問わないんだよ」

そういえば幼なじみがひどく極東の＞日本＜びいきで、同じようなことを言っていたことをラクスは思い出す。
――彼も確かアスラン・ザラと同じ部隊に回されていたはずだが、今どこで何をしているのだろう？
「さっさと終わらせてプリンシパリティね、いろいろ見たいものがあるんだ」
プリンシパリティ（権天使）は、たしかアークエンジェルの後継艦だったはず、とラクスは思い出す。
「わたくしが見てもよいものですの？」
「そりゃあね。人生はいつだってお勉強なんだよ、お嬢ちゃん。見て聞いて考える、これが基本さ」
この人は私に一体何を教えようとしているのだろう――と髪を結い上げられながらラクスは首を捻った。

基地内をジープが走る。
圧巻の風景だ。
地下の大深度だというのに、高層ビルが摩天楼のごとく居並ぶ。どこを見ても大勢の人間たちが働き、盛況を見せて行き交う。ひとつの工業要塞といってよいかもしれない――きっとP．L．A．N．T．一基に匹敵するだけの大きさはある、とラクスは思う。
「ここにはいろんなものがありますのね」
「ひとつの国ができる規模だよ。連邦だけじゃなくて旧大陸からも集まるね。財界官界学会マスコミ……奴らは利権が大好きな連中だからさ、こぞって来たがるよ」
自慢げにムルタ・アズラエルは横顔で笑む。
「政治家の方々はどうでしょう？」
「例に漏れないんだけど、政治家連中はそれぞれの本国でいろいろしてもらわなきゃダメでしょ。こんな戦時中なんだからさァ」
……そういえばワシントンD．C．に参集していたあの連合加盟国

の政治家たちは一体どうなったのだろう？
ラクスの思いを読んだように、前方を見据えたままにムルタが応じた。
「――リスクは分散しなきゃね。それができなかったのはホント脇が甘かったとしかいいようがない」
だからアーヴァインみたいなのが連邦大統領になっちゃうんだ、と彼はあくまで偉そうだ。
「大統領すらあなたの駒ですの？」
碧の目がちらと動いた。
「まさか。ただたんまり献金もらってる以上は、そりゃ僕ら業界団体に有利な取り計らいをするのが筋ってもんでしょ、イヤなら受け取らなきゃいいんだしね――もっとも、そんな根性と耐久性持ってる連中なんて今日びどこ探してもないんだけどさ」
ラクスは首を振る。
「政治家とカネの問題は切り離せませんのね」
「カネはチカラさ、これはもう昔からの揺るがぬ事実。そりゃ清廉潔白な政治家もいたにはいたよ？　でもこの史上最悪の大不況の前にはどんな理念もふっ飛ぶ」
「……戦争のせいでしょうか」
「というか直接的な原因はエイプリールフール・クライシスだね、ちょうど1年前の」
ホント、とんだ4月バカさ！　と髪をなびかせながらムルタは言う。
父シーゲル・クラインの行為をてひどく責められているような気がして、ラクスもまたふわふわと舞うピンクの髪を手で押さえながら表情を曇らせた。
核エネルギーを地球から奪った、それはただこれ以上大量虐殺を行わせないが為の選択だった。
その裏の面は、情報統制されているＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．ではまず報道されない――地球では弱き人々から次々にその命を奪われてい

き、それがなお現在進行形だ。
途方もない悲劇の源にサインしたことを父はひどく嘆き、側で見ていてなおその悲しみは日々いやますようにすら思えた。
そして父は救いと贖罪をS・E・E・D・に求めた。

ニュートロンジャマーキャンセラーの存在を、お前も知っておくのだよ。
あるいは交渉に使えるかもしれん。

果たしてこの人にそれを告げてよいものか、とラクスは判じかねる。自分には見識が足りない、という自覚だけはあったからとにかくも躊躇する。
「まあ社会の再構築ってのを喜んでる連中もいるけどね。莫大な資本でもってシステムを作り直しちゃおうって。しっかし厄介な役割押し付けられちゃったなァ……その点では僕ぁシーゲル・クラインを恨む資格があると思うんだ」
「富による社会の再構築。……それが現実の世界のありようでしょうか？」
「理想は大事だけど、キレイなコトバだけじゃ世界は回らないんだよ。どっかで誰かが汚れなくちゃ」
君らで言うなら、シーゲル・クラインとパトリック・ザラの関係かな？　とムルタは笑む。
「で、その共闘関係を崩したかった連中はたくさんいる。地上だけじゃなくてP・L・A・N・T・にも月にもね……今ちょうどいいタイミングだよねェ？」
含んで笑むその横顔を眺めながら、イヤな予感がする、とラクスは眉間を顰める。

一体何が行われようとしているのだろう？

その合間にもジープは地上の建造区へと疾駆する。
オーロラで揺らぐ白夜のただ中にもひときわ目立つ白い戦艦が停留されていて、すでにして豆粒のような整備員たちがとりついていた。
「アークエンジェルそのままですわ」
ラクスは透かし見る。
「メタリックグレーもいいけどホワイトパールも悪くないなァ」
次は何色にしようかな？　とムルタは中腰になって身を乗り出した。
「お決めになるのはあなたですのね」
「そりゃもう。軍人さんたちの感性にまかせておくと、戦闘機みたいに妙な痛絵で染められちゃうでしょ。アレって僕的にはちょっと見るに耐えないんだよねェ」
とことんこの人はこだわりたいらしい。

＊＊＊＊＊

潮風がふわふわの緑色のくせっ毛を揺らして流れていく。
海沿いの崖の上から、暁色に染まる空と海との境界線を眺めていたが、やがてぐすん、とひとつニコルは鼻を鳴らした。
「泣くくらい痛いんなら寝とけよ！　ボロボロなんだから！」
不意にかけられた声にニコルは振り返る。
朝闇の海から流れ込む靄の向こうに、バンダナを巻いてリュックを背にした青年が立ってこちらに歩いてきていた。
「あ……いえ」
ニコルは頬を拭った。
それは体中痛む。
ベッドから起き上がって部屋を出るのも一苦労した。教会と思しき

建物を出て、この窓辺から見えた庭に歩いてくるだけでも一仕事だった。
でもそれ以上に心が騒いだ――

「地球の空ってすごいなって……一瞬でも同じ色がないんです」
ニコルはまた目をその広大な風景に転じる。
「夜の蒼、藍、紺、から朝の緑、碧、浅葱、浅黄、昼の黄。それがやがて夕方の茜、紅、朱、赤紫、青紫へどんどん移り変わっていくから」
それが白いベール越しにあまりにも眩くて、ひどく心に染みた。
こんな風景、P・L・A・N・T・にも宇宙にもない。

青年は「なんかよくわかんねーけど空見て泣けるなんて、ゲイジュツカだな」と言った。
侮られてる？　とニコルは怪訝に思って見返したが、相手はごくごく真面目な顔だ。
おそらくこの人のそのままの他意なき感想なのだろう。
「空は神様のキャンバスってどっかの偉い人が言ってたけどよ、きっとそういうことなんだろうな」
俺だって地球の風景にはたまに感動しちゃうし、とその男は背負ったリュックを下ろした。
「で、その義手どうだよ？　俺のデビュー作なんだけど」
「あ……あなたが。ありがとうございます」
ぎこちなくはあるが、いずれこれも慣れるだろう――適応力だけは自信がある。
でも最初に手がけた義手がこれってすごく器用な人なのだろう、エンジニアかメカニックなのだろうか。
だがその割には自由人な風体だ、とニコルは思う。
「MSには慣れてるんだけどなー。人体ってのはやっぱ未知だね。俺医者じゃないしな」

ロウ、と彼は名乗った。
宇宙から地球から駆け回るジャンク屋であるらしい。

戦闘反応を見てすぐさまお宝ゲットに行ったら、たまたまお前を拾った、とロウは言った。
もしかして、僕って死んだことにでもなってるんだろうか……とニコルはいささか心もとなく感じる。
遺体が見つからないなら、普通に考えて＞戦闘中行方不明＜扱いだ。
……あの戦いはどうなったんだろう、アスランは無事なんだろうか？
来るな、と叫んだ彼女の声を思い返せば、またひどい不安が過ぎる。
そして本国にいる父さんと母さんはどうしてるんだろう？
思いを巡らせるまでもなかった。
……間違いなく母さんは泣いてる、きっと今この瞬間にも。
思わずぐすん、とまたニコルは鼻をすする。
一方でロウは言葉を続けた。
「戦場ってのは市場に出てこないレアアイテムがごっそり出てくるいい猟場だからな。つーことで、あれくれよ」
彼が顎で指し示したのは、この教会の駐車場。
そこに止められていたトラックの荷台には、詰め込まれた鉄くずとともに鉄灰色のＭＳのパーツが見えた。
「主人守ってよく頑張ったよな、アイツ」
「……え？」
「それでまだ生きてるんだ、なら生かしてやらなきゃな。きっと整地で岩石粉砕とかの役に立つぜ！」
ブリッツが、生きている――不思議なことを言う人だ、とニコルは頬を拭いながら思う。
モノには魂が宿る、という自然崇拝的観念（アミニズム）があることは知っている。
だがＭＳにもそんな風な考えを抱いている人なんて初めて見る――
もっとも、ＭＳを愛してやまない父さんやアスランはその同類かも

しれないけれども。
「それはもう、どうぞお好きに」
名残惜しくはあるものの、どこかで平和に使われるのであればきっと＞ブ(彼)リッツ＜も喜ぶだろう。
本来決定権は自分みたいなパイロットにはない。テストタイプ扱いのＧＡＴ－Ｘシリーズの所属と権利はＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．技術部に帰するが、それをここで言ったところで何にもならないだろう。
よっしゃぁー！！とロウはひどく嬉しそうに小躍りした。
「おお、あとこのＰＤＡお前のだろ、返しとくぜ」
煤けたＳｃｉｅｎｔｉａは今となっては電源も入らない。
さすがにコックピットに置いていたから、使い物にならないだろうか。でも着任以来ずっとの相方ではあるし捨てるには惜しすぎる。
「ロウさん、これ直せます？」
「まあやってみっけど、保証はできないぜ」
中にデータは残していないはずだから、預けても大丈夫だろう。
あれでせめてカーペンタリアとでも連絡が取れればいいのに、Ｎジャマーが効いている現在となっては利用すること自体難しい、と恨めしくなる。
使えたとしてもＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．量子通信ネットワークに介入しなければならない。初期状態のＳｃｉｅｎｔｉａでその場合経なければならない認証の数々と、辿らねばならない経路を考えるだけで頭が痛い。
……とにかくもう少し歩けるようになったら、どこかで末端ポイントを探すしかないか。
それともこのあたりってすっごい辺境ぽいけど、公衆電話なんか敷設されてるんだろうか？
「ここってどこですか？」
「オーブのはしっこ。アカツキ島」
またオーブに来てしまったらしい、とことん縁がある国だ。

ともに教会に入れば、子どもたちが駆け抜けていった。
「ほらお前ら、導師がいないからって大騒ぎしてんじゃないぞー！！」
ベッドで聞こえていた声はこれなんだな、とその賑やかさにニコルは目を細める。
生命力爆発、まるで幼稚舎の頃の自分たちを見ているような気がする。
「ここのヌシが引き取って育ててるんだってさ、みんな戦災孤児」
「そうですか……」
自分たちの戦いの被害は、こんな小さい子どもたちにまで及んでいる――と思えば、また胸が苦しくなる。
きっととても辛いだろう、でも皆生き生きとしている。
それはまるで未来への希望そのものだ、といささかなり気分が慰められる。
「お帰り、ロウ！」
少女が廊下から顔を出した。
「メシ頼む、メシ。これ終わったら俺もすぐドック行くからさー」
大きな食堂に導かれて、木造りのテーブルに向かってニコルはロウの傍らに腰を下ろした。

「お前それじゃテストパイロットとか無理だよな？　ＯＳいじるのにもキーボード難しい？」
「……この右手では難しいでしょうね」
ニコルはマグカップを両手で包み込んで、さざ波たつ紅茶の水面を眺める。
ものを持つのもまだ難しい、これではとてもではないが鍵盤を叩くような繊細な動作は出来ないだろう。
「あーあ、せっかく拾ったプロなのになー」

ロウはひとしきり残念がった。
「何を試すんです？」
「プロのパイロットに任せるったらそりゃＭＳしかないだろ、ここの島にあんのさ」
アカツキ島にまでドックがあったのか、とニコルは眉間に皺を作る。
潜入で幾度となく眺めた地図を素早く思い起こす。
――しかしオノゴロにあるモルゲンレーテからはかなり離れているはずだ。
この明朗なる青年相手に言葉のやりとりなど挑んでも仕方ないだろう、とそのものズバリをニコルは訊く。
「モルゲンレーテのＭＳですか？」
返事は躊躇いない直球でやってきた。
「うんにゃ。ここの導師オリジナル」
個人？　導師って誰だ？
「なんかご本尊にするって導師は言うけど、やっぱりＭＳは動いてなんぼだろ？　金箔貼る作業の合間に組合（ギルド）と工場（ファクトリー）で持ち回ってちょこちょこと作業してるけど、何年かかるかなぁ」
「はあ、ＭＳサイズのご神像となると金箔塗装はとても大変そうですね」
と言いかけて、ニコルは顔を上げる。
なんだかくらくらする、これって脳貧血？
「――待って下さい。軍人をテストパイロットに使うようなＭＳなんて、そうそう個人が造れるようなもんじゃありませんよ！？」
いくらジャンク屋ギルドが手伝うにしたって、素体を構築するには設備、機材、経験を積んだ技術スタッフ、なによりそもそも資金がいる。
父親たち統合設計局だって各部局とさんざん調整を重ねてようやくに予算を勝ち取ってるって話だったのに、資金は一体……
「そりゃあ潤沢な地下資金だって。宗教とエロ心に国境はないよなぁー！」

「はい？」
「とくにいいよなぁアイドルプロデュース業ってヤツは気楽で！　よさげなアイドル一匹に綱つけとけば、ファンはグッズを買いあさるし、黙って座っててもファンクラブからカネが続々と入ってくる！！　これっていわゆる鵜飼い？」
「へえ……」
ファンクラブが資金源なのか、相当規模が大きいらしい。
それを維持するだけの人気者となるとさぞかし知名度があるのだろう。
「――すごい人気なんでしょうね。でも僕、地球のアイドルなんて全然知らなくって」
ニコルは首を捻る。
ナチュラルにも可愛い子はたくさんいるとは聞いた、そんな大人気ならご尊顔を拝見したくはある。
「いやあ、俺もそう知ってるわけじゃないんだけどさ。あのコって最近地球で新曲歌ってたよな、キサト？」
ロウが上半身を捻り、キサトと呼ばれたあの少女が顔を出した。
「そうそう！！　あれたまたまニュースで流れてたのあわてて録画したんだけど、やっぱりちゃんとしたＰＶで欲しいよね！！　っても本人が見つからなきゃ話しにならないかー」
「……」
ニコルはカップから目を上げる。
朗らかにキサトは海鮮鍋を持ってやってきた。
「Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の人で知らないことないと思うよ、きらめきピンクのすごいキレイな声のお姫さまだもん！！」
ニコルはブッと紅茶を吹いた。
――ラクス・クラインがここの宗教系謎ＭＳの資金源！？

＊＊＊＊＊

ディアッカは医務室ベッドに転がって、ベッドサイドにくくりつけられるゴム製の拘束具を眺めていた。
この足つきのアラスカ入港後、自分はどうやらこの艦から出されるらしい。その暫定的処置だと医師は言った。
「いいか。変なことをしたらこれで一発だぞ」
医師は机の引き出しからちらと銃を見せて、それを冷ややかに眺めていたディアッカは唇の片隅を吊り上げた。
「へえ、医者の癖にそんな真似すんの？」
さすがに我が家の非人間でもそんなことはしないだろう、多分。
「護身の為だ。いきなり暴れられたら困るからな」
全くナチュラルらしい発想だ。
こんな繋がれてる俺に一体何ができると思ってるんだか、とディアッカはベッドの上でごろりと転がった。
……アラスカで降ろされてどこか軍施設に入れられるのだろう、と想像すれば暗澹とする。
押し込められて捕虜交換、なら一番望ましい。
しかし噂に聞く尋問、拷問、あるいは銃殺……旧人類ならやりかねないではないか。全くなんだってこんな羽目になったんだか。
さてどうしたものか、と思考を巡らせているうちに眠気が襲ってきた。

しばらくして扉が開く音がして、隣の椅子に誰かが座る気配があってディアッカはふと目覚める。
自分は眠ってどれくらい時間が経ったのだろう。
「なあセンセイ、」

寝返りを打って声を掛ければ、ターコイズブルーの大きな目が視界に入った。
「あれ？」
あの廊下にいた鼻ぺちゃ少女だ、とディアッカは思い出す。
声もなく彼女は椅子から蹴り立ち、飛び跳ねるように後ずさった。
「……あ……」
声ならぬ声で首を振りながら、彼女は涙を浮かべて壁際にへばりついている、あたかも少しでも離れたいと言わんばかりに。
その怯えきった表情がひどく腹立たしい――全く俺は化け物か何か？
「ンだよそのツラは。俺が怖い？　大丈夫だよ、縛られてっから！　……つーかお前ずっと泣いてねぇ？」
押し殺した嗚咽の声だけが耳につく。
「おいおい……なんでそんなヤツが兵隊なんかやってんだよ」
Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．は人手が足りないが、連合もか？
いやまさか――
というか、そんな細腕じゃ銃だってロクに扱えないだろうに。

「ん？　それともカレシでも死んだか？」
この戦艦を追い回していたのは自分たちだ。
「……もしかしてその役立たず、俺らで殺しちゃった？」

ふっと空気が引いた。
瞬間視界に入るのは振りかざされた刃。
咄嗟に起き上がれば、枕にメスは深々と突き刺さった。
「ッ…捕虜になにしやがるんだよッ！？」
憎しみに顔を歪め、目元を真っ赤に染めた少女がそのメスを引き抜き、なおも尋常でない眼差しで睨む。

ディアッカはギョッとする。

そりゃあ女相手にさんざん悪いことはしてきた、我ながら思い返したくないくらいだ。

言い放った言葉もいろどりみどり――辛うじて許容できるのは「お前のセックスつまんねぇ」から「出来たら堕ろせば？」までだ。

挙句女たちに殺されそうになったことは幾度もある、だがこれはもはや別格の殺意だ。

「なんでトールを殺したアンタなんかが、こんなところにいるの…？」

地を這うような怨嗟の呟きが耳に届く。

「ットールがいないのにッ――――！」

……ホント口は災いの元だなオイ！！

ディアッカは自分の言葉を心底後悔しながら、その振りかざされたメスの切っ先の行方を凝視する。

コイツ、本気だ！

上半身をよじって暴れれば、少女もろともにベッドの下に転げ落ちて拘束具のゴムがピンと張り詰める。

辛うじて切っ先を逃れたものの、メスは額を掠めていて激痛が走った。

噴き出る血のぬるぬるとした感触がひどく気持ち悪い。

――――だが今ので右手の拘束が緩んだ、とディアッカは不意に気づく。

拘束を解こうと躍起に後ろ手を動かしているその最中、頬が濡れた。

ディアッカは目を見開いて、視線を転じる。

馬乗りになったその少女の涙の雫がぽたりぽたりと落ちてきていた。

メスの切っ先の向こうで、少女は瞬きもせずに自分を凝視している。

拘束を解こうとしていたことすら忘れて、呆然と眺めていた。

お前は私の敵、とか弱い少女はその眼差しで雄弁に語る。

彼女の眼差しの強さに、頬を打つ憎しみの涙の鮮やかさに、世界が極彩色を帯びる。

急速に迫る現実感が肌を粟立てる。

俺はいつだって傍観者だった。

四苦八苦している連中を眺めて、笑って楽しんできた。

――いつかは自分も渦のただなかに投げ入れられるなんて、全然思わずに。

凍り付いた時間の後で、やがて少女が唇を開いた。

「アンタの血……赤い」

「――当たり前だろ人間なんだから」

自分の血も彼女の涙も、ただひたすらに熱くて灼けそうだ。

彼女はくしゃりと表情を崩した。

「でも、……でもッ!!　トールもアンタが殺したんでしょッ!?」

「トール？」

「戦闘機に乗ってたのッ!!　スカイグラスパーッ!!」

「……俺じゃない」

重装備にすぎるバスターでは、戦闘機を振り切ることはできなかった。

撃ったのはアスランかイザークなのだろう、だがどちらにしても同じだ。

相手が自分であれば、躊躇いなく撃っていた。
「だけどお前にとっちゃ俺がやったも同然だろうな」
びくっと彼女の肩が震えた。
本来なら抱きしめて「俺がソイツの代わりに慰めてやるぜ」とか言うべき場面だが、いくらなんでも状況がマズすぎる、なにせ自分はそのカタキだ。
その矢先に乱入してくる人影、ディアッカは舌打ちする。
「ミリィッ！！」
「……サイ」
あの少年兵に少女の注意が逸れて、その最中、我に返ったディアッカはさらに右手をひねる。
ようやくに拘束のゴムが緩みするりと右手が抜け、続けざまに左手も自由になった。
上半身を起こしざま少女を突き飛ばして手元を叩き付ければ、「きゃっ！」という短い叫び声とともにメスが弾けとんだ。
起き上がってメスをキャッチすると同時に、ディアッカは少女を捕まえた。
「悪いな、女のコにこういう真似どうかと思うんだけどさぁ。お前も兵隊だろ？」
内側に刃を向けられて少女は震えている。
腕にかかる涙に多少の良心の呵責を覚えもするが、それどころではない。
血を拭ってディアッカは肩で息をする。
「――ミリィ！」
少年兵の背後、不意に姿を現したもう一人が甲高い声で叫んだ。
「何よ、コーディネイターなんてみんな死んじゃえばいいのよ！」
あの紅色の繊細な美貌の女だ。
それがいつの間にか震える手で銃口をこちらに向けて、睨めつけていた。

お前、絶対そのうち女に殺されるよ？

女で身を持ち崩すぞ、気をつけろよ。

旧友と教官の言葉がまざまざと蘇る。

……まさかこんな形で報いがくるとは思わなかった。

さすがにディアッカも焦り、ことさらにそのミリィという少女を抱き寄せてメスを突きつける。

「撃てばこの女にも当たるぞッ！！　銃をこっちに寄越せ、早くッ！！」

「フレイッ！！　銃を下ろせッ！！」

少年兵が叫ぶ。

「嫌よッ！！」

紅い少女は顔を歪めて泣いていた。

「――――コイツらよ――――パパを、キラを殺したのはッ！！」

この女もか、とディアッカは途方に暮れる。

もうオールラウンド土下座謝罪したい気分だ。

「フレイ！！　ミリィを殺すのか！？」

激しく嗚咽しながらも、やがてのろのろと紅い少女は銃を下ろし、銃は力なく指先から床に落ちた。

サイと呼ばれた少年が蹴り、床を回転しながら銃はディアッカの足元にたどり着いた。

ディアッカは躊躇いなくミリィと呼ばれた少女のみぞおちに肘鉄を

入れて担ぎ上げる。
「今どこだ、ここは！」
「アラスカだ」

――自分は遅かった、だがもうこんなことになった以上は大人しく捕虜にされているつもりもない。

「くっそォッ！！　この艦、ストライクがあるんだろッ！？」
銃のスライドを引いて初弾が薬室に入る音を確かめながらディアッカは問う。
「ストライクは、ない」
少年兵が弱々しく頭を振る。
「……お前たちが襲ってきた時、あの岩場でシグナルロストになった」
その震える声に、一瞬ディアッカは瞑目する。
とうとうアスランが仕留めたのか――アイツはどうしたろう？
「じゃ、バスターはッ！？」
「艦内に回収はされてる、だが修理されたとは聞いていない！」
動力系が修理されてなければ動かしようがない、しかもコンソールはこの自分が徹底的に壊したではないか。
ならばいっそ戦闘機でも動かすか――全くなんてムチャクチャなッ！！

「一体何の騒ぎだッ！！」
ばらばらと連合兵たちが入ってくる、ディアッカは銃口を向けてトリガーに指を掛けながら低く言った。
「どけよ。じゃないとこの女殺すぞ」
怯んだ連合兵たちを続けざまに蹴倒して、ディアッカは医務室を飛び出る。
「ミリアリアッ！」
少年兵の叫び声が背後から追ってきた。

＊＊＊＊＊

C．E．71．4．1．　P．L．A．N．T．アプリリウス標準時13：20――

足早に入室してきたアイリーン・カナーバはスクリーンの前に立ち、議員服（ローブ）を脱ぎ放つとブラウスの襟元を緩めた。

「……どういうことだ？」

カーペンタリア・ラグナロクセカンドが何故本国のマザーに攻撃を仕掛けてくる？

発動した攻性防壁の前に全て遮断こそされているが、いかんせんその莫大なトラフィック量のせいで量子通信ネットワークの20％が麻痺――このままでは、航行管制にまで影響が出かねない。

「厄介なウイルスに冒されたとしか思えませんね」

オペレーターが重い口を開く。

「新議長就任に熱烈な祝電だな。カーペンタリアのセンターを呼び出せ」

作業に備えて、彼女は栗色のウェーブがかった髪をまとめて結い上げる。

幸いにして地上のZ．A．F．T．専用線相互通信にまでの影響は及んでいないらしい、すぐさまよく見知った女の顔が映し出された。

「一体どうした、クリスティナ」

主照明の落ちたオペレーションセンターの騒然はモニター越しにも伝わってくる。

『投入されたデータの中にバックドアが仕込まれていたようです、そこから入り込まれました』

ごく単純にして、厄介な理由だ。

「隔壁は下ろしたか？　このままでは双方向過干渉で厄介なことに

なる」
『保安システムが改変されていて、今全力で修復中です』
「……威力偵察されていますね」
モニターで推移を観察していたオペレーター長のユリウスが言う。
どれだけマザーの壁が厚いかを探っているのだろう。あまり時間をかけて手の内をさらけ出すのは好ましくない。
「専用線を開放してこちらによこせ」
アイリーンは引き寄せたキーボードを左手で滑らかに叩く。
凄まじい勢いでコマンドが上へと流れていく。
『マザー接続』
『セカンドメインバンクにアクセス、シャットダウンパスワードを走査中、５桁――１０桁――１８桁、ブロックワードクリア』
『シークエンス３～８省略』
『アドミッションインターフェイスアクセスＯＫ』
『……オールシークエンスクリア』

ふっとアイリーンは口元を笑わせて、一通りの作業のあとに最後のキーを押下した。
「イけ、淫乱」

コマンド画面が反転して白く染まる。
許容領域値に収束し、エラーのレッド表示が全てがグリーンに染めかわる。
じき大モニターに映し出されていたトラフィックグラフは極端に右下方へと折れた。
『セカンド、セルフリペアに入ります』
固唾を呑んで見守っていたオペレータたちからため息が漏れた。
「それで発信源はどこだ？　そこから辿れるか」
アイリーンは目を転じる。
ただおおよそ推測はつく。

世界に量子スーパーコンピュータは数多く存在するが、ラグナロクシリーズに挑めるといったら連合のＰ１、もしくは月のＰ２の２基しか思い当たらない。

『Ｌ４メンデル経由でリティリア宙域までとしか今のところは』多段串を噛ませているのだろう、ラグナロクに入ろうとするくらいであるならまあ当然の用心ではある。

「引き続き追え。穴はどこだ」

『閉鎖ユニットにＧ．Ａ．Ｎ．Ｄ．Ａ．Ｍ．プログラムが含まれているようで、そのあたりと推察できます』

その名称には聞き覚えがある、とアイリーンは記憶をたぐり寄せる。目下Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．実験モデル部隊で利用されているＯＳの通称だ、もともとは連合で使われていたものを土台に兵士たちがアレンジして構築しているという話だったはず。

「まさか軍で組み上げたＯＳに誰かが仕込んだか？　エイプリルフールの愉快犯にしてもタチが悪いぞ」

……例えばあのバカならそういう真似はしそうだが、とまだまだ少年臭さの抜けきらない我が愛人を思い出す。

アレの書くコードは流暢でいっそ淫靡。

ただ時々戯れに＞アイリーンちょー愛してるよー抱いてー＜などといらぬ一文を挿入してくるので、いちいち潰して回るのにも苦労する。

「いえ、どうも先日奪取されたものに含まれていたようです」

オーブ・モルゲンレーテから奪取されたＯＳ情報は異色の運動プログラムを含んでおり、統合設計局がそれを拾って今現在開発中のＸシリーズの一体に転用している、という話もある。

「ならば一応技術部にも連絡しておけ、不具合が出るかもしれん」

アイリーンは背後のオペレーターに指示を出し、それから――としかめっ面で通信相手に向き直った。

「どこのバカ諜報員にそんなものの直接投入を許可した？　ラグナロクを素人に触らせるなんてそもそも管理が甘すぎる」

キツく咎められてセカンドのセンター長は不満げな色を見せた。
『いえ、それがアドミニストレータ権限で』
「ならば本部の役付きか。セッションＩＤを教えろ、その迂闊者を降格して再教育プログラムにぶちこんでやる」
フィルターも通さず精査もせずとは初歩的なミスすぎる、どこのアホだ……と秘書官相手に愚痴っている合間、背後でオペレーターがひとつ嘆息をついた。
「……ディアッカ・エルスマンですね」
「……」
言葉半ばでアイリーンはおし黙る。
地上に降りた金髪褐色のペット兼部下兼愛人兼婚約者の垂れ目ウィンクが脳裏に過ぎるのは一瞬。
「ッあの横着者ッ！　だからよく見ろといつも言ってるのにッ！」
しかもその本人ときたら作戦行動中に行方不明――とことん心配と手間を掛けさせる！！
捨てられた子犬のような目にほだされて拾ったはいいものの、いつだってあのお調子者の尻ぬぐいはこの自分だ。
もし生きて帰ったら壮絶な目に遭わせてくれる！！　などと憤慨しながら、いったんセカンドのセーフモードを起動させる。

――カーペンタリア司令部戦略室――
スピットブレイク最終案――
軍のどこかの部局で使っているプログラムに含まれているデータなのだろう、とアイリーンは見逃しかけて、ひっかかりにふと手を止める。
……今、なんとあった？

Ｆｉｎａｌ　Ｔａｒｇｅｔ：Ｊｏｉｎｔ　Ｓｕｐｒｅｍｅ　Ｈｅａｄｑｕａｒｔｅｒｓ－Ａｌａｓｋａ

――J・O・S・H・―A・・・・

バンッ！！とアイリーンはキーボードを両手で叩いた。
「ザラは――エザリアはどこだッ！！　国防省かッ！？」
「本部長！？」
「あとは勝手にやれ！！　私は連中に用があるッ！！」
「これどうするんですか！？　まだ隔壁を下ろしただけで接続が繋がったまま――」
側近のユリウスが焦ったように声を張り上げる。
「グランマを叩き起こしてアイツにやらせろッ！！」
アイリーンは議員服（ローブ）を掴むと、叫びながらブースを飛び出た。
「えッ！？　でも＞彼女＜気むずかしいですよッ！？　寝起きはとてもとても扱えたもんじゃないですッ！！」
「愛しのジョージが会いに来たと言えば飛び起きるッ！！」
指示を吐き捨ててアイリーンが慌ただしく姿を消した直後、セカンドのオペレーションセンターから再度のアラームが鳴った。

＊＊＊＊＊

……なんで思い出すんだよ俺、とディアッカは少女を担いで走りながらしみじみ思う。

俺ってば後悔しないんだよね。

そういう人が挫折するとこわいわよ。

さっきから後悔しっぱなし――我ながら迂闊すぎる人生だ！！
しかも女のコを人質に取るなんざガラじゃねぇぜ、とディアッカは内心嘆きながら、前面から襲い掛かってくる連合兵に猛然と突っ込む。
薙ぎ倒し蹴り上げれば、道を塞ぐ連合兵たちはいとも容易く倒れていき、ディアッカはその上を跳躍する。
外に向かって開放されているのは格納庫――あれか！
背後から狙撃されて、ディアッカは振り返りざま応射する。
銃撃戦の最中、額から伝う血が片目に入り、滲んで手元がぶれる。
「打ち方待てッ！！　ハウ二等兵に当たるッ！！」
硬質な女の声が聞こえた。
その隙に扉にタックルをくらわすように押し開け、空間の広がりに出る。
これが足つきの格納庫、とざっとディアッカは視線を走らせる。
メンテナンスベッドに横たわるバスターの無惨な姿も視界に入った、なるほどまだ修復されていないらしい。
いくつもの不快な金属音が木霊する。
つなぎを着た薄汚れた男たち……整備班とおぼしき面々が殺気だって銃を構えていた。
「バスターのパイロットだなッ！！」
「お前のせいで何人死んだと思ってるんだッ！？」
ディアッカはぐるりと周囲を見回す。
全方位から銃口が向けられている。
確かに自分は幾度もアークエンジェル機関部を狙った。
その攻撃による爆発で死んだ人間もいただろう、その死を悼む者もいただろう――ナチュラルも自分たちと同じ色の血を流し、同じ色

の涙を流す。
がつんと頭を殴られたような衝撃にディアッカは目を見開いた。
「ちっくしょうッ…！！」

知りたくなんかなかった――――これが鼻歌混じりにゲーム感覚で遊んできた結果だなんて！！

自分はこのナチュラルたちの“敵”であり“仇”であり“悪”、そして彼らのコーディネイターへの憎しみが全て自分の一身に集まっている。
逃げ場は、ない。
幾つもの銃口を眺めながら、俺はここで死ぬ、とそれが寂寞感とリアリティを伴って襲ってくる。
一瞬で終わればいい、今まで死んでいった戦友たちのように。
ディアッカはゆっくりと抱えていた少女を床に下ろす、少女はうっすらと目を開けた。
視界を妨げる血を腕で拭い、ディアッカはぶっきらぼうに言った。
「さっさと殺れよ」
我ながらふてぶてしく響く声。
「俺を殺して気が済むんだったらなッ！！」
「ダメッ！！」
気がついたらしい少女が上半身を起こして足に縋り絶叫する。
もつれるように、ディアッカはバランスを崩しかけた。
「殺しちゃダメッ！！」
――何故俺を庇う？
ディアッカは面食らう。

「おいやめろッ！！」
追って格納庫に駆け込んできたあの金髪の男が兵士の列に割り込んで大声を張り上げた。
「やめなさいッ！！　捕虜への暴行あるいは殺害は禁止ですッ！！」
凛然とした声が場を圧倒した。
「ラミアス艦長……ッ！」
「しかしッ！！」
「異論は認めませんッ！！　銃を下ろしなさいッ！！」
厳しく命じる声に、整備士たちがやむなく銃を下ろす。
人垣を割って駆け込んできた、艦長と呼ばれる若い女の姿にディアッカは視線を走らせた。
これが、足つきの艦長か？
「ディアッカ・エルスマンッ！！　あなた死にたいのッ！？　ここはアラスカＪ．Ｏ．Ｓ．Ｈ．－Ａ．よ、この状況で逃げられると本気で思っているのッ！？」
「アンタ俺を生かしておく気？」
ディアッカは投げやりに問う。
「あなたは、捕虜です。戦時国際法にのっとった扱いが、保障されます」
彼女は肩で息をしながら言う。
「しかし艦長ッ！！　脱走企図は銃殺も当然の措置ですッ！」
女士官の言葉を遮るようにその艦長は頭を振った。
「そうは言っても、駄目よナタル……本部からの指示はまだなの。独断でＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍パイロットを殺してはいけないわ」
この女艦長は甘い、甘すぎるくらいだ、とディアッカは思った。
あのラウ・ル・クルーゼなら即時に銃殺を決定していた――そう思った瞬間、ズキンと額の痛みが走り、眩暈がして天地が逆転した。

＊＊＊＊＊

最後に残ったマスドライバーを奪う為パナマを襲撃する、そして地球封じ込め作戦（ペレーション・ウロボロス）は完了する。

だが最終案にあったのは、手薄になっている地球連合本部を一気に叩き、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．が地球圏の支配を手にする作戦だった。

Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．防衛のための当初とは完全に道を違える、積極的作戦だ。

いつの間にアラスカＪＯＳＨ－Ａを攻めるなどという手はずを整えていたのだ！？

国防総省棟のＣＩＣ上ガラスの回廊を走りながら、アイリーン・カナーバは声を上げる。

「エザリアッ！！」

取り巻きの士官たちの狭間、紫色の軍服纏う銀髪の女が怪訝そうに振り返った。

「どうした？　アイリーン」

エザリア・ジュールの側近たちをかきわけ、アイリーン・カナーバは声を荒げて詰め寄る。

「いったいなんということをしでかそうとしてるッ！！？」

そして立て襟を掴み顔を寄せる。

「Ｊ．Ｏ．Ｓ．Ｈ．－Ａ．を手にかければ本当に取り返しがつかなくなるぞ」

「スピットブレイクは隠していたはずだが」

どこから＜覗き見＞した？　と乱れかかる銀髪の下でエザリアは眉間を顰める。

「そんなことはどうでもいいッ！！　いったいいつからこの戦いは勝利を目指すものにすりかわったのだッ！？　Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を守る為の戦いではなかったのかッ！？」

「そのふたつは矛盾すまい、守る為には早々に決着をつけねばならぬ」

エザリアはついとも表情を変えず、むしろ宥めるような口調で応じて掴む指に手を重ねる。
「もはや連合に穏健派は残っておらぬ――ならば頭を叩くのは定石であろう？」

連合側の事故――あるいは計画――により対話の門戸は閉ざされた。
オルバーニはすでにおらず、早期決着を考えるがゆえに自分はシーゲルではなくパトリックに票を投じざるを得なかった。
今さらに後悔する。
……私の裏切りの結果がこれだ！！

「だが我々はアラスカを攻めるなど承認していないぞッ！！」
「ならば議案を提出して可決させる。それで満足か」
貴族然として鷹揚にエザリアは言葉を紡ぎ、それを否定するようにアイリーンは声を大にする。
「――何故そうまで平然としていられるッ！？　ザラの娘は瀕死、アレは行方不明（ロスト）、マクスウェルもアマルフィも――次はあなたの子息の番だぞッ！？」
ことさら鋭い光を湛えたアイスブルーの眼差しが凝視する。
「子を思わぬ親があろうか。だが戦って勝たねば我々に未来はない。違うか？」
「勝たずともよいッ！！　より優位に終わらせるだけで十分なのだ、あとは我々が引き受けるッ！！」
「お前たちに何ができた？　有利な交渉を進めることができたか？　――穏健派相手にすらそれがかなわなかったがゆえに、我々が前面に出ざるを得なかったのだぞ」
静かな詰りに、エザリアの襟を掴んでいたアイリーンは、血の気が引く思いで眼前の女を凝視する。

そもそもＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．外交官である自分がその責を果たせず、みすみす開戦を迎えてしまった。
その報いだとエザリアは言う。
自分には、それに抗いうる言葉が見当たらない。
エザリアは食い込んだ指を一本一本ひきはがして、やがて背を向けた。
「不服だというのならば臨時最高評議会招集を求めろ、ただちに応じる」
置き去りに通り過ぎていく士官たちの狭間で、アイリーンは首を振る。
焦燥感のただなかで身を翻して駆け出し、眼下のＣＩＣに駆け下りるとコンソール前の通信士を押しのけ、すぐさまクライン邸をコールする。
今さらだが、しかし他に手段がない――
すぐに邸の主はその姿を見せた。
「シーゲルッ！！」
『どうしたのだアイリーン』
穏和で面長の男の表情が曇る。
「スピットブレイクの目標地点はパナマではない……アラスカだッ！！　ザラたちは一息にアラスカ本部を壊滅させる気だッ！！　――そんなことをしたら――」
月が介入してきて戦火がさらに拡大してしまう、という悲鳴に、沈痛な眼差しを向けていた先の議長はやがて口を切った。
『わかった、すぐにそちらに行く』

15：P.L.A.N.T.，J.O.S.H.－A.あるいはアカツキ島

the Pillars？

15：P.L.A.N.T.，J.O.S.H.－A.あるいはアカツキ島

カーペンタリア基地司令部棟大ミーティングルームに白服及び赤服たちを集め、ラウ・ル・クルーゼは説明を行っていた。

「……最後に付け加えがある」

滑らかなその声とともに立体パネルには北米大陸が大きく映し出され、その北端アラスカのユーコン川デルタゾーンが赤く点灯する。

「アラスカＪＯＳＨ－Ａは核の直撃にも耐えうる構造を持つと言われている。もっともご存知の通り今は核なぞ使えんがね」

パネルを取り囲む白服たちを前に、ラウ・ル・クルーゼはもっともらしく言葉を繋ぐ。

「叩くには６つのゲートからこのグランド・ホローと呼ばれる内部に侵攻するしかないが、それもまた至難の業だ」

「待て。クルーゼ、――スピットブレイクにアラスカが何の関係がある？」

怪訝そうなエルガーが顔を上げて言葉を牽制する。

「今回の作戦にアラスカは組み込まれていないだろう」

「まぁ聞け。パナマで連合軍が窮地となれば、アラスカＪＯＳＨ－Ａからの援軍が殺到することになろう。或るいは向こうに戦力を割く必要性が出てこないとも限らん」

同僚たちのどよめきにラウは苦笑いをして、密やかに付け加える。

「敵本部の情報は、万一に備えて我々が念頭に置いておかねばならん事項だよ」

嘘、嘘、嘘に織り交ぜられた寸部の真実。

一体どれが真実でどれが嘘か。

さあお前たちにわかるだろうか、聡明なるコーディネイター諸君？

ラウの操作でパネルが切り替わり、いくつとなく広大な空間を示し出す。

「これが私の入手したＪ．Ｏ．Ｓ．Ｈ．－Ａ．内部の地図だ。アラ

スカ内部はひとつの街を構成している、そして連合軍司令部はここだ、メインゲートに直結している」
ポインターで紅く指し示す場所に、皆の目は釘付けになる。
「……よくＪ．Ｏ．Ｓ．Ｈ．－Ａ．の構造を掴めたものだな、クルーゼ」
ひどく不審な色を浮かべたウィラードの目がちらと上がった。
ラウは口許を歪める。
不審、警戒、疎外、嫉妬――もはや慣れた視線と言葉の棘に心は何ら反応を示さない、むしろ常に晒されてきた身には心地よくさえある。
「いくら防御システムが発達しようとも人の口に戸は立てられんとも。情報というのはどこから漏れるかわかったものではないよ、これは我々にも言えたことだが」
ラウは笑って意味深に言い添える。
「くれぐれも相互監視は怠らないようにな、同胞諸君」

私の欺瞞すら見抜けぬ阿呆どもが！

各自にアラスカのデータを渡し、散会してまたいつものようにラウは自室へと戻る。
いつもの悪寒と不快さがぞろ頭をもたげ、そろそろ時間だと告げる。
ラウは胸元のポケットに入れていたケースから青と白のカプセルをたたき出して、３カプセルを口に投げ込んだ。
これを寄越した男の取り澄ました顔を思い出す。
まったく今頃ギルバートはオーブで嬉々としていることだろう、あの業深き思い上がりっぷりにはいつもながら反吐が出る。
命を弄り回して作り出して、まったく神の代行者にでもなったつもりか。

理性と優秀を自認する傲慢なるコーディネイターたちだが、絶対不可侵の領域がある。もはやそれは宗教のレヴェルとすら言ってよい。遺伝子の絶対性だ。
さしずめギルバートはその導師といったところか――

ヒトは真実の己を知ってこそ幸せになれると思わないかね？

遺伝子ごときが真実か？
先天的要素ごときに縛られるなど愚か、断じて私はアルダ（本体）と同じものではなく、もちろんレイも私たりえてはならぬというのに。
塩基配列を読んで、ヒトを理解したつもりになっている程度の男に、＞もうひとりの自分＜もまた縛られている。
厄介なことにテロメアの鎖は自分よりさらに強固にレイを縛っていた。

レイは君だから、やはり戦士に最適性があると思うのだが。

自分はレイをZ．A．F．T．軍になど入れるつもりはなかった。
だが親権は実質的な管理人であるギルバートが有していたし、何よりレイ本人がそれを望んだ。

俺はラウのようでありたい。

まんまと洗脳されたか。
さりとてあの狂信的な男から引きはがして生かそうと願っても、代わる延命の手段がない。
期待するならば連合のロドニアを筆頭とする生化学ラボ群の研究の深化だが、はたしてこの肉の器がどこまで持つか――

水を飲み干している最中、眼前の端末が音を立てた。
秘匿回線での通信、無造作にラウはＯＮを押す。
『ラウ・ラ・フラガ殿。ウィルシャーです』
フラガ……実に忌々しい名前だ、と仮面の下でラウは眉間に皺を寄せる。
視線を転じれば、いつもの仲介者がモニターには映し出されていた。
「どうした、失態についての愚痴かね」
カードを欲しがった月の連中に対してせっかくチカラを貸してやったものを、連中は結局有効に活用することが出来なかった。
ムルタ・アズラエルは生き延びてＪ．Ｏ．Ｓ．Ｈ－Ａ．に入り、ちらつかされた仕掛けを前に怯懦なるユーラシア幹部たちはまんまと屈服した。
挙句、月の秘蔵っ子セドリック・ジブリールは拘束……まったく詰めが甘い連中だ。
ステファン・ウィルシャーは渋い顔を見せた。
『その件はすでにリカバーの手配済みです。今回は違うお話で』
「また何か欲しいものでもあるのか」
ラウはうんざりする。
まったくあの月の古狸連中ときたらどこまでも喰いついて離れない。
『Ｘ１０３パイロット身柄拘束と』
ＧＡＴ－Ｘ１０３バスター……ディアッカ・エルスマン。
一瞬その父親のタッド・エルスマンの顔が脳裏に過ぎる、権力に靡かず飄々としたあの男には政治的利用価値はない。

――だが、他の追随を許さぬ当代一の生化学者であるのは揺るぎなき事実だ。
レイ以外のメンデル・クローン体が全てヤツのもとに集められている、となればおそらく延命研究もまたさらに進むだろう。
ふん、とひとつラウは鼻で笑った。
道は常に確保しておかねばならぬ。
「私にさせたいのは、イスラフィールが言っていたアレか。準備はできているのだろうな」
『全ては予定通りに。あとはあなたの指先ひとつです』
「よかろう、せいぜい奮闘するがいい。うまく立ち回ればレディ・ジブリールもお前たちのものだ」
ラウは滑らかに応じて電源をＯＦＦにした。

Ａｎｇｅｌ　Ｆａｌｌのその時までせいぜい思い上がれ、神の代行者たらんとする愚か者ども――
必ずや腐った世界もろともにすべて撃ち砕いてくれる。

＊＊＊＊＊

ミーティング解散後、いきなり主照明が落ちた。
予備照明がほんのりと廊下と兵士たちの頭上を照らす。
「……またか」
イザーク・ジュールは忌々しげに顔を顰める。
「計画停電の時間にはちょっと早いですね」
シホ・ハーネンフースは腕時計を見る。
「ったく！今度はなんだ！！」

「くわしいことはわかりませんけどラグナロクセカンドの調整不足とか……」
「センターの連中はたるんどるッ！！」
肩を怒らせて彼が廊下を颯爽かつ威風堂々と去っていくのをシホは見送る。
どこへ行くかなんか訊くまでもなくわかりきっていた。
「面会謝絶だっていうのに入り浸ってるのね、イザーク・ジュール。こんな夜なのに」
見送るシホの呟きを同僚のコートニーが引き取った。
「そりゃあ。ザラ隊副官だもん、ヤツ。よっぽど上官サマにお仕えしたいんじゃん？」
「ザラ隊なんて解散しちゃったのにね」
今彼はあのクルーゼ隊の副官だ。
「ま、何言ったってイザークの剣幕に勝てるヤツなんかそういないよ。あんなに必死なの、士官学校で講堂潰した時以来じゃないかな？」
「……あの人たちってば、戦場に出てちょっとは成長してるかと思ったのに、半年経ってもホント相変わらずなのね」
「どうだろう」
コートニーはファイルを手に歩き出した。
「俺らもだし、アイツらもちょっとは変わったとは思うけどね」
いろいろあったのだろうが、結局彼はいつだってあのコのことばっかり。
あの気位の高い人が、あと一息というところまで追い詰めた連合艦の追跡を放棄して、司令部に無断で直前まで戦っていたオーブに通じて、ただ一人の救命に奔走した。
そのスタンドプレイはさすがにお咎めを受けたようで、昇進や宇宙への帰還などでいろいろ揉めているらしい……ということだけは噂好きのハイネ・ヴェステンフルスから伝え聞いた。
「バカなひとたち」

そして士官学校を卒業してもう7ヶ月になる。
この間に、ラスティもマシューもオロールもいなくなったと伝え聞いた。
ニコルもディアッカも消えてしまったという。
彼女はきっともう戦えないだろう。

どんどん時間だけが過ぎて、皆が斃れて脱落していくのに、戦況は何も変わらない。
むしろ長期戦になればなるほど、増強一方の軍備は国家予算を圧迫し、物資に乏しいP・L・A・N・T・には不利になっていく。
戦えば終わると信じていたけれど、本当にそれで終わるのだろうか、この戦いは――？

「おーい、新人さんをご紹介だぜ」
もう深夜にかかろうというのにその陽気な声に、憂鬱にシホは目を転じる。
歩み来るハイネ・ヴェステンフルスの背後に、見慣れない赤服たちがいた。
「ヴェステンフルス隊長、その子たちは？」
「卒業ほやほや配属したてのひよっこたち。ウチにもらったのよ。さっき本国から降下してきたばっか」
腕組みのハイネがにんまりと笑う。
自分たちのすぐ後に士官学校に入った新人の赤服たちがさっそく派遣されてきたらしい。
「シン・アスカです」
紅い目が印象的な黒髪の少年が緊張気味に言う。
「レイ・ザ・バレルです」
金髪ストレートのキレイな髪をゆるやかに肩に流した端正な少年がゆったりと名乗る。
「ルナマリア・ホークです」

赤いショートカットのボーイッシュな少女がにっこりと笑う。
彼らの初々しい敬礼はまだ硬い。
答礼しながらシホは眉根を下げる。
ほほえましいくらいだけれど、まだ、本当に子ども子どもしている。
「設計局エネルギー担当のシホ・ハーネンフースよ」
そして一つため息。
「……シン・アスカ。襟元のホックは留めなさい」
え？　とおたおたしている少年を眺めながら、シホは泣きたくなった。

私たちどころかこんな子たちすら戦わなくてはならないほどに、P.L.A.N.T.は追い詰められているのに。

＊＊＊＊＊

システムトラブルのせいで基地はあちこちが麻痺状態、とにかくも節電が求められている。
とはいえ医療棟は非常電源が駆動しているから、大丈夫のはずだろう。
見慣れたいつものドアの前に立って、イザークはいつものぶっきらぼうな声で呼びかける。
「おいアスラン！」
……返事がない、また寝ているのだろうか。
入るぞ、と一応断りを入れてイザークは非常ロックを手動で外して入室する。
「アスラン？」
部屋は真っ暗で人の気配自体がない。

違和感にイザークは電気スイッチに指を伸ばして照明をつける。
寝ていた痕跡こそあるものの奥のベッドも無人、備え付けのユニットバスをのぞいてもその姿はない。
吹き込む夜の潮風に靡くカーテンに気付く。

無菌室はすべてハメ殺し窓だ。
開け放たれるような構造にはなっていない。

駆け寄り窓から身を乗り出して、眼下に人影がないかを確認する――いや、いかに薬のせいでぼんやりと呆けているとしてもアスランが窓を突き破って転落するとも思えない。
医療室の電子ロックは外からしか解除できない仕様になっている。
まさか。
ふっとイザークは息を呑む。
今のアイツには自分を守るだけの力もない。
慌ててベッドに足を向ける、このベッドにはまだ熱が残っている、そう時間は経っていないはずだ！
わきあがる焦燥感の只中、イザークはすぐさまベッド脇の壁面に備え付けられたパネルをたたいてモニター回線を開く。
『司令部ＣＩＣ』
オペレーターが姿を見せた。
「Ｎｏ．６１２５３０イザーク・ジュールだ。Ｎｏ．　２８００５６アスラン・ザラが医療室Ｓ－２０２から消えた、医療棟監視モニターをすぐ確認しろ」
『お待ち下さい』
すぐに返答が齎された。
『２２：２０に看護師入室記録、退室記録なし。……以降監視データ破損』
次第に険しい表情となったオペレーターが早口で伝える。
「破損だと？」

イザークの顔面から血の気が引く。
ラグナロクの混乱の隙を突かれた？
『至急チェックに入ります！』
「急げッ！」
疑念が現実のものとなったことに顔面から血の気が引く、２２：２４というなら、まだ１０分と経っていない！
ＣＩＣが騒然とする気配が伝わってきて、イザークは身を翻して部屋を飛び出る。

時ならぬコンディションレッドのサイレンが鳴り響く中、すでにして兵士たちが集まっていた本部棟前詰め所にイザークは駆け込み、無線機と機関銃とを携える。
耳にねじこんだイヤホンからは次々と情報が入ってきた。
『認証番号重複を確認。偽造カード使用と見られる』
『各ゲート即時封鎖。各所監視モニター再チェック開始』
割り込むようにシュナイバー司令の声が入った。
『彼女は連合にとって利用価値がある。拉致の可能性が高い、急げ！』

今やアスランは議長令嬢で、しかも連合最強のＭＳを討ち果たしたエースパイロットだ、連合にはこれ以上ない外交カードになる。
カードにならなければ見せしめとして公開処刑でも十分士気高揚にはなる――
だが本当にそれだけでカーペンタリアに侵入してくるのか？
一抹の過ぎる疑念。

だが周囲の騒然に、自然イザークの形相は険しくなる。
機関銃を携えて、武装した緑服の兵士たちを眼前にイザークは声を低くした。

「実行犯は捕獲、不可能なら全員射殺だ。絶対アスラン・ザラには傷をつけるな、行けッ！！」
応えとともに兵士たちが散る。
このやるせない焦燥感と後悔が自分を駆り立てる。
イザークはコンソールのキーボードを叩いてマルチモニターを出す。
医療棟から一番近いゲートは０８！
身を翻して駆け出す合間にも耳元のイヤホンから各部署からの報告が矢継ぎ早に入る。
『ラグナロクセカンドホストにハッキング痕跡あり。ゲート１０より侵入の模様。内部から手引きと見られる』
あの看護師が手引きをしたのだろう、薬でアスランに抵抗できないように処置して、拉致を！
憤りに目が眩む。
『ゲート０６異常なし』
『ゲート１２封鎖完了』
ただ焦りだけが先走る、その中で雑音交じりに通信が入った。
『看護師の遺体をゲート０９付近にて発見、射殺の模様』
「ゲート０９ッ！？」
素早くカーペンタリア基地内地図を脳裏に蘇らせて、たたらを踏んだイザークは周囲の兵士たちに怒鳴る。
「港だッ！！お前たち来いッ！！」
近辺にいた兵士たちを引き連れて本部棟からサーチライトの照らし出す中庭へと走る。
背後から猛然と突っ込んできていた軍用トラックが急ブレーキの鈍い音を掛けて眼前で止まった。
「乗れ！イザークッ！」
砂埃のむこう、助手席からコートニーが顔を出して叫ぶ。
渡りに舟とばかりに荷台に兵士たちが乗り込み、やはり荷台に飛び乗ったイザークは耳元のイヤホンに次々と入る情報に耳を澄ませる。
『監視データ復旧完了。２２：２６アスラン・ザラＳ－２０２窓か

ら拉致の模様。実行犯を5人確認。偽装兵と見られる』
――――――アスランッ！！

＊＊＊＊＊

戦いなど下らない、そんな時間は我々には残されていないのに。
私たちは戦いを回避すべく外交努力を続けている。
なのにお前が軍に入る必要がどこにある？

いざという時アンタを殺させない為に、P．L．A．N．T．を守る為に。
泣いて顔を覆う彼女の緩やかな栗色の髪が左右に触れた。

戦争は所詮政治の一部、兵士は所詮人殺しの駒でしかないのに、
何故敢えて戦いに身を投じようなど馬鹿なことを考えたのだ。

アンタに言ったら止めると思ったから。
自分の為に泣いてくれている彼女を慰める言葉も持たず、抱き寄せることもできずに、ただその前に立ち尽くしていた。
あの時、抱きしめていたら彼女は何と言ってくれたのだろう？
ズキン、という頭部の痛みに目が覚めて、ディアッカは額に手を押し当てる。

「いてぇ」
触れる額には処置されたらしい包帯とガーゼがあった。
薄暗い空間、ぼんやりとした輪郭がやがて鮮明になる。
死んだのかと思っていたのに、気がつけば固いベッドの上で天井を振り仰いでいた。
いつの間にか営倉に移されていたらしい。
「あー……バカみてぇ、脱走に失敗してやんの、俺」
ディアッカは自嘲気味に苦笑いする。
「ホント、バカね」
ひとりごちたはずなのに何故か返事があってディアッカは目を見張る。
また痛む額を押さえながらようやくに上半身を起こせば、うっすらと明るい鉄牢の向こうに少女の姿があった。
ピンク色の軍服、茶色の外はねの髪にターコイズブルーの眼差しが印象的な鼻ぺちゃ少女。
「なんだよまたお前か。俺の見物？　……なあ、そんなにコーディネイターが珍しいわけ？」
「アンタなんか、珍しくないわよ」
潤んだターコイズブルーの眼差しできっと睨みながらその少女は言った。
まるで自分自身に言い聞かせるようだとディアッカは思う。
「だっておんなじ人間だもの。キラだってそうだった。だからアンタなんか怖くないッ！！」
「キラ？」
怪訝な顔でディアッカは首を捻る。
あの紅い女が言っていた名前だ。
少女はやや俯いて声のトーンを落した。
「……ストライクでずっと戦ってた、アンタたちと」
「ああ、……」
ディアッカは、アスランの元カレだな、と頭を押さえる。

名前を突きつけられれば、その存在がくっきりと浮かび上がってしまう。
……どうせ自分と同じようなどこにでもいるようなヤツなんだろう、と思えば気が滅入る。
まああのアスランの元カレであるくらいなら、わりと頭がよくて性格も悪くなくてちょっと天然系なのだろうとくらいは推察だ。
少女は目を逸らした。
「でも、……もういないの」
ストライクはシグナルロスト、そう言ったのは誰だったか。
おいおいアスラン、元カレ殺っちゃったのはいいけど……いやそれもマズいだろうけど。
お前マジで生きてるんだろうな……？　つーか大丈夫かよ、メンタルは。
ディアッカは垂れてきた前髪をかきあげる。
正直めちゃくちゃ心配だ。

らしくないね。

ラスティの言葉が蘇る。
今さらにして認める、ああこの際だから認めてやろう。
俺はアイツらになんだかんだですっかり情が移ってしまった！！
……この俺がだぞ、こんちくしょー。

ほらみろって。
高みの見物なんかいつまでも続くわけなかったんじゃん、俺の勝ちだね。

あのオレンジ色の陽気な旧友がいかにも言いそうなセリフが、ヤツの口調そのままんまで脳裏を過ぎる。
せいぜいあの世で笑ってろ糞ラスティ。
こっちはまだ渦のどまんなかなんだ！
ディアッカは顔を上げる。
「んで俺に一体何の用だよ？　殺しにでも来た？」
「――アンタを殺したってトールは戻ってこない。だから私は殺さない」
強い意思のこもったその眼差しに、ディアッカは再び見惚れる。
「そうじゃなくてその傷」
ぶっきらぼうに彼女は言った。
「痛むでしょ」
「ああ、そりゃまあ」
だがこの痛みは生きている証拠だ。
一瞬の間。
「……ごめん」
ぽつり、と彼女が言った。
逆光でその表情はよく見えなかったが、声が微かに震えているのが聞き取れた。
ディアッカは言葉に詰まる――謝られる筋合いなど、どこにもないというのに。
言葉は時としてナイフにも勝る凶器となる。
そして自分が迂闊な言葉で切り裂いたのは彼女の心で、この傷はその代償だった。
額の傷は痛む、だが良心の呵責のほうが余程辛かった。
それをそうとも言えず、寝転がり天井を眺めながらディアッカは虚勢を張る。
「べっつにィ？　……お前のおかげで、あの赤毛の女に撃ち殺されなかったわけだしー」

しかし泣いた女のコに叩かれるのには慣れていたが、まさかメスや銃で襲撃されることになるだなんて想像だにしていなかった。
脳内で何度も再生されてもうトラウマになりそうだ、この状況で夢は見たくない。
「ねえ、死にたくないんでしょ？　どうして殺せなんて言ったの？」
ディアッカはふと我に返る、確かにあの格納庫で取り囲まれた自分はそう言った。
「俺がやってきたことの結果なんだなって思ったんだよ。しっぺ返しっての？」
「……そう」
しばらく少女はこちらを眺めていたが、やがて静かにその場を去った。
俺のやってきたことの結果。
ディアッカはその言葉を頭の中で繰り返す。
だが兵士であるからには人殺しなんて当然の行いだ――その理屈で自分を説得しようにも頭にそれが馴染まない。
落とした敵の数を競いながら、何も考えずにゲーム感覚で“遊んでいた”。
どれほどの人の命、どれほどの思いが散っていったかも考えずに。
今更すぎる罪悪感と恐怖に押しつぶされそうになりながら、ディアッカはごろりと寝台の上で寝返りを打つ。
多くの人間から苛烈な憎しみをぶつけられた、そのショックが未だに尾を引いている。
もしかしたら一生忘れられないトラウマになるかもしれない。
これって精神療法が絶対必要だよなーなどと嘆息が漏れる。

メスを向けられた時に感じた恐怖、
あの少女の涙が頬で弾けた時に広がった世界の色、
憎悪の眼差しに銃口を向けられた時の焦燥感、

そして多くの人間に取り囲まれた時に感じたあの孤立感。

だが一筋の救いの光が見えた。

“アンタを殺したってトールは戻ってこない、だから私は殺さない”

彼女は自分が憎いだろう、殺したいほど憎いにも関わらず殺さずにおく。

……あれほど強い気持ちは、自分にはない。

ニコルの死に復讐を誓ったアスランやイザークの姿を思い出す――

この復讐の連鎖は戦いの副産物。

「俺、すんげぇ混乱してるなァ……」

ディアッカはひとつ嘆息をついた。

今この時ほど誰かに何かをぶちまけたいと思ったことはない……この1人きりの今の状況は、ひどく苦痛だった。

ただ果てしなく考える時間だけは与えられている、誰にもそれを伝えることは許されずに。

その思考自体が物狂おしい、全くこれ以上の拷問があるだろうか。

せいぜい反省しろって。

バッカもうしてんだよ。見りゃわかんだろーが糞ラスティ。

＊＊＊＊＊

アラームとともにサーチライトが基地内を無数に照らし出す中、遠くから甲高い警報が鳴り響くと同時にイヤホンに絶叫が入った。

『港湾Ｄブロックにて発見、交戦中！　至急援護頼むッ！』
船で拉致する気か！？
イザークは無線機に向かって怒鳴る。
「ＣＩＣッ！　海上封鎖させろッ！　母艦が近くにいる筈だッ！」
トラックが急ブレーキで止まり、他の兵士に先んじてイザークは飛び降りる。
「来いッ！！　モタモタするなッ！！」
倉庫の狭間に木霊する甲高い銃声の音を手繰り寄せるように駆けつければ、すでに波止場では硝煙匂いたつ銃撃戦が繰り広げられて幾人もの死傷者が出ていた。
踏み越えて機関銃を向けて連射する、銃弾を受けて幾人かのＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍服纏う潜入者たちが血飛沫を上げて倒れる。
だが肝心の彼女の姿が見えない。
「――アスランはどこだッ！！」
「あの奥ですッ！」
傍らで銃撃していた兵士が声を大にして、そして銃弾を受けて後ろ倒れになる。
透かし見れば最も奥の男が、確かに腕にぐったりとしたアスランを抱え込んでいた。
その瞬間、追い詰められた侵入者の１人が不意に手榴弾が投げ込んだ、咄嗟に反応した周囲の兵士たちもろともにイザークは突っ伏す。
地響きと轟音、背後で大きな爆発が起き複数人が吹っ飛ばされた。
なるほど基地に乗り込んでくるだけある、ナチュラルにしては手馴れなのだろう。
「こっちだ！！」
「いたぞッ！！」
爆発に引き寄せられるように兵士たちが集まり、上空を飛ぶ哨戒機がサーチライトで侵入者たちを照らし出す。
波止場の先に止められていた船が上空からのミサイル射撃によって爆発を起こし、場を白々と照らし上げた。

包囲網は既に完成していた。まだ生き残っている複数の兵士が発砲を続けながらじりじりと後退を続ける。
「撃つなッ！！それ以上撃てばこの女の命はないぞッ！」
必死の形相で喚きながらＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍兵を装った男が硝煙たちのぼる銃口をアスランの額に向けた。
怯む兵士たち、イザークも息を呑む。
銃撃戦が一時静かになり、そして再びイヤホンからまた情報が聞こえてきた。

『……ローラン隊が現在連合軍潜水艇を追撃中。独立第８１機動群所属艦と見られる』

――独立第８１機動群？
噂に聞く連合のユーラシア特殊任務部隊、そしてあの忌まわしいブルーコスモスの手先か！
その血に汚れた手で、よくもアスランを楯に！
目も眩むほどに激怒の只中でイザークは躊躇わずに銃を抜いた。
「馬鹿がッ！！そんな脅しが効くかッ！！」
「俺を撃てばコイツにも当たるぞッ！」
ことさらに男はアスランを引き寄せる、意識を失っている彼女は微動だにしない。
「当てるかッ！！　俺は一度たりとも外したことはないッ！！」
きっぱりと言い放ち、イザークは照準を合わせ、ただ自分の腕を信じてトリガーを引く指先に力を込める。
パァン、という音と一瞬の静寂――――そして銃弾は的を外すことなく一直線に男の額を貫いていた。
一筋の紅い糸を引いて、男はアスランごと仰向けに崩れ落ちた。
すぐさまイザークは駆け寄る。
その合間にも立っていた偽装兵たちはあらゆる方面から銃撃を受けて蜂の巣のように成り果てた。

血の匂い漂う中、イザークはようやくにアスランを抱え上げて、その身体を揺さぶりながら頬をはたく。
「おいッ！！　大丈夫かッ！！　起きろッ！！」
蒼い睫毛が微かに動いて、うっすらとアスランは目を開いた。
「……イザーク」
ふふっとアスランが笑って頬に唇を寄せ、そのまま肩に頭を凭せかける。
純粋に愛しいという感慨、そして守れたという安堵とともにふつふつと湧き上がる憎悪。
イザークはアスランを抱き上げて立ち上がり、眼前でまだ微かに動いていた地球連合兵の腹部を踏みつけて、銃を構えた指先に力を込めた。
耳をつんざく甲高い破裂音、そして飛び散る血飛沫と生あたたかい匂いが広がる。
硝煙が鼻をついた。
その銃を収めて無線機を口元に押し当て、イザークは無機質な口調で報告する。
「アスラン・ザラを無事保護。抵抗した偽装兵は全員射殺した」
『ＣＩＣ了解』
負傷兵たちの救護に医療班が駆けつけ、騒然としている周囲を視野の隅に捉えながらイザークはアスランをただ抱き寄せる。
その時、一角で凄まじい爆発が起きた。
闇夜を焦がすのは工廠の炎。
「まずい、もしかしてホントの狙いはあっちかよッ！！？」
立ち上がったコートニーが焦燥感も露わに叫ぶ。
「なんだ？」
振り返ったコートニーの顔面から血の気が引いていた。
「俺が乗ってきたＸＯＯＯＡドレッドノートは核エンジンなんだ」
雑音に紛れそうなその声に、一瞬理解が遅れた。

……ＭＳにニュートロンジャマー阻害装置を搭載している？

「――――そんなバカなッ！！！」

＊＊＊＊＊

潮風にカーテンが揺れる。

「ほんっと退屈だよなー」

トールが幾度目かの愚痴を口にした。

「っていっても、あなた動けないじゃありませんか」

ベッドの傍らに座したニコルは、指示通りＴＶチャンネルのボタンを押す。

トールは包帯ぐるぐるで指先すら使えないので、どうしても細かい作業は自分だ。

「せっかくオーブにいるんだから、やっぱり母さん達に連絡したいんだよねー。でも俺っていちおう連合軍兵士だからさぁ」

「勝手な戦線離脱は銃殺刑ってやつですか」

「そうそう、兵隊ってホント窮屈だよなー。やっぱＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．軍も？」

ニコルは柔和に見返す。

不思議だ、戦っていた相手なのに、この人はこんなにも屈託がない。だから警戒心なんてそもそも芽生えない――それはミイラ姿のせいだろうか。

「そりゃもう、どこも一緒ですよ」

下手をしたら脱走兵狩りの対象になってしまう。

とはいえ、Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．を裏切るような気持ちは毛頭ないから、

もっと歩けるようになったらとにかくカーペンタリアに連絡しないと――とニコルは思っている。

「ニコルくん、トールくん、ご飯よー」

ひとりの女性がトレイを両手に載せて顔を出した。

清楚な一輪の花のようなひとだ、母さんに印象が似てる、とニコルは懐かしく思う。

この教会のボランティアの女性なのだろうか。

トレイを受け取って、ニコルは「いただきます」とありがたく食させていただく。

トールの隣にスツールを引き出し座して、彼女は流動食をさじで運んだ。

「どうかしら？」

「全然おっけーです、カリダおばさん！」

「昔を思い出すわ。うちの子がたまに寝込んだ時こうやって食べさせたものよ」

ひどく哀しそうに彼女は嘆く。

「あの子ってば連絡も寄越さない、会ってもくれないんですもの」

……母さん。

心持ちスープの塩味が強く感じられる。

「おうおうどーだよ！」

声とともに入ってくる人影、一緒に飛び込んで来た青いボールロボットが転がって、そのアイセンサーを点滅させた。

なんか、見たことある。

怪訝にニコルは拾い上げる、だがそのボールは意思を持っているかのようにぽーんと跳ねて手の内から飛び出た。

＞テヤンデー！！＜

この口調。

遊びに行ったマイウスのカレッジで見たような気がする。

アスランのデスクにあった。

たしか、ジャンおじさんがたくさんレプリカを作ってた……
ロウはボールを足で蹴り上げてキャッチする。
「すんげぇだろ？　そこまでＯＳ作り込まなくても、これひとつでナチュラルでもＭＳ動かせるんだ。なんか運動プログラムが入ってるんだって！」

喉が詰まった。

「……もしかして、それＧ．Ｕ．Ｎ．Ｄ．Ａ．Ｍ．とかいう略称だったりしませんよね……？」
「なんで知ってんだよ？」
絶句して力が抜ける、スプーンが指先から落ちた。
「……ｖｅｒ．いくつですか？」
「えーっと、確か６．１か２？」
どちらも地球降下前に僕がヴェサリウスであげたやつだ。それがなんでここにあるんだ！？
口内が渇いて言葉が出てこない。
「ひとつ手に入りさえすればリバースエンジニアリングで製造できるんだ。便利なもんだよなー」
手足が冷える、ニコルは青ざめる。

ヴェサリウスは量子通信でＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．本国技術部に常時接続されている。
ってことは、まさかＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．のラグナロクマザーから情報が漏れてる……？
そんな馬鹿な。
攻性防壁は敷かれてるし、オペレーションセンターが２４時間態勢

で監視し続けてるっていうのに？
センターで働いていたディアッカだって「スパコン１００台一緒に乗ってもってだいじょーぶ！」とかって太鼓判押してたのに！？

呼吸が苦しい、ニコルは肩で息をする。
「――それ、本当ですか？」
あっけらかんとしてロウは言った。
「だって導師が言ってたんだから確実だろ？」
「その導師って、誰なんですか」
ＭＳといい、ラクス・クラインのファンクラブといい――生臭すぎる。
「マルキオ導師。えっと、フルネームなんだったかな……マルキオ・イスなんとか？　キサトお前知ってる？」
「ううん、知らない」
ドアが開いて、オレンジのジャケットに白ジーンズの知的な女性が歩み出てきた。
「イスラフィルね、マルキオ・イスラフィル。月のとてもお偉い方よ」
聞いたことがあるその名前。
連合の外交官で、……枢機卿だ。
ボールを受け取って「ほら言わんこっちゃない」と彼女は大仰に肩をすくめる。
「私垂れ目の彼に言ったのよ、１００倍返しを覚悟なさいって」
「あなたは……」
ニコルはヘーゼルの眼差しを凝らす。
……アイリーン・カナーバ議員に似てる、さばさばした口調まで。
「エリカ・シモンズよ。モルゲンレーテの技師長。あなたたちが暴れてくれたおかげでこっちはもう大変だったわ！」

僕はもう気分的に死にそうです、母さん。

ニコルは青ざめた顔面を覆う。
視界がちかちかする、周りの賑やかな声がうすら遠く聞こえる。
「うちのミナさまがあなたにお会いしたいそうよ、いらっしゃい北伊の大公さんちの坊やくん？」
「こいつまだそう歩けないぜ？」
焦点が定まらない。
「いえ、呼ばれてるなら行かなきゃ……」
立ち上がろうとして目眩がして、足がもつれて椅子ごと倒れ込む。
「ほらムリだって！」
「ニコルくーん！！」
悲鳴が遠く聞こえて、そのままニコルは意識を手放した。

15：P.L.A.N.T.，J.O.S.H.－A.あるいはアカツキ島

the Pillars？

15：P.L.A.N.T.，J.O.S.H.－A.あるいはアカツキ島

地球連合・強襲機動特装艦アークエンジェル級三番艦プリンシパリティ――

士官たちが居並ぶ艦橋に、地球連合軍の軍服を着た少女が引き出されてきた。

燃えあがる焔のような紅い少女だった。

ムルタ・アズラエルの背後から、ラクス・クラインはその姿を眺める。

彼女には見覚えがある、と同時に心がちりちりと灼ける思いがした。

わたくしの世界に色をもたらしたひと。

「あなた、ムルタ・アズラエル？」

末端の兵士とも思えないぞんざいな口調で彼女が問う。

「おやァ？」

艦長席にしどけなく座して、データを端末で眺めていたムルタが顔を上げた。

「君、どっかで見たよね」

「私、フレイ・アルスターよ」

「ああ、君アルスター事務次官んとこの子か」

ムルタが得心したように言う。

「お父上の国葬は無事終わってるよ、安心したまえな」

彼女は父をZ．A．F．T．軍の手で失った、その場にラクスも立ち会っていた。

あの時、彼女は襲撃される第8艦隊を前に、「Z．A．F．T．の攻撃をやめさせないとこの子を殺すわ！！」と絶叫した。

初めて人に殺意を向けられた、それも同い年くらいの少女に――こ

れが現実かと茫然とした。
そのフレイ・アルスターは、薄いグレーがかかった目をやがてラクスに向けた。
そして呆気にとられたように、しかし視線は引き離さずに呟く。
「……なんでアンタなんかがここにいるの……？」
彼女の眼差しが憤怒に燃えあがって、周りを見回す。
「――なんで生かしておくのッ！？　この子コーディネイターでしょッ！？　私たち、コーディネイターと戦ってるのよッ！！？」
その声に場が揺らぐ。
一方でムルタはハハッと苦笑いした。
「んー君ってジブリール的だねェ。彼と気が合いそうだなぁ……少なくともサザーランドあたりは喜ぶかな？　プロパガンダに使えそうって」
「――――アンタたちのせいでキラだっていなくなっちゃったのよッ！？　なのになんでアンタがのうのうとここで生きてるのッ！？」
彼女が躍るように飛び込んできて、ラクスはその言葉に呆然とする。
「……キラさまが？」
まさか死んだ？
襟元を掴まれて激しく揺さぶられながら、ラクスは凍り付く。
やはり――討ったのは、アスラン・ザラ？
「ああ、無体なことはやめたまえな。誰か止めてあげて」
ムルタの指示に、引きはがされる少女に強く握られた袖が破れる、布が破れる耳障りな音が響いた。
「死んじゃえばいいのよ――――コーディネイターなんかッ！！！みんなみんな死んじゃえばいいのよッ！！！」
「……でもキラさまも、」
コーディネイターですわ、と言いかけてフレイ・アルスターにドンッ！！と突き放されて、ラクスはよろめいて尻もちをついた。
着物の裾が乱れて襦袢ごしに脚がむきだしになる。
「アンタたちなんか絶対許さないッ――――！！　P・L・A・N・

T．なんか壊れちゃえばいいのよッ――――！！」
狂乱の絶叫が遠ざかるが、それでも再びの衝撃にラクスは立ち上がれない。

あのひとは気付かない、泣き叫び取り乱すほどに悼んでいる相手もまたそのコーディネイターであるということに。

「ほら立ち上がりたまえな、みっともないよ」
ムルタに引っ張り上げられる。
「お嬢ちゃんには刺激が強い？　でも踏み出したいってんなら受け止めなきゃね。上っ面の言葉じゃ何もわかんない、誰にも通じないもんさ」
ラクスはぎこちなく振り仰ぐ。
「仕方ないなァ……着てたドレスのクリーニング済みがあったよね？　あれ持ってこさせてよ」
その喧噪の中に、やがて捕虜が連れ出されてきた。

◆◆◆◆◆

引きずり出されて、不機嫌にディアッカは膝をつく。
そのまましばし待たされる。
やがて人だかりの中から出てきた金髪碧眼の優男が振り返って、開口一番「えええ？」といかにも残念そうに言い放った。
「これ、ホントにZ．A．F．T．軍のパイロット？　なんか見た感じ使えそうにないけどォ」
おい、人を見た目で判断すんじゃねーぞクソナチュラル。
とはさすがに言えずにディアッカはただ睨む。
たいがい机に向かって戦略戦術を論じることに夢中な連中というの

は、現実の悲惨から一歩引いたところにいる。
現場の兵士よりも敵捕虜に対しては客観的かつ合理的に判断できるはず、と微かな期待を寄せていたのだが――
「んーちゃっちゃとロボトミーしちゃう？　でもソキウスレベルに使えるかなぁ？」
ディアッカは思わず目を剥く。
とんでもなく裏目だ。
捕虜交換とかいうレベルじゃない、なんか超絶物騒なこと言ってんぞ、このオッサン！！
「いいえ、改造なんてダメですわ！」
どこかで聞いた声が制止した。

え？

その時、入室してきたスーツの女が抱えてきた白いドレスから、丸いシルエットが突如出現した。
＞テヤンデー！！＜
ぽーんと跳ねてディアッカはボールを顔面で受け取る。
「って！！　ンだよこのゴムまり！」
「あらあら、行方知れずだと思ったらクリーニングしていただいていたこちらのポッケに隠れていましたのね？」
人垣から現れたピンク色の少女が顔をほころばせた。
「ちょッ……」
さらにディアッカは絶句する。

ラクス・クライン――
確か連合ビル崩壊で行方不明と報道されていたはず！！

「ッなんでアンタがここにいるんだよッ！！？」
「それがわたくしにもよくわかりませんのよ、ディアッカ・エルス

マン」
ふわふわとしたピンク色の髪の下で、ほんわりと彼女は笑む。
「ただこちらの方に助けていただいて。ムルタ・アズラエルさまですわ」
ひどく和風で乱れ破れの淫靡な装いのラクス・クラインは、スツールに腰を下ろして小首を傾けた。

アズラエル――
アズラエル!?
ディアッカはくらくらする。
これは出血のせいではないだろう、思考回路の処理が現実に追いつかない。
アズラエルってブルーコスモスのトップじゃんかよ……オイオイ大丈夫か!?
まさかラクス嬢、ストックホルム症候群かッ!?

いい反応だねと笑っていた優男が話題を振る。
「で、そのボール何？　お嬢ちゃん」
「ピンクちゃんですわ。よくわたくしの歌にお付き合いしてくれるよい子ですのよ」
「へえ、妙なオモチャもってるんだね。……んで、彼と知り合いなの？」
それはもう、と微笑みのラクス嬢が唇を開く、イヤな予感がしたが制止するような間もなかった。
「フェブラリウスのエルスマン博士のご子息ですわ」
ディアッカは言葉もなく内心悶絶する。

空気読めッ!!状況見ろよッ!!
――――なんて余計なことを言うんだこの世間知らず――――ッ!!!

「エルスマン？　ああ神サマになりたくて仕方ない人か」
小馬鹿にした響きに、ディアッカは我に返って睨む。
「……おい、ヤな言い方だな」
不仲の親父ではあるが、こういわれると正直ムカツク。
ヤツはヤツなりに四苦八苦して日夜同胞を増やそうと頑張ってるだけなのに。
「だって君たちの専門でしょ、神サマみたいに命のかたちをいじりまわすのは。僕らもまあたいがいのことはするけど、君らには全然及ばないなァ」
「はぁ？」
アズラエルはちらと傍らを見る。
「例えばこのお嬢ちゃんのピンク色、この声。普通なら絶対に発現しないよ？　あとコーディネイターにありがちな、君のキレイなそのアメジストの目も――」
歩み寄ってアズラエルはディアッカを覗き込んだ。
ひどく冷たい碧の目だ――と振り仰いでディアッカの背筋は粟肌立つ。
「ナチュラルでは、まず出てこないね」
そりゃあキレイはキレイだけど僕ぁは感動しないな、と男は大仰に肩をすくめて踵を返す。
「結局は青い薔薇みたいなもんさ、さんざんいじられて作られてようやく世に出てくることができるんだ」
「――まがいもんだっていいたいのかよ、俺らがッ！！」
ひさびさの憤怒にディアッカは怒鳴る。
一方でラクス・クラインはきょとんとしてあたかも「何をおっしゃってるんですの？」と言わんばかりの表情で自分たちを見比べている。
彼女はこれ以上の会話についてこれない、とディアッカは見切って、

ラクスから注意を離した。
「あれ、自己否定されたと思った？」
振り返って、くすりとアズラエルが笑う。
「そりゃ悪かったね。ただ僕ぁ上っ面だけってのが嫌いなのだけさ。いっそいじるなら根本からいじってほしいじゃない？　彼らも神サマを気取って新しい人間作ろうってんならそれくらいしなきゃね」
艦長席の黒革張りの椅子に身を投げて、彼はアームレストに頬杖をついた。
「根本からってそんなの人間じゃねぇだろ！！　そもそもロボトミーとか平気で口にできるクソ野郎にそんなん言われたかねぇぞッ！！」
噛みつけば、ふふんとアズラエルは笑った。
「ロボトミー、薬剤による筋肉精神増強、施術による肉体改変……でも僕らは一応ルールを守る。やるのは遠からず死ぬって人間を使っての後天的な加工だけ」
死刑囚、あるいはＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．や月や研究コロニーから回されてきた払い下げの失敗作たち。
それらの命を有効活用しているだけだ、とその男は言う。
「ひとつの命は別の命の糧になる。これってごく自然でしょ？」
「……」
「僕らは決して人間の本質的な部分を犯したりはしない。――けど君達は違うよね？　肉体生成、遺伝子改変、塩基配列入れ替え、あるいはキメラ……これが思い上がりじゃないって誰が言える？」
「ぐちゃぐちゃ言ったって、結局はてめぇのやってることだって一緒じゃねぇか！！」
ディアッカは声を大にする。
だがアズラエルは笑んでいなした。
「いいや違うね。益を享受する１００億という絶対多数の前には、ありとあらゆる手段は正当化される。だから僕らがやっていることはまんま正義なんだよ、君たちとはレベルが違う」

断じられて、ディアッカは絶句する。

めっちゃキレてるよ、超やべぇ。

こんなのが連合を牛耳ってんのかよ……

自分たちコーディネイターがもってるナチュラルへの差別意識とか優越感とかそういう比じゃない。

俺がもってた他人への意味ない軽蔑とか、そういうレベルじゃない。

オヤジだって非人間とか言ってみたって、結局命を大事にしてるヤツだ、そんなのは俺がよーく知ってる。

だがコイツは違う。

バックにとんでもない選民思想を感じる。

だから怒りすら通り越して呆れながら、思わず純粋な疑問が口をついてでた。

「どんだけ高みにいやがんだよ。お前、何様なんだ?」

この男は、そもそも人間自体を自分の同類として見てないんじゃないだろうかというレベルだ。

……いや、いくらなんでもまさか。

その優男は肩をすくめた。

「僕ぁ僕だとも。ただちょっと厄介な肩書きをお偉い人たちにおしつけられててねェ……」

やがてアズラエルはやや皮肉げに唇の両端をつり上げた。

「大昔から繋がるｔｈｅ　Ｐｉｌｌａｒｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｅａｒｔｈの一柱、死と生(アズラエーリ)の御使いって言えばわかる?　ただのコーディネイターくん」

男を凝視したままに、ディアッカは息詰まる。

予想もしてなかった――
宗教かよ。

宗教なんて、もうとっくに破綻してる旧時代の遺物だと思っていた。
少なくともエヴィデンス０１とジョージ・グレンの告白で、既存の宗教は一網打尽の木っ端微塵だったはずだ。
既存の価値観がぶち壊されて、経済しか縋るもののなくなった世界のただなかで、遺伝子コーディネイトはブームとなって拡散した。
その結果生まれた人間たちの集合体だから、Ｐ・Ｌ・Ａ・Ｎ・Ｔ・にはそもそも宗教という概念自体がない。
だが厳然として地球には残っているのか――きっとナチュラルたちの心の根の深いところに。

御使いを自認する男は言う。
「ほんとヒトって不思議だよね、ただそれがそうだってだけで丸呑みしちゃうんだ」
――宗教に自分の全ての思考を預けて、何も考えずに生きていくのはラクだろう。
――それは自分だってそうだ、だから軍に入って何も考えなかった。
「宗教ってのは社会システム、それも胴元総取りのね。そこがわかんないヤツは身ぐるみはぎとられるだけなんだなァ、これが。ほとんどの人間は気付かないでただ搾取される一生を送る」
アズラエルは口元を笑わせた。
「っても逃げた聡明なる連中はもちろんいたよ、……宇宙にね」
――父親たち初期第一世代が地球を離れたのは、迫害だけじゃなくてそういう絡みがバックにあったのか？
「そして、そんなおつむの弱い人間向けにはわかりやすいお題目があるのは大事なんだよ。君、わかる？」

癪だが無知と誤解されるのも腹立たしいので、ディアッカは応じる。
「青き清浄なる世界のために、みたいなヤツか」
「そうそう。あとは――」
アズラエルはにやりと笑った。
「うちの厄介な盲目の御使い（イスラフィール）が常々言ってるS．E．E．D．みたいなね」

＊＊＊＊＊

我々は我々であったがゆえに、もっとも愛すべき子どもたちにすら罪業を背負わせてしまった。
ラクスは未だ行方知れず、そしてパトリックの娘は地球で生死の境をさまよい、そして多くの議員たちもまた別離に苦しんでいる――人の親である身に、これほどの報いが他にあろうか？
シーゲルは重い足をひきずるように最高評議会ビルの階段を上がる。
血塗られた我らのこの旅路――辿り着く先はどこか。
最高評議会ビル国防総省棟はひどく慌しく、兵士たちで人波がごった返している。
そしてその中に、各評議会議員たちの一団の姿が見えて、シーゲルは足早に進む。
「シーゲル！」
一縷の希望に縋るかの声を上げてアイリーンが駆け寄ってきて、シーゲルは眉根を下げる。
普段冷静で柔和な彼女の取り乱しぶりが今は痛々しくさえ見える。
「臨時最高評議委員会の招集を求めたのだが、ザラが出てこないッ！！」
頷き、場に集っていたクライン派の議員たちを引き連れて国防総省棟奥へと進もうとしたシーゲルは兵士たちの前に阻まれる。

「厳戒態勢下ですので！！　いかに先の議長閣下とはいえど、今は権限をお持ちでない方の立ち入りは許されません！！」
「だがそもそも彼らの行為は最高評議会の承認を得ていないだろう」
「規則は規則です！！」
「パトリックに伝えよ！　議長は、臨時最高評議委員会の招集の要請に応える義務があると！　そして私はまだアプリリウスの議席を離したわけではない！！」
厳然として自分は、アプリリウスを統括する最高評議会議員である。
兵士たちが怯みを見せた。
「クライン前議長閣下！」
立ちはだかる兵士たちとシーゲル率いる評議員団との間で揉み合いとなる最中、奥のドアが開いて1人の国防委員が姿を現した。
硬質なヒール音が木霊して、一瞬の静寂が齎される。
シーゲルは兵士たちの肩越しにその女を透かし見る。
「揉め事は困ります、シーゲル。わたくしは、万が一にもあなたに銃を向けさせたくはないのですから」
襟元を正しながら、エザリア・ジュールは怜悧な顔を崩さずに淡々と言葉を紡いだ。
「……エザリア」
本来極北の絶対君主（ツァリーツァ）たるべくして創出された彼女は、その天性の威で場を圧する。
国を築くにあたり自分たちは彼女の力を必要とし、そして彼女はＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．に上がりザラ派を支える道を選んだ。
「パトリックも臨時招集に応じると申しております」
「では何故」
濡れた朱の唇が笑む。
「何事を為すにもいくばくかの時間がかかります、今さら少々のタイムロスで気を揉まれることもありますまい？」
先の議長閣下、と彼女は皮肉に付け加えた。

――そして辿りついたP．L．A．N．T．最高評議会議場。
「今更こんなものを」
議長席におさまったパトリック・ザラは無造作に紙をテーブルに投げ出す。
「この譲歩案は以前P．L．A．N．T．が却下した内容そのままであろう。それにもはやオルバーニもおらぬ」
愚かしい、と議員たちもまた冷ややかな眼差しでその条件提示を眺めていた。
冷え切った空気を断つように、シーゲルは声を上げた。
「だがこれが、最後なのだぞ！」
「だからといって、今更こんな愚にもつかぬ講和条件が呑めるとでも？」
エザリア・ジュールはその美貌に嘲笑を浮かべてくすくすと笑う。
「スピットブレイクは可決される、アラスカ攻撃の修正案も今この場に提出された。この局面で譲歩案を出そうというならば相応なエサがいる、ということさえ思いつかぬらしいな」
それでも諦めきれない様子のアイリーン・カナーバが言い募る。
「しかし、これ以上は！！　月が介入してくれれば事態はさらにややこしくなるッ！！」
アリー・カシムが嘲笑で対峙する。
「連中は中立を貫く。そういう約定で月は維持されている！」
もはやオペレーション・スピットブレイクを目前に勢いづくザラ派に抗う術はない。
「最初に道を閉じたのは彼らです」
「下手な時間稼ぎですよ！　ヤツらは今頃になって立場が不利になったと慌ててこれを出してきたのです！」
「そもそもオルバーニには理事国全ての意見をまとめる力がなかった」
口々に議員たちは言葉を発する。

そしてその中で、かつて穏健派であったユーリ・アマルフィが静かに、しかし断固として言った。
「ともかくも、今はスピットブレイクが全てに優先します――アラスカを叩き、その後でよろしいではありませんか、地球側との交渉は！」
賛同の声が場に満ち、シーゲルは悲痛に顔を歪める。
愛息を失って一転ザラ派となったユーリ・アマルフィは、穏健派にとって痛恨の極みだった。
彼は機械工学の権威であり、彼が特別研究班を立ち上げた為ＭＳは急激にその開発が進められ生産量を増していた。
そして恐るべき兵器さえも彼はもはや躊躇いなく手がける――核搭載のＸシリーズ５体は近く、戦略兵器としてロールアウトされる。
「では、……では我々は……」
無力感にシーゲルは声を荒げた。
「もはや言葉にすら耳を貸さぬと――そのようなものなのか、我々コーディネイターは！？」
痛ましくアイリーン・カナーバはクラインを見遣る。
「子どもたちを贄に差し出して――その血の沼の上を、我々はなお進むというのかねッ！！？　我々の望んだ未来とは、そんなものだったかッ！！？」
俯いて、シーゲルは拳を握り締める。
「その為にＬ５にＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．を築いたわけではないぞ……ッ！！」
「シーゲル・クライン」
憂鬱にタッド・エルスマンが宥める。
「とはいえ国民は君の声を聞かなかったんだよ。しょせん我々は方向を少しズラす程度のことしかできはしないんだ」
シーゲルは首を振った。
「……銃で解決できることなぞないッ！！！」
「それは言葉が過ぎような、シーゲル」

パトリックがふっと目を上げた。
「あなたはZ・A・F・T・軍の全てを否定するつもりか、その献身も、その犠牲も――ここまで我々が経てきた悲劇も」
近親者が軍籍にある国民は多い、そして多くの議員たちもその肉親を戦場に捧げていた。
そしてアマルフィやマクスウェルのように戦場で子を失った者たちの鋭い視線はことに突き刺さる。
「そして悲劇は乗り越えねばならぬ、我々はなお生きているのだから」
確かに自身苦しんではいるのだろう、この男とてここ数日でまたひどくやつれた。
「ともあれ、仲介に立ったマルキオ導師には私からも礼を」
「空々しいことを言う、――お前はあの導師に寸部の信頼すらおいていなかったではないかッ！」
シーゲル・クラインは席を蹴り立つと最高評議会を後にした。

「シーゲル！」
アイリーンが立ち上がり、声を張り上げる。
だがそれを制する低い声があった。
「カナーバ。急ぎアポクリファ（グランマ）を閉じろ、ヤツに触らせるな」
パトリック・ザラの灰色の睥睨を、アイリーンは青ざめた顔で振り返った。
「一体何を……」
「議長命令だ、従え」
自分の背後にはセプテンベル１０市がある、どうあってもこの男に逆らえはしない。
アイリーンは拳を握った。
「……わかりました」

議場の外で待ち構えていた議員団の中でひとり、シーゲルは振り返る。
エヴィデンス０１――ジョージ・グレンとともに、世界の論理をひっくり返した争乱の原因でもある。

彼らも宇宙の果てで戦っているのではないか、と……思います。
生き残る為に。

兵士であることを選んだ蒼い少女はここでそう言った。

言葉も思いも通じないならば撃つしかありません。
敵から故国と愛する人々を守る為に銃は必要だと考えます。

「子どもたちにそんな道を選ばせてしまったのは、我々大人だッ！！」
無力感にうちひしがれながら、シーゲルは臍を噛む。
そして追い立てられるように評議員団とともに国防総省表へと移動する。
背中でシーゲルは言う。
「諸君……私の行為は君らにも迷惑をかけることになろう、だが預かり知らぬことと君らはそれを通してくれさえすればよいッ！！」
そしてアイリーン・カナーバ。
年若いながらも、よく自分についてきてくれた――とその一念でシ

ーゲルは痛恨のため息をつく。
自分は彼女すら巻き込む、だがもはや他に手がない。

それは統治者として禁忌である、だが同時に最大かつ最後のカードでもあった。
Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．現首班の首を全て差し出せば、この戦いは即時に終結する。

国を売った、と後世の歴史家からの罵りは甘受しよう。
これ以上同胞が命を奪われ、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．が道を踏み外す前に。
たとえ旧理事国の前に屈服し工場に堕ちたとしても、たとえその未来が暗いものであろうとも……母なる大地が存続し国民が生きていてこそ、道は繋がる！！
シーゲルはそのままラグナロクオペレーションセンターへと足を向け、荒々しくその監視センターに踏み込んだ。
「クライン議員！？」
「前議長閣下！！」
オペレーターたちが驚愕の声を上げる。
「君たちは出たまえ！！　咎められるのは私ひとりで十分だッ！！」
すべての人間を追い立てて、ひとりブースに座す。
『はい』
モニター向こうに姿を現したオペレーター長のユリウス・センティアが応じた。
「月とスカンジナビアに繋げ、Ｒｏｍａｎｕｓ　Ｐｏｎｔｉｆｅｘにご仲裁いただくッ！！」

その時、ぽちり、と背後から白い指先が電源スイッチを押した。
ふっつりとかき消えるようにモニターが切れる。

「旧態依然の世界に戻りたいとお考えですか、シーゲル・クライン」
耳元で静かに問う声があった。
「数多の贄の上に敷かれた血の道を己が足で歩み、ゴルゴダの丘へと向かいながら……未だにお心は定まりませんか」
「マルキオ導師!?」
オルバーニの譲歩案を持参してきたその人がふと笑みを見せる。
「砂の舟に皆が乗り合わせれば、いずれそれも沈みましょう」
何を言っている?
「なぜあなたがここに――」
ぞわり、と背筋が粟立った。

アポクリファの抜け道を通ったのは、まさか、この男か?

盲目の宗教家は一歩下がると、穏やかに笑んだ。
「ヒトが乗るべきはノアの箱船のごとく強固に、そして導く者は揺るぎなく確かにあらねばなりません」
彼はいつもの教義を説く口調でとうとうと語る。
「そのためのS・E・E・D・――なれどS・E・E・D・とはまこと貪欲なもの。発芽させるには豊かな土壌を必要とするのです。激しい感情の揺さぶり、極限状態でこそ感じうる命の律動……そしてヒトがヒトであることをもっとも深化させる瞬間」
嘆きがゆえに盲目となった導師の背後に、銃を携えた緑服の兵士たちがぱらぱらと現れた。
マルキオ・イスラフィルが言う。

「より激烈な戦いによってこそS．E．E．D．は覚醒する」
数多の贄の大地の上にこそ、未来への種は芽吹く――

「なんということをッ！！」
そしてシーゲルは、この上なく慈愛深き笑みを見た。
「なにも案ずることはありません、シーゲル・クライン。あなたの志はわたくしが引き受けましょう」
黒い虚空にも似た銃口がひたり、と向いた。
「そして輪廻の川のほとりには永遠が約束された平和の大地があります――そこであなたは待つ人に出会えましょう」
穏やかな教戒のあと、一発の銃声が轟いた。

＊＊＊＊＊

2人とも起きなさい。もう夕方よ。

呼びかける声と夕ご飯のいい香りに頭をもたげて、目をこすりながらアスランは窓の外を見る。
いつの間にか、自分たちは遊び疲れて眠ってしまったらしい。
全てが朱色、窓の開け放たれた室内も同じ色に染め上げられていた。
その光景が妙に寂しくてしばらく見ていたが、まだ傍らに寝転がっている少年に気づいて、彼を揺さぶる。
起きなきゃ。宿題まだ終わってないわ、キラ。

キラ。

……キラ。

アスランは瞼を押し上げる。

オレンジ色一色の光景が広がっていた。

たぶん、これは夕焼け。

なんだか自分はいつも夕焼けを見ているような気がする、とアスランはぼんやりとした頭で考えながら上半身を起こし、座ったままに窓の外を眺める。

斜陽の窓から飛び立つ戦闘機や着陸態勢で滑走路に入る輸送機が見えた。

……キラは、今どこにいるのだろう。

背後でドアが開いた。

荷物を小脇に抱えてイザークが姿を見せた。

この細腕に繋げられた無機質なチューブを見るなり、彼は銀色の眉間に皺を寄せる、

「点滴に頼るなッ！！」

もう今となっては馴染みすぎて、懐かしいほどの怒鳴り声だ。

「帰ってたのね」

キツイ薬のせいでぼんやりとしていたのでよく覚えていないが、何か騒動があったらしい。

部屋を移されて窓からの風景も変わり、医師も看護師も交代した。

そして面会謝絶のせいで、この隔離された部屋には医師と看護師とイザークくらいしか来ない。

もっともここ一週間あまり、イザークは何か任務でカーペンタリアを離れていたらしいから全然見なかったけれども。
イザークはどかんと傍らの椅子に腰をおろし、サイドボードにまな板と皿とフォークとを置いて林檎を剥き始める。
こころなしかこの人も痩せたろうか。
「ねえ、何があったの？」
「お前は知らんでいい」
疲れの滲むひどく難しい顔でイザークが林檎を剥く。
「……そう」
自分を癒やすことにだけ集中しろ、というその気遣いはありがたいような、疎外感を覚えるような。
ひとつなぎにするするとおりていく皮を不思議に眺めていた。
「薬飲むの忘れてないだろうな！」
「うん」
執刀してくれたエルスマン博士からのメモは枕元に置いてある。

一日三回食後に服用のこと。

林檎をさくさくと切り、皿に乗せて、無造作にテーブルを引き出すとイザークは差し出す。
「さっさと食え！」
この俺がわざわざ剥いてやったのだ、食べたくないなど言わせない、口につめこんででも食わせてやる！
とイザークが物騒に脅すので、アスランは素直に応じる。
「ありがとう」
ゆっくりと上半身を起こして腕の点滴針を外し、ヘッドボードに背を凭せ掛ける。
そしてアスランは林檎を口に運ぶ。しゃり、と噛み砕けば、甘酸っ

ぱいみずみずしさが口の内側に広がった。
仏頂面で見守るイザークの視線を感じる、……いつだってこの人はこうやって私を見つめていたのに。
私はただ斥けるばかりで、何も見ようとはしなかった。
「多少マシになったか」
「うん」
しっかり眠れたからか、投与された薬が緩和されたからか、体力的にも気分的にもだいぶマシにはなっている。
「……ねえイザーク」
「何だ」
イザークもひとかけら林檎をつまむ。
「ディアッカ、どうしちゃったのかな」
先月以来、なお機体ごと消息不明のディアッカ。
一瞬の躊躇、しかしそれでもイザークは断言した。
「アイツもどこかで生きてるッ！　絶対だッ！」
イージスの自爆で生死が危ぶまれたお前でも生きていたのだから、とイザークは強く言う。
「でも、淋しいでしょう？」
それこそ物心つく前からの幼馴染だと聞いた。
そして士官学校以来ずっと一緒にいた最も親しい者が、すぐ側にいない。それはきっと不安でもあるだろう。
意固地になったように、イザークは顔を歪めた。
「淋しくなんぞあるかッ！」
「相変わらず強情っぱりね。よく泣くくせに」
「お前ほどじゃない！　……ニコルの時大泣きしたのはどいつだッ！？」
「私」
ディアッカはあの空白の時間のあいだにニコル捜索の手配をしてくれていた。
捜索隊が付近を調べた時点で、ブリッツの部品とまだ形骸を留めて

いたコックピットが発見されたという。
そして遺体は未発見だ。

絶望すんなよ。

例えばみつかんなくても、お前だけは信じてやんなきゃ。

……彼は希望を繋いでくれた。
どうあったとしても、自分はニコルもディアッカも失いたくはない。
そのためにもやらなければならないことがたくさんある。
なのに動けないことがもどかしくてならない、とアスランは歯がゆさを噛み締めながら、ぱらぱらとメモをめくる。
この自分はどうも特異なコーディネイトを受けていたらしい。
他の医師では処置もできず、その為に本国からエルスマン博士が降りてきたと伝え聞いた。
時々痛む、疼く、動悸がする、突然眠くなる。
全ては遺伝子調整の副作用であるらしい。
でもよくよく考えれば、自分は昔から体調不良と付き合ってきた。
睡眠時間は１０時間は必要だったし、突然の原因不明の発熱だってあった……ただ気のせいだと見過ごしてきたけれども。
薬剤投与は一生、予後は不透明。
それでもそれが不自由だなんて思わない。
「ホント思うの、生かされてるんだなって……」

行きなさい、そして生きなさい。

夢で自分の願望の具現化であったにしろ、背中を押す母の声は今でも耳に残っている。
行けと言ってくれた人たちのぬくもりも、こんなにも鮮やかに覚えている。
「私は多くの命を踏みにじってきたわ、そしてたくさんの罪を犯して、数え切れないくらいの業を背負った」
こんな私を、それでも生かそうとしてくれた人たちが大勢いる――
その人たちの意志を無駄にはできない。
犯してきた罪にはこれから向き合っていこう――生かされて生きている限り。
戦い続ける、その覚悟はある。
「でも、重いわね。とっても重くて潰されそうな気がするわ」
「それは俺も一緒だ」
黙して聞いていたイザークがぽつりと言った。
「この戦いに加わった連中全員そうだ……業を負ったのはお前だけじゃない」
またひとつ、目からぽろりと鱗がはがれ落ちていく。
「そうね」
窮屈に視野を縛ってきた。
そんな私には見えないものが、きっとあなたには見えている。

きっと世界は、いろいろな色が互いを補いあい支えあって成り立つように出来ている。

ぱらり、とまたメモをめくる。
「小さい頃、何度かメンデルに連れて行かれたの覚えてるわ……あそこの研究所、すごく嫌いだった」
無機質で消毒薬の匂いしかしない白い場所と、冷たいベッドと、静

寂の中にしたたる水の音。
アスランは呟く。
「お母さま言ってたの。私がもう少し大人になったら、いろいろ伝えなくちゃならないことがある、って。きっとこういうことだったのね」
でも教えてくれる前にいなくなっちゃった、大好きな人。

自然交配による受胎の可能性は依然不明。

一文を見て、ぱたん、とメモを閉じる。
「――そしてきっとイザークのお母さまもご存じだったんだわ」
黙して独白を聴いていたイザークの顔色が不意に変わった。
「……母上が何か言ったのか、お前に？」
アスランはただ見返す。
イザークが中腰になって椅子から立って迫る。
「いいから言えッ！！　あの人になんて言われたッ！！？」
両手首を強く掴まれてメモが落ちる、凍り付いたようなその表情で覗き込まれて、至近距離で視線が絡まる。
目を逸らせない、逸らしてはいけない。
「もう関わるなって」
「いつだ」
「……コロニー演習戦の頃」
「――」
「ゴメン、言うつもりはなかったんだけど」
不意に強く抱きしめて、この肩に頭を凭せ掛けたイザークが言う。
「……すまん」
さらさらと綺麗な音をたてて流れる銀髪のむこうで、気付かなかった、と彼が低くうめいた。

「謝ることないじゃない」
別に誰が悪かったってことはないのだ、きっと。
軍服や手術着や包帯ごしにも抱きしめる熱が伝わってきて、ふと瞼を閉じる。
気持ちいい。
そのままイザークがベッドに上がり込んで、2人分の重みでベッドのマットレスがたわむ。
「スピットブレイクの実施が早まった、俺も行く」
「そう」
戦い、戦い、戦い。
私はそんな話なんか聞きたくないのに。
「お前はとにかく除隊申請を出せ」
もう戦場から抜けろ、と抱き込んだままイザークが言う。
「――後の面倒は俺が見てやる。だから……」
少し間。
「結婚してくれ」
考える。
使用された万能胚の影響で、どうやらまた改変されたらしい遺伝子の適合性は大丈夫なのだろうか、とか。
双方の家のしがらみとか、派閥とか――この人の母君のこととか、厳めしい父の顔とか。
思えば自然と嘆息が漏れる。
「でもとてもいろいろあると思うの。私はこんな状態だし、あと……」
「お前の気持ちが定まっているなら、俺はそれだけでいい」

そうだった。
この人はいつだって、眩しいくらいにまっすぐだ。
そのたゆみなさは、闇に惑う私を救いあげてくれる。

鼻先が触れそうなほどの間近でアスランは儚さをたたえて笑み、やがてイザークの頬に頬を寄せた。
躊躇いがちに腕を伸ばしてやわらかく抱きしめる。
この腕で誰かを抱きしめるのは、きっと初めて。
あんなに近くにいたキラやラスティですら、私は抱きしめたことなんかなかった——どれだけ自分が他人を拒絶してきたのか、今ならわかる。
今度こそ私はあなたの手をとろう——もう、迷わない。
「喜んでお受けいたします、イザーク・ジュール」

かき抱く腕にさらに力を込めて、しばし。
ふと彼が口を切った。
「もうひとつ父方からの名前がある。そちらも教えておくから一応覚えておけ」
アスランは目を瞬かせる。
「名前？」
「……イザーク・ロマーノヴィチ・ミカーイールだ」

Ｒｅｓｔ：　閑話休題（前書き）

関連小話です。拍手や某所に上げていたものに少々付け加えで。
本編にはさほど影響ありませんので読み飛ばしていただいて結構です。
微弱ではありますが、えろ苦手な方は回避推奨です。

Ｒｅｓｔ：　閑話休題

１：◆８月８日お誕生日会はこんなことがありました◆士官学校編

「お、いい感じにできあがってきた？　真っ赤だね」
なあ、と隣に腰を下ろしたアンリが話題を振った。
「こいばな聞かせろよー。初恋なんていつ？　もしかして最近？」
はぁ？　とイザークは手酌で盃を傾ける。
「バカ抜かせ、幼稚舎の頃には済ませた。月の夏祭りでそりゃかわいい人形みたいなのを見かけた」
「へえー」
「持って帰りたかったんだが逃げられた」
人生万事思い通りにならん！　とイザークが嘆いてさらに手酌する。
「……お前って……」
「まあまあ、古傷を抉らずにさ。呑もう呑もう」
「もぉちゃんと入れて下さいよぉ、次誰ですかー？」
マイクを離してアイザックが顔を出す。
「おっしゃエンカいくぜエンカ。俺の歌をきけー！！だぜ！」
「お前あんまりねっとりしたの歌うなよなぁ？　空気読めよ？」

どっかの誰かにとられるくらいならー
あなたをぶっ殺していいですかー

「おいこら待て待て、物騒すぎるだろ。読んでないぞ空気」
「……あれ、イザーク結構回って来ちゃった？」
「バカが！！　こんな水で薄めたような安酒で酔えるか！！」
イザークは突っ伏す。

「いや、結構呑んでるしね……」
転がる瓶と缶とをごっそりよけて、隣にコートニーが座って背をさする。
「なあなあイザーク、彼女できたら何したい？」
「ドライブして朝方のアプリリウス湾見にいくとか……図書館で勉強デートとかか？」
うつぶせたまま、まんまと誘導されるイザークに、あぁそっかぁそうだよねぇと生ぬるく男たちがうなずく。
マイクを離したディアッカがその向かいに腰を下ろした。
「んーでも、女なんか何度かハメて飽きてメール無視して終わりじゃん？」
「そう言うなって、イザークはお前とは生きてる次元が違うんだから」とマクシミリアンが首を振る。
「んで、他は？」
ビールのプルタブをカチリを押し上げて、コートニーがうすら笑いで先を促す。
「あと膝枕で耳かきとか……いちゃいちゃして甘えてみるとかか」
「ああホント純情だなぁお前。さあもっと呑め、んで？」
「……部屋行ってみたり」
「んでセックスか」うんうんとディアッカが頷く。
「……公園デートしてみたり」
「青姦だな」ディアッカがやれやれと肩をすくめる。
「……ずっとメールしてみたり」
「エロ写メね」ピピピと鳴るケータイを引っ張り出してディアッカが応じる。
「……徹夜で長電話とか」
「徹夜でテレフォンセックスかよー」
乗り出したコートニーがディアッカの頭をはたいた。
「ッもういいからてめぇは黙ってろッ！！」
「おいまたやる気かよ？」

「存在自体モザイクなんだよてめぇは！！」
「短小包茎早漏の三重苦がえらげな口叩くなよ！？」
「あぁ落ち着け落ち着け」
「……なんでいないんだ、アイツは。お祝いしなきゃねとか言ってたくせに」
頭上の騒ぎを余所に、テーブルに向かってイザークがか細く嘆く。
「そういやラスティもいないよな」
「しッ」
「来なくてよかったわ、あのコとんでもなく音痴だもの」
こないだ妙な歌口ずさんでたから聞いたらｑｕｉｅｔ　ｎｉｇｈｔ　オルタナティブｖｅｒ．だった、とシホはページをめくって端末で入力する。
「いったいどこの民謡かと思ったくらいよ」
「へえ？……だから来なかったのかな……」

オレのジンはオレンジのジン～

「なあ、隣誰だよ。めっちゃビブラートきいたナイスボイスなんだけど」
「わかるでしょ、たぶんあのヒトよ」
「ああ……休暇なんだね」

ーーーーー

2：◆エロは国境と種を越えるかもしれない◆えぴろーぐぶりっじ

その後1

着任から1週間経ち――

ヴェサリウス内休憩コーナー。

「やつれてんな、ラスティ」

一角で紙コップのコーヒーを飲んでいたディアッカが振り仰ぐ。

「お前もね。前髪落ちてるよ」

ラスティはその傍らに腰を下ろす。

「それなに？」

「トアルコトラジャのブラック」

「ちょっとくれよ」

紙コップを上から取ってラスティは一口飲み下す。

ディアッカが簡潔に問う。

「欲求不満？」

「まあね」

以前との立場の変化に、正直逃げられてしまうかとも思っていたが、別段アスランは婚約者というのにも違和感もない様子で相変わらずマイペース。

ただ、あのアスランの潔癖症はたぶん父親の女性関係の影響――

その辺りでひどく反発しているせいか、まだ女であることを望まず男を受け入れる余地がない彼女のことだ。

ここから先に進むにはとにかく時間をかけねばならない、あとは自分の心持ち次第なわけだが。

「……隣でごろごろ寝転がられてると結構ツライんだよね、年頃の男子的には」

正直抱きたい、と前屈みでラスティがぼやく。

「そりゃそうだろ。そもそも俺らに女断ちなんてムリだよなぁ、いい加減俺もツライわ。あぁアイリーンに会ってめちゃくちゃにイジ

メられてぇわ」
天井を振り仰いでディアッカも嘆く。
「2人して何煩悩まき散らしてるんですか？　寝ないなら夜勤交代しますよ？」
軽やかに緑色の髪をふわふわと漂わせながら通りがかったニコルが足を止めた。
「そりゃあお前はアビーとほのぼの純愛だから楽しいだろうさ。けどな大人になっちゃうとそういうわけにはいかないんだよ」
ディアッカがひらひらと手を振る。
「やだなあ。すっかり粘膜に支配されてますね？　大人ってきったないなぁー」
天使の笑顔でニコルが言い放ってアビーの待つ艦橋へと向かった。
「……粘膜か」
ラスティは呟く。
「……粘膜だな」
ディアッカが応じた。
愛など粘膜の錯覚にすぎん！と言ったのはどこの誰だったか。
「でも俺らってその集合体だよな」
「うん、まあ地球の海でうごうごしてた単細胞生物の頃からそこは変わってないわな」
ゲル状生物からヒトへ進化する途方もなく長い過程を考えると、ナチュラルとコーディネイターの差異はほぼない同然ではなかるまいか。
ラスティは思う。
粘膜の錯覚いわゆるスケベ心に翻弄されるのはナチュラルもご同様だろうから、そこを突けば案外相互理解はスムーズにいけるんじゃないのか？

ーーーーー

3：◆問答無用◆えぴろーぐぶりっじその後2

ヴェサリウス内食堂。
艦内放送でラスティが呼び出された。
「ごめん、行くわ」
「ううん。行ってらっしゃい」
あわただしくトレイを下げる姿を見送って、アスランは再びスプーンを手に取る。

ロールキャベツ、やっぱりカリダおばさまのがおいしかったなぁ……

背後をトレイを持った誰かが通ったあと、少しまたこちらに戻ってくる気配があった。

さわり。

ん？

……お尻に何か触った？

さわさわ。

今、絶対確かに触られた。

「……」

アスランはぱくり、とスプーンを口にくわえてスープを飲み下す。

誰よ?
「あんな坊やじゃ足りないでしょ。おじさんテクニシャンだよー?
もう潮吹きまくりの濡れ濡れよ」
下品というにもひどすぎる囁き声に、アスランはスプーンを置いた。
「んでどう、今夜?」
そして続く撫で回すような感覚。
アスランは振り返らないままにグイ、とキツく手を掴む。
「歯ァくいしばりなさい」
「え」

◆◆◆

椅子とテーブルがひっくり返り、陶器の食器が砕け散り金属の食器が落下する凄まじい音が廊下にまで聞こえた。
聞こえてくる男の野太い悲鳴に、ギョッとしてラスティは足を止める。
今出てきた食堂のほうだ。
な……なんだよ!?
やがて失神状態で担ぎ上げられて運び出されていく緑服エンジニアを見送り、ラスティは食堂に飛び込む。
「ちょ……どうしたんだよッ!? 何があったッ!?」
荒れ果てた食堂で怯えているクルーたちに遠巻きにされたどまんなか、仁王立ち腕組みのアスランが剣呑な目を上げた。
「あれ、アスラン? お前?」
「セクハラされた」
ムスッとしてアスランが言う。
「え」
「私に触ろうとする場合、選択肢は3つよ。

1．死ねば？
2．っていうか死ぬ？
3．むしろ撃つわよ？

ということで、殴るだけで済んだんだから感謝してもらわなきゃね」とアスランは物騒極まりない。

「……」

そうだった。

普段可愛いから忘れてたけど、結構過激なんだったよアスラン。

「私に触ってイイのはラスティだけよ！」

それは嬉しい。とっても嬉しいんだが。

「でもさ……お願い、あんまり無茶しないで」

俺の心臓が潰れちゃうから、とラスティは怒っているアスランの細い両肩を掴んでうなだれた。

本来なら処罰というべき場面だろうが、仮面隊長は「レディに失礼なことは控えたまえな」と苦笑いで話を終えた。

ありがたい限りだ。

そしてそれ以来、アスランに挑もうという命知らずは姿を消した。

えーっと……イイとは言われたけど、やっぱり俺もうちょっと待つことにします。

ーーーーー

4：◆苦労人の心配はたえない◆えぴろーぐぶりっじその後3

ヴェサリウス内ミーティングルーム。
ひとり研修用書類をめくっていたその時、ドアが開いた。
やっと終わったらしい、とラスティは目を上げる。
膝の上につなぎ姿のアスランが腰を掛けた。
「やっと整備終了――」
白い頬に機械油がついているのでラスティは手の甲で拭う。
「お疲れ」
鼻キスついでに指先に蒼いはねっかえり髪を絡めてみる、長くないのは惜しいがこれはこれで可愛い。
「ご飯もう食べちゃった？」
「いーや、待ってた。行こうか」

「――――アスランッ！！」

以前よりもはるかにパワーアップしている怒鳴り声が轟いて、膝の上のアスランは一瞬肩を震わせた。
「ベタベタしてるんじゃないッ！！　見苦しいッ！！」
ガモフにいたはずのイザークだ、停泊で物資搬入のついでにヴェサリウスに渡ってきたのか。
「そんなにしてる？」
アスランも困り顔だ。
「いーや全然」
もっと大胆になって欲しいくらいだ。
別に逢瀬を見せつけてるつもりじゃなく、むしろ隠そう隠そうとしているのに、その都度ヤツがどこからともなく現れる。
ラスティは渋い顔で、怒りに紅潮しているイザークを見る。
「お前風紀委員かなにか？」
というか……ストーカー？

まさか盗聴してないよな？
「軍律の乱れはゆるさんッ！　隊長がお呼びだッ！！　来いッ！！」
「そんな艦内放送はなかったろ」
「さっき聞いた！！」
「こんなつなぎ姿じゃ艦橋に入れないでしょ」
「いいから来いッ！！！」
とイザークは憤然として渋るアスランを引っ立てていった。
すぐ戻るわ、というのでラスティはやむなく見送る。

……粘着質な愛だ、そりゃあアスランも重さにドン引く。

見合い話浮上の時、未知なる世界に引きずり込まれそうと危惧していたのを思い出す。
あれで婚約者になっていたらどうなってたのか……
多分全力で孕ませにかかって除隊させて邸に閉じ込めておくだろう、イザークはそういうヤツだ。

あの盲目的猪突猛進な一途っぷりときたら、もうなんと表現したらいいのか。
ヤツは世界の半分は女だってことを忘れてる、絶対間違いない。

というか相手のアスランに「お友達で」と断られてこの自分との婚約に走られて、ディアッカ曰く「母親におさえつけられてる」という過酷な状況で、ヤツは全っ然諦めてないらしい。
今ですらほっとくと本気で奪いに来そうな勢いだ。
上にお願いしてガモフに分乗させたのは賢明だったらしい、それでも時々こうやってこっちにもやってくるので、かなり心配ではある。

いやあ、わかってたけどさ。ホントとんでもないヤツを敵に回しちゃったなぁ、俺。

初夜とか無事過ごせるのか？

ーーーーー

５：◆こう思いました◆ばすたー降伏直前

ディアッカ「くッ……遺品でＨＤＤとかケータイのなか見られたら超えらいことになるッ！！やっべ、ｋａｋｉｋｏｍｉ．ｔｘｔそのまんまだぜッ！！？　ここで死ねるかよッ！！」

ーーーーー

６：◆腰が思いっきり引ける今日この頃◆コロニー演習戦前シミュレーション漬け

ブースで銃を撃ち放っている最中、ずかずかとイザークがやってきて、お前はデコッキング時手首を捻る！　といきなり左手首を掴んだ。

「……見えてた？」

アスランは小首を傾ける。

左撃ちの時のクセで、そもそも気にはしていたのだけれども、この人は目ざとい。

「見苦しいから直せ。支えておいてやる！」
確かに第一種軍装などで手袋をはめるともなれば、手首のクセのせいでデコッキング時につるりと滑りかねない。
そもそも装填状態でそうなれば、暴発の危険がでてくるから気分的には若干緊張する。
背後にイザークが立ち、アスランの腕を一直線上に伸ばしてそのまま左手首を支える。
「このまま動かすな」
支えられていればギプスをはめているように安定する。
「手首から指先まで抜けるようにまっすぐだ。……このかたちを覚えろ」
「はい」
ともに同じ先を見据える。
一呼吸して、ゆっくりトリガーを引いてハンマーを戻してレストに入れる。
「よし、上等だ」
イザークは割にいい指導者であるのかもしれない、とアスランは思う。
「もうお前はフルオートマにしろ」
「でも半マニュアルのほうが微調整しやすいわ」
「だからとこだわってブレたらつまらんだろうが。筋力つけろったってこの手首じゃ鍛えようがない」
まだ構えを維持している状態で、この左手首に長い指が這って、思わずドキっとした。
「細いな」
ぼそり、とイザークが呟いた。
「あの……イザーク？　もう腕下ろすわよ？」
「……」
耳元で少々荒くなった吐息が聞こえる、なにやらまた刺激してしまった？

もう今にも「お前が欲しいこのまま抱かせろ」とでも言い出しそうな熱が間近で、途方に暮れる。
ただひたすらに肉薄される、しかも最近シミュレーター訓練する度ということで毎日ずっと、最近この人はもう欲情を隠そうともしなくなった。
指が銃を握る左手に絡む。
「あの、」
「この左薬指のサイズはいくらだ」
指が絡めとられて、思わずグリップが冷や汗で滑りそうになる。
「えっと」
なんで訊くの？　なんて訊いたらやぶ蛇だろう。
「……計ったことないわ」
「プラチナとピンクゴールドとどっちがいいんだ？」
だからなんでそういう話になるの！？　とは絶対口に出せない、深追いするとこの上なく厄介だ。
必死に回避すべく努力する、これはもう対ゲリラ戦訓練並みに気力を使う。
「あの、私金属アレルギーだから」
「その割にはピアスホールがあるな」
恐ろしいほどイザークは目ざとい、普段耳たぶなんて髪に隠れてるのに。
どこまで重箱の隅をつつくのかとつねづね思っていたが、とんでもなく観察されていたらしいことに戦慄すら覚える。
「えっと、アレルギーは後天的に、ね」
「ならプラチナだな」
これ以上地雷は踏み抜きたくない。
「……とりあえずこれ始末してしまうわ、ゴメン。ちょっと離して」
ようやくに腕が離れたものの、背後にまだ熱を感じる。
また何か観察されているのだろうか、と思えばはなはだしく心臓に悪い。

いや、別に仲良くするのは一向に構わない。
額にキスとかなら全然歓迎する、いくらでもどうぞと言いたい。
しかしもはや、その程度では満足していただけないらしい……
結婚前の淑女は初夜まで貞操を守るのが義務、男性にうかつにからだを触れさせちゃだめよーと言っていた母の言葉を思い出す。
このままでは遠からずそれが守れなくなりそうで空恐ろしい。

ということで今日もアスランはひどく憂鬱だった。

＊＊＊

そしてまた今日もコロニー戦前シミュレーションのオンパレード。
イザークにずりずりとひきずられるように、アスランはとぼとぼと歩く。
あああラスティのばかばかばかばか、と裏切った橙色の彼を心底恨めしく思う。
でなければ、今頃のんびりと食堂でおかしをつまんでいたはずなのに！！
シミュレーションなんてすぐ終わるのだ、そもそも。

問題は「存分に相手してやる」、の真意。

膝の上に座らせて好き放題、髪を撫でる、肌に触れる。
訓練よりこっちのボディランゲージな時間がよっぽど長いんじゃないかという話だ。
抗えば何されるかわかったものではない、というだけが理由でもなく、ひたすらなすがままになる。
イザークは肩から流れ落ちるこの蒼い髪がことにお気に入りのよう

で、絶えず愛であげる。
「邪魔なら結ぶわ」
膝の上で髪をもそもそいじられながら、もう気分的に半泣きだ。
「いい。お前のこれはラブラドライトのブルーシラーだな、実にいい」
なんだかよくわからないけれども、この髪が欲情を絡めとっているような気がする。
……これもう絶対切ろう、美容院でボブにしてもらおう、とアスランは決意する。
「俺は黒い下着は好かん」
それならご自身おつけにならなければよろしいだけの話なのでは、なんて思う。
「控え目な白がいい、でなければ薄紅くらいだ。その方がお前の肌に映える」
えーっと、これ以上は全力でスルーしよう、うん。
私は何も聞いていない。
シークエンス8からスタート、データパス、キャリブレート接続OK、オール戦闘モードで起動……
腰に腕が回る、タイトスカート裾ぎりぎりのラインでむきだしのふとももに熱い指先が触れる。
「こっち向け、俺の目を見ろ」
▼まわりこまれてしまった!!
▼にげられない!!
至近距離のアクアマリンにも似た眼差しを見返す。
自分がとんでもなく呆けた顔をしているのが鏡のように映って見えた。
やがて頬に頬が触れる。
誰か助けて……もう本気で泣きそうなのに逆らえないって、これは

なに？
イザークってなにか洗脳術使ってる？
民俗学って学問なのに、まさか呪詛とか使役術とか言魂とかカバーしてるの？

などととめどなく無言のパニックになってみても状況は変わらない。
詰め襟のホックが外されて下がるファスナーとともに緩んで、首筋に唇が触れて舐められる感触がした。
やだやだぞくぞくするんだけど！！
「なんの匂いだ、お前香水なんかつけてたか？」
「シャンプーとボディーソープだと思う、どっちもエリザリオ・ミリオリティローザリアム」
「悪くない、薔薇は好きだ。ずっとそれを使えばいい」
やだやだやだやだそれどういうことっ！？

矢先、ドアが開いた。
「あ、れ？」
この声は、マクシミリアン！！
ちょうどよかった！！
降りるべくしてぎこちなく筋肉に力を入れた瞬間、先読みされたようにぐいと引き込まれた。
▼まわりこまれてしまった！！
▼にげられない！！
また！？　なんなの実はイザークってラスボス！！？
「おい、邪魔だ！」
「うわっ、ごめん」
「ついでに電気おとしてけ」
「あーはいはい、お邪魔しました。ごゆっくりどうぞー」

え、触らぬ神に祟りなしってこと!?
待って待ってやだやだやだなにそれ逃げないでーっ!!!

抱え上げられる浮遊感のあとで、どん、と音を立てて背中が床にぶつかる。
その上からイザークが押さえつけるようにのし掛かってきた。
その合間にも膝が押し広げられて、体の重みがかかる。
何!? どういうこと!? この自然すぎて気味悪いくらいのアマルガメーション(連の流れ)は何!?
しかもなんだかふとももも内側に硬くて熱くて大きいのが存在感たっぷりになんか当たってる!?

ど、どうしよう――この薄暗い部屋に、ふたりっきりでこの体勢って。

「慰み者にするつもりは毛頭ない、責任はきっちりとる!」
慌ただしくバックルの外される音を聞きながら、ぐるぐる思考は回る、だが結局一言しか喉元から出ない。
「……何するの?」
あああ私のバカ!!
「そりゃあ男女がすることったらひとつだけだろう」
わからないか、とひどく嬉しそうに熱っぽい彼がのぞきこむ。
「少々痛いのは我慢しろ、俺も不得手で加減がわからん」
まあ実地で慣れていけば大丈夫だろ、というひとことにくらくらする。

失神しそう……
でも今失神したら、とんでもない状況で目が覚めるんじゃないかな

……
あああああごめんなさい、お母さま。でもこれって不可抗力だと思います。

その時、投げ出した左手首につけている腕時計兼通信機が機械音を立てた。
通信――
「もう就寝時間だろうが、いちいち出るな」
からだの上、キャミソールをめくられてブラ一枚となった胸の合間からくぐもった声が聞こえる。
おっぱい星人発見……というか一匹捕獲……むしろ拘束されたのは私？
とりとめもなく考えながら、懸命に首をようやくに捻ってちらと見やる。

００８８８－ｘｘｘ－０９９９９ｘ
国防総省国防長官官房

「……お父さま」
呟いて、ハッと我に返る、ようやく呪縛が解けた！！
声が出る、動ける！！
あああああもう涙が出そうなほど嬉しい！！
「やだ、待って待って！！　出ます出ますっ！！　もうちょっと、どいてイザークっ！！」
「てっ！！」
得意の瞬発力で跳ね起きて、脚で強引に蹴りのければイザークがつんのめった。

いける！！
「モニターに映り込んじゃったらとってもマズいから出てって！！」
「おいっ！！」
そのまま勢いに乗じて力づくで追い出して、シミュレーション室唯一のドアにロックをかける。
やがてアスランはドアにもたれてへたれるように座り込んだ。

あああああよかった、本当によかった、助かった、もう絶対イザークと一緒にシミュレーションなんかしない！！

救いの神とばかりに、胸元をかきあわせて涙目でアスランは通信をＯＮにする。
「はい、アスラン・ザラですっ！！」

（それが嵐を呼ぶ縁談の通告だったなんていうのはまた別のお話）

Ｒｅｓｔ：　閑話休題（後書き）

ただの戯れです、ええ。
で、劇場版はいかがあいなりますのでしょうか？　いいかげん栄養が足りませんのです。
（予想：１．ＳＥＥＤガンダム登場　２．盟主聖帝の次のラスボスはたぶんあの人　３．悲運の桑島ヒロイン５人目登場）
あとＴ．Ｍ．Ｒ．いいですねｌＵＮＤＥＲ：ＣＯＶＥＲがロックでステキです。艶歌恨歌演歌の次に白艸マイブームです。

Past: Copernicus－1（前書き）

何もなくて、とても穏やかで、僕らの原体験で、そしていつか帰る場所。

Past: Copernicus－1

僕らはちっちゃい頃からずっと一緒だった。
だからアルバムなんてどのページめくっても、あれもこれも二人で写ってる写真ばっかり。
そもそも僕ら一人っ子同士だったし、近所のおじさんに言われるまで本気できょうだいだと思ってた。
それくらい毎日一緒だった。
同じ育児サークルに入ってた母さんたちはすごく仲がよかったし、家はとても近所だったから毎日のように遊んでた。
僕んちにはアスランの洋服とか食器とかがあったし、アスランちにも僕のパジャマとか着替えとかちゃんと置いてあった。
まあ、レノアおばさんは結構留守することが多くて、たいがい泊まるのは僕んちがメインだったけど。

しっかりしてるからアスランがおねえちゃん、みたいに周りは言ってたけど、でも僕のほうが生まれたのは5ヶ月早い。
それにアスランて案外ぼけててぼーっとしてるところあるから、実際は僕がおにいちゃんなわけだ。
で、母さんは毎日毎日そんな僕らに言ったもんだよ。
「あやしい人についてっちゃダメよー？」って。
そりゃあもちろん、いくら幼稚園児だからってバカにしないで欲しいな。
いくら平和な僕らの街ったって、あやしい大人がいるのはよーく知ってる。
おかしどう？　とか。
おいしいジュースあるよ、とか。
おもちゃあげようか？　とか。
あとなんだかよくわかんないけど、鬼ごっこしたがるすっぱだかの

おじさん、とか。
そりゃもう子どもだって毎日スリリングだよ？
僕だけに声をかけてくる人もいっぱいいたけど、アスランも大変だった。
うっかり目を離すと、なんかお菓子にふらふらついていこうとしてるんだもん。
だから僕は毎日チョコレートをぽっけに入れてた。
でも溶けちゃうんだよねえ、チョコって。

ま、危ないのは大人だけじゃなくて子どももなんだけど。
あれは確かみんなで一緒にコペルニクス市庁舎３０年まつりに行った時のことだ。
おこづかいもらって出店めぐりで、人波にさからって、ふたりでうろうろ歩いてた。
「きーら？」
「どしたの、アスラン。ちゃんと手を握っとかないとはぐれちゃうよ」
振り返ると、アスランはもってなかったはずの綿あめぺろぺろしながら、なんかよくわかんないって顔でずりずり引きずられてた。
多分ちょっと年上くらいの白い髪のおかっぱがへの字口でずりずりアスランを引っぱってたんだ。
僕はそりゃもう焦った、泣いちゃいそうだった。
これはもう絶対ゆうかいだ！！って思ったもん。
「ああミーシャさまは困ったものですねー」
「今度はお人形さんですか？」
なんて向こうのスーツ着た大人たちが笑ってるものだから、もうビックリ。
止めないの！？
何それ、おかしいよ！？
「やめてよ！！なにするんだよ！！」

ひきはがそうとしたら、その蝶ネクタイ半ズボンでおめかししてるおかっぱがぶすっとして言った。
「うちに持って帰る」
なんで!?
「も、持って帰る!?　って何それ!?　やめてよねっ!!　アスランおもちゃじゃないんだからっ!!」
泣き虫はダメ!!って言われてたけど、本気で泣きそうだったよ、僕は。
いつもだけど、こういう時に限って母さんたちいないんだもん。
必死でぺちぺち叩いて髪をつかんでぐしゃぐしゃにしてたら「いたいいたいいたいッ!!」てぶんぶん腕を振り回してた。
で、そんなぎゃあぎゃあ騒いでる僕らのわきでアスランはのんきに靴はき直してたわけだ。
そんな場合じゃないってばー。
「逃げなきゃ、どっか遠くに連れてかれちゃうよ!!」
「え!?」
どうしてそこまで言わないとわかんないかなぁ、だから僕はいつも大変なんだ。
とにかく慌てて一緒に逃げ出したら、すごい金切り声が聞こえた。
あんな声僕は初めてで、ホントびっくりしたよ?

「なにあれ?　って君はあの時言ってたけど、僕のほうがききたいくらいだったなあ」
「そんなこと忘れちゃったわ、それってもう何年前の話?」
難しい顔で、教室の小さい机挟んで向かいに座っているアスランが水筒の紅茶を飲む。
白地に紺色の襟のセーラー服が似合う歳になっても、アスランは相変わらずアスランのまま。違うっていったらせいぜい髪の毛が肩く

らいになった程度？
でも相変わらずっていうのは、きっと僕も同じなんだけどね。
「市制プレ５０周年のイベントがあった年だったから、えーっと、７年前？」
そのまま僕も紅茶のお相伴に預かる、イーラムのブレンド紅茶はちょっと渋いんだなあ。
「キラってどうでもいいこと覚えてるんだから、もう」
頬杖をついたアスランが不満げにお弁当をつつきだした。
「……お母さまってば、卵焼き焦げてる」
なんか焦げ臭いと思ったらそれだったんだ。
「今日はレノアおばさん作ったんだ？」
珍しい、毎日学校にはアスラン自作してもってくるのに。
「なんだかお花見に持ってくお弁当の練習！！　って言ってたの。でもいったいいつのお花見に持ってくの？　これじゃ絶対明日になんか間に合いっこないわ」
「でも昨日母さんが食材買い込んでたよ、全部作るつもりだと思うけど」
「そのほうが絶対いいってば！　お母さまがアプリリウスから帰ってきて以来、最近ずっとお台所が焦げ臭くって」
向こうでお父さまが何か言ったんだと思う、でもそれってすごく迷惑。とアスランはぼやいた。

C．E．６７、１２歳の僕らは月のコペルニクス市立中央幼年学校で、相変わらず一緒に過ごしてた。
来年３月卒業で、僕らは上級学校に通うことになる。
そういう風に僕は進路調査には書いていたし、アスランもそう話してた。

そして幼稚園時代から相変わらずモテモテなんだよね、アスラン。
「ちっちゃい頃のアスランてどんな感じ？」
「今と変わらないよ」
ホント、マイペース。
「ジブの好きなものってなーに？」
「桃と、うちの母さんのロールキャベツ」
たぶん三食それでも文句言わないと思う。
「なあなあ、もしかしてお風呂とか一緒に入ってた？　もしかして今でもとか……」
「そりゃもう――」
質問攻めには飽きたから、ここぞとばかりに僕は強調する。
「アスランて、全身真っ白だよ？」
って言っても、ここ４年は一緒に入ってないけどさ、多分変わってないと思う。
そこは隠しておくけど、周りのビックリな反応ってすごく楽しいよね。
ドアが開いて、きょろきょろしてるクラスメイトが言った。
「あれ、ジブは？」
ホクハが訊くから僕はごくごく素直に答える。
「知らない。帰ったんじゃない？」
「そっかー」
仕方ないな、ってホクハはいつもながら諦めがいい。
スポーツ少年ていいよね、さわやかで。

そのまま端末に向かって課題を始末してたら、教室のドアが開いた。
「あら？　ホクハは？」
アスランがきょろきょろしてる。
「いたんだ。帰ったと思ってそう言っちゃったよ」
ちょっとそれは嘘だけど、アスランは僕の言うことを疑ったりしないから全然問題ない。

今から行けば校門あたりで十分捕まえられるかなとは思うけど、それは秘密。
「そっか、せっかく一緒にプラモ組み立てようと思ったのにな」
残念そうなアスラン。
「そんなの僕がやるってば」
「キラっていっつもスミ入れ手を抜くじゃない。あれ結構重要なんだから」
よくわかんないんだよなあ、そんなに溝を黒く塗るのって大事？
「それってホントどうでもいいと思うんだけどね。じゃあ今日はちゃんとやるよ」
課題も終わったし、アスランも委員会の仕事が終わったみたいだから、今日はもう帰ってプラモ制作だ。
そのままクラスメイトにバイバイして、アスランと一緒に校舎を出た時、人工照度の空はじき夕方って感じの黄色だった。

夕焼け小焼けの月の空ー

「……アスランへったくそ」
「キラだってそんな上手くないでしょ」
ああムッとしてるムッとしてる。
「君に比べれば全然マシだってば。なんならこれからカラオケ行ってもいいよ？」
「いい！」
ほっぺた膨らんでら。
アスランて負けず嫌いなんだよねえ、お姉さんのつもりだからだろうなあ。
だからご機嫌とるのも結構疲れるんだ。

「桃食べる？」
「ん？　いつの間に？」
ほら釣れた釣れた。
「お昼一緒に食べようと思っててすっかり忘れてたんだ」
僕らの帰り道にある、丘の上の空中公園は、結構観光スポットだったりする。
市内中心部が一目で見渡せるから、いつだってカップルや親子連れで人気が絶えない。
眺めはたぶんコペルニクスでいちばん綺麗だと思う、ここからの夜景とか僕は大好きだ。
ベンチに鞄を下ろして、水道で洗った桃を渡したら、やっぱり白桃よねー！！　とアスランは丸ごとかじりつく。
「ナイフで皮くらい剥けばいいのに。かしなよ、剥くよ？」
「しっかり揉んで、じゅくじゅくさせれば十分！　この薄い皮って指先でつるんて剥けちゃうんだから」
僕は固めのほうが好きだけど、まあいっか。
人の好みはそれぞれだし、剥いた皮についた身すらもったいないっていうアスランの主張は知ってるし。
ベンチに座って、桃を食べながら、ふたりでぼんやりとコペルニクス空中庭園から人工照度の落ちてきた街を眺めていた。
この市は月で一番の自由都市。
地球とP．L．A．N．T．を繋ぐ場所で、他の街よりもよっぽど安定してる街って母さんが言ってた。
大人って大変だよね、新聞読んでニュース見ていろいろ心配してる。
でも月は自由同盟が強いからきっと大丈夫だと僕は思うんだ。
ここって中立を守る！　どんな喧嘩にも加わらない！！　って約束で成り立ってるわけだし、地球から来たエラい人たちだって住んでるんだから。
「やっぱり西地区、イイよね」

僕はつねづね僕らの街をそう思ってる。
学校も近いし、中央病院も近いし、スーパーも多いし、なにより市内中心部に近くて便利な場所。
「１０年もしたら、宅地造営が完成してまた団地ができるんだってさ」
コペルニクス市の人口は増え続けてるから、どうしたって地価は高くなる。
でも一括はムリでもローンで家は買えると思うんだ、父さんみたいなサラリーマンでも買えたんだし。
「僕はマンションより一戸建てがいいなぁ。どう？」
「どっちでもいいんじゃないの？」
一戸建てはお掃除とお手入れが大変！！　とアスランは背伸びする。
「でもとりあえずＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．のマイウスかマティウスがいいな、お勉強いっぱいできそう」
ちょっと予想外だった。
「あれ？　コペルニクスじゃダメ？」
「ううん。だって月って綺麗って言うじゃない」
「ん？」
「外から見てみたいな。住んでたら見えないもの」
ああそういうこと。
「マイウスとかマティウスっていうのは？」
「いつかは木星に行ってみたいの。航空系ならマティウス、機械系ならマイウスでしょ」
Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．ははっきりくっきり分業されてるんだ。
それにしたってアスランのそんな夢、はじめて聞くなあ。
「ファーストコーディネイターが行ったペネロペクレーター、一度は見てみたいな」
「ふーん。羽根クジラ？」
「そう。楽しそうでしょ、羽根クジラ探し！」
アスランがにっこり笑う。

「でも、あれって往復に１０年はかかったって言うよね」
「そうねーそれが問題？」
「まあ悪くないんじゃないかな」
ふたりなら長旅も楽しいと思うんだ。

玄関にいつものように靴があったから、そうだろうなあとは思ってたんだけど。
「あらお帰りなさい、キラくんにアスラン」
レノアおばさんが、いつものように母さんの向かいでお茶を飲んでた。
蒼い髪に碧の目で、つるっつるの肌。
ホント、いつ見てもどんな服着ててもどの角度から見ても相変わらず美人。
ヒミツだけど僕の初恋はこの人なんだよね。
「いい匂いだね、母さん。コンソメ？」
「そうそう春キャベツのロールキャベツよ。ユニウス直送レノアの新作キャベツがやわらかくって」
「ねえねえカリダ、それって私もごちそうになってよい？」
ふふふっとレノアおばさんが身を乗り出す。
「やあね、もちろんそのつもりだったでしょ？――今日はハルマも留守だしゆっくりなさいよ」
「ありがたいわねー。ホント亭主元気で留守がいい！！だわ」
いつもながら仲間外れで、ちょっと父さん気の毒。
女性陣には逆らわないのがいいんだよ、って普段言ってるのは多分大人の知恵なんだろうなあ。

レノアおばさんはアスラン回収、とか言いながらちょくちょくやってきてはお茶を飲んで夕ご飯を食べていく。
よっぽど母さんの料理が好きらしい、それとも母さんが好きなのか

な？
まあ似たようなものだよね。
「料理ってどうしても苦手なのよねぇ……主人にも呆れられちゃって、この前自宅に帰った時もうおたまを持つなって言い渡されちゃったわ」
「お嬢様育ちはそういう時に困るわよね」
くすくすと母さんが笑う。
「でも大丈夫、コペルニクスの私には強い味方がいるのよ！　アスランがお手伝いしてくれるもの。ね？」
レノアおばさんは常に前向きだ。
「だってお母さまに任せておくと、焼くだけのお肉だって炭化しちゃうでしょ」
制服を脱いでワンピースになったアスランがおそろいのマグカップを両手に持ってきた。
「はい、キラ」
「ありがと」
ちょっと牛乳多めのココア、アスランのいつもの味。
そして僕らは食卓にいつものように向かい合わせだ。
「手作りのお弁当なんかもうあきらめちゃったわ。素人が目分量って絶対ダメよね？　おばさま」
「そりゃあもう。まずは量らなきゃね」
「やあね、飽きちゃったのよ。目盛りを読むのはラボでだけで十分でしょ」
僕は時々思う、レノアおばさんてやれば多分できるんだ。
ただ単にやる気がないだけなんだよね。
で、想像がつかないんだけど（っていうのも失礼だけど）そのレノアおばさんはとっても忙しい人で、農業コロニーでせっせと研究をしてるらしい。
どうすればもっと増やせるか、とか。
どれだけのサイクルで生産していけるか、とか。

「食べ物はとっても大事なのよ、命をつくるんだから」
レノアおばさんはそこだけは譲れないって感じで言う。
「そうであるからにはやっぱりおいしくなくちゃダメよ！　味と食感と風味は大事！！」
食にかける執念というか……レノアおばさんとアスランてやっぱり似てるんだよねえ、見た目だけじゃなくて。
「そして大事なのは料理する人のまごころと腕ね！　その点カリダは理想的っ！！」
そして母さんは嬉しそうに今日もせっせとご飯を作る。
もしかしたらすごいいいコンビなんだろうか、と僕はいつも思うんだ。

そんなレノアおばさんがコペルニクスを離れている間、いつだってアスランはうちに泊まってる。
ここ最近なんか、２人で徹夜でテレビゲームなんて毎日だ。
ご飯食べてゲーム、お風呂入ってゲーム、寝る前も電気消して布団の中で頭だけ出してゲーム。
シューティングからアクションからレトロＲＰＧからホラーまで。
さすがにネットゲームはまだ早いってセーフティかけられちゃったけど、それだってホントは学校でできるんだ。
今夜も布団から頭だけ出して、ふたりでエンディングのスタッフロールを眺めてた。
「きーら」
隣でアスランが言う。
「何？」
画面見たまま僕が訊く。
「これ裏面あるって、ヴァレリー言ってたわよね？」
「確かエンディングの暗転でＡコントロールの上下上下斜め右のＡＢＡＢセレクト３秒以内」

「りょーかい！」
ぐりぐりコントローラーのレバーを押しまくって、ＡＢボタンは残像でぼやけるくらい連打連打。
そういえば僕らもう何回コントローラー新調したっけ？
「もうやだ、まだやってるの？　もう2時よぉ？」
寝ぼけ眼で、母さんがリビングに顔を出した。
「いい加減になさいよ2人とも……目が悪くなるわよ？」
僕ら勉強とか日頃の行いに全然問題ないから、多分他に言いようがないんだと思う。
母さん困ってら。
「ほらアスランだってメガネなんかしたら美人度3割引になっちゃうわよ？　綺麗なおめめが隠れちゃうでしょ」
うーん、とアスランはひとつ唸った。
「じゃあ、ちょっとだけ控えます」
僕らはコーディネイターだし、そこまで気にすることないし、でもメガネはメガネで可愛いと思うんだけどな、僕は。
でもコーディネイターっていっても、やっぱり千差万別。
「疲れた？　ほっぺた赤いよ」
「やっぱり？　熱っぽいの」
額に手を当ててみる。
「ホントだ、熱い」
アスランは結構すぐ体調を崩す。調整がどっかでうまくいってないんじゃないかな、と僕はわりと心配だ。
「きーら」
その呼び方の時って、たいてい質問とかお願いごとの時だよね。
「なに？」
「お水ちょうだい、ちょっと喉渇いた」
枕に突っ伏したアスランが言う。
「待っててよ」

コップ片手に戻ってきたらアスランはとっくに寝てた。
もう爆睡、いつもみたいに揺すっても声かけても起きない。
熟睡してる時って、多少いたずらしたって全然気付かないんだよね。
知ったら怒るかなあ？
でも怒らないような気もするけど、まあちょっとそのあたりは不明
だからやっぱり秘密。

その後僕はずっと側で本を読んでた。
アスランはただ寝てた。

ずっとこんな毎日が続いていくんだって、本気で思ってた。
それくらい僕らを取り巻く小さな世界はどこまでも平和で、僕らは
本当に子どもだった。

Past：Copernicus－1（後書き）

T.M.Revolution －夢の雫「Under：Cover」

Past: Copernicus－2（前書き）

ひんやりしてる君と、微熱ぎみな僕と。

Past: Copernicus－2

ああまたやってる、って僕は校舎2階の教室から放課後の中庭を眺めてた。
彼、「好きなんだけど」って多分言ってる、あのほっぺたの赤らめっぷりと唇の動きは絶対そう。
「ありがとう」ってアスランはきっとまたそう答えてる、あの冷たい笑顔はもうそれ以外ない。
「あの……」って彼困ってる困ってる、なんか切り出そうとして頑張ってる。
でも、ん？　てアスランは首をかしげてにっこりと笑う、でもやっぱり目が笑ってないんだよなあ。
「だから、ありがとう」
キタコレ、いつものトドメ。
やっぱり会話途切れちゃった。
いつもながら気まずそうすぎてもう見てらんないよ？
ということで僕は窓から首をひっこめて、また窓枠にもたれかかった。

こんなのいつもの見慣れた光景だ。

アスランはとっても綺麗ににっこりと笑って話を終わらせちゃうから、がんばろうにもそれ以上とりつく島がないんだ。
みんなたいていそこで諦めるし、今日の相手もそうだったっぽい。
ということでまた犠牲者がひとりふえたというわけだ。
じきに教室の後ろのドアが開いて、「かえろーキラ」ってアスランはあくびして背伸びしながら戻ってきた。
「呼び出しってなんだったの？」
見てたからわかりきってるけど、まあアスラン的見解を訊いてみる。

「ホントどうでもいい話。帰ってご飯のお手伝いして、さっさと中ボス倒さなきゃ」
アスランは鞄をひっぱりだして、教科書を詰め込みだした。
そっか、どうでもいいんだ。
相手に寄せられる好きとかそういう気持ちって、君にはご飯のお手伝いやゲーム以下なんだね。
アスランのそっち方面のぼんやりっぷりを見なれてるみんなは、天然だって言ってすっごく呆れてる。
でもそれって違うんだ、アスランて全部わかっててあんな風にスルーしてる。
そういう時ってめんどくさいって思ってるんだ。
それってずっと一緒にいる僕だからわかるんだけど。

例えば僕がおんなじこと言ったら、君はなんて言うんだろ？

いくら僕が君の特別ったって、やっぱり知るのはちょっと怖いから切り出せないなあ。
一緒に教室を出て、ゆらゆら揺れる蒼い髪と紺色の襟を眺めてた。
「手つなごうよ、アスラン」
「ん？」
だいぶ伸びて背中に近づいてきた蒼いゆるゆる髪の下で、アスランがちょっと振り返った。
たまに怖いくらい冷たいけど、いつだって碧の目はキレイだ。
「じゃないと不安じゃない」
「誰が？」
「僕が」
キラって相変わらずあまえんぼ！　ってけらけら笑いながらアスランは手を握って引っ張る。
「やっぱり私がおねえちゃんねー」
「そういうことにしといてあげるよ」

君って体温が低いから、手だっていつだってひんやりしてるんだよね。せめて僕の熱が伝わるといいな。
結局僕らは、校舎を出て校門を出て、スクランブル交差点ひとつ前の角まで、ずっと手を握ってた。
そこでようやく僕は思い出したんだ、鞄の中のファイルのこと。
「あ、ゴメン」
「きーら？」
離れた手に、アスランがきょとんとしてら。
「母さんに、フリマの申請書出してきてってお願いされてたんだった」
市役所の窓口受付は5時までだから、今から走っていけばきっとまだ間に合う。
「先に帰ってお手伝いしててよ、母さんひとりじゃブロック肉に紐巻くのも手こずると思うから」
いくら超圧力鍋で時間短縮できるったって、やっぱり煮込み料理は下準備に手間がかかるんだ。
「りょーかい」
アスランは「あやしい人に気をつけてね」って笑ってたけど、それって僕のセリフだよ？

ということで、コペルニクス市役所の福祉課に書類を出しに来たんだけど、隣の住民課の窓口でなんか揉めてた。
「名簿を出せ！！」
……なんか言ってるよ、だからこんなに列ができてるんだ。
この終業時間直前の混雑する時間帯に、ホント迷惑なクレーマーだなあ。
「どうせここら辺の住人だろうが！！　ＴＶに映り込んでるのを見たんだっ！！」
またすっごい怒鳴り声だなぁ、聞いてるだけで疲れるよ。
こんなクレーマー相手にしなきゃいけないって、役所の窓口のおね

えさんてばホント大変。
「隣、大変ですね」
福祉課の窓口で、僕はこっそり訊いてみる。
お姉さんはもう心底たまらないって感じで小声で愚痴った。
「そうなのよー。なんだか住民台帳見せろって粘ってるの、窓口で騒がれてもできるわけないのにね」
「個人情報守秘義務に抵触って感じですよね」
「そうそう。でも偉い人のお知り合いらしくて、なんだか厄介だわ。大人相手に権力ふりかざすなんてこれだからコーディネイターの子ってのは……」
本音出ちゃってます、きっとナチュラルなおねえさん。
遺伝子をちょっといじっただけなんだから当然いろんな人間がいるわけだし、そもそも僕とあんな猛烈クレーマー少年を一緒にしないでほしいなあ。
「あの、……僕もコーディネイターです」
「え！？　あ、ごめんなさい、違うのよー！！　あの子の話で、あなたとは違うからっ！！」
そこのあたりわかってもらえたんなら、いいけどさ。
一体何をＴＶで見たんだか、って書類を渡して呼ばれるのを待っている間に、黒いスーツ姿の白いおかっぱは偉そうなおじさんに導かれて、奥の市長室のほうにずんずんと姿を消した。
ちょっと、っていうかかなりドキっとした、深呼吸深呼吸。
だっておかっぱだよ？　白髪だよ？
昔のヤな思い出がちらっとよぎってみたりする。
えっと……まさかね？　気のせいだよね？
おととい買い物行った帰りカフェテリアでアスランとお茶してた時に、コペルニクスＴＶの「月の隠れ家系コーヒーショップ１００！」な取材があったっぽいけど、まさか関係ないよね？
万が一億が一を想定して、僕はちょっとばかり考えたわけだ。

えーっと、ここの市役所のサーバーって無停止型仮想化ソフトを走らせてたよね、
おーとま・ねっとわーく・せってぃんぐ・すきゃん機能ってついてるはずだよね、
とりあえず隣のネットカフェからそこらへんつついてシステムをちょっと落としとこうかな……
金曜日の夕方だしきっと当直の人たちものんびりしてるよね、なんて。
いらない不安要素なんて排除しておくのがやっぱり賢明だと思うんだ、うん。

「ただいま」
「あらキラくんたら、今日もかわいいんだから！」
レノアおばさん、帰ってたんだ。
「おつかいお疲れ様ー」
「いえ、全然です」
偽造ＩＤで野良電波捕まえて串を噛ますのにちょっと手間取ったけど、それくらいだし。
「キラくんも呑みましょうよ、ちょっとここ座って」
「もうお母さまってば！　キラを引きずり込まないで！」
エプロンしてコンロの前に立ってるアスランがちょっと切れてる。
レノアおばさん……食前に発泡酒じゃなくて生ビール大を３本目ですね？
「若い男の子を愛でたいだけなのよ。あぁもうカリダがうらやましいわぁ、うちにもキラくんみたいな息子欲しいのよねー」
「そりゃあお婿にあげてもいいけど、もうひとり作ってコーディネイターの人口増やしたらどーお？」
いったい母さんも何言ってるの？　って見たら、なんかおたま片手

にビール握ってた。
お酒弱いのにこっちもすっかり出来あがってる……じき帰ってくる父さんが見たら、きっと泣くよ？
「そうねえ、でも主人にそっくりな子だとうっかりいじめちゃいそうな自分が怖いわぁ」
……なんでですか、おばさん。
実はアスランパパ（実在してるらしいけど僕は見たことない）のことが憎たらしいとかですか？
もしかしてオットの愛人とかいてママン・Ｓ大好きどろっどろ昼ドラ愛憎劇な感じでしょうか？
「でも早くしないと、いい加減高齢出産なんだからぁ」
「やーね、仕込むったってちょっと遠すぎるのよぉ」
もうやめてほしいなあ、思春期な子どもたちの前でそういうなまなましい話するの。
とくにレノアおばさん、僕の初恋の清い思い出を汚さないで下さい。
でそんな熟年系女子力全開トークにアスランはというと。
「全力で聞き流してます」って感じで鍋にむかってお肉を味見してた。
多分アスランのスルー力てこういう地道なところで培われてるんだろうなあ、と僕は思う。

食後、アスランは壁に凭れてせっせと編み物を始めた。
「何してるの？　中ボス戦やるんじゃなかったっけ」
「とりあえずこのカーディガン、ちょっと直しちゃうわ。お母さまったら段を間違えたからって途中で投げ出すんだもの」
ここまでやったんならちょっと解いて間違えた場所から編み直せばいいだけなのに、ってアスランはふくれっ面だ。
「……レノアおばさんて結構適当だよねえ……」
そして今隣の客室で寝てるんだ、今日はもう泊まるっぽい。

ついでに言うと父さんは寛容というか慣れてるというか美人なレノアおばさんに弱いというか、「まったく君たちは相変わらず困った人たちだね」って感じでお風呂に入っちゃったし、母さんは母さんで飲み過ぎてずっとトイレにこもってるし。

「あの完璧主義のお父さまとよく結婚できたなあ、って思うくらいにはね。もういつも私ばっかり苦労させられてる気がする」

P．L．A．N．T．で単身赴任で働いてるっていうアスランのお父さんてどんな人なんだろう？

話には結構出てくるけど、僕は一度だって会ったことがないんだ。あののんびりしたレノアおばさんの旦那さんだし、やっぱり優しい人なのかなぁ、うちの父さんみたいに？

「今度会ってみる？　多分こっち来ると思うの、なんか出張って言ってた」

「へえー」

やっぱり僕が言うべきことっていったら、お嬢さんを下さい？

なんて考えながら時計を見てた。

まだ映画の放送まで時間もあるし、アスランがこんなことしてるとゲームもできないし、本読むのも気が乗らないし、なんか暇だなあ。

ということで体を寄せて腕を回してみる。

「……」

こんなにドキドキしてるんだけどな、さすがにわかるよね？

「っもうキラ！　暑いっ！」

「うわっ！！」

蹴られちゃった……これって結構ヒドイよねえ？

「アスラン機嫌悪い……」

「悪くない！！」

イヤ、悪いよね。そりゃあ今日いろいろあったけどさ。

そもそもあんまりスキンシップが好きじゃないんだよねえ、アスラン。

君が寝てさえいれば、ギュってしてキスくらいいくらでもできるん

だけどなあ。

僕のいたずらにはさすがに気付いてないみたいだけど、例えばそのうち本気になったら、僕らどうなっちゃうんだろ？　なんて思ってみる。

まだ僕らって体力差なんかほとんどないし、むしろアスランのほうが腕力とかありそうだし、今の関係がめちゃくちゃになっちゃいそうで、そんな怖い真似できないけど。

「きーら」

眉間にしわを作ったアスランが言う。

「ん？」

「好きよ」

ちょっとビックリ。

ついでにちょっと、っていうかかなり慌ててみた。

「えと……あ、ありがとう」

うん、ってアスランは頷いて、同じペースでせっせと編み針を進めてる。

ああ、君の中にそれ以上はないんだ。

だから与えないし求めないんだね、ちょっと今わかった。

だから君って、僕が好きだとか言ったって、絶対抱きしめるとかキスしてくれるとかはないんだよね、アスラン。

＊＊＊＊＊

僕の熱が伝わった、ってわけじゃないと思うけど。

どうもアスランがここ数日わりと高い熱が続いてるらしくて、専門

病院に行くことが決まった。
「ねえ、中央病院じゃダメなの？　結構いい先生いらっしゃるのよ？」
アスランはうちのムスメっ！！って普段言ってるだけに母さんもすっごく心配してる。
レノアおばさんは重いため息をついた。
「それがねぇ……昔かかりつけだった先生はもうおられないんだけど、そこのチームじゃないとやっぱり難しくって」
シャトルの都合があるし、乗り継ぎや検査日程を考えるとどうしても1週間くらいかかっちゃうわ、とレノアおばさんは嘆く。
やっぱり行くのはＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．のフェブラリウスなのかな？
「私の持ってるちょっと厄介な因子を受け継がさせまいとしたのが裏目に出たかしら」
いつも前向きで愚痴なんか絶対言わないレノアおばさんがなんかもう泣きそうで、僕まで泣きたくなってくるよ。
「大丈夫、きっとただの体調不良、ってことになるわよ」
「ホントそう願うわ」
「ねえ……」
母さんはコーディネイトについては全然知識がない素人だから、ただ心配するだけだ。
僕もそんな知ってるわけじゃないからそう大差ないんだけどね。
本来コーディネイターって医者いらずのはずなんだけど、肉体の内的なコーディネイトに失敗するってことはフツーにある。
そもそも遺伝子発現が予定通り上手くいくなんてケースのが珍しいんだ、結局は運。
「行ってくるわ」
ほっぺたが赤いアスランがタクシーの窓から顔を出した。
ちょっと熱っぽくて全体に桜色な感じとか、潤んだ目とか、これはこれですごい可愛いんだけど、そんなこと言ってる場合じゃないからさすがに言えない。

「ねえ、キラ。絶対衛星ケータイの電源切らせないでよ？　充電忘れないでね」
「わかってるってば。電話とかメールとかガンガンしてよね、付き合うから」
「まかせて、万が一手術とかになったら実況してあげる」
いや、それは謹んで遠慮しておこうかな。うん。
メス入りますシーンとか、絶対知りたくないし想像したくないよ僕は。
「行ってらっしゃい」
宇宙港に向かうタクシーを見送って、母さんがぽつりと言った。
「ヴィアがいれば、きっと何かアドバイスをもらえたのに」
そういえば僕の親戚に、コーディネイトを専門にしてた学者さんが何人かいたって話しだったっけ。
でもヴィアって女のひとかな？
アスランと1ヶ月くらい離れたのは、多分はじめてのことだった。

Dialogue: Patrick & Lenore (前書き)

Green-eyed monster (Her name is Gabxxel/Jibxxl in the moon)

Dialogue: Patrick & Lenore

久々にその女が戻ってきた。

「お久しぶりです、パトリック」
やがてその紅い唇でゆうるりと笑んだ。
「あなたの種をいただきに参りました」

……ああ、お前はそのさだめの御使いであったな。

「いくらでも搾り取れ」
今夜からしばらく眠れないだろう。

◆◆◆

「足りませんわ」
「ならばもういい加減戻れ、私の側に！」
「だってあの方、苦手なんですもの」
「……無理を言うな」
「ねえあなた。あの方と、わたくしと、どちらがよい？」

この緑目の悪魔め。

「言わせるな、恥ずかしい」
声もなく彼女は笑った。
「あなたによく似た男の子がよいですわ、いじめるのにちょうどよい」
「……いったい何をする気だ」
「さあ？」

恐ろしい女だ。
そして我々はひどくよく似ている。

◆◆◆

あの恋に落ちた堕天の夜、この女は訊いた。
「パトリック、あなたの夢はなんでしょう？」
「穏やかに、平和に……新しい大地で、愛するものとともにありたい」
「では、一緒にかなえましょう――それがわたくしの新しい夢」

「あなたに並び、その傍らで同じものを見て、同じ夢にまどろみましょう。
やがてあなたの子をみごもり、このからだで命をはぐくみ、母となり……
この宇宙に新しい大地を築き――ともに歩みともに老いて、

ともにあの星に還るその時まで、ずっと寄り添いましょう」

「ずっとお側におります、パトリック」

◆◆◆

あの嘘つき女が。

堕ちるならば、どこまでもお前とともにと決めた。

だがお前は消えて二度と戻らない。
あれきり、お前は夢にも現れなくなった。

そして私はこの地獄にひとり取り残された。

Dialogue:　Patrick &　Lenore（後書き）

”木蓮の涙”　小田和正&根本要ｖｅｒ.

Past: Copernicus－3

耳障りな電子音をバシッと叩いて止めた。
目覚まし時計、ベッドから落ちたくせにまだ鳴ってら。
「うるさいなあもう……寝かせてよね」
あああカーテン越しの朝日眩しすぎる。
もう一回寝よう、と頭まで布団かぶって寝返りを打って。
あれ……今日って何曜日だったっけ？　って僕は考えた。
えーと、昨日水曜だったから。
「っうわっ！！？」
思いっきり今日って平日じゃんっ！！
遅刻遅刻！！　今日一時限目って数学のテストだよ！！
アスランがいないから、ベッドから抜け出るのなんてどうしても時間ぎりぎりになっちゃうんだ。
顔洗うなんて余裕もなくて、寝癖を確かめる時間もなくて、スラックス穿いて制服の上着着て、ボタン止めながらバタバタ階段を駆け下りる。
階段の先の玄関で、ちょうど母さんが帰ってきてた。
「っなんで起こしてくれなかったのさ、母さんってばっ！！」
「ヤダぁ、キラってばまだいたの？　町内会の子ども見守り隊に行ってたのよ」
あああああ！！
最近また変質者が出たって話だったっけ！！　なんて迷惑なんだ！！
「キラ、朝ご飯は？」
「いいってば！！　食べてる時間なんかない！！」
とはいえ、食べなきゃお腹が空くからね。
僕はリビングに駆け込んでとりあえずクロワッサンをひとつくわえて、残り3つほど紙袋に投げ込んで、玄関に放り出してた鞄を掴んで靴履いて飛び出た。

ドアを開けて、母さんの声が追ってきた。
「キラ！！　帰りにホームセンターで農薬買ってきて、希釈タイプよ！！」
「っわかったって！！　昨日聞いた！！」
レノアおばさんとアスランが不在の間、庭のお手入れは僕らが担当してる。
もともとアスランが全部やってたからさ、慣れてない僕らだとちょっと手間取るんだよね。
庭で咲いてるたっくさんの花とか、温室で育ってる青い薔薇とか、ホントあれ枯れなきゃいいけど。

チャイムと同時に滑り込み！！
「セーフ！」
ヴァレリーと北羽が笑ってら。
「……朝から疲れたぁ」
「綺羅、寝癖ついてるよ」
ああホントだ、ぴんぴんはねてら。
「だってもう起きて１分で出てきたもん」
「コーディネイターってすごいなあ。寝起きで全力疾走１０？とか、俺には絶対無理」
いやいや僕も疲れたってば。もう喉渇いたよ。朝の会終わったら、ちょっと購買行ってなんか買ってこよう。

そんなこんなで先生からの連絡が終わって、席立とうとして隣の席のメリオルに呼び止められた。
「ね、キラくん」
「ん？」
いきなり周りから、ぱぁぁん！！ってクラッカーが鳴って、ちょっとビックリ。

「キラくーん、お誕生日おめでとー！！」
「１３歳だねっ！！」
え……あれ、今日って５月１８日だっけ？
黒板右端上の日付みて、ようやく確認。
いつもならアスランが前の週あたりから予定キープしてくるから覚えてるんだけど、ここ最近なんかバタバタしてて忘れてたよ。
「はいキラくん！！」
「クラスの女子一同からプレゼントー！！」
うわ、でっかい包み紙にきらきらリボン。なにこれ。
「あ、ありがとう……」
きゃあきゃあ言われてなんだか写メとられて、目がしぱしぱするよ。
僕って何？　イジられ役？
わりとすぐに先生が来てくれて助かったけど、僕ジュース飲みたかったんだよね。

「そりゃあジブがいないもん。今チャンスでしょ？」
ヴァレリーが笑う。
アスランがいないから、その代わりに女の子たちが寄ってくるってこと？
へえ何、僕って実はもててるの？
あーもう。アスランに見せつけて反応見てみたいなぁ、ホント。
「牽制しあってるってカンジかな」
「抜け駆けしないでよねって意味でみんなでプレゼントー！」
「オンナって怖いよなあまじで」
……女の子って大変なんだね。
だから時々アスランが「私男の子がよかった」って愚痴ってるんだ。
でも、アスランが男子でも、僕多分好きになってたと思うんだよなあ、なんて。
「僕一途なんだよね」

「もてるヤツは言うこと違うなあ。あ、悔しくなんかないんだからなー！！」

「で、さっきもらったやつって何？　開けてみてよ」

そうそう。大きさの割に結構軽かったんだよね。

ということで、男子連中が集まっているどまんなかで、がさがさ、といい匂いの包装紙を開けてみた。

でてきたのは。

「……クマの人形……」

巨大なピンクのクマ人形。

抱っこして寝てね！！　ってメッセージカード付き。

「ってなんでみんなで笑うの！？」

ぶはははははってなんで笑うの！？

北羽までひーひー言って机叩いて笑ってる、なんかムカつくなあ。

「で、ジブっていつ帰ってくるの？」

「なんかさ、来週って」

「元気かなあ」

「元気みたいだよ？　ちょっと注射してお薬呑んだら治っちゃった！って言ってたし。昨日はぶっ通し電話してたから、衛星ケータイ電池切れしちゃったよ」

ほとんどの検査を終えたアスランは暇らしくて、もうホントにがんがんメールしてくるし、昨晩なんか徹夜でＴＶ電話。

そして毎日のようにアスランは寝落ちする、たいていそのあたりで僕も限界なんだけど。

睡眠不足は絶対それが原因だよね、まあ僕も楽しいから仕方ないんだけど。

で、いただいたクマさん。

これ持って帰るの、ホントのところは恥ずかしい。

でもせっかくの気持ちを無碍にはできないよね。

とはいえ、ホームセンターにこれ抱えて入るってどんな罰ゲームなんだろう？

人の注目を微妙に浴びながらさっさと買い物を終わらせて、ショッピングモールのあちこちにあるベンチのひとつでちょっと休憩。
よっこらしょって、僕はベンチに座って缶コーヒーをぐいぐい飲んでみた。
でもやっぱり缶より淹れたやつのほうが風味はいいよね。
アスランが淹れたドリップコーヒー、早く飲みたいなあ。
なんて思ってたら、後ろ側のベンチに誰かが背中合わせに座った。
「おい、セーレ。ホントになんでこんな手間取るんだ」
……どっかで聞いたよ、この声。
「コペルニクスってそんなに大きい都市じゃないだろうが！」
えっと。振り返るの怖いんだけど。
でもやっぱり確かめないとダメでしょ？
と思ったら案の定。
まあたこのおかっぱ。なんだろう、僕と君ってなにか赤い糸で繋がってる？
だとしたらとんでもなくイヤなご縁なんだけど。
あああもう、ベンチで背中合わせになっちゃったよ、最悪。
「あのお人形……どこいったんだ」
え、と。まだ君追っかけてんの？
「抱っこしたい、もちもちした肌に触りたい、ほっぺたぷにぷにしたい、髪の匂いを嗅ぎたいー」
健全なる青少年の煩悩炸裂を聞いて生あたたかく思ったよ、ああ気の毒にって。
いやあ僕ってホント幸せ者なんだなあ……しみじみ自分の境遇の良さを噛み締めてしまった。
「ぞわぞわしたんだ、あの時！！」

そうそう、遺伝子レベルでふぉーりんらぶ！！　って感覚って、よくわかるようんうん。
「ちっくしょう、あの時あの糞ガキのツラを札束ではたいてでも持って帰るんだった」
……はあ、札束。
カネですか。
うん、僕はそういうのは許しがたいね。
っていうかそれは人身売買です。いったいどんな環境で育ったらそういう思考になるわけ？
ちょっと親御さん呼ぼうよ親御さん、その顔見せてよ。
というかそんなにお金持ちなら、趣味と実益かねてシリコン製ＨＥＮＴＡＩ専用人型ロボット愛玩仕様を老舗のニッポンフジヤマ社で造ってもらえばいいじゃないか。
父さんの取引先にそこのフジヤマの主任さんがいるよ。飛鳥さんていうんだけど、なんなら紹介するよ？
「ジブリールは絶対ここにいたんだ、ＴＶに映ってたアレは俺の幻覚じゃない！！」
ブッと僕は吹いてしまった。
思いっきりアスラン、嗅ぎつけられちゃった？
やっぱりサーバを一時落としただけじゃダメだったか。
「聞き込みなどあてになりませんよ。仮にジブリールというのが正真正銘の姓なら、そもそも月におられるはずがありませんし」
ん？
「地球だってんだろ、そんなのは知ってる！！　でもジブリールなら遜色ないんだ、うちの格に匹敵してるじゃないか！！」
あ、れ？
今話題になってるのって違う“ジブリール”だよね、きっと。
アスランの名字は確かにジブリールだけど、地球にいたことがあるなんて話聞いたことないし。
そんな格式がどうとかいう話おばさんから聞いたこともないし。

「もうこれ以上はP．L．A．N．T．のお母上が嫌がられることと存じます。もう諦めて素直にお母上のおっしゃる縁談をお受けになってですね」

ああ、P．L．A．N．T．ってんならこのおかっぱ、わざわざコペルニクスに出張してきてるんだ……とんでもない執念だなあ。

片道のチケット代だけでどれくらいかかるんだろ。

しかも縁談とかっていうんなら相当お金持ちなんだろうに、ならそこから綺麗な子を選べばいいのに。

アスランみたいなコってP．L．A．N．T．にも珍しいとか？……まさかねえ。

「最初はアイツがいいんだ！！　だから拉致してこいと言ってる！！」

ら……拉致？

僕は顎が外れるかと思ったね。

前の「家に持って帰る」って発想といい「札束ではたいて」って話といい、権力者って怖いなぁ。

……てか遠からず犯罪者になりそうだよ、むしろなりかけてるよね君。

とりあえずアスランてばとんでもなく厄介なストーカーに狙われてるんだ、これはすごい困った。

「まあ法王庁で今夜お会いになればわかりますから。ジブリールのご家族の方も来られます、サハクィエールの御曹司さまがたも来られますから」

「くっそ！　サハクのガキどもは俺は嫌いなんだ！！　ちょっと年上だからって」

「でもご自身でタランクィリタティスにお行きになるとお決めになったわけですから」

んん？

ホーオーチョーってなにがなんだかよくわかんないけど、やっぱり違う人なんだろうなあ、ジブリール違い。

だってアスラン帰ってくるの来週だし、その妙な地名知らないし。
ちょっとホッとした、まあきっと彼は違うジブリールさんを探しちゃってるんだろう。
それならそれで結構なことだよね。
僕のアスランを犯罪に巻き込まないで欲しいし、僕らの平穏な毎日をかき乱さないで欲しいし。
ということで、僕は少しばかり背中を押してあげることにした。
「蒼い髪のコでしょ、ジブリールって」
ぼそりと僕は呟いてみた。
「え!?　お前知ってるのか!?」
白いおかっぱがいきなり振り返った。
あれ、なんだか綺麗な目してるなあ。これってアクアマリン？
ああいや、それどこじゃないや。
「先月から見なくなりましたよね。引っ越したっぽいですよ、多分地球のどこかって。えーっと、イギリスだかアメリカだかだったかなぁ」
僕らには全然縁がないからそこら辺を挙げてみる。
絶対行かないもん。地球とか、ましてやその辺り。
「っなんだと!!?」
「噂ですけどねー」
ついでにレノアおばさん曰く“キラくんの笑顔って絶対無敵よ!!　クマでも食欲忘れちゃうレベル!!”という話なので、にっこり微笑んでみる。
あ、効果あったか。
なんかほんのりほっぺたピンク？　……いやいや僕ノーマルだから。
「っやっぱりイギリスか!!?」
なんか適当なこと言ったらクリーンヒットしたみたい、すごいね僕って。
「オヤジの墓参り行くついでだろ!!　地球に行くぞっ!!」
「あああもう若君ぃぃぃ!!　なお一層お母上が嫌がられます

ッ！！　大体研究所のほうどうされるんですか、ヴァプラが嘆きますぅぅ！！」

遠ざかる声を聞きながら、僕はもうしみじみ思ったね。

もうほんっとよかった、アスランが今コペルニクスにいなくて！！

君なんかもう、地球に降りてこっちこないでよね。

僕のアスランは断固として地球になんか行かせないから。

ということで白おかっぱにもう二度と会いませんように、と心から祈りながら僕はベンチを立ったんだ。

ところが一難去ってまた一難。

うっかり一人でモールなんかきちゃったのがマズかったなあ、それともこのクマのぬいぐるみが目立つのかな。

僕誕生日だってのに、厄日？

「キレイだね、君」

その背の高い男の人は、いきなり僕の前に立ちはだかって言ったんだ。

「いえ、その」

ビックリして僕は見上げたら、そのすごく穏やかそうで人の良さそうなゆるゆる黒髪ロン毛のお兄さん（まだおじさんって感じじゃなさそうだったから）はかがみこんでしみじみ言ったんだ。

「うん、とてもステキだ」

「あの……僕、男ですから」

そりゃあ女顔って言われてるし、確かによく間違われるよ？

学校や街なんかでいきなり告白されたりもするよ。

でもよく見ようよ、僕の着てる制服詰め襟で緑でしょ？

ホントのところちょっとアスランの気持ちがわかるんだ、勝手に期待されて失望して逆恨みとか、ほんとーに迷惑なんだよねえ。

でも今回の人はちょっと違った。

「この際性別っていうのは問題ないと思わないかい？」

ど……どうしよう真性だ、しかもショタ。
「これは運命だな」
「え」
「遺伝子の導きと言っていいかもしれない、私は感動してるよ」
うわぁぁぁ、なんか電波受信してる変態おにいさんに捕まっちゃった。
絶対きっと新しい宗教だよ、これ。
「あの、僕急いでますから！！」
おや、とそのお兄さんはひどく悲しそうな顔をした。
「君の名は？」
どっかでそんな古いドラマがあったような気がする……ていうかそんな場合じゃない！！
「いえ名乗るほどのものじゃありませんから！！」
そんな超重要個人情報、知られたくなんかないってば！！
「仕方ない。何かあったら連絡したまえ。君の遺伝子が欲しい、なんなら精子でもいい」
……。
いいえ、全力でお断りさせていただきます。
なんかもう言葉と視線で陵辱された気分だよ。
道歩いてただけなのに援交求められた女子高生になったような、服着てるのに穢されたっていうか。
僕のピュアなガラス細工のハートにヒビが入ったような気分だよ。
ということで、名刺と連絡先もらったけど、もう気持ち悪いから即捨てる。
名前なんか確認しない、記憶から即座にデリート。
帰ったら、もう絶対シャワー浴びよう。耳の穴までがしがし洗うんだ！！

＊＊＊＊＊

で、待ってた日がようやく来たわけで。
くるくる回る日傘が広がって、真っ白いワンピースのアスランがタクシーから降りた。
「きーら！　ただいまー！！」
ああ、アスランてばすっかり元気そうだ。
蒼い髪がまた伸びてきらきらしてて、ほっぺたがぷくぷくしてて、なんだか久しぶりだなあ、って思うより前に僕はぐすんって鼻を鳴らした。
やっぱりモニターとかじゃダメだよ、君の生声が僕は好きなんだ。
「泣き虫ねー？」
「泣いてなんかないってば！！」
ごしごしハンカチで拭かれてみたけど、全然止まらないや。
僕、アスランのこと丸ごと好きなんだよ、きっと。
君と離れてるって状況がもう想像つかないんだ。
「あのね、お誕生日おめでとう。遅くなっちゃった」
アスランが持ってた紙袋をごそごそ探して、僕に差し出してきたのはなんだかまた包装紙入りの箱？
「何これ」
「もっちろん新型ＰＳＰΩ！！　ソフトもセットだもん、一緒に狩りしましょー！！」
君ってば、ホントに相変わらず。
だからますます涙が出てきちゃったよ、どうしてくれるのさ、もう。
「もう、ひやひやしたわぁ……ま、新型インフルエンザでもなかったし、結果オーライよね」
降りてきたレノアおばさんも相変わらず元気そう、でもますます美人だなあ。
母さんも「お祝いしなくちゃね、とりあえずケーキ食べてお茶！！」って嬉しそう。

「母さん、昨日からケーキ仕込んでたんだ。なんかいちご買い占めてた」
「うわあ嬉しい！」
向こうで甘い物禁止されてたから！！　ってアスラン相変わらず甘い物大好きだよねえ。

ケーキ食べてコーヒー飲んで、もうわいわいわいっていつもの調子。
「僕こないだ、モールで変な人に勧誘されたんだ。遺伝子がどうとか欲しいとかって」
ヤなことって誰かに聞いてもらって忘れたいじゃない？
一瞬レノアおばさんとアスランが顔を見合わせた。
「ねえ、それって最近うろついてるって変質者？」
「一見まともそうだったんだけどねえ、その人」
でもやっぱり変は変だ。
「遺伝子、ねえ……」
レノアおばさん困ってら。
んー、でも私の担当の先生のひとりがそんな感じだった、ってアスランがぼやく。
「すごい熱烈でちょっと怖かったわ」
聴いてる僕もちょっとイヤな感じがする、その人アスランの全身見たってことだよね？
真っ白い肌とか。
なんだか丸っこくなってきたラインとか。
そのうちたゆんたゆんになるのかなっておっぱいとか。
えーっとその他魅惑のいろいろとか。
うん、なんかそんなの許せないじゃない？
「ま、いろんな人がいるわよね。気を付けなくっちゃ！」
と言いながら母さんがパイを持ってきたから、この話はここで終わり。

「あ、夕ご飯手伝うわ、おばさん」
「だーめ、アスランは病み上がりなんだから寝とかなきゃ！！」
「んー？」
「それからゲーム禁止。読書も禁止よ、アスラン」
珍しくレノアおばさんが釘差してら。
「えー暇なんだけどな、私。寝過ぎて疲れちゃったし、せっかくキラと狩りしようと思ってたのに」
「あらあら。大人しくしてないとお父さまのところに送り込むわよ？」
「えええぇぇ……はぁい」
そういや、アスランて昔っから『お父さま』って言葉に弱いんだよね。
なんでだろ、もしかしてすごーく怖い人だったりとかするのかな？

コーヒー飲んで、レノアおばさんと母さんがお話で盛り上がってる最中、ちょっと様子見に2階に上がってみた。
着替えてくるって言ってたのに、遅いなあ。
と思ったら。
寝すぎて疲れちゃったって言う割に、アスランまた爆睡してら。
ベッドに突っ伏して、揺すっても起きない。
ということで、ほっぺたにちゅー。
なんかもぞもぞするなあ。
あの白おかっぱ、『抱っこしたい、もちもちした肌に触りたい、ほっぺたぷにぷにしたい、髪の匂いを嗅ぎたいー』って言ってたっけ？
うん、とりあえず全部僕が君の代わりにしっかり味わっておこう、そうしよう。

んで、しっかりたっぷり幸せに浸った僕はご飯までの間に、アスラ

ンの代わりにレノアおばさんのお手伝い。
アスランちの庭で土いじりしたり、水を撒いてみたり。
「枯れちゃうかなってすごく心配だったんだよ」
「大丈夫！　強いのよ、この子たちは！」
おばさんの手はいつだって土塗れ。でもすごく綺麗だなあって僕はいつも思う。
命を育む手っていうのかな、ちょっとキザっぽいけど。
「ちょっと助けてあげるだけでいいの。疲れた土にはお休みを、枯れた土には栄養を」
おばさんが手にかけると花や葉の勢いが蘇るんだ。そういうのって確か『緑の手』っていうんだよね。
みんななんだか待ってた？って気がするくらい、生き生きとする。
そりゃあ市報に載るよね、コペルニクス一の園芸家！って。
なんだかどっかで賞を取った、あの賞もとったって話を母さんが自分のことのように自慢げにするから、僕だってよく知ってる。
春先のシーズンなんかには、それこそたくさんの人が庭を写真撮りに来たり、取材に来たりもする。
とくにここではレノアおばさんしか育ててない、青い薔薇の温室とか。
水撒きが終わって、僕がその薔薇の温室に入った時、丁寧に葉をのばして一枚一枚に水薬を噴霧しながら、レノアおばさんは鼻歌を歌ってた。

He loves me,
He don't!
He'll have me,
He don't!
He would if he could,
But he can't,

これってどこかの古い童謡なのかな。
でもレノアおばさんて、フツーに歌うまいんだ。じゃあアスランの音痴って誰に似たんだろ？
作業を手伝いながら、青い薔薇のつぼみの群れを眺めてた。
「ね、おばさん。この薔薇って、なんだかおばさんによく似てるよね」
ん？　て首を傾げた後、レノアおばさんはころころ笑い出した。
「ああもう、キラくんてば口がうまくなっちゃって！！　これは女の子泣かせに育つわ！！」
「え、と」
なんだか恥ずかしくなるよ。
素直にそう思っただけなんだけどなあ。
「綺麗でしょ？　――でもね。この子たちは弱くって、温室の外で生きていくことはできないの」
「なんで？」
「ちょっと難しい言葉を使うと、自然の摂理に逆らってる、っていうのかしらね。この花の純粋な青って自然界では決して生まれないのよ」
なんかちょっと神妙になってしまったよ、僕は。
誰のために咲くんだろう、青い薔薇？
儚く咲いて――そしてただ枯れるそれだけの為に、命を繰り返して。
「それでもいつか温室の外でも生きていけるようにって頑張ってるんだけれど、でもなかなか難しいわねえ」
それって薔薇の話なのかな、って僕は思ったんだ。

Past: Copernicus－3（後書き）

GARNET CROW “花は咲いて ただ揺れて”

16：J.O.S.H.－A.，カーペンタリアあるいはオノゴロ島にて？

Love to converge？

16：J．O．S．H．－A．，カーペンタリアあるいはオノゴロ島にて

またわたくしはひとりきり。
どこへ行っても個室に閉じ込められてしまっている……とラクス・クラインはベッドサイドに座してぼんやりと宙を眺める。
さすが同型艦だけあって、士官室の内装から備品までうりふたつ。
あの宇宙の孤独を彷彿とさせていささかなり不安になる。
そして閉所恐怖症を和らげるためにと改造してもらったピンクのボールロボットは、あの褐色の彼についていってしまい、基地のどこかへとまた消えてしまった。
「困ったこと、ピンクちゃんたら！」
恨んだところで詮無い、あの内蔵言語認識チップが彼の低くて綺麗な声に反応してしまっただけの話だ。
そしてそれはもう先週のこと。
プリンシパリティを訪れるのはこれで2回目になるだろうか――行動がさっぱり理解不能なムルタ・アズラエルに引き回されて、肝心のP．L．A．N．T．への連絡がついていないことが非常に心配ではある。
見るもの全てが目新しくあるが、はたして自分はどうなるのだろう？
思いを巡らせている最中、シュンと音を立ててドアが開いた。
「あら、お食事の時間ですの？」
それとも時間的におやつだろうか、ちょうどお腹がすき始めていた、とラクスは小首を傾けて振り返る。
薔薇のような深紅が視界を刺激する。
フレイ・アルスターがそこにいた。

「見つけたわ」
にんまりと彼女は笑んだ。
「いいこと教えてあげる」
「……なんでしょう」
不穏な予感が心臓を刺す。
彼女の唇は実に愉快そうに言葉を刻んだ。
「死んだんですって、アンタのお父さん」

彼女は何を言っているのだろう、とラクスは耳を凝らした。

「シーゲル・クライン。発令所で聞いちゃったわ、同じコーディネイターに撃ち殺されたんですってよ」
お父さまが？
ラクスはただフレイの面差しを眺める。
あの出立の間際に、「これをお守りに」と渡された母の形見の指輪の嵌まる中指を思わず撫でる。
……まさか。
不快げにフレイは顔を顰めてつかつかと歩み寄る。
「ちょっと、聴いてるの？」
「――聴いていますわ」
「泣かないの？　もっと反応しなさいよ」
じゃないとつまらないでしょ、と苛立たしげなフレイの青灰色の眼差しに憤りが走る。
「死んだのよアンタのお父さんも!!　ざまぁみなさいよ!!　私のパパだって死んだわ、軍人なんかじゃなかったのにアンタたちに撃たれた!!」
ようやくにラクスは彼女自身を見つめる。
「だからわたくしが憎いとおっしゃるのですね。然るにわたくしに

もまた苦しめと」
「もちろんそうよ、報いなのよ。キラだってそうだった！！」
「キラさま――」
ラクスの血は瞬時凍り付く。
「好きな女の子と戦って、そして私の望み通りキラも死んだ」
振り仰いで、フレイ・アルスターの面差しを凝視しながらラクスは息を呑む。
「あなたは……」

愛していた、なのに彼を武器におとしめた？
彼らの葛藤を知っていて、戦わせるように仕向けていた？

「ストライクでいつも1人で戦ってて、可哀想なキラ、守る為に戦って、でも何も守れなくて、いつも泣いてて、淋しがりやで……」
フレイ・アルスターは艶然として笑みかける。
「私、あの子をすごく傷つけた。だから謝ろうと思ってたのに、死んじゃったわ」
眼前の少女の潤んだ眼差しとともに言葉が心をちくちくと刺す。
涙が伝い落ちる、それは彼女の色を映して深紅だった。
「気付いたって遅すぎたのよ、何もかも、何もかも！！」

悔恨の血の涙、とラクスは飽かず眺める。
己の業の深さにおののいて、そのやるせなさを、このひとはわたくしに語る。

「戦って戦ってそして死ぬの……みんな、みんなバカなのよ。それ

がこの世界なんだわ、どこまでいったって続くのよ」

ああ――わたくしは今、あなたを心の深いところで理解した。

「会いに来て下さってありがとうございます、フレイ・アルスター」

腕を伸ばす。

わたくしの手は彼らとは違う、抱きしめ癒やすためだけにただ存在する。

それしかできないから、ただ抱きしめる。

「わたくしたちは同じなんですわ。わたくしのこの気持ち、あなたの悲しみは間違いなく同じものです、フレイ・アルスター」

フレイは涙をこぼして、呻くように顔を覆った。

「ともに祈りましょう。愛する人たちの眠りが、どうか等しく安らかでありますようにと」

The stars fall in the earth,
mourning those who have passed...
While the wind blows amid
the shade of the northern lights,
We lie face dawn in tears.
Please strum requiems for
the dead.

ラクスは口ずさむ――

この涙とこの歌と自分たちの哀しみとが、願わくば永遠の散華となって安住の大地に眠る人々の上に降り積もればよい。

．．．With gentle hands, we cling to our child's hearts.
Pushing all aside, the blazing wheelsn in era advance.
Please strum the lament of the departed.
We passionately strum the strings of our hearts．．．

「哀しいね。でもその歌は、間違いなく君自身のものだな」
気付けばムルタ・アズラエルがドアの向こうにいた。
彼は哀しみに沈む自分たちに一線引くように、この部屋には踏み込んでこない。
そして光の影になって彼の表情はよく見えなかったが、歌の終わりを静かに待っていたであろう聴衆なる彼に向けて、ラクスはただ微笑みかける。
「おわかりになりますか？」
「今までの歌とはちょっと違う、ってのは誰が聴いたってよくわかるとも」
「そうでしょうか」
だが歌っている間、全ての歌たちは間違いなく自分のものだった。
そのはずだった。
ムルタが問う。
「P．L．A．N．T．のかわいそうな歌姫。君は自分でそうありたいと望んだ？」

「おそらく……」
自分はP．L．A．N．T．の癒やしであらんとした。
けれどそれは父の望みであったのか、それとも他の誰かのものであったのか、今となってはもうわからない。
「笑顔は君の処世術だね、ひとりぼっちのお嬢ちゃん」
ひとつ、ラクスは瞬きする。
「それはきっとあなたもですわ。違いますか、ムルタ・アズラエル」
「あぁ僕らは似てるのか、こりゃあ困ったねェ？」
ムルタは苦笑いした気配のあとで顎をひとなでして、やがて手招きした。
「おいで、フレイ・アルスター。君の迎えが来てる。マティスが君を連れて行く」
両手を解いて紅い少女はやや面を上げて、隠しきれない諦めの滲んだ声で問うた。
「私はどこへ連れて行かれるの？」
「そりゃもう。ワシントンD．C．のアルスター家本宅だよ。君にはそこが相応しいね、兵士になれない人間が戦場にいちゃダメだ」
連合士官である女が、ムルタの背後に敬礼で控える。
「理事」
「ああファミーリヤ中佐、この子だよ。……で、ジブリールはどう？」
「割に大人しくなさっておられますよ」
ふふっと彼女は笑った。
「月に送りつけて枢機卿連中に任命責任とらせたいところだけど、それって僕が行かなきゃダメダメでしょ？　ったく面倒だからいっそここに繋いどくかなァ」
「あら、ヘブンズベースにはお連れになりません？」
「僕ぁ血統主義じゃないんだ、御前左んとこがどうなったって別に構わないね。――さあおいで、フレイ・アルスター。あるべきところにお帰り」

ラクスは腕を離す。
「フレイ・アルスター。いつか……戦いが終わったら」
呼びかけに、ちらり、と昏い青灰色の眼差しがこちらを向いた。
「またお会いいたしましょう、どこか平和な場所で」
返事をしないままに、彼女は部屋を出た。
ファミーリヤ中佐に連れられて辞去するフレイを見送り、それから、とムルタは振り返った。
「ヒトってのは泣けるもんだよ。素直に泣けるうちに泣いておきたまえな、ラクス・クライン」
この人はいつだって見透かしたようなことを言う、と碧の目をラクスは見返す。
「とっくにわたくしは素直ではありませんわ、ムルタ・アズラエル」
やれやれ――と彼は大仰に肩をすくめた。
「そう思ってる間は子どもだね。そう意地を張りなさんな、お嬢ちゃん。また後で迎えに来るから」
それまで好きにお泣き、という言葉とともにドアが閉まって、ラクスはまたひとり取り残された。

＊＊＊＊＊

雑多な職員と兵士たちで賑わうレクリエーションルームの片隅、胸元をくつろげてシン・アスカはぼんやりとＴＶモニターを眺めていた。
喪に服する本国は黒一色。
シーゲル・クラインの国葬の実況が絶えず流れている。
このカーペンタリア基地も今は半旗が掲げられて、偉い人たちは建国の父への哀悼の意をこめて喪章を付けているらしい。
「いったい誰が……本当にナチュラルか？」

「いや、そりゃあきっとたてまえで」
「しッ。めったなことは言うな、どこに情報部がいるかわからんのだから」
兵士たちの密やかなざわめきがすぐ傍らで聞こえるただなかで、スピーカーが突如震えた。
『あーあーお呼び出しー。トリプルオークラスタの赤服くんとAクラス緑服くん全員集合ーう。　さがしもの係は雁首そろえてさっさと司令部棟作戦フロアBルームに来ーい！』
……一体なんて館内放送をするんだろう、あの赤茶髪の我らが隊長サマは。
ハンバーガーを食べ終えて、シンはくしゃりと包み紙を丸める。
投げれば、吸い込まれるように紙はゴミ箱へと姿を消した。
まあ、あの人が一見ちゃらんぽらんそうに見えて案外切れ者だっていうのは知っているし、月軌道のホーキンス隊で鳴らした猛者だっていうのも有名な話だ。
そしてシンは緑の兵士たちで賑わうレクルームを出る。
このカーペンタリア基地は、どこへ行っても自分たち同様に降下してきたZ．A．F．T．兵、あるいは野戦任官で登用された在地球の同胞たちで溢れていた。
これだけ大勢の人間が集まっていてかつシステムが混乱すれば、そりゃあ何かあって然るべきだろう、とシンはとりとめもなく考える。
ホスト侵入に端を発するMS奪取騒ぎがあってもう1週間余りになる。
極力情報は伏せられているようだが、隠しきれない不穏な空気は基地内に伝播していた――人の口に戸は立てられぬ、と偉い指揮官サマが言っていたらしいが、全くその通りだろう。
そして転がるように駆け込んだ作戦室の立体パネルの前には、この特殊作戦に従事する隊員たちが居並んで取り囲んでいた。

特殊任務専門だったクルーゼ隊のメンバーをそのまま取り込み、隊員を追加する形で急遽組まれたジュール隊。
設計企画局のメンバーから捻出されて、これまた急遽結成されたヒエロニムス隊。
そして我らがハイネ・ヴェステンンフルス隊長率いるヴェステンフルス隊。
大上段で我らがオレンジな中隊長がふんぞりかえって、その両サイドに白髪なジュール隊長と茶髪なヒエロニムス隊長とが難しい顔をつきあわせている。
３隊合同で編成されて太平洋上に散っていたＸ０００Ａ追撃隊員が一同に介するのは実に１週間ぶり――招集ということは方針転換でもするのか？
「シンってばおっそーい……」
ルナマリア・ホークがまた文句を言う。
「やっかましいなぁ。ちょっとハンバーガー買いに外に出てたんだって」
ちらと横目で見咎めたルナマリアが脇腹を肘でつついた。
「やぁだ、もう。ソースついてるってば！　鏡くらい見なさいよ！」
「急いでたんだよ！」
口を拭ってから、また襟元を指摘されてはかなわない！　とばかりにシンは急いでホックを留める。
「はいはい、お疲れさんといいたいところだけど、本日から捜索範囲がひろがるんだなあ、てめーら。まぁだドレッドノートがみつからねぇんだよ！」
我らが隊長なる作戦司令はいつだってわかりやすいご説明だ。

システムの混乱で哨戒網が消えた不意を衝かれて、連合特殊部隊に奪取されてしまったＸ０００Ａドレッドノート。
その追撃と鹵獲を主眼においた極秘作戦が発動してからじき２週間になるだろうか。

連合との小競り合いはいくつかあったが、結局本体が見つからないまま時間ばかりが過ぎる。

「今朝からジブラルタルのザパト隊も加わってもうおおごとよ？こりゃあ向こうの戦線に影響でるね」

「宇宙港はあらかたチェック済み、ヴォストク隊は血眼でパナマ周辺張ってるよ」

隊長たちの口から漏れた参謀本部情報総局直轄の特殊部隊ふたつの名前に、「物騒ねえ」とルナマリアが鼻の上に皺を寄せる。

「アレを宇宙に上げられて月面連合基地に運ばれたら困るということだろう」

レイが横顔で言う。

「で、今ドレッドさんがどこにいるかってーと、偉大なるミラコロだか最新鋭潜水艦だかのせいで把握ができないわけで……どうよイザーク」

「まだ太平洋上にあるはずだ、そして少なくとも新大陸方面には向かっていないな」

パネル上に展開される海洋地図を眺めながらジュール隊長が腕を組む。

「その確証は？」

「まずひとつ、連合内連邦側のルートサーバーズをあらかた掘ってはみたが、前線基地からですら全然情報が出てこんのだ」

「ね、レイ。ルートサーバーズってなんだっけ？」

「連合軍内ネットワーク基幹部だ、１２基あると聞く」

ジュールの言葉を受けてひそひそと隣でルナマリアとレイが会話しているが、シンはスルーする。

……とんでもないことをさらりと言っているようだが、ジュール隊は特殊仕様クルーゼ隊の後継部隊だから、きっと敵方のハッキングなんかもお手の物なのだろう。

さんざん仕込まれてこき使われた挙句に激戦ばっかりに行かせられて死人続出、と有名な旧クルーゼ隊なんかに回されなくて、ホンっトよかった。

「連合も一枚岩じゃないってのは知ってたけどさあ。アイツ拉致しようとした陽動部隊のファントムペインってユーラシアだっけ？なんか表に出てくるくらいナカで揉めてんのかねえ」

「それもひとつの理由だな、いろいろな絡みがある」

不要な説明は省略するが、とジュールは簡潔に応じた。

「連邦に比べて技術面で後発組なユーラシアだ。あっちなら、東アジア共和国の極東ニッポンとか協力してそうな感じがする」

なんとなくね、とヒエロニムスが言い添えた。

「これは技術部内での噂ですけど。あそこってフジヤマ社に1基あるんじゃないかとかっていう話です」

日系のハーネンフース副官が言うので、シンも生前父さんがそんな話してたような気がするなぁ、と思い出す。

「OK、引き続きあたろう。……ったく、肝心な時に使えそうなあのバカがいない！　アイツはこういう時に役立たんでいつ役立つ気だ！」

「まあまあ。気持ちはわかるけど、ここはもう素直に成仏させてやろうぜ？」

「いやまだ死んでないんじゃないかなあ。絶対宇宙害虫より強いよアイツ。だって単体大気圏突破なんてアホして生きてたんだから」

「おいコートニー、貴様俺にまで喧嘩売ってるのか」

「あ、ごめ」

「もう無駄話はやめて下さい。混乱します」

一体何内輪で話してるんだか、とシンはあくびをひとつかみ殺す。

「はーいはい！　ドレッドノートってそのまま運ばれてるんですか

？　とっくに分解されちゃってＮジャマーキャンセラーだけになってるってことはありません？」
挙手してルナが声を大にする。
「いい質問だね」とヒエロニムス隊長が頷いた。
「バラされた状態なら放射線測定計でドレッドノートの現在地は把握できる、けど現状全然ノってこないってことはまだＭＳのままって推測できるんだ」
ん？とルナマリアとシンは首を捻る。
「よくわかりません」
「アレのエンジン部炉内の放射性物質は永続的に冷却してかないといけないんだ。うかつにキャンセラーを取り出そうとしてドレッドノートの電源を落とすと冷却機能まで失われちゃうから、下手すると炉心溶融なんてこともありうる。奪取した連中はＮジャマーキャンセラーのことを知っているくらいなんだから、当然そのあたり了解済みだろうね」

プロトタイプとはいえとことん恐ろしい機体だ、Ｘシリーズ。
つーか下手に刃向かわれたら、俺ら捕獲側もやばいじゃん、と今さらにシンは思う。
いくら自分に下賜されたのが捕獲専用にプログラムを仕込まれた新型機ったって、対応をひとつ間違えればとんでもない事態になってしまう。

「……でキャンセラーが失効してＮジャマーの適応範囲に入ったとしても、いったん放出された放射線は防げないから、環境の為にその対策が必要になる」
青き清浄なる世界を大事にしましょうってのが連合だしね、とヒエロニムス隊長はやや皮肉げに笑む。
「んで宇宙仕様な俺たちには耐性があるしナノマシンで対処できるにしても、ナチュラルの被曝上限値ってのは俺らより低いから、ど

うしたってバラす作業には時間がかかる。先方にとって内部構造が不明ならなおのことね。そして今地球上でその作業が安全にできる場所って北米デトロイトか白ロシアくらいしかない上に、原子力系の技術者たちは四月バカで仕事を追われて壊滅状態。有能なのはうちが根こそぎスカウトしてＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．に引き上げちゃったから――」

頭がくらくらする。

まあ要するにまだバラされずにＭＳのまんまだってことか、とシンは考える。

小難しい説明はホント苦手だ。

「――問題なのはドレッドノートのヘッドだ。そこに俺らの探してる本命がある」

ニュートロンジャマーキャンセラーの詳細を聞くのは初めてだ、今までは鹵獲を命じられていただけだったから、とシンは思う。

頭部に仕込まれてるのか。

「試作ニュートロンジャマーキャンセラーは出力が抑えられてて適応範囲がひどく限定されているんだ。アレが効くのは腹部エンジン部まで」

「頑張って１０ｍ弱といったところだな」

ジュールの補足にヴェステンフルス隊長が腕組みする。

「それでも十分すぎるくらいだな、起爆さえしちゃえばもうあとはジャマーなんか関係ないし」

「あれ、オーソン先生に言わせると一応ブラックボックスにはなってるらしいんだよね。普通に開けたらウィルスが起動して爆破」

ジュールがひとつ嘆息をついた。

「連中もバカじゃない。それもじき解除されてリバースエンジニアリングで、大量生産の工程にのる」

「おい、いやな予見するなあイザーク。ってかそこまでの技術が連

合にあるか？　リバースするのってまず理解できるだけの土台がいるよな？」

「侮るなよ。俺たちの間にそう差異はないし、あっち側の在地球同胞もいるはずだ。そもそもモルゲンレーテ見てみろ――鹵獲したジンでＭＳを開発しやがったんだからな。どっちにしろ遠からずＮジャマーキャンセラーに近いものは出てきたはずだ」

「でも大量生産ったって原材料調達が困難だろ？　アレって超レアメタルで確か地球上ではアフリカでしか採れないんだし、アフリカは親Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．だし、そもそもウチらでヴィクトリア一帯抑えてるんだからそうそう流出は……」

「地球上では、な。鉱脈が最近火星で発見されて採掘が開始された」

「え」

「今じゃむこうも入札競争に見舞われてるのが現状だ。うちのマティウス・アーセナリーと欧州ロゴスのミカエリス勢と北米ロゴスのアズーリ系と東アジア共和国の王一派と」

「ちょ、マジでー？　それは聞いてない、どんだけトップシークレットなんだよ！」

「とことん汚いねえ巨大資本ってのは！　どうしてくれるんだよデンカ」

「俺に言うな、それからやめろその妙な敬称！」

なんかややこしくて聴けば聴くだけ疲労しそうだ。

ぐちゃぐちゃ言わず俺たちは戦うだけだっつーの、と苦々しさを噛み締めながらシンは思わず口走る。

「ねえ、もういっそＮジャマーキャンセラーのさらにキャンセラーとか作ってもらえばいいじゃないですか、もしくはＮジャマー超強力版。探す手間省けるでしょ」

視線がシンの一身に集まった。

俺は妙なことを言ったろうか気まずい、と思えば言葉がつい零れで

た。
「……ってか、そもそも俺らＭＳパイロットですよ？　なんで情報部みたいな真似してるんですか、そっからして間違ってます」
あんまりごちゃごちゃ考えるのは好きではない。
単純に戦いで連合のＭＳを撃破すればいいだけの話じゃないか、というかそうでないと非常に困る。
そもそもカーペンタリアには参謀本部情報当局直轄特殊部隊のヴォストク隊がいるんだから、連中が給料に見合っただけ働くべきなんだ。
「シン、お前はひとこと余計だ」
傍らでレイが眉間をひそめる間もなく、隊長たちが瞬時顔を見合わせてそれぞれに嘆息を漏らした。
そしてジュールが真顔でこちらを見た。
「貴様こんな簡単な状況すら理解できんのか。どれだけ赤の質が落ちてるんだ？　そんなに本国は人手不足か？」
どういう意味だよ。そもそも真顔で俺に訊きやがって知るかよ。
――むっかつくなあ、このおかっぱ。
シンはむっつりと「さっぱり存知ません」と返答する。
「イザークのは言い過ぎにしたって、まあＭＳで戦うだけが戦争ってんなら楽だよなあ。俺らだってわざわざ降りてこなくて済んだって」
「あんまりいじめんなよ、俺のかわいい部下を！」とヴェステンフルス隊長に出された助け船に、シンは少々ホッとする。
「ＭＳパイロットな役割だけが赤じゃないんだぜ、シン。そもそも我らが懐かしき士官学校って有能な連中を総合選抜したあと適性で見たコースを割り振ってるだけの話なんだし。とくにもう戦局ここに至っちゃうと使えるものは全部使い倒せ！！　ってのがお偉方のお考えだし」
隊長は大仰に肩をすくめる。
「ってことでめちゃくちゃ期待されてんのよ？　期待には応えよう

ぜ」
「はあ」
しかしできることとできないことがあるだろう、とシンはぼんやりと思う。
「スピットブレイク早まったのも、要するに大量生産前にケリつけろ！！　って話だろうし。アラスカ叩いて連合の喉元に核突きつけて終戦って予定が、目論見崩れたらちょっと厄介っしょ」
「そのあたりどうなるんだろうな」
「最悪Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．優位で終戦に持ち込めればいいはずだ。あとは条約でがんじがらめに縛って各国の核再武装の実質無効化を目指す。それくらいしか思いつかんな」
「どっちにしろ急がなきゃなんないよなぁ、それ。スピットブレイクまであと1週間だけど余裕あんのかよ？」
なにやら一層ややこしいが、どうも戦争というのはルールの下で行われているらしいことだけは推測がついた。
けど、と一瞬シンは思う。
もし、そのルールが吹っ飛んだらどうするんだ？
「でもまあ、キャンセラーのキャンセラーと超ジャマーのことは本国に聞いてみような。案外イイ視点だと思うんだ。な、シン」
ふと我に返る。
……誉められた。
ヒエロニムス隊長はフォローしてくれる、アーモリーの士官学校で軍港に関わってた頃から思ってたけどやっぱりこの人はいい人だ。
ちらりとシンはその紅い視線を動かす。

だけどこのいちいち偉そうなおかっぱ、マジむかつくなぁ！

その視線を受け止めて、ジュールが口を切った。

「おい、何か不満なら言え」

瞬きもせずに、その切れ長の眼差しが自分を睨むので、ついつい頭に血が上りかける。

「……できないものをできないって言うのがなんで悪いんでありますか」

「可否は訊いていない。そもそも貴様みたいなひよっこに拒否権があるとでも思ってるのか」

すっぱり斬られて、かちん、ときた。

「根性論は流行りません！！　そもそも赤ったって、俺はアンタたち出来のよい方々とは違います！！　できるエリートさまがおやりになればいいと思います！！」

場の空気が凍り付く。

若干マズいことを言ったろうか、とシンがやや不安になった矢先。

軍靴の鋭い音ともに、炸裂音、鋭い痛みが首に走って足元が揺らいだ。

頬がじんじんと痛んで熱を帯びる。

殴られた！？

思わずシンは頬を抑える。

親父にだって殴られたことないのに！？

一瞬の反省の後で、突発的に頭に血が上る。

見上げれば、ひどく冷たい青の眼差しが見下ろしていた。

「阿呆か。エリートなんぞとひとくくりにされるが、俺たちは努力に努力を重ねて責任に耐えるだけの能力を獲得してるんだ。努力すらしようとせんヤツにできるわけがないだろうがッ！！」

俺だって努力して赤になったのにッ！！？

「ッざけんなよッ！？　――人が下手にでてりゃぁ偉そうにッ！！」
そして睥睨、青と紅の視線が火花を散らした。
「上官に対する態度か貴様ッ！？　この俺に喧嘩売ってるんだなッ！？　上等だッ！！　表に出ろッ！！」
襟首を掴まれて、引きずられるようにシンは作戦室を出た。

◆◆◆◆◆

「ああもう、誰かシン止めてよぉ……」
もつれるように退出する赤ふたりを見送ってルナマリアが嘆く。
「なんであの子ってばいつもああなのよぉ？」
「はいはい拳で語り合う連中はほっといて――」
ハイネが向き直った。
「まず腹をくくろうぜ。現場は現場で走るだけ、とも言えない状況になってきたんだから」
「どういうことです？」
シホが顔を曇らせる。
「軍の上のほうに連合っつーかユーラシアへの内通者がいるんだ、それもかなり権限がある白服にな」
そののんびりした声に、瞬時にして空気が凍り付いた。
「じゃなきゃおかしい。　Ｎジャマーキャンセラーのこと知ってるなんてごく一握りだ。しかもラグナロクのハッキングに乗じて手引きできるヤツなんだぜ」
「上官を信じられないって……それはちょっとマズイと思います」
アイザック・マウが表情を曇らせる。
「だって、ボクらの命を預ける相手ですよ？」
「俺たちは兵士だ、そりゃあ上の言うことはもちろん絶対。だけど同じくらい現場の僚友との連携と信頼は大事なんだよ、これは任務

達成だけじゃなくて、生き延びる為の絶対必要条件だ。それを裏切ろうってヤツは俺っち個人的にはぶっ殺しても全然おっけーだと思うね。……ということで情報はここにいるメンバーだけで限定！　ラグナロクにｕｐするときは絶対追撃班共有パスワード忘れんなよ、誘導されても吐くなよ、例えそれがお偉い仮面閣下だとしてもだ！　なにか言われたら我らがＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．のお題目、＞俺らってばちょー理性的スから勝手に自由判断＜だぞッ！！」

「総括されたところお言葉ですが、軍の論理ととんでもなく矛盾してますよね、ヴェステンフルス隊長」

シホの嘆きに、「わかってるって」とヴェステンフルスは肩をすくめた。

「だって仕方ないだろ。そもそも最初っから矛盾してんだからさぁ、この戦争も我らがＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．も」

「我々がそれを言ったら終わりです。まさかクーデターでもやるおつもりですか？」

おお、とハイネはまんざらでもなさそうに腕を組んだ。

「――ナイスアイディア、シホ」

「もうやめて下さい、ヴェステンフルス隊長。私は国家転覆教唆罪に問われたくありません。一族郎党抹殺されたらどうしてくれるんですか」

「ま、俺らが戦うのはＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．のためだよな、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．の！　その為には頭使って自分の身は自分で守らなきゃな？　じゃなきゃ素直に従って死んでった連中の二の舞よ？　俺らは連中の分まで生きなきゃなんないんだよ、なんたって俺らって未来の種なんだからさ！　はい以上ぜーんぶまるっとオフレコ！！」

レイがふと口を切った。

「スピットブレイクのアラスカ奇襲、Ａクラス白服と我々以外には伏せられているとはいえ、これも漏れていると推測されますが？」

今思いついた、という静かな口調だった。

そもそも軍の風紀が乱れている！！　と怒りのジュールが声を張り上げて襟首を掴んで、シンを引き上げる。
「このだらしない前髪を切れッ！！　なんだこのゴキブリみたいな触覚はッ！！？」
「こけしカットにいわれたくないでありますッ！！」
空気を裂く音に両腕で防御する、だがいかんせん敵の拳は強力だった。
力押しで後方に押し切られきった直後、シンは反撃に出て正拳突きで踏み込む。
避ける赤い軍服の身頃をわずかに掠めて、腕をぐいと掴まれるのは一瞬。
「ッなんだこけしってのはッ！！？」
「物を知らないということはまっこと恥ずかしい限りでありますッ！！」
同時に頭突きを喰らわせる。
見事に無防備だったジュールの顎に入って、がくんと彼は空を仰いだ。
「ッ貴様ァァァッ！！」
振り下ろされる拳をいなそうとかがみこんだ矢先、ドアが開いて、ぞろぞろと解散した隊員が引き揚げてきた。
一瞬注意が逸れる、その隙を狙い澄ましたように脇腹に鋭い蹴りが入った。
……リーチが長い、目測を誤った！！
踏みとどまるものの、思わずシンは呼吸を忘れてつんのめるようにかがみ込み、羞恥と憤りとで涙目のまま睨み上げる。

◆◆◆◆◆

ちっくしょー！！
一番カッコ悪いところをみんなに見られた！！
シンは顔を歪める。

「おいおい、お前らまぁだボディランゲージしてたわけ？　ラクに言語で会話しようぜ、なあ」
ハイネ隊長があきれ顔で割って入った。
「おい、最初が肝要だぞッ！！　飼い犬はちゃんと躾けておけッ！！」
苦々しげに吐き捨てて、ジュールは背中を向けた。
「ッ誰が犬だよッ！？　おい逃げんなおかっぱッ！！　決着ついてないだろッ！！？」
シンは痛みをこらえたままに立ち上がる。
はいはい噛みつくなよとハイネは肩をすくめて、シンを羽交い締めにする。
「お前その勇気は買うけど、デンカ切らすとちょっと厄介よ？」
「だって隊長ッ！！」
「反論はなーし。お前さ、この議事録まとめてタイムスケジュール組んじゃって。しっかり読んどけよ？　肝心なところでいなかったんだから」
「はあ……」
毒気を抜かれて、不承不承シンはディスクを受け取る。
「いやあ、どっかの垂れ目がいないってのは不便だよなあ。ってかおーいイザーク、ちょとまだ話があるわー！！」
ヴェステンフルス隊長がジュールの後を追って廊下の向こうへと消える。
「行こう行こう、俺ウィラード教官とこに行ってちょっと相談してこなきゃ」
「じゃあ私は本国のオーソン先生に連絡してくるわ。アイザック、

この子たちのフォローお願い」
「いやいや無茶振りはやめようよ、ボクにはムリだよぉ」
慌ただしく皆が去った後、いつもの2人が側に残った。
「やだもう……おっかなーいードキドキしちゃったわよ」
ルナが困り顔を見せる。
「お前、素直すぎる。思ったままを言うな、ちょっと考えろ」
レイが相変わらず難しい顔でかがみこむ。
「俺はレイみたく取り繕うのが上手いわけじゃないんでね」
座り込んだシンはあぐらをかいて眉間に皺を寄せる。
「だからって敢えて隊長クラスに喧嘩売ってどうする？」
まーた説教かよ！！
「お前はとことんジジくさいッ！！　どんだけ人に揉まれて苦労したらそうなるんだよ！？　よっぽど人に気を使って生きてきたんだろ！！」
プッとルナマリアが吹き出した。
「ほら、ルナだってやっぱりそう思ってるんじゃん！」
「……お前の取り柄は直感的なことだけだな、シン・アスカ。そしてタチが悪いことになかなか鋭いところを突いてくる」
突っ込まれたとしても、レイはどこまでもクールだ。
「ほら、立て。会議の顛末を教える」
差し出された手を握って、ようやくにシンは立ち上がった。

＊＊＊＊＊

またモルゲンレーテか、と内心ニコルは嘆息をつく。
本当にイヤな縁がある会社だ。
眺めのよい最上階フロア、その白く長い廊下をゆったりと先導するエリカ・シモンズが背中で告げる。

「あなたにお会いしたいと仰っているのはロンド・ミナ・サハクさま。次のサハクのご当主でいらっしゃる方なの」
オーブの軍事を司る家の跡取りか、とニコルは思いを巡らせる。
たしかオーブの宇宙ステーション・アマノミハシラを管轄する人だったと記憶しているが、本国に降りてきていたらしい。
「いったいその方が僕なんかに何の用なんでしょう？」
訊くまでもないかもしれない、自分はモルゲンレーテでの爆破工作の実行犯だ。
まさか捕虜として捕らえた兵士を拷問にかけようとでもいうのか？
といささか不安を覚える。
だがP．L．A．N．T．とオーブは停戦条約を結んだはず……自分がアカツキ島で寝込んでいたあいだに覆されていなければ、の話だけれども。
だがエリカ・シモンズは「そうねえ、あなた音楽家なんでしょ？」と首を捻った。
「え？」
「ミナさまは大層そちらに造詣が深くていらっしゃるの」
いったいどういう人なんだろう？
やがてエリカ・シモンズはひとつのドアの前で足をとめた。
「ソキウス、連れてきたわよ」
「はい」

聞こえてくるのはよく調律されたグランドピアノの音だ。
ニコルは耳を澄ます。
ト長調、４分の４拍子、速度はＬｅｎｔ。
古風でノスタルジック、どこかセピアな響き。
これは、Ｒａｖｅｌ：　Ｐａｖａｎｅ　ｐｏｕｒ　ｕｎｅ　ｉｎｆａｎｔｅ　ｄ？ｆｕｎｔｅ――逝ける人に捧げられたうた。

「どうぞお入り下さい」
その水色の髪をした無機質な印象の連合軍兵士は、無表情にドアを開け広げ、導き入れた。
踏み込んだニコルは扉の前で一礼をし、そして顔を上げて部屋の中央にグランドピアノを見いだす。
その前に座して鍵盤を愛撫するように指を滑らせているのは、濡れ羽色の黒髪で背中を覆ったひと。
やがて兵士はドアを閉めて控え、シモンズのか細い足音は廊下の向こうへと消えた。
名乗って演奏を遮ることも忘れ、ただ佇んでニコルはただ目を閉じる。

ロンドする主題に余韻を残す掛留音。
亡き人への断ち切れない想いが繰り返される主題に滲み出る。
――誰を偲んでいるのだろう、この人は？

やがてピアノの音色は最弱音で、静寂のただ中に余韻だけを残して、空気に掻き消えた。
「……どうだ？」
女性にしては低め、心地よいレッジェーロ・コントラルトのボイスに、ニコルは笑む。
「哀しいですね。でもとても綺麗で懐かしくて、僕はいなくなってしまった故郷の戦友たちを思い出しました」
「そうか」
ゆうるりと彼女は立ち上がって振り返った。
２mはあろうかという長身のその女性は、艶やかでまっすぐな黒髪を肩から流している。
陶磁のような白い肌に映えるその眼差しは最高級のルビー、鳩の血（ピジョン・ブラッド）。
存在に緊張を孕んで、至高を体現するかの帝王紫のマントが翻った。

「お前も何か弾くか？」
言葉をかけられて我に立ち戻る。
「いえ……」と言いかけて、ニコルは思い直す。
この右手とともにいなくなった＞彼＜をふと思う。
……ここからはじめようか、ブリッツ。
「ラベルの『左手のための協奏曲』ピアノパートでもよろしければよろこんで、天空の御使い（サハクイエール）さん」
ふっと彼女は笑んだ。
「よいのか、アレを弾きこなすのは難儀だぞ？」
「僕は難しいって言われると燃える性質なんです」
「顔に見合わずなかなかの気性か。よかろう。来い、神聖ローマを継ぐ緑（グリーン）」
入れ違うように、ピアノの前のスツールに座して、高さを調整する。
そして鍵盤をひとつ押下。
低音だというのに、こんなにも澄んだ音。
元来よいピアノではあるのだろうが、超一流の調律師によって調律されたのにちがいない。
左手の全ての指をポジションに揃え、呼吸をひとつ。
かの人の作品番号82、Ｌｅ Ｃｏｎｃｅｒｔｏ ｐｏｕｒ ｌａ ｍａｉｎ ｇａｕｃｈｅ ｅｎ ｒ？ ｍａｊｅｕｒ――
左手のためとはいいながらも決して他の協奏曲にひけをとるところがない、むしろ僕はこの上なく好きだ。
表現が制限されるからこそ、そのムダの削ぎ落とされた美しさはひときわ高められる。
ゆるやかに刻みはじめた低音域の旋律のただなか。
やがて黒髪の女性はゆったりとソファーに腰を下ろした。

＊＊＊＊＊

開け広げられた窓から吹き込む風に混じる衣擦れの音、そしてスラックスのベルトを外す音に、ふとアスランは目を覚ます。
水色のハイネックシャツを脱いで、締まった肉体を惜しげもなくさらけだす男の背中が見えた。
広くて綺麗だと思うのは、ラスティ以来2人目だ。
彼は脱いだシャツ類をそのまま簡易ベッドの上に投げる、普段几帳面な人がひどく珍しい。
「荒れてるっぽいわね、今日はまた一層」
上半身を起こしてアスランが声をかければ、削ぎ落とした銀髪の向こうでイザークの青い視線が振り返った。
「分別のないガキの相手は本当に疲れる！」
ミーティングで何があったのかは知らないが、眉間の傷から血を噴出させなければいいけれど、とは一抹の心配だ。
「でもそんなにイザークも大人ってわけじゃないでしょ？」
「ッうるさいッ！！」
これまた綺麗な胸筋と腹筋を眺めるうちに彼はトランクス一枚でシャワーを浴びに行ってしまった、やがて水音が聞こえだす。
「もうやだ、ぐしゃぐしゃ」
アスランはベッドを降りて軍服を拾い上げる、こんな光景を看護師にでも目撃されたら誤解も甚だしい。
寝るのは予備ベッド、せめてシャワーくらい宿舎にあてがわれている自室に帰ればいいのに、と思うが「お前はほっとくと何しでかすかわからん！！」との剣幕に負けてそのままだ。
ようやくに包帯が解けたのはよいがどうにも動きづらい、とベッドサイドに腰をかけて、アスランはデスクにおかれた申請書を遠く眺

める。
除隊申請書。
ご丁寧にペンまで添えられているのは、もうさっさと書け！！　ということだろう。
しかし果たしてあの父が応じるだろうか、父が応じたところであの女性が頷くか。
そもそも知っていてプロパガンダに利用されてきた。それに乗った人たちに対して私は責任があるのに、……除隊？
思考の迷い道にはまりそうになる。
「ああ、もうヤダ」
地球に降下してきて、こっそりと会いにきたアビーが「ここだけのヒミツですよ？」と教えてくれたのを思い出す。

　ロールアウト予定のXシリーズの一体で、拠点防衛用のスペシャル機。
　イージスのプログラムと戦闘データが丸ごと移植されてるっぽいです。

それってやっぱり私が乗ること前提よね？
アスランは途方に暮れる。
Z．A．F．T．の裾野広しといえどシホ曰く「無茶ばっかり！」な戦い方をしているのは自分以外にいないはずだ。
戦い、戦い、戦い――
私は戦闘用に調整されたわけじゃない、お母さまはそんなことを望む人じゃなかった。
試しにやってみたらすべて思った以上に上手くいった、ただそれだけの話で。
ヘッドレストに凭れて天井を仰ぎ見る。

……ねえキラ、あなたもやっぱり悩んでたりする？

当然返事はない。
でもきっと悩んでいるだろう、彼はやっぱり私とよく似ているから。

あなたを探しに行こう、キラ。
探して見つけて、それから――

やがて水音が消えて、バスタオルを頭から被って濡れたイザークが姿を現した。
ッてェ、と顎を撫でているので思わずため息が漏れる。
「また怪我したの？」
全力でまっすぐなのはよくわかるのだけれども、負う傷も多い。
彼はいつだって満身創痍で、時折見ている方が辛くなる。
「問題ない！」
傍らに座るので、顎とついでに額に残る傷跡も撫でれば、イザークはくすぐったそうに目を細めた。
「これ、いつ消すの？」
キラがつけた傷痕、という事実が意識から消えないまま、心がしくしくと痛む。
「戦いが終わったら消す」
「そう」
指に指を絡めて口元に押し付けてイザークが言う。
「愛している」
アスランはふふっと笑んだ。

「……知ってる」
いつだってこの人は私を見ていた。
「最初出会った時に、もう惚れてた」
言われてきょとんとする。
「それっていつ？　慰霊式典？」
よくよく思い返せば、あの時も鳥肌が立つほどの視線だった。
それとも泣きはらした自分がよほど見苦しいのか、もしくは身だしなみに何か問題があったろうかと不安になるほどに苛烈だった。
「いや、コペルニクスだ」
コペルニクス？
あの街でこの人に会った記憶なんて全然ない。
訝しくアスランが首を捻れば、眼前の熾り火がぱちりと音をたてた。
「おい、とことん俺の貴重な人生の時間を無駄に浪費させやがって……お前は知らん顔か？」
「でもそれって私のせいじゃないと思うわ」
じろり、と青い目が動いて、不穏にその口元が歪んだ。
「ああいつだってお前のせいじゃないんだろうよ、この性悪！」
そして彼はずかずかとベッドに上がり込んだ。
「俺じゃなくてラスティを選んで、とことん黙殺を決め込むとは、イイ根性だッ！！！」
「だってどうしようがあるっていうの？」
さして考えることもなく思うところを素直にアスランは述べる――
「あなたのお母さまは怖いし、婚約となったらあなたに何されるかわからないし、私はそんなに急いで大人になんかなりたくなかったし」
婚約は結婚とほぼ同義だ。
そして従順をもって夫の意に添え、とは貞淑なる母の教えでもあるから、否が応にも身辺に危機感は覚えざるをえない。
ムラムラを隠しきれていないイザークの手で、無理矢理未知なる世界へご招待……なんて状況は遠慮したかった。

あの「人工呼吸」には、さすがに泣かされた……

言葉の最中でいきなり両頬をつかまれて伸ばされる。

「いたいいたいいたい」

ふがふが言っている一方で、彼は怒りを漲らせていた。

「そりゃあ母上はアレだッ！　ちょっと極端な人だ！！　だからそれは悪かったと謝ってるだろうがッ！！　だがそれでなんでラスティを選ぶ必要があったッ！！？　まさかヤツは不能だったとでも言うのかッ！！？」

全然謝ってない上になんか勝手にヒートアップしてる……その不能ってそもそも何？

「だってラスティは私を尊重してくれるっていうのは、とってもよくわかってたし――」

彼を選んだ理由はいろいろあった、懐かしく切なく思い返しながら改めて指折り数える。

「誰よりも私を理解してくれてて、いつだって優しくて穏やかで、頼れて信頼できて背中を預けられて、話が面白くて一緒にいて楽しくて」

理由なんて数え切れないくらい、と思わず目が遠くなる。

今でも私は彼が好き。

時間が過ぎて思い出になっていったとしても、きっとずっと「好き」のままだ。

「おいッ！！」

揺さぶられてアスランは現実に返る。

「あ、ごめん」

怒りの熱が一層増してイザークの顔から血が引いているような気がするが、まあそれは錯覚だろう。
「えっと、そして何より――イザークじゃないし？」
ごくごく素直に思ったことを舌に乗せた途端、ひときわ強く頬が引っ張られた。
「いたいいたいいたいいたいッ！」
「お前はバカかッ！！？　判断基準が俺になってるのになんで気付かないッ！！？」
言われればそうだ、今気付いた――それだけこの人の存在は大きかった？
しかし語調がますます荒くなっている、自分は癇癪爆弾の導火線に火をつけてしまったらしい。
これ以上話せば話すだけドツボ、しかも今迂闊に何か言うとまたナイフを抜かれそうな気がする。
いつも煽っているような結果になる……自分の口下手さをアスランは心底呪う。
多分彼が聞いていたら「ホントなにやってんだか」といつもの口調で嘆いただろう。
やがて引き込んで、イザークが直近で低く問う。
「――そのラスティとはどこまでやった？　まさか処女捧げたとかじゃあるまいな」
これは本気で怒ってる、とアスランは眉間をひそめる。
臨界点を超えるとイザークは口調が平坦になる、それはもはや経験則だ。
「それはないわ」
疑念の余地を残さないようにきっぱりと返答する。
結婚までは貞操を守るように、とは母との約束でもある。

あなたを愛して旦那さまになる人のために。

煩わしいことは考えず放置したままにきたが、どうも「初めて」を期待する人がいるらしい、という現実だけは把握した、……たった今。

「そうか」

聞くなり予想外にクールダウンしたイザークを眺めながら、男って純情？　とアスランは思う。

母なる人の知恵は案外侮れないのかもしれない。

「でもちゅーくらいはしたろうが」

「……」

「そこは嘘でもしてないと言え」

「じゃあ……してない」

「ッこンの嘘つき女ァッ！！！　俺が何も知らないとでも思ってるのかッ！！？」

「いたいいたいいたいいたいッ！！　腫れる腫れる腫れるッ！！」

どうあっても地雷を回避する術はないらしい。

いったい私はどうすれば……うすうす気付いてはいたけれど、やっぱりこの人とことん面倒臭い男？

ようやく手を振りほどいて、涙目になりながら両頬をさする。

「そういうことや思い出、全部まとめて受け止めていただけますでしょうか」

「――――ムカつくが仕方なかろうッ！！」

全部塗り替えるッ！！とイザークは肩を怒らせる。

「じゃあとりあえず、キスして」

ねだれば、顔の角度を微妙にかえて唇が触れた。

遺伝子レベルでぞくぞく来る感じ、とでも言うべきなのか――妙な鳥肌が立った。

１回目はただ怖かった。

ねじ伏せられて無理矢理支配される上に“男”の気配自体が恐ろし

かったから、ますますイザークの近くがイヤになった。
2回目は出撃前、もう黙っていてほしいの一心だった。
普通に向き合ってするのは初めてだと思う。
「3回目ね」
「いや、5回目だ」
「ん？　そんなに記憶にないんだけど」
「……前、レクルームで寝ている時に少々悪さを」
やや目を伏せてイザークが耳元を赤くする、そういうところは可愛い。
「あとはイージスから引き出した時だ、あれは本当に人工呼吸だった」
本当にこの人には手間ばかりかけている、と胸の奥がちりちりと灼けるように痛む。
「じゃあいろいろあったから、ここから数え直し」
その白い頬に手をかけてのぞきこみ、唇を重ねる。
触れあうのは気持ちよい、多分、クセになる。
「お前はキス魔か」
「それはもう――」
ならば汚名ついでに。
笑んでそして腕を頭に絡めて囁く。
「奥に来て、あなたのそのからだの熱を分けて」
その白い焔で私の凍り付いた部分を融かして――あなたと私の存在を教えて。
一瞬青い目が驚いたように見開かれた。
「ああ、上等だ！！」
やがて勝ち誇ったように微笑んだ彼をそのまま胸元に引き込んで、もつれるように倒れ込む。
「覚悟しろッ！！」

＊＊＊＊＊

もうフラフラだ、慣れない書類作成は結構しんどい。
書類ファイルを抱えていたシンは眼前を行く青紫のパイロットスーツの男を発見する。
「あ、麗雄」
ぴたり、と足を止めて、そのパーマがかった金髪の男が振り返った。
「ボクの二つ名を略した挙句に気安く呼び捨てるんじゃない、シン・アスカ。いい加減華麗なる英雄ヴィトゲンシュタイン先輩と呼びたまえ！」
自称『華麗なる英雄』ルドルフ・ヴィトゲンシュタインが実にイヤそうな顔を見せた。
金髪緑の目で特注の青紫のパイロットスーツ、緑服の中でひときわ目立つ男だ。
まったく色物好きヴェステンフルス隊長でなければ、絶対他の部隊では生きていけない……というか自分もか？　まさか。
「いいですからこのファイル、隊長に持ってって下さい。どうせ報告に行くんでしょ？　俺、ヒエロニムス隊長んとこ行かないとなんで」
ヴィトゲンシュタンはむっつりと応じる。
「ボクに命令する気かい、平の赤服坊やごときが」
「アンタだって平の緑でしょうが。つべこべ言わずにこれお願いします」
「ったく！！」
尊大な割に真面目な青年貴族はファイルを受け取ると肩を怒らせて去って行った。
あんなんだから、何歳も年下のルナにイジられるんだっつーの。

＊＊＊＊＊

曲の終わり、傍らに音もなく彼女が歩み寄ってきた。
「その昔、民族国家という言葉が流行った時代もあった。いつしかそれも時の流れのただなかに埋もれたが」
ロンド・ミナ・サハクの声はひどく心に染みこむ、ある意味武器ですらあるレベルでいい響きだ。
「国家ではなく、個々を繋ぐのは文化だという考え方だ。習俗、言語、信念、宗教……もちろん音楽もまたそこに含まれる」
鍵盤のキーがおりて、澄んだ音がひとつ、この空間に響く。
そして彼女はひとつの主題をそのしなやかな右手で弾く。
パッヘルベルのカノン……無名の音楽家が残した、史上最大最高のカノン。
応じてニコルもまた左手で追いかける。
追いかけ続け、繰り返される主題。
戯れにも似たわずかな時間のあと、再びロンドの名を持つ女性が口を切った。
「音楽は言葉を必要としない。ゆえに国境も民族も時間をすら越える、もちろん種であろうともだ……あるいはパクス・ムジカニアを実現できるとは思わんか？」
音楽による平和。
なんていい響きなんだろう！
「素敵ですね。僕はそういう言葉に弱いんです」
でも、とニコルは首を捻る。
血のように紅い眼差しが、ぬばたまの黒髪の下から覗いた。
「――なんであなたはこんなところにいるんですか？　そんな主義をお持ちのあなたこそ、月に上がるべきだったんじゃありませんか？　僕はそう思います」

地球とP．L．A．N．T．のはざま、なにものにも依ることなく独立経済圏を構築している月。
あの場所には、その中立を維持する為にひとつの絶対的権力が存在して久しい。
世界を再編した５０年前の大戦争の後、広い裾野を誇る宗教家たちが世界の荒廃を憂えてそのまま月に上がり、彼らはＭａｒｅ　Ｔｒａｎｑｕｉｌｌｉｔａｔｉｓにひとつの都市を築いた。
名を持たないその宗教都市を中心軸に、月の自治都市群は同盟を結成して、現在もなお中立とその自由とを享受している。

そのタランクィリタティスにいる人たちがしっかり規範を維持してくれていれば、そもそもきっとこんな種でいがみあうような戦争は起きなかったはずなのだ、とニコルは思う。
「いくら中立ったって、あなたたちにできることはたくさんあったはずなんです」
恨めしげにニコルは見る、だがその視線を真っ向から受け止めて御使いのひとりである女性が言う。
「残念だが我々はＡＳＴＲＡＹだ。聖域においてサハクィエールはイレギュラーなのだよ」
王道ではないもの……
「そしてお前もだな、帝国傍系末裔の子」
「そうですね」
大昔、神の名のもとに築かれ、地上に神の王国なる一時代を構築した神聖ローマ。
だがその一族が歴史の表舞台から姿を消して久しく、そして自分たちはその流れを汲んではいても、傍系末裔のまさにＡＳＴＲＡＹだ。
多分自分たちは同じなのだろう。
「だが王道だけでは世界を築くことはできぬ」

再びニコルは傍らを振り仰ぐ。
「お前に見せよう、ＡＳＴＲＡＹＳだ。月にも地球にも依らぬ未来への種だ」

＊＊＊＊＊

夕闇に染まる視界に、ベッド下に散乱する軍服が映った。
起き上がり、拾い上げて素肌の上に纏えば、とたん持ち主の匂いに包まれる。
……本人は至極キレイなのに、なんとも男臭い限り。
そしてサイズが全然違う――袖の長さ、襟周り、裾の長さすら。
全然気付かなかった、これが彼と自分の差。
とはいえ基地内を歩くには軍服がどうしても必要になるし、まだ自分は外出許可が降りていないから申請を出したところで支給されないだろう。
咎められたら、多少痩せたとか縮んだとかでも言えばなんとかなる？
背筋を正したアスランは鏡の前で自分をまじまじと眺める。
これが私？　こんな姿だった？　髪が伸びたから？　まさかやっぱり縮んだ？
軍服のサイズが違う、という以上に何故か奇妙な違和感さえ覚える。
客観的に眺める鏡の中の自分に、女の匂いを感じて、アスランは少しばかり途方に暮れる。
……この違和感と自分のからだの変化は、しっかり受け止めないとダメなのだろう。
もう逃げる子どもの時期は終わった。
スラックスに脚を通してベルトを思い切り締めてバックルで留める。
そして鏡の前で難儀しながらもひとしきり見られる程度に整えた後、だぼだぼのブーツを履いてベッドの上の背中に一瞥を投げかける。

「ちょっと行ってくるわ、イザーク」
熟睡だからきっと1時間くらいは大丈夫だろう。
そのままアスランは部屋を出た。

＊＊＊＊＊

人の溢れかえる中央大食堂で、茶髪の隊長は端末を眺めながら食事をしていた。
向かいに座ってシンはおにぎりをひとつ取る。
「ここって和食結構充実してますよね」
「だろ。日本人も満足なら相当レベル高いね」
「ってか俺、今はP．L．A．N．T．市民です、いちお」
そしてシンはタイムスケジュールを提出する。
コートニー・ヒエロニムスはそれをぺらぺらとめくった。
「ああ、いいんじゃない？　でも一応イザークにも確認とっといてよ、このタイムスケジュール。OKが出たら各員に配信しちゃっていいから」
「ジュール隊長でありますか。じゃあメールしときます」
あまり会いたくはない、できるならメールでさっさと済ませたいところだ。
「この時間にメールを見るかなあ？　きっと医療棟だから通信機は切ってるだろうしな」
おにぎりをほおばりながら、ヒエロニムスが首を捻る。
「医療棟？　なんでありますか」
頭突きはしたがまさか怪我でもしたのか、あのおかっぱ？　とさして関心もなくシンは思う。
「やー。将来の嫁さん予定が医療棟にいるからさ、入り浸り」
なんだそりゃ。

一見堅物そうなのに、非番とはいえ待機中になんちゅう不埒な……というか、あんなのを引き取ろうという物好きがこの世に存在しているということ自体が驚愕だ。
俺が女なら断固イヤだし、ましてや可愛いマユをヤツに嫁に出すとかなったら絶対に反対する、あれは間違いなくＤＶ男だ。
「ってかもう夜ですよ？」
「夜だからだろ。彼女ようやく包帯とれたって話だったし、つきあい始めのさかり時ってやつ？」
「なんですかそれはぁ。もしかして直近まで童貞だったとかですか、あんなに偉そうなツラして？」
俺だってフツーに卒業してるのに、やはりコミュニケーション能力に何か欠くところがあるのだろうか、あのおかっぱ。
「うん、君ってホント失礼だね。まあいろいろあるんだよ。俺たちだって青春まっさかりだし、繁殖はＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．市民の義務だし？」
なんかヤだなあ、そこに情緒ってもんはないのか。
Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．に渡って数年だが、未だに馴染めない習俗のひとつに婚姻統制がある。
婚姻統制なんかそもそも馬鹿げてるんだ、そこまでして繁殖したいか？
そんな色気のない世界、俺はイヤだね。
「俺はまだイイです、皆さんでどうぞ頑張って下さい。ということでこのスケジュール表、まんま通して配布しちゃダメですか」
「ジュール隊長どのはそういうのすごい厳しいし、何かお考えがあるかもだからな。悪いこと言わないから一応見せときなよ。じゃないと受領したばっかの君のインパルスがおしゃかになる」
シンは鼻で笑う。
「連合製ＭＳにワンオフ機が堕とされるわけないじゃないですか」
「さあ、どうだろうねえ。性能差より戦い方だと思うけど？」
とヒエロニムスは物騒に笑って付け加えた。

「それよりそのリジェネレイト（X011）のこと絶対他に言うなよ、シン・アスカ」
「わかってますよ」
ドレッドノートの為に繰り上げロールアウトされて極秘偽装されたんだ、その重みくらい俺にだってわかってるとも。

＊＊＊＊＊

司令所はいつもながらに大賑わい、とアスランは非常用入り口から内部へと忍び込む。
そして見慣れた金髪のオペレーターがブース群に入り交じっているのを見つけて、素早く歩み寄った。
「あら、アスラン？」
きょとんとした顔でアビー・ウィンザーが見る。
「しーッ」
バレちゃうと困るから、とアスランは腰をかがめる。
「医療棟からよく出てこれましたね？　ジュールさんがつきっきりで監視してるって話だったのに」
「監視……私ってなに？　徘徊老人？」
「やだもう！」
ころころとアビーが笑うのも久々に見る、とアスランは懐かしさとともにホッとする。
「ねえ、ちょっと本国に繋いで貰える？　多分国防省にいると思うの、あの人」
「もしかしてお父さまですか」
「そう」
あら！　とまた朗らかに笑って、アビーはパネルで通信回線を開く作業をしながら、眉間を顰めた。

「ねえアスラン。アマルフィさん大丈夫でしょうか？」
親しく付き合っていた人のことだ、それもあってアビーはきっと降りてきたのだろう。
「きっと大丈夫よ。あの世で会わなかったもの」
慰めではなく本気でそう思うのだが、彼女は冗談だと受け取ったらしい。
「もうやだアスランてば！　あとで臨死体験の話聴かせて下さいよね！」
笑んでアビーが席を譲り、アスランはインカムをつけてブースに座る。
『国防総省国防長官官房です』
秘書官なる女性が応じた。
いつものクセで軍属認識番号を口にしようとして、それを飲み込む。
「……アスラン・ザラです。父はそちらにおりますでしょうか」
瞬きほどの間があった。
『少々お待ち下さいませ』
存外待たされた。
『なんだ』
うなり声とともに、想像以上に不機嫌な父の血色の引いた顔が映し出された。
寝起きだったろうか、と思わずアスランは時計を確かめる。
P．L．A．N．T．標準時的に昼だと思ったのだけれども。
『――バカ娘がッ！！　いったいどこから繋いでいるッ！！？』
轟く怒鳴り声に、耳元で音が割れてツーンとする。
ただ威圧感と怒鳴り声に関してはイザークでいい加減慣らされた、その点は心底彼に感謝する。
アスランは怯まむまいと目に力を込めて言葉を続ける。
「それはもう。カーペンタリアの司令所です」

父パトリックは猛然と片手でキーボードをたたき出した、シュナイバー司令を呼び出そうとしている!?　とアスランは焦る。
「あ！　待って下さい、お話を……」
『なんだッ!!　医務室を這い出してまで言うに値する用件かッ!!』
ああ、この人はこういう人だった。
せめて素直に「大丈夫か、寝ておけ」くらい言ってくれればいいのに。
……なんだか誰かさんによく似てるような……？
「値する用件だと、私は勝手にそう思っています」
改まってアスランは背筋を伸ばす。
「とても遅くなりましたが議長選出おめでとうございます。メールも考えたけれど、お父さまお忙しいからご覧にならないだろうし、やっぱり直接伝えたほうがよいかと思って」
『前置きはいらん！　結論から言えッ!!』
「向こうで、お母さまに会いました」
『……』
厳めしい表情のままで、父はただ沈黙した。
意外だった。
昔から宗教的な一切に興味などない人だ、たかが夢ごときなど電波と時間のムダ、と一蹴されるかと思ったのに。
「伝えてって言われました、だから」
多分、母は自分の口から伝えたかったはずなのだ。
だから彼女によく似ているという私が言おう。
「――“今でもあなたを愛しています”」
『……』

音声回線は途切れたのかと思うほどに静かだった。
双方の視線が、途方もない距離を隔てて絡まりあう。
お父さまは不器用な方だから、と言っていた母の言葉を、今はじめて理解する。
無表情なのは相変わらずなのに、このひとはこのまま泣くんじゃないだろうか、とふと思った。

目の前にいるなら、あのひとの代わりにあなたを抱きしめることもできたのに。

少しの間の後で、アスランは小首を傾ける。
「お話したいことがたくさんあります、お訊きしたいことも。議長になられてお忙しいのはわかっていますけれど――帰ったらすぐお会いできれば、と思っています」
『よかろう。待っている』
相変わらず鋭角な父、でも耳の淵が赤い。
「楽しみにしています、お父さま」
通信を無事終えて安堵する。ちょっとは父子関係的によい方向へ前進できると期待しよう、とアスランは思う。
「あ、司令閣下がこんなところにおでましに」
アビーがあさっての方を向いた。
「まずーい……」
どうやら呼び出されたらしい。
お説教をいただくまえに、とアスランはかがみこんでブースを離れた。
「ゴメン、アビー。また今度ね」

久々に歩く基地の中は、ひどく騒然としていた。
ここは、こんな空気だったろうか――アスランは首を捻る。
ひどく切迫している印象がある。
廊下の向こうから見慣れた人が姿を見せた。
「また無茶してるの？」
ほとほと呆れ果てた、とシホ・ハーネンフースが難しい顔をする。
「あなた面会謝絶のはずだったでしょ」
「うん、だからちょっとだけ抜け出してきた」
「その身勝手でどれだけ周りに迷惑かける気？　さんざん引っかき回してまだ足りないの？」
いつもながら耳に痛いが、そんなに自分は迷惑の種だったろうか、とアスランは少々途方に暮れる。
シホはさらにひとつ嘆息をついた。
「余計な手間をこれ以上かけさせないで……今、本当に大変なんだから」
「ねえ、何があったの？」
「あなたは知らなくていい。除隊するんでしょ？」
除隊、とそれは確定事項のように皆に伝わっている。
誰も咎めもしない、むしろ「よく頑張った」と労られるくらいで。
だがその現実にアスランは一抹の寂しさと疎外感とを覚える。
軍の現状を訊いたところで、もう誰も何も教えてくれない。
「ねえシホ……せっかくの機材、ごめん」
バッテリー接続こそ解除していたが、装備したまま出撃したので、試験機材はイージスと一緒に木っ端微塵になってしまった。
聞いて思わず涙が出たのは、多分その機材にかかった金額の途方もない桁のせいだろう。
「ホントね。おかげでまた予算獲得に奔走しなくちゃだわ。こっちもいい加減キツキツなのに」
そう言われると本当に弁解のしようがない。
「でもいいデータはとれた、実際の上限値がどこかもわかった。あ

れをもとに本国でXシリーズに実装が進められたのよ」
ムダにはならなかったのだ、とアスランは少々安堵する。
「それからそれ、不格好よ。そんなので出歩かないでよ、赤服のくせにみっともない」
眉間を顰めてシホが言う。
「えっと……わかっちゃう？」
さすが目ざとい、相当苦心して着たのだが。
「さっさと持ち主に返しなさいよ。軍服の手配くらいしてあげるから出歩くならそっち着なさい」
「じゃあ、サイズは……」
「あなたのサイズくらい知ってるってば、伊達に半年一緒の部屋じゃなかったんだから」
つっけんどんに言って彼女はすたすたと場を去る。
相変わらず本当に素直じゃないんだから、と見送りながらアスランは苦笑いする。
「ありがとう、シホ」
私は、本当に周りの人に恵まれているらしい。
これはとても幸運なことなのだろう。

＊＊＊＊＊

「あの、」
インターホンは通じているはずなのだが、応答がない。
『……』
仕方ないので、シンはつっけんどんに言い放つ。
「えと、ヒエロニムス隊長に言われて書類こっちに持ってきました」
やがて開くドア。
Tシャツに短パン一枚のラフな姿で、白髪をひとつに結んだジュー

ルがドアの前で腕組みしていた。
「貴様か、シン・アスカ」
「はあ、そうであります」
おいおい寝起きかよ、超絶不機嫌じゃん。
うわあ、なんか女臭い……この匂い薔薇？　ってかえっち真っ最中だったわけじゃないよな？
ジュールは胸ポケットから眼鏡を取り出すと無造作にかけた。
「エリートさまは目が悪くていらっしゃるのですか、遺伝子調整ミスでありますね」
「アホか。逆で遠視すぎて近くが見づらいだけだ！」
ぺらりぺらりとめくり、目を走らせながらジュールの眉間に皺が寄る。
「……多少は反省したか」
「いいえ、全然であります」
「貴様、その態度を貫こうとするならそのうち必ず死ぬぞ」
「人を呪わば穴ふたつと言う素敵な言葉が我が国にはあるであります」
「抜かせ。貴様らの習俗がナチュラルに全世界で通じると思うなよ、飛鳥真」
「なんでそんなにネイティブな発音なんですか、あんたロシアンでしょうが」
「黙れ、俺はP・L・A・N・T・市民だ」
ぽい、と偉そうにジュールは書類を投げ捨てた。
「書き直して再提出だ！！」
拾い上げてシンは食らいつく。
「ッ対案出さずにただ却下なんて卑怯でありますッ！！」
「あぁいいだろう。これを参照にして書き直せ。期限は朝までだ」
ジュールは胸ポケットからディスクを取り出して無理矢理押し付けると、「それから今夜はもう来るな」とギロリと睨んだ。
「出歯亀は万死に値するぞ」

そしてドアがどかん、と閉まってシンは取り残される。
……なんかもうよくわからないが子作り中に顔出すなってことなら、ええ喜んで！！

あの白髪おかっぱは悪魔だ、とレクルームで端末のキーボードを叩きながらシンは心底思う。
「ちっくしょー！！　こんなの俺にできるのかよ！？」
Ｓｃｉｅｎｔｉａと端末を繋いでみたら、ディスクの中身はいきなりルートサーバーズ攻略フジヤマ編。
これをクリアしてからタイムスケジュールを組め、とは無理ゲーにもほどがある！！
そりゃあ確かにセンティア教官に士官学校でしごかれまくったから多少は知識がある、だが！！
痕跡を消すのも一苦労、せっかく桃食べようと思って洗ってきたのにそんな余裕ない！！
「なんで直属の上司じゃないヤツにこんなのさせられるんだよッ！？　絶対自分でやるのが面倒だから俺に押し付けたんだ、あのおかっぱッ！！」
歯噛みしながら必死にコマンド攻撃を交わすべくキーボードを叩いているその最中。
ダメよ、といきなり傍らで声がした。
「桃はね、ナイフで皮を剥くなんて邪道なの。ひたすら揉む！　柔らかくしたらたいていは薄皮するするでノープロブレムよ！！」
「はあ……俺固いのが好きなんで」
変な女が湧いて出た。しかも赤服。
軍服パイスー改造推進委員会メンバーなるルナの改造軍服超ミニスカとは違う、ジュール隊のハーネンフース副官と同じ長い丈に普通にスラックス姿だ。
ということは先任の赤服先輩か？　にしても見ない顔だし、赤服の

女って絶対数が少ないはず。
てかこっちはそれどころじゃないんだ！！
「で、それ」
隣に座った女が桃の載った皿を前に言う。
「はい！」
コマンド画面を注視したまま、とりあえず先輩らしいのでいちおう敬語を使ってみる。
「助けてほしいなら手伝うわよ？」
「いぃえ、いりません！」
「じゃあ自分でどうにかするのね」
「っさいなぁ、だから努力してますってば！」
あと一息！！
「でもムリしなくたって他の人に回したっていいと思うのよね。たいていのことは勝手にどうにかなってくのよ、案外自分がいなくたって世界って回るんだし」
「結局やりたいんですか、どうなんですか！？　……てアンタ誰ですか！？」
「え？」
桃にかぶりつきながら蒼い髪の赤服の女が首を捻った。
っておい、それ俺のおやつの桃！　しかも親戚から送られてきた貴重な白鳳だぞこんちくしょー！！
警戒するよりムカつきが先にくる。
「誰って訊かれても……私は私なんだけど」
会話が成り立たないのか、この女！？
「いや、そんなこと訊いてないから！！　つーかアンタばかぁ！？」
「見知らぬ私に突然バカ呼ばわりとは強烈ね、シン・アスカ」
ピ、と音がした。
完了！！
「やったクリアッ！！　すっげ、さすが最新ｖｅｒ．のＳｃｉｅｎｔｉａ！！」

小躍りしたあとでふと我に返る。
アンタなんで俺の名前知ってんの？　と訊こうとして、彼女はすでに隣にいなかった。

夕焼け小焼けの月の空―

ちょーぜつ音痴！
「だっから結局アンタは誰なんだよ、緑目の小悪魔さんよ！！」

＊＊＊＊＊

前後不覚の衝動に従った、醜態としか思えないほどに貪り抱いた。
これが戦場で遺憾なく発揮されるという生殖本能というやつなのだろうか、と我ながらしみじみ思う。
堰を切ったようにあふれ出る欲情の怒濤っぷりときたら、想像を遙かに超えた。

「閉じ込められていればストレスもたまるだろう、それは理解してやる。……だがよく考えろ」
「はい」
ベッドに正座でアスランは悄然としている。
「なんだって俺の軍服を着てくんだ！？　どう見たっておかしいだろうがッ！！」
なんだって男の軍服で出歩くのだ！！　不格好にもほどがある！！

体裁を気にしろ！！
とイザークはひとしきりの説教の合間に苛々と考える。
まだ足りない、ただ女が欲しいとひどく素直な肌が訴えて、寝覚めてみれば肝心の本人がいつのまにか側にいない。
しかも俺の軍服ごと――
サイズが全然違うのに、着て出ていったのかあのバカ！！
というか俺をまた置き去りかッ！！
まさか追えないように着てったんじゃなかろうなッ！！？
といろいろな意味で憤りながら、手ぐすねひいてアスランの帰りを待ち構えている合間に、イヤなものを見た。
思い出したくもないトラウマをちくちくと刺激する赤い目……

「あの、イザーク」
正座でひとしきり説教を拝聴していたアスランの透き通る緑の目が、少々疲労を映す。
「もう脱いでいいかしら、これ。あと、足が痺れてきたから」
いささか心配になる、アスランは手負いでようやく包帯が解けてすぐの状況だ。
さらにいうなれば、破瓜したばかり、昼から続いた激しい交合で「腰がガクガクする」と泣いていたのはつい先刻……。
「おい、からだの具合は大丈夫か」
「うん。違和感はないわ。あちこちまだ痛むしちょっと息切れするけど、薬が効いてる。ナノマシンてすごいわよね」
そういう意味で訊いたのではないが。
ごそごそと彼女はファスナーを下ろして上着を脱ぎ始める。
真っ白で綺麗なかたちの乳房がこぼれ落ちた。

しかもノーブラかッ！！
再びの欲情と逆上とで頭がくらくらする――

クリーニングに出さないと、匂いを嗅ぐ度に俺が困るだろうがッ！！

「ッとにかく無理するなと言ってるッ！！」

ベルトを外して、座ったままに扇情的にスラックスを脱ぎながら、ぼそり、と反抗的にアスランが呟いた。

「あなたに好き放題されているほうがよほど大変だと思うわ」

頭としかるべき部分に血が上る。

「俺は激しくないと燃えんッ！！」

脱ぎ散らかされた軍服を踏みしだいて、そのまま裸体を引き寄せる。

「状態を確かめさせろ」

指に愛おしい蒼い髪を絡めてくしゃくしゃにして、顔を近づける。

もうキスの回数をカウントするのも面倒だ。

んんん、と蒼い眉間に皺が寄る。

やがて舌を抜いて、問う。

「……おい、夜食に何食べた？」

舌がぴりぴりするほど甘い、甘すぎる。

「桃をひとつ。おいしかったわ」

「果糖の摂取は控えろと言われなかったか、先生に」

「えーっと、そこにあったものだから、つい」

イザークは内心呆れる。

なんて欲望に素直なヤツなんだ……気持ちいいこと大好き、おいしいもの大好き、総じてそこにあって食べれるものは「食べる」。

いや、わかってはいたのだが改めて認識する。

コイツは正真正銘とんでもない女だ、わがままで傲慢で嘘つきで性悪でしかも淫乱、そして加えるならば食欲の権化。

「またどっかで餌付けされたんじゃなかろうな！？」

「失礼ね！　私は一度だって餌付けなんかされたことはありません！　ただ」

「ただ？」

「ニッポンの白鳳っていいわよね、やっぱり」

あのゴキブリ頭かッ！！

しかしあのシン・アスカについてはイヤな予感がする。
なにせ色だ。
纏う色は遺伝子の発露の一片でもある。
思い出すだに非常にムカつくが、ラスティはアスランの捕色で対になる橙色だった。
そしてアスランの目の透き通る最高級緑玉（エメラルド）、あれの捕色はシン・アスカの紅、しかもヤツのは鳩の血（ピジョン・ブラッド）だ。
絶対に近づけるわけにはいかん、と思う。
「お前を寄越せ」
俺の女だということをしっかり刻みつけてやる。
背中に爪を立てられて、熱い吐息で肩口を噛まれて。
肌にまとう匂いを嗅ぎながら、すぐ耳元で声にならない声を聞いて、勝利の感慨にふけっていた。
俺は勝った！！
「……熱い」
ちょっと激しい、と組み敷いたアスランが力なく喘ぐ。
手加減できるはずもない。
「離して」
「ダメだ」
即座に却下して、もっと深く深く結ばれるべく腰を進める――受け入れられればなお貪欲になる。
寸止めを喰らわされるのはもう二度とゴメンだ。
やがて彼女が呟いた。
「近すぎてよく見えないわ」
「見なくていい、感じろ」

お前も俺もここにいる。

16：Ｊ．Ｏ．Ｓ．Ｈ．－Ａ．，　カーペンタリアあるいはオノゴロ島にて

年齢制限の為記載できませんでしたが、１８禁（ＳＥＥＤ：ｗ／ｕ）はこちら↓ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０８５７ｔ／

※１８歳未満の方は閲覧ご遠慮下さいませ。

Dialogue: Patrick & Yzak (前書き)

They are achromatic colors.

Ｄｉａｌｏｇｕｅ：　Ｐａｔｒｉｃｋ　&ａｍｐ；　Ｙｚａｋ

なんでこんなことに！！
銃のグリップを握り、相手の灰色の眼差しを凝視しながらイザークは非常に焦っていた。
冷や汗が背筋に滲む。
およそ１０ｍほどの距離を隔てて、銃口がまっすぐに自分の額に向いている。
その対峙する男の武骨な指はすでにしてトリガーにかかっていた。

時にＣ．Ｅ．７０．７．１６．夜。
アプリリウスインペリアルホテル最上階５０階である。
このホテル特別階の広々とした廊下に、自分と男がひとり――
正確に言うと、自分たちの様子をはるか背後のフロアで「手出し無用」と斥けられた男の腹心たちが見守っている。
「お前に覚悟があるか？」
身じろぎもせず、真意を探るようにこちらを注視していたパトリック・ザラは低く問うた。
「もちろんです」
目も逸らせずにイザークは応じる。
やがて相手の薄く皺を刻んだ口元がかすかに緩んだような気がした。

＊＊＊＊＊

Ｃ．Ｅ．７０．７．１６、士官学校で外出が許可される平日唯一の水曜日。

校舎前のロータリーに横付けにされたハイヤーの開いたドアを前に、イザークは振り返る。
「おい、早く乗れ！」
「ちょっと待って」
さっきまでＭＳに乗ってたから、足がむくんでヒールで歩くのがキツイ、と黒いワンピース姿のアスランが小走りに駆け寄る。
側を通り抜ければ濡れの残る髪を結い上げてのぞく白いうなじから、ほのかな薔薇の香りがした。
どうにかこうにか連れ出せた、とアスランをハイヤーに押し込めて隣に座り、ドアを閉めてイザークはひとつ安堵の溜息をもらす。
あの用意周到な戦略家ふわふわ緑ピアノ小僧も、さすがにハウスコンサートが優先だったらしい。
ったく面倒なヤツだ！
「出せ」
「はい」
慇懃に運転手が答えて、静謐なる駆動音とともに車が動き始めた。
「ご飯ってどこ行くの？」
「インペリアルホテルだ」
急な予約を割り込ませることができるといったら、行きつけで馴染みのアプリリウスインペリアルホテルくらいだ。
あそこなら食材は厳選されていて供される料理の味も安定している、安心して食べられる水準だ。
訊くなりアスランは「えええ？」と臆したような表情を見せた。
「私、服ってこんなのよ？　袖はないけどアクセサリーもしてないし、ショールも持ってきてない。あそこって確かドレスコードすごく厳しいでしょ？」
母御の喪に服しているアスランは相変わらず私服が艶消しの黒、ごくごくシンプルなＡラインワンピースだ。
「イザークだって黒カッターシャツにスラックスだし」
「構わん、どうせすぐ個室に通される」

「ん？　イザークってＶ．Ｉ．Ｐ．？」
「おいお前が言うか」
まだ「でもやっぱり……」と躊躇っているアスランを眺めながらふと疑問すら湧く。
なんだってザラ委員長はコイツをこんな無自覚に育てたんだ？
それとも、月でともに暮らしていたという母御の影響か？
だがザラ夫人ときたら元ジブリールだ、それこそ格的には世俗君主でいうところのロイヤルからインペリアルに匹敵するというのに。
「ね、そんなの街角の普通のレストランでいいってば。ディアッカやラスティが言ってたみたいな。そんな高級なところじゃなくても、おいしいところたくさんあるのよ？」
引き続きアスランが文句を言うので、イザークはなんでこんなことを説明しなきゃならんのだ、と眉をひそめる。
「おい、ちょっとは考えろ。俺たちの場合そこら辺の店だと目立ちすぎるし危ないんだ」
そもそもアスランは慰霊式典代表と軍の広報活動とで顔が割れている、それに自分もいろいろな絡みがあってどこで恨みを買っているかわかったものではない。
ザラ派はとかく敵が多い――ことにＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．アプリリウスには、様々な筋の諜報員や工作員が少なからず潜入していると常々聞かされている、いかに情報局の膝元とはいえど用心に越したことはない。

ハイヤーから降りてインペリアルホテル前に降り立つなり、アスランが言った。
「なんだか厳重ね」
警備員とＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．兵が入り乱れている、とイザークも視認する。
誰何もしくは無礼を咎めるかの周囲の視線はさすがに受けたが、エ

ントランスで出迎えた支配人とスタッフ連中には顔パスだった。
慇懃に先導される中「やだ、もう」とロビーにアスランが視線を走らせて、ひとつ嘆息をついた。
「どうした？」
「お父さまだわ」
「ッ！？」
イザークも歩みながら目を転じる。
普段オールバックにして撫でつけている灰色の髪が前に流れて、しかも準礼装のＢＬＡＣＫ　ＴＩＥ姿でかなり違う印象だが間違いない、あの横顔はパトリック・ザラ国防委員長！！
国防総省幹部連中を引き連れてロビーのソファーに腰を下ろしている。
そこにはまだ母の姿はなく、安堵するのも一瞬。
「そういえば何か非公式の会合があるって言ってたような気がするわ」
ああ、だから警備がかくも厳重か――とイザークは了解する。
特務隊のお偉方の面々も同様の出で立ちで紛れている、軍服では武骨すぎると言ったところか。
全くこの状況で自分たちが通されたのは、おそらく会合関係者だと見なされたからだろう。
「あ、ロトさんが一緒ね」
……財務省主計局のアステロト局長だ、マズイ。
思わずイザークは視線を逸らす。
研究所に在籍していた頃Ｇ．Ｅ．Ｎ．Ｅ．Ｓ．Ｉ．Ｓ．プロトタイプの起動実験をした折も折。
γ線照射量上限値の算出ミスでカタストロフをしでかして、とんでもなく迷惑をかけた記憶がある。
「もういいからこっち来い、アスラン！」
先導のスタッフを追うように彼女の腕を引っ張って、早足で奥へと進む。

一体どこの誰との会合かは知らないが、お偉方に見つかるとはなはだ厄介だ。
せっかく2人になれると思ったのにこのままではアスランを連れ出した意味がない！

最初、食堂で向かい合って会話するのも苦労したことを思えば、我ながらなんとも成長したものだ。
などと思いながら食前酒を飲みながら、イザークは向き合っている眼前のアスランを眺めていた。
「お前嫌いなものとかないのか」
「んー青魚かな。うっかり食べてじんましん出ちゃったことがあるから」
痒いし腫れるし死にそうだった、とアスランはひどく難しい顔で言う。
アナフィラキシーとは……コイツ、調整でどこか不具合があるんじゃないか？　と一瞬イザークの脳裏に疑念が過ぎる。
先般の突然の風邪といいじんましんといい、通常であれば自分たちコーディネイターには無縁だ。
「うん、でもそれ以外は嫌いなものってないわ」
そもそも今のP．L．A．N．T．の食糧事情とか考えると、嫌いだから食べないなんてすごく贅沢なことでしょ？　とアスランは気持ちよいくらいにぱくぱくと前菜のサーモンマリネを食べる。
「食糧事情ったってどんどん輸入はされてるぞ」
「だってお値段てば結構するもの」
イザークはおし黙る。
驚愕のあまり時間が止まるかと思った。
「おいアスラン……お前まさか食材調達になんぞ自分で行っているとかじゃあるまいな」
普通は邸にそれぞれ専門業者の外商が運んでくるぞ、違うのか？

次なる前菜のフォアグラのポワレを「やだおいしい！」と絶賛しながらも彼女は首を捻った。
「スーパーにお買い物行くわよ、士官学校の帰りに。うちにはイザークのおうちみたいに人がいっぱいいるわけじゃないし。自分で作ったものを自分で食べるんだから。でもアプリリウスの何番街って呼ばれてる付近ってば全っ然スーパーがないわよね、もうとっても不便！」
スーパーってのは庶民御用達のセルフサービス形式食料雑貨店だろう、確か……と思いを巡らせてただひたすらに呆れる。
コイツはとことん庶民的だとは思っていたが、もはや庶民そのものだ。
そりゃあ平民なラスティと気が合って当然だ、俺と生きてきた世界と価値観とが違う。
食べすすめながらイザークは顔を強張らせる。
「おい……コペルニクスで、一体どんな生活してたんだ」
「普通よ」
「いや、その普通が俺と違うんだが」
「毎日幼年学校に通ってお勉強して部活して、お料理してみんなで食べて、お休みには買い物に行ったり映画観に行ったり、……えーと春にはお花見したりピクニックとか？」
コペルニクスの空中庭園の桜ってすごいのよ、とアスランは少しばかり目を遠くする。
「あの風景って忘れられないわ、桜吹雪」
一方のイザークは、聴けば聴くだに正直やるせない悔しさばかりが募って歯噛みする。
――あの時コペルニクスで拉致できていれば、その辺りの時間を全部独占できた！！
というかコイツずっとあそこにいたんじゃないか……誰だ引っ越したとか大嘘を教えやがったのは！？

雑談の合間にメインディッシュの舌平目のムニエルを食しながら気付けば、アスランはすっかり顔が真っ赤だった。
「……お前、アルコールに弱いのか」
これは予想外、とイザークは思う。
「だってイザークががんがんワイン呑むから付き合ってたら」
「負けず嫌いか、アホか」
そもそもお前と俺とじゃもう体格自体違うんだから肝臓の分解酵素量だって違うに決まっている、とイザークは呆れる。
さすがにこの自分でもそんなところでまで競おうとは思わない。
ソテーを口に運んで、もの言いたげに咀嚼し終わった後でアスランがひとしきり文句を言う。
「アホとかバカとか言わないでって前から言ってるのに。なんでそんな口が悪いの？　もっと言いようがあるでしょ、立派なおうちのひとなんだから」
「俺は相手を選んで言葉を使うんだ」
最高評議会議員レベルの相手ならこの上なく礼を尽くさねばならない、母上にだとて相応に言葉は選ぶ――と言ったらば訝しげにアスランが首を捻った。
「じゃあラクス・クラインには？」
なにせ自分は公式ファンクラブの名誉ある会員番号一桁しかも縁深き”８”番だ。
そりゃあ幼稚舎以来の憧れの方であるからもちろん失礼のないように、と言いかけて「なんでそこで彼女の名を出してくる？」とイザークは訊いた。
もしややはりヤキモチか？
「紳士的なイザークって想像つかないなあと思って」
「お前から俺はいったいどう見えてるんだ、おい」
ナプキンで口元を拭いながら、アスランは即答した。
「負けず嫌いでプライド高くて神経質で俺様でわがままでいじめっこ」

「……いやもういい、黙って食え」
まるでいいところがないじゃないか、もう少し言いようはないのか。
今まで引き合わせられた女たちは、こぞってこの俺の外見やらセンスやら経歴やらを褒め称えたものだぞ、とイザークはほろ苦く鴨肉オレンジソース和えを噛み砕く。
「あ、でも面白いわよねイザークって。見てて飽きない」
「それはフォローのつもりなのか？」
「うん」
彼女は本当に他意もなさそうに頷く。
「だとしたらお前はとんでもなく口下手だな」
まったく俺といい勝負じゃないか！　とイザークは思う。

「眠い」
よほど酔いが回ったのか、アスランの紅い目元はとろんとしてひたすら可愛い。
間近での観察はとにかく楽しい。
とはいえさすがに寝顔を見たことはない、まあ例外として熱だか風邪だかで医務室で寝込んだ折に一度だけ。
あれも傍らでずっと眺めていて、校医に不審がられた――とイザークは思い出す。
「まだ宵の口だぞ。気力で起きてろ、粘れ」
そもそも俺と一緒におりながら眠くなるとは何事だ、といささかムッとしてもいる。
「難しいこと言うのね」
そう言っている合間にもアスランの緑の目はほとんど瞼と蒼い睫毛に隠れて、かっくんと首が動いている。
普段からアスラン・ザラはひたすらよく寝る、いったい何時間寝る気なのかというくらい――とシホ・ハーネンフースが何かの折に言っていたことを思い出す。
そういえば士官学校で会話した一番最初もどこかで寝てたような。

それでもスイーツへの執念か、気力でデザートを食べ終えてコーヒーを眼前に「ちょっとだけ」と言いつつも、椅子の背に凭れてアスランはうたた寝をはじめた。
「おい、まだ小菓子と食後酒（Digestif）があるぞ」
呼びかけに返事はない。
そのあどけない寝顔を眺めつつ、いっそこのまま部屋を取って連れ込むか？　と邪心がイザークの脳裏をよぎる。
そして決めれば行動は早いほうがよい、入室してきたサービススタッフを振り返る。
「ディレクトールからフロントに連絡させろ、部屋がいる――インペリアルジュニアスイートでいい」
「承りました」
ホテル側も心得たもので、すぐさま部屋は押さえることができた。
大株主で上得意であるのだから当然といえば当然の話だ。

細い身体を抱きかかえながらイザークは首を捻る。
背負って密着して胸の感触を味わってみたいが、本人が寝ているのでは首に腕を絡めることもできまい、転落されても困る。
非常に残念だが今回は諦めよう。
となればいわゆるお姫さま抱っこか、とんでもないサービスだな俺は！
案外軽いアスランを抱き上げ、ヒール靴を指先でひっかけて拾い上げる。
腕の中で彼女ときたらもはや正体不明だ、安らかな寝息すら聞こえる。
「男に抱かれて無防備なことだな」
返事はない。
「ったく、お前が悪いんだからな！！」
額にキスをしてそのまま専用エレベーターホールへと向かう。

そしてエレベーターで特別フロアなる最上階についた時、スライドしたドアの向こう、誰もいないはずのフロアに人影があった。
ギョッとしてイザークは目を見張る。
「……国防委員長閣下……」
腕組みで待ち構えていたその黒いタキシードの厳めしい男は、灰色の眉間に深い皺を寄せて見下ろした。
パトリック・ザラ。
降りろ、と命じられてやむなくエレベーターから降りれば、彼の背後にはやはり礼装姿の特務隊員たちが数人控えていた。
「失態を晒しおって――連れて帰れ、アグレアス」
アグレアス特務隊隊長……とイザークは黒服の男のひとりに目を留める。
特務隊でも敏腕だったと定評あるレイ・ユウキ教官だが、あのひとがどうあっても頭が上がらないという特務隊の鬼トップだ。
「は。アーモリーでしょうか」
「いや邸でよい。起きたら少々説教してやらねばならん、どうもこのバカ娘は自覚に欠ける」
取り囲まれた以上は観念するしかない、ごくごく慇懃にイザークは特務隊隊長にアスランを引き渡す。
そして無念さを噛み締めながら見送った直後、カチリ、と耳慣れつつもひどくイヤな威圧音がした。
「抜け」
パトリック・ザラが低く言う。
「え」
その殺気に絡めとられて、イザークは振り返ることもできぬままに額に冷たい汗を感じる。
「護身用に持っておろう。私は丸腰を撃つほど悪趣味でもない」
「……閣下に相対する理由がわかりません」

「いらぬ虫は早々に排除せねばなるまい？　開ききらぬうちに花弁を喰われてはたまらんからな」
ぎこちなく振り返れば、その灰色の男はひどく慣れた手つきで軍の制式銃を向けていた。

そりゃあ不埒な考えを抱いたのは認める、だが考えることくらい男なら誰しもあることだろう！！
などという甘い弁解は通用しそうにもない。

凝視する鋭い眼差しの奥に、殺気を孕んだ光が閃く。
「私の留守に邸に上がり込んだな。イェールから報告を受けている」
わずかに空気が動く、察するより早くイザークは奔ってフロアを横断する。
もはや問答無用とばかりにトリガーが引かれて、逃げる端から背後の壁に跳弾の火花が追ってきていた。
確実に頭部を狙われている！！
ッ俺はどうすればいいんだッ！？
仮にも相手はZ．A．F．T．のトップだぞッ！？
「あれはお茶にとのお誘いを受けただけの話ですッ！！」
「その後ロータリーで何をした」
銃撃音のはざまに飛び込んでくる低い声色に、もはや表情が引きつる。
エントランス近辺の監視カメラに映像が残っていたなどと、そんなこと考えもしなかった！！

――いやせいぜい額にキス程度だぞッ！？　あんなの挨拶の範疇だろうッ！？

フロアホールの角から廊下に飛び込み、イザークは壁を背にスラックスの裾を引きあげて軽くかがむ。
やむなく足首に装着していたアンクル・ホルスターから小型拳銃を引き出す。
「俺は本気ですッ！！」
急いでマガジンの装着を確かめ、初弾が薬室に装填される音とともに怒鳴る。
「決して軽い気持ちではありませんッ！！」
毛の長い絨毯を踏む、わずかな足音がひたひたと迫る。

まさか国防委員長閣下相手に銃を向けるなんぞ、本当にありえない事態だ！！
口の中が乾く。
戦場での命令とあらば死んでも当然の覚悟で戦う、だがこのままでは無為に殺されて秘密裡に処理される――例え女帝（ツァリーツァ）の息子である俺だとしてもだッ！！
まだアスランに手も出してないってのにかッ！！？

「閣下ッ！！　お許し下さいッ！！」
自衛の為だ！！
イザークは飛び出して対峙する、そのままグリップセーフティを解除して威嚇とばかりに撃ち放つ。
パトリック・ザラの耳元を掠めた弾は、その背後フロアエントランスを飾る巨大花瓶を貫く。
磁器が弾け割れて、水がバシャリと飛散する音が廊下に響いた。
わずかに照準をズラしていることを見抜いているのか何ら微動だに

しない、とイザークは口元を引き結ぶ。
さすがたいした肝のひとだ！！
「よかろう、悪くない」
彼は歩み寄りながら、この自分相手の全く同じ位置に2発撃ち返してきた。
風が疾る。
削ぎ落とされた髪が薙がれて、焦げた臭いとともに銀の毛先の幾筋かが宙に舞う。
この上ない緊迫感のただなかで、後方へとじりじりと下がりながらも冷や汗が背筋を伝い落ちる。
「閣下ッ！！」
黒服の特務隊員たちが寄ってくるのを眺めて、さすがに熟練連中相手では、とイザークの焦燥感はさらに募る。
「よい、下がっておれ」
パトリック・ザラが顎で特務隊員たちをフロア後方に下がらせた。
そして廊下を塞ぐかたちで再びの対峙。
せめてこの人の手元の銃だけを落とせればとも思わなくもない、だが相手は確実に俺より技量も反応速度も上だ。
次の弾を撃つべくトリガーを引くより早く、おそらく俺は仕留められるだろう――とイザークは考える。
「撃たぬのか？」
目を細めて灰色の男が促す。

どうやら俺は試されている――どうする？

逡巡の中で銃を向け合ってひととき。
やがてふっとパトリック・ザラの唇の両端がつり上がった。
「年齢のわりに肝も据わっているか」

相も変わらず鋭い眼差しだったが、見下しつつも若干の感嘆を含んだかの色が見えた。
「腕はマティウスの少年クラブで鍛えたか？」
そういえば、この人はコーディネイターの育成において最も重要な幼年教育の研究者でもある――
「元々狩猟が好きですので」
「ふん、エザリア譲りで悪趣味な。私は連邦の海兵隊（Marines）だった」
ああしかも若い身空で佐官であったとは知ってはいたが、全く生粋の軍人であらせられることだ。
「私の娘を引き取ろうとなれば、相当に荷物を負うことになるぞ。お前にその覚悟があるか？」
問われてイザークはひとつ息を吸い込む。
これはもしや売り込む好機！？
「もちろんです」
俺はＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．マティウスの代表を引き継ぐ、そしていずれはＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．で上り詰めてやる――
そしてそもそもの家格を求められるのであれば、その資格は十分にある！！
「白百合関連の一切だが、アレには何も伝えていない。いらぬしがらみを背負わせたくはない」
初めて聞く、とイザークは目を見張る。
だが普段のアスランの言動を鑑みれば、全てが腑に落ちる。
「しかし……」
分岐して地球に残ったジブリールには、もう資格保持者がひとりしかいないはず。
万が一があって枢機卿たちが必要と判断すれば、アスランにも御前から声がかかる――そもそもジブリールはその役目からして、本来が女系だ。
「その為のＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．とＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．だ」
声もなく言葉を刻んだ唇に、イザークは思わず銃を下ろしかける。

「それは、いったい」
そのまま普通にパトリック・ザラは声を発した。
「いずれわかる、お前がやはり次のミカーイールであろうとするならばな」
「でも俺は、P．L．A．N．T．マティウスのイザーク・ジュールです」
「それはそうだろう。だがいずれの道を選ぶにせよ、その統べるものにかけられた鎖から逃れられはせんぞ？　我々のような必要悪がそこにあるからこそ世界は”普通”を維持できるのだから」
果たしてそれが普通と呼べるものかどうかはわからんがな、とパトリック・ザラは嘲笑すら含んで肩を揺らして笑う。
「地球から見ずともただひたすらにP．L．A．N．T．の独立は背徳、Z．A．F．T．は暴虐、我々は産み落とされたエラーだ。現状とてすべては危うい綱渡り」
コーディネイターの優越性を説くその張本人が口にする。

自分たちコーディネイターがエラーだと？
……まさか！

足元が揺らぐような衝撃とともに喉が渇く。
「今後どう転がろうとも、後世はおそらく私を愚かなる狂信者とでも評するだろう。それはそれでよい、結局己が真実は己ひとりしか知り得ぬ――歴史など往々にして時の強者によって塗り替えられるものだ」
淡々と語るこの男に、ただ訊きたかった。
イザークは銃を下ろしてパトリック・ザラに対峙する。
「ご教授下さい、閣下。……閣下が提唱されている”種の棲み分け”の真意とはいったい何です」

コーディネイターの宇宙空間での耐性と適応性は、原種（ナチュラル）を上回っている――というのはいくつもの研究ですでに実証されている。

だがそれゆえに打ち出されている”全ての同胞は揺りかごなる地球を出よ、次なる進化ステージとなる宇宙を目指せ”という党の方針には、いささか性急ではあるまいかとの違和感が否めなかった。

灰色の男はややあって口を切った。

「私の言葉はまた一面性に過ぎぬ。そこを誤解するな」

「はい」

「地球という惑星は自然の摂理を何よりも優先する、不正エラーはいずれ修正される。だからこそ私は同胞を宇宙へ引き上げねばならなかった、何としてもな」

シーゲルは地球に回帰できると思っているらしいが、とパトリック・ザラは皮肉に口元を歪める。

「ジョージ・グレンを作り出した連中の残した遺伝子調整というものは、そもそも繁殖を前提としていない、一世代限りのものだ。交雑して生まれたハーフコーディネイターとて劣性遺伝に消え失せて、いずれ忘却される」

私はその同胞たちの未来を繋ぎたい、と彼は言う。

その頑なな決意が自分たちP．L．A．N．T．を導いてきた――

「何故そうまでして」

「素直に言うなれば欲望だな。我々はどこまでいったとてヒトだ、そうである以上決して生物的欲求からは逃れられぬ」

生存したい、種を繋ぎたいという。

「そして内発的欲求からもな」

好奇欲求として宇宙を望み――そして接触要求として家族なる同胞を欲し。

パトリック・ザラはふっと笑んだ。

「地球で枷をはめられたままではそれもままならん」

そしてその為に築いた大地のひとつもろともに奪われた伴侶、とイザークは思いを馳せる。
奥方の姿はデータバンクで引き出して閲覧した。
アスランによく似て、アイツが歳を重ねていけばおそらくこうなるだろうという臈長けた美女だった。
自分の3倍近くの時間を生き、自分の知らぬ世界ばかりを知っているはずのこの眼前の男の心境を思えば、なぜか胸が痛む。
ともに約定に反するほどだったのだ、きっと深く愛し合っていたのだろう、そして今でもまだこの人は亡き伴侶を忘れずにいる。
例えばそこまで愛する者が奪われたとしたならば、何に縋ったとしても俺は俺であり続ける自信はない。

視線が絡み合う。

この世に白黒など存在しない、全てはグレーだ。
全ての光源を混ぜれば、それはまた限りなく白に近い灰色になる。
このひとはまさにそういう象徴なのだ――と業を負う灰色の男の立ち姿を、イザークは飽かず眺める。
堕天の烙印を押され愛すべき者を失ってなお強く弛みない、父親というものを知らない自分には憧憬を抱かせる存在だ。

イザークは口を切る。
「俺は、いえ私は……閣下のことをくわしく存知ませんが」
母もまたこの人の同類であり、息子の自分とて全てを知っているわけではないが、聞くに堪えない黒い話など事欠かなかった。
人の上に立つ人間は、『大多数の幸福』という正義の名のもとに多くを踏みつけにし、そして怨嗟と憎悪を一身に受ける。

「そうまでして閣下が造ろうとなさっている大地は、見てみたいと思います」
イザークの言葉に、パトリックは滑らかにデコッキングを済ませてやがて銃を下ろした。
「造った大地を守る者が必要になる、例えばお前やうちのバカ娘のようなな。今こそ叡知を結集して同胞を増やしていかねばならんというのに、それもまた邪魔をされる」
忌々しげにパトリック・ザラは言った。
一体誰に、と問いかける前に彼は右腕の袖口に手をかけて、腕時計をちらりと見た。
「ここまでだ」
会見の時間の打ち切りの宣告だった。
「いいか、今の会話のすべては他言無用だ。そして未婚の娘を夜連れ出すような真似はするな。次はないぞ」
去ろうとするパトリック・ザラに、あの!!　とイザークは声を張り上げる。
「お嬢さんとのお付き合いをお許し下さい!　いずれは……」
娶ることの許可を、と口にする前に鋭い視線がふと振り返った。
「あの筋の女(ジブリール)は厄介だ、男を本気で殺しにかかるぞ」
それは多分、物理的な意味ではないのだろう――なんとなしに察することができた。
「まあ考えておくと言いたいところだが、お前の母親は昔から頑固でな」
とパトリック・ザラは背中で手を振る。
「忌々しい螺旋を繰り返したくないのは私も同様ではある。とはいえやはり抗いがたいものがあるのであろうかな」と謎めいた言葉だけを残して、灰色の男は去った。
結局俺は赦されたのか、どうなのか。

判別できないままにイザークは見送る。
そもそもあのニュアンス的に、俺がクリアすべき問題は我が母上なのではないだろうか――そもそも聖域に一線引いて、東欧州でミカーイールを率いていた共同統治者のひとのことだ。
月の猊下やジブリールの筋といろいろあったらしい、という話は側近のヴァプラから伝え聞いていた。
そして初めて考える。
厳格で冷徹でわずかのミスすら許さない完璧主義なる母と、割に適当で大雑把で抜けていて他人に甘く無防備すぎるアスランと。
あのふたりが仮に嫁姑となった場合、果たして俺は上手く折り合いをつけられるのか……？
肝が一瞬冷える。
いや、少々気が早いか？

その時、携帯が鳴ってイザークは我に返る。
その張本人のアスランか、しかもＳｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙ、タイミングのいいやつめ。
『ごめん、今いい？』
ひどく眠そうな声にわずかにノイズが入っている、どうせハイヤーの中で夢うつつなのだろう。
こっちはお前の父親に殺されそうになってたってのにのんきなもんだ！
だが釘を刺されているからには他言するつもりもない、とイザークはぶっきらぼうに問い返す。
「なんだ」
『気付いたらなんだか車の中にいて。お礼とごちそうさまって言ってなかったから』
「ああ、そういうところだけはきっちりしてるヤツだな、お前は」
『すごくおいしかったわ。ありがとう。またよろしく』

餌付けの結果とはいえ、まだ次があるということか、ふむ。
「別に、大したことじゃない」
『それから、おやすみなさい』
「ったくとっとと寝ろ!!　俺以外に無様な姿晒すな!!」
『おやすみなさいー』
……おい、相変わらず肝心なところをスルーか、コイツは。
切れたケータイをしばし眺めて、ひとつ嘆息で胸ポケットに収める。
本当は素直に伝えたい――抱きしめて側で寝たい、ひとりで過ごす時間はただ淋しい。

家や親や血や国や全てのしがらみなど、俺は知らない。

Dialogue:　Patrick　&　Yzak（後書き）

すみません、本編進める前にこれとあともう1話加えます。

Monologue: Kira–2 / Dialogue: Kira & Ryuzaki

She in tears said to me, "you were wrong".

君がコペルニクスにいなかった1ヶ月、ホントに辛かったんだ。
君から離れるなんてことそれまでなかったから。
その1ヶ月が何十回も繰り返される毎日なんて、正直想像もできなかった。
でもその頃の僕たちはまだほんの子どもでしかなくて、親たちの言うことは絶対だった。

最初で最後の桜吹雪の中で立ち止まる僕に、アスランはわずかに振り返って「このままもう宇宙港に行くから」と言った。
母さんに言われるがままに覚悟だけはしていたけれど、あまりにも急すぎて声が出なかった。

そして桜並木の向こうには送迎用の車が待っていて、後部座席にはレノアおばさんらしい影が見えた。
また歩き出したアスランの背中を見送りながら、この開いていく僕たちの距離を考えていた。

じゃあ、キラ。

ねえ、アスラン……約束、忘れないでよ。

ん？

一緒に木星に、行こうねって話。

当然でしょ。

だからマイウスに行って宇宙開発用ＭＳのお勉強するんだから、と振り返ったアスランは桜吹雪の向こうで笑って手を振った。

Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．で待ってるから、きーら！

君はいつだって綺麗で、涙声のままでさようならは言えなくて、あとは視界に滲む桜色の霞でもう何も見えなかった。
＜トリィ＞
上空を旋回していたウグイスに似た鳥ロボットがやがて僕の頭に止まって、一声だけ泣いた。

あのコペルニクスの別れから、たった2年半だった。

僕はずっと君に会いたかった。
でも、こんな世界の悪夢の真ん中で、会いたくなんかなかった。

破滅するヘリオポリスの崩れ落ちていく工場の降り注ぐ灰の中で、
灼熱の焔に溶けこむような紅いノーマルスーツで、
手に握ったナイフを慣れた仕草でパチンて弾きだして、
スラスターを吹かせてまっすぐにこっちに向かってきたのはZ．A．
F．T．の小柄な兵士で。

そして血塗れのヘルメットのバイザーの向こうで、僕は凍りついた
エメラルドの目を見た。

その時の君は、もう僕の知ってる君じゃなかった。

＊＊＊＊＊

キラ――キラ。

母の腕のなかにも似た優しいまどろみのなか、自分を呼ぶ声に、ただ懐かしさを覚えながらたゆたう。

――キラッ！！……

誰？

瞬きもせずに見開かれたエメラルドグリーンの眼差しは涙に濡れて憎悪に燃えていた。

アスラン！

沈んでいた記憶が意識の表面に浮かび上がり、キラははっとして息を呑む。

白い眼前の光景が一瞬にして色褪せて、殺風景な岩礁地帯が視界に蘇る。

キラァァァッ！！

瞬時にがばりとキラは飛び起きる、とたん全身が痛みを訴えて、思わず前のめりになってシーツを力の限り握り締める。

ああ、なんて声で君は僕を呼ぶんだろう、アスラン。

冷たい汗が全身を流れる。

僕もまた絶叫し続けた、喉から血が出そうな勢いで。

あれは本当に僕の声だったのか？　……まさか。

耳を塞いでもなお、自分の内なる声が言葉を紡ぐ。

その命を寄越せ。
ただ死ね、と。
殺す、と。
もうお前はお前じゃない、僕を受け入れないお前なんかもういらない、過去も未来も丸ごと消えてしまえ――
……思い返す自分の凶暴すぎる思考に血が凍りついて手足が冷える。

「おい、キラ！　起きたのか！！」
声とともに傍に人が駆け寄る気配がする、だがそれにも気づかずに、ただひたすらにキラは自分の記憶を辿る。

キラァァァァッ！！

「僕は、たくさんの人を殺して……」

怒りの衝動のままに、自分が振りかざしたソードで切断したあの漆黒のＭＳに搭乗していたのは、アスランの仲間。
握りしめたレバー越しに伝わってきた生々しい震動が、今まさに手の平に再現されて、キラは息をひゅっと呑み込む。
爆発のただなかで聞こえた、彼女の声にならない悲鳴――冷たい手で心臓を鷲掴みにされたように、胸の奥底が凍る。

「そして……殺されて」

撃たれて機関部で爆発を起こし海中深くに沈んだアークエンジェル、
汚れた死体袋に包まれて羅列するたくさんの遺体、
放たれたビームでいとも容易く爆散したスカイグラスパー。
――僕は結局何も守れない。
無力さに打ちひしがれて、絶望ばかりが深まった。

僕たちは互いを救えない、なら道はひとつしかない。
これ以上殺させる前にアスランを殺せるなら、――彼女と一緒なら
自分も死んでいいと本気で思った。

そうだ、あの壮絶で醜い戦いの終わり。
奈落の底のような絶望の中で、僕は、アスランの首に、手をかけた。

あなたは、私が連れて逝く。

肯定されるように初めてアスランに抱きしめられて、君と一緒なら、
と安堵して目を閉じた。
真っ白な世界で、灼熱の爆発が全身を覆った、そこから先の記憶は
一切ない。

きっと、ふたりなら淋しくないから――

そう言ったのに、でもまだ僕はここにいる、ひとりぼっちで。

涙が伝い落ちる、ただ熱い。
痛い、体のすみずみに至るまでが痛い、それともこれは心が痛いのか。
憎悪と罪悪感と恐怖と拭いきれない自分たちの戦いの記憶とが心に突き刺さって、時間の経過とともにいっそう化膿してじくじくと疼く。
知らず涙が零れ落ちた。

なんで僕たちはあんなところに辿りついちゃったんだろう……？

「おい、キラ！」
どこかで聞いた声が呼んでる、とキラは顔を上げる。
そして誰かの日に焼けた細い手が、シーツを握り締めるこの手に重なり、そして一本ずつ指を解き放つとやがて力強く握りしめた。
「キラ、私がわかるか」
そして背を撫でる掌のぬくもりに、ふと我に返る。
濡れて腫れた瞼をようやくに押し上げれば、眩い日差しを受けて金色に染まった少女がそこにいた。
「カガリ……？」
向日葵にも似た印象のカガリが、潤んだ琥珀の目で自分を覗き込んで、力いっぱい抱きしめた。
「お前はよくやったよ。よく頑張ったんだ」

背中を撫でながら、労ってくれるカガリの鼻声混じりの言葉とぬくもりが染みこんでくる。
けれど嗚咽が止まらない、横隔膜にクセがついてしまうくらい泣くなんてどれくらいぶりだろう？
キラは顔をくしゃくしゃにして首を振った。
「――でも守れなかったものは、たくさんあるんだ」
自分の中にとどめておけない言葉がこぼれ落ちる。
「それは仕方のないことだろ。何もかもなんて無理だ、戦争なんだから。お前は精一杯やったさ。もういいんだ、もういい」

もう、いい……？

キラは幾度となくその言葉を反芻して、そしてようやくに疑問を抱く。
「ここはどこ？」
「オーブだ。オロファトにある私の邸」

そうだ、検査のつかの間意識が浮いた時、ここはオーブだと誰かが言っていたろうか。
あの真っ暗な闇色の戦いの場所から救い出されて、ずっと大勢に囲まれていた、そんな気がする。

「助けてくれて……ありがとう、カガリ」
そしてゆっくりと腕を回し、彼女を抱き返す。

今は感謝していいのか、よくわからないけれど。

＊＊＊＊＊

庭に面した寝室の全面ガラスの窓が一部開け放たれて、白いレースのカーテンが揺れる。
水とともに薬を飲み下して、キラはサイドテーブルにグラスを置いてまたベッドのヘッドレストに頭を凭せ掛けた。

ここに来てどれくらい経ったのだろう？
日が昇りやがて沈む、その穏やかな時間を繰り返して、１００年も経ったかの錯覚に見舞われていた。

ぼんやりとしている合間にも、土と草と花の匂いが鼻をくすぐり、そして時折吹き抜ける潮風が髪を嬲って通り過ぎていった。
ああ、ここは地球なんだな、とキラは茫洋としながら、身じろぎせずに地球の空の青に映える庭の芝の緑を眺めていた。

何故こんなにも悲しい色なんだろう。

激しいノックの後でいきなりドアが開いて快活な声が聞こえた。
「さぁさお食事の時間ですよ！！　ただでさえやせっぽちなのにこれ以上がりがりになっちゃったらダメですからね、キラさま！」
邸を取り仕切っているマァナが、ガラガラとカートを押して殺到してきて、キラはまたご飯の時間なんだな……と思う。
「今日こそはたーんと召し上がっていただかなくてはこのマァナのメンツに関わりますからね、もう！！　うちの姫さまときたら日々逞しくおなりなのに、なんで男の子のキラさまがこんなひ弱でいいことがありましょうか！！」
「あ、あの……」
キラは躊躇いがちに口を切るが、怒濤のおしゃべりの前にそのか細い声は掻き消えた。

「ホント姫さまってば料理のひとつやふたつ覚えていただきたいものなのにそちらは全然で、筋トレ筋トレプロテインの繰り返しで男勝りったら！！　いつかは殿方と結ばれる為にも多少は女らしくなさいませと口を酸っぱくして申し上げてるのにもうそれすら全然――」

ようやくに言葉の弾幕の隙を見計らって、キラは声を張って訊いた。

「えと……今日って、何年何月何日なんでしょうマァナさんッ！」

カガリの乳母はサイドテーブル前で丸い背中をもぞもぞさせながら応じた。

「あらまぁ？　C．E．７１年の４月１５日ってところですかねえ、ええもちろん昼餉にもってこいの午後１時前ですとも！」

確かあの戦いの前の日時がオーブ標準時３月２９日だったから……僕はもう半月以上寝てたんだ。

思い返せばただひたすらにほろ苦く、ただ頭痛がする。

まるで頭が考えることを拒否しているようだ、とキラは首を振る。

そして慌ただしく昼食の準備をしているマァナを背にベッドをおそるおそる降りて、部屋の豪華なしつらえを眺め、やがて広々とした庭を望むガラスに歩み寄る。

昼下がりの日差しは強い。

眩しい、と手で目元に影を作り、バルコニーに踏み出せば、白亜の巨大な邸宅のいくつもの棟が視界に飛び込んできた。

「……カガリってやっぱりお姫さまだったんだ」

今さらおかしな話だ、とキラは思う。

聞いてはいたし知ってもいたし、モルゲンレーテでの扱いを見ても当然そのはずだった。

だがどうしても違和感があったが、今ならなんとか納得できそうな気がする。

その時、ドガン！　という派手な音を立てて、背後で青銅のドアがまた開いた。

「おいキラ、起きてるか！！」

白地を基調として青が映える軍服で、そのカガリが姿を現した。

「あら姫さまってばまた強引にお開けになる、あれほど蹴ってはダメと申し上げてるでしょうに！！　あとお召し替えにならなくてはダメですよ！！」

マァナの金切り声の苦言に、少しばかりカガリは顔をしかめて弁解した。

「蹴り開けたのは悪かった。あとこれはちょっと抜け出してきただけなんだから、見逃せってば……」

さすがのカガリも乳母のマァナさんには頭が上がらないんだな、とくすりとキラは口元を緩める。

「でキラ、調子はどうだ、落ち着いたか？」

カガリがベッドサイドの瀟洒な椅子に腰を下ろしたので、おぼつかない足取りながらもキラは再びベッドへと戻る。

「うん、なんとなくね」

「そうか」

上掛けにのそのそともぐりこみながらキラは呟く。

「……今朝起きた時、ここって天国かと、思ったよ……まさか、僕がそんなところいけるはずないのにね」

「バカキラ」

振り返れば、カガリはしかめっ面で睨んで腕組みしていた。

「そういうの、やめろよ。聞いてても楽しくないから」

「あ、ごめん……」

「天国は言い過ぎだけど、まぁここはまだ平和さ、南の楽園と呼ばれる程度にはな」

カガリはマァナに「どうぞ」と供された紅茶のカップを優雅な仕草で口元に運んだ。
「なんで？　外の世界はあんな戦いなのに？　オーブだってこの前戦ってたじゃないか、Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．と」
そして僕はＭ１で出て、バスターと対峙した。
アークエンジェルを撃った宿敵との戦いを思い出せば、また記憶を拒むように頭痛がして、キラはこめかみを押さえた。
「あんなのは政治家たちの綱引きだ。オーブはいろいろ贖ってようやく微妙な場所に留まってるってだけの話さ」
サンドイッチを頬張りながら言い放つカガリの苦々しげな口調に、きっといろいろあるのだろう、とだけキラは察して、差し出されたバスケットのパンを手に取る。
政治に興味はなかったし、ニュースは聞き流すばかりだったから、国際情勢は全くといっていいほど頭に入っていない。
だが知らずに自分たちはとっくに戦争に荷担していた――ヘリオポリスのモルゲンレーテで連合ＭＳを製造していて、そして自分たちの加藤ゼミがそれに手を貸していたという時点で。
「大変なんだね、オーブも」
「まあな。どうあったって私たちは国民を飢えさせちゃいけないし、国を潰して亡国の民にするなんてもっての他だからな」
今度はフルーツに手を出したカガリをしばし眺めて、咀嚼したパンを呑み込んでからキラはふと口を切る。
「なんだかさ、カガリ」
「ん？」
鮮やかな琥珀色の目が上がった。
「僕が意識を失ってる間に、すごく大人になった？　だって、前はもっとこう白黒つける！　って感じだったから」
アフリカ戦線でＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．相手に戦っている時は、ただひた

すらに勝利を追い求めていたような印象だったのに、と言えば、ふとカガリは遠い目で窓の外を見遣った。
「いろいろあって考えることがいっぱいあったからさ……きっとこの世に白黒の境界線なんかないんだ、戦争にすらな」
「そっか」
同い年のはずのカガリがひどく大人に見えて、取り残されたような寂しさすら覚える。
「その戦争でたくさん人が死んで……僕も、たくさん、殺したよ」
切り離すことができない過去の残像が自分を責め立てて、滲む涙がまた頬を伝い落ちる。
「お前だけじゃないんだ」
痛ましそうな視線を投げかけた後で、ぽつりとカガリが言った。
「戦争だからさ……敵として出会っちゃったんだから、兵士なんだから戦わなきゃならなかったんだろ。きっと、みんな」
みんな。
この戦争に加わった全ての人たちが、殺さなければ大事なものを守れないから、戦争だから、敵だから、と互いに互いの銃を向けた。

Please tell all of them in all battlefields...

白昼夢あるいは閃光のように蘇る言葉のかけらに、キラは息を呑んで呆然とする。
レノアおばさん……

we're waiting for you in the field of hope.

憂いさえ帯びたその声色はひどく懐かしく遠く感じられた。
空白の時間のはざまで、僕は、確かにレノアおばさんの声を聞いた
――

綺麗で優しかったあのひとは、この戦いを激化させる端緒となった
ユニウスセブンで死んだ。
でもレノアおばさんは弔い合戦なんか望むようなひとじゃなかった、
きっとアスランがZ．A．F．T．に入ることさえ。

だん、だん、と強く土を抉るような音が聞こえて、怯えるようにキラはハッと現実に引き戻される。
「何？」
まさか銃撃音？
「雨さ――今さら驚くなよ、地球に降りてきてもう何ヶ月も経ってるだろ？」
乾いた土に大粒の水滴が打ち付ける。
やがてスコールの激しさで雨が降り出し、「あらあら！」とせわしくマァナが見た目によらず軽快に走り回って窓を閉める作業にとりかかった。
「こんな状況、ホントどうすればいいんだろうな。全然思いつかない」
雨音に紛れるほどの声で、カガリがぽつり、と呟いた。

＊＊＊＊＊

また悪夢だ。
冷たくて無機質な棺桶の中で、ヘルメット内の自分の呼吸音が大きく聞こえる。
鳴りっぱなしの警告音に焦りが増す。
確実に肉薄してくる光刃と光の筋、背後で起きてモニターを白く染める光芒に、上下左右すらわからないほどのムチャクチャさで逃げる一手しかなかった。
その中でやがて赤いＭＳに照準が重なって、固く握りしめたトリガーのボタンに指をかける。

やらなければやられる。

でも……そこに、君はいるのに。

かわいそうなキラ、好きだった子に裏切られて。

誰よりも側にいて、誰よりも僕を知っているはずのアスランが、僕に銃を向けた。
何度も何度もＭＳで攻撃を仕掛けてきた、なにもかもを奪い尽くす勢いで。

でも今はこの私が側にいるわ、私の想いがあなたを守るから……

でもそんな言葉だけじゃなんの慰めにもならなかった。
傷なんて広がるばかりで、絶望に溺れかけて近くのぬくもりを追い求めたところで、縋った彼女もろともに沈んでいくばかりだった。
僕たちは間違ってる、そんなのは最初からわかっていた。

白い肌、熱くうねるからだ、乱れた紅い髪。
からだの下で彼女が言った。

私がかわいそうだと思ってるの？

思い上がらないでよ、かわいそうなのはアンタでしょ？

同類なんかいなくて、ひとりぼっちで、何も守れなくて、何も手に入らない。

ふと気付けば暗転した眼前に、やがてキラは呆然としてその無機質な寝室の光景を眺める。
……何故こんなものを見せられなければならないのだろう。
立ちすくんで動けない、声が出ない、体が動かない。

闇に乱れたシーツをなぞる足の爪先と、規則正しいリズムを刻んで軋むベッドの鈍い音と、低くて荒い息づかいと、甘い喘ぎまじりのすすり泣きと。
縋り付き抱き込んだ幅広い背中、やがてその白い肩越しにただただ情動に燃える緑の目がちらと見えた。

なんで君が、そんな……

柔らかな手の平が背後から回って、両目を塞いだ。
そして聞きなじんだ甘い声が囁く。

アンタも同じことしてたじゃない、私に。

愛してるよって言いながら、いっぱいいっぱい中に出したじゃない。

フレイ。
踏みにじって蹴散らすように、あるいはやり場のない憤りをぶつけるがままに抱いた。
間違っているとは思いながら、いつかはそれが本当になるかもしれないと一縷の望みに縋って、傷を舐め合って寄り添った。

フレイを死なせない為に、Z．A．F．T．と――アスランと戦った。
けれどアスランと本気で戦うなんて、とてもできなかった。

アンタは幼稚で自分勝手で、私のことなんか全然考えてない！

なら過去と心中すればいいのよ！！

鮮やかに蘇る、紅い薔薇のような彼女の絶叫が心臓を鷲掴みにして、
また鼓動をひどく加速させる。
だって、君は僕を愛してなんかくれなかったじゃないか――違うの？

「おい、キラ！」

溺れて窒息しそうだ、苦しい、また闇に墜ちていきそうな恐怖感で
ひたすらにもがく。
救いを求めて虚空をさまよう指先を、力強く掴む手があった。
「キラ、おちつけ！！」
口元に袋が押し当てられて、「ゆっくり呼吸しろ、ゆっくり！」と
いう指示が聞こえた。
キラはがくがくと頷き、ただ素直に深呼吸を繰り返す。
やがて酸素がようやく肺に満ち満ちる感じとともに、鼓動がゆった
りとしたリズムを取り戻す。
「過呼吸なんか起こして、ホントにもう、お前ってヤツはどこまで
私に心配かけるんだよ！！」
そして抱きしめる腕が懐かしくすらある。
まだ暗い寝室をサイドテーブルの灯籠がほんのりと照らし出す。
淡い光の中で目を凝らせば、寝間着にローブを羽織ったカガリがす
ぐ傍らにいた。
優しく背中を撫でられて、自分のなかの荒れ狂う嵐がやがて鎮まる
ような気がした。
昔、どこかでこんな感じ、あったような。

ふとキラは我に返る。
全力でがむしゃらにしがみついたから、いくらカガリだってきっと痛かったろう。
「ごめん、ホントに」
「いいから謝るな！　お前の細い腕の力で折れるほど私は華奢じゃない！」
隣の部屋にまで聞こえるくらいうなされてたぞ、とカガリが低く言う。
「また悪夢か」

悪夢、としか言いようがなかった。
それともあれは当然の報いなのか――側にいる守るべき人をすら傷つけてきた僕への。

「――僕は、間違ってたんだ」
キラは呆然とする。

フレイとも、アスランとも。
でも、どこからやり直せばいいんだろう？

そのままのしばらくの時間の後で、のろのろとキラは顔を上げる。
「ねえ教えてよ、カガリ。あのあと何があったのか」
逃げていたけれど、もうダメだ。
僕は現実と向き合わないといけないんだ、……きっと。

暁の淡い光が差し込んでいた。

庭園の四阿のベンチに並んで腰をかけて、やがてカガリは横顔でとつとつと語った。
「プリンシパリティは無事アラスカに入ったらしい。連合に納入完了という報告がサハクに上がってたってエリカが言ってたから、多分間違いない」
「――そっか、あれ以上の追撃は、されなかったんだ」
よかった、とキラは力なく目を閉じる。

生身のアスランが、ずたずたに破壊されたストライクの前で、この自分に銃を向けた。
君が僕を救ってよ、という声にならない訴えは彼女には通らずに、そしてまた自分はひとり置き去りにされた。
あれ以来、自分の頭の中にはもうあの白い戦艦のことも仲間たちのことも、かけらも存在していなかった。
極小にまで狭まった視界のただなかで、感情の矛先はひたすらにアスランに向かった。
――もしかしたら、最初から自分は近くにいるひとたちのことなど、見ていなかったのかもしれない。

バッカみたい、コーディネイターが優秀で理性的ですって？

笑わせないでよ！

アンタは今の自分さえ見えてないじゃない！

幼稚で自分勝手で、私のことなんか全然考えてないじゃない！！

そんなに過去に戻りたいんなら過去と心中すればいいのよ！！！

あのフレイの抉るような言葉は、なにひとつ間違っていなかった。
再びの不整脈とともに呼吸が乱れそうな気配に、キラはまた深呼吸をひとつ、ふたつと重ねる。

「おい、キラ？」
カガリが心配そうに覗き込む。
「……うん、ごめん、大丈夫だから」

あの時君は泣いていたけれど……背中を向けた僕には、もう何も聞こえなかったし見えなかった。

「きっとフレイも、サイたちも、無事なんだね」
ヘリオポリス以来背負わされてきた重荷の消失を感じて、糸が切れたかにキラはただ背もたれに身を預ける。

あの戦艦での僕の存在意義はこれで消えた、僕の居場所はもうない……もともとなかったようなものだけれども。
冷たい棺桶の中の孤独の時間を思い返せば、今この空と大地との間にいられることがひどく不思議に感じられる。

じゃあこれからどうする？
僕はもう必要とされていない、これからどうしよう？

そしてぼんやりと茜色に染まりかける空をゆったりと流れる虹色の雲を眺めながら、一番訊きたかったことをようやくに喉の奥から押し出す。
「僕が……戦って、一緒に運ばれてきたひとは？　生きてるの？」
アスランの名を出すことは憚られた、カガリは彼女と自分との繋がりを知らない。
「気になるんだな。それは憎いからか？」
真意を問う琥珀の眼差しが、やがて差し込む暁の光の中で金色に輝いて見えた。
「……ううん」
「じゃあなんだ？」
「さすがに気になるよ、……ヘリオポリスからずっと戦ってきた相手だよ」
適当にこじつけた理由に、カガリはまた視線を庭の中央噴水に戻した。
「アイツは緊急措置の後でカーペンタリアのZ．A．F．T軍基地にすぐ移されたんだ」
こないだ、アイツの付き添いだったヤツから報せがあった、とカガリは呟く。
「手術は成功して、一命はとりとめたって」
ようやくにキラは安堵する。

そっか、君は今オーストラリアにいるんだ、アスラン――でも、ここからじゃ、遠すぎるよ。

沈黙の後で、キラは問う。

「……またZ．A．F．T．で戦うのかな」
殺し合いをした相手を心配するなんてやっぱり優しいなお前、とカガリは一種哀れみにも似た眼差しを向けた。
「お前はちょっと優しすぎる、キラ」

違う、と言いたかった。
僕らはいつだってふたりでひとりだった。
僕は彼女のことをよく知ってる、だって僕らは鏡映しで、ずっと自分の延長線上に互いを見ていた――
だからいざ向き合った時、感性の少しのズレも意に添わない行動も考え方も許せなかった。

彼女はもう私の前に立ちはだかるな、と叫んだ。
敵として立ちはだかるなら殺すだけだ、と僕を斥けた。
僕は、全てを置きざりにしてでもアスランに僕の味方になって欲しかった。
そうでないならそんな存在なんかいらない、と思った。

言葉を切り捨てたエゴのぶつかり合いの挙句に、僕たちは互いで互いの首を絞めた。

「……お前の戦ってた相手は、P．L．A．N．T．議長のパトリック・ザラの一人娘だった」
「パトリック・ザラ」
キラはその名を繰り返す。
聞いたことがある、P．L．A．N．T．タカ派の軍人政治家で、

実権を握っているとも言われる人物だ。

アスラン。

確かにザラだって言ってたね、ヘリオポリスで再会したあの時。

――ああ、君はもうジブリールじゃないんだ。

「アイツ、お前と同じくらい重傷だったからもうＭＳでは戦えないかもしれない」

「ＭＳでは？」

どういうこと？　とキラは首をそちらに向ける。

カガリはひとつ重い溜息をついて、前髪をくしゃりとかきあげた。

「前線で戦うだけが戦いじゃない。他に使いようはいくらでもあるだろ、きっと。なんたってアイツは国家元首の娘で、連合最強のＭＳを討ったパイロットって立場なんだから」

聞くなり喉元が詰まって涙腺が緩んで、キラは俯く。

「でもそれじゃ、助かったって結局戦いの道具になるよ……」

「わかってても見殺しにはできなかったんだ。ギルバートはお前ひとりで手一杯だって言ってたし、Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．からコーディネイトの専門家がくるからって話だったし、私たちも連合を刺激するわけにはいかなかったし」

僕は君に会いたい――すごく会いたいんだ。

でもその時、僕は君になんて言えばいいんだろう、なんて話せるんだろう？

例えばどこかでまた出会ったとしても、昔みたいに笑えるんだろうか、僕ら。

足元にたくさんの屍を踏んでるんだ、とっくに血の沼の中なんだ。

＊＊＊＊＊

きらきらとして透き通る青い海、その波打ち際は見事なエメラルドグリーン。
自分が大好きだった色が、今となってはちくりちくりと心を刺す。

キラァァァァッ！！

その絶叫に、瞼に蘇る鮮烈な残像に思わずキラは耳を塞いで深呼吸する。
憎い憎い憎い死ね死ね死ね――けれど、本当に僕は彼女を殺したかったのか？
彼女は僕を殺したかったのか？

きーら。

いつだってあの柔らかい声が好きだった、側にいて自分を呼んでくれることが嬉しかった。
それは今でもこんなにはっきりと覚えているのに。
キラは目を閉じる、また目頭が熱い。

……キラ、あなたを探しにいこう。

アスラン！？
キラは弾かれるように顔を上げて周りを見回す。
ひどく穏やかな声だ、あの昔の頃そのままに。

あなたを探して、それから――

「おい、綺羅！？」
懐かしい声と日本語のイントネーションで名を呼ばれて、思わずキラは現実に立ち戻る。
「え……？」
アスハ邸の開放されたエントランスに出入りしていたオーブの軍人たちの中で、同世代ほどのひとりの男が振り返って足を止めていた。
少し浅黒い肌に、東洋的な顔立ちの黒髪黒目の少年――間違いない、コペルニクスの時の友だちだ。
ガルド・デル・ホクハ。

「おいやっぱり、綺羅じゃないか」
ホクハの日本語発音は全くのネイティブだ、それがひどく懐かしく感じられてひどく心に沁みた。
歩み寄ってきて、彼は苦笑いした。
「ああ、相変わらず泣き虫なんだなぁ綺羅。俺に会って懐かしいって？」

あわててキラは頬を拭う、知らずに涙が零れていたらしい。
「いや懐かしいけど、泣き虫なんかじゃないってば！」
いやいや相変わらずだなぁホント、とコペルニクスの頃のままの口調で、ホクハは白い歯を見せて笑った。
「え、なんだよ、その包帯ぐるぐるの大怪我。名誉の戦傷？　っていうかお前ってオーブ国軍にいたっけ？」
「あ、うん……こないだの戦いで、ちょっと」
キラは言葉を濁す。
「ああ、そりゃあ大変だったな。俺の部隊のメンバーも何人かやられてさ」
相変わらずホクハはまっすぐで、僕の嘘やごまかしなんか全然考えもしない、とキラは切なさすら覚える。
「そっか」
「綺羅はまだコペルニクスにいるんだと思ってた。いつの間にオーブに来てたんだ？」
「僕んち、ヘリオポリスに移住してたからさ」
「ああ、あそこか」
ホクハは苦々しげに顔をしかめた。
「めちゃくちゃなことされたな。ブラッディ・バレンタインで、ユニウスやられた連中が同じことするんだもんな。目には目を、歯には歯をってやつにしたってひどい話だよな」
喉元がまた詰まって息苦しくなる――キラは口ごもった。
そのヘリオポリスを墜としたZ．A．F．T．の中にアスランがいたなんて、とても言えない。
ユニウスセブンでレノアおばさんを殺されたから、だから同じことをしたんだ、なんて。
「コーディネイターも言うほど理性的じゃないね」
彼の何気ない言葉のひとつひとつが心に突き刺さる。

まさに獣のような果たし合いを経て、殺人鬼（バーサーカー）とすら呼ばれた僕自身のことだ、と胸の傷が激しくじくじくと痛む。
気付けば頬を涙が伝っていて、それを見るなりハッとしたようにホクハは「お前のことじゃないからさ、ゴメンな」と付け加えて背をさすった。
「うん、……うん」
なんだか僕はいつでもどこでも慰められてばっかりだ、と思えば、自然と泣き笑いになった。

やがてふたりで海に向かって並んでいた。
「で、ジブは？　今も一緒なんだろ？」
ああ、ホクハはアスランが好きだったんだっけ、とキラはほのかに笑む。
あの頃、アスランはジブリールとかジブとか呼ばれてた——あれから、まだたった3年なのに。
「綺羅？」
「あ、ううん。アスランは……今きっとオーストラリアだよ」
それ以上は言えなかった、カーペンタリアのZ．A．F．T．軍基地なんて。
「はぁ、物好きなヤツだとは思ってたけど、そりゃあまた辺鄙なとこに行ったもんだな」
ホクハの言葉に一瞬きょとんとして、思わずキラは苦笑いする。
「うん、そうだね」

当然だ。
誰もアスランが軍に入ったなんて想像もしないだろう、僕だってそうだったんだから。

そして彼女と同じ色の蒼の水平線を見ていた。

僕は、君に会いたい。
でもその時、なんて話せばいいのかわからないんだ。

寄せては返す波に向かってホクハが石を投げて、水面にいくつも弾きかえりながらやがて石は沈んだ。
「相変わらずナイスピッチング」
「さんきゅ。なあ綺羅」
「なに、北羽」
「お前はZ．A．F．T．に行くなよ」
「え……なんで？」
突然のことにキラはきょとんとする。
「俺んとこの日本の親戚なんだけど。P．L．A．N．T．に行っちゃった飛鳥真ってのがいるんだ、やっぱりコーディネイターで」
「へえ」

飛鳥……聞き覚えがある名だ。
父さんの取引先のフジヤマ社に、飛鳥さんって人がいた。
会社主催の家族同伴バーベキュー大会が毎年コペルニクスであった、もしかしたらそこで会ってたかもしれない。

「ブルーコスモスのテロで両親殺されてさ。ひとりでP．L．A．N．T．に渡ってZ．A．F．T．に入ったって聞いて、ちょっと俺ショックだったからさあ。まだ14歳なんだ、そいつ」
ホクハが悲しそうに首を振る。
「そっか。僕らより2歳も年下なんだね」

何故だろう、伝聞でしかないのに、麻痺したと思っていた心がこん

なにもちくちくと痛む。

「いったい何したいんだろうな、みんな」

ホクハはなかばひとりごちながら海を眺めた。

「俺には全然わかんないなあ。ってもきっと俺らみたいな世界のはしっこの下のほうからじゃ、見えるものなんてほとんどないんだろうけどさ」

キラもまた同じ方向を見据える。

「全体が見えてる人なんて、きっといないんじゃないかな。例えば世界の上のほうでも。僕はそう思うよ」

そしてこの流れていく先に何があるのか、なんて、とても僕にはわからない。

キラはぼんやりと思う。

でもおかしいんだ、きっと。

昔の人たちはこんな世界を夢見てたんだろうか——例えば、新しい道を示そうとした、ジョージ・グレンとか。

コペルニクスで見た、エヴィデンス０１のレプリカ……

……アスラン？

あわててキラは周りを見回す。

なだらかな海岸線沿いには誰もいない、海に向かっているホクハの背中だけが視界にある。

ジョージ・グレン展を観に行ったあの日が、きっと始まりだった。

幻聴だろう、と諦念の中でキラは目を閉じる。
君が覚えていてくれるなら、という僕の願望のみせる真昼の夢。

……僕も覚えてるよ、アスラン。
あの日あの時帰り道で、コペルニクス・コロッセオに堕ちてきた白い人型機動兵器が、僕らの未来の方向を決めたんだ――
きっとあれが始まりだった。

そしてあの頃の僕は、ひとり取り残されるなんて、想像もしていなかったよ。

＊＊＊＊＊

あてがわれている寝室にキラが戻った時、すでに担当医師のギルバートがベッドサイドで待ち構えていた。
「調子はどうだい、キラくん?」
彼はいつもの温和な表情で軽い笑みを浮かべる。
「ええ、……おかげさまで」
「中央病院での検査結果だが、経過がとてもいいな。それに驚くほど回復が早い、さすがＥ－０１因子といったところかな」
自分は手術に手術を重ねるほどに深刻な状況だったと聞いた。

いったいどれだけのものだったのかは知らされていないが、チームを率いたこの担当医は凄腕だったらしい。
コペルニクスでくわした時、ただの変態だとばかり思っていたのに、とキラは少しばかり自分を恥じる。

ギルバートは傍らの椅子に座ってカルテをめくった。
「どうだい、何か変わったことは？」
問われてようやくにキラは重い口を切った。
「あの。すごく変かもしれませんけど……時々、声が聞こえるんです」

願望が為せるただの白昼夢か、爆発の衝撃の影響で何か脳のシナプス接続あたりが混乱してるのか、と思っていたが、さすがにもう看過できない。
あんなにもはっきりとアスランの言葉が聞こえた。
あれが幻聴ならば、これはもはや治療が必要なレベルではあるだろう。
ただ、彼女の声が聞こえるならそれはそれで構わない、とも思いは千々に乱れる。

だがギルバートはカルテに目を落としたまま、眉根ひとつも動かさず応じた。
「ふむ。もしかして相手は彼女かな、アスラン・ザラ？」
その名に、キラは思わず固まる。

なんでこの人はそれを知ってるんだろう？　――それにアスランのことも知ってる？

虚空にも似た黒い眼差しが自分を見据える。
「……クジラっていうのは超音波で意思疎通を計るんだ。あるいはＥ－０１もそうなのかもしれないね」
自分に施された特殊なコーディネイトに使われたという、エヴィデンス０１の遺伝子情報。
言質をとってキラはハッと息を呑む。
「アスランも、なんですか」
ギルバートは軽く頷いた。
「そうだね、ヒビキ博士の記録を見る限り同型のものが使われているよ」
「じゃあ、あれは全部幻聴じゃないんですか？」
「推論だけれどもね。距離を問わない、例えるなら量子通信的なものの生体版だろうかな？　そのあたりぜひとも研究してみたいが、片割れの彼女がＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．にいるのではそれも難しいな」
またひとつ、記憶のかけらが蘇る。

――あなたは私のかたわれ、もうひとりの私。

僕たちは、半分この魂……

やっぱり僕らは互いに特別で、この世にひとりぼっちじゃないことがただただ嬉しい――なのになんで君は向こう側にいるんだろう？
やりきれなさでただひたすらに切ない。

カルテを閉じて、やがてギルバートは「君が欲しいな」と真顔で言った。
不意打ちを食らって、物思いにふけっていたキラは握っていたコップを取り落としそうになる。
「あの、ギルバート先生……コペルニクスでも言いましたけど、僕……男です」
「ああ、男性だとも。当然だろう？　君のからだのことは私が誰よりもよく知っているんだから」
柔和で穏やかな表情で、至極当然とばかりに彼は破顔した。

ますます意味深な発言に、もしかして僕って意識失っている間に何かされたんじゃ？　……とキラは途方に暮れる。

「あの、僕、ノーマルですから」
男相手にタチだかネコだかする趣味は一切ない、僕はぽよんぽよんの女体が好きなんだ！
「あぁもちろん私もだよ。でもこの際、そういうことは関係ないと思わないかい？」
「いえ、非常に関係あるんじゃないかなって僕は思います」

これって医師による患者へのモラハラというかパワハラなんじゃないだろうか。
いくら凄腕とはいえちょっと困る、絶対カガリに相談しよう、とキラは決意する。

「で、キラくん。君に相談なんだが」
すかさずキラは先手を打った。
「遺伝子や精子の提供はお断りします」
耳の穴をまたごしごし洗わないといけないのか、あの時中耳炎になるかと思ったのに！

「ん？　いや、まあそれも希望したいところではあるが。もう少し回復したら、私と一緒に来ないかね？」
さらなる誘いに、一気に体温が１０℃は下がるかと思った。
低体温症になりそうだ、……この目眩は脳貧血？
一体どこに連れていかれるんだろう、僕は？

疑問符だらけの沈黙の後で、おそるおそるキラは訊く。
「あの。多分行かないと思いますけど参考までに……どこへですか？」
「ふむ。未知なる世界への旅立ちとでも言っておこうかね、君となら きっといけると思うんだが」
「イケるって」
先生は至極真面目な顔でロマンチストっぽいことを言っているようだが、結局それの意味するところって同性愛の深淵なる世界なんじゃないだろうか、とキラは穿つ。
「僕には木星に旅立つって夢がありますので、そっちの未知なる世界は遠慮しておきます」
おや、とギルバートは心外な顔を見せた。
「そう言わず。焦らずゆっくり考えたまえ、私は君の心が決まるまでいつまでも待っているよ」

意味深な微笑みとともに医師が去った後で、すかさず冷房をリモコンで切って、布団を頭まで被ったキラは体温温存を図る。
だが手足の冷えは一向に改善しない。
どどどうしよう、僕なにか待たれてる？

「なんでこんな時にいないのさ、カガリってばッ！！」

たまらず寝室を飛び出てコロニアル様式の長い廊下を駆け抜け、アスハ本邸でキラはようやくにマァナを捕まえた。
「あらあら、もうすっかりお元気だこと！」
「いえ、これは火事場の馬鹿力ってやつです！　てかカガリはどこですか！？」
「お嬢さまならリビングですよ、キラさま」

そのままキラはリビングに足を向けて、ドアを開けたところで話し声が聞こえた。
お客？　とおそるおそるのぞけば、ダイニングテーブル前に座したカガリはインカムをつけて携帯端末を開いていた。
誰かと通信してるんだ、とキラは静かにソファーに座った。
「……パイロットは、もうこちらで引き取ろうと思ってるんだ。連合的にはＭＩＡ扱いだし、精神的にズタボロだし、今さら戦わせたくないんだ」
『あぁ、二度と戦場に出さないと誓え。ついでに鎖をつけてしっかり監視しておけよ、でなけりゃすぐ刺客を向けるぞ』
「おい……お前ってホント物騒なヤツだな。アイツ助けたのお前だろ？」
カガリはひとつ嘆息をもらして頬杖をつく。
僕を助けたひと？　とキラは最大限の関心をもって耳をそばだてる。

『確かにそこに連れていきはしたが、後のことなんか俺の関知するところじゃない。そもそもソイツが同胞をいったい何人殺りやがったと思ってる？　今放置しておいてやってるのだって最大限の譲歩の結果だ』
同胞を……

キラは唇の端を噛み締める。
まごうかたなき事実に、ちくちく、と心が痛んだ。

「まあ、そうだよな。憎しみを繰り返すまいとするだけ、お前だって立派なもんだ」
『えらく上から言いやがるな、貴様は！』

上からなのはこの通信相手じゃないか？　とキラはいささか肝を冷やす。
仮にもオーブのお姫さま相手に、貴様呼ばわりなんてとんでもなく尊大極まりない相手だ。

だがカガリは怒りもせずに流した。
「お前ほどじゃない。で、アイツは？」
『日常生活に支障ない程度に回復してはいる。来週にもＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．本国に帰還する予定だ』
「そうか。それは残念だが……でもまあお互い生きてさえいれば、また会って話す機会もあるだろうな」
とカガリはぼやいた。
「で、なあ、イザーク。私ずっと考えてたんだ。で、今朝思いついたんだが」
『何だ』
「やっぱりここは平和にエネルギー発散ってことで、昔懐かしのオリンピア競技とかどうだろうな、世界というか宇宙というか」
『はん。どうあっても俺たちと勝負にならんだろうが』
「言うけどなあ、お前たちの偉大なるジョージ・グレンって銀メダリストだぞ？　金メダリストはナチュラルだ。それにここにいるコーディネイターなんて誰一人腕相撲では私に勝てないんだから！」
『誇るな、筋力バカめ』
「ついでに思うんだが、ＭＳ競技があってもいいと思うんだ……デ

ュエルというかグラディエイトというかさ、トーナメント勝ち抜き戦とか。えっと、キラが言うＯＳ名とって……ガンダムファイト、みたいな」

『だからお前はバカか、と言っている』

カガリが突如キレた。

「ッバカバカ言うな!!　お前なぁ、その態度おかしい!!　そんなんだからコーディネイターが傲慢だとか言われるんだろ!?　偏見じゃなくて自業自得だ!!　ちょっと反省しろ!!」

『なんで俺のせいなんだ!!　貴様こそ、そのさして考えもせずぽんぽん言うクセを改めろ!!　だからナチュラルは度しがたい脳なしだと思わざるを得んだろうが!!』

「ったく!!　お前とはわかりあえないってことがよくわかった!!」

『ああ同感だ!!　今俺は忙しいんだ、貴重な時間を下らん話に付き合わせるなッ!!』

ブチッと通信が切れた、……とことんカガリ相手にすごいひとだ。

「ったくムカつくヤツだな、ちっくしょー!!」

今度会ったらとりあえず殴ってやる、とむすっとした表情でカガリは通信を切って顔を上げた。

「わかりあえないことがわかったって両方認識したってことは、きっとわかりあえてるんだよ、きっと」

背後からのキラの言葉に「なんだよ、それ」とカガリは振り返って口を尖らせた。

「でも楽しそうだったよ、君も、その通信相手も」

「まあ悪いヤツじゃない、めちゃくちゃ切れやすくて扱いづらくて口は悪いけどな」

きっと褒めてるんだろう。

「コーディネイターにもいろいろいるってのはよくわかった。お前

みたいなヤツも、アイツみたいなヤツも」
眩しいものを見る心持ちでキラは彼女を眺める。

カガリは偏見を持たない、過ちがあって気付いたらすぐ修正する。
子ども子どもしている、直情径行すぎてアスハの次の長に相応しくないって言っている大人たちもいるけれど、いつだってすがすがしくて見ていて気持ちいい。

「思うんだけどさ。世界のみんながカガリみたいなら、きっと戦いなんて起こらないのにね」
しみじみとした心からのつぶやきに、カガリはギロリと睨んだ。
「なんだよそれ。お前まで私をバカにするのか？」
下手したら殴られかねない勢いに、慌ててキラは否定する。

それはちょっと言い過ぎだった、みんながカガリならとんでもなく短気なひとばかりになってしまって大変だ。

「違うよ、誉めたんだってば。で、さっきの相手ってZ．A．F．T．なんだね」
「ああ、お前を助けたヤツだ、……奇妙な縁だよな、なんだかんだであれから連絡とってるんだ」
「そっか。――僕、感謝しなくちゃならないね、そのひとに」
とはいえ正直複雑だ、とキラはほろ苦さを噛み締める。

命の恩人はZ．A．F．T．の兵士でアスランの同僚――そしてあの場にいたのなら、間違いなくヘリオポリスから戦ってきたクルーゼ隊のメンバーだ。
僕は、彼らの仲間をたくさん殺した。
そして僕の仲間もまた、彼らにたくさん殺された。
最前まで生きて活動していた、見知った人たちを包んだ、いくつも

の死体袋の羅列を思い返せばただ心が軋む。
きっと許せない、向こうだってそうだろう。
にも関わらず生かそうとしてくれた気持ちが、心の奥底をざらざらと撫でて、なんともひどく居心地が悪い。

「憎しみの繰り返しってどこで断ち切れるんだろうな、ってずっと考えてたんだけど……アイツ見てちょっと思った。愛だな、愛。きっと」

「え？　愛？」

よもやそんな言葉がカガリから出てくるなんて、とばかりにキラはきょとんとする。

「いや、臭すぎるぞ！！　って思ってたけど、ラブ&ピースってのは案外真理かもしれないな」

照れくさそうにカガリが言う。

「なんで？」

「いや、そりゃあ目の前で死にかけてる恋人を助けることのほうがよっぽど大事だよな、敵を殺すことなんかよりも」

「……え？……」

不意に足元がすくわれた。

アスランに恋人？

まさか！

「オンナの勘でわかりますわとかってエリカも笑ってたから、多分そうなんだろ」

ずっとあんなに一緒だったのに？

その彼女は今僕じゃない他の誰かと一緒？

超音波で意思疎通を図るクジラ、エヴィデンス０１、量子通信生体版の僕たち……

だとしたら、心当たりは、ないこともない。

私はあなたを愛せない。

まさかその男のせい？

アスランがセックスしてたあの悪夢ってまさかリアル？

どす黒い靄を纏いつかせて思考がぐるぐると巡る。

そりゃあ僕だって何人かの子とは付き合ったし、いろいろやることはやった。

自分勝手で幼稚で自己中心的と罵られたって、でもそれとこれとは別だ。

どこの誰だかしらないけど、そんな相手のせいで大事な約束を白紙撤回って……

Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．で戦い続けて僕の敵になるって……それはちょっと許しがたい――

ふつふつとやるせない怒りがわき上がる。
だがこれは今までのやるせなさとは別種だ、
これは繁殖欲求に根ざした闘争本能に違いない、とキラは認識する。

アスランがＰ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．に渡ってせいぜい３年くらい。
圧倒的に僕と過ごした時間のほうが長いし、まして世界にふたりぼっちのＥ－０１因子保有者だ。

うん、この際、戦争とか敵味方とか血塗れとか鏡あわせとか、そういうものは全部置いておいて。
僕は自分に素直になっていいと思う、いやむしろ素直になろう、今までが抑圧されすぎたんだ。

「道連れに死のうとするのって、これはもう愛されてるとしか言いようがないじゃない？」
思わず口の端から漏れた独白に、カガリが首を捻った。
「え？」
「そっか、相変わらずどうしようもなく天然ボケなんだなぁ、ホント困ったもんだよね……肝心なところでいつもいつもいつもいつも……」
「おいどうした、キラ？」
「ねえカガリ――」
笑んでキラは顔を上げる、迷いのないこの少女に是が非でも訊いてみたい。
「いらない不安要素って徹底的に排除していいと思うんだよね、それが例えば命の恩人でも。そんな僕って間違ってるかな？」

僕が討つべきだったのはそっちだったんだ、きっとそうだ。

「いや、……お前がさっきから何言ってるのかちょっとよくわからないんだが。きっとまだ本調子じゃないんだろうな」

ちゃんと薬飲んでるか？　熱あるんじゃないか？　と心配そうなカガリはキラの額に手を押し当てた。

触れる掌の熱が気持ちいい、自分の中のとんでもなく凶暴な獣性がまた鎮まるような気がした。

＊＊＊＊＊

お前が本体だと？　笑わせる。

燃えるような激しい眼差しの長い黒髪の少年が嘲笑する。

そんなにも心が脆弱なお前が？

君は誰？

キラは問いかける、だが無情な一言だけが突き返された。

俺を知らないなんて言わせない。

鏡で見る自分の顔にうりふたつ……その目の色、声色すら。
だが心当たりがない。

お前が成功体だと？　そんなの許さない――俺が許さない。

白い空間のただなかで、鎖で拘束され電極で繋がれ実験用ラットと同様に扱われ、番号で呼ばれ続けた。
失敗という烙印を押された被験体たちは実験の中でどんどん脱落していき、やがてひとり取り残された。
そして薬を飲まされて、手術に手術を重ねた。

――こいつらが許さない。

廃墟のただ中で一面のプールに沈む機械の群れ、モニターされている拍動、膨張した肉の塊。

ＢＬ４＋ＨＵＭＡＮＧＥＮＥ
ＭＵＮＩＰＵＬＡＴＩＯＮ　ＬＡＢ

見ろ、……お前の為だけに築かれたこの屍の山を！

これは、もしかして……
この形状は、このモニターに流れているデータは……
キラはただ凝視する。

……これは、すべてヒト？

Ｐｒｏｆ．Ｕｌｅｎ Ｈｉｂｉｋｉ Ｍ．Ｄ．，Ｐｈ．Ｄ．

（これが私への罰なの？　ああでも、返して、あの子を返して――
私の大事なもうひとりの子を！！）

女性の絶叫に息が止まるかと思った。
キラは目を見開く。
天井を眺める、いつもの寝室の天井だ。
寝汗で肌がぬめっていて、ひどく気持ち悪い。そしてあまりにも生々しすぎる映像が瞼の裏に蘇る、あれはいったいなんだ？
キラはがばりと起き上がって、手の甲で汗を拭う。

もしかして、僕はまだ自分について知らないことがあるんじゃない

か？
Ｅ－０１因子よりももっとなにか、深刻な――。
でも誰に訊いたらいいんだ？　何をどう訊いたらいいんだ？
「……母さん……」
母さんは、何か知ってるんだろうか？

＊＊＊＊＊

またドアが開いて、キラは目を覚ます。
マァナさん？　と思うには、いささか足音が軽すぎた。
「キラ！！」
「……母さん？」
４ヶ月ぶりにまみえる母の姿に、キラは目を見張ってベッドから跳ね起きる。
「あなた、無事で！」
涙に暮れて、「カガリさんに連絡をもらったの」と駆け寄り、強く抱きしめて母カリダが泣く。

ずっと会いたかった。
しかし心の盾が崩れ落ちそうな恐怖を前に、会うことはできず声を聞くことすら辛かった。

けれどもたったひとつだけ伝えたいことがあった。
キラは目を閉じる。
「母さん……レノアおばさん、ユニウスセブンで……」
亡くなったって、と告げたその時、わずかに母の肩が震えた。

「知ってたわ」
耳にするなり、心臓が止まるかと思った。
「知ってたの？　なんで？」
「慰霊式典のＴＶ中継で、遺族代表であの子がいたもの。アスランを見間違えるわけないでしょ、何年一緒だったと思ってるのよ」

カレッジで、人の噂をなんとなく聞き流していただけの僕は、そんなこと知らなかった。

「ごめん、母さん。もう僕ひとりじゃ抱えきれないよ……」
「キラ？」
喉がからからで、舌がもつれる。まるで自分の声がしゃがれた老人のそれのように思えた。
「Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．に入っちゃったんだ、アスラン」
沈黙のあとで、低く母が応じた。
「嘘でしょ？　あの子に人殺しなんかできるわけないじゃない」
「……でも、ホントなんだ」
「だって一緒にご飯作ってたのよ？　買い物だって行ったし、ほら、編み物だって私が教えたのよ？」
「知ってる、全部知ってるよ。だってそれもずっと見てたんだから、僕」
「あの子のセーラー服の採寸、レノアと私と一緒に……」
きつく抱きしめれば、母の言葉が途切れた。
「僕だって信じられなかったよ、でも僕がそうだったようにアスランも……ＭＳに乗ってたんだ」
もっと遠く、もっと高みへと目指した先人たち、そしてその志を引き継いでいこうとした僕たち。
その宇宙開発の為の作業用ロボットを、戦闘兵器に造り替えて、僕

らは互いを撃った。

「そしてアスランと僕は戦って……」

言葉はもう言葉にならず、知らず涙が頬を伝った。

誰か教えてよ。

僕たちは、いつかまた笑いあうことができるんだろうか――あの子どもの頃の夢は、叶わないんだろうか？

母の肩越しに、カガリが顔面蒼白で、そこに立ち尽くしている姿が見えた。

「お前……なんでだ？」

彼女にしては平坦すぎる声だ。

「……カガリ」

キラは呆然とする。

話を聞かれた。

つかつかと歩み寄ったカガリに襟元を掴まれて、キラは激しく揺さぶられた。

「――それでなんで戦ったッ！？　なんでお前たち、話し合えなかったんだッ！！？」

それを訊きたいのは僕だ。

なんで僕たちは、戦わなきゃならなかったんだろう？

「……だって、戦争だから……」

戦争だから、自分の側にあるものたちを守るためには相手を殺さね

ばならない。
敵だから、かつてはともに手を繋いで同じように育って、例えば本気で好きだった女の子であろうとも撃たねばならない。
戦争だから、敵だから……だから自分の行為は当然だった、そのはずだった。
だがカガリは真っ向から睨んで吼えた。
「ッだからって、それはダメだッ！！　どんな状況であったとしてもッ！！　人間にはやっちゃいけないことがあるんだッ！！！」

そんなの、誰も教えてなんてくれなかったよ。

襟元を掴んで引き寄せて、至近距離でカガリが低く言う。
「お前、私に言ったよな？　気持ちだけで何ができるって、綺麗な言葉だけで何ができるんだって」

確かに自分はそう言った。

「でも……でも！！　掲げる想いさえ見失ってしまったら、私たちはなにもできないんだッ！！」

滲んでぼやける視界の中で、カガリも泣いていた。

「キラ！」
「お嬢さま、ご無体はおやめ下さいよ！！」

母とマァナとが追い縋る中を、力任せにキラはベッドから引っ張り出される。
「アスランと話しをさせるだけだッ！！　来い、キラ！！」
「カガリ……」
「ッ来い！！　いいから来い！！　カーペンタリアに繋ぐからッ！！」

カガリに引きずられてキラは嗚咽しながら廊下を進む。
カガリの側近であろうオーブ士官たちの視線を一身に受けながらも、恥ずかしさを感じる余裕すらなかった。
中にホクハの姿もあったが、視界に滲んでよく見えなかった。

やがて邸内の通信室に投げ込まれるように入って、コンソール前に無理矢理座らされて、傍らから身を乗り出したカガリがパネルを叩いた後で焦れたように怒鳴った。
「いつものアイツを……イザーク・ジュールを呼び出せッ！！」
モニター向こうでオペレーターが極めて事務的に応じた。
『おつなぎできません。先刻よりZ．A．F．T．カーペンタリア基地は全ての外部通信が遮断されています』
「……なんだと？」
カガリの側でキラも目を見開く。
「おい、どういうことだ？　オノゴロの司令部のキサカを呼べ！」
『お待ち下さいませ』
アフリカの空気を纏う屈強な佐官が、じきにモニター越しにも伝わってくる。
『ちょうど今そちらに迎えをやったところだ、カガリ』と口を切った。
司令部の騒然とした空気と大勢の人間の声とがモニター越しにも伝わってくる。
『今情報収集中だ、だが連合とZ．A．F．T．とで戦闘が行われている可能性が濃いと情報局が伝えてきている』

「オーストラリアでか？」
傍らのキラも耳を疑う。
カーペンタリア基地は地球上で最大のＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．拠点だ。
『Ｚ．Ａ．Ｆ．Ｔ．が予定しているという最後の作戦の発動前に、総力で足場を叩くということかもしれないが』
「……連邦がそんな真似に出るのか？　アズーリは様子見を決め込んでるってコトーから聞いたぞ？」
眉間に皺を寄せたままにキサカは首を振った。
『指導力を見せつけたいアーヴァイン大統領の暴走かもしれんが、そのあたりは目下不明だ。ともかく急いでこちらに戻りなさい、カガリ』
やりとりをただ聴いていたキラは生唾を呑み込む。
国際情勢は全然わからなかったが、またなにかが大きく動き始めていることだけは、わかった。
「スマン、キラ！　とにかくアスランとお前との件はこの後だ！！」
慌ただしく身を翻したカガリに、その腕を掴んだキラはとっさに声を放つ。
「僕も連れていってよ、カガリッ！！」

カーペンタリアにはアスランがいる……そこで戦闘なんて聞いたら、ここで大人しく待ってなんかいられない！！

Monologue：Kira－2／Dialogue：Kira＆

GARNET CROW

”Hello Sadness”

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0688r/

SEED: Athrun

2011年11月15日11時39分発行